

岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集

主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書

(岩手県 江刺市 力石Ⅱ遺跡・兔Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴ノ木遺跡)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

# 序

東北縦貫自動車道の開通に併せ、国道・県道の改修工事が、それぞれの機関において進められ、主要地方道一関——北上線も水沢市・江刺市を中心に昭和51年度からの改修工事に着手し、このため江刺市愛宕地区の埋蔵文化財緊急発掘調査を岩手県土木部から当センターが委託を受け、昭和53年度において実施いたしました。当地区は、さきに東北新幹線建設に伴って岩手県教育委員会事務局文化課が遺跡調査を行い、数多くの遺構・遺物を発見し、特に木器の出土で注目された所であります。

当センターが調査した遺跡は4遺跡で、いずれも微高地に立地し、平安時代を中心とした遺跡であります。遺構は合せて、竪穴住居址54棟、井戸址9基等が検出され、多くの鉄器が出土していることから、平安時代集落としては特質的性格を有するものと考えられ、西方約4 kmに所在する胆沢城との関連が考えられます。

今回の調査により、胆沢城を中心とする胆江地方の集落の貴重な資料を得ることができ、今後の歴史解明に寄与し得るものと考えております。

本報告書が、広く関係者において活用され、文化財保護の一助となる事を願う次第であります。

昭和54年3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 畑山新信

## 緒 言

1. 本報告書は、岩手県江刺市に所在する力石Ⅱ遺跡・兔遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴の木遺跡の4遺跡についての発掘調査の内容と結果を収録したものである。
2. 今回の調査は主要地方道一関～北上線の改修事業に伴う事前緊急調査である。調査についての協議は岩手県土木部と岩手県教育委員会文化課との間においておこなわれ、その合意にもとづいて県土木部は財団法人岩手県埋蔵文化財センターに調査を委託した。
3. 発掘調査は昭和53年4月3日から11月15日まで、室内整理作業は同年11月16日から昭和54年3月25日までおこなわれた。
4. 発掘調査および整理作業は高橋信雄・山口了紀・三浦謙一が担当した。
5. 調査および整理にあたり、次の方々の御教示をいただいた。  
岩手大学名誉教授板橋 源・岩手大学教授草間俊一・北海道大学助教授林 謙作・岩手県立博物館小田野哲憲・岩手県文化課嶋 千秋・相原康二・佐々木 勝・水沢市教育委員会伊藤博幸・新田 賢・江刺市文化財専門委員佐嶋興四右衛門・水沢市在住伊藤鉄夫・伊藤陽夫
6. 発掘調査においては次の機関の御協力をいただいた。  
岩手県水沢土木事務所江刺出張所・江刺市教育委員会
7. 発掘作業に御協力をいただいたのは菊地四治右工門氏をはじめとする地元28名の方々、佐藤松雄氏をはじめとする水沢市の28名の方々である。
8. 本報告書の執筆にあたり、次の方々に鑑定を依頼した。  
石質鑑定……佐藤二郎（岩手県立杜陵高校）・靱痕鑑定……佐藤敏也（稲作史研究会々員）  
・木材々質鑑定……吉田栄一（岩手大学助教授）
9. 本報告書の執筆分担は次の通りである。  
Ⅰ. 序論 1……瀬川司男 2……高橋 3……三浦  
Ⅱ. 力石Ⅱ遺跡 1（1）……高橋（出土遺物）・三浦（A～G区遺構）・山口（H～K区遺構）（2）・（3）……三浦 2……高橋  
Ⅲ. 兔遺跡 1（1）……高橋（出土遺物）・山口（遺構）（2）・（3）・（4）……山口 2……高橋  
Ⅳ. 落合Ⅲ遺跡 1（1）……高橋（出土遺物）・三浦（A～J区遺構）・山口（K～M区遺構）（2）……三浦（3）・（4）……山口 2……高橋  
Ⅴ. 朴の木遺跡 1（1）……高橋（出土遺物）・山口（遺構）（2）……山口 2……

…高橋

Ⅵ. 遺構・遺物に関する予察

1・2……三浦 3(1)……山口 (2)……高橋 4・5……高橋  
6……山口

10. 挿図および写真図版の作成は3人の調査員が分担し、川村三千子・藤島ヒロ子・南館恭子・吉田 京(以上挿図)・藤原 章・酒井宗孝(以上写真図版)などの方々の協力を得た。
11. 本報告書は調査された4遺跡を一冊にまとめて収録したものであるが、共通する事項は一括してⅠ「序論」として掲載した。
12. 本報告書の挿図凡例は「室内整理の方法」の項(7ページ)に掲載した。
13. 発掘調査における座標の基点の測量はアジア航測株式会社がおこなった。

# 本文目次

序

緒言

## I. 序論

1. 調査に至る経過	5
2. 調査方法と室内整理の方法	6
(1) 調査方法	6
(2) 室内整理の方法	7
3. 遺跡の立地と環境	8
(1) 地形と地質	8
(2) 周辺の遺跡	11

## II. 力石II遺跡

1. 検出された遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居址	17
A区	17
B区	18
C区	27
D区	39
E区	44
F区	49
G区	54
H区	60
I区	66
J区	72
K区	75
(2) ピット・墓塚	78
(3) 溝跡	81
2. まとめ	87

## III. 兔II遺跡

1. 検出された遺構と遺物	125
(1) 竪穴住居址	125

C区	125	J区	127	K区	129	L区	131
(2) 弥生式土器出土地							132
(3) ピット							137
(4) 溝跡							138
2. まとめ							139

#### IV. 落合Ⅲ遺跡

1. 検出された遺構と遺物							155
(1) 竪穴住居址							155
A区	155	E区	156	J区	158	K区	165
L区	167	M区	171				
(2) 井戸址							175
(3) ピット							183
(4) 溝跡							185
2. まとめ							187

#### V. 朴の木遺跡

1. 検出された遺構と遺物							207
(1) 竪穴住居址							207
A区	207	B区	208	C区			210
(2) 溝跡							215
2. まとめ							216

#### VI. 遺構と遺物に関する予察

1. 竪穴住居址							223
2. 井戸址							230
3. 土器							232
(1) 弥生式土器							232
(2) 奈良～平安期の土器							235

4. 鉄製品 .....	243
5. 石帯 .....	244
6. その他 .....	245

# 插图目次

I 序 論	
第1図 岩手県全体図……………	3
第2図 遺跡位置図……………	4
第3図 地形分類図(1)……………	9
第4図 地形分類図(2)……………	10
第5図 土層柱状図……………	11
II 力石II遺跡	
第1図 A-1住居址実測図……………	17
第2図 B-1住居址実測図……………	19
第3図 B-2住居址実測図……………	21
第4図 B-3住居址実測図……………	24
第5図 B-4住居址実測図……………	26
第6図 C-1住居址実測図……………	28
第7図 C-2住居址実測図……………	30
第8図 C-3住居址実測図……………	32
第9図 C-4住居址実測図……………	34
第10図 C-5住居址実測図……………	36
第11図 C-6住居址実測図……………	38
第12図 D-1住居址実測図(1)………	41
第13図 D-1住居址実測図(2)………	42
第14図 D-2住居址実測図……………	44
第15図 E-1住居址実測図……………	45
第16図 E-2住居址実測図……………	46
第17図 E-3住居址実測図……………	48
第18図 F-1住居址実測図……………	50
第19図 F-2住居址実測図……………	51
第20図 F-3住居址実測図……………	53
第21図 G-1住居址実測図……………	54
第22図 G-2住居址実測図……………	57
第23図 G-3住居址実測図……………	59
第24図 H-1住居址実測図……………	61
第25図 H-2住居址実測図……………	64
第26図 I-1住居址実測図……………	68
第27図 I-2住居址実測図……………	70
第28図 I-3住居址実測図……………	71
第29図 J-1住居址実測図……………	73
第30図 K-1住居址実測図……………	77
第31図 ピット実測図(1)……………	82
第32図 ピット実測図(2)……………	83
第33図 溝跡実測図……………	84
第34図 L-101 溝跡実測図……………	
第35図 出土遺物(A-1住居址・ B-1住居址)……………	88
第36図 遺構配置図(折り込み図版)89・90	
第37図 出土遺物(B-1住居址)………	91
第38図 出土遺物(B-2住居址)………	92
第39図 出土遺物(B-2住居址)………	93
第40図 出土遺物(B-2住居址・ B-3住居址)……………	94
第41図 出土遺物(B-4住居址)………	95
第42図 出土遺物(C-1住居址)………	96
第43図 出土遺物(C-1住居址・ C-2住居址)……………	97
第44図 出土遺物(C-2住居址)………	98
第45図 出土遺物(C-3住居址)………	99
第46図 出土遺物(C-4住居址・ C-5住居址)……………	100



第47図	出土遺物 (C-5 住居址) ……	101
第48図	出土遺物 (C-6 住居址・ D-1 住居址) ……	102
第49図	出土遺物 (D-1 住居址) ……	103
第50図	出土遺物 (D-1 住居址) ……	104
第51図	出土遺物 (D-2 住居址・ E-1 住居址・E-2 住居址) ……	105
第52図	出土遺物 (E-3 住居址・ F-1 住居址) ……	106
第53図	出土遺物 (F-2 住居址・ F-3 住居址) ……	107
第54図	出土遺物 (G-1 住居址・ G-2 住居址) ……	108
第55図	出土遺物 (G-2 住居址) ……	109
第56図	出土遺物 (G-2 住居址・ G-3 住居址) ……	110
第57図	出土遺物 (G-2 住居址) ……	111
第58図	出土遺物 (G-3 住居址・ H-1 住居址) ……	112
第59図	出土遺物 (H-2 住居址) ……	113
第60図	出土遺物 (H-2 住居址) ……	114
第61図	出土遺物 (H-2 住居址) ……	115
第62図	出土遺物 (I-1 住居址) ……	116
第63図	出土遺物 (I-2 住居址・ I-3 住居址・J-1 住居址) ……	117
第64図	出土遺物 (J-1 住居址) ……	118
第65図	出土遺物 (J-1 住居址) ……	119
第66図	出土遺物 (K-1 住居址) ……	120
第67図	出土遺物 (K-1 住居址・ J-51ピット) ……	121

### Ⅲ 兔Ⅱ遺跡

第1図	C-1 住居址実測図 (1) ……	126
第2図	C-1 住居址実測図 (2) ……	127
第3図	J-1 住居址実測図 ……	128
第4図	K-1 住居址実測図 ……	130
第5図	L-1 住居址実測図 ……	132
第6図	弥生式土器出土状況 (K区) ……	136
第7図	ピット実測図 ……	137
第8図	溝跡実測図 ……	138
第9図	出土遺物 (C-1 住居址) ……	140
第10図	遺構配置図 (折り込み図版) 141・142	
第11図	出土遺物 (C-1 住居址・ J-1 住居址) ……	143
第12図	出土遺物 (J-1 住居址・ K-1 住居址) ……	144
第13図	出土遺物 (K-1 住居址・ L-1 住居址) ……	145
第14図	出土遺物 (L-1 住居址・ A-51ピット・A-52ピット) ……	146
第15図	出土遺物 (弥生式土器) ……	147
第16図	弥生式土器拓影 (1) ……	148
第17図	弥生式土器拓影 (2) ……	149
第18図	弥生式土器拓影 (3) ……	150
第19図	弥生式土器拓影 (4) ……	151
第20図	出土遺物 (石器) ……	152

### Ⅳ 落合Ⅲ遺跡

第1図	A-1 住居址実測図 ……	155
第2図	E-1 住居址実測図 ……	157
第3図	J-1 住居址実測図 ……	159
第4図	J-2 住居址実測図 ……	160
第5図	J-3 住居址実測図 ……	161

第6図	J-4住居址実測図	162
第7図	J-5住居址実測図	164
第8図	K-1住居址実測図	165
第9図	K-2住居址実測図	166
第10図	K-3住居址実測図	167
第11図	L-1住居址実測図	168
第12図	L-2住居址実測図(1)	169
第13図	L-2住居址実測図(2)	170
第14図	L-3住居址実測図	171
第15図	M-1住居址実測図	172
第16図	M-2住居址実測図	173
第17図	M-3住居址実測図	174
第18図	D-52井戸址出土曲げ物実測図	176
第19図	井戸址実測図(1)	178
第20図	井戸址実測図(2)	179
第21図	井戸址実測図(3)	181
第22図	L-51井戸址実測図	182
第23図	ピット実測図	184
第24図	溝跡実測図	186
第25図	遺構配置図(折り込み図版)189・190	
第26図	出土遺物(A-1住居址)	191
第27図	出土遺物(A-1住居址・E-1住居址)	192
第28図	出土遺物(E-1住居址)	193
第29図	出土遺物(J-1住居址・J-2住居址)	194
第30図	出土遺物(J-4住居址)	195
第31図	出土遺物(J-4住居址・J-5住居址)	196
第32図	出土遺物(J-5住居址・K-2住居址・L-1住居址)	197

第33図	出土遺物(L-1住居址・L-2住居址)	198
第34図	出土遺物(L-2住居址・L-3住居址)	199
第35図	出土遺物(L-3住居址・M-1住居址・C-51ピット・E-52ピット・D-101溝跡)	200
第36図	出土遺物(M-1住居址・M-2住居址)	201
第37図	出土遺物(M-2住居址・M-3住居址・D-52井戸址・I-52井戸址・K-51井戸址)	202
第38図	D-52井戸址・E-51井戸址井筒材実測図	203
第39図	I-52井戸址井筒材実測図	204

#### V 朴の木遺跡

第1図	A-1住居址実測図	208
第2図	B-1住居址実測図	209
第3図	C-1住居址実測図	211
第4図	C-2住居址実測図	213
第5図	C-3住居址実測図	214
第6図	溝跡実測図	215
第7図	遺構配置図(折り込み図版)217・218	
第8図	出土遺物(A-1住居址・B-1住居址)	219
第9図	出土遺物(C-1住居址・C-2住居址・C-3住居址)	220

# 写真図版目次

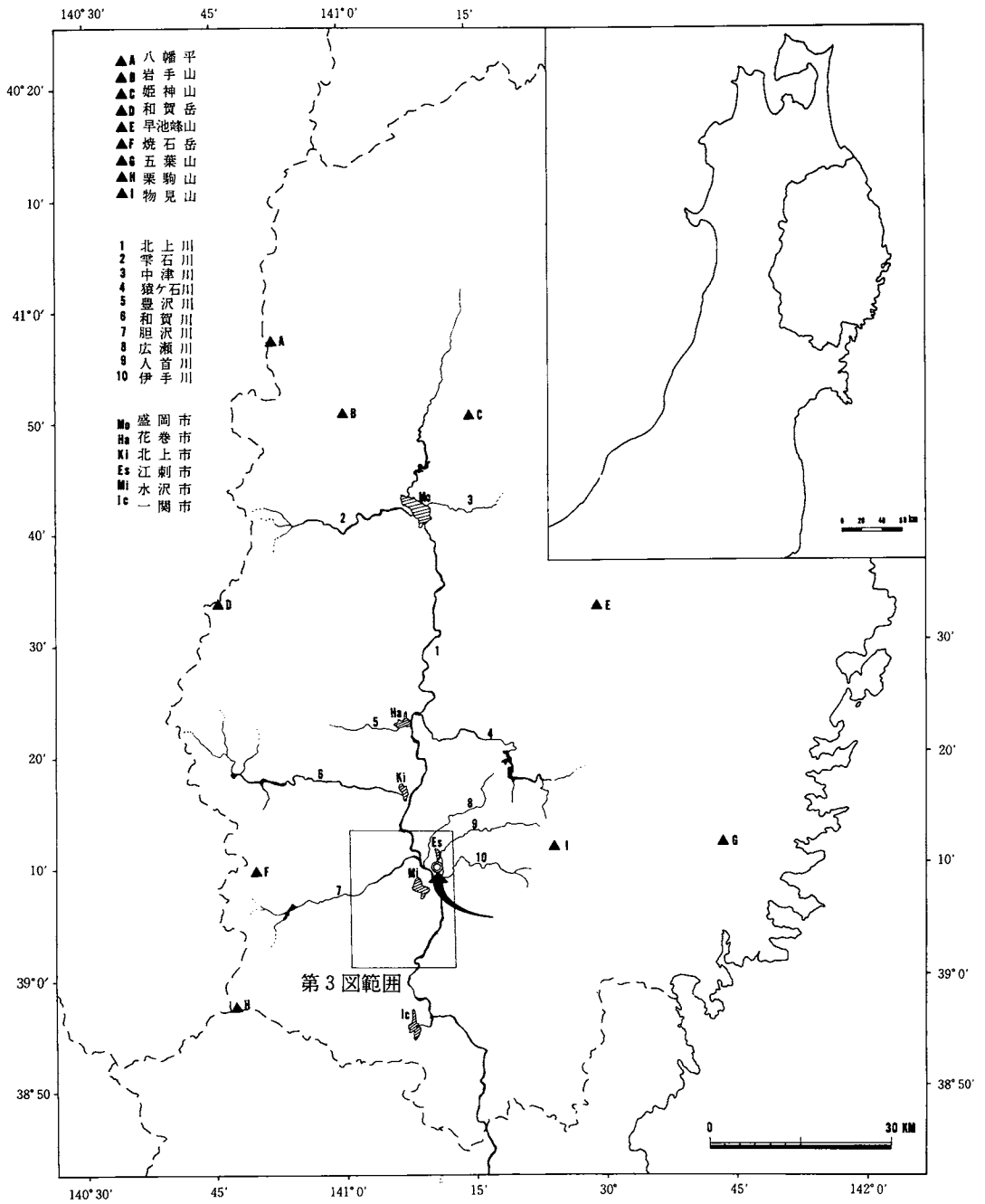
1. 南からの航空写真……………249	c F-3住居址(カマド)
	d F-2住居址(土層断面)
〈カ石Ⅱ遺跡〉	13.a F-2住居址……………261
2.a カ石Ⅱ・兎Ⅱ遺跡航空写真……………250	b F-3住居址
b A-1住居址	14.a G-1住居址……………262
3.a B-1住居址……………251	b G-2住居址
b B-1住居址(カマド)	15.a G-2住居址(鉄器出土状況) ……263
c B-1住居址(土器出土状況)	b G-2住居址(土器出土状況)
4.a B-2住居址……………252	c G-3住居址
b B-3住居址	16.a H-1住居址……………264
5.ab B-2住居址(土器出土状況) ……253	b H-2住居址
c B-4住居址	17.a H-2住居址(カマド) ……265
6.a C-1住居址……………254	b H-2住居址(鉄器出土状況)
b C-2住居址	c H-2住居址(土器出土状況)
7.a C-3住居址……………255	d H-2住居址(鉄器出土状況)
b C-4住居址	e H-2住居址(掘り方)
8.a C-4住居址(土器出土状況) ……256	18.a I-1住居址……………266
b C-5住居址(カマド土層断面)	b I-1住居址(カマド)
c C-5住居址	c I-1住居址(石帯出土状況)
9.a C-6住居址……………257	19.a I-2住居址……………267
b D-1住居址	b I-3住居址
10.a D-2住居址……………258	20.a J-1住居址……………268
b E-2住居址	b J-1住居址(土層断面)
11.a D-1住居址(煙出し部土器出 土状況) ……259	c J-1住居址(土器出土状況)
b D-1住居址(カマド土層断面)	d K-1住居址(カマド)
c E-3住居址	21.a K-1住居址……………269
12.a F-1住居址……………260	b K-1住居址(土器出土状況)
b F-1住居址(カマド)	c K-1住居址(鉄器出土状況)
	22.a 墓塚……………270
	b F-52ピット    c G-52ピット

d F-53ピット e G-51ピット	37. 出土土器 (K-1住居址・C区) 285
f H-51ピット	38.a 出土鉄器 (B-1住居址・B-3住居址他) 285
23.ac J-51ピット……………271	b 出土鉄器 (G-2住居址)
bd J-51ピット (鉄器出土状況)	39.a 出土鉄器 (G-2住居址) ……287
e J-53ピット f J-54ピット	b 出土鉄器 (G-2住居址・G-3住居址・H-1住居址)
24.a J-55ピット……………272	c 出土鉄器 (H-2住居址)
b K-51ピット・K-52ピット	40.a 出土鉄器 (I-1住居址) ……288
c E-101溝跡・E-102溝跡	b 出土鉄器 (J-1住居址)
E-103溝跡	41.a 出土鉄器 (K-1住居址) ……289
25.a G-101溝跡 ……273	b 出土鉄器 (J-51ピット)
b I-101溝跡	42.a 石帯 (G-2住居址) ……290
26.a K-101溝跡 ……274	b 石帯 (I-1住居址)
b L-101溝跡	c 砥石
27.a 深掘り土層断面……………275	43.ab 土錘……………291
b 発掘風景	44.a 足方……………292
28. 出土土器 (A-1住居址・B-1住居址) ……276	b ふいごの羽口 (H-1住居址)
29. 出土土器 (B-2住居址) ……277	
30. 出土土器 (B-2住居址・B-4住居址・C-1住居址) ……278	〈兔Ⅱ遺跡〉
31. 出土土器 (C-1住居址・C-2住居址・C-4住居址) ……279	45.ad H~I区弥生式土器出土状況……………293
32. 出土土器 (C-4住居址・C-5住居址・C-6住居址) ……280	46.a K区弥生式土器出土状況……………294
33. 出土土器 (D-1住居址) ……281	b 高環形土器出土状況
34. 出土土器 (D-1住居址・E-2住居址・F-2住居址) ……282	cd 甕形土器出土状況
35. 出土土器 (G-2住居址・H-2住居址) ……283	e 石斧出土状況
36. 出土土器 (H-2住居址・I-1住居址・I-3住居址・J-1住居址) ……284	47.ab C-1住居址……………295
	48.a C-1住居址 (カマド) ……296
	b J-1住居址 (土器出土状況)
	c J-1住居址
	49.a K-1住居址……………297
	b K-1住居址 (土層断面)

c	K-1 住居址 (カマド)	62.a	E-1 住居址…………… 310
d	K-1 住居址 (土器出土状況)	b	A-1 住居址 (カマド)
50.a	L-1 住居址…………… 298	c	E-1 住居址 (土器出土状況)
b	K-1 住居址 (カマド断面)	63.a	J-1 住居址…………… 311
c	L-1 住居址 (鉄器出土状況)	b	E-1 住居址 (土器出土状況)
51.a	A-51ピット…………… 299	64.a	J-2 住居址…………… 312
b	A-51ピット (遺物出土状況)	b	J-3 住居址
c	溝跡全景	65.a	J-4 住居址…………… 313
52.a	深掘り土層断面…………… 300	b	J-4 住居址 (土錘出土状況)
b	発掘風景	c	J-5 住居址 (土器出土状況)
53.	弥生式土器…………… 301	66.a	J-5 住居址…………… 314
ac	甕形土器	b	K-1 住居址
b	高坏形土器	67.a	K-2 住居址…………… 315
d	杵痕附着土器	b	K-3 住居址
ef	杵痕	68.a	L-1 住居址…………… 316
54.a	弥生式土器 I群・II群土器…………… 302	b	L-2 住居址
b	弥生式土器 II群土器	69.a	L-2 住居址 (煙出し部) …… 317
55.ab	弥生式土器 III群土器…………… 303	b	L-2 住居址 (カマド)
56.ab	弥生式土器 III群土器…………… 304	c	L-3 住居址 (煙出し部)
57.a	弥生式土器 III群・IV群土器…………… 305	d	L-3 住居址 (土器出土状況)
b	弥生式土器 IV群土器	70.a	L-3 住居址…………… 318
58.ab	石器…………… 306	b	L-3 住居址 (カマド)
59.	出土土器 (J-1 住居址・K-1 住居址) …… 307	c	L-3 住居址 (カマド土層断面)
60.a	出土鉄器 (C-1 住居址・K-1 住居址・L-1 住居址・A-52ピット) …… 308	71.a	M-1 住居址…………… 319
b	ふいごの羽口	b	M-2 住居址
c	土錘	72.a	M-2 住居址 (カマド) …… 320
	〈落合Ⅲ遺跡〉	b	M-2 住居址 (土器出土状況)
61.a	落合Ⅲ遺跡航空写真…………… 309	c	M-3 住居址
b	A-1 住居址	73.a	E-54ピット…………… 321
		b	E-53ピット
		c	F-51ピット・F-101溝跡
		d	C-51ピット e D-101溝跡

74. a	深掘り土層断面……………	322	92. a	曲物 (D-52井戸址) ……	340
b	現地説明会風景		bc	曲物外側 d 曲物内側	
75. a	現地説明会風景……………	323	93.	曲物 (I-52井戸址) ……	341
b	C-54井戸址 (土層断面)		a	曲物上部 b 曲物内側	
76. a	D-51井戸址……………	324	c	曲物下部	
b	D-51井戸址 (土層断面)		94. a	鉤手 (K-51井戸址) ……	342
77. a	D-52井戸址 (土層断面) ……	325	b	鉤手 (D-52井戸址)	
b	D-52井戸址		c	刀子 (I-52井戸址)	
78. ab	D-52井戸址 (曲物出土状況) ……	326	95. a	出土鉄器……………	343
79. a	E-51井戸址 (土層断面) ……	327	b	砥石	
b	E-51井戸址		96. ab	土 錘……………	344
80. ab	E-51井戸址 (井筒出土状況) ……	328			
81. a	I-51井戸址……………	329		〈朴の木遺跡〉	
b	I-51井戸址 (土層断面)		97. a	朴の木遺跡全景……………	345
82. a	I-52井戸址 (土層断面) ……	330	b	A-1住居址	
b	I-52井戸址		98. a	B-1住居址……………	346
83. ab	I-52井戸址 (井筒出土状況) ……	331	b	C-1住居址	
84. a	K-51井戸址……………	332	99. a	C-2住居址……………	374
b	K-51井戸址 (土層断面)		b	C-3住居址	
85. a	L-51井戸址……………	333	100. ab	深掘り土層断面……………	348
b	L-51井戸址 (土層断面)		101. a	出土土器 (B-1住居址・C-	
86.	出土土器 (A-1住居址・E-		1住居址・C-2住居址) ……	349	
87.	出土土器 (J-5住居址・K-		b	C-101溝跡・C-102溝跡	
2住居址・L-2住居址・L-					
3住居址) ……	335				
88.	出土土器 (L-3住居址・M-				
2住居址・M-3住居址・D-					
101溝跡)……………	336				
89.	出土井筒材 (E-51井戸址) ……	337			
90.	出土井筒材 (I-52井戸址) ……	338			
91.	出土井筒材 (I-52井戸址) ……	339			

# I. 序 論



第1図 岩手県全体図(矢印・遺跡)





第2図 遺跡位置図

# 1. 調査に至る経過

岩手県においては、高速時代に対応するため、主要地方道の整備に取り組んできている。これらの主要地方道の一つに一関一北上線がある。主要地方道一関一北上線は、一関市から柵瀬橋を渡り、平泉町長島から水沢市羽田を通り、江刺市岩谷堂を経て、北上市に至る延長約50kmの区間である。この区間のうち、今回改修部分は、水沢市羽田地区から江刺市愛宕地区までの約4kmの区間である。

改修工事に伴う事前分布調査は、各市教委において行なわれ、江刺市愛宕地区4ヶ所の遺跡が確認された。その後調査についての協議は、県土木部道路建設課と県教委文化課との間において行なわれ、昭和53年度に調査することで合意し、調査主体を県埋文センターとする事とした。この合意にもとづいて昭和52年10月に県土木部、県教委文化課、県埋文センターの三者で遺跡の確認が行われた。

愛宕地区は、東北新幹線建設時においても、中屋敷・力石・鴻の巣館・落合Ⅰ・落合Ⅱ・宮地遺跡の7遺跡が調査され、平安時代を中心とする竪穴住居址・井戸址などが検出精査されている。これらの遺跡はいずれも微高地上に立地しており、過去において数度にわたる河川の氾濫を受けている。このような過去の調査例から、愛宕地区の遺跡確認は、微高地を中心に行ったが、愛宕地区路線内における微高地は4ヶ所確認し江刺市教委の分布調査と合致した。遺跡名については、過去の調査遺跡と同一微高地面であっても、今次調査との混同をさけるため字名のうしろにアラビア数字を用いることとした。即ち、路線南微高地より力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴の木遺跡と呼称することとした。落合Ⅲ遺跡は、新幹線建設時の落合Ⅰ遺跡と同一微高地面であるが、北側低地水田面において、旧河道の部分の落合Ⅱ遺跡より多量の土器、木器が出土したことから低位水田面までを調査範囲とした。調査の細部については54年1月より工事計画を基に、県埋文センターと、県道路建設課との間で進められ、次のような申し合せを行なった。

1. 調査は4月より10月31日までとする。
2. 調査は、4遺跡すべてに全面粗掘をかけ、遺構の確認を行う。遺構分布状況によって10月末完了の見込みのない場合は、三者協議を行う。
3. 調査順序は、工事計画に合せ、力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡・朴の木遺跡・落合Ⅲ遺跡の順とし、調査完了目標を力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡は8月、朴の木遺跡・落合Ⅲ遺跡を10月までとする。
4. 排土の処理については、現地水沢土木事務所江刺出張所と協議するが、十分な協力態勢をとる。

5. 調査中は、その地区の工事を行わない。

昭和53年4月に正式委託を受けて、4月8日より調査を開始した。

## 2. 調査方法と整理方法

### (1) 調査方法

調査区域は4遺跡とも南北に長く延びているが幅は11m±と非常に狭まい。そこで遺跡ごとの南端の基準点から15mごとに区切り、それぞれにアルファベットを付しAから順次ブロックを設定し、更に3mを単位とするグリッドを設けてこれを基本的な単位とした。しかし兔Ⅱ遺跡だけは広く弥生式土器の分布がみられたため細かく10mブロックで1mグリッドを単位とした。遺構名は各ブロックごとに命名し、原則として南側より順に住居址は1から、ピット類は51から、溝は101から一連の分類番号を付した(例A-1住居址・B-51ピット・D-101溝等)。

耕作土の除去はバックホーを使用した。1台で4遺跡(9,120m<sup>2</sup>)に要した日数は26.5日である。遺構の確認はシルトで構成される第Ⅲ層の明黄褐色土層の上面で行った。しかし埋土もシルトが主体であり、遺構の検出及び精査は難行した。不明瞭な部分が多々みられ、一部の遺構では掘り過ぎもみられた。しかしその間の状況については詳しくField Card(当埋文センター作成)に記載し、調査員が協議の上調査を進めた。特に遺構間の新旧関係の把握には細心の注意を傾けた。住居址は4分法、ピット類は2分法を原則として精査を行った。埋土が単層の場合と住居址内の柱穴その他のピットの埋土についてはField Cardに記載するだけで図化を省略した。住居址は実測・写真終了後にカマドの切断及び床面下の掘り下げ等を行い細部の観察や補足調査を行った。遺物の取り上げは遺構に伴うか否かに重点を置き、原則として遺構に伴うと考えられる場合は遺物番号を付し出土地点とレベルを図示し、埋土中の遺物と区別した。しかし床面が明瞭でなかったり、遺構が浅い場合等で埋土下部と床上の遺物の区分に多少の混乱がみられる。

実測作業は作業員の中から若い人を中心に実測班を編成して行った。断面の線引きや不明瞭な個所については調査員が行い、出来上った図面には調査員が必ず点検を行った。縮尺は20分の1を基本としたが、状況に応じ10分の1、40分の1の図も作成した。平面図は遣り方測量を原則とし、補助的に平板も使用した。写真撮影は6×7cm判カメラ1台と35mm判カメラ2台を使用し、整理時の混乱を防ぐため「撮影カード」(当埋文センター作成)を利用した。

調査には調査員3名と作業員1日当たり平均22.6名が従事した。調査員は遺跡の総体的把握に努め、実際の作業の大半は作業員が行った。調査員はフィールドから出来るだけ多くの情報を







得るため、常にField Card を携帯し、あらゆる面からの観察事項を現地で記載することを心がけた。

## (2) 整理方法

発掘調査時に平行して行った整理作業は遺物の洗浄と出土地の記入だけであり、大半の仕事は4ヶ月という時間的制限の中で進められた。整理作業は遺物の仕分け・復元・拓本・鏽落し等を主な仕事とする班と図面のトレース・遺物の実測をする班に作業員を分け、調査員の指導で両班平行して作業を進めた。個別の整理方法及び挿図の凡例は以下の通りである。

### a、遺構の図面

遺構配置図は発掘調査時に作成した平面図を基に $\frac{1}{100}$ の縮尺図を作成し、それにスケールを付し縮尺不定で載せた。各遺構の図は調査時に作成した図をトレースし、それを以下の縮尺で載せた。住居址の平面図・断面図： $\frac{1}{60}$ ・カマドの断面図： $\frac{1}{40}$ ・ピット類： $\frac{1}{60}$ ・溝類は縮尺不定。これら各遺構の図には重複関係・未調査部分・掘り過ぎ・攪乱・焼土を図上で明確にするためにスクリーン・トーンを使用した。その指示は次の通りである。

 当該遺構より新しい遺構	 当該遺構で掘り過ぎた部分	 攪乱
 当該遺構より古い遺構	 調査区域外	 焼土

### b、土器

弥生式土器は復元可能資料のみ図化し $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{4}$ で載せた。他の破片は文様を有する破片を中心に分類し、拓影を $\frac{1}{2}$ で示した。

奈良・平安期の土器は原則として $\frac{1}{4}$ 以上残存（甕・壺等は口縁部の $\frac{1}{4}$ ）するものに対し図化した。調整は明瞭な個所のみ中軸線の両側3～4cmだけを図化し、調整技法により表現方法を変えた。残存の割合は中軸線の両側の線をあけることにより区別した。 $\frac{1}{2}$ 以上残存するものは全部書き、 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ は上の線を半分あけ、 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ のものは上の線を $\frac{2}{3}$ あけた。体部下端及び底部の再調整は▲で示した。一方だけの場合は2つ、相方にみられる場合は3つ使用し、▲印間が調整部位を示す。黒色処理のみられる部分にはスクリーン・トーンで表現した。酸化炎焼成と還元焼成とを区別して表示するために、還元炎焼成の土器に対し断面を黒で塗り潰した。実測図は住居址ごとにまとめ $\frac{1}{6}$ で載せ、左上には口径・器高・底径の順に計測値を示し、計測不能は一で表示した。また右上には出土位置を表示した。

### c、鉄製品

丁寧に鏽を除去している時間がなく、大半の遺物は鏽の付着したまま図化した。実測図には鏽の表現は簡略化し、輪郭と原体を中心に表現し、原体については太い線で示し、破損部には

点線を付した。縮尺は $\frac{1}{2}$ の縮尺で図示した。

d. 石製品

弥生時代の石器は $\frac{2}{3}$ で載せ、砥石・足方は $\frac{1}{2}$ で載せた。砥石の断面図の外に寸で示した部分は使用面を示す。足方としたものは加工はみられず、類似品が多いため一部のみ図化した。

e. 木製品その他

井戸枠に使用された木材については加工痕の明瞭なもののみ図化した。井戸枠に使用された曲物その他の木製品の一部は(財)元興寺文化財研究所に依頼し保存処理を行った。材木は $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{6}$ 、曲物、その他の木製品は $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{6}$ で載せた。土製品は $\frac{1}{2}$ の縮尺で図示した。

### 3. 遺跡の立地と環境

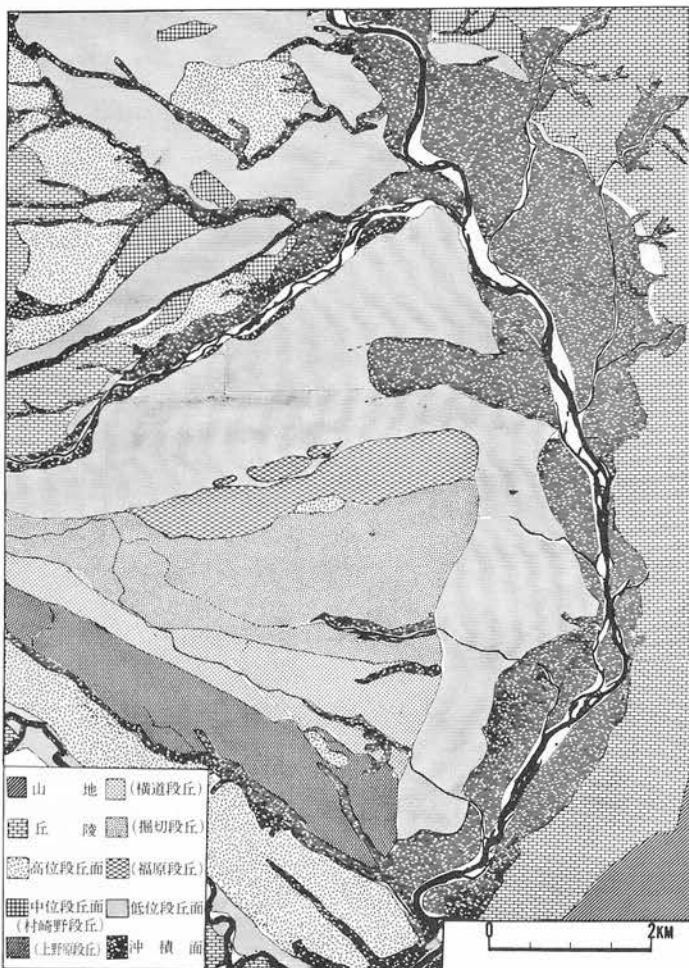
#### (1) 地形と地質

岩手県北部に源流をもち、北から南へ縦断して宮城県北東部・追波湾に河口を開く北上川は、総延長 249 km・流域面積 10,250 km<sup>2</sup>におよぶ。北上川流域は、地質学的特性から 5 地区に大別される。今回発掘調査のおこなわれた 4 遺跡の所在する江刺市は、その区分では北上川中流域(注1)(盛岡～前沢地区)の東岸に含まれる。東岸では北上川が北上山地の西縁沿いに流れるため、沖積地と丘陵縁辺に付着する段丘とが小規模にみられるにすぎず、丘陵や山地が支配的である。それに対し、西岸では奥羽背梁山脈の東麓から発達する大小の扇状地や扇状地性段丘群が著しい。六原扇状地・胆沢扇状地などはその代表例である。中流域での標式的段丘発達は花巻～金ヶ崎間においてみられ、上位より下位へ西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘に区分される。胆沢川によって形成された胆沢扇状地は段丘化し、高位から下位へ一首坂段丘・胆沢段丘・水沢段丘に大別される。これはさきの段丘区分に対比されるものである。胆沢段丘はさらに上野原・横道・掘切・福原の各段丘に細分される。段丘群は高位から低位へ漸次北側に配置され、胆沢川は、現在ではその北端を崖線をなして流れている。(注2)

江刺平野は北上川をはさんで六原扇状地・胆沢扇状地と面し、両岸は地形的に著しい非対称性を示す。江刺平野は、最大幅東西 3.2 km・最大長南北 10.5 km と北上盆地では最も広い面積をもつ。平野の背後には隆起準平原である北上山地が広がり、大森山 (820.0 m)・物見山 (870.6 m)・大森鉢山 (732.9 m)、さらにその西側には海拔 700 m 台に頂面をもつ阿原山・天狗岩山・逢来山などが定高性を示すスカイラインをみせている。その前面には小起伏面が展開し、平野とは 100 m 前後の丘陵地の前縁に付着した段丘が接している。段丘面の発達は全体に不良であるが、平野の北側稻瀬付近には比較的広く分布する。海拔 80 m 前後に発達する中川ほか

(1963)の村崎野段丘相当面、その前面60m前後に発達する金ヶ崎段丘相当面である。他には丘陵の西縁に一部で村崎野段丘相当面を伴い金ヶ崎段丘相当面が小規模に発達するにすぎない。また北上山地から流れでる広瀬川(全長28km)・人首川(全長30km)・伊手川(全長25km)はその流長の割には谷底の幅が広く、両岸には小規模な段丘が分布する。

沖積平野の海拔は32m~45mである。4遺跡はいずれも微高地上に立地し、海拔37.3m~38.5mにある。ゆるやかに蛇行して南下する北上川は、北上山地から流れでる広瀬川・人首川・伊手川と合流し、また胆沢川との合流点をもつため、低位沖積面上には著しく曲流・蛇行を示す旧河道が認められ、その両岸には大小数多くの微高地と後背低地が形成される。微高地の大部分は自然堤防で、ポイント・バー的なものは少ない。周辺の低位面との比高差は1m~2mと小さい。現状の土地利用は、微高地が果樹園・畑地・宅地のほか水田化が進んでいる。しか



第3図 地形分類図(1)

し、原形は良く保たれている。旧河道および後背低地は水田である。

江刺平野を北西~南東方向に縦断する東北新幹線の建設工事もほぼ終了した。それに先立つ試錐調査がおこなわれており、以下の記述にはその(注4)資料を多く参考にした。

江刺平野の基盤は新第三系鮮新統玉里層である。玉里層は下部に凝灰質頁岩・砂岩が発達し。礫質部を挟んでいる。上部には数層の亜炭層を挟む。瀬谷子付近では安山岩が基盤(注5)となり、一部では露出する。基盤はゆるやかなおうとつの侵食面をもち、下位から砂礫・砂層・粘土層の順に堆積する沖積層に不整合におおわれる。人首川南岸から宮地付近まで約3.3kmの間の8地点で

の試錐調査による沖積層の平均層厚は7.47mである。木野(1963)は、江刺平野南端の羽田付近での沖積層の層厚を13m前後と推定している。砂礫層の平均層厚は4.70m・基底面の平均海拔高度は30.18mである。その高度は北上川の現水面より数m下位にある。8地点での南端と北端での砂礫層基底面の比高差は4.4mと、基盤の北あがりがある。砂礫層を構成する礫の粒径は30mm±~50mm±を主とし、最大で100mm±である。この砂礫層の上位には砂層と粘土層が載る。2層の層厚は2m±~4.3m±で、平均は3.0m±である。砂層は粘土層に比べて薄く下位に分布する。しかし、地点によっては砂礫層のおうとつのおう部に砂層の厚い維積がみられ、一部では粘土に卓抜する。



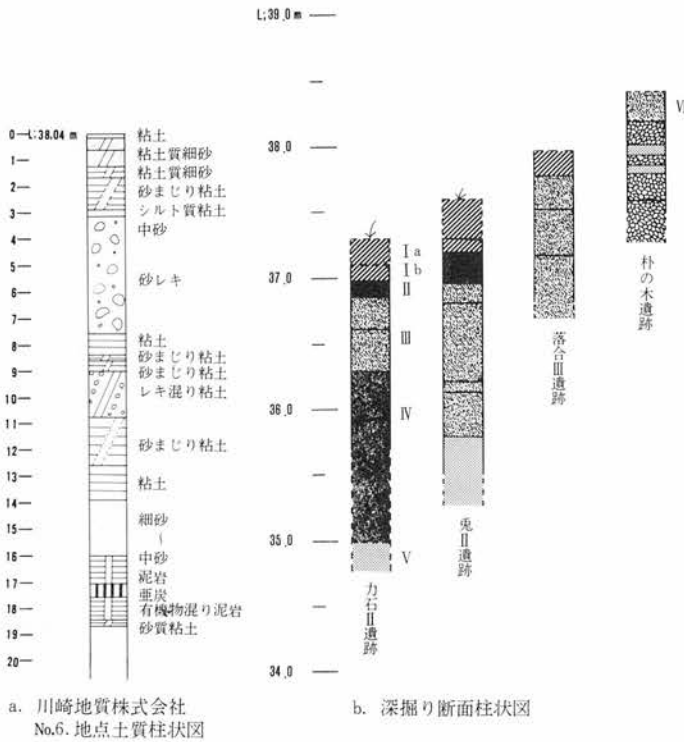
第4図 地形分類図(2)

以上は微高地上で得られた資料が主である。後背低地・旧河道での資料には落合Ⅱ遺跡の発掘調査資料がある。落合Ⅱ遺跡は今回調査された<sup>(注7)</sup>落合Ⅲ遺跡の西方20数mに位置し、同一の遺跡と考えられる。微高地北側の低位面是水田に利用され、旧河道とみられる部分に平安期の遺物包含層の存在がしられた。ゆるやかな頂面をもつ礫層の上位の堆積物は、上位から下位へシルト・泥炭土・シルト質粘土の順であり、層厚2.3m±である。泥炭土は薄く発達が悪い。今回調査された4遺跡の基本層序を第56図に掲げた。湧水があることや作業に危険が伴うため、深掘りは一定程度までしか実施できなかった。

Ia層 黒褐色土層・炭色土層…畑地・果樹園および水田耕作土。層厚20cm±~30cm±。

Ib層 褐灰色土層……水田耕作土から下層への漸移層。層厚12cm±。

II層 褐色土層……粘土質シルト



第5図 土層柱状図

層である。朴の木遺跡では表土から40cm±~50cm±で砂礫層にたつする。砂層と礫層とは指交状の堆積を示し、礫の径は下層から 100mm±主体・30mm主体・10mm±主体と粗粒から細粒へと順次堆積する。一部の住居址の床面上にはこの砂礫層が露出している。観察できたのは砂礫層の一部にすぎない。

以上のように朴の木遺跡での層序がやや異なるが、他の微高地上での堆積物はシルト質が強く、低位沖積面で卓抜する粘土層との表層地質的な差異がみられる。

この微高地上に遺跡が知られるのは、縄文時代中期末葉の五十瀬神社前遺跡があるほかは弥生時代中期以降のことである。だが、それも現在までのところ沼の上遺跡と今回調査された免II遺跡の2カ所を数えるだけで、資料としては断片的である。免II遺跡からは靱痕をもつ弥生式土器も出土している。広い後背低地をもつ沖積平野は弥生時代以降の人間活動の中心舞台となったであろう。しかし、江刺平野で本格的な居住活動が展開されるのは奈良時代末以降、それも主に平安時代以降のことである。

## (2) 周辺の遺跡

層。粒状の焼土・炭化物や土器の細片・小円礫をわずかに包含する。層厚12cm±~25cm±。

III層 明黄褐色土層……シルトで構成されるが、砂質~粘土質に細分される。この層の上面が遺構検出面である。層厚55cm±~120cm±。

IV層 明黄褐色土層……シルト質粘土層である。層厚130cm±。

V層 黄褐色土層……細砂層である。免II遺跡の別地点での観察では層厚20cm±で砂礫層にたつする。

VI層 灰黄褐色層……砂礫



江刺市および北上川対岸の水沢市には数多くの遺跡の分布が知られている。北上川兩岸にみられる地形上の非対称性は遺跡の立地に反映している。江刺地区では縄文時代の遺跡が丘陵および丘陵辺縁に小規模に発達した段丘上に分布し、弥生時代以降の主活動の場は沖積平野に移る。水沢地区では広大な扇状地性段丘群の上を中心とし、北上川谷底平野に遺跡が分布する。

江刺地区では東北新幹線建設に伴う、また水沢地区では東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が昭和47年から数カ年にわたっておこなわれた。さらに各種の開発に伴う調査件数の増加につれ、点あるいは線的ではあるが徐々に歴史的な解明がすすみつつある。

今回調査された4遺跡の周辺に分布し、現在までに発掘調査された遺跡を中心に、主に第2図幅内での時代別の概観に触れてみたい。なお( )内の数字は第2図の遺跡位置に対応する。

旧石器時代の遺跡は江刺地区においては知られていない。水沢地区では胆沢城跡付近で打製石斧と尖頭器などが採集されている。

縄文時代では新幹線建設に先立ち、2遺跡が調査されている。五十瀬神社前遺跡(12)は北上川に面した微高地に立地する中期末の遺跡で、住居址2棟・炉跡2基が検出された。瀬谷子遺跡(11)は後期の土器片が少量出土している。他に丘陵西側縁辺に付着する段丘上、広瀬川・人首川・伊手川の流域に形成された段丘上や丘陵を開析する小支谷沿いに中期～晩期の遺跡が知られる。水沢地区では水沢段丘上や胆沢段丘群を開析する小支谷沿いを中心に早期～晩期の遺跡が数多く分布する。根岸遺跡(16)は水沢段丘上に立地し、晩期大洞C<sub>2</sub>式土器を中心とする遺物包含層の存在が知られる。常盤広町遺跡からわずか南方の水沢段丘の崖縁には、晩期大洞B C式～C<sub>2</sub>式土器を主体に出土する杉の堂遺跡がある。

弥生時代の遺跡では沼の上遺跡(9)が著名である。沖積微高地に立地し、少量の石器を伴う谷起島式併行の土器を主体として出土する。昭和52年度の調査では溝状遺構10条・焼土部2カ所・集積遺構等が検出された。水沢地区には、岩手県での弥生式土器の存在がはじめて明らかになった中期の常盤式土器の標式遺跡・常盤広町遺跡(15)がある。第2図幅には含まれないが、中期橋本式土器の標式遺跡である橋本遺跡も知られる。しかし、資料としてはまだ断片的である。

古墳時代にはいと水沢市の西方に5世紀末～6世紀初頭の角塚古墳が出現する。高山遺跡では古墳時代前期の古式土師器と住居址が発見された。江刺地区では「岩手県史」に五位塚古墳群・稲瀬古墳群等の記載がみられるほか、「岩手県埋蔵文化財分布図」にも古墳群として数多くの遺跡が記載されている。しかし、その所属する時代や実体についての詳細は不明である。

奈良～平安時代には江刺平野の微高地に多くの集落が出現する。新幹線建設に伴い調査された遺跡でも鴻ノ巣館(5)・力石Ⅰ・落合Ⅰ・落合Ⅱ(6)・宮地(7)・鶴羽衣(10)・谷地(13)の各遺跡があげられる。宮地遺跡は8世紀末から10世紀中葉を前後する時期の集落址

で、25棟の住居址をはじめ井戸跡2基・溝跡多数が検出された。鴻ノ巣館遺跡は力石Ⅱ遺跡の南東200m±に位置する。10棟の住居址が検出され、時期的には力石Ⅱ遺跡と接近する。落合Ⅰ・Ⅱ遺跡は落合Ⅲ遺跡と同一の遺跡である。両遺跡で住居址4棟などが検出された。落合Ⅱ遺跡では微高地北側の低位沖積面の旧河道と考えられる部分から、多量の土器・墨書土器のほか岩手県では最初の出土である木簡や木製品・鉄製品などが出土した。鶴羽衣・谷地遺跡とも検出された住居址は少なく、ロクロ回転糸切離しの杯形土器を出土する。以上の沖積微高地に立地する遺跡のほか、瀬谷子窯跡群(14)<sup>(注20)</sup>が村崎野段丘相当面に存在する。須恵器や瓦などの窯跡が100基以上知られ、伊藤(1976)<sup>(注21)</sup>は9世紀前半～10世紀後半に位置づけている。胆沢城跡(19)は802年に創建され、以降陸奥国支配の中核的位置をになってゆく。立地するのは北上川と胆沢川との合流点付近の水沢段丘上で、落合Ⅲ遺跡の西北西・直線距離にして4km±の地点である。竈堂(18)<sup>(注22)</sup>・東大畑遺跡(17)<sup>(注23)</sup>をはじめ、胆沢城跡周辺には今泉・膳勝・西大畑・石田など奈良末～平安時代の大規模な遺跡が存在する。胆沢城創建に伴い、周辺部ではまっさきに従来の政治的・経済的社會が解体され、新たな政治支配の下に再編されていったことが考えられる。今回調査された4遺跡もそのような背景をもって成立・展開していったものであろう。豊田城(8)は奥羽藤原氏・清衡の居城であり、11世紀末には平泉の地へと進出し、平泉文化を築きあげてゆくのである。

(注1) 中川久夫・石田琢二他(1963)：北上川上流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史(1)—地質学雑誌第69巻第811号

(注2) 中川久夫・岩井淳一他(1963)：北上川中流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史(2)—地質学雑誌第69巻第812号

(注3・6) 経済企画庁(1963)：土地分類基本調査 水沢5万分の1

(注4) 川崎地質株式会社(1972)：地質推定断面図・土質柱状図

(注5) 江刺市教材センター・江刺市理科教育研究会編(1971)：江刺の地学

(注7・10・19) 岩手県(1974・1977)：東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報(宮地遺跡のみ1977略報) 岩手県教育委員会文化課

(注8) 岩手県(1974)：埋蔵文化財分布地図 岩手県教育委員会  
水沢市(1974)：水沢市史Ⅰ

草間俊一・伊藤鉄夫他(1965)：水沢の原始・古代遺跡 水沢市教育委員会

(注9・12・14・15) 前出(注8)水沢市史Ⅰ

(注11) 1977年に水沢市教育委員会が一部調査。

(注13) 伊藤鉄夫(1973)：沼ノ上遺跡調査報告書 江刺市教育委員会

- 岩手県埋蔵文化財センター（1978）：江刺市沼の上遺跡
- （注16）林謙作・伊藤鉄夫・高橋信雄（1976）：角塚古墳 胆沢町教育委員会
- （注17）高山遺跡調査会（1978）：高山遺跡 水沢市教育委員会
- （注18）岩手県（1971）：岩手県史第1巻
- （注20）大川清他（1969）：岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報 窯業史研究所  
大川清編（1970）：岩手県江刺市瀬谷子窯跡群第2次緊急調査概報 窯業史研究所  
草間俊一編（1971）：岩手県江刺市瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告 江刺市教育委員会
- （注21）伊藤博幸（1976）：岩手県の古代土器生産について—須恵器とロクロ土師器の素描—岩手史学研究第61号
- （注22・23）岩手県埋蔵文化財センター（1978）：岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
- （注24・26・27）岩手県教育委員会（1974～1976）：現地説明会資料
- （注25）岩手県埋蔵文化財センター（1979）：岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

## Ⅱ. 力石Ⅱ遺跡

遺跡所在地	江刺市愛宕字力石
調査期間	昭和53年4月3日～7月31日
調査対象面積	2,160m <sup>2</sup>
発掘面積	2,160m <sup>2</sup>

# 1. 検出された遺構・遺物

## (1) 竪穴住居址

### A 区

#### A-1 住居址

##### 遺構 (第1図・写真図版2b)

削剥を受けて壁や床面を消失しているこの遺構を住居址として分類したのは、残された掘り方の規模や形状の点からである。西側の一部が農道下にあつて調査できなかったが、掘り方は南北の長さが3.5m±を計るもので、形状はほぼ正方形を示すと推定され、東側には不整形な落ち込みをもつ。

P<sub>1</sub>(径75cm±×55cm±・深さ26cm±)・P<sub>2</sub>(径100cm±×65cm±・深さ20cm±)は住居址の範囲内に存在するが、住居址との関係は不明である。

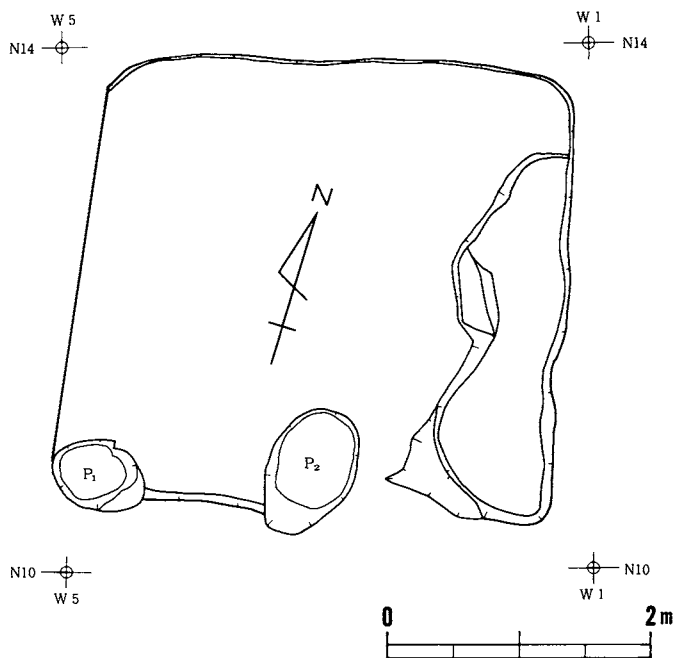
カマドは存在の有無も含めて不明である。

##### 出土遺物 (第35図・写真図版28)

当住居址の遺物は僅少で、東側の不整形ピットより出土した土器が大半を占める。器種は坏と甕だけであり、土器以外では砾石が出土している。

坏形土器 (第35図1) ロク口成形で、内面は篋磨き後黒色処理を施こし、底部は回転糸切り無調整(坏BⅠa類)。体部は内弯気味の立ちあがりを持ち、器高がやや高い。

甕形土器 (第35図2・3)  
2はロク口不使用の小形の甕(甕AⅡa類)で、口縁部は緩く外反し、体部に脹らみをもたない。口縁部は内外面共横撫で調整、体部外面は篋削り、内面には刷毛目調整が施こされている。



第1図 A-1 住居址実測図

3はロクロ成形の小形甕(甕B I b類)でロクロ挽きによる凹凸が明瞭で、内面に煤の付着がみられる。

砥石(第36図4) 現存長12.5cmで、断面は三角形を呈す。3面とも長軸方向に使用され、うち2面に縦方向への浅い条溝及び擦痕がみられる。石質は流紋岩である。

## B 区

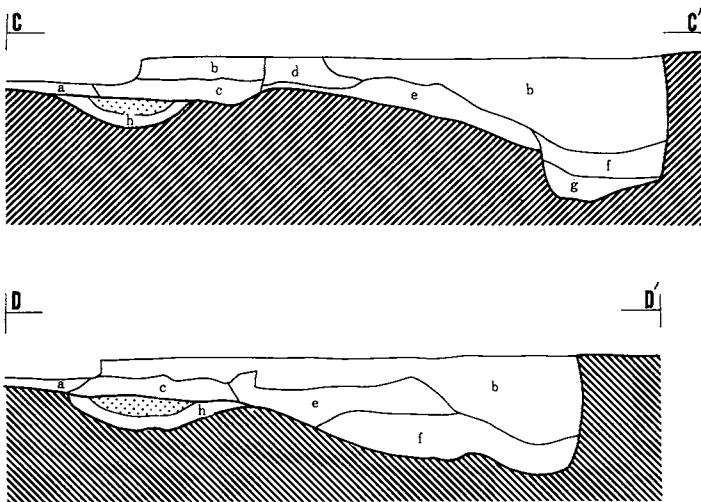
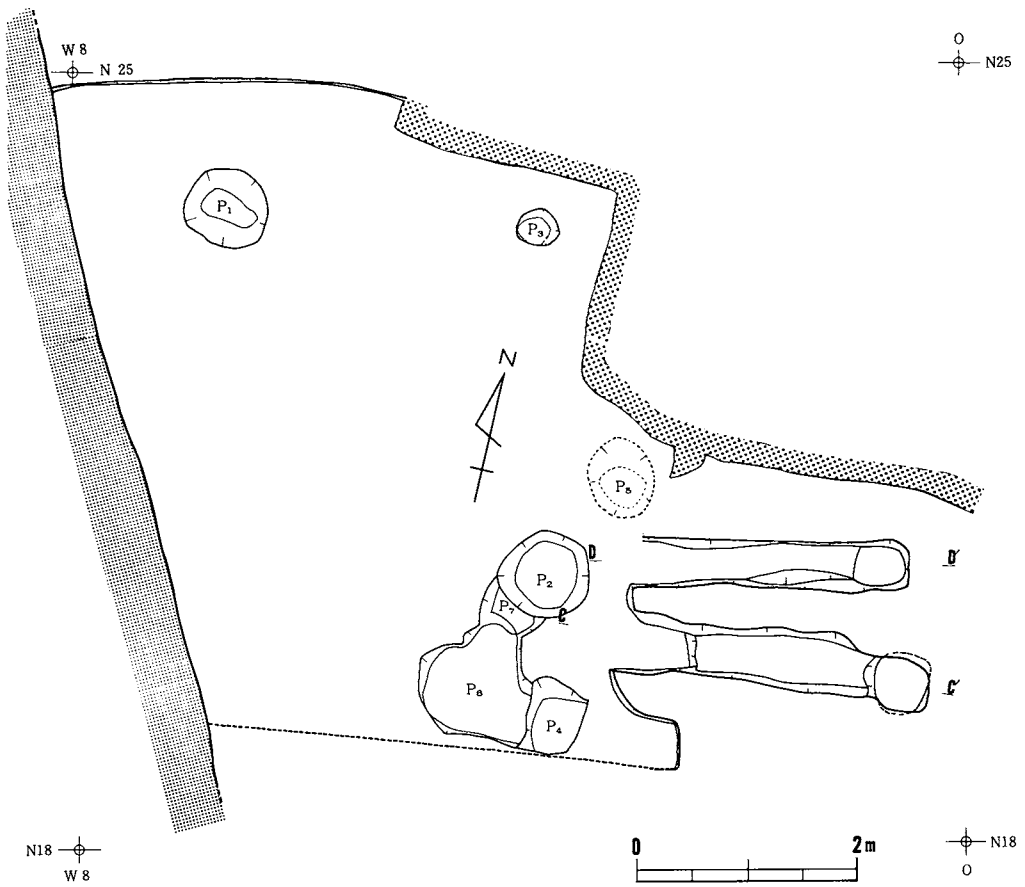
### B-1 住居址

#### 遺 構 (第2図・写真図版3abc)

北東隅をはさんだ北壁と東壁の一部を精査時の掘りすぎにより壊わしたこと、南壁は削剝を受けて不明であること、西側の一部が農道下にあつて調査できなかったことなどの理由から、規模・形状とも詳細は不明である。しかし、残された壁や掘り方からは、南北で6.0m±の長さが推定できる。主軸はほぼ東西方向にある。埋土は黄褐色砂質シルトの単層で占められるため、Field Cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。壁高は南東隅で16cm±を計る。床面は全体に柔かで埋土との境界が不明瞭であつた。

P<sub>1</sub>(径72cm±・深さ24cm±)・P<sub>2</sub>(径80cm±・深さ35cm±)・P<sub>3</sub>(径35cm±・深さ46cm±)などのピットが床面上に検出されている。P<sub>2</sub>はP<sub>4</sub>(径70cm±×50cm±・深さ48cm±)とともに柱穴の一部を構成する。P<sub>4</sub>は床面の掘り下げをおこなつた段階で検出されたが、土層断面の観察からは床面に存在したピットとして把握される。P<sub>2</sub>の、褐色シルトを主体とした埋土は多量の焼土粒を包含している。その位置や規模・埋土などからは1号カマドとの同時存在が考えられる。P<sub>5</sub>(径72cm±×57cm±・深さ24cm±)・P<sub>6</sub>(径100cm±・深さ30cm±)・P<sub>7</sub>(径57cm±・深さ13cm±)などは床面下に検出されたピットである。2号カマドの傍にあるP<sub>5</sub>は、層厚10cm±の黄褐色シルトで貼り床され、埋土は焼土が優占して多くの炭化物粒・土器を包含する。2号カマドとの同時存在が考えられるピットである。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は埋土中に厚い焼土層をもち、土器の出土も多い。いずれかのカマドとともに存在し、ピットの廃絶後に貼り床されたものであろう。そのほか、住居址の南側には掘り方の不整形な落ちこみが検出された。

この住居址には2基のカマドが存在する。1号カマドは東壁の南東隅に近い位置にあり、カマド幅120cm±・燃焼部幅40cm±を計る。天井部は崩壊していたが、カマド埋土中にその構築土を識別することはできなかった。袖部はシルトで構築されているものの、住居址埋土との区別がつけ難く、それほど明瞭に把握できたものではない。煙道部は、燃焼部とは8cm±の比高差で上位にあり、先端へ急傾斜で下がってゆく。長さは220cm±・煙道底面は40cm±と幅広である。煙出し部には、煙道底面から深さ28cm±・検出面からでは深さ74cm±のピットが掘りこ



- a. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- b. 褐色土層(含焼土塊)
- c. 暗褐色土層(含焼土粒)
- d. 暗褐色土層(含焼土粒・焼土塊)
- e. 暗褐色土層(含焼土塊)
- f. 褐色土層(含焼土粒)
- g. 極暗赤褐色焼土層
- h. 黄褐色土層(カマド掘り方土土)

第2図 B-1 住居址実測図

まれている。2号カマドは1号カマドのわずかに北側に位置する。上部構造（天井部・袖部）は残存せず、径35cm±の焼成面が燃焼部にみられるだけである。煙道部は長さ170cm±・底面幅40cm±とやや1号カマドのそれに比べて短かいが、形態には類似性が認められる。煙出し部には、煙道底面から深さ10cm±・検出面からでは深さ64cm±のピットが掘りこまれていた。2基の先後関係は、P<sub>3</sub>とP<sub>6</sub>の存在状況や袖部の有無・土器の出土状況などから考えて、2号カマドが1号カマドに先行するものである。

一部が重複するB-3住居址の新旧関係は明らかにできなかった。

#### 出土遺物（第35図・第37図・写真図版28・38a）

当住居址の遺物は土器が中心で、カマド周辺部及びP<sub>6</sub>とP<sub>7</sub>内より出土したものが大半を占める。器種は坏と甕だけである。土器以外では鉄器と僅かであるが鉄滓が出土している。

坏形土器（第35図5～10） いずれもロクロ成形で、還元炎焼成による（坏BⅡ類）ものが多い。5は酸化炎焼成で内面に篋磨き後黒色処理が施こされ、体部下端と底部全面に手持ち篋削りによる再調整がみられる（坏BⅠC類：H<sub>1</sub>手法）。器形は底部近くに丸味をもつが、口縁部に向い直線的に立ちあがり、口唇部下で僅かに外反する。口径に比べ器高がやや高い。6～7は還元炎焼成の坏（坏BⅡ類）で、すべて回転糸切りで無調整。器形は6～8のように底部から口縁部にかけて直線的に外傾し、ロクロ挽きによる凹凸の明瞭なものと、9～10のように体部下端に丸味をもつものがある。7・8・10は右回転による普通の切り離し痕をもつが、6は最終切り離しが中央近くにみられる。9の切り離しは、ロクロの回転が遅く一定でなかったためか、糸切り痕が小さく屈曲している。

甕形土器（第37図1～5） いずれもロクロ使用の甕（甕B類）で酸化炎焼成によるものである。1～3は巻き上げ後体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされている大形の甕（甕BⅠa類）である。1と2は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整以前につけられた叩き目痕を残す。これらの甕の体部外面の調整は上方向への篋削りであり、全体に器壁が薄い。4と5はロクロ成形の小形甕（甕BⅠb類）で、切り離しは回転糸切りである。再調整にみられない。4の口縁部は短くて強く外反し、口唇部を上方に挽き出し、体部にほとんど脹らみをもたない。

鉄器（37図6） 柄の方を欠く鑿と思われる。現存長は4.5cm、刃部幅1.7cmで、柄の近くは中空を呈する。

鉄滓は4個出土しているが、いずれも小形で軽く、表面は粗雑で多孔質のものである。総重量は25gである。

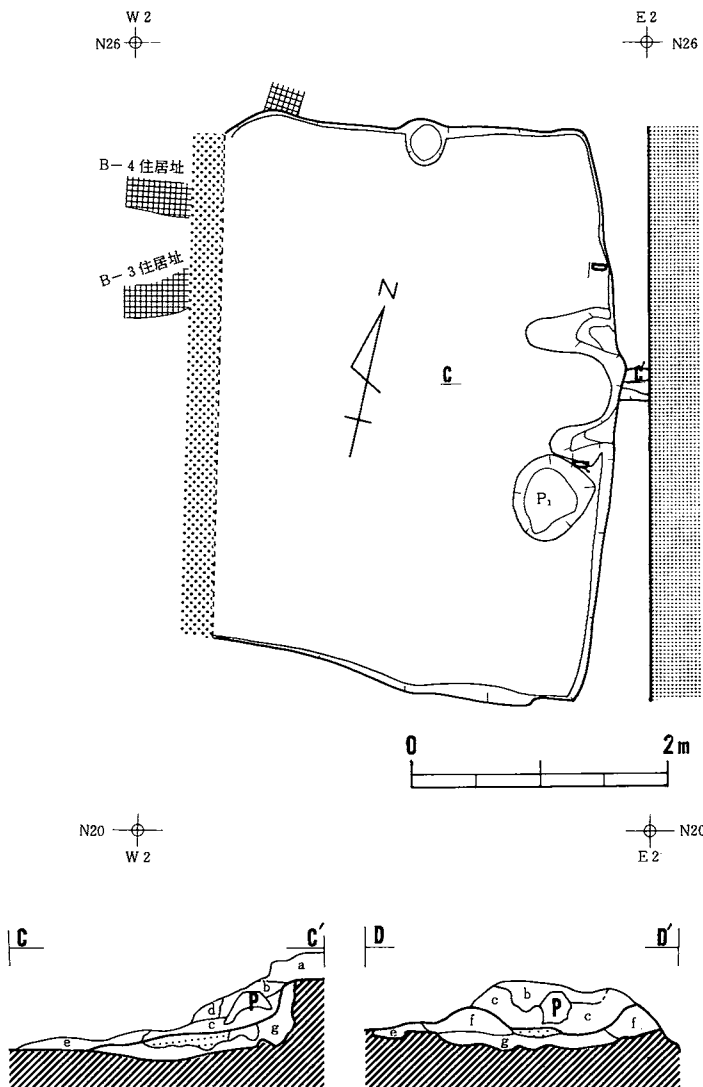
#### B-2住居址

#### 遺構（第3図・写真図版4a・5ab）



4.4m±×3.0m±の規模をもつ。検出面での形状把握に間違いがあって西壁を壊わしたが、床面は把握でき、長方形の形状を示すことが確認された。主軸はほぼ東西方向にあり、横に長い。埋土の主体を占めるのは明黄褐色シルト層で、下部ほど粒状の焼土・炭化物の包含が多い。土層断面図の作成は省略し、Field Cardへその性状を記載して代用とした。壁高は東壁で37cm±を計る。床面は全体に柔かく、埋土との境界も明瞭ではなかった。

床面上に検出されたピットはカマド傍に検出されたP<sub>1</sub>(径65cm±・深さ20cm±)だけである。P<sub>1</sub>は焼土が優占する赤褐色土層を埋土とし、出土土器も多い。柱穴の存在は不明である。



カマドは東壁中央部に位置する。天井部が崩壊した焼土粒包含の黄褐色シルトで全体を覆われ、その上には一括品を含む多数の土器が分布していた。カマド幅115cm±・燃烧部幅55cm±を計る。袖部は、埋土とは明瞭に区別できるシルトで構築され、残存状態は良好である。燃烧部の中央には、支脚として2個の甕形土器が並んで倒置されている。煙道部は燃烧部より急激に立

第3図 B-2住居址実測図

ちあがり東へのびるが、大部分が調査区域外にあって調査できなかった。

この住居址は、B-3住居址・B-4住居址の床面下に検出され、これらに先行するものである。けれどもB-1住居址との新旧関係は明らかにできなかった。

#### 出土遺物（第38・39・40図・写真図版29・30）

当住居址の遺物はすべて土器で、カマド内及びカマド周辺部出土のものが大半を占める。器種は坏・甕・壺で構成される。

坏形土器（第38図1・2） 1は巻き上げ成形であり、ロクロ不使用の平底坏（坏AⅡ類）である。外面は口縁部に横撫で、体部には粗い篋削り調整が施こされているが、部分的に3条の巻き上げ痕が観察される。底部は僅かに上底で、不定方向への篋削り調整がみられる。内面は篋磨き後黒色処理されたものと思われるが、2次的加熱により現在は赤褐色を呈する。器形は体部下端にやや丸味をもつが、口縁部にかけて直線的に外傾する。2はロクロ成形、酸化炎焼成の坏で、内面に篋磨きと黒色処理が施こされている。体部下端と底部全面に手持ち篋削りによる再調整が施こされているため、切り離しは不明である（坏BⅠC類・H<sub>1</sub>手法）。器形は体部から口縁にかけて内弯気味の立ちあがりをもち、口唇部近くで僅かに外反する。

甕形土器（第38図3～7・第39図1） ロクロ不使用・ロクロ使用いずれの甕もみられる。3～7は巻き上げ成形で、調整にもロクロは使用されていない。3は口縁が緩く外反し、肩部に沈線状の微かな段を有し、体部にほとんど脹らみをもたない長胴の甕（甕AⅠ類）である。調整は口縁部が内外面共横撫で、体部外面は刷毛目調整後一部篋磨き、内面は撫で調整がみられるが、粗く巻き上げ痕が明瞭にみられる。4は直立気味に外傾する口縁部をもつ長胴甕で、口縁部は内外面とも横撫で、体部外面は上方向への篋削り、内面は縦方向への撫で調整が施こされている。5は大きく外反する口縁部をもつ長胴甕で、肩部に微かな稜線をもつ。体部は口縁部に比べ細く、下半に僅かな脹らみをもつ。調整は内外面共に口縁部は横撫で、体部外面は上方向への篋削り調整、内面には撫でが部分的にみられるが、巻き上げ痕を多く残す。6は緩く外反する口縁部をもつ長胴甕で、肩部に微かな稜線をもつ。調整は口縁部は横撫で、体部は内外面とも撫で調整が施こされているが、内面に巻き上げ痕がみられる。7はロクロ不使用の小形甕（甕AⅡ類）である。口縁部は僅かに内弯気味に立ちあがり、頸部は緩く曲る。全体に器面が荒れていてはつきりしないが、口縁部は横撫で調整、体部外面篋削り、内面上半は刷毛目痕が僅かにみられる。第39図1は巻き上げ成形後、体部上半に叩き目調整、体部上半から口縁部にかけてロクロ調整が施こされた酸化炎焼成の大形甕（甕BⅠa類）である。器形は口縁部が外傾し頸部は緩く屈曲し、体部中央やや上に最大径をもつ。体部外面に僅かに篋削り痕が認められる。

壺形土器（第39図2・第40図1） いずれも酸化炎焼成で、ロクロは使用されていない。第

39図2は「く」の字状に外反する口縁部をもち、体部が球胴形を呈する。調整は口縁部が横撫で、外面は不定方向への篋撫で、内面には撫で調整と思われるが、部分的に巻き上げ痕を残す。第40図1は丸味をもって外反する口縁部をもち、肩部に僅かな段を有する。口縁部は内外面とも横撫で調整である。

### B-3住居址

#### 遺構(第4図・写真図版4b)

35m±×3.3m±の規模をもち、ほぼ正方形の形状を示す。重複する住居址の床面下に存在することなどから、東壁と南壁の部分を掘りすぎる間違いがあった。主軸は東西方向にある。埋土は粒状の炭化物を包含する褐色砂質シルトで構成され、単層であることから土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で17cm±を計る。床面は全体に柔かく、カマド南西部を中心とした広範囲の床面上には炭化物の分布が著しい。

床面上に検出されたピットは、P<sub>1</sub>(径34cm±・深さ43cm±)・P<sub>2</sub>(径42cm±×32cm±・深さ36cm±)・P<sub>3</sub>(径30cm±・深さ15cm±)・P<sub>4</sub>(径25cm±・深さ16cm±)・P<sub>5</sub>(径35cm±・深さ55cm±)・P<sub>6</sub>(径20cm±・深さ20cm±)・P<sub>7</sub>(径20cm±・深さ33cm±)などである。それのうちP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>などが柱穴を構成するが、南東隅付近で対応するであろう柱穴は確認できなかった。

カマドは東壁南寄りに位置する。削剝を受けていたうえに調査段階で一部に掘りすぎがあって上部構造は明らかでない。燃烧部は壁外へやや張りだす形態をもち、径60cm±×35cm±の焼成面が確認された。長さ120cm±で東にのびる煙道部の底面はほぼ水平で、煙出し部には、煙道底面から深さ30cm±のピットが掘りこまれている。

この住居址は4棟の住居址と重複する。B-1住居址とB-2住居址・C-1住居址のいずれよりも新しく、この住居址の埋土上に構築されたB-4住居址には先行するものである。

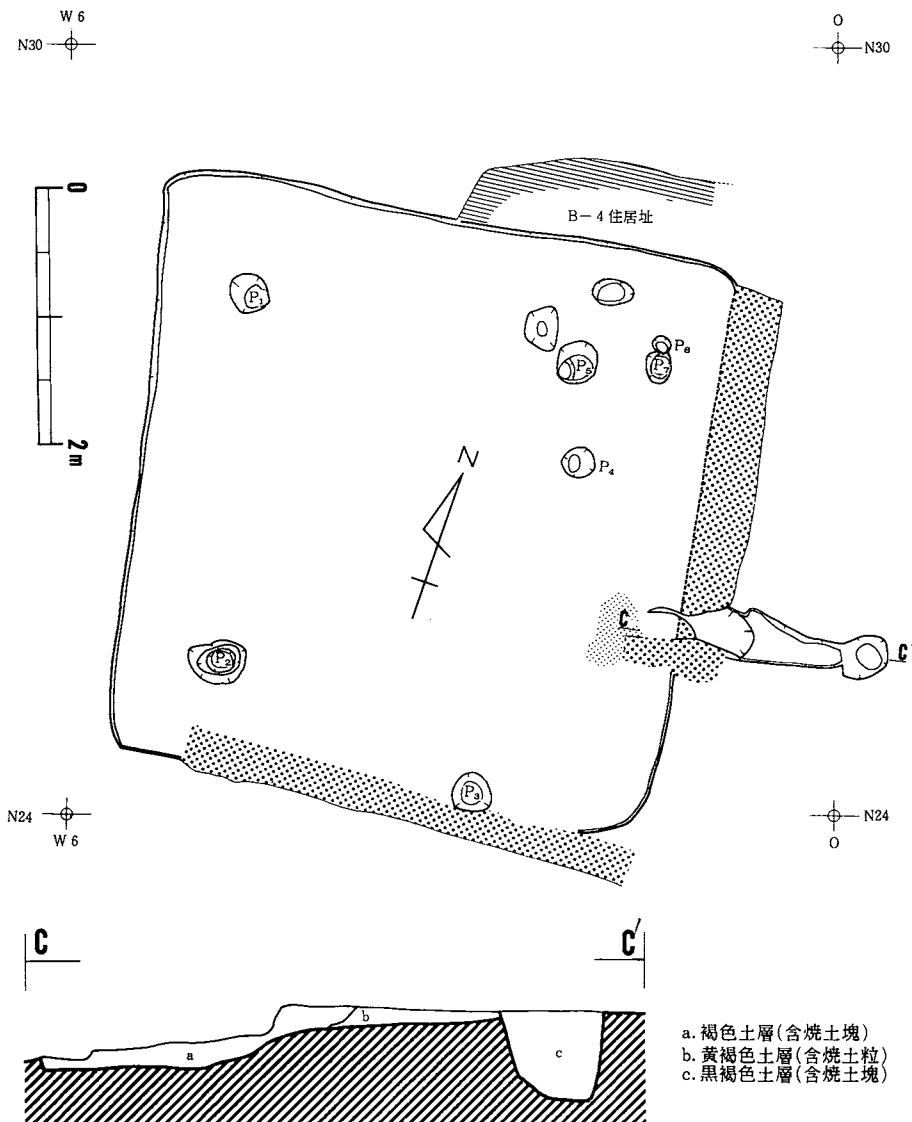
#### 出土遺物(第40図・写真図版38a)

当住居址の遺物は量的に多くないが、各種の遺物が出土している。土器の器種は坏と甕だけで構成され、土器以外では鉄器、砥石、土錘、足方が出土した。床面がはっきりしなかったため、埋土下部として取り上げた遺物も含めて図化した。

環形土器(第40図2~4) いずれもロクロ成形で酸化炎焼成の坏である。2は回転糸切り後体部下端にのみ横方向への手持ち篋削りが施こしてある。内面の器面が荒れていて磨きが無明瞭でないが、篋磨き後黒色処理されたものと思われる。(坏B1b類・H<sub>0</sub>手法)体部は外傾し、口径に比べ器高が低い。3はロクロ成形の坏であるが、底部を欠くため、切り離し技法、再調整の有無は不明である。内面に黒色処理が施こされている。4はロクロ成形後体部下端のみに部分的な再調整がみられる。底部は回転糸切りで無調整。内面は篋磨き後黒色処理(坏B1b類

H<sub>6</sub>手法)。体部は外傾する。この他、当住居址の埋土内出土の坏で底部の観察出来る破片は9点ある。すべてロクロ成形であり、回転糸切り無調整(坏B Ia類)のもの4点、切り離し不明で手持ち篋削りによる再調整の施こされているもの(坏B Ic類・H手法)4点、回転糸切りで外面共無調整で還元炎焼成(坏B II類)のもの1点が出土している。

甕形土器(第40図5~7) ロクロ不使用(甕A類)・ロクロ使用(甕B類)いずれもみられる。5はP<sub>4</sub>内出土のロクロ不使用の甕で、口縁部は外反し、頸部は緩い「く」の字状のカーブを描く。調整は口縁部が横撫で、体部外面は篋削り、内面は刷毛目調整がみられる。6と7は



第4図 B-3 住居址実測図

ロクロ成形の小形の甕（甕B I b類）でロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残す。口縁部は短く外反し、口唇部は上方に挽き出している。

壺形土器（第40図8） ロクロ不使用で酸化炎焼成の壺である（壺B I b類）。口縁部は短く外反し、体部は球胴形の脹らみをもつ。器面が荒れていて明瞭でないが、口縁部に横撫で、体部には不定方向への撫で調整がみられる。この他に内外面に平行の叩き目のみられる還元炎焼成の壺（壺B II類）の破片が2点出土している。

鉄器（第40図9） 鋒及び基部端を欠く刀子である。現存長11.5cmで、身幅は中央付近で1.1cm、茎幅は0.5cmを計る。

砥石（第40図11） 現存長11cm、厚さ2.5cm±の平滑な砥石であり、四面共使用痕が認められる。石質は流紋岩である。

土錘（第40図10） 中央部に脹らみをもつ、管状の土錘で、両先端を欠く。現存長3.1cmで、最大幅は21cmを計る。

足方（第40図12・13） 土錘と共に出土している。長さ7cm±、幅3cm±、厚さ2cm±の細長い川原石で、人工的な加工は認められない。いずれも石質は流紋岩である。

#### B-4 住居址

##### 遺構（第5図・写真図版5c）

4.3m±×2.9m±の規模をもち、長方形の形状を示す。主軸はほぼ東西方向にあり、横に長い。埋土は、住居址中央部を中心に南北2.0m±×東西1.4m±・層厚5cm±で黒褐色土層が分布する以外は、黄褐色砂質シルト層で構成される。層厚が薄いことからField Cardに略測をおこない、土層断面図の作成は省略した。壁高はカマド付近で5cm±を計る。床面の状態は明らかではない。それは、埋土と床との区別が困難で、カマド周辺の一部をのぞいた床を深さ5cm±掘り下げてしまったためである。

住居址内には、P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ14cm±）・P<sub>2</sub>（径30cm・深さ30cm±）・P<sub>3</sub>（径54cm±×42cm±・深さ13cm±）などのピットが検出されたが、柱穴の存在は不明である。1号カマドの南側にあるP<sub>3</sub>は、粒状の焼土・炭化物を多く包含する黒褐色シルト質土を埋土とし、その位置や形状、規模などからは、1号カマドとの同時存在が考えられるピットである。

この住居址には2基のカマドが存在する。2基は共に一括される赤褐色焼土に覆われ、その上面には完形品・一括品を含む多数の土器が分布する。1号カマドは東壁南寄りに位置する。上部構造は残存せず、50cm±×30cm±の不整形な広がりをもつ燃焼部の焼成面が確認されただけである。長さ120cm±の煙道部はかなり削剝を受けている。煙道底面は凹凸があるものの、ほぼ水平にのびている。2号カマドは東壁ほぼ中央部に位置する。径35cm±の燃焼部の焼成面が存在するだけである。2基とも上部構造を消失しているうえに埋土とか燃焼部の高低差・掘り

方などに先後関係を示す差異は認められない。けれどもP<sub>3</sub>の存在からは、1号カマドが時間的に後に存在した可能性が考えられる。

この住居址は、B-2住居址・B-3住居址・C-1住居址などと重複し、それらのいずれよりも新しいものである。

### 出土遺物（第41図・写真図版30）

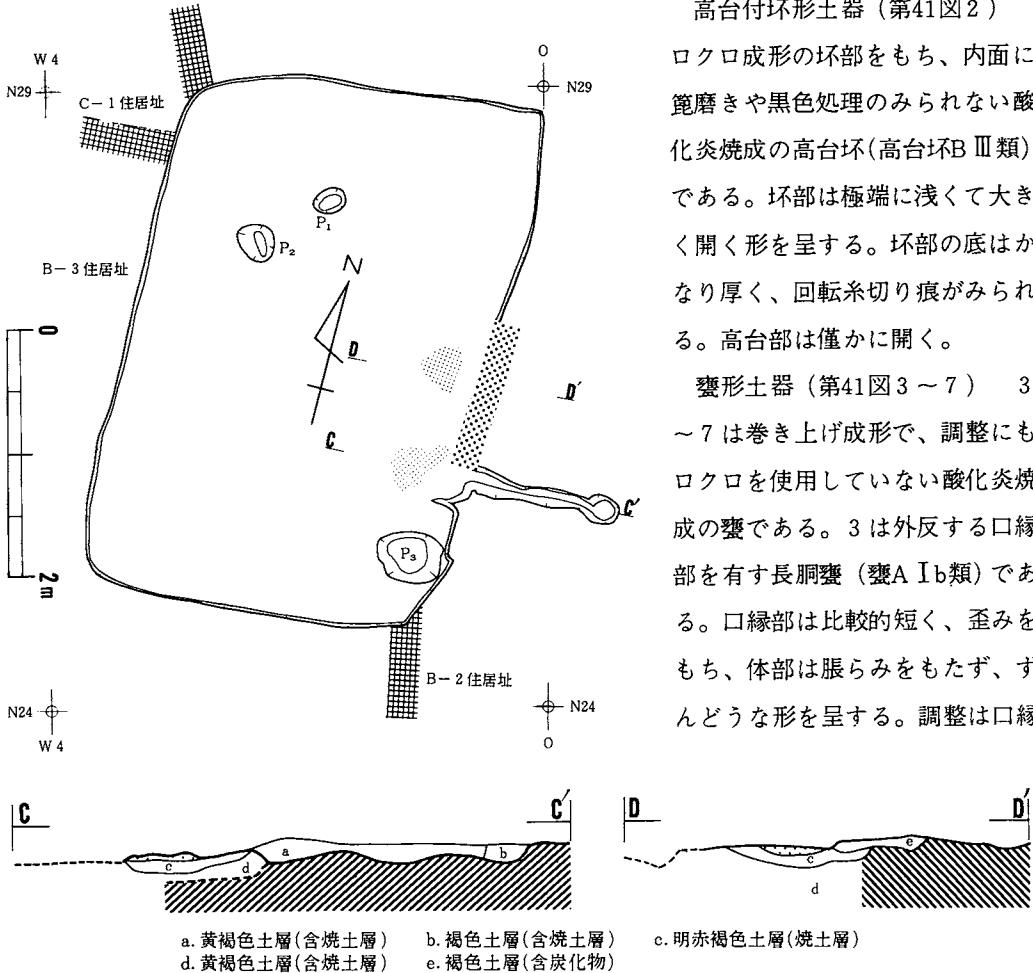
遺物は土器だけであり、カマド内及びカマド周辺部より出土したものが大半を占める。器種は坏・高台坏・甕で構成される。

坏形土器（第41図1） ロクロ成形で、内外面ともに、再調整のみられない酸化炎焼成の坏（坏BⅢ類）である。底部切り離しは回転糸切りである。器形は僅かに丸味をもって外傾する体部を有するが、口径に比べ器高がかなり低く皿状を呈する。

### 高台付坏形土器（第41図2）

ロクロ成形の坏部をもち、内面に篋磨きや黒色処理のみられない酸化炎焼成の高台坏（高台坏BⅢ類）である。坏部は極端に浅くて大きく開く形を呈する。坏部の底はかなり厚く、回転糸切り痕がみられる。高台部は僅かに開く。

甕形土器（第41図3～7） 3～7は巻き上げ成形で、調整にもロクロを使用していない酸化炎焼成の甕である。3は外反する口縁部を有す長胴甕（甕AⅠb類）である。口縁部は比較的短く、歪みをもち、体部は脹らみをもたず、ずんどうな形を呈する。調整は口縁



第5図 B-4住居址実測図

部に横撫で、体部外面は下方方向への篋削り、内面には篋撫で調整がみられるが、全体に粗い調整である。5と6は極端に短い口縁部をもち、体部との境いが明瞭でなく、体部に脹らみをもたないずんどうな形を呈する。口縁部の調整には横撫でもみられるが、指で折り曲げただけの部分もあり、かなり粗い調整である。体部は内外面とも篋撫で調整で、比較的器壁が厚く、胎土も粗い。6は焼成や調整から上記のロクロ不使用の甕の底部と思われる。粗い篋削りがみられ、底部が厚い。7は巻き上げ後体部上半から口縁部にかけてロクロによって調整されている酸化炎焼成の甕（甕B Ia類）である。口縁部は極端に短くて、外反する。体部は緩く脹らみ最大径を中央近くにもつ。

## C 区

### C-1 住居址

#### 遺 構（第6図・写真図版6a）

重複する遺構に住居址中央部から南側の一部を切られているが、3.7m±×3.4m±の規模をもち、正方形の形状を示す住居址である。主軸はほぼ北西～南東方向にある。埋土を構成するのは黄褐色砂質シルト層で、下部ほど粒状の焼土・炭化物を多く包含する。単層であることから、Field Cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で7cm±を計る。床面は全体に柔かく不明瞭である。

床面上には、P<sub>1</sub>（径60cm±・深さ14cm±）・P<sub>2</sub>（径50cm±・深さ18cm±）が検出された。カマドの東側にあるP<sub>2</sub>の埋土は中部に層厚5cm±の焼土層をはさんだ上下にシルト層が堆積する。カマド付近の床面上に分布する焼土粒や炭化物粒がこのピットの上面にも認められることや床面から出土する土器がやはりピットの上面にも分布することから、廃棄後に意図的に埋め戻されたことが考えられる。P<sub>1</sub>についてはField Cardに記載がなく、詳細は不明である。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置する。カマド幅95cm±・燃焼部幅30cm±を計る。袖部はシルトで構築されている。精査時に一部掘りすぎがあったが、両袖部の先端には甕形土器の上半部を倒置させ、また左袖部の肩部には礫を配置させて補強していた。煙道部は190cm±の長さをもち、底面は先端へゆるやかに下がってゆく。煙出し部はC-2住居址の床面下に存在するが煙道底面より深さ16cm±のピットを掘りこんでいた。

この住居址はB-3住居址・B-4住居址、さらにC-2住居址と重複し、いずれの住居址にも先行するものである。

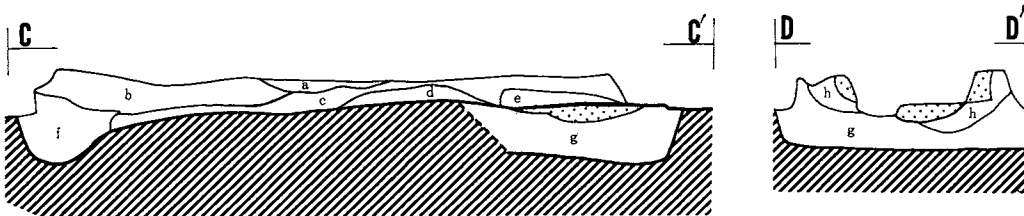
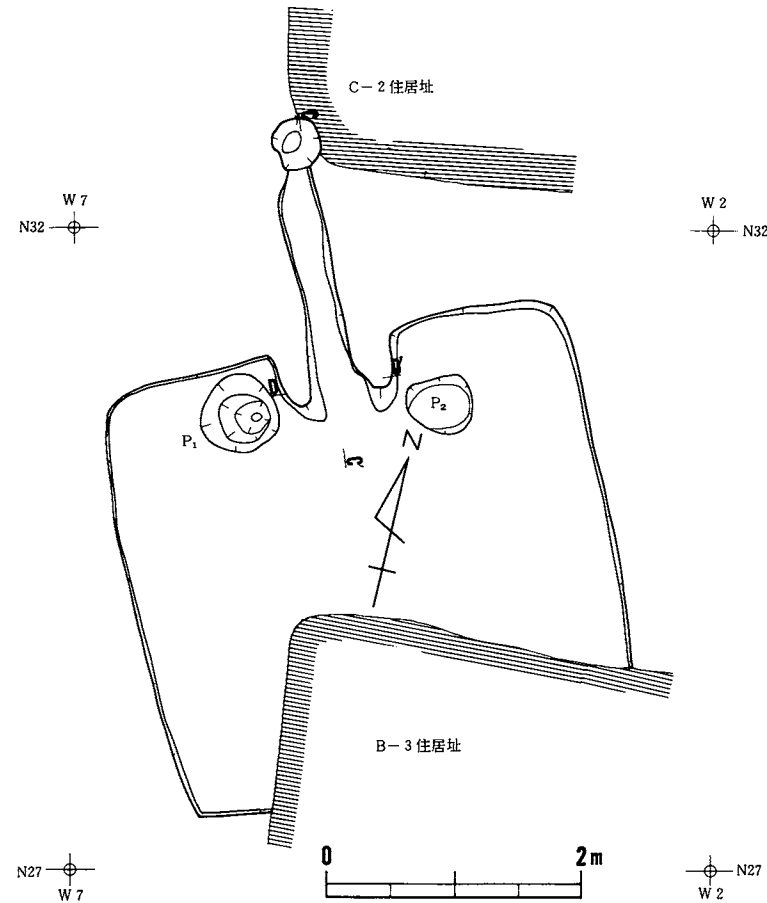
#### 出土遺物（第42・43図・写真図版30・31）

当住居址からは土器と鉄器が出土しており、床面直上とカマド内出土のものだけを図化した。

土器はロクロ未使用の土器だけで構成され、坏と甕がみられる。

坏形土器（第42図1～6）すべてロクロ未使用で、巻き上げ成形による坏（坏A類）である。1は平底風の丸底坏で、口径に比べ器高が低く、体部中位に明瞭な段を有し、上半は内弯気味の立ちあがりをもつ。器面が荒れていてはっきりしていないが、口縁部は横撫で後篋磨き

調整、体部下半から底部は篋削り後篋磨きが施こされている。内面は篋磨き後黒色処理されている。2も平底風の丸底を呈するが、口径に比べ器高が高く、体部中位に沈線による区画がみられる。器形は全体に内弯気味の立ちあがりをもつが、口唇部近くで微かに外反する。調整は外面上半が横撫で後篋磨き、下半から底部にかけては篋削り後部分的に篋磨き、内面は篋磨き後黒色処理されたものと思わ



- a. 黄褐色土層(含焼土粒)
- b. 褐色土層(含焼土粒)
- c. 褐色土層(含焼土粒・炭化物)
- d. 黄褐色土層(含焼土粒)
- e. 黄褐色土層(含焼土粒)
- f. 黄褐色土層(含焼土・炭化物)
- g. 黄褐色土層(カマド埋り方埋土)
- h. 明黄褐色土層(袖部構築土)

第6図 C-1住居址実測図



れる。ただし内面は2次の加熱により、現在は橙色を呈する。3と4は平底を呈する坏で、口径に比べ器高が高く、体部中に雑な沈線による区画をもつ。器形は体部下端に丸味をもつが、口唇部に向って直線的な立ちあがりをもつ。外面上半は横撫で後篋磨き調整、下半から底部にかけては篋削り後一部篋磨き、内面は全体に篋磨き後黒色処理が施こされている。5は底部を欠き、体部上半がやや内弯気味の立ちあがりをもつが、器形は2に近い形のものと思われる。6は口径が8.9cmと小さいが、器高が口径の約2/3あり器形は内弯し、碗状を呈する坏である。体部中央に部分的にであるが、雑な沈線による区画があり、底部は平底を呈する。内外面とも篋磨き調整を主体とするが、体部下端及び底部には篋削り痕がみられる。内面は黒色処理されている。

甕形土器(第42図7・8、第43図1～4) すべて巻き上げ成形でロクロ未使用の長胴甕(甕AⅠ類)である。7は口縁部が緩く外反し、肩部に僅かな段をもつかなり長い長胴甕である。口縁部は内外面とも横撫で調整、体部外面は縦方向の撫で痕がみられる。内面は横方向の撫で調整がみられるが、部分的に巻き上げ痕を残す。8は口縁部が緩く外反するが、肩部に段をもたず緩いカーブで体部に続く。口縁部は横撫で、体部外面は縦方向の撫で、内面は横方向への撫で調整が行なわれている。第43図1は強く外反する口縁部をもつ長胴甕である。調整は口縁部が横撫で、体部外面は粗い篋撫で、内面は刷毛目調整が施こされている。第43図2は口縁部が強く外反し、肩部に僅かな段を有する、やや器高の低い長胴甕で、体部の最大径を体部上半にもつ。調整は内外面とも撫でによる調整である。第43図3は緩く外反する口縁で、頸部に沈線状の微かな稜線をもつ。4は体部下半の土器で、篋削り調整が施こされている。底部も不定方向の篋削りがみられる。

鉄器(第43図5・6) 5は全長16.7cmの長頸鎌である。鎌身は長さ2.6cmの鋭利な三角形を呈した細根式で、篋被と茎との区画は認められず長さは14.1cmを計る。鎌身の断面形は三角形の鋭利な形を呈し、篋被、茎の断面は方形を呈する。西壁際より出土した。6は現存長9.3cmの細長い棒状の鉄製品であるが、長頸鎌の篋被あるいは茎部に類似している。南西コーナーより出土した。

## C-2 住居址

### 遺構(第7図・写真図版6b)

4.5m±×3.7m±の規模をもち、やや長方形の形状を示す。主軸はほぼ南北方向にあり、横に長い。埋土は褐色シルトの単層で占められるため、Field Cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で15cm±を計る。床面は全体に柔かく不明瞭であった。

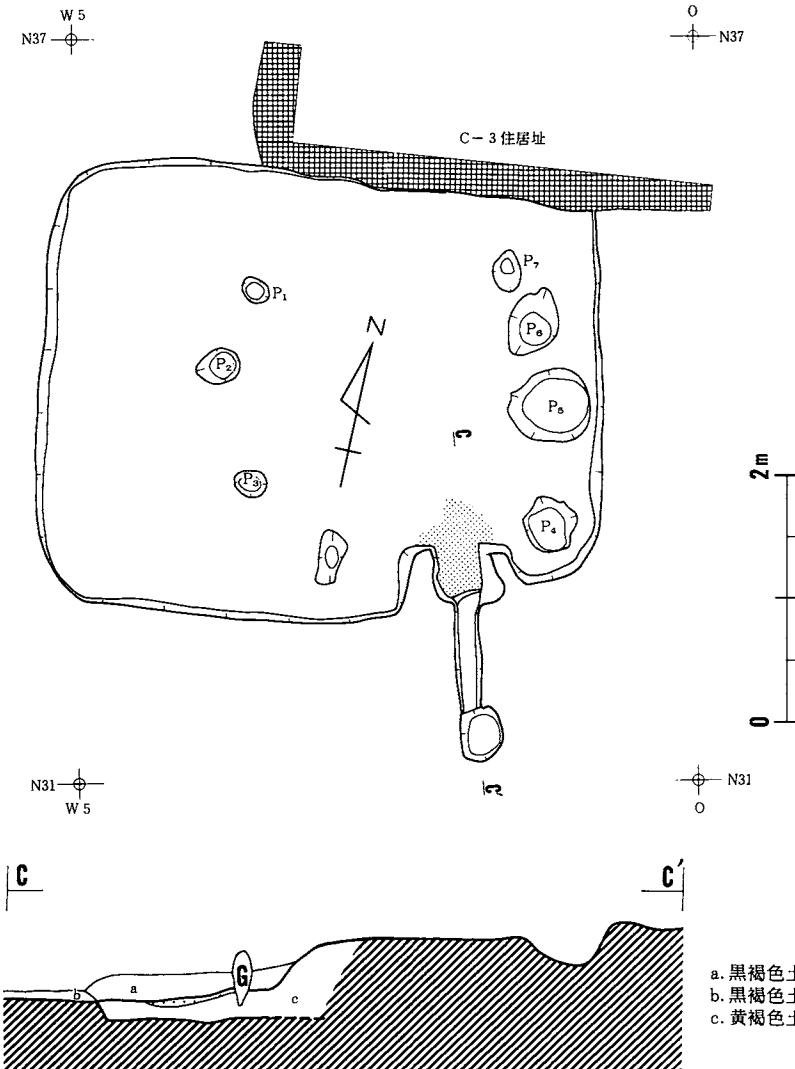
床面上には、P<sub>1</sub>(径20cm±・深さ10cm±)・P<sub>2</sub>(径35cm±・深さ14cm±)・P<sub>3</sub>(径25cm±・

深さ16cm±)・P<sub>4</sub>(径45cm±・深さ9cm±)・P<sub>6</sub>(径60cm±・深さ13cm±)・P<sub>8</sub>(径60cm±×40cm±・深さ10cm±)・P<sub>7</sub>(径35cm±×20cm±・深さ14cm±)などのピットが検出された。カマドの東にあるP<sub>4</sub>は褐色シルトを埋土とし、多くの焼土粒や炭化物粒・土器を包含する。柱穴は不明である。

カマドは南壁東寄りに位置する。天井部は崩壊しているが、シルトで構築された袖部の残存状態は良好である。カマド幅95cm±・燃烧部幅35cm±を計る。一部に掘りすぎはあったが、左袖部の先端には、10cm±~15cm±大の2個の礫が補強用に埋置されている。燃烧部には長径25cm±の礫の一部を埋置させて支脚としていた。煙成面の一部が袖部の下にも広がり、上部構造

の再構築を示すと考えられる。煙道部は南へ130cm±のび、底面はほぼ水平である。煙出し部には、煙道底面から深さ12cm±のピットが掘りこまれている。

この住居址は、北東隅付近ではC-3住居址の床を掘りこんで構築され、C-1住居址の煙出しと重複する部分には貼り床していたことから、もっとも新しいことが確認された。



第7図 C-2住居址実測図

### 出土遺物（第43・44図・写真図版31）

当住居址の遺物は土器だけであり、カマド内及びカマド周辺の床面上より出土したものが大半を占める。器種は坏・高台坏・甕で構成される。

坏形土器（第43図7～11） すべてロクロ成形によるものである。7～9は酸化炎焼成で、内面に篋磨き後黑色処理の施こされた坏で、切り離しは回転糸切りによる（坏B Ia類）。いずれも口径・器高とも大きく、内弯気味の立ちあがりをもつ。7だけは口唇部近くで僅かに外反する。10と11は酸化炎焼成であるが、篋磨き、黑色処理等の2次調整のみられない坏（坏B III類）である。切り離しは回転糸切りである。10は直線的に外傾する体部をもつ。11は小形であり。しかも口径に比べ器高が低く皿状を呈し、ロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残している。

高台付坏形土器（第44図1～3） いずれも酸化炎焼成によるものであるが、坏部内面に篋磨きや黑色処理は施こされていない（高台坏B III類）。1と2の坏部は外反気味に開く。高台部は全体に丸味をもって、僅かに開き、台部高 1.3cmを計る。3は僅かに内弯気味の坏部を有し、坏部切り離しの回転糸切り痕がみられる。高台部は丸味をもって開き、台部高 1.2cmを計る。

甕形土器（第44図4～7） すべてロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の甕で、口縁の短いのが特徴である。4は外傾する口縁部をもち、頸部は「く」の字状を呈し、体部中央に脹らみをもつ。口縁部にロクロ調整による凹凸を明瞭に残し、体部には下方向への篋削りがみられる。5～7は短く、しかも緩く外反する口縁部をもつ。体部上半から口縁部にロクロ調整され、全体に器壁が厚い。5は体部外面に下方向への篋削り調整、内面に横方向への篋撫で調整がみられる。

### C-3 住居址

#### 遺 構（第8図・写真図版7a）

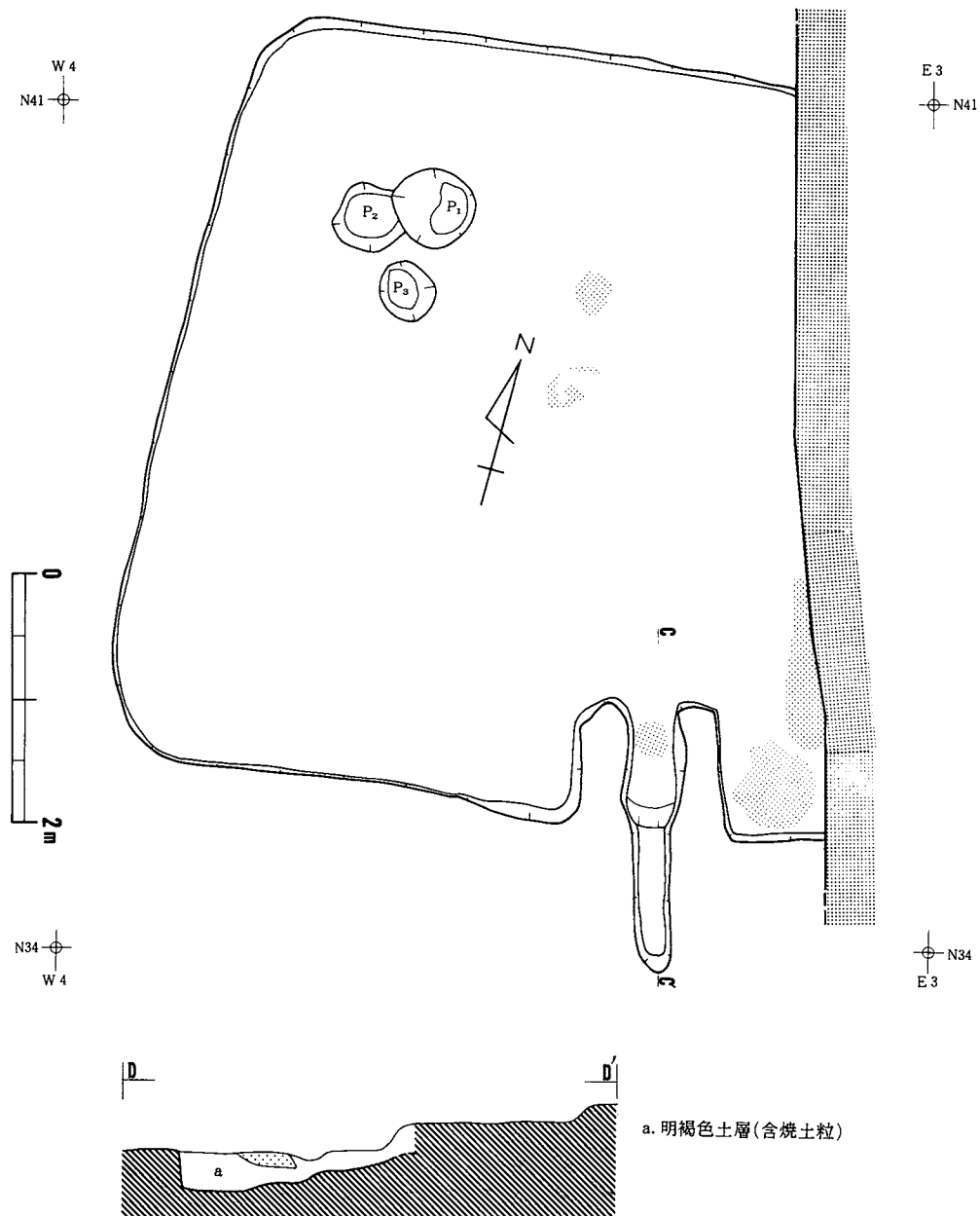
東側の一部が調査区域外にあるため、規模・形状とも詳細は不明であるが、南北で 6.1m±の長さをもつ住居址である。主軸はほぼ南北方向にある。埋土は、カマド西側付近の上部に黒褐色土層が分布する以外はシルトが優占する褐色土層が主体を占める。Field Cardにその状態と性状を記載し、土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で20cm±を計る。床面は全体に柔かい。

床面上には、P<sub>1</sub>（径65cm±・深さ19cm±）・P<sub>2</sub>（径55cm±・深さ7cm±）・P<sub>3</sub>（径50cm±・深さ8cm±）などのピットが検出されたが、柱穴の存在は不明である。

カマドは南壁の東寄りに位置すると推定される。カマド幅 120cm±・燃烧部幅45cm±を計る。袖部はシルトで構築される。煙道部の長さは 115cm±で、底面はほぼ水平である。カマドの東側には径70cm±の現地性焼土がみられる。焼土下に掘り方が存在することや調査区域外との境

界部分で最近の削剝があった際に煙道部を消失したことが考えられることから、カマドの可能性をもつ。なお、その焼土の北側床面上にも広範囲に焼土が分布する。異地性の焼土であり、また、調査区域外に広がっているため、規模や性格などの詳細は不明である。

この住居址は、重複するC-2住居址に切られている。



第8図 C-3住居址実測図

### 出土遺物（第45図・写真図版38a）

当住居址は、土器の出土量が比較的少ない。器種は坏・高台坏・甕等で構成され、カマド周辺部より出土したものが大半を占める。土器以外の遺物は、鉄器・鉄滓・砥石・土錘・足方等各種のものが出土している。

坏形土器（第45図1～3） すべてロクロ成形で、内外面共再調整のみられる酸化炎焼成の坏（坏B Ic類）である。1は底部全面を不定方向への手持ち篋削り調整（H<sub>3</sub>手法）が施こされているため、切り離し技法は不明である。内面は篋磨き後黒色処理されている。大形の坏で、体部下半は丸味をもって立ちあがり、上半は外傾する。2と3は体部下端と底部全面に手持ち篋削り（H<sub>1</sub>手法）による再調整が施こされており、切り離しは不明。いずれも内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。2はやや大形で、僅かに丸味をもって外傾する。3の体部も僅かに丸味をもって外傾する。

高台付坏形土器（第45図4） 坏部は大きく外傾し、口唇部近くで急に外反する。内面は篋磨き後黒色処理されたものであろうが、二次的加熱により橙色を呈する。高台部は0.4cmと短く、断面が長方形を呈する。

甕形土器（第45図5・6） どちらもロクロを使用した酸化炎焼成の甕（甕B I類）である。5は巻き上げ成形後、体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こした甕で、体部に篋削り調整がみられる。口縁部は外反し、体部に脹らみをもたない。6はロクロ成形の小形甕で、口縁部は短かくて強く外反し、口唇部を上方に挽き出す薄手の土器である。

筒形土器（第45図7） 巻き上げ成形で、体部が筒状を呈する酸化炎焼成の土器である。体部外面には斜め方向への篋削りと体部下端には横方向の篋削りがみられる。内面は撫で調整であるが、巻き上げ痕を多く残している。

鉄器（第45図8・9） 8は現存長が10.2cmで、径が0.3cmと細長い棒状を呈する鉄器である。断面は丸味をもつ方形で、両端とも欠損している。性格は不明である。9は現存長2.8cmであり、両端とも欠損している。断面は楕円を呈す。刀子の破片とも考えられるがはっきりしない。

鉄滓はカマド東より多く出土した。12個体あり約100gの重量があり、いずれも土との焼結状態を呈している。

砥石（第45図11） 現存長7cmで両端を欠く。断面は不整五角形を呈し、5面とも長軸方向への使用痕がみられ、うち2面に数条の条溝が認められる。石質は流紋岩である。

土錘（第45図10） 中央部に僅かな脹らみをもつ管状の土錘で、両先端を欠く。現存長は、4.4cmで最大幅は1.9cmである。

足方（第45図12～25） 全部で17個、土錘とともにまとまって出土した。長さ5cm±～8cm

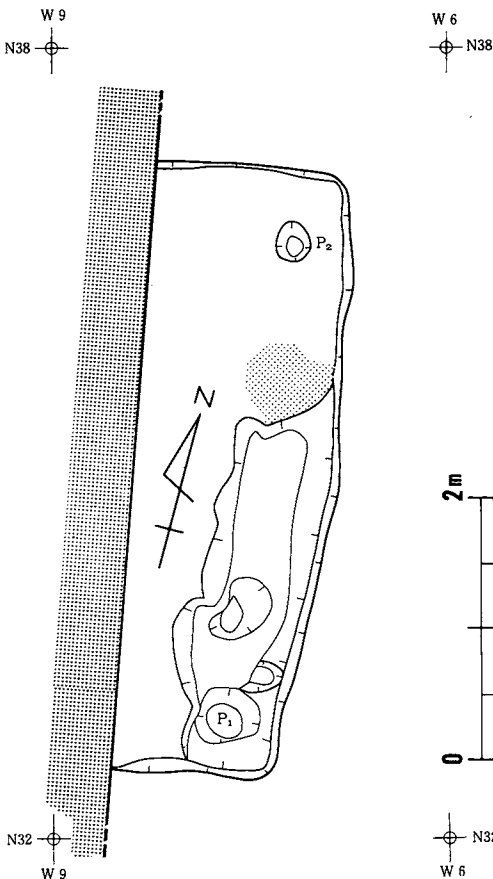
土、幅2cm土の似かよった形態をもつ川原石で、加工は加えられていない。ただし紐掛に便利な鉤状を呈するものが多い。石質は安山岩・流紋岩・珪岩等がある。

### C-4 住居址

遺構 (第9図・写真図版7b・8a)

この住居址の大部分が調査区域外にあって約 $\frac{1}{2}$ が調査できたにすぎず、規模・形状の詳細は不明である。南北での長さは4.6m土を計る。埋土を構成するのは褐色砂質シルト層で、下部では焼土を混えた炭化物粒が広範囲に分布する。ほぼ単層であるため、Field Cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で12cm土を計る。床面は全体に柔かく不明瞭である。

床面上にピットは検出されなかったが、床面を深さ10cm土掘りさげた段階でP<sub>1</sub>(径50cm土・深さ17cm土)・P<sub>2</sub>(径30cm土・深さ8cm土)および東壁沿いに溝状の掘り方が確認された。P<sub>1</sub>



第9図 C-4 住居址実測図

や掘り方の埋土は粒状の焼土・炭化物を多く包含した黄褐色～褐色シルトで、土器が少量出土する。P<sub>1</sub>は掘りこみ面が把握できなかったが、円形ピットであることや完形の鉢形土器・環形土器が出土していることから、床面上に存在した可能性が強い。

この住居址の東壁際北寄りの床面上には径70cm土・層厚10cm土現地性焼土があり、よく焼成を受けた硬い面をもつ。上部構造や煙道部が不明で、また部分的調査でもあったことからカマドとは断定できなかった。

#### 出土遺物 (第46図・写真図版31・32)

当住居址の遺物はすべて土器であり、P<sub>1</sub>内より出土したものが大半を占める。器種は坏・高台坏・鉢・甕で構成される。

環形土器 (第46図1～4) すべてロクロ成形によるもので、酸化炎焼成で黒色処理されたもの(坏BⅠ類)と還元炎焼成(坏BⅡ類)のものがある。1と2は体部下端と底部全面に回転篋削り調整の施こされた坏で、切り離しは不明である。内面は篋磨き後黒色処理されている

(坏B Ic類・W<sub>1</sub>手法)。器形はいずれも内弯気味の立ちあがりをもつ。3は内面篋磨き後黒色処理され、底部は回転糸切り後、体部下端と底部周辺に回転篋削りによる再調整が施こされている(坏B Ib類・W<sub>2</sub>手法)。体部は内弯気味の立ちあがりをもつ。4はロクロ成形で還元炎焼成の坏(坏B II類)で、底部は回転糸切り無調整である。口径に比べやや器高が低く、体部下方に丸味をもち、上半は外傾する。

高台付坏形土器(第46図5) 坏部だけの破片である。体部は大きく外傾し、口唇部近くで外反する。内面に篋磨き後黒色処理されている(高台坏B I類)。

鉢形土器(第46図6・7) 6はロクロ成形で体部下端及び底部全面に回転篋削り調整が施こされている。体部は内弯気味の立ちあがりをもち、そのまま口唇部に至る。ロクロ挽きによる凹凸がみられ、薄手である。内面は上半が横方向、下半は放射状の篋磨きの後に黒色処理が施こされている。7も内面に篋磨き後に黒色処理されており、口縁部は短く外反し、口唇部を上方に挽き出しており、甕形土器の口縁部に似ている。体部は丸味をもってすばまる。

甕形土器(第46図8～10) 8と9はロクロ不使用の甕(甕A類)である。8は口縁部が緩く外反する大形の甕で、内面に一部巻き上げ痕がみられる。調整は不明である。9は小形の甕で、口縁部が短くて強く外反する。口縁部は横撫で、体部には撫で調整が行なわれている。10はロクロ成形で酸化炎焼成の小形甕(甕B Ib類)である。口縁部は、短く横に折れ口唇部を上方に挽き出しており、体部にはほとんど脹らみをもたない。

### C-5 住居址

#### 遺構(第10図・写真図版8bc)

4.0m±×3.8m±の規模をもつ。正方形を基本とした不整な形状を示す。主軸はほぼ南北方向にある。埋土は、中央部に径170cm±×130cm±・層厚3cm±で黒褐色土層が分布する以外暗褐色砂質シルト層が占める。層厚が薄いため土層断面図の作成は省略し、Field Cardに略測をおこなった。壁高は西壁で3cm±と低い。底面は全体に柔かく不明瞭である。

床面上にピットは検出されなかった。P<sub>1</sub>(径27cm±・深さ10cm±)・P<sub>2</sub>(径30cm±・深さ13cm±)・P<sub>3</sub>(径60cm±・深さ23cm±)などは、床面を深さ10cm±掘りさげた段階で検出された。カマドの西傍にあるP<sub>3</sub>の埋土は、上層が褐色砂質シルト、下層が粒状の焼土を多く包含した褐灰色シルトである。これら3個のピットは、埋土や形状・位置などの点から本来は床面上に存在したと考えられる。

カマドは南壁の南東隅寄りに位置する。シルトで構築された袖部の残存状態は良好である。袖部とカマド掘り方埋土とは区別できない。両袖部は先端部が開いた状態をもち、カマド幅115cm±・燃烧部幅45cm±～65cm±を計る。煙道部は検出されず存在の有無も含めて不明である。カマドの掘り方は、焚口部から燃烧部までを楕円形に掘りくぼめている。カマド断ち割りをお

こなった際に、その底面から弥生式土器の小形鉢形土器のほぼ完成品が出土した。

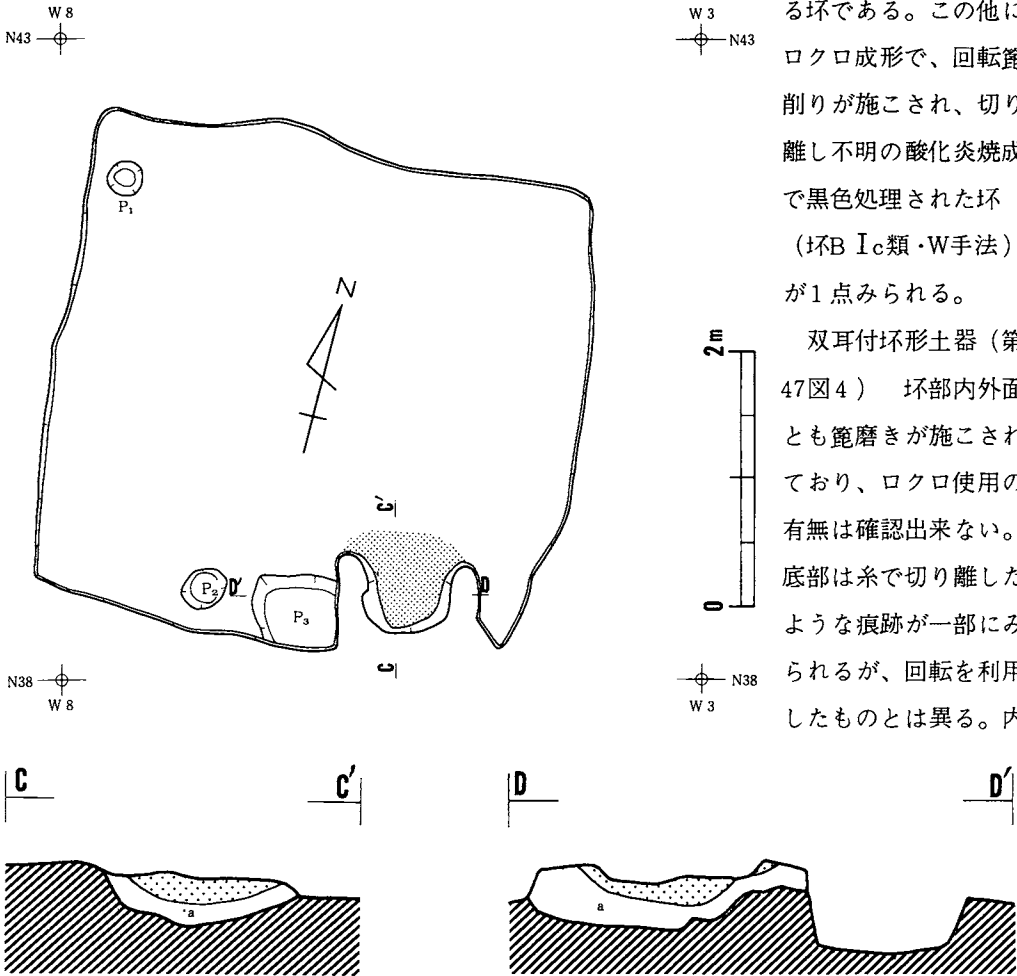
**出土遺物 (第46・47図・写真図版32)**

当住居址の遺物は、坏・双耳付坏・甕・壺等土器の他に鉄滓・砥石が出土している。土器はP<sub>3</sub>の他に住居址の中央部床面から多くの出土をみた。この他にカマド切断の際、カマド下より弥生式土器が出土した。

坏形土器 (第46図11・12・第47図1～3) 図化出来たのはすべてロクロ成形で還元炎焼成の坏 (坏B II類) である。底部はみな回転糸切りで、再調整はみられない。11は大形で、体部は直線的に外傾し、口唇部下で僅かに外反する。1・2・3の坏はいずれも灰白色を呈し、やや異なる糸切り痕をもつ。最終切り離しがいずれも中央部近くに来る。1・2は篋書きのみられる

坏である。この他にロクロ成形で、回転篋削りが施こされ、切り離し不明の酸化炎焼成で黒色処理された坏 (坏B Ic類・W手法) が1点みられる。

双耳付坏形土器 (第47図4) 坏部内外面とも篋磨きが施こされており、ロクロ使用の有無は確認出来ない。底部は糸で切り離したような痕跡が一部にみられるが、回転を利用したものとは異なる。内



a. 黄褐色土層 (袖部構築土掘り方埋土)

第10図 C-5 住居址実測図



面には黒色処理が施こされている。体部は直線的に外傾し、中位やや上に耳部が付けられている。耳部は欠損しているため、形状は不明であるが、断面は横長の方角を呈する。高台も欠損しており形状は不明である。胎土は緻密で、内面の磨きも丁寧である。

甕形土器（第47図5・6） 巻き上げ成形後体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の大形の甕（甕B Ia類）である。口縁部は外反し、口唇部を上方に挽き出しており、体部に脹らみをもたない。体部上半から口縁部の一部にロクロ調整以前の叩き目痕を残す。体部に下方向への篋削り痕がみられる。

壺形土器（第47図7） 灰白色を呈すロクロ調整の還元炎焼成の壺（壺B II類）である。口縁部は外反し、頸部は「く」の字状を呈し、体部は丸味をもって脹らみ、最大径を中央部附近に有す。頸部下に叩き目痕がみられ、その後ロクロ調整が施こされており、体部下半に篋削りがみられる。体部内面には横位と斜位のカキ目がみられる。

鉄滓は3個出土しており総重量20gを測る。いずれも外面が多孔質で軽い。

砥石（第47図8） 東壁際より出土した、現存長5.3cmの方角の砥石で、欠けている一面を除き5面とも使用痕が認められる。一面に数条の条溝がみられる。石質は凝灰岩である。

弥生式土器（第47図9） カマド切断の際単独で出土したものである。粗製の小形鉢形土器で、擦消技法がみられる。体部はやや外反気味で体部上半に沈線による変形工字文が施こされている。変形工字文を狭んで1本ずつ沈線がめぐらされ、口縁部内側にも1本の沈線がみられる。沈線は篋によるもので鋭角的に深い。施文の仕方は雑である。体部下半には細かい縄文が横走しており、底部は無文で僅かに凹状を呈している。内面は撫で調整である。

## C-6 住居址

### 遺構（第11図・写真図版9a）

3.7m±×3.5m±の規模をもち、正方形を基本とした不整な形状を示す。主軸は東西方向にある。埋土は、粒状の焼土・炭化物をわずかに包含した黄褐色砂質シルトのほぼ単層であるため、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で20cm±を計る。住居址中央部を中心とした床面は黄褐色粘土質シルトで貼り床されてやや硬い面をもつが、壁近くになるにつれてそれが不明瞭になる。

ピットは検出されず、柱穴も不明である。

カマドは東壁中央部からわずかに南寄りに位置する。全体を焼土粒を包含する黄褐色シルト層で覆われ、シルトで構築された袖部の残存状態は良好である。カマド幅100cm±・燃焼部幅45cm±を計る。燃焼部からは一括品の甕形土器2個体が出土している。煙道部は検出されなかったが、住居址全体の残存状態からは煙道部をもたない形態のカマドであろう。

### 出土遺物（第48図・写真図版32・38a）

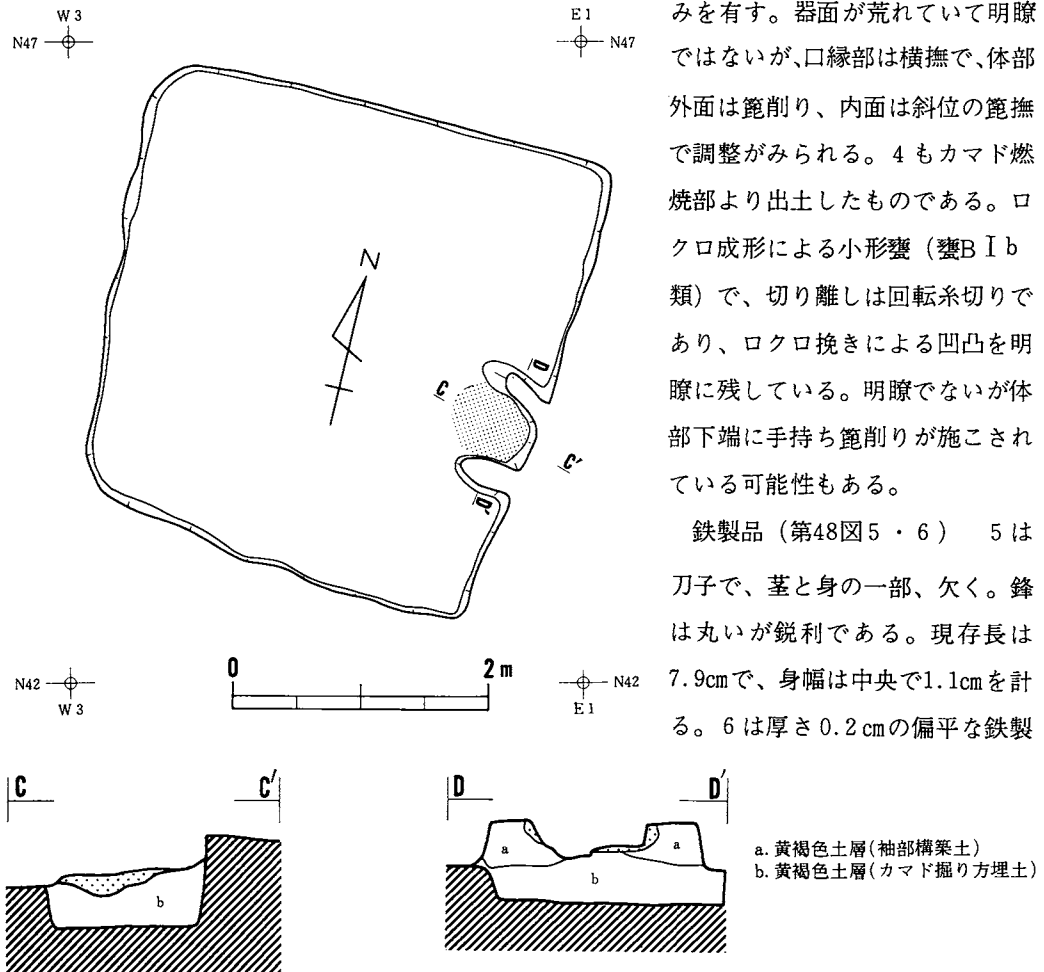
当住居址の土器は、カマドとカマド傍のものが大半を占めるが、量は非常に少ない。器種は坏と甕だけである。土器以外に鉄器・土錘・足方が出土している。

坏形土器（第48図1・2） 1は酸化炎焼成でロクロ使用の有無が不明の坏である。器形は平底を呈し、体部下端に丸味をもつが、体部は直立気味に立ちあがる。外面は上部に横撫で、体部には斜め上方向への篋削り後に一部篋磨きが施こされており、底部は不定方向への篋削り調整がみられる。内面は一部に撫で痕がみられるが、黒色処理はされていない。2はロクロ成形で、酸化炎焼成の内黒坏である。切り離しは回転糸切りで、体部下端にのみ手持ち篋削りが施こされており、内面は篋磨き後に黒色処理されている（坏B I b・H<sub>5</sub>手法）。

甕形土器（第48図3・4） 3はカマド燃焼部より出土したもので支脚として利用されていたものである。ロクロ不使用の小形甕（甕A II類）で口縁部は短く外反し、体部中央付近に脹

みを有す。器面が荒れていて明瞭ではないが、口縁部は横撫で、体部外面は篋削り、内面は斜位の篋撫で調整がみられる。4もカマド燃焼部より出土したものである。ロクロ成形による小形甕（甕B I b類）で、切り離しは回転糸切りであり、ロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残している。明瞭でないが体部下端に手持ち篋削りが施こされている可能性もある。

鉄製品（第48図5・6） 5は刀子で、茎と身の一部、欠く。鋒は丸いが鋭利である。現存長は7.9cmで、身幅は中央で1.1cmを計る。6は厚さ0.2cmの扁平な鉄製



第11図 C-6住居址実測図

品であるが、周囲が欠損しており種類は不明である。

土錘（第48図7） 中央部に脹らみをもつ管状の土錘である。部分的に指痕を残す。

足方 総計5個で土錘と共にまとまって出土した。長さ6.5cm±・幅2.8cm±のほぼ同形の自然石である。形状はC-3住に図示したものと類似しているので図化を省略した。

## D 区

### D-1 住居址

#### 遺 構（第12・13図・写真図版9b・11ab）

5.3m±×5.0m±の規模をもち、正方形の形状を示す。主軸はほぼ南北方向にある。埋土は主に次の4層で構成される。最上部は砂質シルトが優占する層厚10cm±の黒褐色土層で、土器の出土が多い。その下位にあって埋土の主体を占めるのは、粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する黄褐色砂質シルトである。壁際には黄褐色シルトが堆積し、床面は、粒状の焼土・炭化物をわずかに包含するやや粘土質の黄褐色シルトに覆われる。なお、南西隅付近では埋土上部から下部にかけて粒状の炭化物を多く包含する暗褐色シルト層が堆積し、出土土器も多い。壁高は西壁で28cm±を計る。住居址中央部を中心とした床には粘土質シルトが貼り床され硬い面をもつが、壁際では砂質シルトを床面としている。

床面上に検出されたピットは、P<sub>1</sub>（径45cm±・深さ35cm±）・P<sub>2</sub>（径40cm±・深さ27cm±）・P<sub>3</sub>（径27cm±・深さ15cm±）・P<sub>4</sub>（径25cm±・深さ22cm±）・P<sub>5</sub>（径45cm±・深さ33cm±）などである。柱穴はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>で構成されるが、南東隅には対応するピットを検出できなかった。P<sub>6</sub>（径90cm±×70cm±・深さ28cm±）・P<sub>7</sub>（径50cm±・深さ20cm±）・P<sub>8</sub>（径55cm±・深さ18cm±）は床面を深さ7cm±掘りさげた段階で検出された。P<sub>6</sub>の埋土は粒状の焼土・炭化物を多く包含し、出土土器も多い。その位置や形状・埋土などから判断して、このピットは床面上に存在した可能性が考えられる。P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>についての詳細は不明である。

この住居址には4基のカマドが存在する。1号カマドは南壁東寄りに位置する。袖部・燃焼部が残存し、4基中もっとも新しい。カマド幅120cm±・燃焼部幅60cm±を計る。右袖部の外側の床面上には径50cm±の現地性焼土が分布する。これは袖部の下をもぐって焼成部から連続するものである。145cm±の長さをもつ煙道部は燃焼部より急激に立ち上がり、底面は先端へゆるやかに下がる。煙出し部には、煙道底面より深さ8cm±のピットを掘りこんでいる。煙出し部の底面からは、崩壊時に転落したと考えられる長径27cm±の礫と壺形土器の大形破片が出土した。2号カマドと3号カマドは東へのびる煙道部だけが残る。2号カマドは東壁の南東隅寄りに位置する。煙道部は壁の下半に掘りこまれ、130cm±の長さをもつ。煙道部底面は先端

へ急角度で下がる。3号カマドは2号カマドのわずかに北側に位置する。煙道部は先端の一部を掘りすぎてしまったが、壁下半に掘りこまれ、長さ100cm±を計る。煙道底面はほぼ水平で、煙出し部には底面から深さ20cm±のピットを掘りこんでいる。4号カマドは北壁中央部よりわずかに東寄りに位置する。煙道部は壁際床面とは比高差18cm±上位にあり、長さは140cm±を計る。煙道底面は先端へゆるやかに下がり、煙出し部には底面より深さ18cm±のピットが掘りこまれる。その煙道部が構築された壁際の床面上には径50cm±の現地性焼土が広がり、さらにその南側200cm±×110cm±の範囲には炭化物粒混じりの焼土が分布する。壁際の焼土は燃烧部の焼成面とも考えられる。貼り床や削剝を受けた形跡は認められなかった。住居址の明確な掘り方が把握できなかったため確実なことは言えないが、その焼土を4号カマドの燃烧部と仮定すると、もっとも新しい1号カマドを使用時の住居の床面は4号カマド使用時のそれを共有したことが考えられる。1号カマドをのぞいた3基のカマドの先後関係は明らかにできなかった。

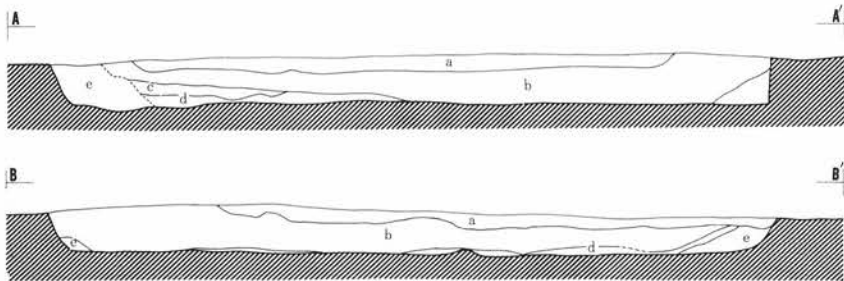
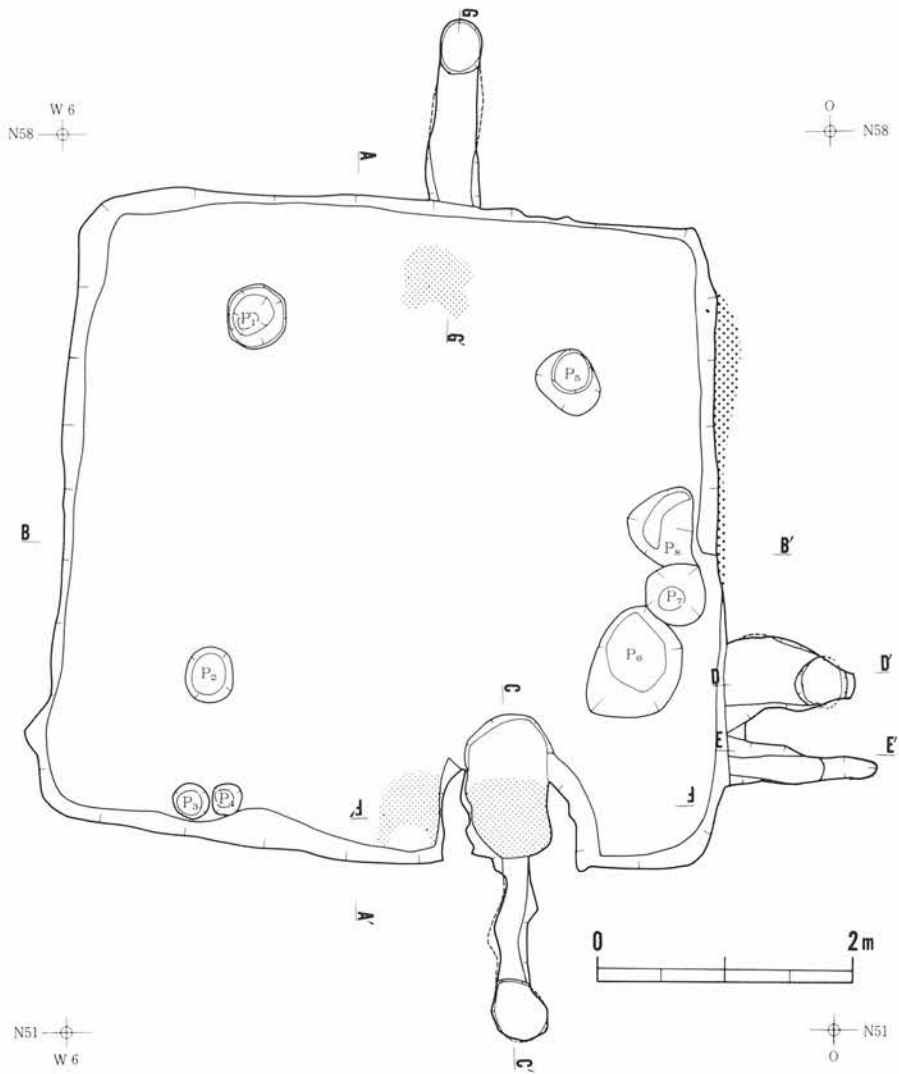
#### 出土遺物(第48・49・50図・写真図版33・34・38a)

当住居址は土器の出土量が多く、埋土からのものが大半を占める。カマド周辺部及びカマド掘り込み部より出土したものを中心に図化した。床面がはっきりせず、埋土下部として取り上げたものが多かったため、埋土下部出土のものも含めた。器種は、坏・高台坏・甕・壺で構成される。土器以外では鉄器と鉄滓及び砥石が出土している。

坏形土器(第48図8～13・第49図1) すべてロクロ成形によるものである。酸化炎焼成で内面黒色処理されたもの(坏BⅠ類)と還元炎焼成のもの(坏BⅡ類)とがあるが、後者の方が圧倒的に多い。8と9は回転糸切り後に体部下端及び底部周辺部を回転篋削り調整をし、内面は篋磨き後黒色処理している(坏BⅠb類・W<sub>2</sub>手法)。8は体部下端にやや丸味をもち、上半は直線的に外傾する体部をもつ。9は体部中位に丸味をもって立ちあがるが、上部で僅かに外反する。10～13は還元炎焼成の坏で、底部は回転糸切りで無調整。全体に口径に比べ器高の低いものが多い。器形は10のように直線的に外傾し、口唇部下で僅かに外反するものと、11～13のように丸味をもって外傾し、上半で外反するものと、1のように直線的に外傾するだけのものとがみられる。全体的にロクロ挽きによる凹凸が目立つ。

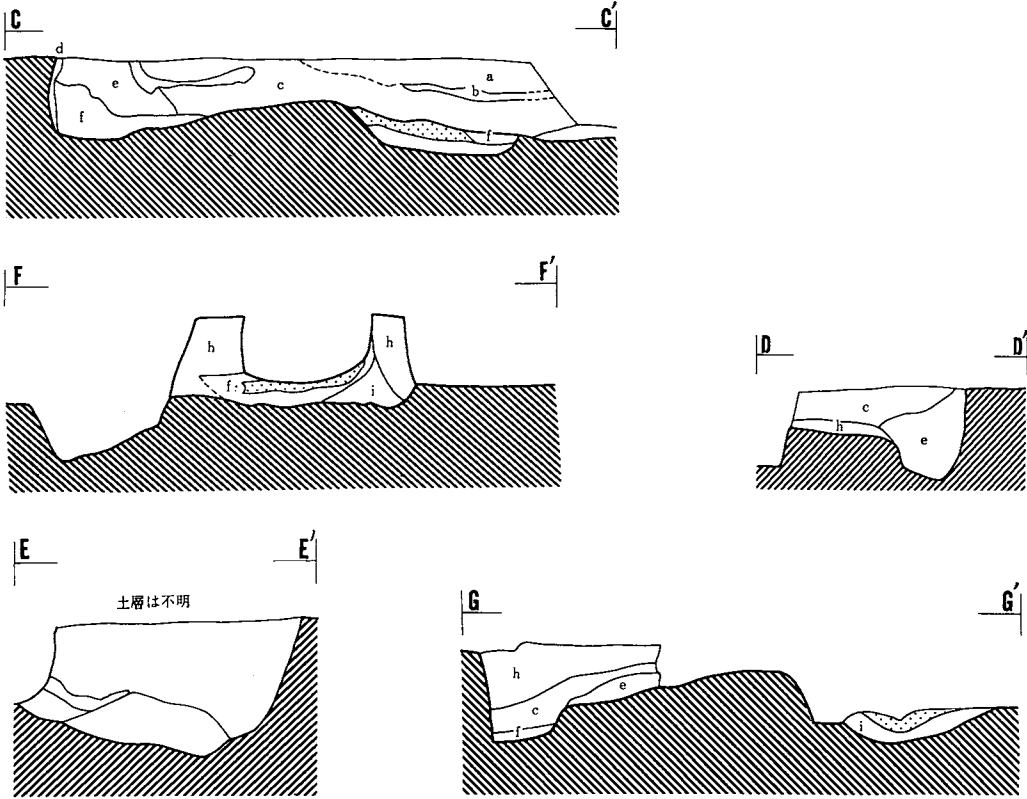
高台付坏形土器(第49図2) 坏部のほとんどが欠損しているが、内面に篋磨き後黒色処理されている。高台部は非常に短く、裾が僅かに開く。

甕形土器(第49図3～9・第50図1～5) すべて酸化炎焼成の甕でロクロ不使用のもの(甕A類)とロクロ使用のもの(甕BⅠ類)とがある。3はロクロ不使用の甕で、口縁部は直線的に外傾する。頸部に微かな稜線をもつが、体部は脹らみをもたない。口縁部は横撫で調整外面体部は刷毛目状の撫で、内面は横方向の篋撫で調整が施こされている。4もロクロ不使用



- a. 黑褐色土層    b. 黄褐色土層(含烧土粒·炭化物粒)    c. 暗褐色土層(含炭化物粒)  
 d. 黄褐色土層(含炭化物粒)    e. 黄褐色土層

第12图 D-1 住居址实测图(1)



- a. 黄褐色土層(含焼土粒)    b. 暗褐色土層(含炭化物粒)    c. 黄褐色土層(含焼土塊)  
 d. 極暗赤褐色焼土層    e. 褐色土層(含焼土塊)    f. 暗赤褐色土層(含焼土)  
 g. 黄褐色土層    h. 黄褐色土層(袖部構築土)    i. 明黄褐色土層

第13図 D-1 住居址実測図(2)

の甕で、外反する口縁部をもつ。口縁部は横撫で、体部外面は篋削り、内面は横方向への篋撫で痕がみられる。5はロクロ不使用の非常に小さい甕で、口縁部は緩く外傾する。器面が荒れていてはっきりしないが外面は上方向への篋削りがみられる。6～8は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされている大形の甕（甕B Ia類）である。全体に口縁部は緩く外反し口唇部をやや内側上方に挽き出したものが多く、体部は僅かに脹らみをもつ。9・49図1～5はロクロ成形による小形の甕で、底部切り離しは回転糸切りで、再調整はみられない。ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。

壺形土器（第50図6～8） いずれも還元炎焼成の壺（壺B II類）である。6は広口短頸壺で最大径を肩部にもつ。口縁部は直立気味の立ちあがりをもち、上部で強く外反し、口唇部を上方やや外側に挽き出している。体部は肩部から緩くすぼまる。7は大形の短頸壺で、口縁部は直立気味の立ちあがりをもち、上部で強く外反し、口唇部を上方に挽き出している。頸部で強く屈曲し、体部が大きく脹らむ。いずれもロクロ調整が施こされている。8は体部下半だけ

で、外面に篋削りと体部下端に叩き目痕がみられる。

鉄製品（第49図9・10） 10は最大幅 2.1cm、厚さ 0.2cmの扁平な鉄製品で、長軸の下の辺に刃がつけられ、釘通しと思われる穴を有することから、穂摘み具様の鉄製品であると思われる。9は釘の先端部と思われる。現存長 2.3cmで、断面は円形を呈す。

鉄滓は全部で2個総量が20gを計る。小形で山土との焼結状態を呈している。

砥石（第49図11） 小形の砥石で一端を欠くが、現存長 6cmを測る。4面使用痕を有する。一面には細い条溝が数条みられる。石質は流紋岩である。

## D-2 住居址

### 遺 構（第14図・写真図版10a）

4.1m±×2.8m±の規模をもち、長方形の形状を示す。主軸は東西方向にあって縦に長い。埋土は黄褐色シルトの単層で占められ、層厚が5cm±と薄いこともあって土層断面図の作成は省略し、Field Cardにその性状を記載することで代用した。壁高は南壁で5cm±を計る。床面は全体に柔かく埋土との境界は不明瞭であった。

床面上には、P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ15cm±）・P<sub>2</sub>（径30cm±・深さ15cm±）・P<sub>3</sub>（径30cm±・深さ8cm±）・P<sub>4</sub>（径35cm±・深さ5cm±）・P<sub>5</sub>（径35cm±・深さ5cm±）などのピットが検出された。柱穴としてはP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の4個が配置的に妥当であるが、深さの点で疑問が残る。住居址中央部からやや東寄りにあるP<sub>6</sub>（径60cm±・深さ14cm±）は床面を深さ10cm±掘りさげた段階で検出された。明確な貼り床は確認できなかったが、床面下に存在するピットである。

この住居址には2基のカマドが存在する。1号カマドは東壁北寄りに位置する。上部構造は不明で、径75cm±×50cm±の燃焼部の焼成面が認められる。長さ100cm±の煙道部は先端部を工事に伴う削剝を受けているが、底面はほぼ水平である。煙出し部には、煙道底面より深さ8cm±のピットが掘りこまれている。2号カマドは北壁東寄りに位置する。カマド全体にわたる削剝を受け、径35cm±×23cm±の焼土がカマドの痕跡を示す。煙道部の長さは130cm±を計り、底面はほぼ水平である。2基のカマドの先後関係は、燃焼部の焼成面の残存状態から2号カマドが1号カマドに時間的に先行するものであろう。

### 出土遺物（第51図・写真図版38a）

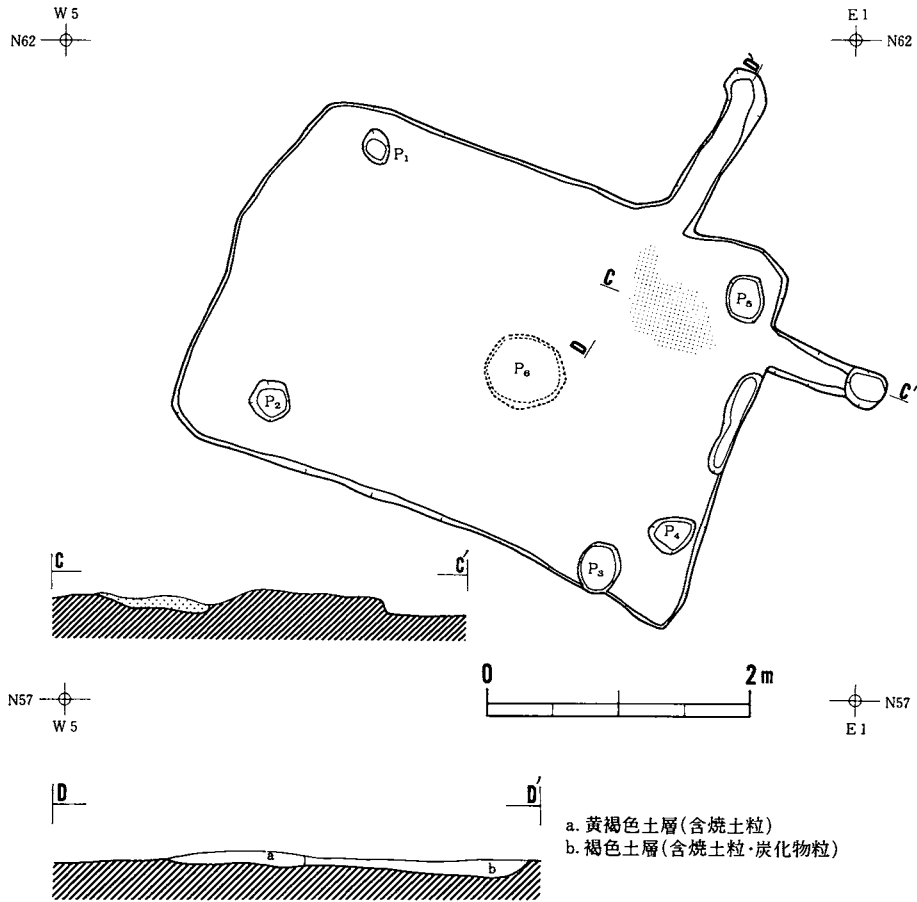
本住居址の遺物は僅少で、坏と甕の破片の他に鉄器が1点出土したのみである。

坏形土器（第51図1） ロクロ成形で、内面黒色処理された酸化炎焼成の坏である。回転糸切り後に底部の一部を手持ち篋削り調整されており、内面は篋磨きの後黒色処理されている（坏B Ib類・H<sub>4</sub>手法）。体部は僅かに丸味をもって外傾する。

甕形土器（第51図2・3） いずれもロクロ不使用の甕である（甕A類）。2は口縁部が短

く外傾し、頸部に僅かなくびれを有す。口縁部は横撫で、体部も篋撫で調整がみられる。3は小形の甕で、口縁部は緩く外反し、横撫で調整。

鉄器(第51図4) 両端とも欠損しており、現存長は5.2cmである。断面は直径0.35cmの円形を呈す。釘の可能性が強いが、はっきりしない。



第14図 D-2住居址実測図

## E 区

### E-1住居址

#### 遺構(第15図)

遺構検出面で床面が露呈していたために東壁の一部が推定できただけであること、大部分が西側の調査区域外にあること、カマドの西側が工事に伴う削剝を受けて床面を消失しているこ



と、さらには2条の溝との重複することなどの理由で、規模・形状とも不明である。調査区域外との境界での土層観察では、削剝を受けた面より数cm土上位に床面の黄褐色シルト層が認められた。

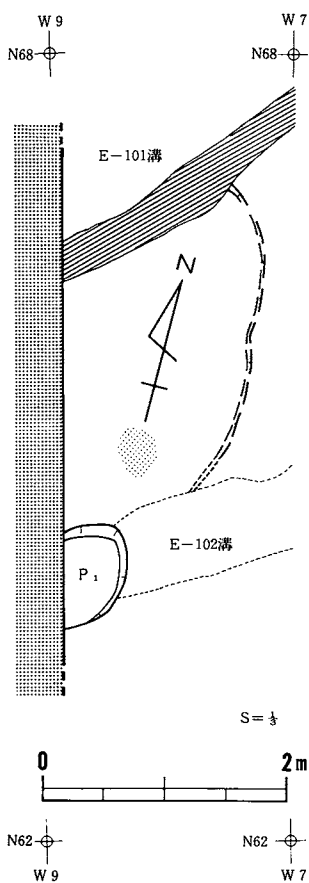
P<sub>1</sub> (径70cm土・深さ40cm土)は東側 $\frac{1}{2}$ が調査できただけであるが、その位置や形状・規模からこの住居址に伴うものとみられる。しかし、重複するE-102溝を掘りあげる段階でともに掘りあげてしまい、両者の新旧関係は把握できなかった。埋土についてはField Cardにも記載がなく、不明である。

カマドの燃烧部の焼成面は径40cm土の範囲に認められる。しかし上部構造や煙道部の存在の有無については明らかでない。東壁に構築されていたと推定されるが、位置は不明である。

重複するE-101溝には切られている。けれどもE-102溝との新旧関係は不明である。

### 出土遺物 (第51図)

当住居址の遺物は極めて僅少で、図化出来たのは坏2点だけである。



第15図 E-1住居址実測図

坏形土器 (第51図5・6) いずれもロクロ成形である。底部は回転糸切りで無調整、内面は篋磨き後黒色処理が施こされている (坏B Ia類)。口径に比べ器高が低く、体部下半に丸味をもつが、口縁端まで直線的に外傾する。

### E-2住居址

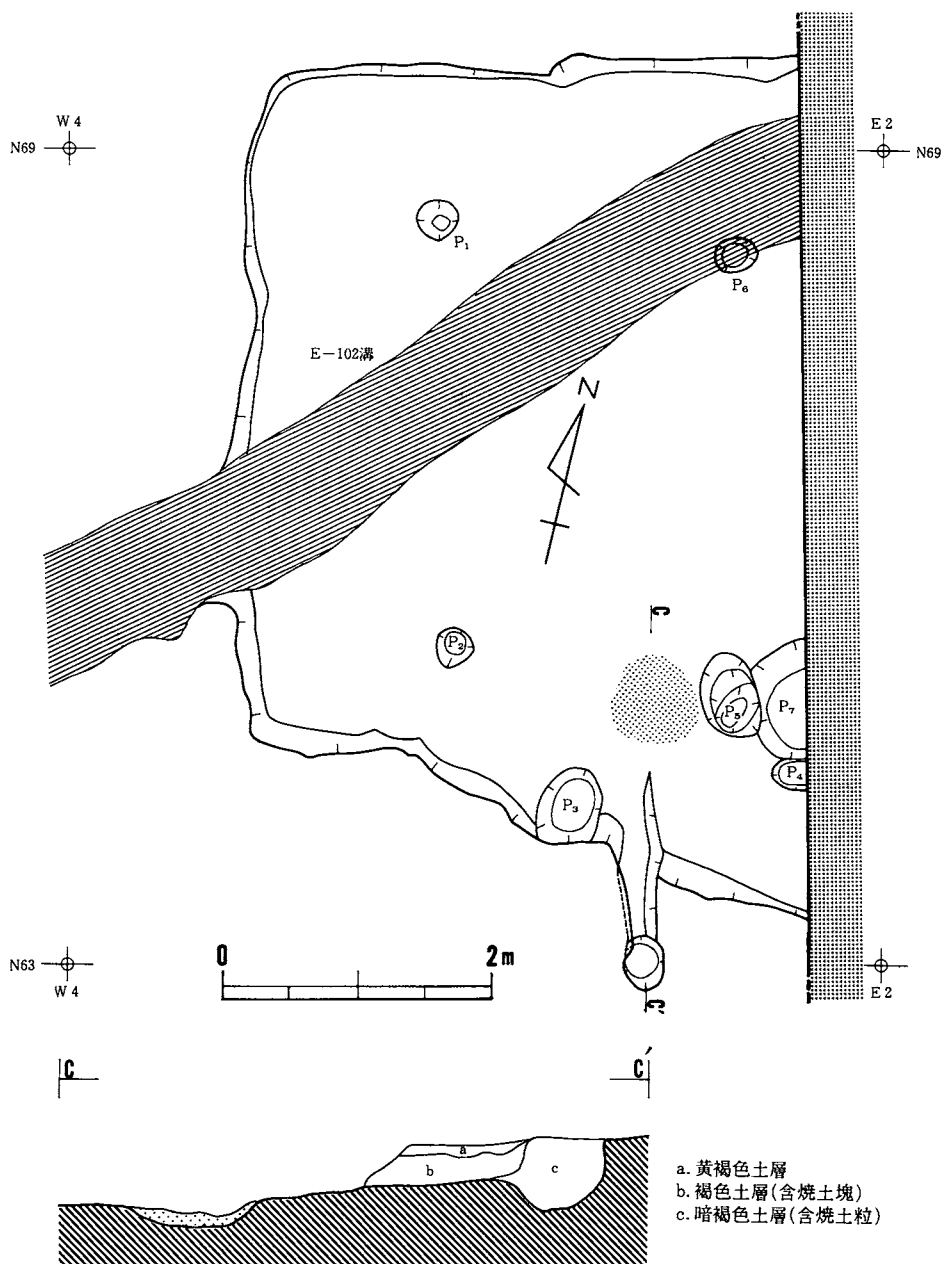
遺構 (第16図・写真図版10b)

東側の一部が調査区域外にあるため、規模・形状とも詳細は不明である。西壁の辺長は5.0m土であるが、東側ほど南壁が張り出し、調査された東端での南北方向の長さは6.3m土にたつする。方形を基本とした不整な形状を示す住居址と推定される。主軸はほぼ南北方向にある。埋土は上層が褐色砂質シルト下層が褐色シルトで構成され、粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する。重複する溝に切られるなど土層断面図を作成できる状況になかったため、Field Cardに記載することで代用した。壁高は南壁で30cm土を計る。住居址中央部を中心とした床には黄褐色粘土質シルトが貼り床され、よくしまった硬い面をもつのに対し、壁寄りの床にはそれがみられない。

柱穴状のピットは、P<sub>1</sub> (径30cm土・深さ38cm土)・P<sub>2</sub> (径30cm土・深さ26cm土)・P<sub>3</sub> (径60cm土×45cm土・深さ11cm土)・P<sub>4</sub> (径25cm土・深さ11cm土)・P<sub>5</sub> (径60cm土×40cm土・深さ40

cm±)・P<sub>6</sub>(径30cm±・深さ30cm±)などが検出された。そのうちP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の4個が柱穴を構成する。P<sub>1</sub>には径18cm±の柱あたりが確認された。カマドの東側にあるP<sub>7</sub>(径80cm±・深さ36cm±)はわずかの煙土粒を包含した黄褐色粘土質シルトを埋土としていた。

カマドは南壁に構築されており、位置的には東寄りと推定される。1973年に江刺市教育委員



第16図 E-2 住居址実測図

会が当遺跡の試掘調査を実施している。その際にこの住居址のカマド周辺が発掘調査されており、上部構造および煙道の一部は残存しない。燃焼部には径65cm±の焼成面が認められる。煙道部は110cm±の長さを持ち、底面はほぼ水平である。煙出し部には、煙道底面より深さ14cm±のピットを掘りこんでいる。

この住居址は中央部をE-102溝に切られ、一部床面まで掘りこまれている。

#### 出土遺物（第51図・写真図版34）

当住居址の遺物は土器だけであり、埋土全体から多く出土しているが小破片が多い。図化出来た土器はカマド周辺部からのものが大半を占め、器種は坏と甕だけである。

坏形土器（第51図7～9） すべてロクロ成形によるものである。7は回転糸切り無調整で、内面篋磨き後黒色処理されている（坏B Ia類）。口径に比べやや器高が高く、体部はやや丸味をもって外傾する。8は回転糸切り後に体部下端及び底部周辺部を手持ち篋削りによる再調整が施こされており、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている（坏B Ib類・H<sub>2</sub>手法）。口径に比べ器高が高く、体部は丸味をもって立ちあがる。9は体部下端及び底部全面に手持ち篋削りが施こされており、底部切り離しは不明である。内面は篋磨き後に黒色処理されている（坏B Ic類・H<sub>1</sub>手法）高が高く、内弯気味の立ちあがりをもつ。

甕形土器（第51図10・11） いずれもロクロ不使用の酸化炎焼成の甕（甕A類）である。10は「く」の字状に外反する口縁部を持ち、体部に脹らみをもつ。口縁部は内外面共横撫で調整体部外面には刷毛目、内面には横方向の篋撫で調整がみられる。11は頸部にくびれをもたず緩く外反する口縁部を持ち、体部に脹らみをもたない。口縁部は横撫で、体部にも撫で調整がみられる。

### E-3住居址

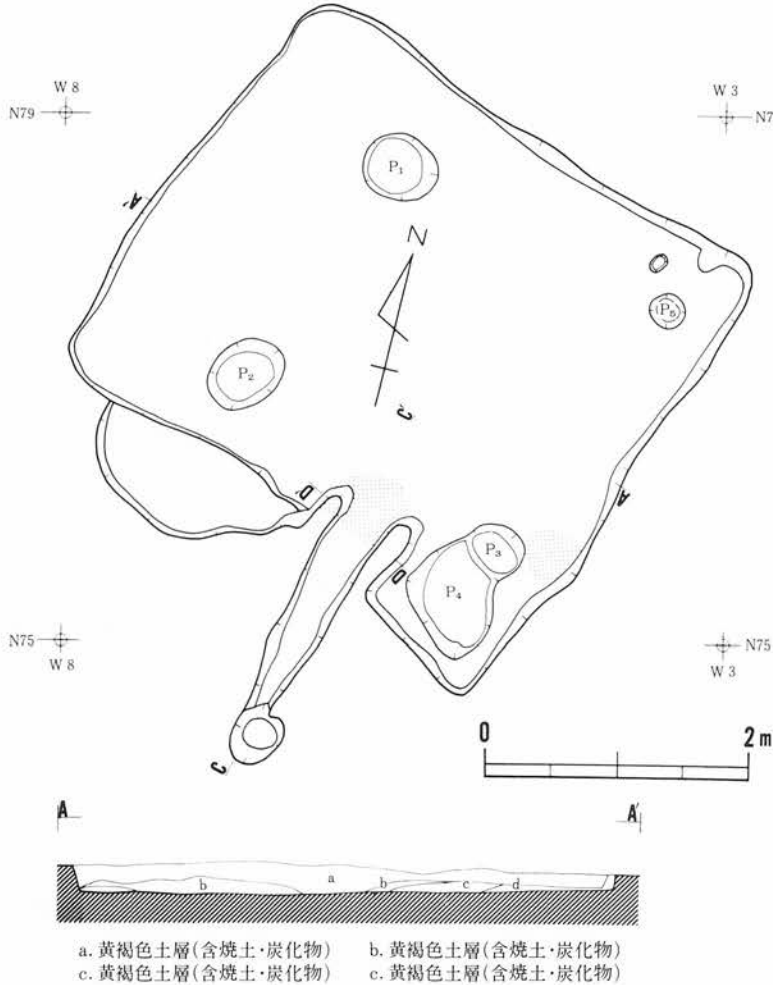
#### 遺構（第17図・写真図版11c）

4.0m±×3.5m±の規模をもつ。東辺が西辺にくらべて長いので、正方形を基本としながら不整な形状を示す住居址である。カマドの西側の南壁に住居址の床面より3cm±高い半円状の張りだしがある。この住居址を切って重複する遺構は存在しないことが確認されているので、この住居址に付属するものかあるいは円形ピットをこの住居址が切っているかのいずれかと考えられる。主軸はほぼ北東～南西方向にある。埋土は黄褐色砂質シルト層が主体を占め、粒状の焼土・炭化物を多く包含した黄褐色シルト層が床面を覆う。壁高は北壁で15cm±を計る。床面は全体に柔かく埋土との境界は不明瞭であった。

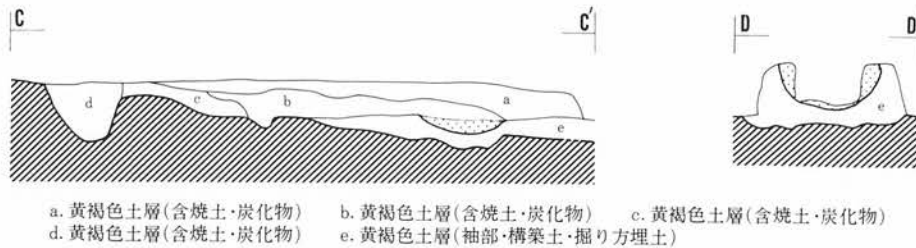
柱穴は、P<sub>1</sub>（径60cm±・深さ40cm±）・P<sub>2</sub>（径55cm±・深さ45cm±）・P<sub>3</sub>（径40cm±・深さ38cm±）・P<sub>6</sub>（径30cm±・深さ35cm±）の4個で構成される。カマドの東側にあるP<sub>4</sub>（径70cm±・深さ50cm±）の埋土はわずかに焼土・炭化物を粒状に包岩した黄褐色シルト層で、少量で

あるが土器も出土する。

カマドは南壁東寄りに位置する。カマド幅80cm±・燃焼部幅30cm±を計る。シルトで構築された袖部の残存状態は良好であるが、袖部構築土とカマドの掘り方埋土とは区別できなかった。



燃滞部は強い焼成を受け、袖部内壁にも焼成痕が認められる。燃焼部から煙道部にかけての埋土中には長径15cm±~23cm±の亜円礫が3個出土している。いずれも加熱を受けている。カマドに使用されたものであろうが、現位置にはないためどの部位を構成するものかは明らかでない。煙道部は190cm±の長さを計り、底面は先端でわずかに高くなる。煙出し部には煙道底面から深さ18cm±のピットを掘りこんでいる。



第17図 E-3住居址実測図

## 出土遺物（第52図・写真図版38a）

当住居址の遺物は僅少で、図化出来た土器は坏2点だけであり、土器以外では鉄器と砥石が出土している。

坏土土器（第52図1・2） いずれもロクロ成形によるものである。1は底部中央に糸切り痕を残し、体部下端と底部周辺に手持ち篋削り調整されており、内面は篋磨きの後黒色処理が施こされている。(坏B Tb類・H<sub>2</sub>手法)。体部は直線的に外傾する。2は内面に黒色処理がみられるが、底部の器面が荒れていて切り離し技法、再調整の有無は不明である。体部は中央部にやや丸味をもって外傾する。

甕形土器は図化出来たものがないが、ロクロ使用の甕の破片が数点みられる。

鉄製品（第52図3・4） 3は鋒と先端を欠く刀子である。背は平坦で僅かに反る。身は全体に錆で膨らんでおりはっきりしないが、身幅は中央で1.1cm±、茎幅は0.7cm±で茎部に木質が残存している。4は幅1.1cmで端を直角に折り曲げている。他方は破損しておりはっきりしないが、穂摘み具様鉄製品の一部の可能性が強い。

砥石（第52図5・6） 5は断面形が五角形を呈し、5面共使用痕がみられる。石質は流紋岩である。6は小形の砥石で、4面に使用痕がみられる。その一面の長軸方向に幅0.2cmの細い溝がみらる。石質は中粒硬砂岩である。

## F 区

### F-1住居址

#### 遺 構（第18図・写真図版12ab）

東側約 $\frac{1}{2}$ が調査区域外にあるため、規模・形状とも詳細は不明であるが、南北の長さは4.4m±を計る。主軸はほぼ東西方向にある。埋土は褐色シルトのほぼ単層で占められ、Field Cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。壁高は西壁で10cm±を計る。床面は全体に柔かく不明瞭であった。

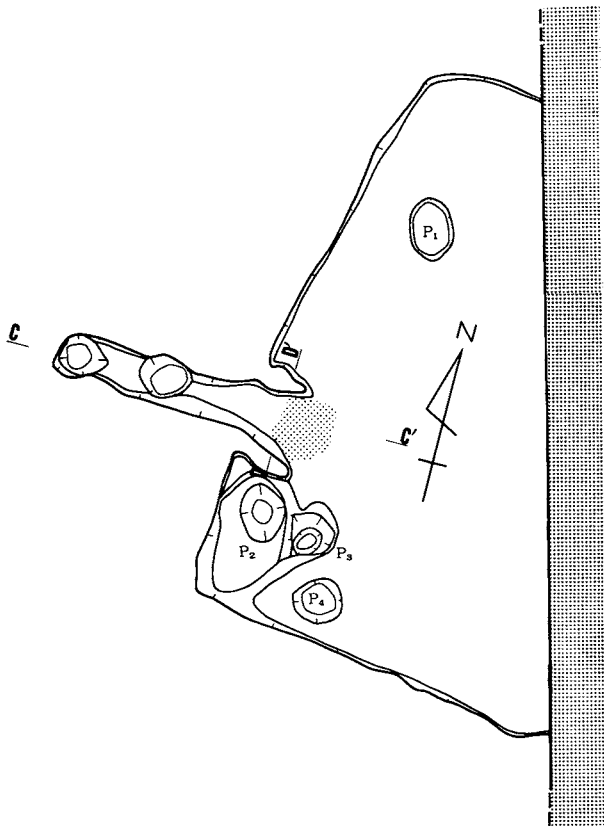
床面上にはP<sub>1</sub>（径40cm±・深さ43cm±）・P<sub>2</sub>（径105cm±×65cm±・深さ18cm±）・P<sub>3</sub>（径35cm±・深さ31cm±）・P<sub>4</sub>（径40cm±・深さ21cm±）などのピットが検出された。P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>は柱穴の一部を構成する。南西隅にあるP<sub>2</sub>の埋土は粒状の焼土・炭化物をわずかに包含した褐色シルト層で、土器もわずかに出土した。

カマドは西壁南寄りに位置する。上部構造は住居址埋土と区別することができず、袖部を部分的にしか明らかにできなかつた。また、袖部構築土とカマド掘り方埋土との区別もできない。残存部ではカマド幅80cm±・燃烧部30cm±を計る。煙道部の長さは160cm±で、底面は水平

である。煙出し部には、煙道底面よりわずかに深いピットを掘りこんでいる。煙道部のほぼ中央部に径40cm±・煙道底面からの深さ10cm±のピットが存在する。土層断面の観察などから、煙道部を短少化した際の煙出し部のつくりかえと考えられる。

**出土遺物 (第52図)**

当住居址の遺物は僅少で、土器は坏・高台坏と甕がみられる。いずれも南壁傍の床上より出

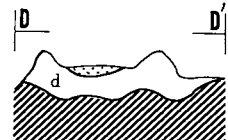
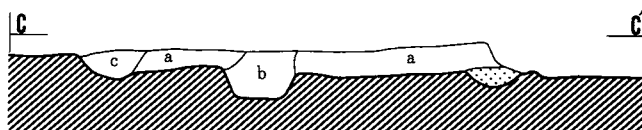


土したものである。土器以外では鉄滓が出土している。

坏形土器 (第52図7) ロクロ成形で、切り離しは回転糸切り無調整内面は篋磨き後黒色処理が施こされている

(坏B Ia類)。体部は僅かに丸味をもって外傾する。

甕形土器 (第52図8・9) いずれも巻き後、体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされている酸化炎焼成の大形甕 (甕B Ia類)である。口縁部は短く外反し、口唇部を僅かに上方に挽き出しており、体部は僅か



- a. 黄褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- b. 褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- c. 褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- d. 黄褐色土層(袖部構築土・掘り方埋土)

第18図 F-1 住居址実測図

に脹らみをもつ。9は体部外面に下方向への篋削り調整が施こされている。

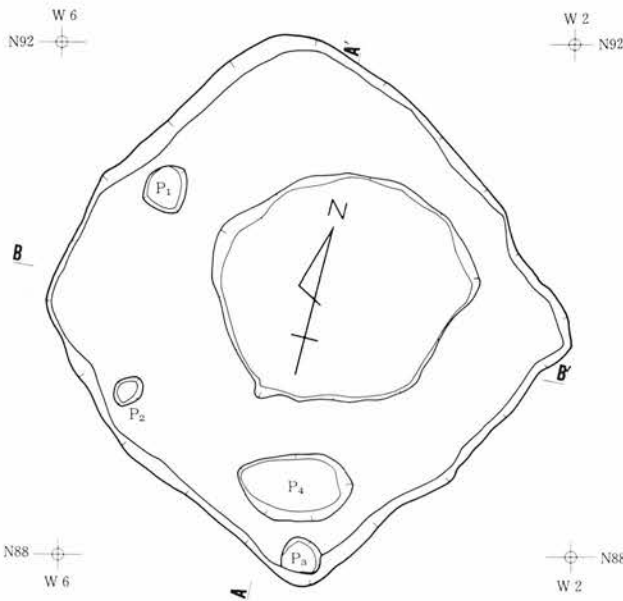
鉄滓はP<sub>2</sub>より出土したもの1個で重量は50gある。多孔質で土との焼結状態を呈している。

## F-2住居址

### 遺構 (第19図・写真図版12d・13a)

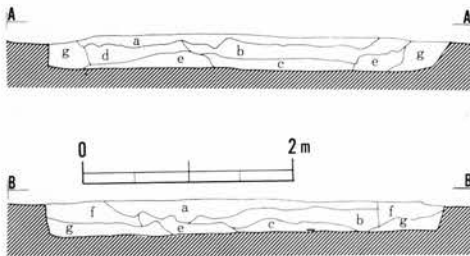
3.6m±×3.4m±の規模をもち、正方形を基本としたやや不整な形状をもつ。埋土は数層で構成される。暗褐色～黒褐色土層を主体とした層は、遺構のほぼ中央部を中心に南北3.1m×東西2.6m±・層厚30cm±で分布する。この層は砂質シルト～粘土質シルトで構成される3層に細分され、一括品を含めた多数の土器などの遺物を包含している。その他はわずかに粒状の焼土・炭化物を含んだ褐色土層で構成される。壁高は南側で25cm±を計る。床面は全体に柔かく不明瞭であった。

検出されたピットは、P<sub>1</sub>(径35cm±・深さ21cm±)・P<sub>2</sub>(径25cm±・深さ11cm±)・P<sub>3</sub>(径



35cm±・深さ16cm±)・P<sub>4</sub>(径90cm±×50cm±・深さ11cm±)の4個である。P<sub>4</sub>の底面中央部には小規模ながらまとまった炭化材が密着して存在した。床面中央部から若干東側を中心に、径190cm±・深さ3cm±の円形の低みが存在する結果、周辺部が一段高い状態になる。埋土最下部を占める灰褐色土層が低みの部分へ連続して堆積することから、貼り床は施されていないことが確認できる。

この遺構にはカマドが存在しない。その意味では住居址としては例外的である。いちおう住居址の



- a. 暗褐色土層(含炭化物粒)
- b. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- c. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- d. 褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- e. 灰褐色土層(含炭化物粒)
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層

第19図 F-2住居址実測図

分類に入れたが、確実な点では不明である。

#### 出土遺物 (第53図・写真図版34)

当住居址の遺物はまとまった資料が多く、しかも各種の遺物がみられる。遺物は遺構のほぼ中央部にみられる黒褐色土層より出土したものが大半を占める。土器の器種は坏・高台坏・甕・壺・羽釜と各種あり、土器以外の遺物では土錘・足方が出土している。

坏形土器 (第53図1～4) すべてロクロ成形で酸化炎焼成の坏であるが、内面黒色処理の施こされているもの (坏BⅠ類) と内外面とも再調整のみられないもの (坏BⅢ類) とがある。2は内面篋磨き後に黒色処理が施こされ、底部は回転糸切りで調整はみられない (坏BⅠa類) 体部は丸味をもって外傾する。1は体部下端及び底部全面に手持ち篋削りが施こされており、切り離しは不明である。内外面とも篋磨き後に黒色処理が施こされている (坏BⅠc類・H<sub>1</sub>手法)。3も体部下端及び底部全面に手持ち篋削りが施こされており、切り離しは不明である。ただし内面に磨きもみられず、黒色処理の有無は不明である。4は酸化炎焼成で内外面とも再調整はみられなく、底部は回転糸切りである (坏BⅢ類)。小形の坏で器高が低く、体部は直線的に外傾する。以上の土器と伴出した坏で図の作成をなしえなかった底部の小破片は7個体ある。分類の内訳は、坏BⅠa類が2点、坏BⅠc類が1点、坏BⅡ類1点、坏BⅢ類3点である。

高台付坏形土器 (第53図5～8) 酸化炎焼成で内面黒色処理したもの (高台坏BⅠ類) と黒色処理していないもの (高台坏BⅢ類) とがある。5と6は坏部の大部分を欠損しているが内面に篋磨きと黒色処理がみられる。高台部は短く、僅かに裾が開く。7と8は酸化炎焼成で黒色処理はみられない。7は坏部が直線的に大きく外傾し、ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。高台部は裾が「ハ」の字状に大きく開き、底部に沈線状の凹みがみられる。8は坏部のみで高台部を欠く。坏部は非常に浅く、皿状を呈する。

甕形土器 (第53図9・10) 9はロクロ成形で、ロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残す小形甕 (甕BⅠb類) である。口縁部は短く横に折れ、口唇部を上方に挽き出している。10もロクロ成形の小形甕で、切り離しは回転糸切りで再調整はみられない。体部は中央やや上方に脹らみをもつ。

羽釜 (第53図11) 還元炎焼成の羽釜である。鏝部しか残存せず、形態ははっきりしないがやや胴部に脹らみをもつようである。鏝部は丸味をもち、ほぼ水平に張る。

土錘 (第53図12) 中央部に脹らみを有す管状の土錘である。欠半欠損しており、管の内側は縦縞状の筋が平行にみられる。

### F-3 住居址

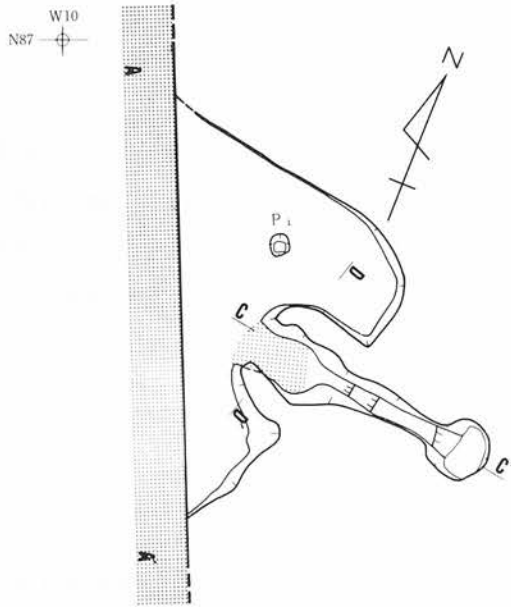
#### 遺 構 (第20図・写真図版12c・13b)

住居址の大部分が西側の調査区域外にあるため、カマドを中心とした一部が調査できたにす



ぎない。したがって規模・形状とも詳細は不明である。また北壁は不明瞭で床面直上まで掘り下げた段階で把握された。主軸は東西方向にある。埋土は黄褐色シルト層が主体を占める。床面は全体に柔かく不明瞭である。

検出されたピットはP<sub>1</sub>（径18cm±・深さ15cm±）だけで、柱穴の存在等については不明である。

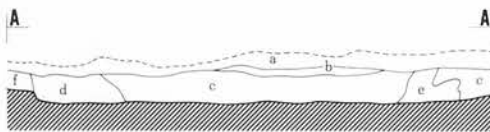


カマドは東壁に構築されている。東壁に占める位置は不明であるが、北東隅にかなり寄る。カマド幅 100cm±・燃烧部幅30cm±を計る。袖部はシルトで構築され、燃烧部はよく焼成を受けている。煙道部は 130cm±の長さを持ち、底面は途中でわずかに高くなり先端にいたる。煙出し部には、煙道底面から深さ14cm±のピットが掘りこまれている。

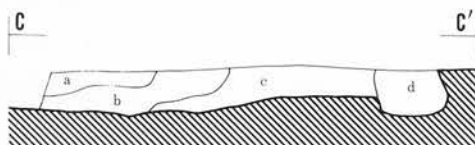
**出土遺物**（第53図・写真図版38a）

出土遺物は極めて僅少で、壺の破片と鉄製品を1点出土したのみである。

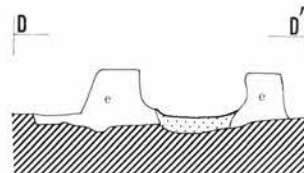
壺形土器（第53図13） ロク



a. 褐灰色土層（水田耕作土） b. 黒褐色土層（含炭化物粒）  
c. 黄褐色土層 d. 黄褐色土層 e. 黄褐色土層  
f. 明黄褐色土層



a. 黄褐色土層（含焼土粒・炭化物粒） b. 褐色土層（含焼土塊） c. 黄褐色土層（含焼土粒・炭化物粒）  
d. 黒褐色土層（含焼土粒） e. 黄褐色土層（袖部構築土）



第20図 F-3 住居址実測図

口未使用の酸化炎焼成の壺である。

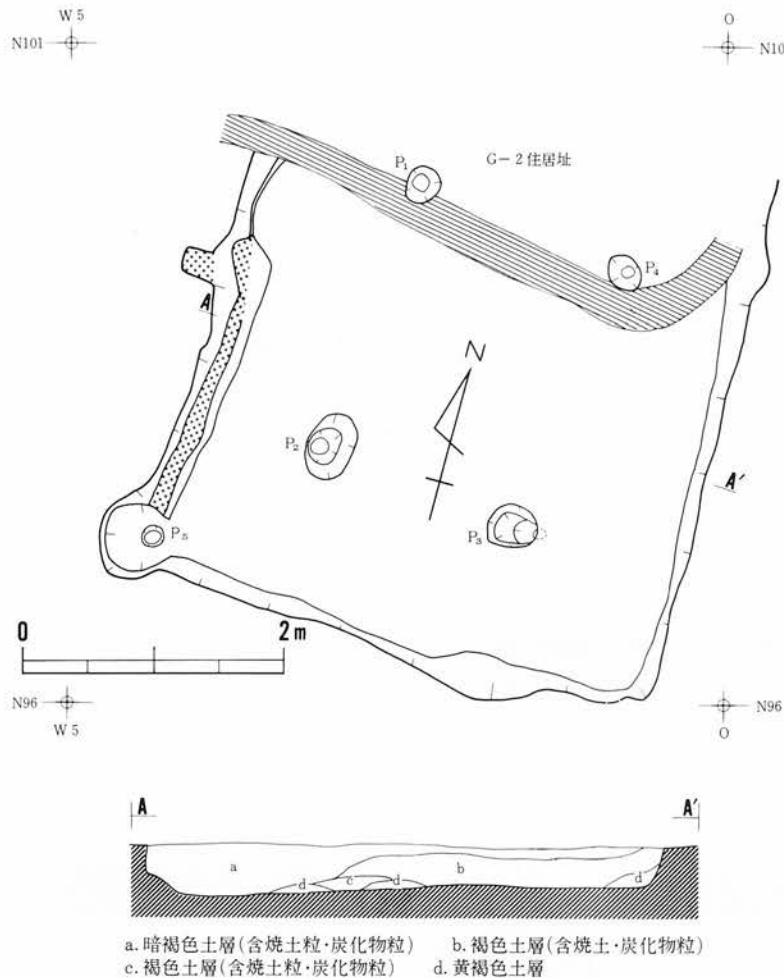
鉄製品（第53図14） 鋒部と身の一部と基部を欠く刀子片である。現存長 3.9cmあり、現存する最大身幅は 1.0cmを計る。

## G 区

### G-1 住居址

遺 構（第21図・写真図版14a）

重複するG-2住居址に切られているため規模・形状とも詳細は不明であるが、南北の長さは 4.0m±である。埋土は、上層から暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層の順に堆積する。



第21図 G-1 住居址実測図

いずれもシルトが優占し、上層ほど粒状の焼土や炭化物の包含が多い。壁高は東壁で30cm±を計る。

柱穴は、P<sub>1</sub>（径25cm±・深さ53cm±）  
 ・P<sub>2</sub>（径50cm±×35cm±・深さ66cm±）  
 ・P<sub>3</sub>（径40cm±・深さ39cm±）  
 ・P<sub>4</sub>（径25cm±・深さ53cm±）  
 などで構成される。P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>はG-2住居址内に検出された。南西隅にあるP<sub>5</sub>（径60cm±・遺構検出面からの深さ43cm±）とこの住居址との関係については明らかにならなかった。

カマドはその存在

の有無も含めて不明である。

#### 出土遺物（第54図・写真図版38b）

当住居址の遺物は埋土上層の暗褐色土層からの出土が大半を占め、しかもそのほとんどが小破片である。土器で図化出来たのは甕1点だけで、土器以外では鉄製品・鉄滓の出土をみる。遺物はすべて当住居址に直接伴うものではない。

環形土器は図化出来るものはなく、底部破片は8個体を数える。いずれもロクロ成形である。酸化炎焼成で内黒処理され、回転糸切り無調整の坏（坏B Ia類）2点、還元炎焼成の坏（坏B II類）2点、酸化炎焼成で黒色処理されていない坏（坏B III類）3点がみられる。すべて埋土上層の出土である。

甕形土器（第54図1） 体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされている大形の甕（甕B Ia類）である。体部外面に篋削り調整がみられる。

鉄製品（第54図2～4） 2は刀子片である。身の一部と区、茎の一部が残存している。全体が錆で膨らんでいるが、現存長5.4cmを計る。3は両端を欠き、現存長9.8cm、幅1.1cm、断面形が長方形を呈する鉄製品である。性格は不明。4は現存長6.0cm、断面は直径0.3cm±の円形を呈する。釘かもしれない。

鉄滓は72個と多くを数える。総重量1900gを計る。比較的重く、外面が緻密なもの、軽く多孔質なものともみられ、土との焼結状態を示すものが多い。

### G-2住居址

#### 遺構（第22図・写真図版14b・15ab）

4.4m±×4.0m±の規模をもち、正方形を基本としたやや不整形形状を示す。埋土は主に4層で構成される。主体を占めるのは黒色～黒褐色土層であるが、3層に細分され粒状の焼土・炭化物を多く包含する。遺物は一括品を含む土器多数のほか、鉄器などが出土している。その下部から壁にかけてはシルト質の黄褐色～灰黄色土層が堆積する。壁高は西壁で50cm±を計る。床面は全体に柔かく、埋土との境界が不明瞭であった。

床面にこの遺構に先行するG-1住居址の柱穴2個が検出された。しかしそのピットへの貼り床の有無は確認できなかった。

この遺構はカマドをもたない。その意味では住居址としては例外的である。いちおう住居址として分類したものの、確実な点は不明である。

この住居址はG-1住居址を切っているが、G-3住居址および上部の一部が重複するG-101溝には切られていた。

#### 出土遺物（第54・55・56・57図・写真図版35・38b・39ab・42a）

当住居址には各種の遺物がみられ、また量的にも多い。しかしその大半は埋土（黒褐色土層）

からの出土で、直接当住居址に伴うものではない。土器は坏・高台坏・甕・壺がみられ土器以外では鉄製品、鉄滓、砥石、鞆の羽口、土鈴、土錘、足方が出土しており、特に鉄製品が多い。

坏形土器（第54図6～10・第55図1～3） すべてロクロ成形によるものである。第54図5と6は回転糸切り後に、体部下端と底部周辺部に手持ち篋削りによる再調整が施こされ、内面には篋磨き後黑色処理が施こされている。(坏B I<sub>b</sub>類・H<sub>2</sub>手法)。いずれも体部は内弯気味の立ちあがりをもつが、5は口唇部近くで僅かに外反する。7～9は体部下端及び底部全面に不定方向への手持ち篋削りが施こされているために底部切り離しは不明である。内面は篋磨き後黑色処理が施こされている(坏B I<sub>c</sub>類・H<sub>1</sub>手法)。いずれも内弯気味の立ちあがりをもち、口唇部下で僅かに外反する。10と第55図1～3は還元炎焼成の坏である。底部は回転糸切りで、再調整はみられない。体部の形態は、直線的に外傾するものが多く、ロクロ挽きによる凹凸が目立ち、全体に器高がやや低い。この他に凶化しなかった坏の破片は多数あり、底部のみられるものだけでも48個体を数える。内訳は坏B I<sub>a</sub>類5個、坏B I<sub>b</sub>類8個、坏B I<sub>c</sub>類22個、坏B II類2個である。

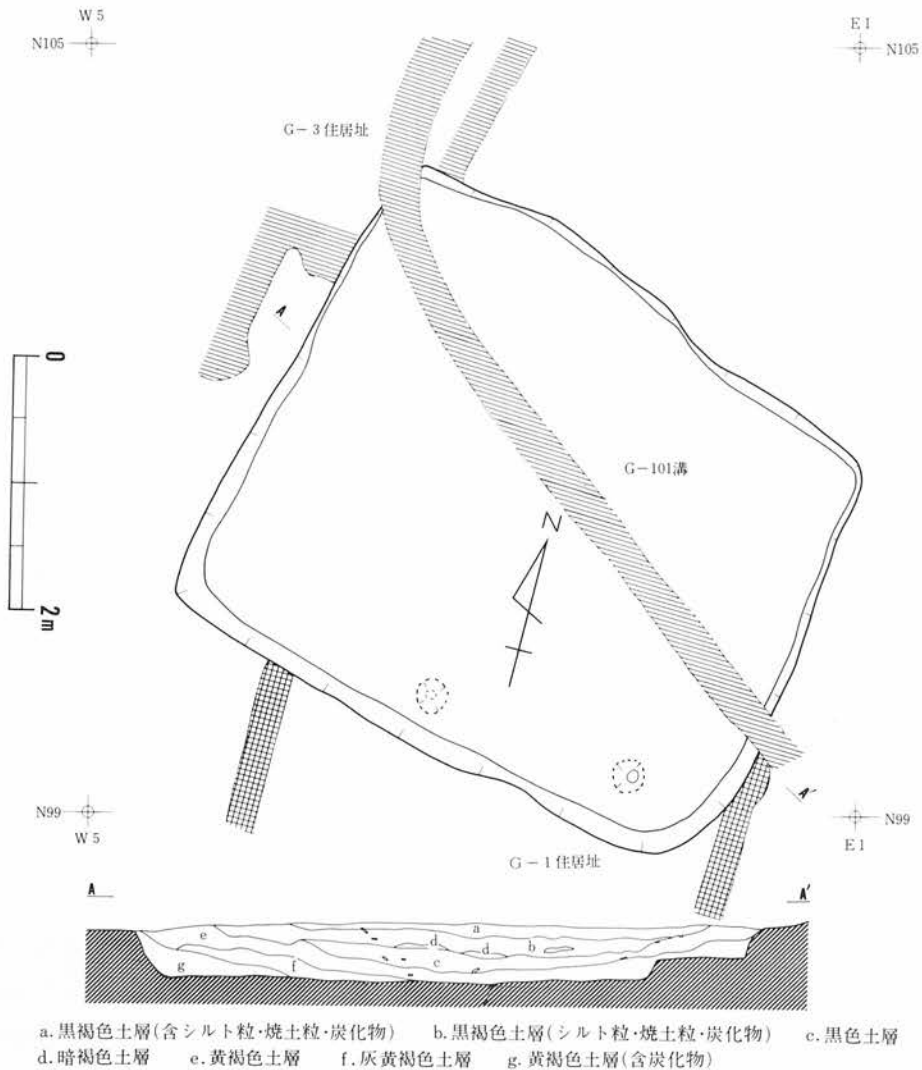
高台付坏形土器（第54図4～8） いずれも坏部上半を欠くが、坏部内面は篋磨き後に黑色処理がみられる。4～6は高台部が1cm±あり、裾が開くのに対し、7と8は高台部が0.5cm以下で短く、垂直に下る。いずれも内面に稜線をもつ。4と8は回転糸切り痕を中央部に残し高台部周辺部のみを撫でているが、5と6は底面全部を撫でている。

甕形土器（第55図9～12） 9はロクロ不使用の甕(甕A I類)で、口縁部は丸味をもって外反する。肩部は段を有せず頸部からそのまま体部に至る。口縁部には横撫で、体部には篋撫でによる調整がみられる。11～12はロクロ成形の小形甕(甕B I<sub>b</sub>類)で、ロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残す。口縁部はいずれも短く外反し、口唇部を上方に挽き出している。12はロクロ成形の小形甕の底部で、回転糸切りであり再調整はみられない。

壺形土器（第55図13・第56図1～5） すべて還元炎焼成の壺である。1と2は短頸壺の口縁部である。外反気味に開き、口唇部を上方に挽き出している。13も短頸壺で、口径が cm と広く、頸部から肩部にかけ「く」の字状に屈折し、体部は球胴形の脹らみを有す。内外面ともロクロ調整で、叩き目痕はみられない。3は底部のみであり、体部下端に平行叩き目が施こされている。

鉄製品（第57図1～11） 1は完形品の刀子である。刃部長11cm、茎長 8.0cm±で刃部中央で刃部幅は 1.0cmで背幅は 0.5cmを計る。関は比較的明確な段を有し、幅は 1.4cmある。刃部先端は丸味をもっており、関から茎部分で大きく曲っている。茎の断面は長方形を呈す。2も刀子で茎端を欠く。現存長は14.3cmで、刃部長10.5cm、幅 1.1cm±、背幅 0.6cmを計る。関は

刃部・背側とも緩い段を有し、刃部に研ぎ減りがみられる。茎の断面は長方形を呈す。3も刀子で、刃部端及び茎端を欠き現存長10.8cmを計る。銹化が著しく、各部の計測値は明確でないが、関は刃部、背側とも緩い段を有す。4も刀子で両端を欠き、現存長は7.3cmを計る。刃部幅1cm±、背幅0.6cmで、刃部の研ぎ減りが著しい。5は小形の鎌である。基部の先端を一部欠損しているが、基部を袋状に折り曲げており、刃部先端は細くなっている。6は中央が四角い棒状を呈し、そこから急に折れ、両端に方形の広がりをもつ鉄製品である。両端の一方は横幅1.3cm±・縦2.1cm±の不整の長方形を呈し、両側が内側に弯曲している。もう一方は、



第22図 G-2 住居址実測図

先端部が内側に曲がっており、縦 2.2cm 土、横幅 2.6cm 土の台形に近い形を呈し、2 個の穴が確認できる。ただし穴が 2 個だけかどうかは錆のため不明である。性格ははっきりしないが、手斧の可能性も考えられる。7 は縦 4.5cm 土、横 2.1cm 土の隅丸の方形を呈する環状の鉄製品であるが、性格は不明である。8 は 4.5cm × 1.3cm の板状の鉄製品であるが、穂摘み具様鉄製品と推定される。9 は長さ 8.9cm で先端が細くなり断面が方形を呈する鉄製品である。性格ははっきりしないが釘の可能性が強い。10 は現存長 3.3cm で両端を欠く細長い棒状を呈する。性格は不明。11 は現存長 9.2cm の偏平で細長い棒状を呈する鉄製品である。両端を欠き性格は不明である。

鉄滓は 4 個あり、総重量 120 g を計る。重く外面が緻密なものと、軽くて多孔質なものがみられ、後者は特に土との焼結状態を呈するものが多い。

砥石（第56図6） 両端を欠く不整五角形の砥石で 2 面に使用痕がみられる。

石帯（第56図7） 半分を欠損しているが、厚さ 0.55cm の丸柄の石帯である。幅 0.55cm の透孔を有する。裏面には装着用の小穴が 2 つ 1 組で 1 カ所だけ残存。

韃の羽口 土製の羽口の破片である。先端部が一部還元状態を呈す。

土鈴（第57図17） 撮み部及び下端の一部を欠く。

土錘（第57図12～16） 中央部に脹らみを有する管状の土錘である。4 個は一部欠損。

### G-3 住居址

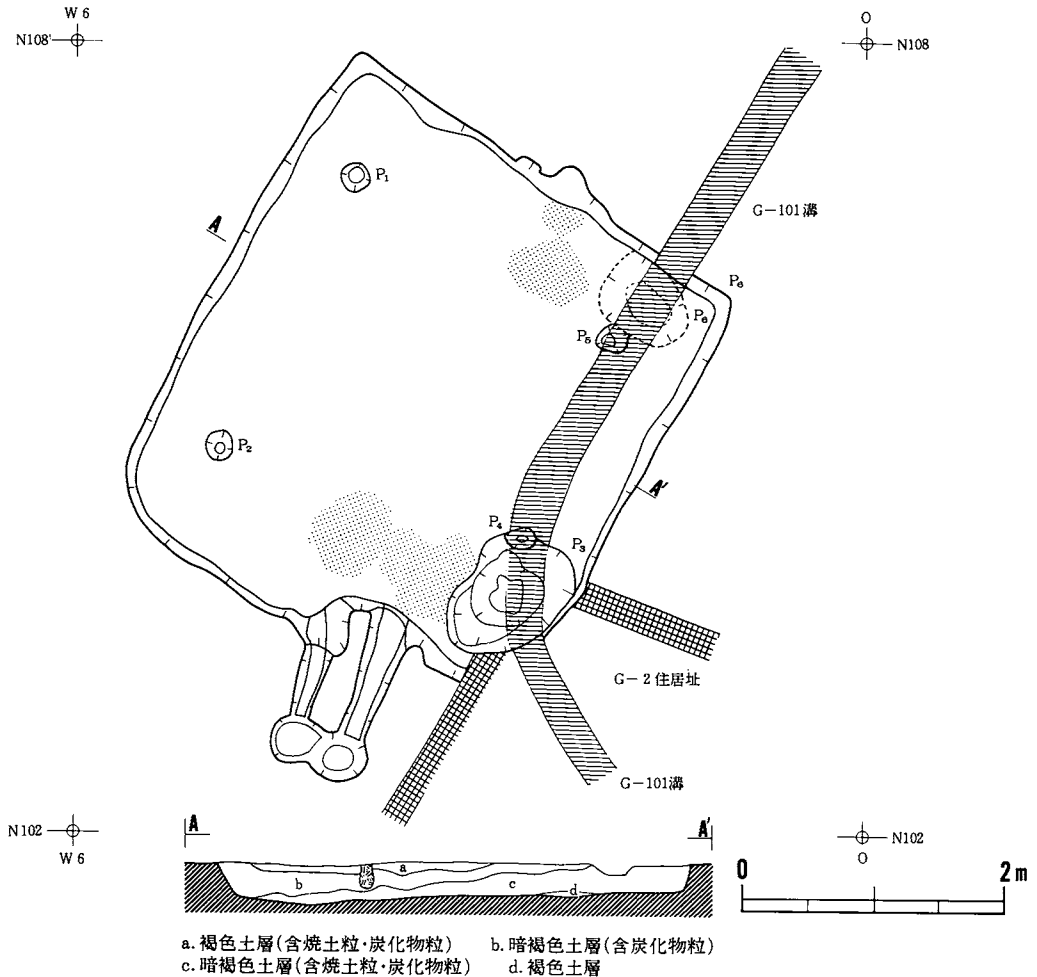
#### 遺 構（第23図・写真図版15c）

3.9 m 土 × 3.6 m 土の規模をもち、正方形の形状を示す。主軸はほぼ南北方向にある。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。5 層に細分されるが、いずれもやや粘土質のシルト層で、わずかに焼土粒や炭化物粒を包含する。壁高は西壁で 20cm 土を計る。床面は全体に柔かく不明瞭である。

床面上に検出されたピットには、P<sub>1</sub>（径 22cm 土・深さ 16cm 土）・P<sub>2</sub>（径 22cm 土・深さ 28cm 土）・P<sub>3</sub>（径 105cm 土 × 70cm 土・深さ 21cm）・P<sub>4</sub>（径 22cm 土・深さ 15cm 土）・P<sub>5</sub>（径 25cm 土・深さ 14cm 土）などがある。柱穴は配置的に P<sub>1</sub> と P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub> で構成されると考えられるが、深度はいずれも浅い。南東隅にある P<sub>3</sub> の埋土は、上半が炭化物粒を多く包含したシルト層、下半はわずかに炭化物粒や焼土塊・礫などを包含したシルト層である。その位置や形状・埋土などからは 1 号カマドあるいは 2 号カマドのどちらかとの同時存在が考えられるピットである。P<sub>6</sub>（径 75cm 土 × 55cm 土・深さ 18cm 土）は北東隅の床面下に検出されたが、貼り床の有無については明らかでなかった。埋土は粒状の焼土・炭化物を包含するシルトである。その位置や形状・埋土などからは 3 号カマドとの同時存在が考えられる。

この住居址には 3 基のカマドが存在する。1 号カマドは南壁中央部からやや東側に位置する。

上部構造は不明で、径60cm±の燃焼部の焼成面が残るだけである。煙道部は燃焼部より急激に立ち上がり、長さは90cm±を計る。煙道底面はほぼ水平で、煙出し部には煙道底面より深さ4cm±のピットが掘りこんである。2号カマドは1号カマドの東隣りに位置する。やはり上部構造は不明で、燃焼部は径70cm±の焼成面をもち、一部が1号カマドの燃焼部に重複する。煙道部は長さが140cm±で底面は下方へゆるやかに傾斜する。煙出し部には、煙道底面から深さ18cm±のピットが掘りこまれている。3号カマドは北壁中央部よりやや東側に位置する。燃焼部の焼成面にまでおよぶ削剝を受けており、径60cm±と径30cm±の現地性焼土が痕跡的に認められるだけである。煙道部・煙出し部とも存在の有無も含めて不明である。3基の先後関係は、3号カマドがもっとも先行すること以外は不明である。



第23図 G-3住居址実測図

この住居址は南東隅付近でG-2住居址を切って構築されている。また、上部をG-101溝にわずかに切られている。

#### 出土遺物（第56・58図・写真図版39ab）

当住居址の遺物は土器が中心で、器種は坏・高台坏・甕・壺で構成される。土器以外では鉄製品が3点出土している。

坏形土器（第56図8～11） すべてロクロ成形の坏である。8は酸化炎焼成の坏で、内面に篋磨き後黒色処理を施している。底部は回転糸切りで、再調整はみられない（坏B Ia類）。体部は内弯気味の立ちあがりをもち、やや器高が高い。9～11は酸化炎焼成の坏であるが、内面黒色処理はみられず、底部も回転糸切りで再調整はみられない（坏B III類）。体部の形態は、9と10のように直線的に外傾するものと、11のようにやや丸味をもって立ちあがるものがある。いずれも口径に比べ器高が低く、ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。

高台付坏形土器（第56図12） 坏部の大半を欠く酸化炎焼成の高台坏で内面に黒色処理はみられない（高台坏B III類）。高台部は1.1cmあり、大きく裾が開く。

甕形土器（第56図13） 体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされている大形の甕（甕B Ia類）である。口縁部は短く外反し、体部に脹らみをもたない。体部外面に下方向への篋削り調整がみられる。

壺形土器（第58図1） 還元炎焼成の広口壺の口縁部である。

鉄製品（第58図2～4） 3は長さ9cm±・幅1.7cm±の偏平で方形を呈する鉄製品で、長軸の両端に釘通しと思われる穴がみられる。長軸の上辺はやや厚くほぼ直線を呈するが、下辺は僅かに薄く、研ぎ減り状に中央部の幅が狭まる。穂摘み具様の鉄製品と思われる。2は刀子である。現存長13.4cmで、関近くで刃幅1.5cm、背幅0.5cmを計り、刃の先端が非常に細くなる。関から基部は銹化が著しく形態・計測値ははっきりしない。4は釘の先端部で上半を欠く。現存長3.5cmで断面は方形を呈する。

## H 区

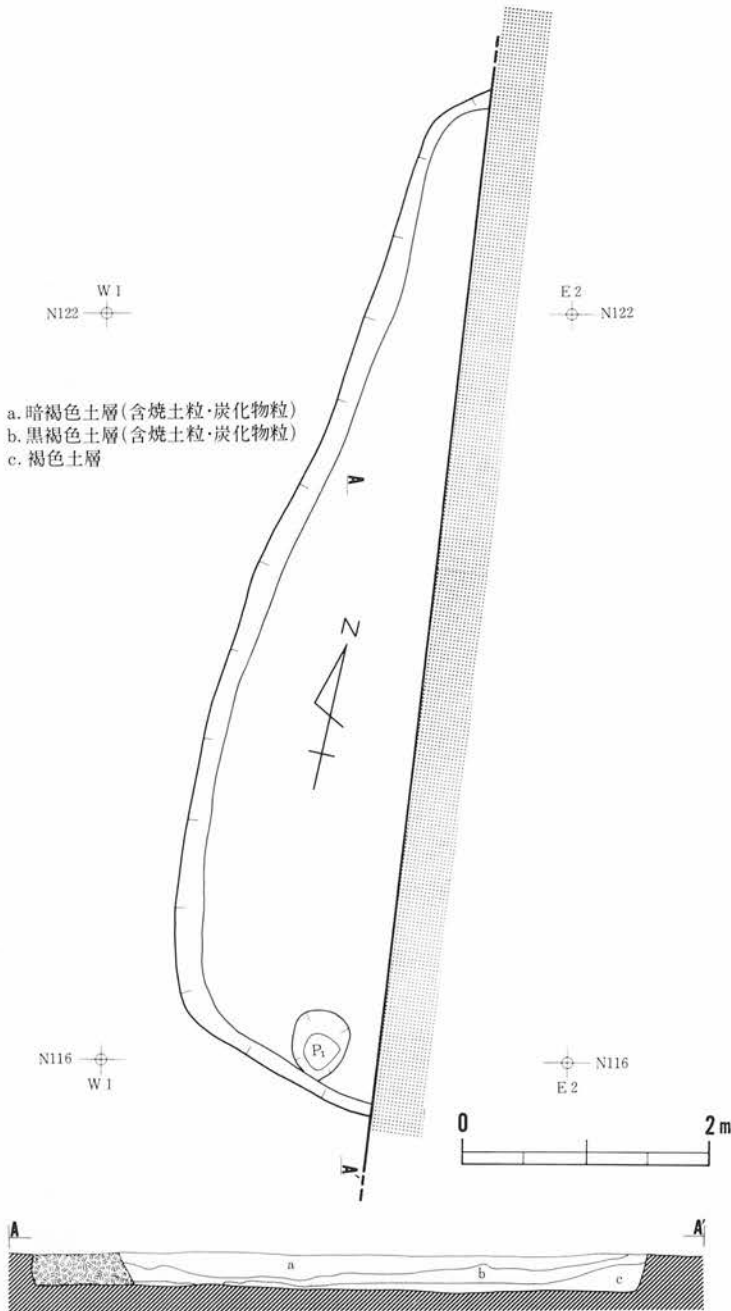
### H-1住居址

#### 遺構（第24図・写真図版16a）

住居址の大部分は調査区域外にあることや西壁ぞいに攪乱があることから規模・形状の詳細は不明である。南北での長さは5.4m±を計る。埋土は次の3層で構成される。a層は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色シルト、b層はa層より包含物の多い黒褐色土、c層は包含物の少ない褐色シルトである。壁高は西壁で40cm±を計る。床面は柔かく不明瞭である。



南西隅に検出されたP<sub>1</sub>（径55cm±・深さ33cm±）の埋土には、粒径1cm±の焼土塊が多く含



第24図 H-1 住居址実測図

離し技法、再調整の有無は不明である。内面は篋磨き後黒色処理されている（坏BⅠ類）。体部下半は内湾気味の立ちあがりをもつが、上半は緩く外反する。

まれる。柱穴は確認できなかった。

調査された範囲内にカマドは検出されなかった。

**出土遺物**（第58図・写真図版39b）

当住居址は部分的な調査であり、土器の量は僅少であるが、土器以外では鉄製品・鉄滓鞆の羽口・土錘・足方と各種の遺物がみられる。

坏形土器（第58図5・6）5はロクロ成形で、底部は回転糸切りで再調整はみられない。内面は篋磨き後黒色処理が施こされている（BⅠa類）。体部は僅かに丸味をもって外傾する。6もロクロ成形であるが、底部の器面が荒れているために切り

鉄製品（第58図8～12） 8は大形の刀子で、刃部・茎両端とも欠損しており、現存長 7.0 cmである。刃部幅 1.4cm、背部 0.4cm、茎幅 1.1cm、茎厚さ 0.7cmで、関は背側・刃部側共段を有す。9は刀子の茎部で刃部を欠く。茎部長6.1cmで先端が徐々に細くなる。茎部最大幅0.6 cmで、背側が平担で刃側がやや細くなっている。10は現存長11.7cm、最大幅 0.8cmの長い棒状の鉄製品である。断面は四角形を呈し両端に向い僅かに細くなる。両端共欠損しており、性格は不明。11は先端が細くなる釘状の鉄製品で一端を欠き、現存長は 4.7cmである。12も先端が細くなる釘状の鉄製品で一端を欠き、現存長は 5.8cmである。

鉄滓は13個あり総重量は 140 g である。軽くて外面が多孔質であり、土との焼結状態を呈するものが多い。

鑞の羽口（第58図7） 円筒形を呈する土製の羽口で、先端部は高度の熱を受け還元状態を呈し、鉄滓の付着がみられる。

土錘（第58図13～16） いずれも不整円筒形を呈し、中央部に脹らみをもつものともたないものがある。長軸に沿って孔が窄れ管状を呈する。

足方は土錘と共伴して出土。細長い川原石で、形態はC-3住居址のものに似ているため図化は省略した。計3個出土している。

## H-2住居址

遺構（第25図・写真図版16b・17abcde）

5.6m 土×5.5m 土の規模をもつほぼ正方形の住居址である。主軸は東西方向にある。埋土は部分的には焼土粒・炭化物粒の包含があるものの、シルトを主体とする単層である。Field Card にその性状を記載するにとどめ、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で20cm 土を計る。床面は全体的に柔かく不明瞭である。

床面には4個の柱穴が検出された。P<sub>1</sub>（径42cm 土×40cm 土・深さ73cm 土）・P<sub>2</sub>（径50cm 土×45cm 土・深さ52cm 土）・P<sub>3</sub>（径55cm 土・深さ65cm 土）・P<sub>4</sub>（径37cm 土×34cm 土・深さ67cm 土）である。カマドの南側から南壁沿いにかけてカマド袖部の基底部下方をえぐる不整形なP<sub>5</sub>（径30cm 土×80cm 土・深さ40cm 土）が検出された。壁と底部は凹凸を示し、全体的には摺鉢状を呈している。出土遺物には、内黒環形土器10点以上・甕形土器片・刀子1点・川原石1点などがある。遺物はピットの東側寄りに集中して出土する。完形品は含まれず、破損した2個～3個体分が密着状態で重なり、あるいは同一個体の破片が離れた位置にあるなど、まとまりのある出土状況ではない。袖部の基底部をえぐる形で掘られていることや出土した土器と床面出土の土器とは個体において区別されることなどから、この不整形ピットは遺物を投棄した後に何等かの理由で埋めもどされて、その上部にこの住居址が構築されたと考えられる。しかし、明確な貼り床は確認されなかった。

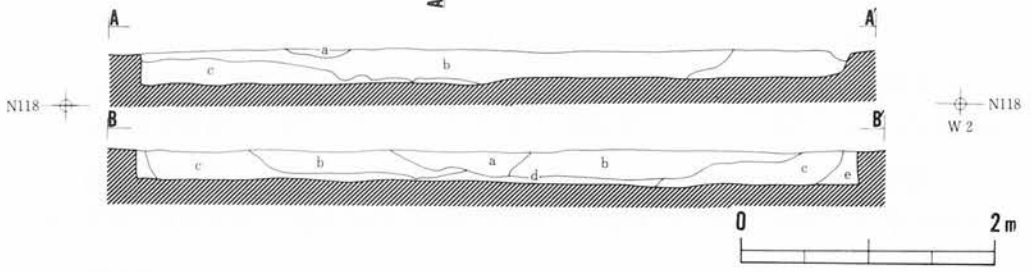
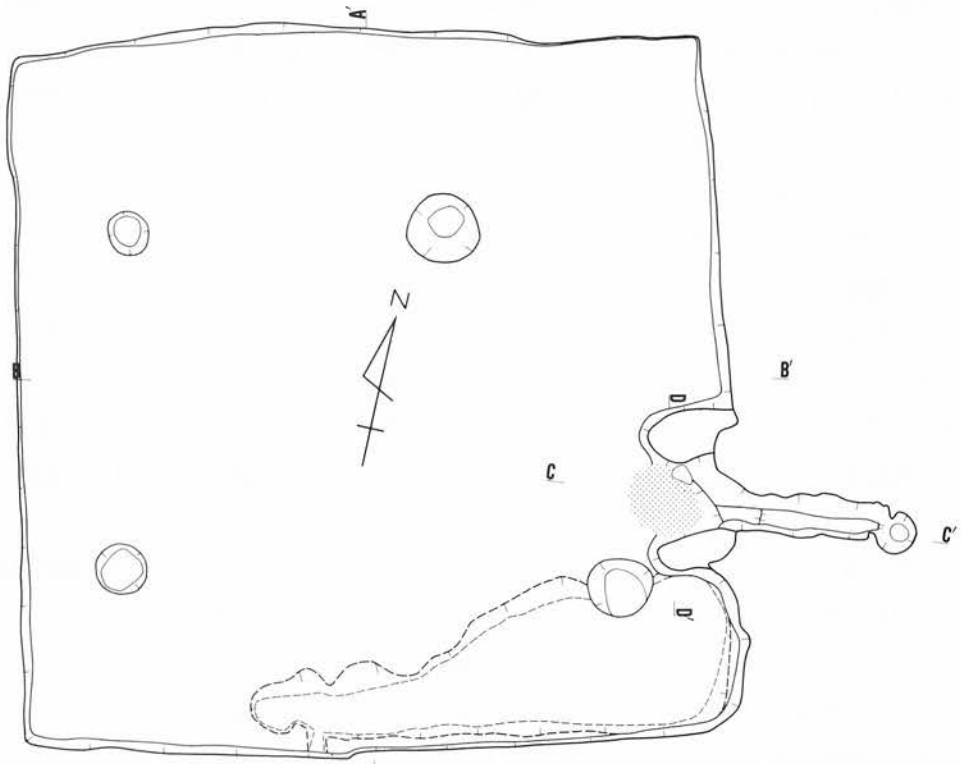
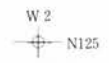
カマドは東壁の南寄りに位置している。天井部は崩壊し確認できなかったが、袖部はシルトで構築される。カマド幅 130cm ±・燃焼部幅50cm ±を計る。燃焼部に長径17cm ±の川原石が存在するが、袖部補強用のものの転落とみられる。燃焼部の底面はよく焼成をうけている。煙道部は東に 140cm ±延びており、底面は煙出し方向に漸次傾斜しながら下っていく。煙出し部では、壁のおさえとして煙道寄りに礫 3 個を半周させており、反対側には甕形土器の大形破片を使用していた。煙出し部には、煙道底面より深さ16cm ±のピットが掘り込まれている。

この住居址は I-101 溝と重複し、溝に切られている。

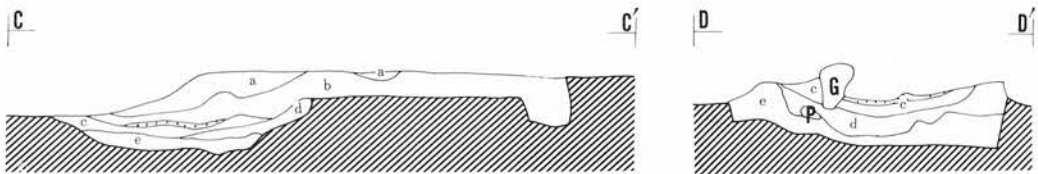
#### 出土遺物 (第59・60・61 図・写真図版35・36・39c)

当住居址は、力石 II 遺跡の中で最も遺物が多く、しかも各種の遺物がみられる。特に南東部の貼床下に検出されたピットからは、坏を中心に多数のまとまった土器が出土した。また鉄製品が17点も出土していることが特筆される。土器の器種は、坏・高台坏・蓋・鉢・甕・壺・羽釜で構成される。土器以外の遺物では、鉄製品をはじめ鉄滓・土錘・足方等各種の遺物がみられる。

坏形土器 (第59 図1 ~17) すべてロクロ成形によるものである。1 ~3 は、酸化炎焼成で内面篋磨き後黒色処理が施こされており、底部は回転糸切りで再調整はみられない (坏 B Ia 類類)。いずれも P<sub>6</sub> 出土のものである。体部の形態は、僅かに丸味をもって外傾するが、1 と2 のように口唇部近くで外反するものもある。全体に口径に比し器高がやや低い。4 ~9 は酸化炎焼成で内面に篋磨き後黒色処理が施こされており、底部は回転糸切り後再調整が施こされている。4 ~7 は体部下端及び底部周辺部に手持ち篋削り調整が施こされており、糸切り痕が中央部にのみ認められる (坏 B Ib 類・H<sub>2</sub> 手法)。体部下端の篋削りは横方向にみられるが、比較的粗い調整である。器形は全体に内弯気味の立ちあがりをもち、口唇部は丸味をもつが内そぎのような形をもつ。8 は回転糸切り後に体部下端のみ雑な手持ち篋削り調整の施こされている内面黒色処理の坏 (坏 B Ib 類・H<sub>5</sub> 手法) である。器形は体部下端に丸味をもち、内弯気味に立ちあがりをもち、口唇部下で僅かに外反する。口径に比べ器高が低い。胎土に金雲母を多く含む。9 は回転糸切り後に底部半分のみ手持ち篋削りによる再調整の施こされた内黒坏 (坏 B Ib 類・H<sub>4</sub> 手法) である。体部は直線的に外傾し、口径に比べ器高が低い。4 ~7 はロクロ成形で、再調整のため切り離しが不明の内黒坏である。10 ~16 は体部下端に横方向への篋削りとりと底部全面に不定方向への篋削りがみられる (坏 B Ic 類・H<sub>1</sub> 手法)。体部形態は、10、11、12 のように内弯気味の立ちあがりをもち、口径に比べ器高がやや高いものと、13、14、15、16 のようにやや丸味をもって外傾し、口径に比べ器高がやや低いものがある。8 には金雲母が多く混入しているし、16 の胎土は粗い。17 は底部のみ全面手持ち篋削りの施こされている坏で内面が黒色処理されている (坏 B Ic 類・H<sub>3</sub> 手法)。18 と19 はロクロ成形で、赤褐色を呈す坏で



- a. 暗褐色土層(含炭化物粒)
- b. 暗褐色土層(含焼土粒・含炭化物粒)
- c. 暗褐色土層(含焼土粒・含炭化物)
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層



- a. 褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- b. 暗褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- c. 褐色土層(カマド掘り方埋土)
- d. 暗褐色土層(カマド掘り方埋土)
- e. 暗褐色土層(カマド掘り方埋土)

第25図 H-2 住居址実測図

ある。内面黒色処理はみられず、底部は回転糸切りで再調整はみられない。赤褐色を呈するが胎土も緻密であり、焼きも非常に硬く、口唇部近くに重ね焼き痕らしきものもみられることから還元炎焼成の坏（坏BⅡ類）の範疇に入るものと思われる。18は口径に比べ器高が低く体部は僅かに丸味をもって外傾する。19は器高がやや高く、体部は外傾する。

高台付坏形土器（第60図1～3） 坏部はすべてロクロ成形で内面に篋磨き後黒色処理が施こされている（高台坏BⅠ類）。1は僅かに丸味をもって大きく開き、口唇部近くで外反する坏部をもち、高台部は高さ1cm±あり、「ハ」の字状に裾が開く。2・3は高台部と坏部の一部しか残存していない。高台部の高さは1cm以上あり、「ハ」の字状に裾が開く。

蓋形土器（第60図4） 頂部を欠くが、縁端部が強く屈曲し、内側に挽き出されている。内外面ともに篋磨きが施こされ、黒色処理されている。

鉢形土器（第60図5） ロクロ調整で内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。口縁部は短く外反し、口唇部を上方に僅かに挽き出しており、体部に微かな脹らみをもつ（鉢BⅠb類）。

甕形土器（第60図6～9） 6と7は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされている酸化炎焼成による大形の甕（甕BⅠa類）である。いずれも口縁部は短かく外反し、口唇部を上方に挽き出している。体部下方向への篋削りがみられるが、6の体部上半には、ロクロ調整以前に施こされた叩き目痕が一部にみられる。8と9はロクロ成形による酸化炎焼成の小形の甕（甕BⅠb類）で、上半部を欠く。底部は回転糸切りで再調整はみられない。

壺形土器（第60図10・11） 10は還元炎焼成の短頸壺の口縁部である。口縁部は緩く外反し口唇部を上下に挽き出している。11は還元炎焼成の底部破片である。底部の器肉が厚く、裾が僅かに外に張り出す。

羽釜（第60図12） ロクロ調整で内弯気味の口縁部をもつ酸化炎焼成の羽釜である。口縁部から鏝部が僅かに肥厚し、鏝部は短く、水平に張る。胎土に多くの金雲母を含む。

鉄製品（第61図1～16） 1は刃部の短い刀子である。現存長8.8cmで、茎端を欠き、刃部は4.7cmと短く、関から丸味をもって切先に至る。刃部最大幅1.2cmで、背は微かに丸味をもち、背幅0.6cmを測る。関は刃部側にのみ段を有する。2も刃部の短い刀子である。現存長7cmで刃部端・茎端とも欠く。刃部は4.8cm±と短く、関に最大幅を有し、そこから先端に向い狭まり、先端は尖状をなす。刃部最大幅は1.3cmで、関は背側、刃側とも段を有するが、刃部の段は緩い。茎幅は0.9cmを測り、断面は隅刃の方形を呈す。3は銹化が著しく明瞭でないが刀子の刃部から茎と推定される。刃部の大半を欠き、現存長7.7cmを測り、茎部の断面は不整形円形を呈す。4も刀子で刃部及茎両端を欠く。現存長9cmで刃部最大幅1.0cm、背幅0.4cmを測る。背・刃両側とも緩い段を有す。茎は幅0.7cm、厚さ0.2cmと薄く偏平な形を呈し、僅か

に屈曲している。5は銹化が著しく不明瞭であるが、欠損部の状態から刀子の茎と推定される。僅かに刃部を含む。6も銹化が著しく不明瞭であるが、欠損部の状態から刀子の刃部及び茎の一部と推定される。現存長 7.6cmを測る。7も刀子で茎先端部のみ残存。現存長 3.7cmで一部本質部残存。8は平根有茎腸折三角形式で大形の鉄族である。篋被の一部と基部及び腸袂端を欠く。鋒は長さ 4.3cm、幅 3.9cmで、篋被は幅厚さとも 0.9cmで方形を呈する。9は平根有茎三角形式の鉄族である。鋒の長さは 4.0cm、幅 2.9cmあり、篋被と茎の長さは 7.8cmを測る。篋被は断面方形を呈し、幅 1.0cm土を測るが、銹化が進んでおり、基部との境いは明瞭でない。10は鎌の先端部で現存長 6.3cmを測る。刃部は内弯する。11は両端を欠き、現存長 7.3cmの鉄製品で性格は不明。半分が直径 1.0cmの円形を呈しやや太く、もう一方は幅 0.7cmの方形を呈し細くなっていることからすると鎌の篋被と茎とも考えられる。12と13は穂摘み具様鉄製品の一部と考えられる。12は現存長 2.5cm幅 1.5cmを測り、短軸の中位に釘通しと思われる穴を有し、釘状の突起が微かにみられる。背幅は 0.4cmあり、刃部は非常に薄い。刃部側の側面に丸味をもち、片面には木質の残存がみられる。13は現存長 3.3cm幅 1.6cmを測り、鑄てはつきりしないが釘状の突起がみられる。12同様長軸の一辺に刃部がもうけられている。14は中空で筒形を呈す鉄製品であるが性格は不明である。現存長 4.5cmを測り、断面は円形を呈し直径 4.5cm、厚さ 0.4cm土を測る。縦方向に合せ目の亀裂がみられる。15は4本の棒状鉄製品が鑄と共に密着している。4本とも頭部が大きく、先端に向って細くなっていることから釘と思われる。先端が屈曲したり欠指したりしており、現存長は 6.8cmを測る。16は現存長 3.3cm幅 0.4cmの細長い棒状の鉄製品である。性格は不明。性格は不明。

鉄滓は大小合せ21個出土しており、総重量は 270gである。すべて体積に比べ軽く、外面が多孔質であり、土との焼結状態を呈する。

土錘（第61図17・18） 中央部に脹らみをもつ不整円筒形のもので、長軸方向に孔が穿たれている。

足方は計3個出土している。すべて自然の川原石であり、C-3住出土のものと類似しているため図化は省略した。石質は安山岩、硬砂岩等がみられる。

## I 区

### I-1住居址

遺構（第26図・写真図版18）

5.2m土×4.9m土の規模をもつほぼ正方形の住居址である。主軸は南東～北西方向にある。東壁と北壁はI-101溝・I-102溝に切られ明確ではなかった。埋土は2層で構成される。a層

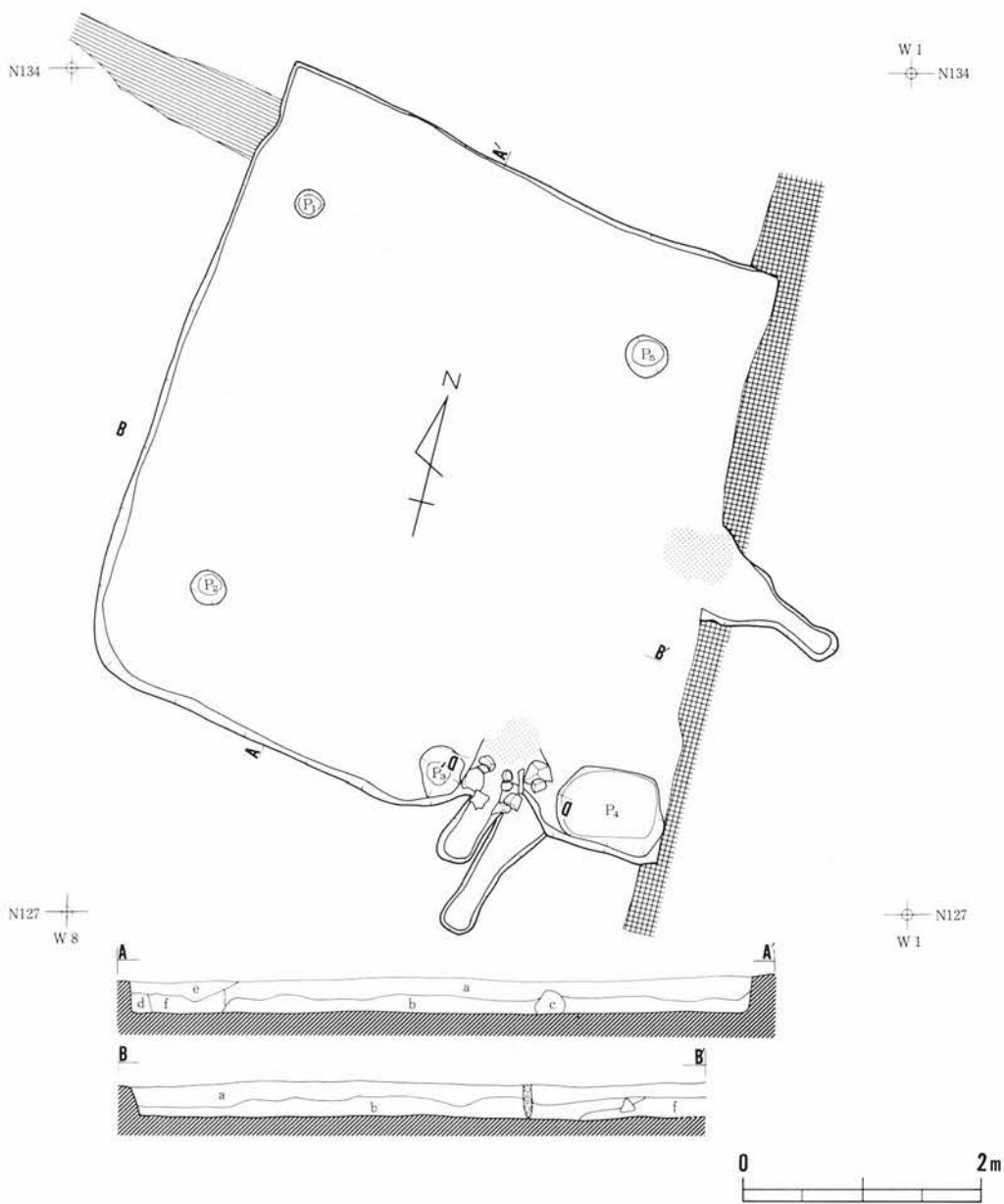
は粒状の焼土・炭化物を少量含む暗褐色シルト、b層はa層より包含物が少ない。褐色粘土質シルトである。壁高は南壁で31cm±を計る。床面は矛かく、調査段階で全体的に掘り過ぎがある。カマド東側のP<sub>4</sub>の検出面、一括して出土した大形甕形土器・坏形土器の出土面が床面である。床面からは鉄器・石帯なども出土している。

ピットは5個検出されている。P<sub>1</sub>（径24cm±・深さ23cm±）・P<sub>2</sub>（径27cm±・深さ37cm±）・P<sub>6</sub>（径35cm±・深さ40cm±）は配置的に柱穴を構成すると考えられる。南東部で対応すると考えられる1個は確認できなかった。カマド西側のP<sub>3</sub>（径45cm±×30cm±・深さ32cm±）の埋土は焼土・炭化物を含むシルトである。カマド東側のP<sub>4</sub>（径65cm±×93cm±・深さ40cm±）は楕円形を呈した摺鉢状ピットで、坏形土器・甕形土器が出土している。P<sub>4</sub>の埋土は焼土・炭化物を含みグライ化したシルトである。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は1号カマドとの同時存在が考えられる。この住居址には3基のカマドが存在する。1号カマドは南壁の東寄りに位置している。天井部は崩壊していて確認できない。袖部をシルトで構築し、その上部に長径20cm±の川原石を利用して、天井部を作り出したと考えられる。カマド幅80cm±・燃烧部幅30cm±を計る。燃烧部の中央部には支脚として川原石が置かれていた。煙道部は、比較的短かく南へ60cm±延びており、底面は煙出し方向に漸次傾斜して下っていく。2号カマドは1号カマドの東隣りに位置している。上部構造・燃烧部は痕跡がなく、煙道部・煙出し部のみを残している。煙道部へ立ちあがり付近の壁にくい込むように、1号カマド構築用と同じ川原石の検出をみた。このことから、2号カマドも川原石を利用して上部構造を構築していた可能性がある。煙道部は南へ120cm±延び、煙道底面は平坦である。煙出し部には煙道底面より深さ17cm±のピットが掘り込まれ、壁のおさえとして使用され崩壊時に転落したと考えられる甕形土器片が存在する。3号カマドは東壁の中央部に位置する。袖部は残存せず、径55cm±×40cm±の範囲に燃烧部の痕跡が確認できた。煙道部はI-101溝に切られ、ほとんど残存していない。煙出し部には、煙道底面より深さ13cm±のピットが掘り込まれている。3基のカマドの新旧関係は、燃烧部面の比高差や残存状態からみて、3号カマドがもっとも古く、2号カマド、1号カマドと移動すると考えられる。当住居址はI-101溝・I-102溝と重複し、いずれの溝にも切られている。

#### 出土遺物（第62図・写真図版36・40a・42b）

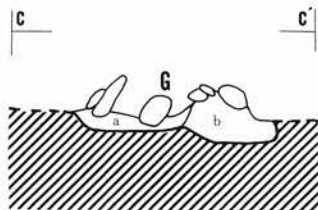
当住居址の遺物は坏・高台坏・甕等の土師器が主体を占めるが、埋土より弥生式土器も出土している。この他に石帯と鉄製品の出土をみる。土器はカマド及びカマド周辺の床面上から出土したものが大半を占める。

坏形土器（第62図1～4） 1はロクロ成形で、切り離しは回転糸切りである。内面は篋磨き後黒色処理が施こされている（坏BⅠa類）。体部は内弯気味の立ちあがりをもつ。2と3はロクロ成形であるが、いずれも底部のみ全面手持ち篋削りが施こされており切り離しは不明で



a. 暗褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)    b. 褐色土層(含燒土粒·炭化物)  
 c. 黃褐色土層    d. 褐色土層    e. E-102溝埋土    f. 黃褐色土層

a. 暗褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)  
 b. 暗褐色土層(含燒土粒)



第26図 I-1 住居址実測図



ある。内面に篋磨き後黒色処理が施こされている（坏BⅠc類・H<sub>3</sub>手法）。体部は丸味をもって外傾するが、3の方はやや器高が高い。4はロクロ成形で回転糸切り痕を有する還元炎焼成の坏である（坏BⅡ類）。体部は直線的に外傾する。

高台付坏形土器（第62図5） 坏部を欠損し台部のみ残存。器面が剥落しており、篋磨きや黒色処理の有無は不明。高台は高さ2cmもあり「ハ」の字状に裾に向って開く。

甕形土器（第62図6・7） 6はロクロ不使用の小形甕である（甕AⅡ類）。口縁部は短く外傾し、頸部に明瞭な屈曲をもたず体部に至り、体部に脹らみをもたない。口縁部は横撫で調整、体部外面は篋削り調整が施こされている。7はロクロ成形で酸化炎焼成の小形の甕（甕BⅠa類）である。口縁部は外反し、体部にほとんど脹らみを有しない。

石帯（第62図8） アルコース砂岩質の石帯である。丸柄で、透孔はみられない。裏面には装着用の小穴を3個所に有し、その一つの表面には鉄片の付着が認められる。表面の一部に何か塗っており黒い光沢のみられる部分も残存している。

鉄製品（第62図9～15） 9は大形の刀子で、茎・刃部両端とも欠損している。現存長は11.1cmで刃部幅1.7cm背幅0.7cmを測る。茎は1.0cm×0.8cmの方形の断面を有する。関は緩い段を有し、関より刃部中央に向って僅かに狭まるが、これは研ぎ減りによるものと思われる。10は平根三角形式の鉄族であるが、鋒しか残存せず、腸挟り及び茎の有無は不明である。現存長4.7cm、現存鋒最大幅2.9cm、厚さ0.3cmを測る。11は現存長9.1cm、中央部幅2cm、厚さ1cm±の偏平な鉄製品で、長軸の一端は僅かに両側に広がり、厚さはほぼ均一である。断面は方形を呈す。12は現存長7.6cm幅1.7cm～0.9cmと徐々に狭まる。断面は方形を呈し、厚さは均一で0.6cmを測る。11と12とも近接して出土しており同一個体の可能性が高い。いずれも性格は不明である。13はピンセット状の鉄製品で、屈曲部は丸味をもつ。幅は全体にほぼ均一で2.5cm±を測る。性格は不明。14は両端を欠き、幅0.5cm±の細い棒状の鉄製品である。現存長5.2cmで性格は不明である。15は中空の筒状を呈する鉄製品である。現存長は6.4cmで、直径2.7cmを測るが、銹化が著しい。測と呼ばれる、止め金具の一種と推定される。

弥生式土器（第62図16・17） 精製の蓋形土器とみられる土器2片が埋土より出土している。体部に細かい縄文を斜位に施文しており、蓋の上部に段をつけ擦消技法をなしている。蓋の上面は周縁より僅かに低く、擦消しが施こされている。内面は全面に丁寧な磨きが施こされている。胎土に金雲母を含む。

## 1-2 住居址

### 遺構（第27図・写真図版19a）

住居址の大部分は調査区域外にあり、西壁を中心とした一部が調査されたにすぎない。したがって規模・形状ともに不明である。埋土は2層で構成される。a層は粒状の焼土・炭化物を

多く包含する暗褐色シルト、b層は褐色粘土質シルトである。床面は柔かく不明瞭である。

ピットやカマドは調査範囲内には検出されなかった。

### 出土遺物 (第63図)

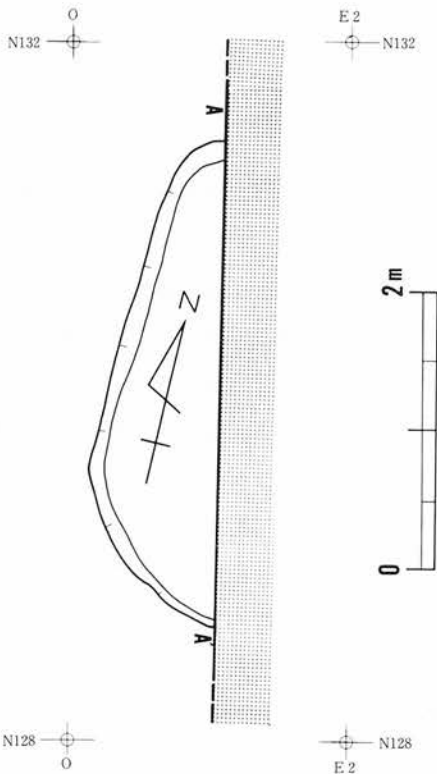
当住居址は部分的調査であり、遺物は極めて僅少である。図化出来たのは甕1点のみである。

甕形土器 (第63図1) ロクラ調整の施こされている酸化炎焼成の大形甕 (甕B Ia類) であり、口縁部は短かく外反し、口唇部を上方に挽き出している。

### I-3住居址

#### 遺構 (第28図・写真図版19b)

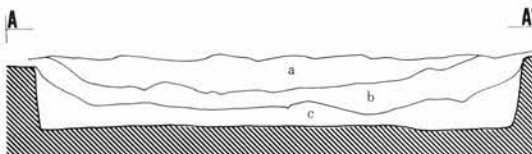
住居址の西側半分は調査区域外にある。さらに、検出面での形状把握が困難で、東壁と北壁



に掘り過ぎがあったことなどから詳細は不明であるが、南北で4.4m土を計る方形の住居址と推定される。主軸は南北方向にある。埋土は2層に大別される。a層は粒状の焼土、炭化物を含む黄褐色シルトで、I-102溝と重複する部分から北側ではグライ化する。b層は包含物がa層より多い暗褐色シルトである。壁高は南壁で28cm土を計る。床面は埋土との区別がつかず不明瞭であった。

床面には3個のピットが検出された。P<sub>1</sub> (径45cm土・深さ40cm土)・P<sub>2</sub> (径58cm土×48cm土・深さ27cm土)は、配置的には柱穴を構成すると考えられるが、P<sub>2</sub>の深さに問題がある。P<sub>3</sub> (径24cm土・深さ14cm土)は東壁寄りに検出された浅いピットで、焼土・炭化物を少量含んでいた。

カマドは北壁中央部に構築されている



- a. 暗褐色土層(含焼土粒炭化物粒)
- b. 暗褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- c. 褐色土層(掘りすぎ)

第27図 I-2住居址実測図

と推定される。天井部は崩壊しており確認できない。袖部はシルトで構築されている。燃烧部の中央に小形甕形土器を倒置させ支脚としている。燃烧部底面は良く焼成をうけていた。煙道

部は北へ延び煙出し部に続くと推定されるが、調査区域外にあるため断定はできない。

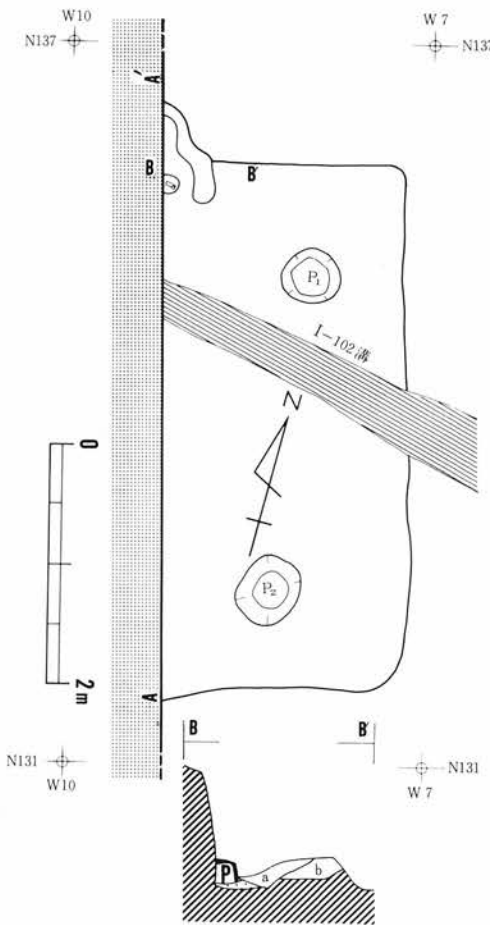
当住居址は、I-102溝と重複し切られている。また、埋土上面で当住居址を切る柱穴状ピットを多数検出している。

**出土遺物 (第63図・写真図版36)**

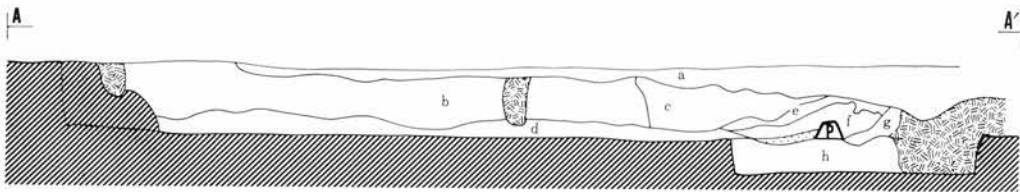
当住居址の出土遺物は土器だけであり器種は坏・甕・長頸瓶で構成される。

环形土器 (第63図2~4) いずれもロクロ成形で、切り離しは回転糸切りである。内面は篋磨き後黒色処理が施こされており、体部下端及び底部周辺部を手持ち篋削りによる再整がみられる (坏B I b類・H<sub>2</sub>手法)。器形は直線的に立ちあがるものと、内弯気味に立ちあがるものがあるが、いずれも口径に比べ器高が高い。

甕形土器 (第63図5・6) 5はロクロ不使用の小形甕 (甕A II a類) で、口縁



a. オリーブ褐色(含焼土粒・炭化物粒)  
b. オリーブ褐色(含焼土粒・炭化物粒)



a. 暗褐色土層 b. 黄褐色土層(含焼土粒・炭化物粒) c. オリーブ褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)  
d. 褐色土層(含焼土粒・炭化物粒) e. オリーブ褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)  
f. オリーブ褐色土層(含焼土粒・炭化物粒) g. オリーブ褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)  
h. オリーブ褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)

第28図 I-3 住居址実測図

部は外反し、頸部は僅かに屈曲をもち体部上半に僅かな脹らみをもつ。口縁部は内外面とも横撫で調整で、体部外面は上方向への篋削り、内面は横方向の篋撫でがみられる。6はロクロ成形の小形甕（甕B I b類）である。口縁部は外反し、口唇部を上方に挽き出している。

長頸壺（第63図7） ロクロ調整で還元炎焼成による。頸部を欠き、体部中位よりやや上に最大径を有す。高台部は断面方形を呈し、短い。

## J 区

### J-1 住居址

#### 遺 構（第29図・写真図版20abc）

住居址の東壁は調査区域外にある。この住居址は、埋土上面を粒状の焼土・炭化物を多く包含するシルトで覆われていて、J-51ピット・J-53ピット・I-101溝などの重複関係がはっきりせず、平面での形状把握が困難であったため、西壁の一部に掘り過ぎがある。南北では4.8m±を計る方形の住居址である。埋土は3層に大別される。a層は粒状の焼土・炭化物を少量包含する黒褐色土であり、遺物の出土もある。b層はa層より包含物の多い暗褐色シルト、c層は炭化物粒を多量に包含する暗黒色土であり、その上面には細かい繊維状の炭化物の広がりが認められる。壁高は西壁で43cm±を計る。床面は柔かく不明瞭である。

床面に検出されたP<sub>1</sub>（径30cm±・深さ44cm±）・P<sub>2</sub>（径27cm±・深さ45cm±）・P<sub>3</sub>（径25cm±×19cm±・深さ42cm±）は、柱穴を構成すると考えられる。床面を深さ3cm±掘り下げた時点でP<sub>3</sub>の西側に径1cm±の焼土塊の集積がみられたが、小規模である。さらに、P<sub>3</sub>の南側には焼土を多量に含んだ小ピットが検出されたが、土器片とともに鉄滓も出土しているため、J-53ピットとの関連が考えられる。

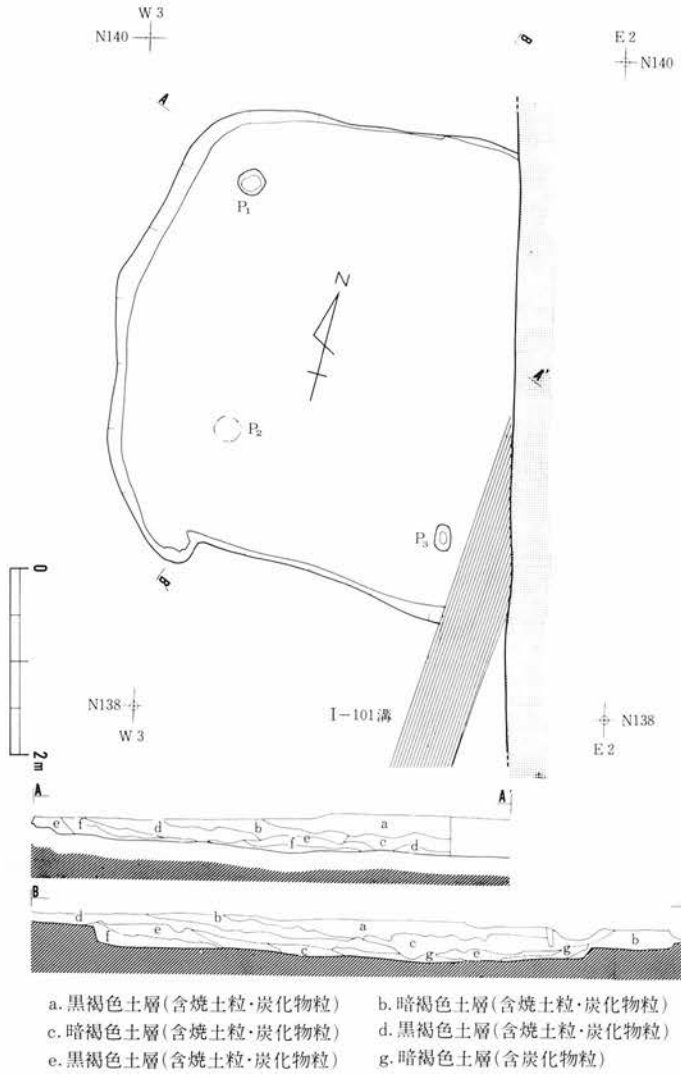
調査された範囲内にカマドは検出されていない。

当住居址は、I-101溝とJ-53ピットと切り合い関係にある。住居址の方がI-101溝より古い。しかし、J-53ピットとの新旧関係は把握できなかった。

#### 出土遺物（第63・64図・写真図版36・40b）

当住居址の遺物は、土器を主体としその他に鉄器・鉄滓・砥石・土錘・足方が出土している。土器の器種は坏・高台坏・甕で構成されるが、坏2点を除き他はすべて埋土からの出土であり、当住居址と直接結びつかない。その他の遺物も埋土からのものが主体を占める。

坏形土器（第63図8・9・第64図1～5）すべてロクロ成形である。63図8は体部下端及び底部全面に手持ち篋削り調整の施こされた酸化炎焼成の坏である。内面は器面が荒れており篋磨きは明瞭でないが、黒色処理はみられる（坏B I c・H<sub>1</sub>手法）。体部は内湾気味の立ちあがりを



もち、口径の割に器高が高い。9・64図1～5はすべて還元炎焼成の坏(坏BⅡ類)で、切り離しは回転糸切りによる。器形は底部から口縁にかけて直線的に外傾し、口唇部下で短く外反するものが多い。ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。3には火燂痕がみられる。

高台付坏形土器(第64図6・7) いずれも坏部の上半を欠くが、坏部の内面には篋磨き後黒色処理がみられる。高台部はいずれも1cm以下で、6は垂直に下り裾が僅かに突出す。7は「ハ」の字状に裾が開く。

甕形土器(第64図8～11) 9はロクロ不使用の甕(甕A類)で、口縁部は大きく外反し、頸部が「く」の字状を呈す。10と11は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整がみられる大形

甕（甕B Ia類）である。10は口縁部が強く外反し、口唇部を上方に挽き出している。体部上半にロクロ調整以前に施こされた叩き目痕がみられ、体部には下方向への篋削りが施こされている。11の口縁部は僅かに外傾し、口唇部を上下に挽き出しており、体部の中位にまでロクロ調整が及ぶ。8はロクロ成形の小形甕（甕B Ib類）で、切り離しは回転糸切りで、調整はみられない。

鉄製品（第64図1～13） 1は刃部の短い小形の刀子である。刃部・茎とも先端を欠き、現存長は4.4cmを測る。関は背側・刃部側とも緩い段を有し、関幅は1.1cmである。背幅は0.4cmで直線的に伸びるが、刃部は僅かに内弯する。2も刀子で、刃部、茎両端とも欠損しており、現存長8.8cmを測る。関は背側にのみ段を有する。刃部幅は中央近くで0.9cmを測り、刃部は研ぎ減りにより僅かに内弯する。茎は幅0.7cmで背側より刃部側が細くなる。3も刀子で刃部の先端と茎の大半を欠き、現存長は9.2cmを測る。銹化が著しく明瞭でないが、関は刃側に強い段を有し、背側は微かな段をもつと思われる。刃部幅は1.0cm±、茎幅0.6cmを測る。4と5は刀子の茎部と思われる。4は銹化が著しく明瞭でないが断面は方形を呈する。現存長は7.8cmで、茎幅0.8cm、厚さ0.7cmを測る。5は現存長5.3cmで、茎幅は0.8～0.5cm、厚さ0.3cmを測る偏平な茎である。6は銹化が著しく明瞭でないが、断面からすると刀子の刃部と考えられる。現存長5.5cmを測る。7は平根有茎腸袂三角形式の鉄鏃である。茎先端部と腸袂部の先端を僅かに欠くだけで現存長13.3cmを測る。鋒の長さ4.9cm、幅3.0cmとやや縦長で、篋被は銹化が著しく明瞭でないが、断面は方形を呈し、茎は径0.3cmとかなり細くなる。8は片丸造鑿箭式の鉄鏃であるが、篋被部の途中で欠損しており現存長6.6cmを測る。鋒の長さは1.2cmで篋被の断面は方形を呈す。9は両端を欠く棒状の鉄製品であり、出土状況から8と同一個体の可能性がある。半分が細身を呈することから篋被と茎の一部と考えられる。10は現存長1.9cmの鉄片であり、先端が僅かに屈曲していることから紡錘具の芯棒の糸掛部と推定される。11は幅6.2cm、厚さ0.4cmの偏平な鉄製品であり、一面に釘状の突起がみられることから穂摘み具様鉄製品の可能性があるが、刃部が明瞭でなく問題が残る。12と13はいずれも中空の円筒形を呈する鉄製品である。止め金具の一種かもしれない。12は現存長2.6cm、直径1.1cm、厚さ0.5cm±を測る。13は現存長3.2cm、直径1.6cm、厚さ0.2cm±を測り、筒の中に細い棒状の鉄片が銹着しているのがみられる。いずれも性格は不明である。

鉄滓は総計27個出土しており総重量320gを測る。すべて体積に比べ軽く、外面が多孔質で一部に土との焼結状態を呈するものがみられる。

砥石（第64図12） 小形の砥石である。一端に紐通しと思われる孔を有する砥石で、4面共使用されている。石質は細粒凝灰岩である。

土錘（第65図14～22） 管状で中央部に脹らみをもつ土錘であり、形状と規模に若干の相違

がみられる。

足方は3個出土しており、一部に鉤状の屈曲を有す細長い川原石である。C-3住より出土したものと類似するため図化は省略した。石質は粘板岩ホルンフェルスである。

## K 区

### K-1住居址

遺 構 (第30図・写真図版20d・21)

住居址の全容は西側の一部が調査区域外にあるために不明である。南北での長さは6.3m±を計る。主軸は南北方向にある。埋土は粒状の焼土・炭化物を含む暗褐色シルトの単層であり、部分的にブロック状の焼土がみられた。壁高は北壁で24cm±を計る。床面は全体的に柔かく不明瞭であった。床面では、K-101溝を境として北側部分では汚れの少ない砂質シルトがみられ、南側部分では焼土・炭化物による汚れたシルトが目立った。

ピットは5個検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は南壁寄りに、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は東壁寄りに存在する。P<sub>1</sub>(径105cm±×70cm±・深さ20cm±)の埋土には、焼土・炭化物が多く含まれている。P<sub>2</sub>(径70cm±×55cm±・深さ83cm±)は砂層まで掘り込まれた深いピットであり、埋土は焼土・炭化物が含まれた粘土質シルトである。P<sub>3</sub>(径75cm±×90cm±・深さ34cm±)は検出面から埋土下部までグライ化し、坏形土器・甕形土器を多く出土する。P<sub>4</sub>(径103cm±×74cm±・深さ23cm±)、P<sub>5</sub>(径40cm±・深さ18cm±)には焼土・炭化物が含まれている。P<sub>4</sub>の上縁部に灰白色の粘土塊の検出をみた。粘土塊は異地性のものである。

この住居址には2基のカマドが存在する。1号カマドは、北壁の中央部に位置している。天井部は崩壊していて確認できない。袖部はシントで構築されており、補強用の甕形土器が倒置して埋めこまれていた。燃烧部の底面は良く焼成をうけている。カマド幅160cm±・燃烧部幅50cm±を計る。煙道部の長さは135cm±を計り、底面は先端へ向い漸次傾斜して下っていく。煙出し部には、煙道底面より深さ8cm±のピットが掘りこまれていた。2号カマドは東壁の南寄りに位置する。上部構造・燃烧部ともに削剝を受け痕跡を残さない。煙道部は長さ100cm±を計り、底面は先端へ向いわずかに傾斜し上がる。煙出し部には、煙道底面より深さ15cm±のピットが掘りこまれていた。

重複するK-101溝に、この住居址は切られていた。

出土遺物 (第66・67図・写真図版37・41a)

当住居址の遺物は土器が主体を占めるが、鉄器も10点と多くを数える。土器は坏・高台坏・甕がほとんどで1号カマド及びその周辺部からの出土が大半を占める。この他埋土より弥生式土

器が6点出土した。

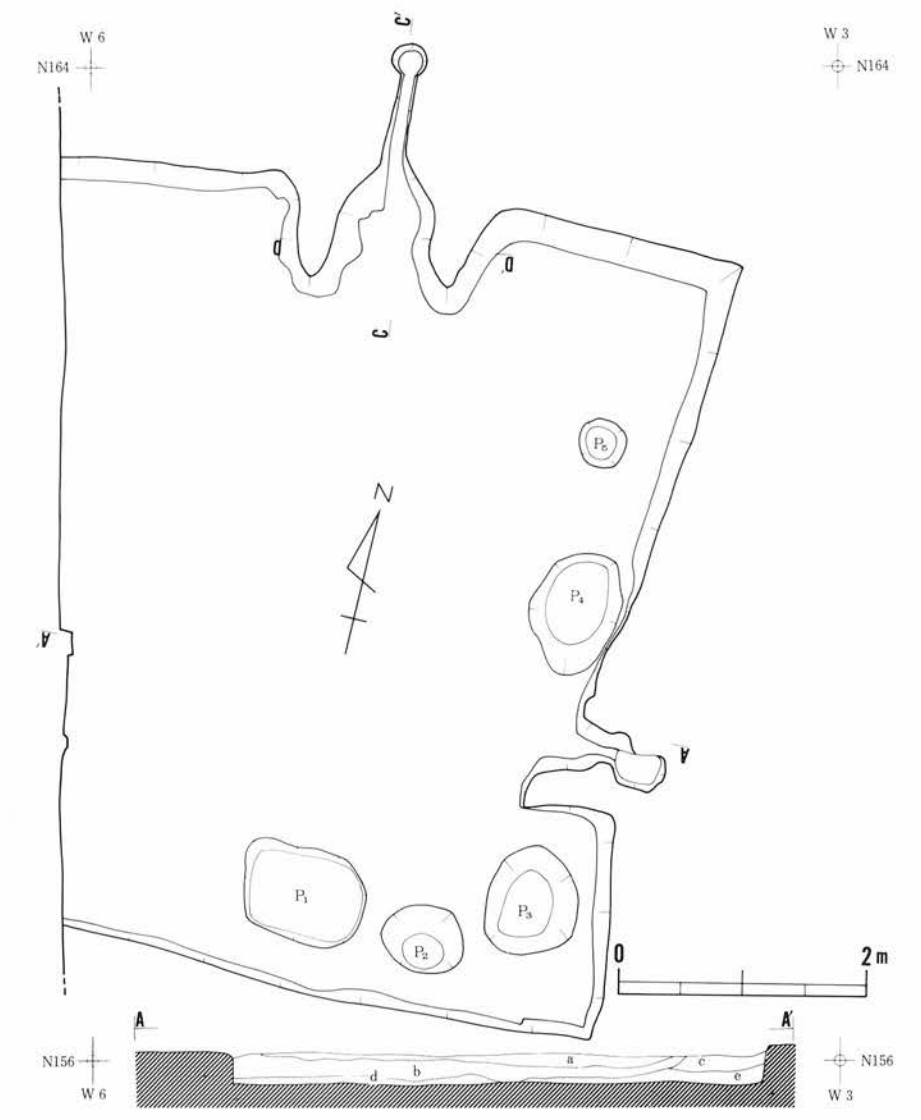
坏形土器（第66図1～4）　すべてロクロ成形で酸化炎焼成の坏である。1は回転糸切り後体部下端にのみ手持ち篋削り調整が施こされ、内面に上半が横方向で中位より下は放射状の篋磨き後黒色処理されている（坏B I b類・H<sub>3</sub>手法）。体部は僅かに丸味をもって外傾し、口唇部下で若干外反する。口径に比し器高がやや高い。2は体部下端及び底部全面に回転篋削りによる再調整が施こされ、内面には篋磨き後黒色処理がみられる（坏B I c類・W<sub>1</sub>手法）。体部は丸味をもって外傾し、口唇部近くで僅かに外反する。3と4は底部のみ全面に手持ち篋削り調整が施こされ、内面に篋磨き後黒色処理がみられる（坏B I c類・H<sub>3</sub>手法）。体部は外傾する。いずれも口径に比しやや器高が高い。

高台付坏形土器（第66図5～7）　いずれも坏部はロクロ成形で内面に篋磨き後黒色処理されている。坏部は大きく開き、口唇部近くで外反する。高台部は1cm±であり、6は接合部から裾が直線的に僅かに開き、他は垂直に下る高台部を有す。

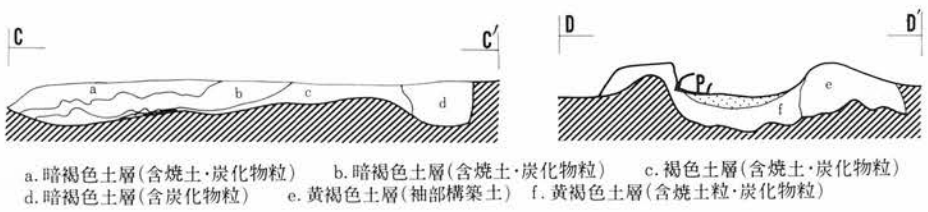
甕形土器（第66図8～10）　いずれもロクロ不使用の甕（甕A類）である。8は緩く外反する口縁部を有し、頸部は緩く屈曲し、体部にほとんど脹らみをもたない。口縁部は横撫で調整体部外面は篋削り、内面には刷毛目調整が施こされている。10は短く外傾する口縁部をもち、頸部は緩く屈曲し、体部は脹らみをもたない。口縁部は横撫で、体部外面には篋削り、内面には横方向の撫で調整がみられる。9は外反する口縁部を有し、頸部は緩く屈曲する長胴甕である。調整は口縁部に横撫で、体部篋削りがみられる。

鉄製品（第67図1～10）　1は刀子である。刃部と茎部両端を欠き、現存長11.1cmを測る。関は背側に明瞭な段を有すが、刃部側は緩い段で、刃部は研ぎ減りにより緩く内弯する。2は小形の刀子で全長7.1cm、刃部長は3.3cmを測る。関は刃部側にのみ緩い段を有し、関幅0.7cmで切先に向い緩くカーブする。茎は背側に僅かに反る。3も刀子であり、刃部と茎部両端を欠き、現存長9.9cmを測る。関は背側にのみ段を有し、関幅は1.3cmである。茎幅0.8cmで厚さ0.5cmを測る。4も刀子で刃部の一部のみ残存しており、現存長3.8cmを測る。5は平根有径腸挟三角形の大形鉄鏃である。茎先端部を欠き現存長10.7cmを測る。鋒長5.3cm、鋒幅3.8cmで、腸挟部は長さ1.0cm±で鋭い。篋被は長さ2.6cm、幅1.0cm±、厚さ0.5cmを測り、断面長方形を呈する。茎は幅・厚さとも0.5cmの方形を呈する。茎と篋被の境いは緩い段になっている。6は雁股式の鉄鏃である。鋒幅は4.8cmで僅かに両外に丸味をもって反る。全体に錆で脹らんでいる。茎の先端を欠き、現存長は8.6cmで茎の断面は円形を呈す。7はピンセット状の鉄製品で、屈曲部は直角に折れ、頭部に円形の撮状の突起を有す。性格は不明である。8は2cm～1.5cmの幅をもち、厚さ0.5cmの偏平な鉄製品である。穂摘み具様の鉄製品とも考えられるが、欠損部でも刃部は明瞭でなく疑問が残る。9は幅0.9cm、厚さ0cm、長さ6.8cmで





a. 褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)    b. 褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)    c. 褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)  
 d. 暗褐色土層    e. 褐色土層



a. 暗褐色土層(含燒土·炭化物粒)    b. 暗褐色土層(含燒土·炭化物粒)    c. 褐色土層(含燒土·炭化物粒)  
 d. 暗褐色土層(含炭化物粒)    e. 黃褐色土層(袖部構築土)    f. 黃褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)

第30図 K-1 住居址実測図

両端を短く折り曲げた鉄製品である。一方は先が尖る。性格は不明である。10は現存長9cmで幅1.0cm±、厚さ0.4cmの鉄製品で、長軸の長側とも平である。性格は不明。

弥生式土器(第67図11) 埋土上部より6片出土している。いずれも甕か壺の体部で、細かい捺糸文が施文されている。

## (2) ピット・墓壇

### B-51ピット(第31a図)

B-4住居址の北東隅に隣接する位置にある。調査上の手違いから底面を掘りすぎてしまったが、径200cm±・深さ14cm±を計る円形ピットである。埋土は、わずかに炭化物粒を包含する暗褐色土層の単層である。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

### F-51ピット(第31b図)

東側が調査区域外にあるため詳細は不明であるが、南北での長さが90cm±・深さは14cm±の不整形ピットである。埋土は暗褐色土層の単層で、多くの焼土粒・炭化物粒が包含される。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

### F-52ピット(第31c図・写真図版22b)

E-3住居址の北壁の外方に位置する。径145cm±・中央部での深さ24cm±を計る不整形円形ピットである。埋土は2層に分けられる。上層は粒状の焼土・炭化物や炭化材を包含する色褐砂質シルト層である。東側半分の上部には原形を良く保った小さな材状の炭化物が一面に広がり、部分的には焼土塊を混じえている。その上面に多くの土器片が分布する。埋土下層は黄橙色粘土質シルト層で、わずかに粒状の焼土と炭化物を包含していた。

出土遺物には埋土中から得られた坏・高台付・甕・壺等の土器があるが、いずれも小破片であり図化は省略した。坏はロクロ成形で回転糸切り後体部下端に手持ち篋削りが施こされており、内面に篋磨き後黒色処理がみられる(坏B1b類・H<sub>0</sub>手法)。高台坏は内面篋磨き後黒色処理されたものである。甕はロクロ不使用の甕(甕A類)だけである。壺は還元炎焼成によるものであり、ロクロ調整のものと内外面に叩き目を残すものがある。

### G-51ピット(第31d図・写真図版22e)

F-2住居址の北壁外方に隣接する位置にある。径120cm±×110cm±の規模をもち、長方形に近い不整形な形状を示す。深さは30cm±を計る。埋土は2層に分けられる。上層は粒状の焼土・炭化物を含んだ褐色土層、下層は包含物がほとんどみられない黄橙色粘土質シルト層で構成される。土層断面での観察では上層の下底面に炭化物の薄層が不連続に分布することが知ら

れた。南壁に接し、径50cm±×30cm±の現地性焼土が広がるが、それがもつ内容は不明である。

出土した遺物は土器の細片が少量であることから、記述・図化は省略した。

#### **G-52ピット** (第31e図・写真図版22c)

G-51ピットの北々西 2.4m±に位置する。径 100cm±・深さ16cm±を計り、楕円形の形状を示すピットである。埋土は2層に分けられ、上層は粒状の焼土・炭化物を多く含んだ黒褐色土層、下層は包含物がほとんどみられない黄褐色土層で構成される。

埋土上層から土器の小破片がわずかに出土したが、記述・図化は省略した。

#### **G-53ピット** (第31f図)

F-2住居址の西壁外方へ位置する。径 100cm±・深さ20cm±を計る不整円形ピットである。埋土は黒褐色土層の単層で占められ、最上部に粒径の大きい炭化物が多く分布するほか、全体に炭化物粒が多く含まれる。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

#### **G-54墓壇** (第31h図)

G-1住居址の西壁外方に位置する。径 110cm±×75cm±の規模をもち、東北東-西南西に長軸をもつほぼ楕円形の形状を示す。深さは16cm±を計る。下顎骨と歯の一部を残した頭部を東北東に向けて仰臥させ、折り曲げた膝を西北西へ倒した屈葬の形態をとる。体部で残るのは肋骨・大腿骨・下腿骨のそれぞれの一部だけである。

副葬品には銅製キセル1点と寛永通宝6枚がある。また肋骨のそばに長さ18cm±の鉄片1点が出土したが、用途・性格は不明である。

#### **H-51ピット** (第31g図・写真図版22f)

H-1住居址の南東隅外方に隣接して位置する。径 110cm±×93cm±・深さは17cm±を計り、断面がほぼ浅皿状の形状を示す楕円形ピットである。埋土は暗褐色シルト層のほぼ単層で、粒径1cm±の焼土塊や炭化物粒を包含する。底面には繊維状の炭化物が広く分布するが、二次的に移動した異地性のものである。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

#### **I-51ピット** (第31i図)

I-1住居址の南西隅外方に隣接して位置する。径 160cm±×135cm±・深さ10cm±を計り、楕円形の形状を示すピットである。底面にやや凹凸があるものの、断面はほぼ浅皿状を示す。埋土は、粒状の焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層の単層で占められる。底面は炭化物粒を含んだ焼土塊に全体を覆われているが、その焼土塊は二次的に移動した異地性のものである。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

#### **J-51ピット** (第32b・67図・写真図版23abcd・41b)

J-1住居址の北壁外方に隣接して位置する。ピット周辺はいわゆる“地山”面が一段低く半円状の落ちこみとなって調査区域外へ続く。そこに堆積した炭化物粒を多く含む黒褐色土層を掘り下げていったが、まだ平面での形状把握ができないうちに鎌・刀子の遺物が出土した。その面からわずかに下位で平面形の把握がなされたが、周囲の遺物の出土状況などから考え、このピットの埋土上部に包含されていたものと判断した。径 180cm±× 115cm±・深さ30cm±を計る不整な楕円形に近い形状を示す。底面には大きな凹凸がみられる。埋土は3層で構成される。上層は粒状の焼土・炭化物を包含する暗褐色土層、中層は暗褐色土層、下層は底面を覆う炭化物の薄層である。壁は燃焼を受けて厚さ1cm±におよぶ焼土層が形成されている。底面には焼成変化を示す層は形成されていないが、全面が赤褐色焼土で覆われる。その状態からは二次的な移動を伴う焼土ではなく、現地性のものと把握された。このピットは燃焼を伴うなんらかの施設として利用されたものと考えられる。

出土遺物には埋土中から得られた鉄製品と土器がある。しかし、土器は小破片であり量的にもわずかなので、記述・図化は鉄製品についておこなった。第67図12は刃部端及び基端を欠くが、現存長19.2cmもある大形の刀子である。刃部幅は関近くで1.4cm、中央部で1.0cmを測り切先に向い直線的に延びる。背幅は0.25cmの平造りで全体に細身である。茎は幅1.0cm～0.7cmと先端に向い徐々に狭まり、断面は長方形を呈する。第67図13は鎌で、全長19.5cmの完形品である。刃部は基部から先端に緩く内弯する。基部と思われる部分は折返し等は見られないが幅2.8cmと広く、先端部に向い徐々に狭まる。

#### J-52ピット (第32a図)

J-51ピットの北側に隣接して検出された。J-51ピットと同様に“地山”面の落ちこみ部分に検出されたもので、上位を黒褐色土層で厚く覆われていた。径80cm±・深さ12cm±を計り断面が浅皿状の形状を示す不整円形ピットである。埋土は、粒状の焼土・炭化物をわずかに含む暗褐色シルト層の単層で占められていた。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

#### J-53ピット (第31j図・写真図版23e)

J-1住居址の南壁と一部が重複し、住居址を切っている。I-101溝とも重複し、それに上半部を切られている。東側約 $\frac{1}{2}$ が調査区域外にあるため詳細は不明であるが、南北で180cm±の長さを計り、深さは12cm±である。形状は方形を示すと推定できる。下部に残る埋土は、粒状の焼土・炭化物を多く包含する暗褐色土層で占められ、底面は繊維状の炭化物に全面を覆われる。壁には燃焼を受けた結果生じた焼土層が全体にみられ、底面中央部では径50cm±×40cm±の範囲に焼成面が認められた。同様の状態はJ-51ピットにも共通するもので、燃焼を伴うなんらかの施設として利用されたものと考えられる。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略した。

#### **J-54ピット**（第32c図・写真図版23f）

J-1住居址の南壁外方に位置している。径 130cm±・深さ20cm±を計る円形状ピットである。北東壁際の底面には小ピット（径60cm±×50cm±・深さ15cm±）を伴う。埋土は、粒状の焼土・炭化物を包含する暗褐色粘土質シルト層の単層で占められ、北壁ぞいの一部には異地性焼土の小規模な分布がみられた。

出土遺物には土器の小破片がわずかにあるにすぎず、記述・図化は省略する。

#### **J-55ピット**（第32f図・写真図版24a）

I-3住居址の北東隅外方に位置する。このピットの周辺部の“地山”面がグライ化することなどから平面での形状把握がなされないまま、底面直上に分布する炭化材の存在から確認できたピットである。したがって形状・規模の詳細な不明であるが、残存部で径80cm±×60cm±をもち、楕円形の形状を示す。炭化材の大部分は小片であり、散在する状態にあった。

このピットに固有の遺物は確認できなかった。

#### **K-51ピット**（第32e図・写真図版24b）

K-1住居址の北東隅外方に位置する。径 150cm±× 110cm±・深さ40cm±を計り、楕円形の形状を示す。埋土は3層に細分できる暗褐色土層で構成される。上層ほど粒状の焼土・炭化物の包含が多い。このピットはK-52ピットと一部重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物は次のK-52ピットの項で記述する。

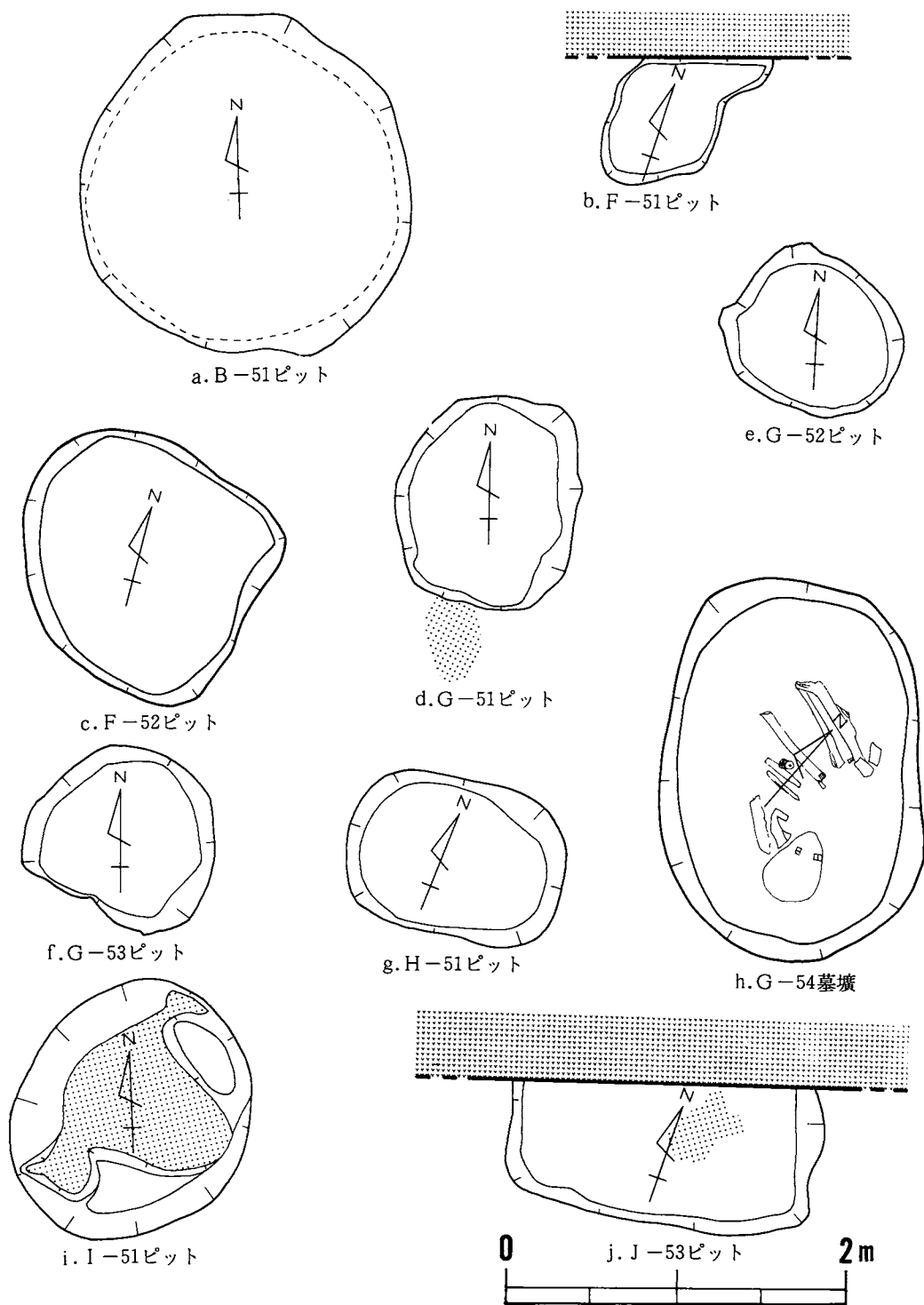
#### **K-52ピット**（第32d図・写真図版24b）

K-51ピットと重複して検出された。径75cm±×70cm±・深さ8cm±を計り、ほぼ円形の形状を示す。埋土は、粒状の焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層のほぼ単層で占められる。底面西側には異地性の焼土塊が分布していた。

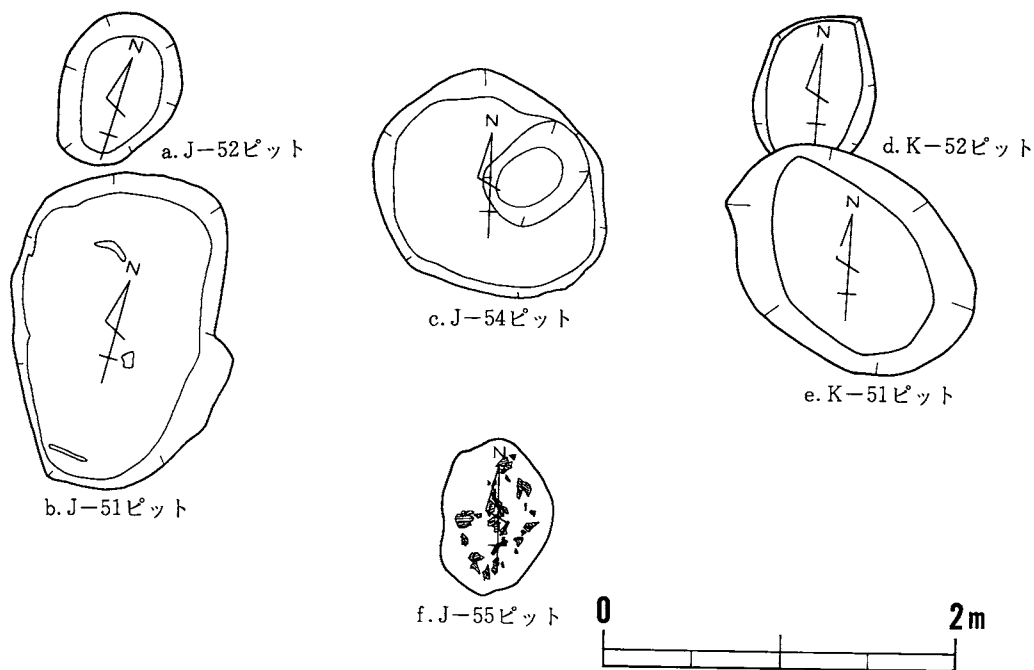
出土遺物については、調査時に不手際があつてK-51ピットとK-52ピットとの遺物を混同したため、一緒に記述する。遺物は土器だけで量も僅少であり、すべて小破片で図化出来るものはない。坏はロクロ成形で内面黒色処理の施こされた坏（坏BⅠ類）である。甕はすべて酸化炎焼成の甕である。この他に還元炎焼成の短頸壺の小破片がみられる。

### **(3) 溝 跡**

検出された溝跡は合計11条である。現状土地利用の水田に伴う溝跡は存在せず、いずれも遺構検出面で確認されたものである。全遺構について記述をおこなうが、出土遺物については量的に僅少で、しかも遺構に固有のものはみられないため、遺構のあとにまとめて記述する。



第31図 ピット実測図(1)



第32図 ピット実測図(2)

**E-101溝** (第31a図・写真図版24c)

E-1住居址と重複してほぼ東北東～西南西方向に走り、両端が調査区域外にでる溝である。西側約 $\frac{1}{2}$ の地点から2条に分かれる北側はE-103溝である。上幅は160cm±～80cm±であり東側にゆくにしたい幅広となる。溝底幅40cm±～10cm±・深さ20cm±を計る。断面での形状は底部がゆるやかに弯曲して壁の立ちあがりもなだらかである。とりわけ北壁がなだらかである。東西における溝底高に差はなく、ほぼ平坦である。埋土は3層で構成される。上層は褐色シルト層、中層は粒状の炭化物を包含する暗褐色シルト層、下層はわずかに三価鉄の集積がみられる褐色シルト層である。

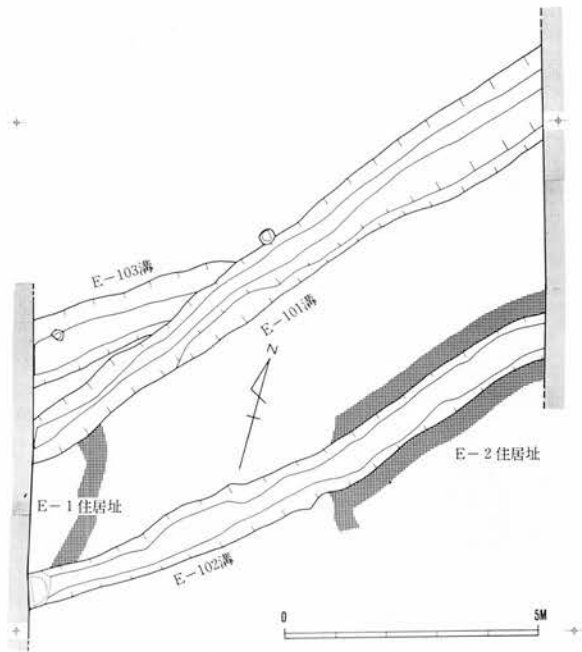
この溝は重複するE-1住居址を切っている。

**E-102溝** (第33a図・写真図版24c)

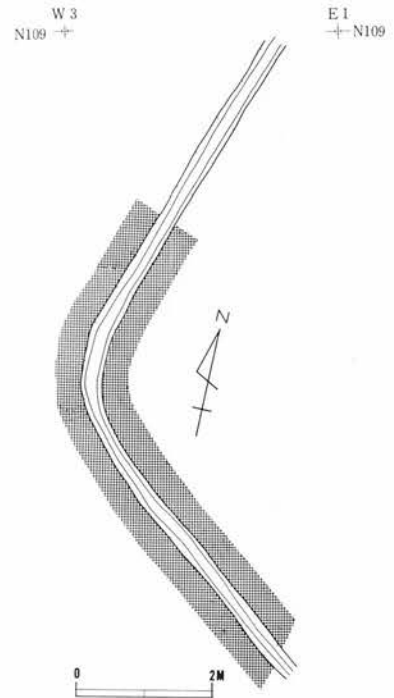
E-101溝の北側をほぼ併行して走り、やはり両端は調査区域外へでる溝である。上幅は90cm±～60cm±で、西側の幅が狭い。溝底幅は50cm±～25cm±・深さ30cm±を計る。底部はゆるやかに弯曲して壁の立ちあがりもなだらかである。東西における溝底高に差はなく、ほぼ平坦である。埋土は下部がわずかに粘土化している黄褐色シルト層の単層で占められる。

この溝は重複するE-2住居址の床面を掘りこんで構築されていた。

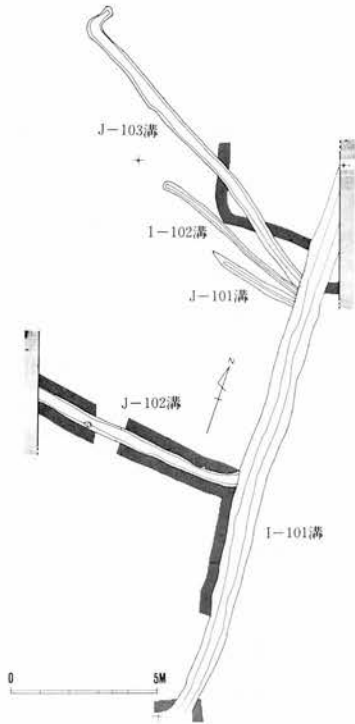
**E-103溝** (第33a図・写真図版24c)



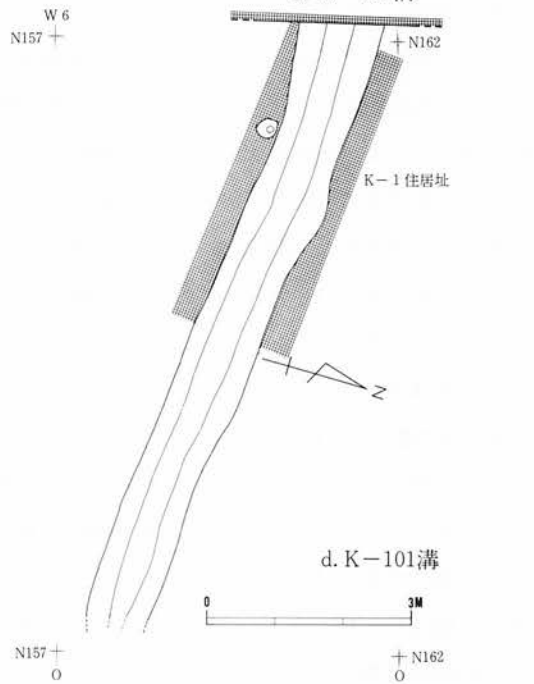
a. E-101溝・E-102溝・E-103溝



b. G-101溝



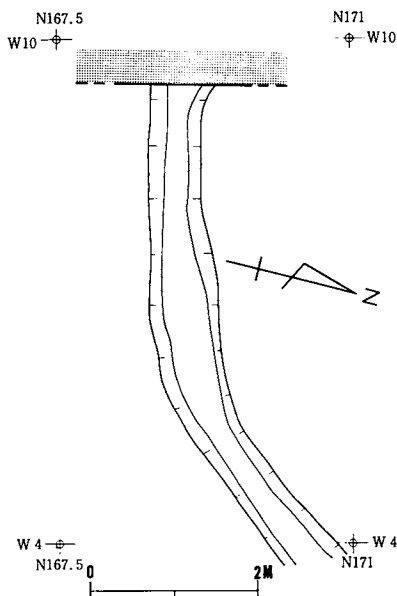
c. I-101溝ほか



d. K-101溝

第33図 溝跡実測図





第34図 L-101溝実測図

E-101溝の西側約 $\frac{1}{2}$ の地点から分かれて北側にある溝であり、西端は調査区域外へでる。上幅120cm±・溝底幅60cm±・深さ10cm±を計る。E-101溝よりも10cm±浅い溝で底部はゆるやかに弯曲して壁の立ちあがりもゆるやかである。

E-101溝との重複は、切り合い関係なのか同一溝から分岐するものかは明らかでない。

#### G-101溝 (第33b図・写真図版25a)

G-2住居址・G-3住居址の上部を切って走る。北端は調査区域外へでるが、北北東から南南西へ向い、G-3住居址上で大きく東へ折れまがって北西～南東方向へ走る。やはり南端も調査区域外へでる。上幅30cm±・溝底幅15cm±を計り、断面はゆるやかな「U」字状を呈する。南端での深さは17cm±で、溝座は非常にゆるやかに北側へ傾斜して下がりゆく。埋土は、粒状の焼土・炭化物を包含する黒褐色土層の単層で占められる。

#### I-101溝 (第33c図・写真図版25b)

遺跡中央部から南寄りで多数の遺構と重複しながらほぼ南北方向へ直線的に走る溝である。北端は調査区域外にあり、南側では重複するH-2住居址埋土との区別がなくなり、その端は把握できなかった。上幅90cm±～65cm±・溝底幅25cm±を計り、南側がわずかに狭くなる。断面の形状は逆台形状を呈する。北端での深さ50cm±・南端での深さ20cm±と溝底高は北側へゆるやかな傾斜をもって下がりゆく。埋土は、粒状の焼土・炭化物を包含する暗褐色破質シルト層の単層で占められる。

この溝は数多くの遺構と重複する。H-2住居址・I-1住居址・J-1住居址・J-54ピットなどを切るが、I-102溝・J-101溝・J-102溝・J-103溝との新旧関係は把握できなかった。

#### I-102溝 (第33c図)

西端は調査区域外にでるが東西方向へほぼ直線的に走り、東端はE-101溝の中央部付近で合流する。上幅50cm±・溝底幅30cm±・深さ9cm±を計り、断面での形状はレンズ状を呈する。東端と西端における溝底高に差はなく、ほぼ水平に走る。埋土は、粒状の焼土・炭化物を少量包含する暗褐色シルト層の単層で占められ、I-3住居址と重複する部分では底面に還元土壌化が認められる。

この溝は重複するI-1住居址・I-3住居址を切って構築されるが、I-101溝とは新旧関

係にあるのか同時存在の関係にあるのかは不明である。

#### J-101溝 (第33c図)

I-101溝の南側の部分で合流する地点から西北西方向へ長さ 3.3m 土のびて消滅する溝である。上幅30cm 土・溝底幅10cm 土・深さ13cm 土を計り、断面での形状は「U」字状を示す。埋土は、粒状の焼土・炭化物をわずかに含む暗褐色土層の単層で占められる。

I-101溝とは新旧関係・同時存在の関係のいずれにあるのかは不明である。

#### J-102溝 (第33c図)

J-101溝の北側に隣接して位置する。I-101溝と合流し、その地点から長さ 6.0m 土でほぼ西北西へのびて消滅する。上幅20cm 土・溝底幅10cm 土・深さ10cm 土を計り、断面での形状は「U」字状を呈する。埋土は暗褐色土層の単層である。

I-101溝とは新旧関係・同時存在の関係のいずれにあるのかは不明である。

#### J-103溝 (第33c図)

J-102溝の北側に隣接して位置する。I-101溝と合流し、その地点から北西方向へ長さ11.2m 土のびて消滅する。北西端は北へ直角に短かく折れ曲がる。上幅50cm 土・溝底幅20cm 土・深さ10cm 土を計り、断面での形状は「U」字状を呈する。両端での溝底高に差はなく、水平に走る。埋土は、粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する暗褐色土層の単層である。

重複する J-1 住居址を切るが、I-101溝とは新旧関係・同時存在の関係のいずれにあるのかは不明である。

#### K-101溝 (第33d図・写真図版26a)

K-1 住居址のほぼ中央部を切って東西方向にほぼ直線的に走る溝である。両端とも調査区域外へでる。上幅 120cm 土～95cm 土・溝底幅40cm 土・深さ25cm 土を計り、東側がわずかに幅が狭い。断面での形状はゆるやかな「U」字状を呈する。両端での溝底高に差はなく、水平に走る。埋土は上層が炭化物粒をわずかに包含する暗褐色土層、下層は褐色粘土質シルト層で構成される。

#### L-101溝 (第34図・写真図版26b)

遺跡の南端部に位置する。西端は調査区域外にあり、東北東へのびている。溝中央部より東側の部分でわずかに北寄りに折れまがるが、その先は開田の際に削剝を受けて消滅している。上幅60cm 土・溝底幅40cm 土・深さ10cm 土を計り、断面での形状は「U」字状を呈する。溝底はほぼ水平である。

溝から出土した土器の量は僅少であり、いずれも埋土中からの出土である。坯はロクロ成形後内面黒色処理したもの(坯BⅠ類)とロクロ成形で還元炎焼成のもの(坯BⅡ類)が数点みられる。甕はロクロ調整の甕(甕BⅡa類)とロクロ成形の小形甕(甕BⅠb類)とがある。い

ずれも小破片である。

## 2. ま と め

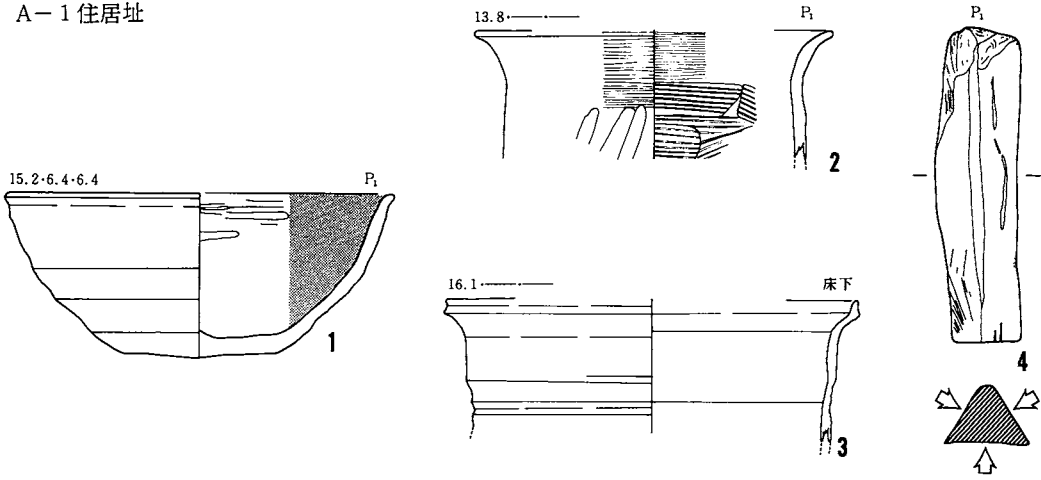
力石Ⅱ遺跡は江刺の沖積平野にみられるいくつかの遺跡と同様に微高地上に立地し、平安時代初期を中心とする集落址である。今回の調査は調査範囲の制約から遺跡の全体的な把握には遠く及ばないが、当地方の古代史の究明に一助となるべきいくつかの貴重な資料を得ることが出来た。

検出された遺構は竪穴住居址29棟、ピット類16基・溝11条である。竪穴住居をはじめとする遺構が180mにわたる調査区全域に確認されたことから、当遺跡はかなり大規模な遺跡であることが想定される。しかも大半の遺構は平安時代前半に属するものであり、奈良時代末から平安時代にかけて当地方に急激な人口の増加がみられたことの一例証になるであろう。しかし竪穴住居址はいくつかの時期に分けられることは竪穴住居址相互の重複関係の存在や遺物からも明らかであるが、各期における集落の単位及び相互の関連については十分に検討するまでには至らなかった。

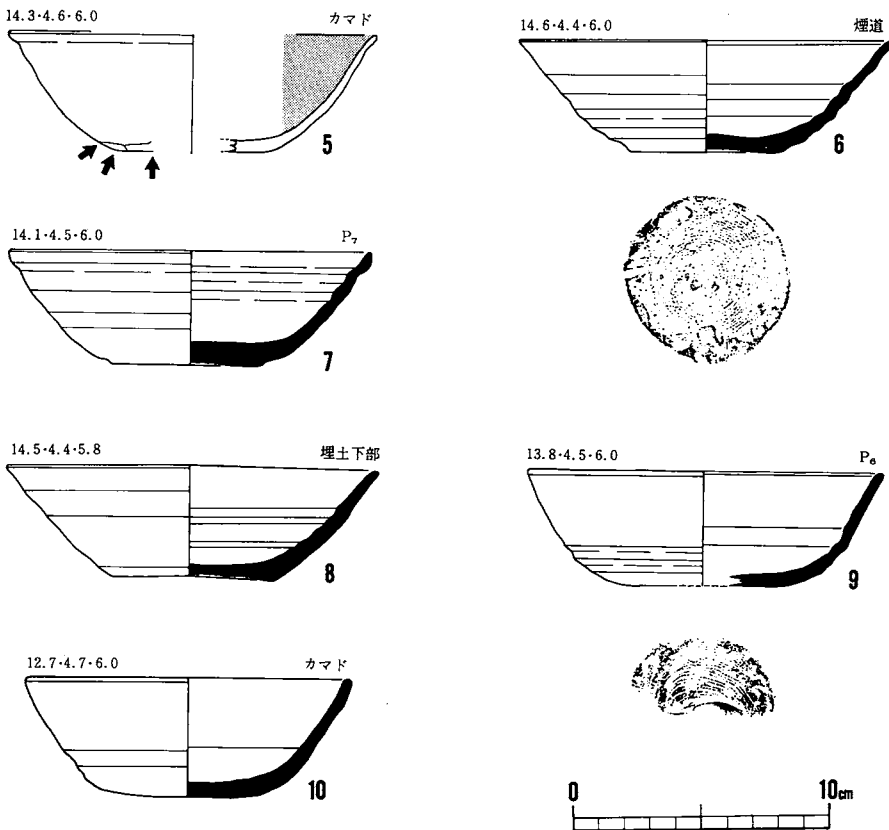
遺物は平安時代前半の土器が大半を占めるが、その他に弥生式土器・各種の鉄製品・石帯・砥石・土錘・韃の羽口等多種にわたる遺物が出土した。特に29棟の竪穴住居址内に、83点にも及ぶ鉄製品の出土をみ、しかも1棟の竪穴住居址で10点を超える鉄製品を有する住居址の存在はこの遺跡の大きな特徴として挙げられよう。鉄製品の出土は特にG～K区に集中しており、鉄滓や韃の羽口の出土とも合わせて考えると周辺部に「鍛冶場」の存在も考えられるが、鉄製品の中に鉄鏃等の武器が少なからずみられることは当時の社会体制と深く関りを有する遺跡であると考えられる。しかも2個の石帯の出土は律令体制との関わりを示すものであろう。

802年の胆沢城設置と前後して大きく変貌する北上川中流域の政治的背景の中で当遺跡を含めた江刺の沖積平野は強い影響を受けたことは、当地域がこの時期に急激な集落の増加をみることから明らかであり、今後城柵・宮衛との関連も含めた総合的な研究が望まれる。

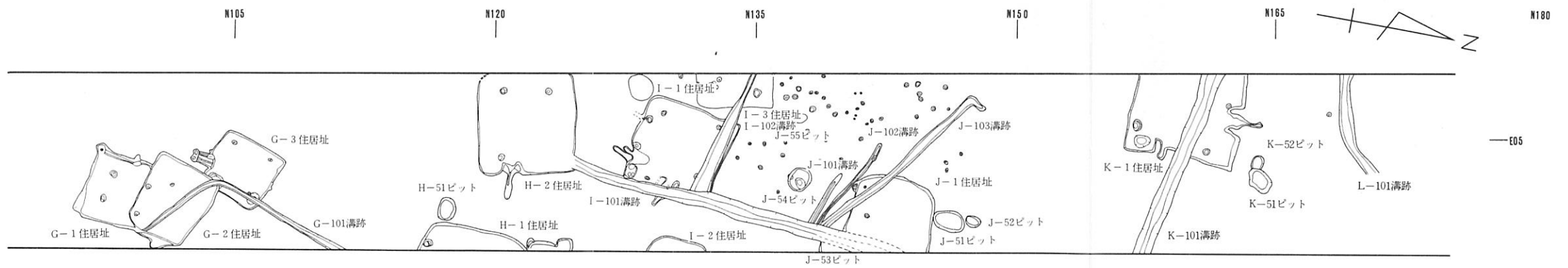
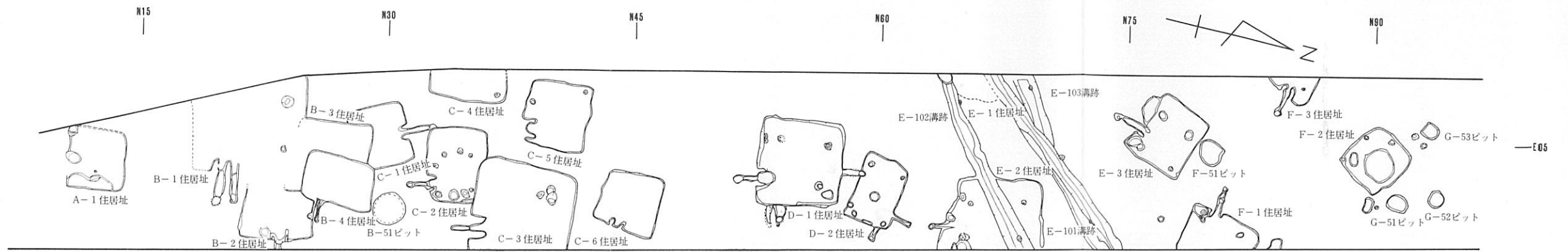
A-1 住居址



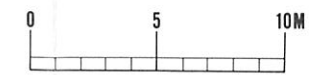
B-1 住居址

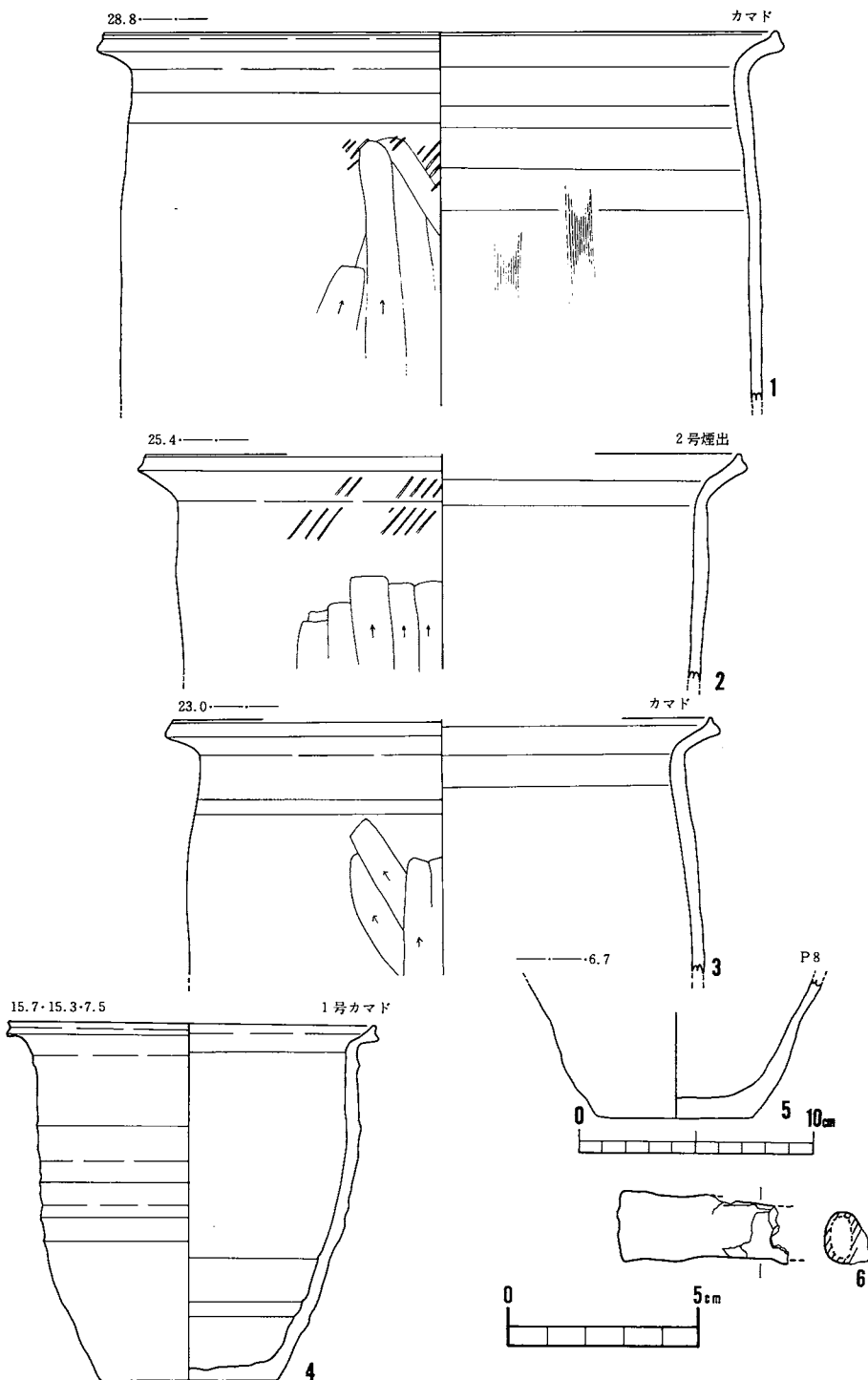


第35図 出土遺物(A-1住居址・B-1住居址)



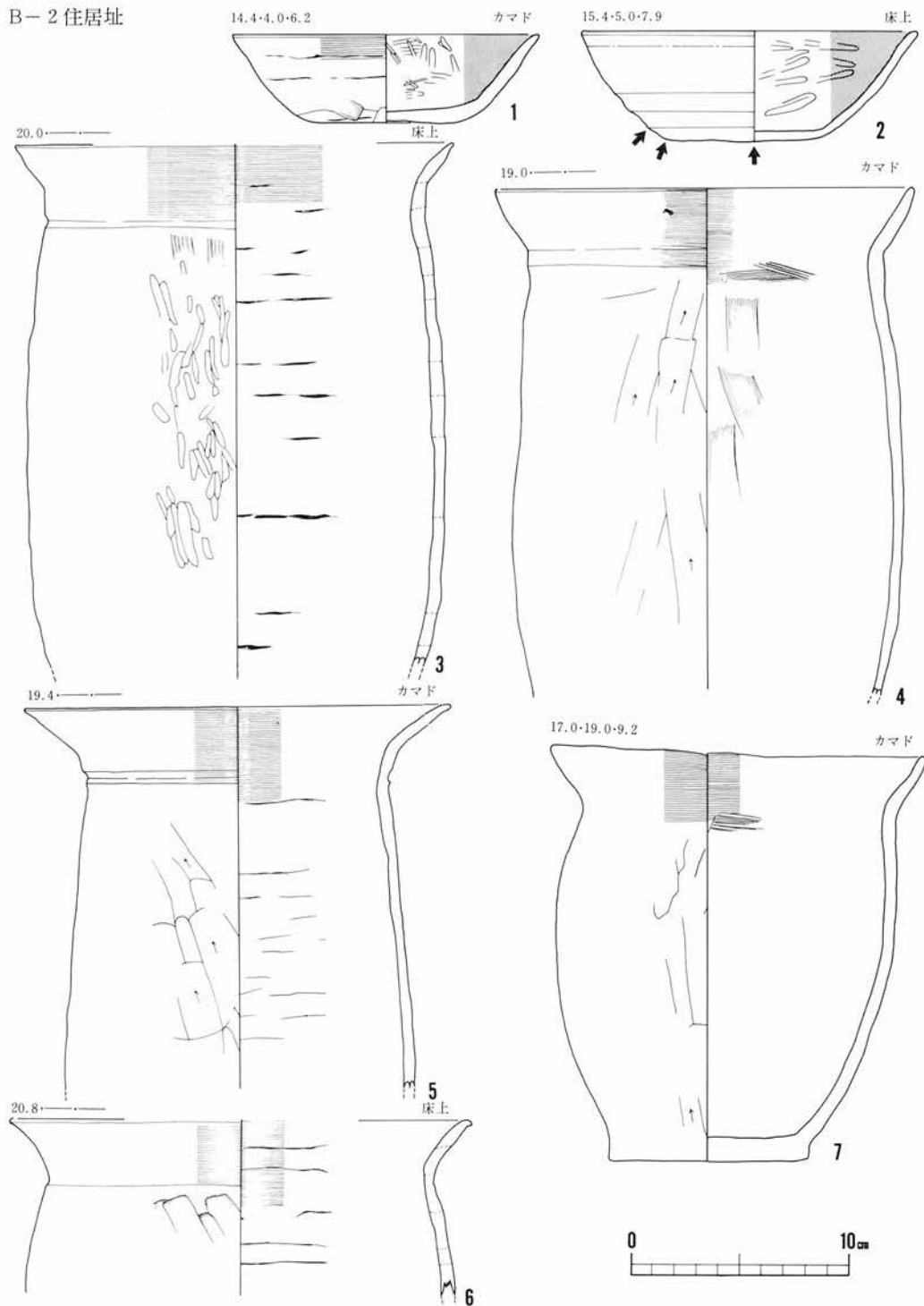
第36図 力石Ⅱ遺跡遺構配置図





第37図 出土遺物(B-1住居址)

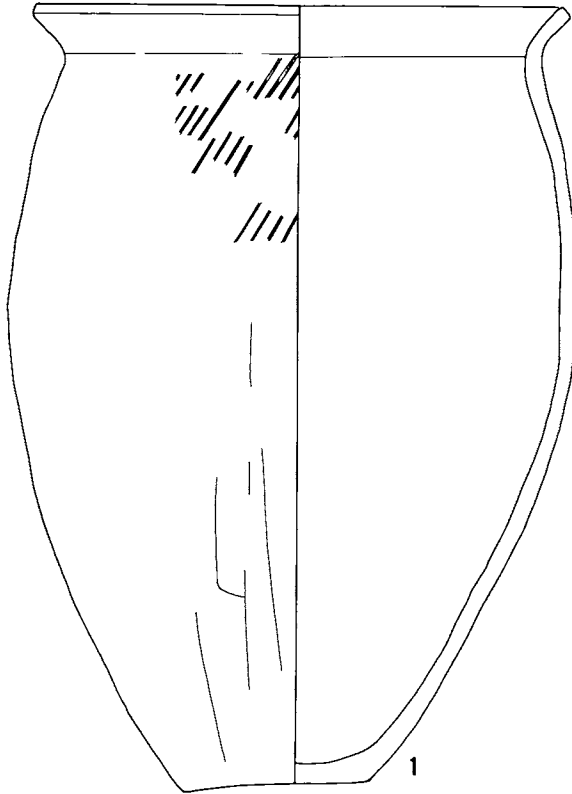
B-2 住居址



第38図 出土遺物(B-2 住居址)

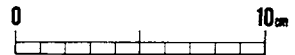
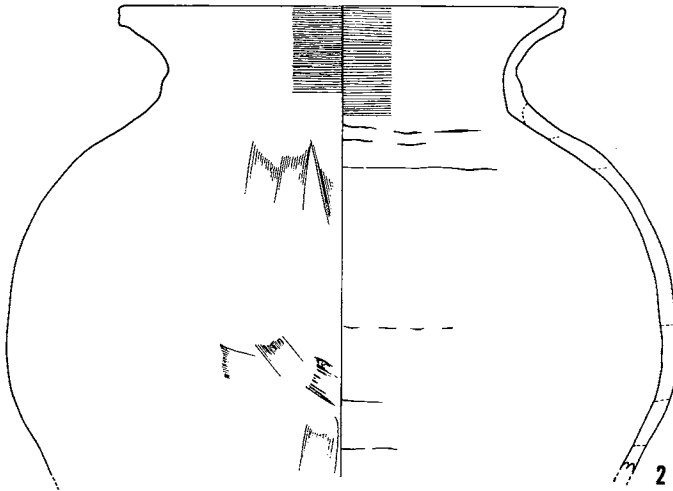
21.2・31.4・7.4

カマド



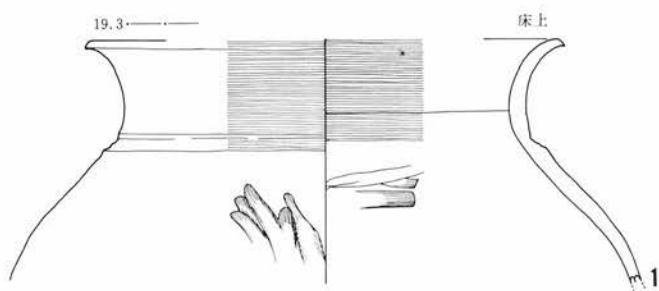
17.8

埋土下部

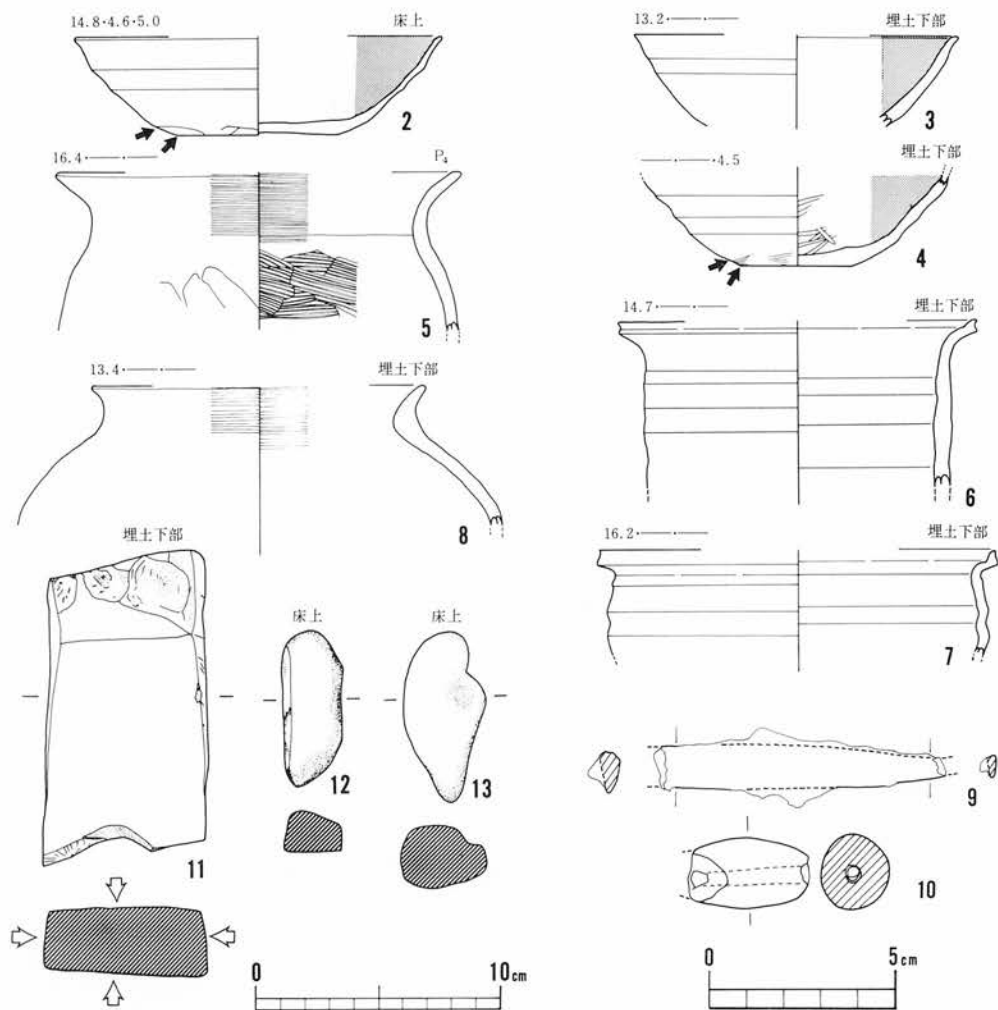


第39図 出土遺物(B-2住居址)



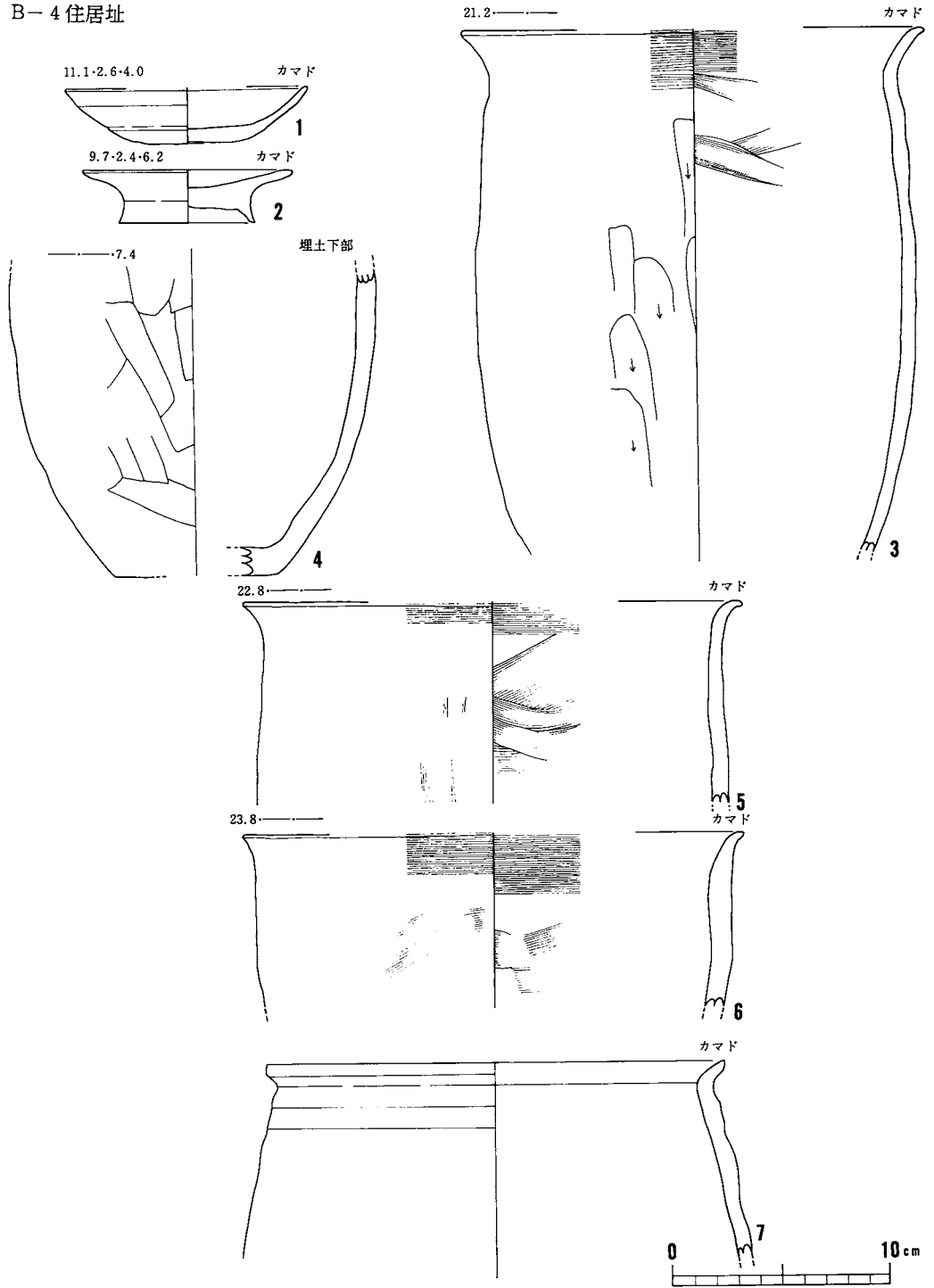


B-3 住居址



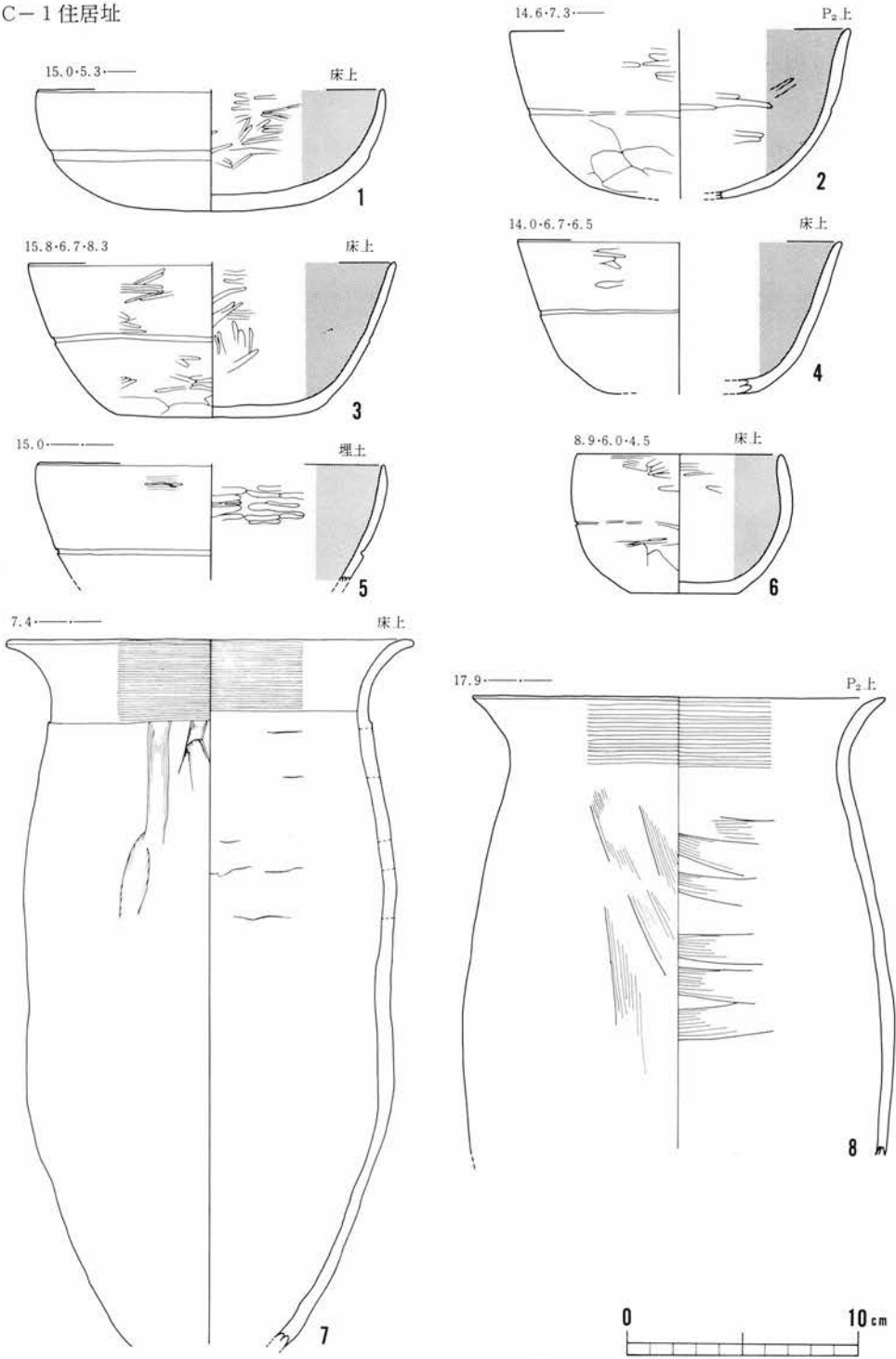
第40图 出土遗物(B-2 住居址·B-3 住居址)

B-4 住居址

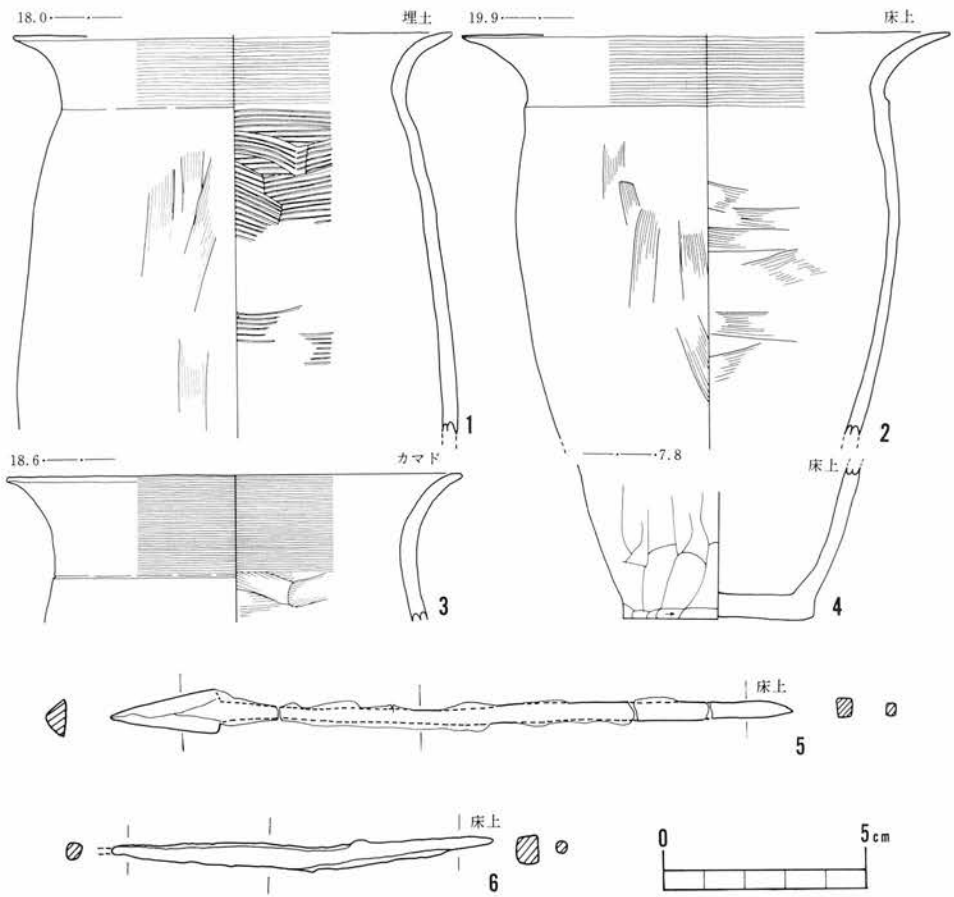


第41図 出土遺物(B-4 住居址)

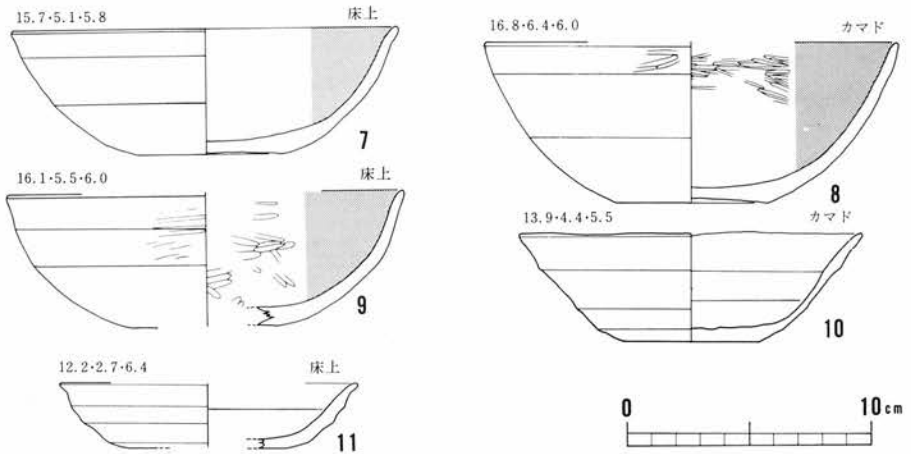
C-1 住居址



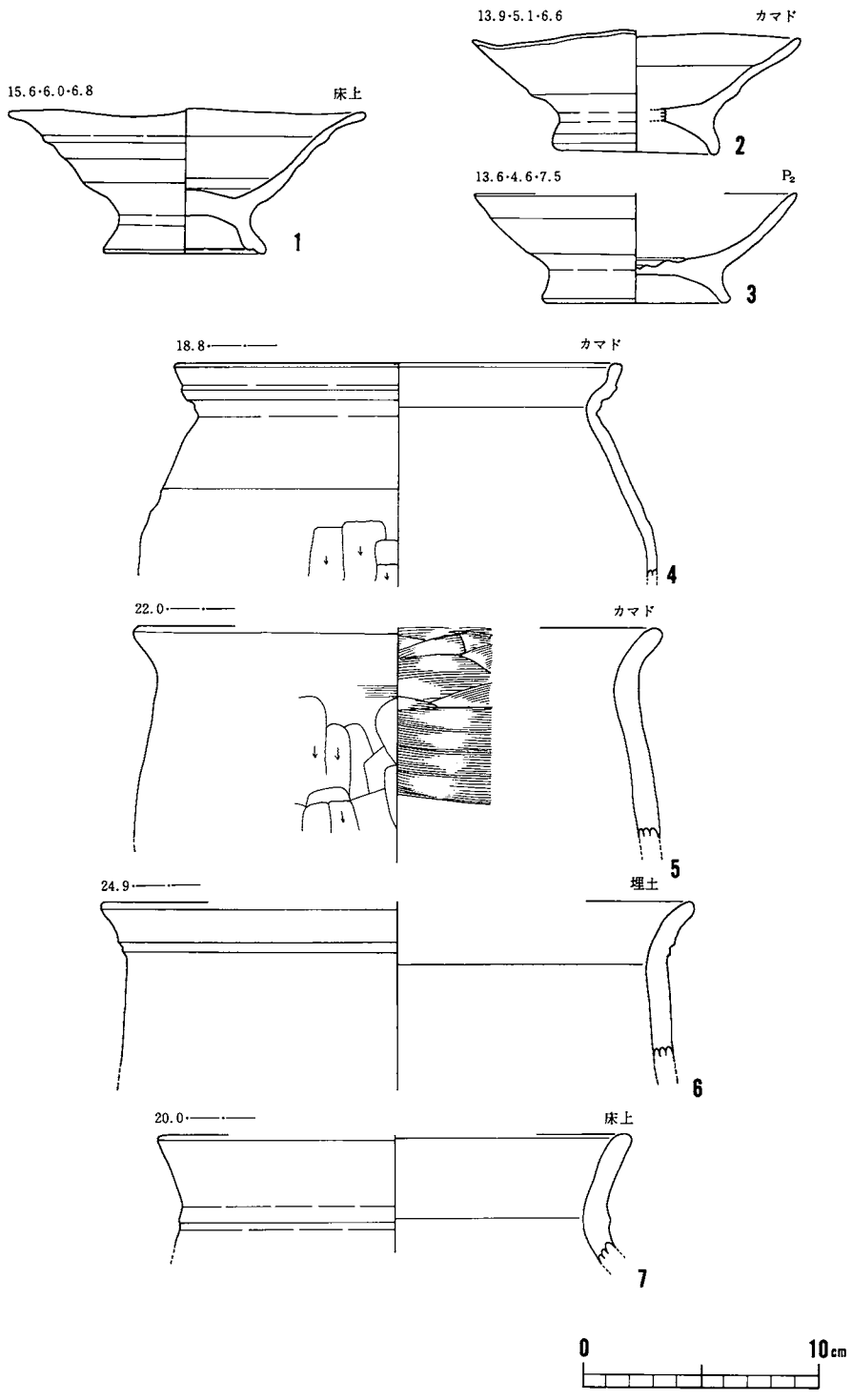
第42図 出土遺物(C-1住居址)



C-2 住居址

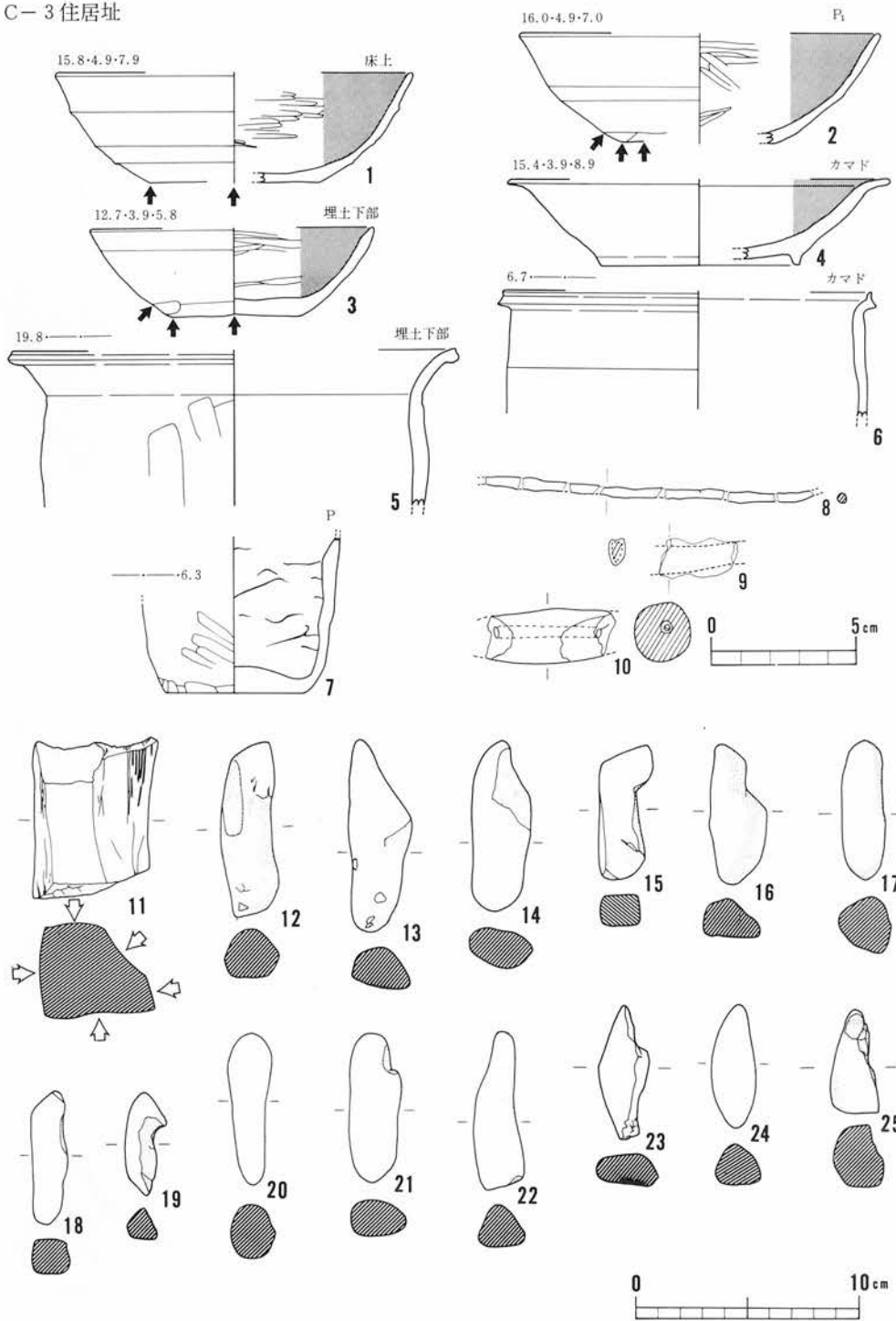


第43図 出土遺物(C-1住居址・C-2住居址)



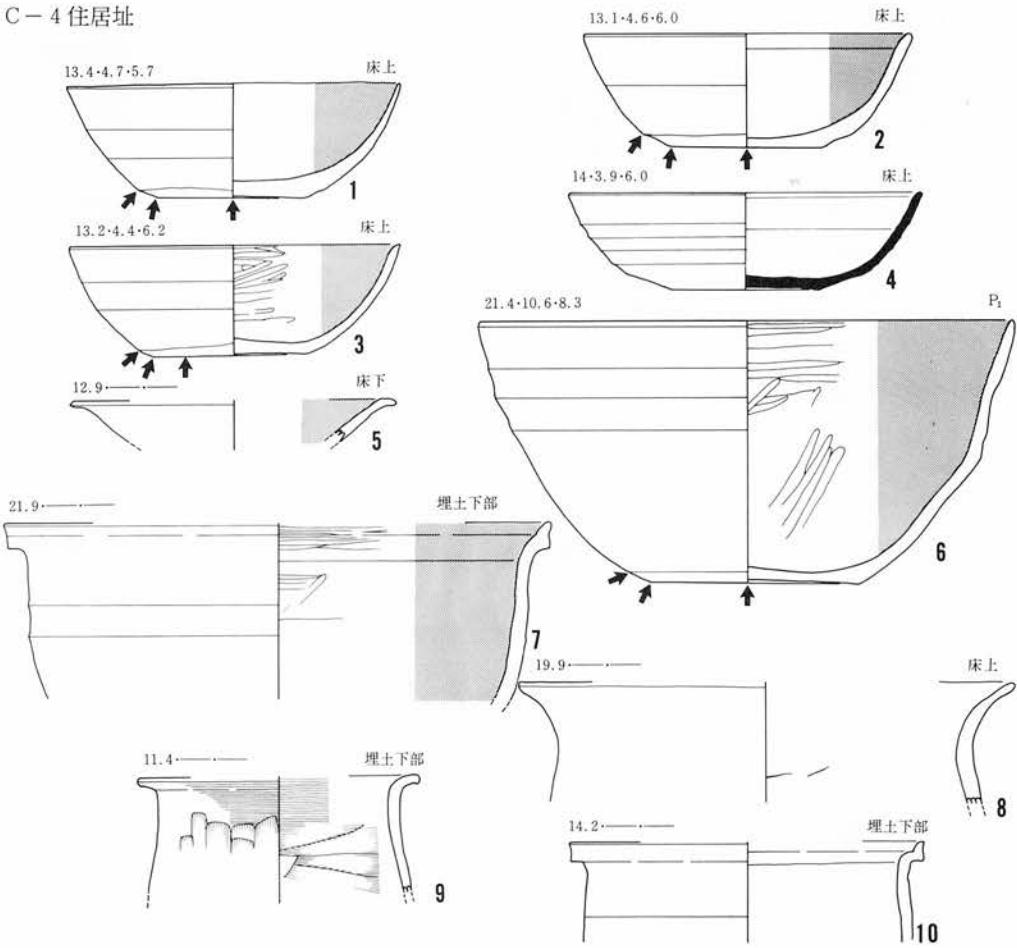
第44図 出土遺物(C-2住居址)

C-3 住居址

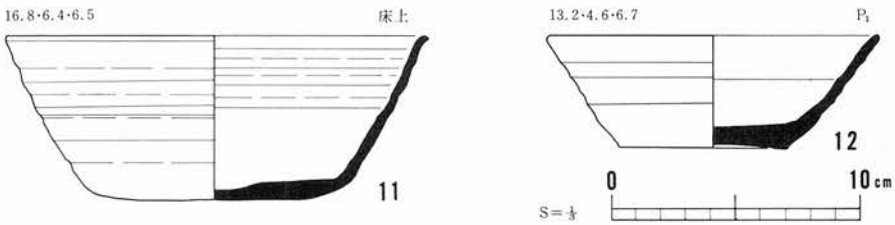


第45図 出土遺物(C-3住居址)

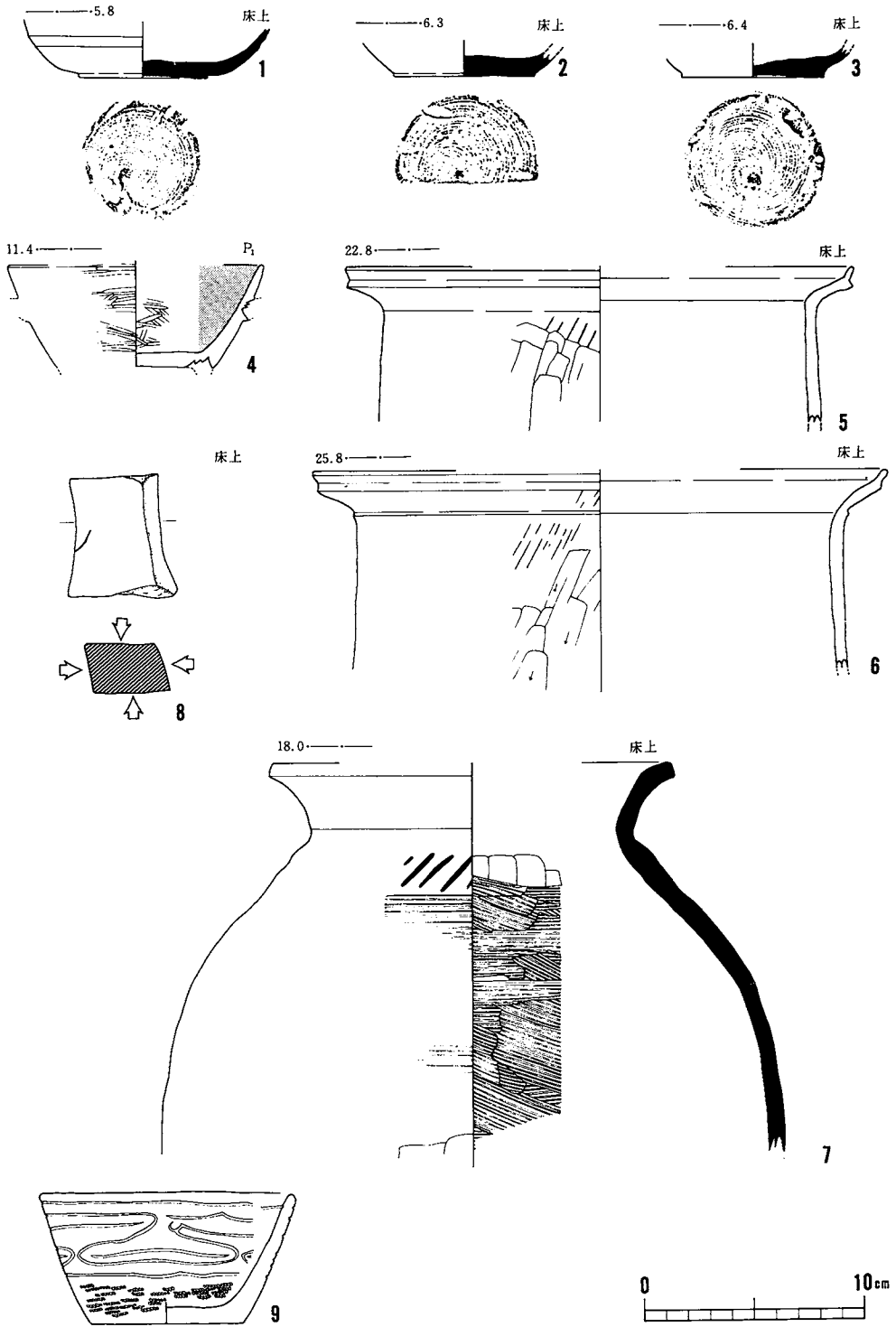
C-4 住居址



C-5 住居址



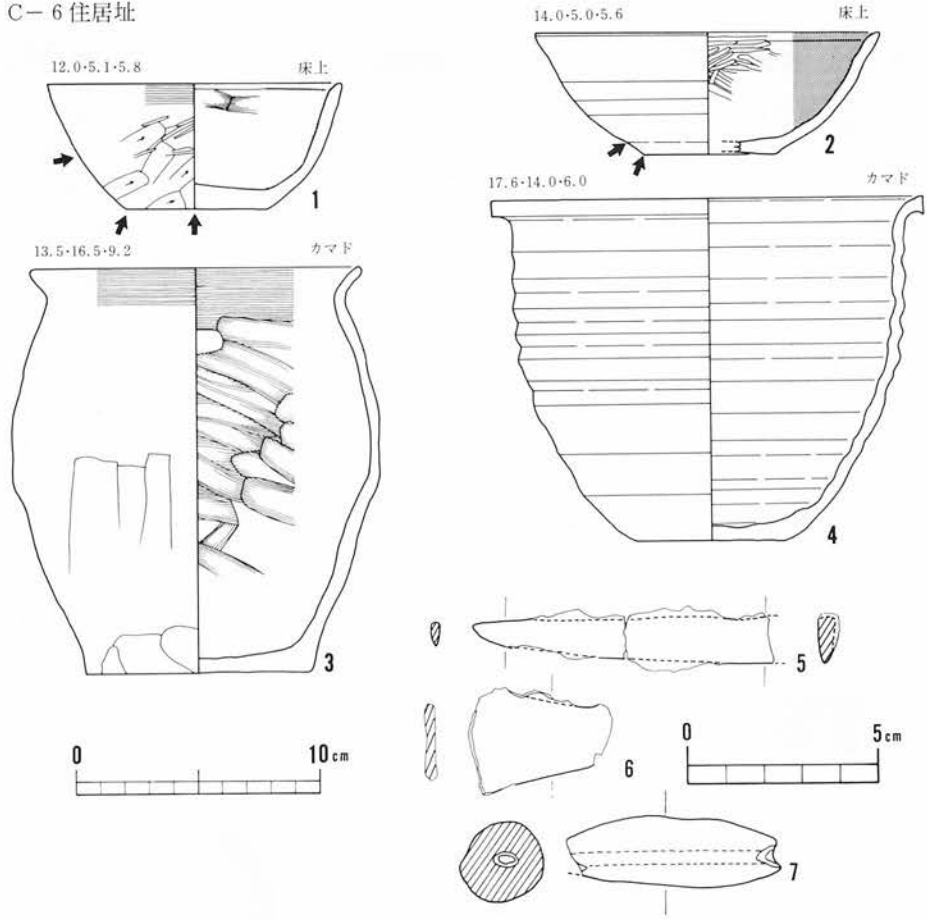
第46図 出土遺物(C-4住居址・C-5住居址)



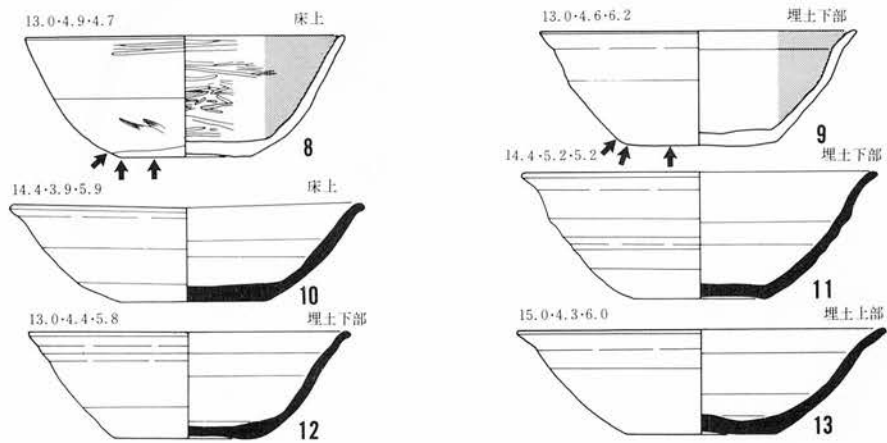
第47図 出土遺物(C-5住居址)



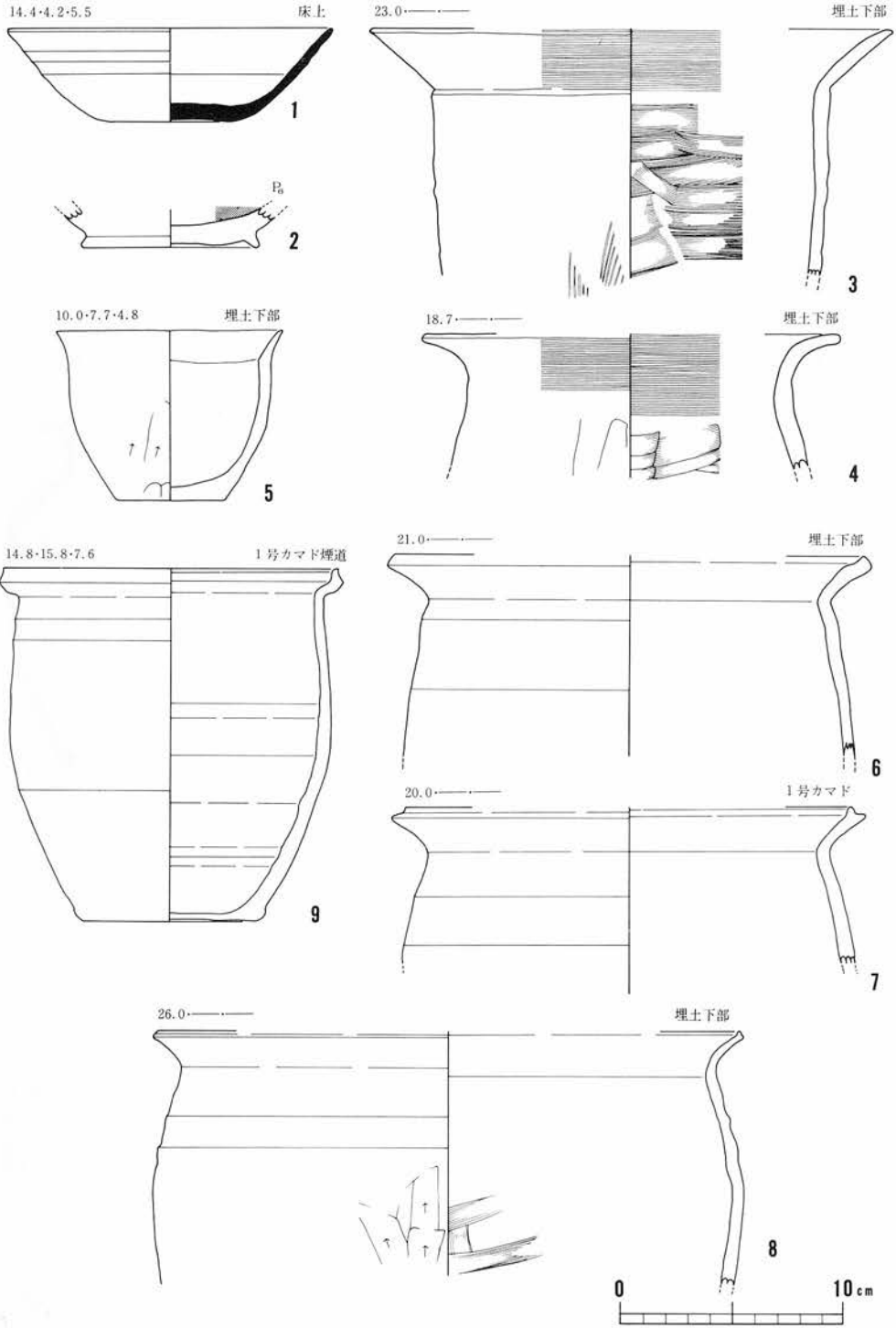
C-6 住居址



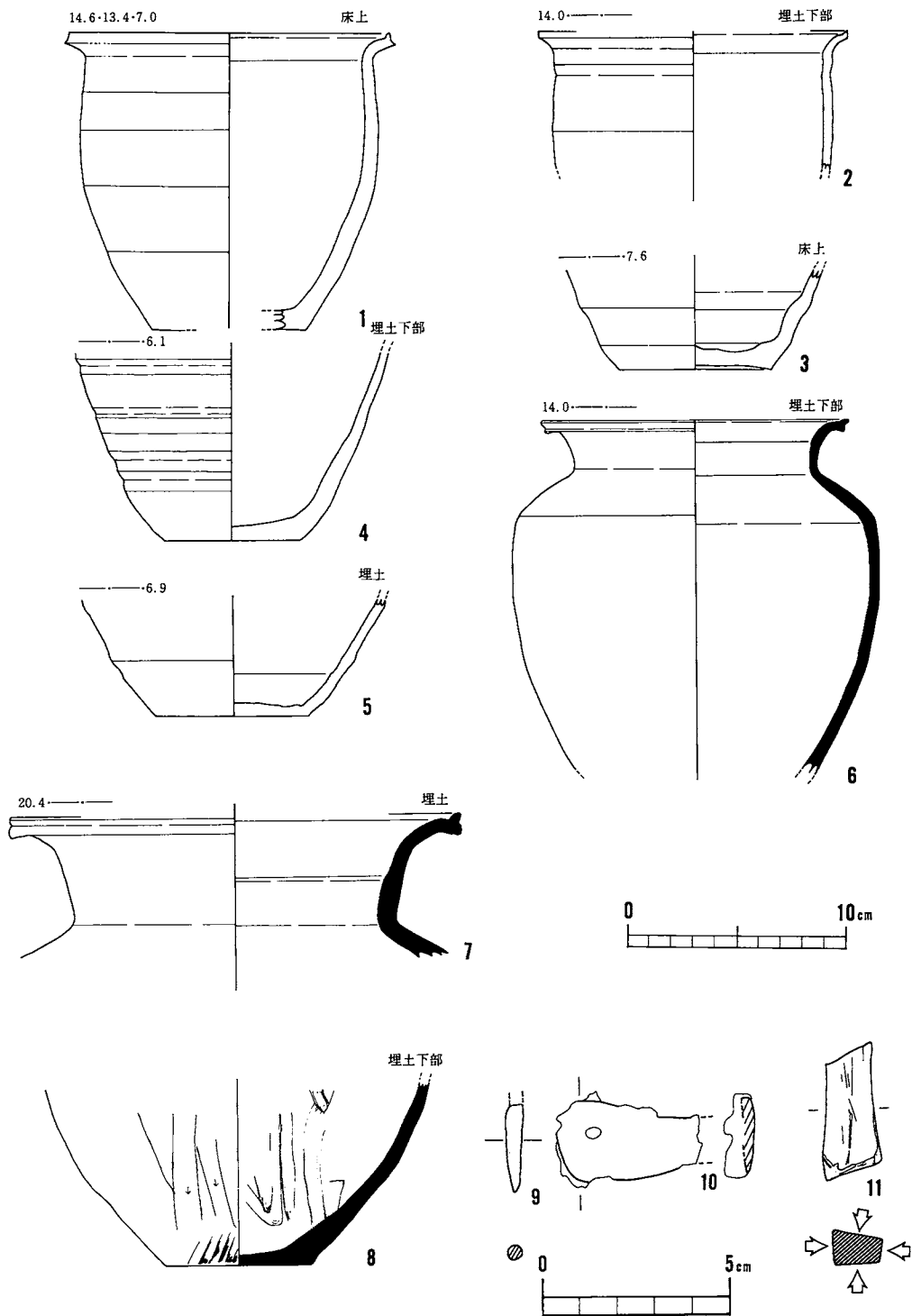
D-1 住居址



第48図 出土遺物(C-6住居址・D-1住居址)

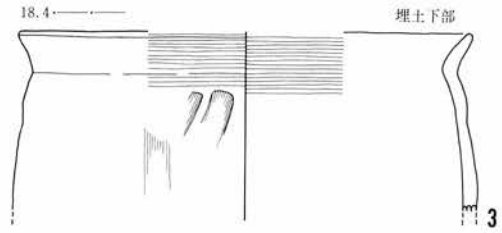
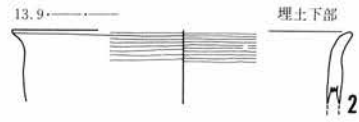
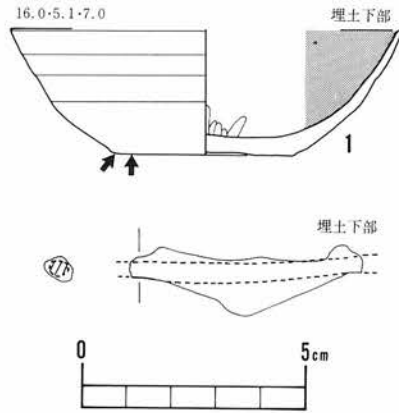


第49図 出土遺物(D-1住居址)

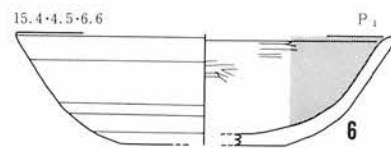
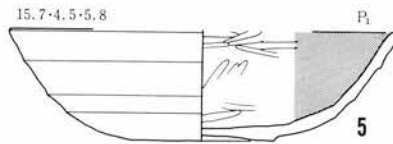


第50図 出土遺物(D-1住居址)

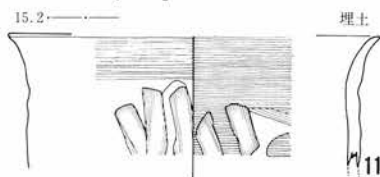
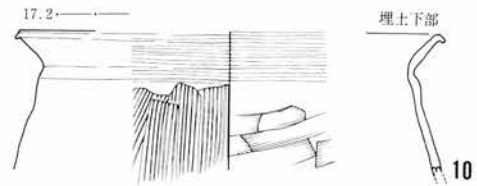
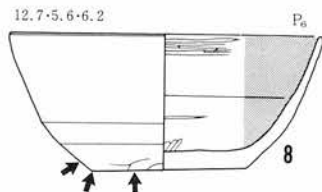
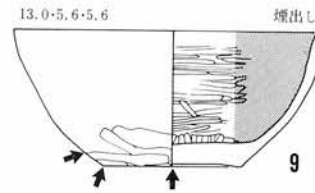
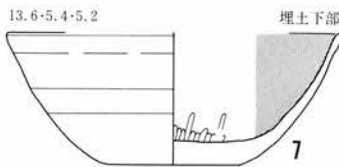
D-2 住居址



E-1 住居址

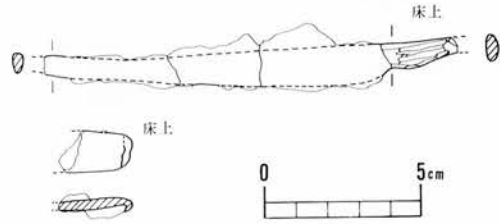
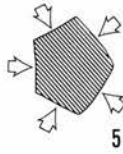
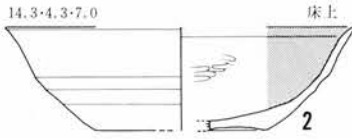
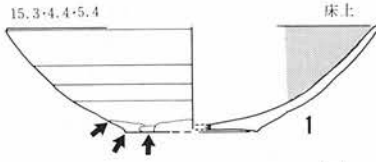


E-2 住居址

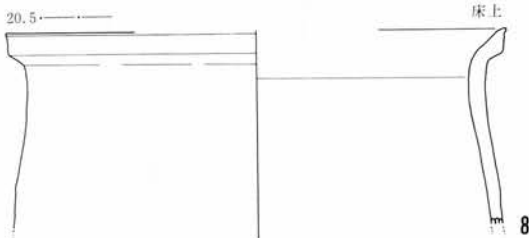
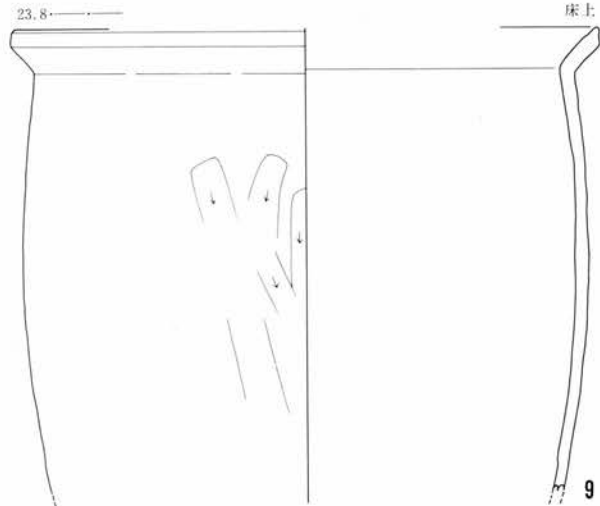
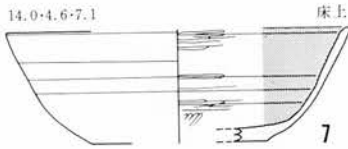


第51図 出土遺物(D-2住居址・E-1住居址・E-2住居址)

E-3 住居址

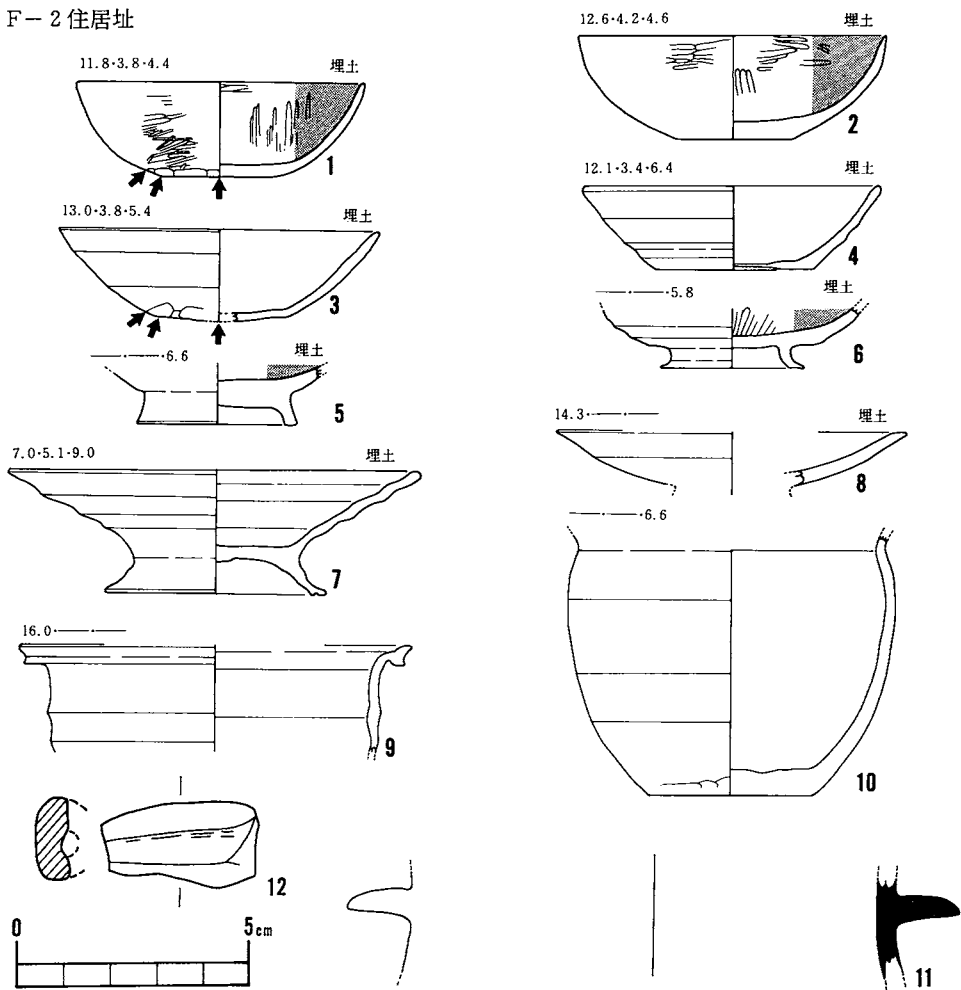


F-1 住居址

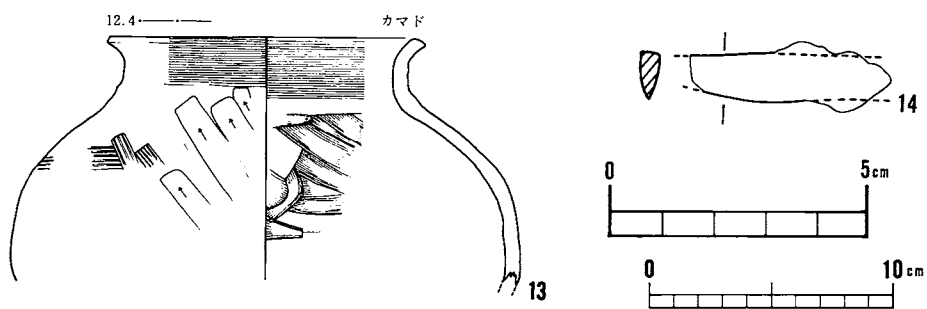


第52図 出土遺物(E-3住居址・F-1住居址)

F-2 住居址

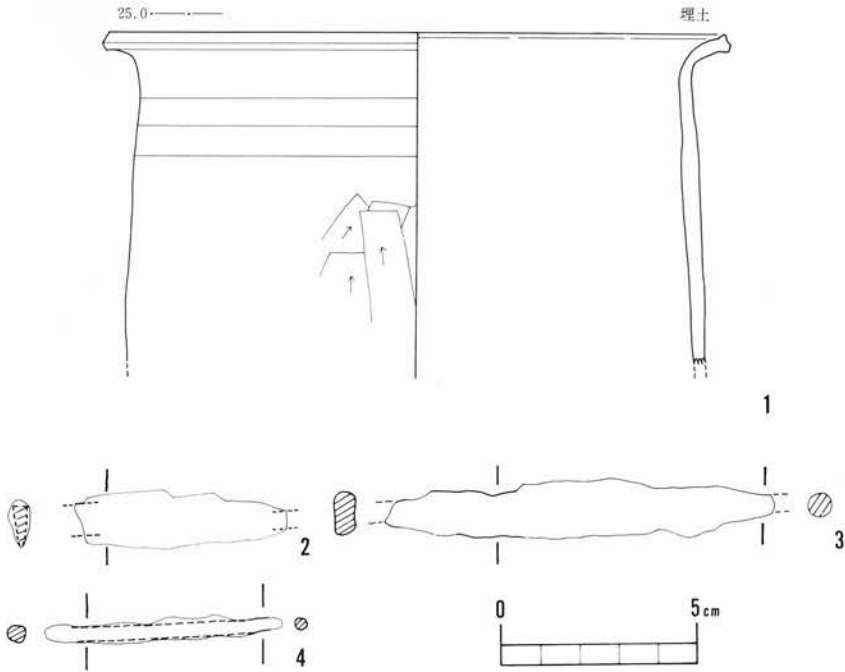


F-3 住居址

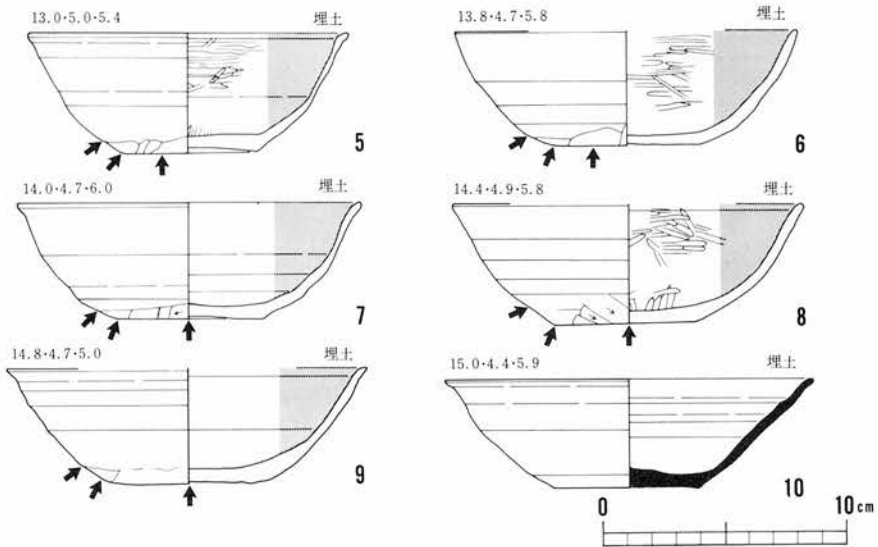


第53図 出土遺物(F-2住居址・F-3住居址)

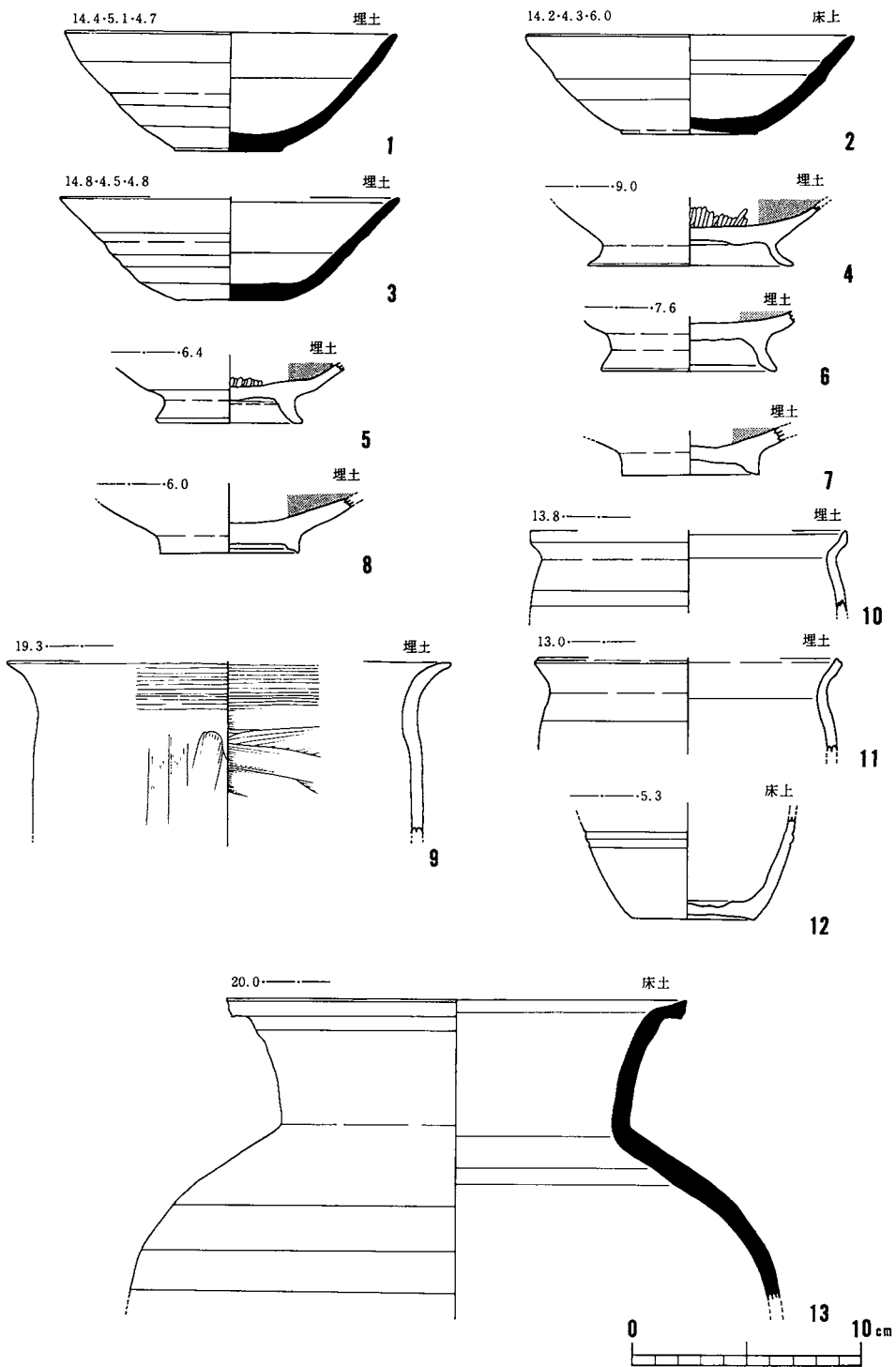
G-1 住居址



G-2 住居址

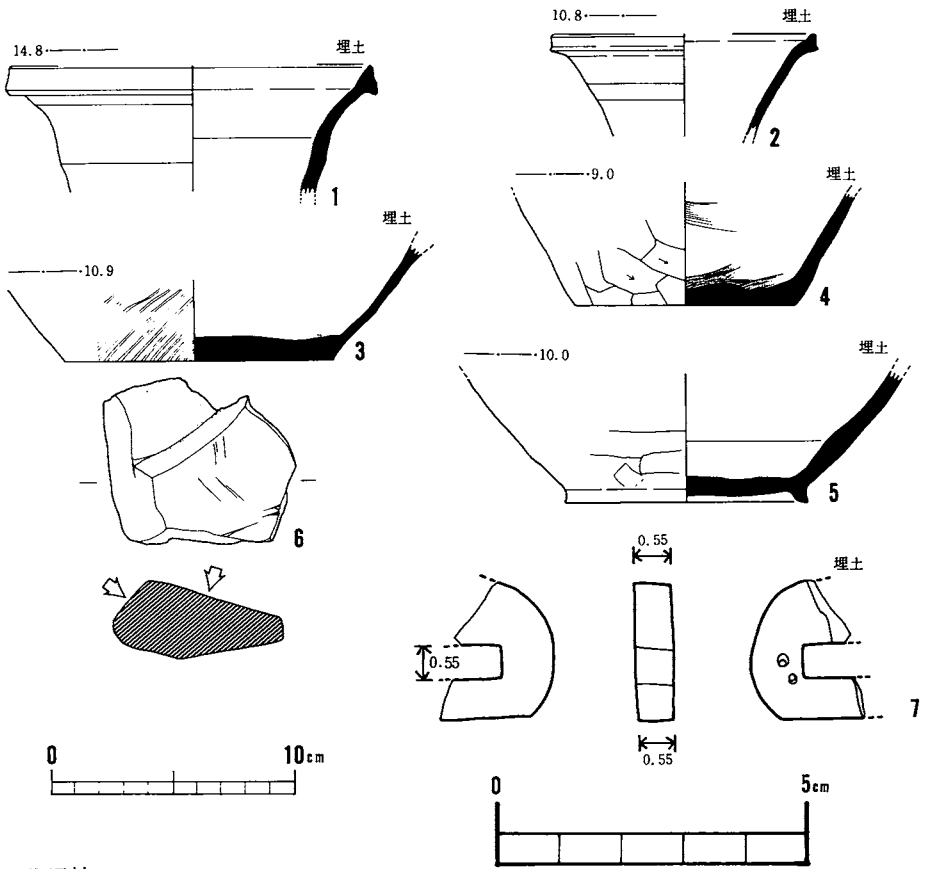


第54図 出土遺物(G-1住居址・G-2住居址)

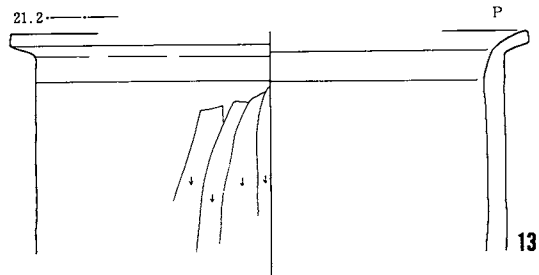
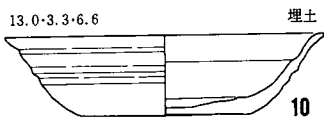
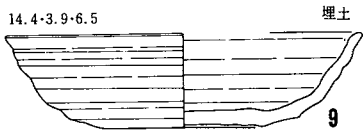
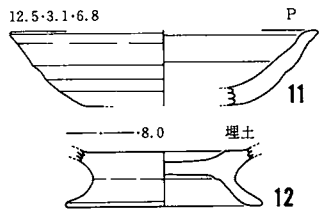
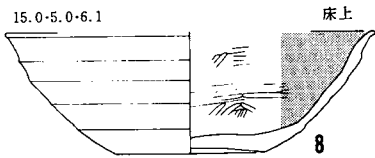


第55図 出土遺物 (G-2 住居址)

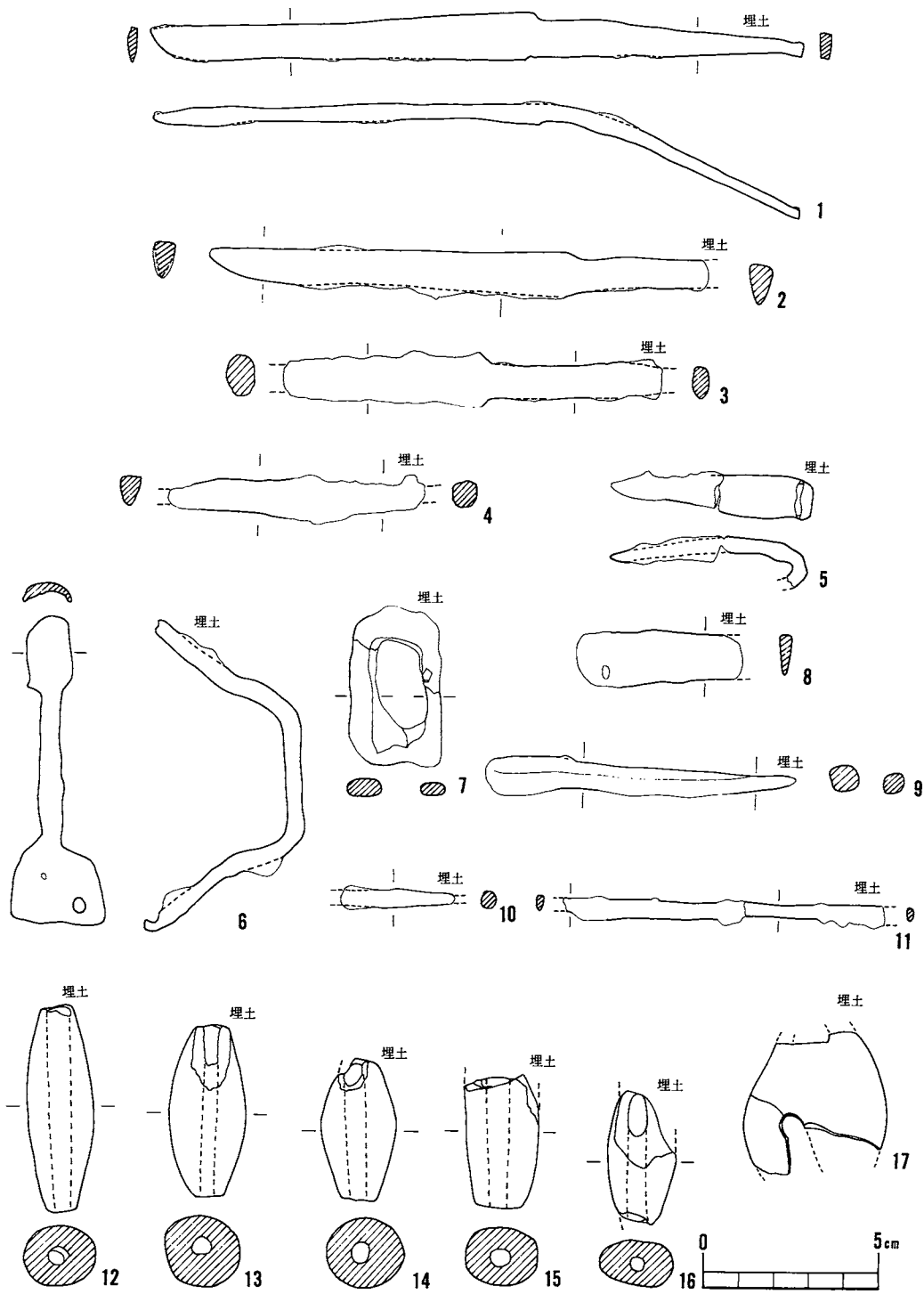




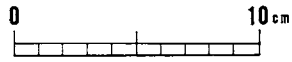
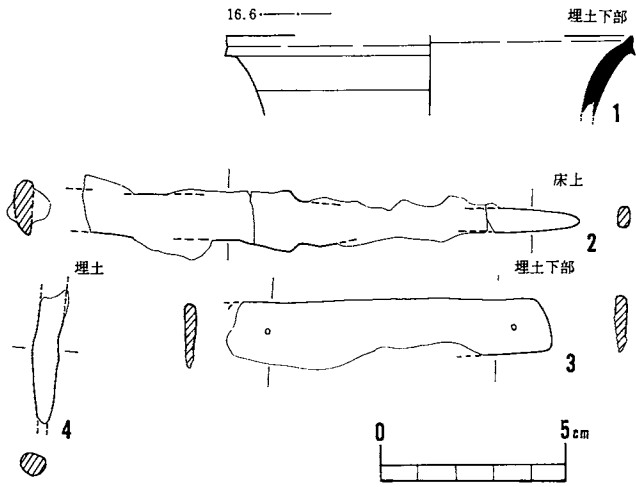
G-3 住居址



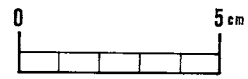
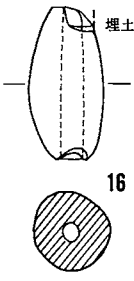
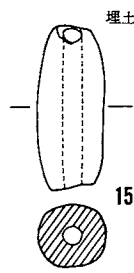
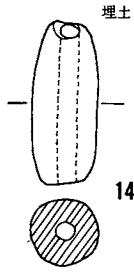
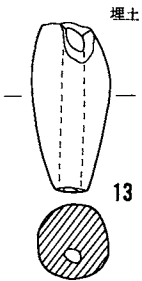
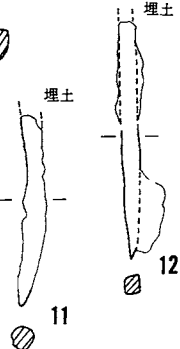
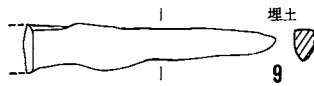
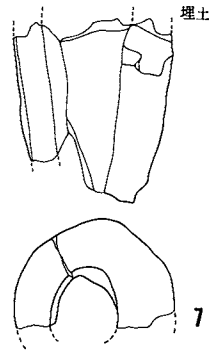
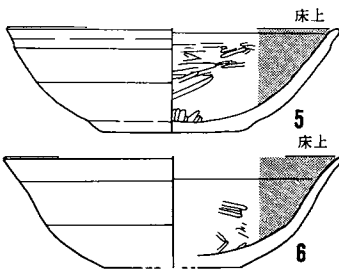
第56图 出土遺物(G-2住居址・G-3住居址)



第57图 出土遺物(G-2住居址)

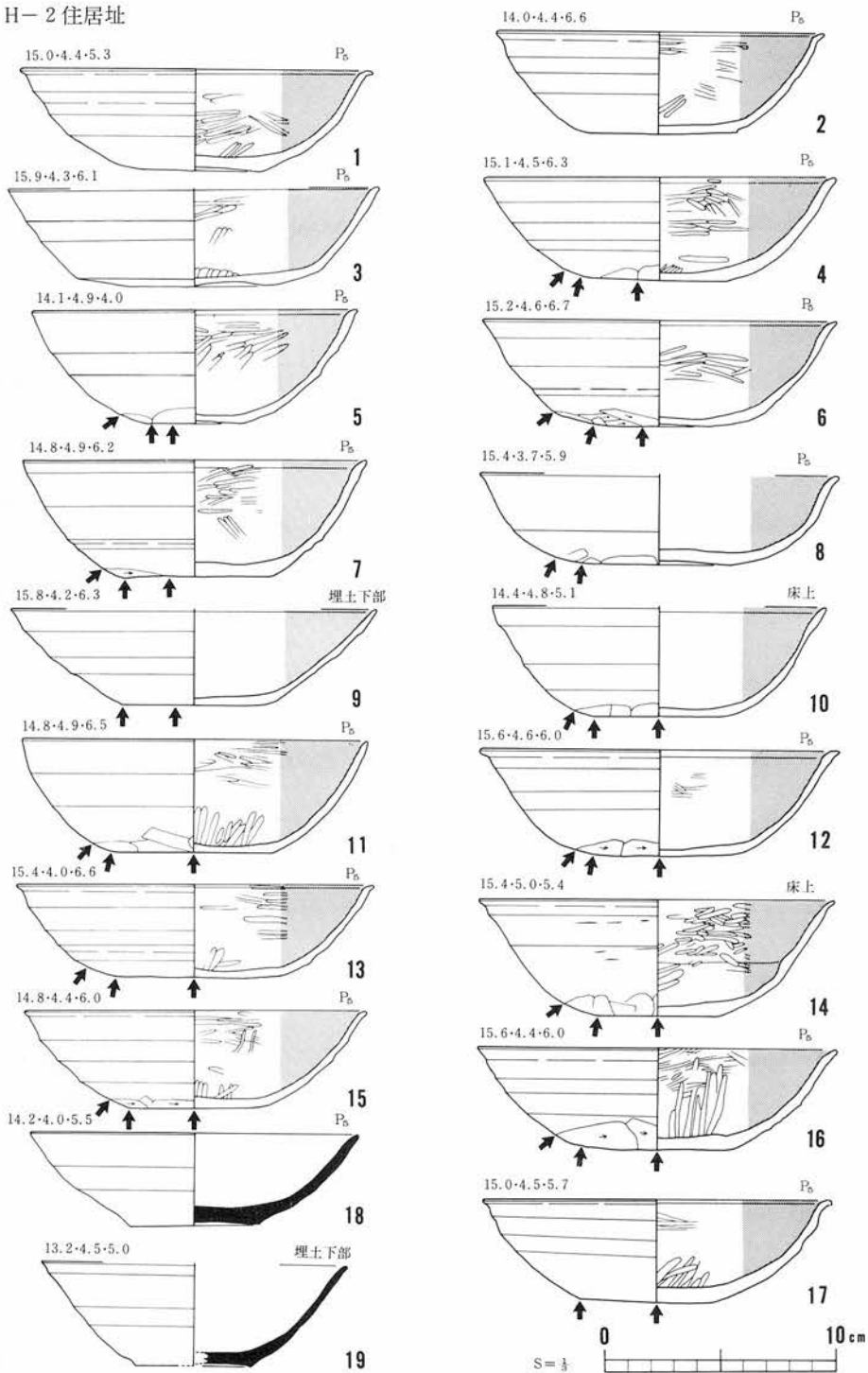


H-1 住居址

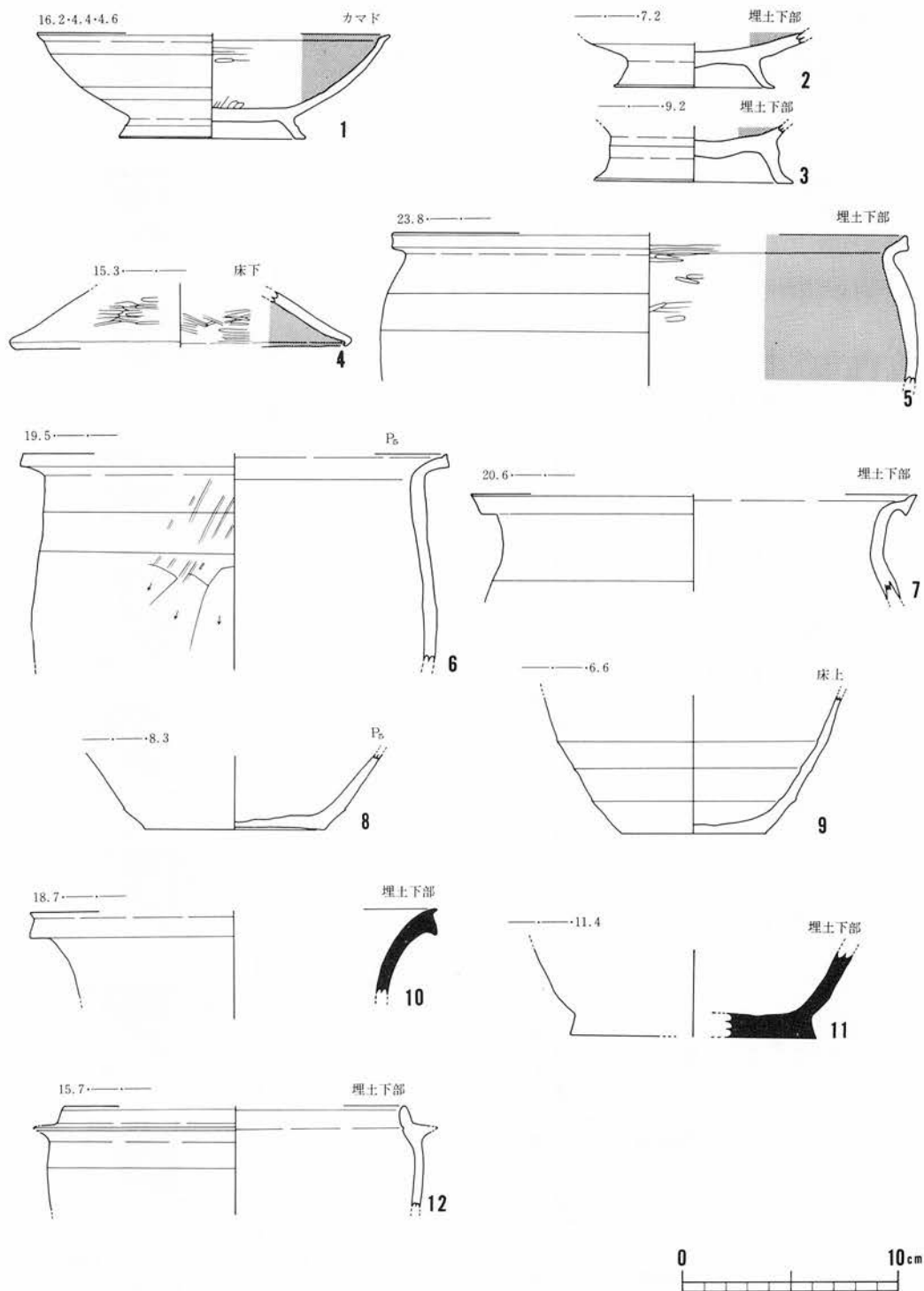


第58図 出土遺物(G-3住居址・H-1住居址)

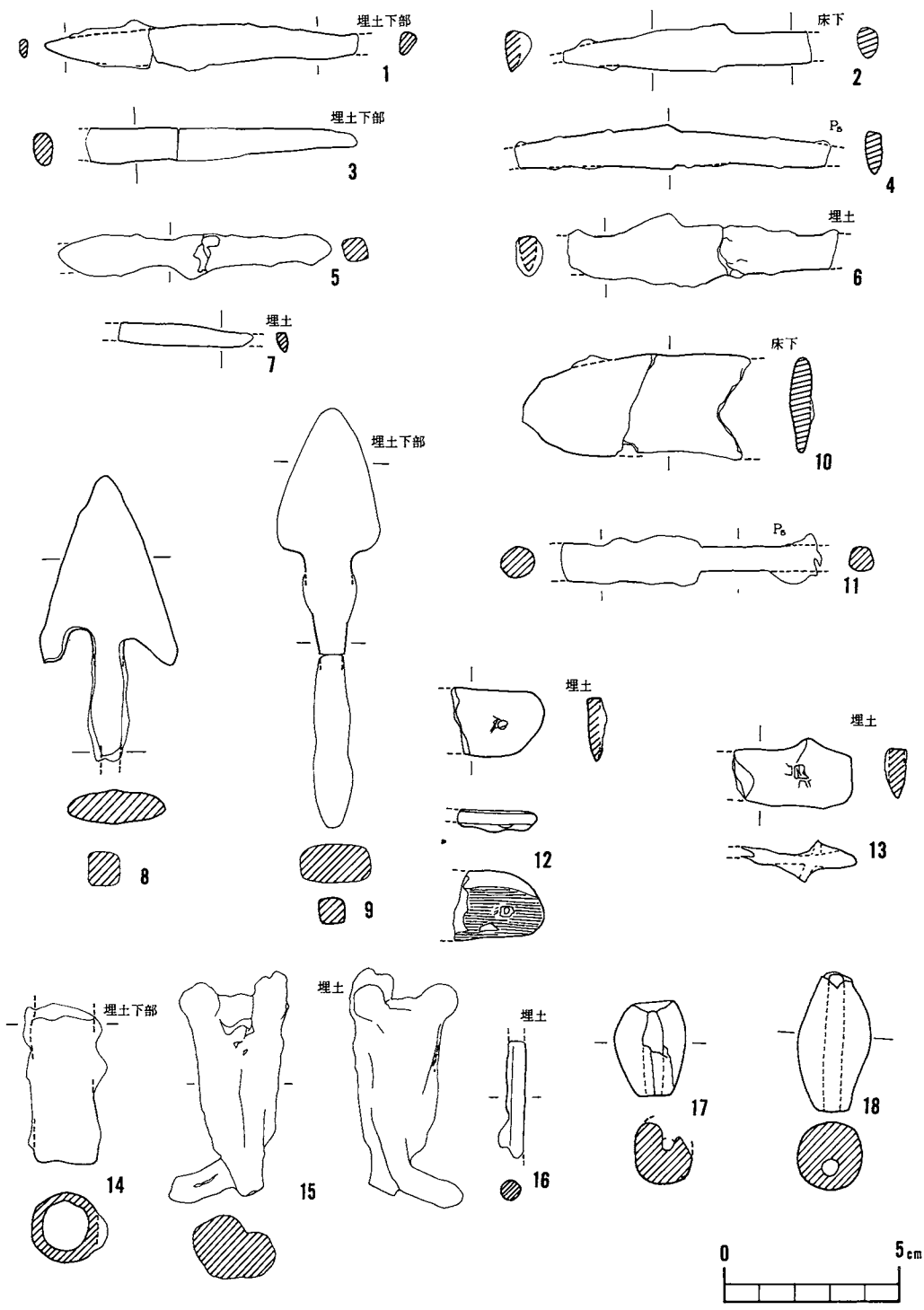
H-2 住居址



第59図 出土遺物(H-2住居址)

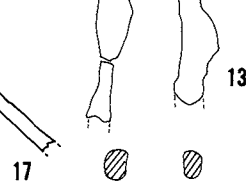
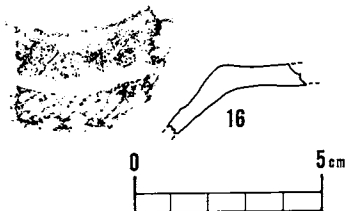
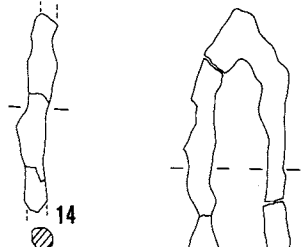
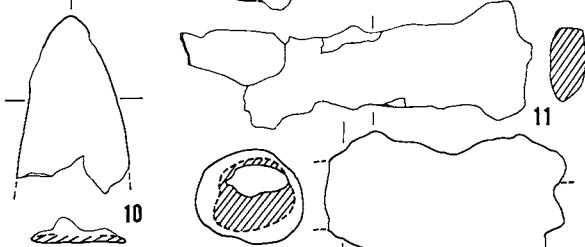
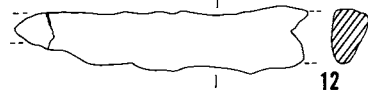
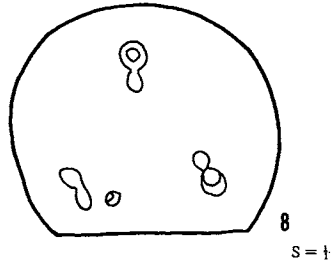
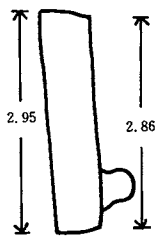
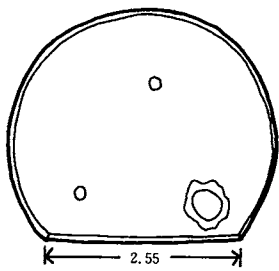
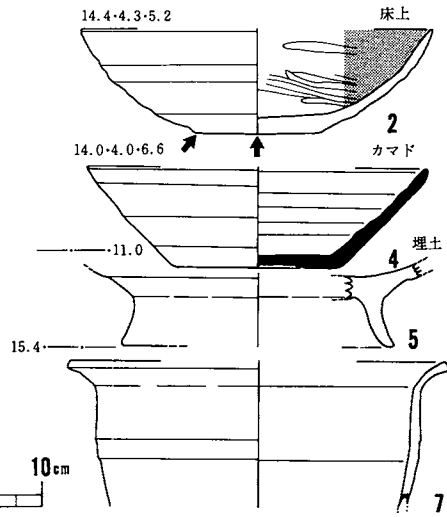
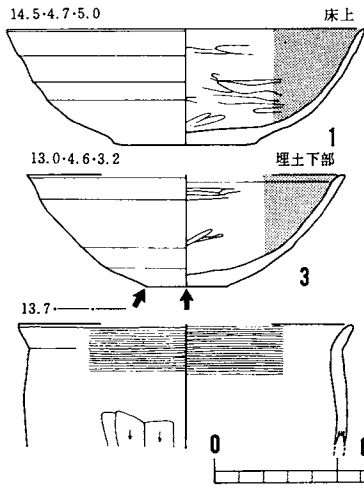


第60図 出土遺物(H-2住居址)



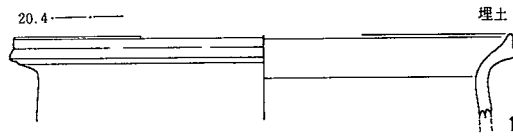
第61図 出土遺物(H-2住居址)

I-1 住居址

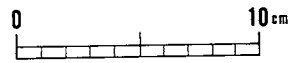
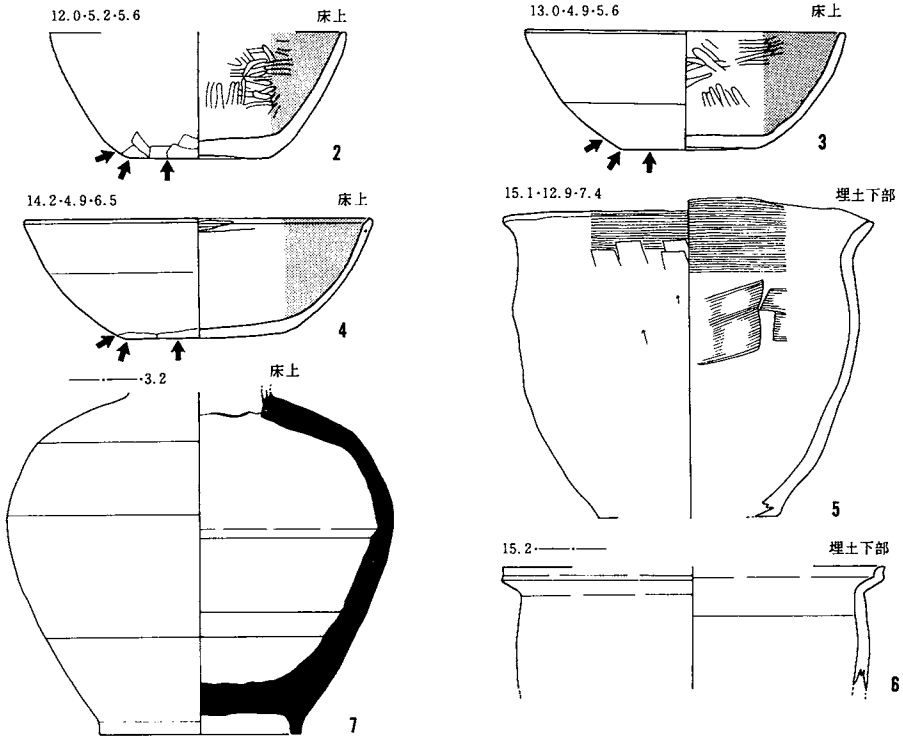


第62図 出土遺物 (I-1 住居址)

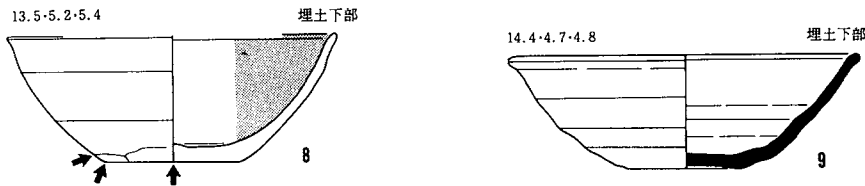
I-2 住居址



I-3 住居址

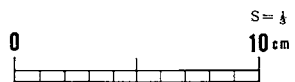
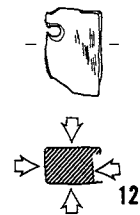
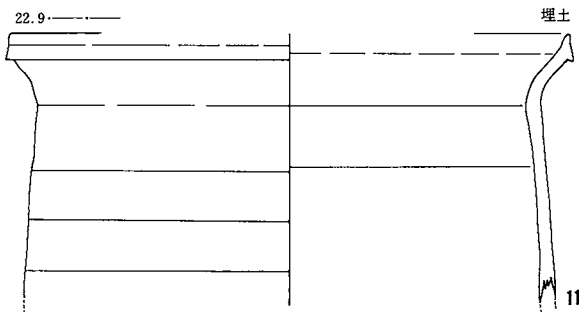
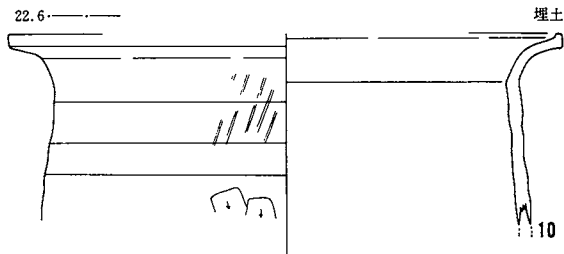
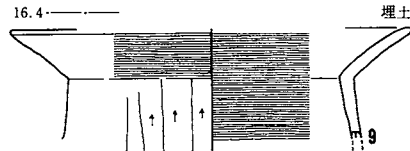
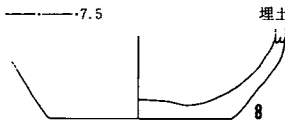
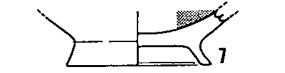
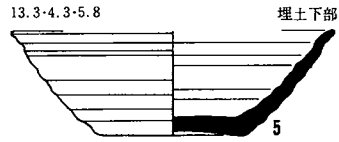
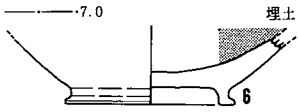
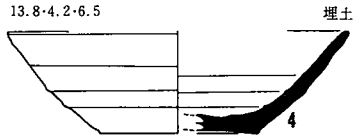
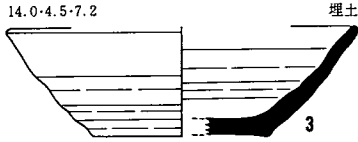
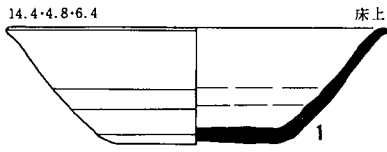


J-1 住居址

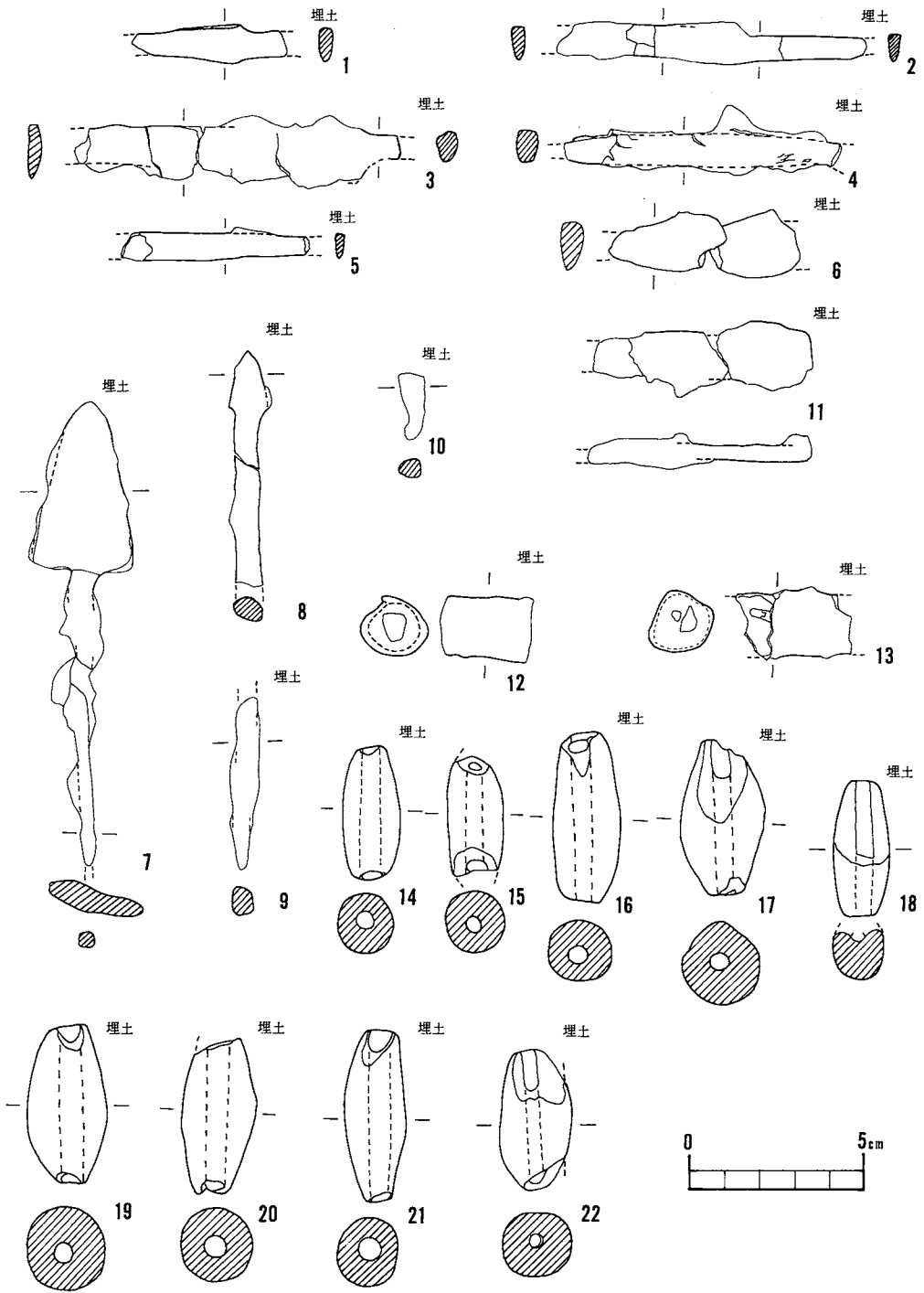


第63図 出土遺物(I-2 住居址・I-3 住居址・J-1 住居址)



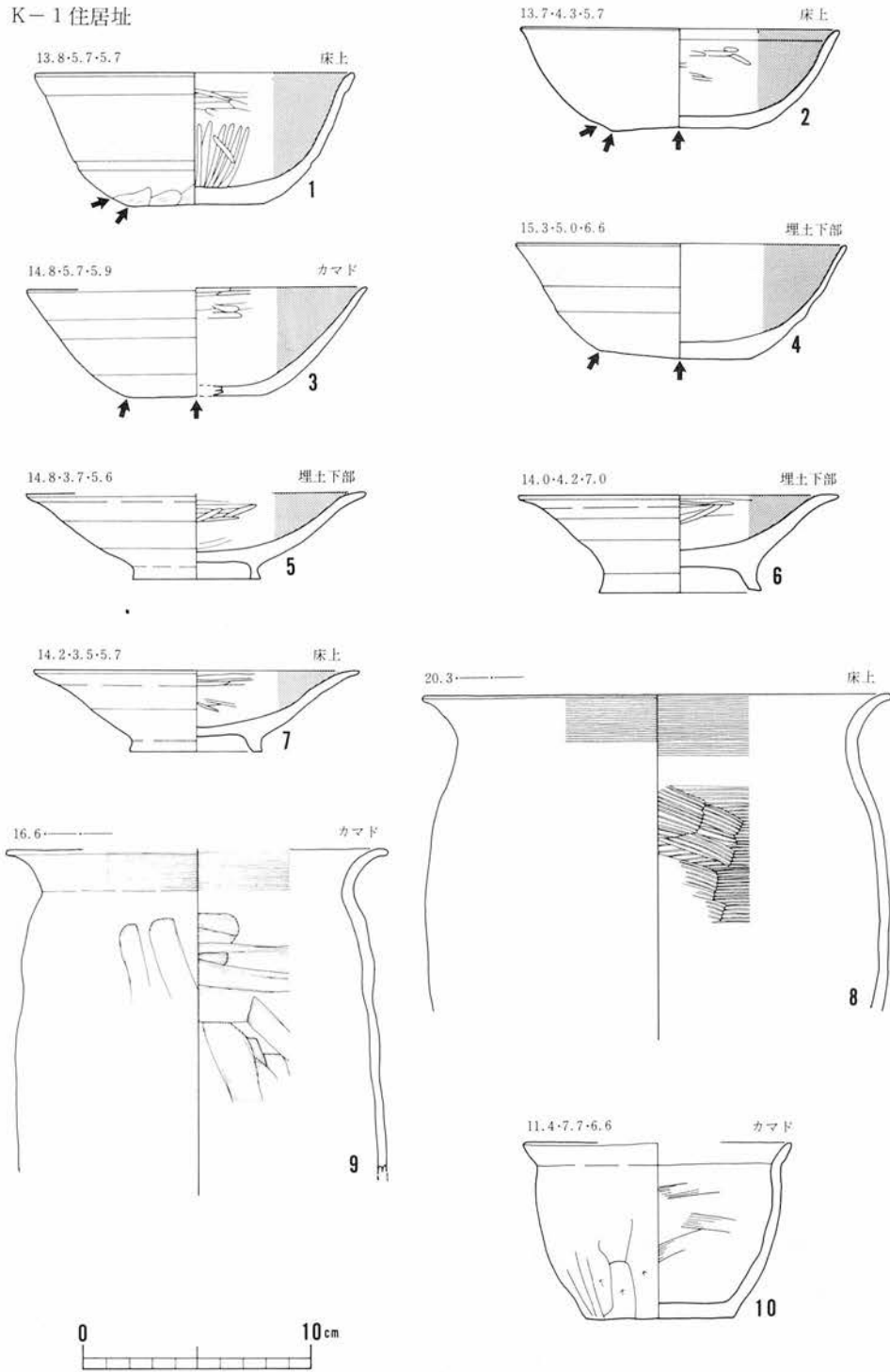


第64図 出土遺物(J-1住居址)

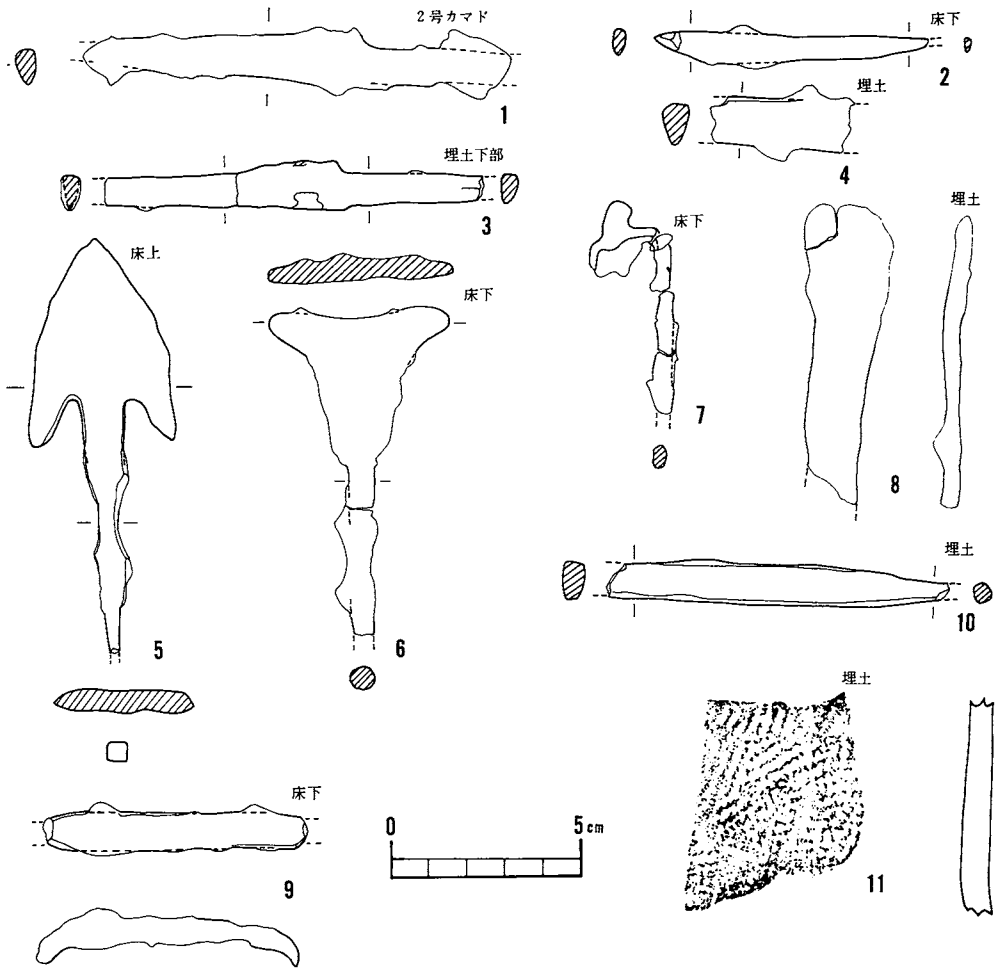


第65图 出土遗物(J-1住居址)

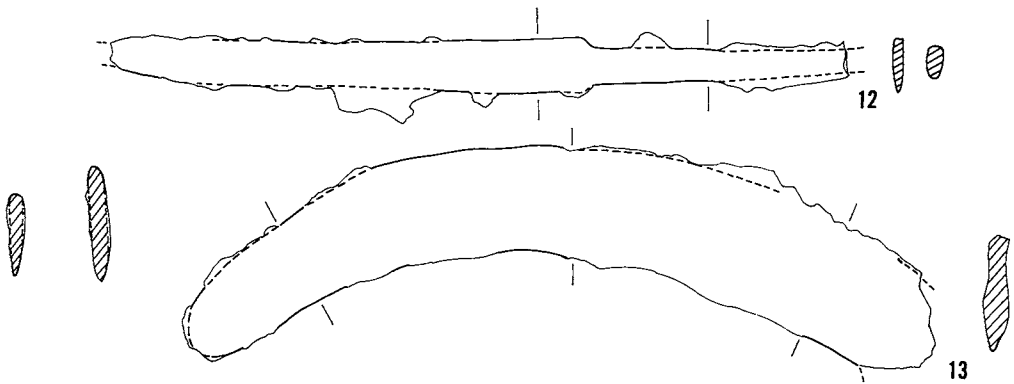
K-1 住居址



第66図 出土遺物(K-1住居址)



J-51ピット



第67図 出土遺物(K-1住居址・J-51ピット)

### Ⅲ. 兔 Ⅱ 遺 跡

遺跡所在地	江刺市愛宕字兔
調査期間	昭和53年4月3日～9月9日
調査対象面積	2,640m <sup>2</sup>
発掘面積	2,640m <sup>2</sup>

# 1. 検出された遺構・遺物

## (1) 竪穴住居址

### C 区

#### C-1 住居址

遺 構 (第1・2図・写真図版47・48ab)

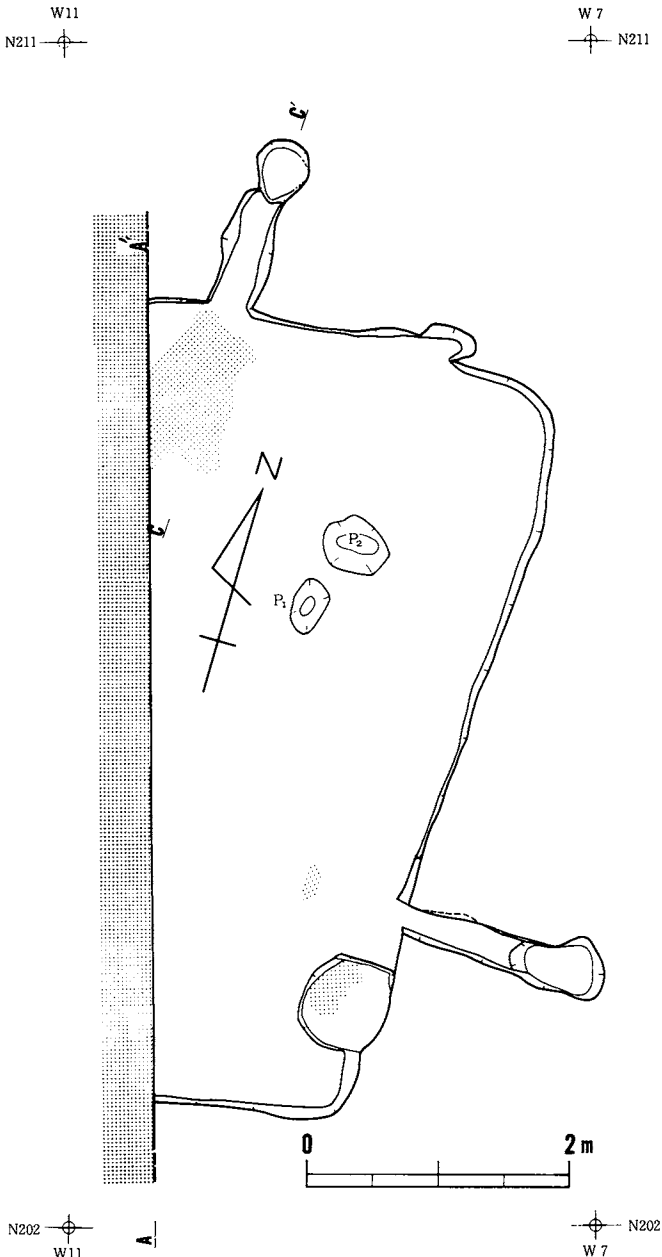
住居址の西側約 $\frac{1}{2}$ は調査区域外にあって規模・形状の詳細は不明である。また平面での形状把握に困難があり、東壁に掘りすぎがあった。南北では5.8 m土の長さを計る。主軸はほぼ南北方向にある。埋土は3層で構成される。上層は粒状の焼土・炭化物を多く包含する暗褐色シルト層、中層は上層より包含物の少ない褐色シルト層、下層は黄褐色シルト層である。壁高は北壁で32cm土を計る。床面には繊維状の炭化物が一部に焼土塊を伴いながら広範囲に分布していた。その状態は現地性の炭化である。床面は粘土質シルトが貼り床される。明確な掘り方が壁際を中心に検出され、多量の土器の小破片を出土する。

P<sub>1</sub> (径38cm土×25cm土・深さ80cm土)・P<sub>2</sub> (径40cm土・深さ60cm土) はともに床面を掘り下げた時点で検出されたピットであるが、その位置や規模等からは掘り方とは考えられない。本来は床面上に存在したと推定される。P<sub>1</sub>は柱穴の可能性もあるが詳細は不明である。

この住居址には2基のカマドが存在する。1号カマドは北壁に構築されているが、占める位置は不明である。天井部、袖部とも埋土との区別がつかず不明瞭である。燃烧部は90cm土×50cm土の範囲に焼成面が床面と同レベルで確認された。燃烧部の底面は良く焼成をうけている。煙道部は北へ140cm土延び、底面は水平である。煙出し部には、煙道底面より深さ10cm土のピットが掘りこまれている。2号カマドは東壁の南側寄りに位置する。天井部・袖部は不明で、23cm土×10cm土の範囲に痕跡的に焼成面が残る。煙道部は東へ170cm土延び、底面は先端に向い漸次傾斜しながら下っていく。煙出し部には、煙道底面より深さ10cm土のピットが掘りこまれている。煙出し部にはその構造にかかわると考えられる礫3個が出土した。このカマドの南側壁ぎわに、壁上縁から床面にかけて径70cm土の範囲に現地性焼土を伴い炭化した粃を含む稲わらとみられる炭化物がみられたが、住居址が一定程度埋没した時点でのものである。2基のカマドの新旧関係は1号カマドの燃烧部の焼成面が原面を良く保っているのに対し2号カマドのそれは削剝を受け痕跡的であることや土器の出土が1号カマド周辺に集中することから、1号カマドが新しい可能性が考えられる。

出土遺物（第9・11図・写真図版60a）

当住居址の遺物の大半は土器で、器種は坏・高台坏・甕で構成される。土器以外の遺物では鉄製品・土錘の他に埋土より石匙の出土をみる。遺物は1号カマド周辺部に多く出土しているが、埋土下部の遺物も一部含め図化した。



第1図 C-1住居址実測図(1)

坏形土器（第9図1～5） いずれもロクロ成形で、内面篋磨き後黒色処理の施こされた酸化炎焼成の坏である。1は体部下端及び底部全面に回転篋削り調整が施こされている（坏BIc類・W<sub>1</sub>手法）。体部は僅かに丸味をもって立ちあがる。2～4は体部下端及び底部全面に手持ち篋削り調整が施こされている（坏BIc類・H<sub>1</sub>手法）。体部は丸味をもって外傾し、3と4は口唇部下で外反する。3の底部には×印の篋書きがみられる。5は回転糸切り後体部下端にのみ手持ち篋削り調整が施こされている（坏BIb類・H<sub>6</sub>手法）。体部は外傾する。

高台付坏形土器（第9図6）内面篋磨き後黒色処理の施こされた坏部をもつ。坏部は大きく開き口唇部近くで外反する。高台部は短くて僅かに開く（高台坏BIa類）。

甕形土器（第9図7～9・第11図1・2） ロクロ不使用、ロクロ使用いずれの甕もみられる。7はロクロ不使用の大形の甕（甕AI類）で、口縁部は「く」の字状

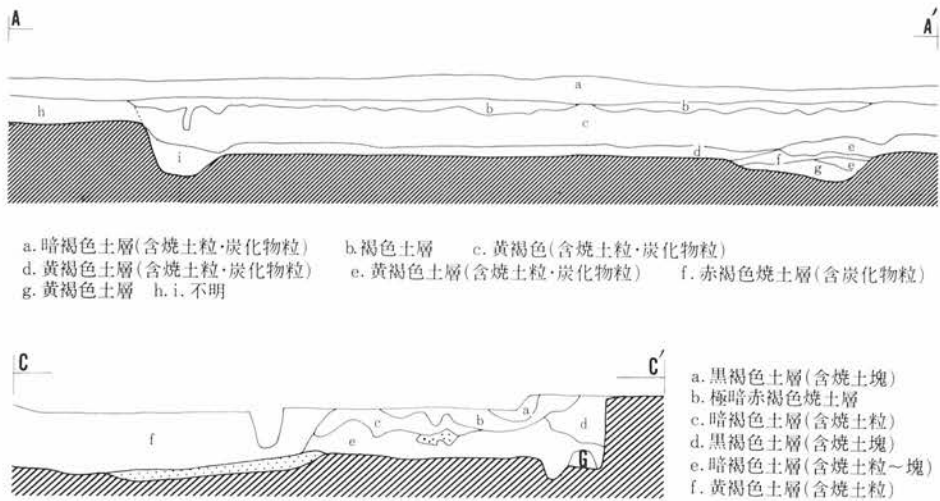
に外反する。体部上方に僅かな脹らみを有す。口縁部には横撫で調整、体部外面には篋削り、体部内面には刷毛目調整が施こされている。8もロクロ不使用の大形甕（甕AⅠ類）である。直立気味に立ちあがり上半で僅かに外反する口縁部を有し、頸部はくびれない。口縁部には横撫で、体部外面には上方向への篋削りが施こされている。9と1は体部上半にロクロ調整の施こされている大形甕（甕BⅠa類）である。いずれも口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部を上方に挽き出している。2は底部の破片で内外面とも撫で痕がみられる。

壺形土器（第11図3） 内外面とも叩き目痕を有す還元炎焼成の土器である。

鉄製品（第11図4～6） いずれも刀子である。4は刃部・茎部両端を欠き現存長10.4cmを測る。刃部幅は1.2cmで、関に刃部側、背側とも段を有し、茎に至る。茎部には木質部が残存している。5と6は出土状況から同一個体と考えられる。5は刃部の先端部で先端は細く尖る。現存長4.5cmを測る。6は刃部及び関部と思われるが、関部は錆化のため明瞭でない。現存長5.6cmを測る。

土錘（第11図7・8） 中央部に脹らみを有す管状の土錘である。

石匙（第20図7） 埋土下部より出土。横形の石匙で石質は砂質粘板岩である。



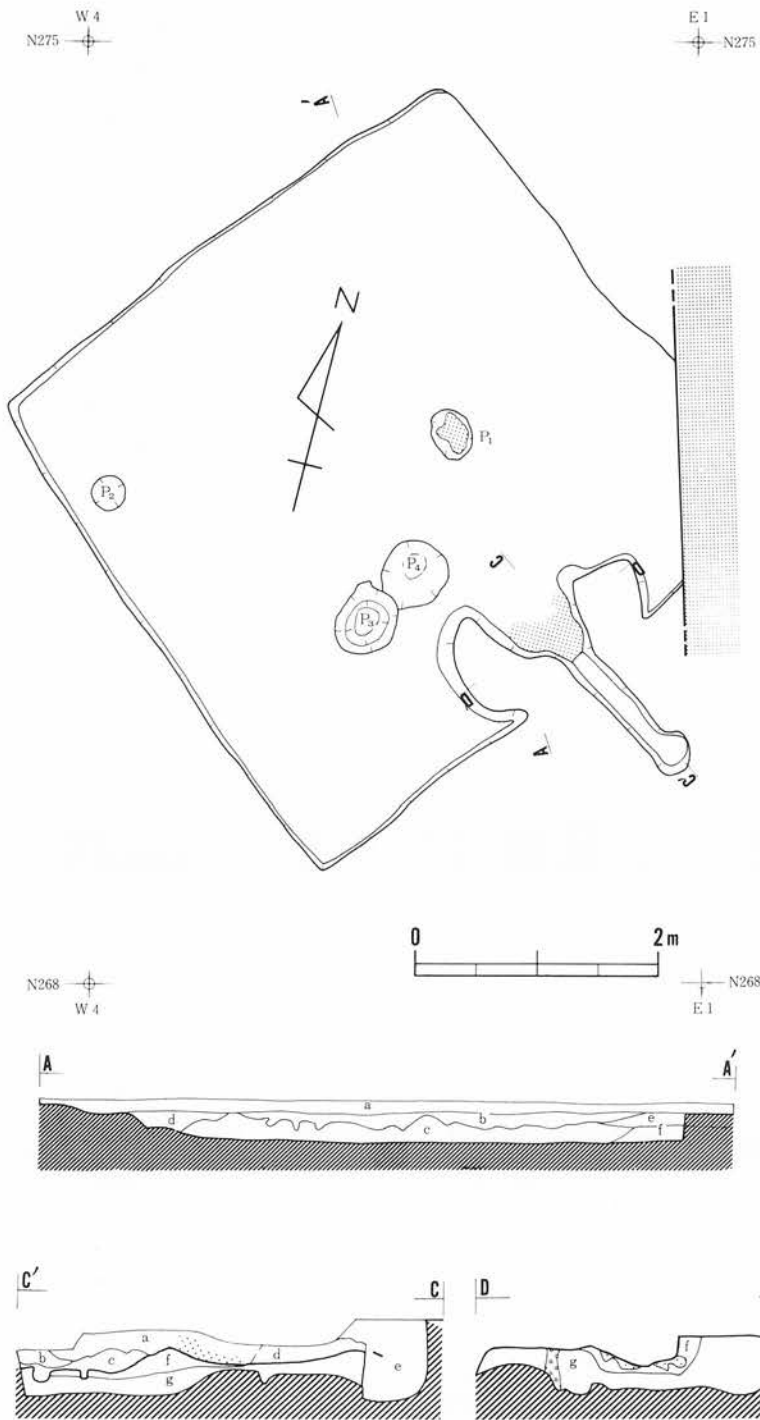
第2図 C-1住居址実測図(2)

## J 区

### J-1住居址

遺 構（第3図・写真図版48c）





住居址の南東隅が調査区域外にある。4.7 m 土 × 4.6 m 土の規模をもち、正方形の形状を示す。主軸は北西～南東方向にある。埋土は主に3層で構成される。a層はわずかに還元土壌化した黄褐色砂質シルト層、b層は粒状の焼土・炭化物を含む黒褐色土層、c層は褐色粘土質シルト層である。壁高は西壁で13 cm 土を計る。床面は全体に不明瞭である。

床面上に検出されたピットは、P<sub>1</sub> (径43cm 土 × 30cm 土 · 深さ8 cm 土) · P<sub>2</sub> (径30cm 土 · 深さ17cm 土) · P<sub>3</sub> (径50cm 土 · 深さ22cm 土)

第3図 J-1 住居址実測図

P<sub>4</sub>（径55cm±×50cm・深さ22cm±）などである。住居址の中央部東寄りにあるP<sub>1</sub>は、断面での形状は浅皿状を呈し、内部は焼成を受けとくに底面に焼成痕がみられる。P<sub>4</sub>の埋土は粒状の焼土・炭化物を包含したシルト質土で、下部には粒径1cm±の焼土塊が多く包含される。柱穴は確認されなかった。

カマドは南壁の中央部に位置する。天井部は崩壊し確認できなかった。袖部はシルトで構築され、残存状態は良好である。燃烧部内からは一括品を含む多数の土器が出土している。燃烧部の底面は、良く焼成をうけている。カマド幅100cm±、燃烧部幅54cm±を計る。煙道部は長さ127cm±を計り、底面は先端に向いわずかに傾斜して上がる。煙出し部には、煙道底面から深さ12cm±のピットが掘りこまれている。

#### 出土遺物（第11・12図・写真図版59）

当住居址の遺物はカマド内及びカマド周辺部より出土した坏・甕が大半を占める。土器以外では鉄滓が僅か出土している。

坏形土器（第11図9～15） いずれもロクロ成形で、切り離しは回転糸切りで、内外面とも調整のみられない酸化炎焼成の坏（坏BⅢ類）である。全体に器高が低く、体部は直線的に外傾し、ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。一部口縁部にかなり歪みのみられるものもある。

甕形土器（第12図1～4） 1と3はロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の大形甕（甕BⅠa類）で、短い口縁部をもつ。2はロクロ調整の小形甕（甕BⅠb類）で、内弯する口縁部をもち、体部内面に撫で調整がみられる。4は酸化炎焼成の大形甕の底部で、体部下端外面に斜め下方向の篋削り痕がみられる。

鉄滓は床面より4個出土しており、総重量30gを計る。いずれも多孔質で軽い。

## K 区

### K-1 住居址

#### 遺 構（第4図・写真図版49・50b）

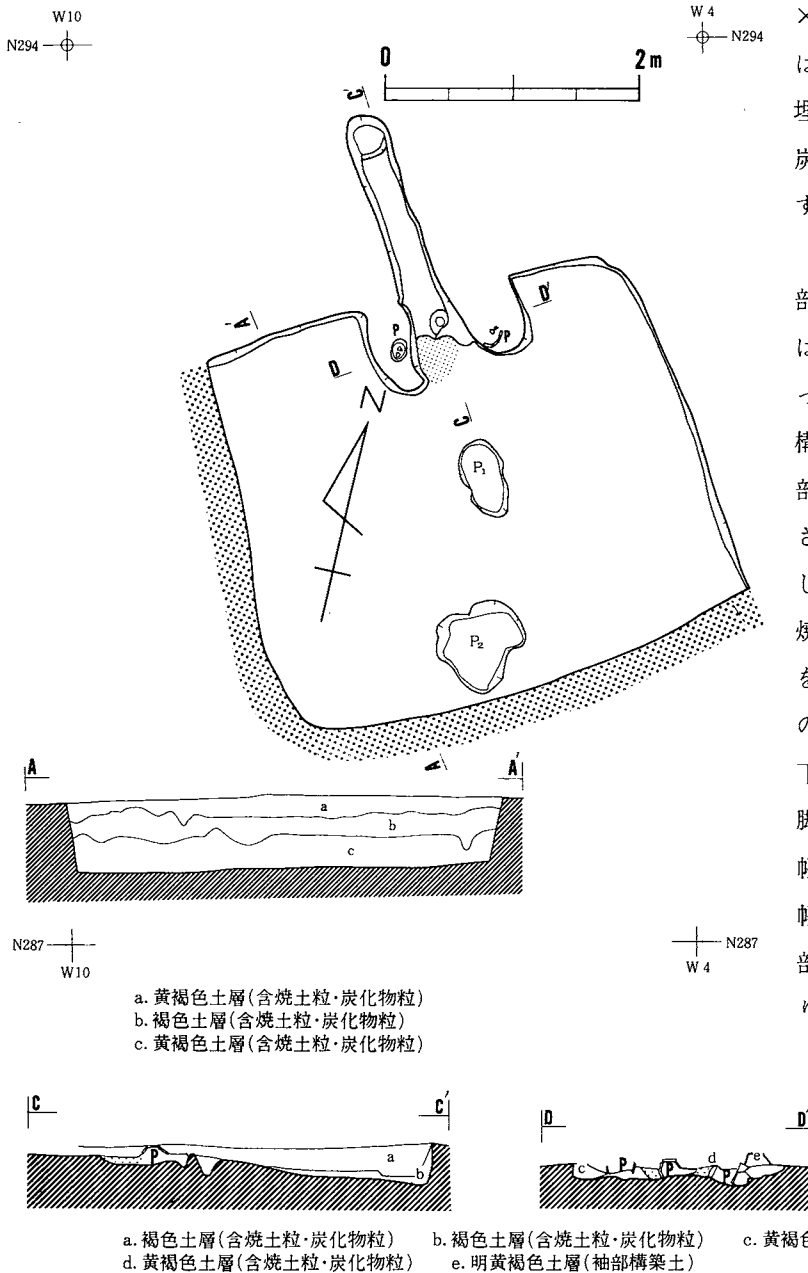
この住居址は西側の一部が農道下に存在したほかは、水田耕作土直下が検出面であったため、検出時にはすでにほぼ床面が露出し南壁は把握できなかった。また、農道の断面の観察からは住居址の掘りこみ面が確認でき、土層断面図の作成後に西に広げたが、それは不明瞭となり西壁を掘りすぎる結果になった。しかし、砂層を掘りこんで住居址が構築されることから平面の形状把握は可能であった。3.6m±×3.0m±の規模をもち、長方形の形状を示す。埋土は3層で構成される。上層は粒状の焼土・炭化物を多く包含して部分的に還元土壌化がみられるにぶい黄褐色シルト層、中層は上層より包含物の少ない褐色粘土質シルト層、下層は黄褐色砂質

シルト層で、下部は還元土壌化がすすんでいる。床面は砂質シルトで堅くしまり、水田耕作土の影響で全体に還元土壌化している。

床面で2個のピットが検出された。P<sub>1</sub> (径60cm±×35cm±・深さ14cm±) は、カマドの前面に検出されたピットで、埋土には焼土粒・炭化物粒を多量に包含する。不整形なP<sub>2</sub> (径65cm±

×70cm±・深さ12cm±) は南壁中央寄りにあり、埋土には粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する浅いピットである。

カマドは北壁の中央部に位置する。天井部は崩壊し確認できなかった。袖部はシルトで構築されている。両袖部には甕形土器を倒置させてまき、補強用としてもちいている。燃烧部の底面は良く焼成をうけている。燃烧部の中央には壺形土器の下半分を倒立させて支脚としている。カマド幅は130cm±・燃烧部幅40cm±を計る。煙道部の長さは165cm±あり、底面は先端へ向い



第4図 K-1 住居址実測図

漸次傾斜して下がる。煙出し部には、煙道底面より深さ10cm±のピットが掘りこまれている。

#### 出土遺物（第12・13図・写真図版59・60a）

当住居址の遺物は土器が主体で、カマド内及びカマド周辺部出土のものが大半を占める。器種は坏・甕・壺で構成される。土器以外では鉄器が2点出土している。

坏形土器（第12図5） ロクロ未使用の坏である。底部中央を欠くが、平底気味の丸底を呈し、内外面とも稜を有しない（坏A Ic類）。外面は体部上半から口縁部にかけて横撫で後篋磨きされ、体部下端から底部は篋削り後一部篋磨きがみられる。内面は篋磨き後黒色処理が施こされている。体部は内弯気味の立ちあがりをもつ。

甕形土器（第12図6・第13図1～3） すべてロクロ未使用の甕（甕A類）である。6と1は直線的に外傾する口縁部をもち、肩部に僅かに段を有する長胴の甕である。1は口縁部は横撫で、体部は刷毛目調整がみられる。6は口縁部に横撫で、体部外面に上方向への篋削り、内面に撫で痕がみられる。2は長胴甕の体部で、外面に上方向への篋削り、内面に撫で痕がみられる。部分的に巻き上げ痕もみられる。3は口縁部が外反・体部に僅かに脹らみを有す小形甕である。底部が僅かに外に張り出し、底面には木葉痕がみられる。調整は明瞭でないが、内外面とも撫でによるものと思われる。

壺形土器（第13図4） ロクロ未使用で酸化炎焼成の壺である。体部下端から底部しか残存しないが、体部は球形を呈する。底面に木葉痕を有し、体部内面には撫で痕がみられる。

鉄製品（第13図5～7） いずれも性格不明の鉄製品である。5は両端を欠損し、現存長4.3cmを測る。断面は0.4×0.6cmの方形を呈す。6は現存長4.1cmで幅1.0cm厚さ0.5cmを測る。僅かに長軸方向に弯曲する。7は現存長4.3cmを測る。5と7は刀子あるいは鉄鏃の茎かもしれない。

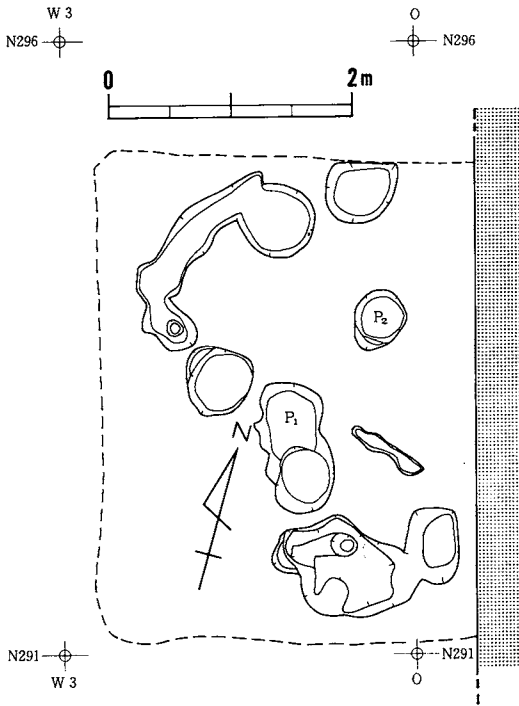
## L 区

### L-1 住居址

#### 遺 構（第5図・写真図版50ac）

この遺構は水田耕作土直下に検出された。柱穴状のピットや住居址の掘り方の可能性をもつと考えられる不整形ピットが多数存在し、その周辺にはいわゆる“地山”面（砂層）とは区別される粒状の焼土・炭化物を包含するシルトの広がり確認された。ピット類の埋土は、いずれも焼土粒や炭化物を包含するシルト層で、P<sub>1</sub>の埋土上部からは鎌が出土したほかP<sub>2</sub>などから土器片が出土している。

いちおう住居址として分類したが、ピット類のもつ内容が把握できないことから詳細は明ら



第5図 L-1住居址実測図

が最も広く先端に向い徐々に狭まる。2は直径0.7cm±の棒状の鉄製品で両端を欠く。

## (2) 弥生式土器出土地

弥生式時代の遺物はA～D区、H、I区、K区の3区域に集中して出土した。出土レベルは3地点ともほぼ同一で標高37.1m±であり、平安期の竪穴住居址の確認面とほぼ同一面である。出土範囲はいずれも微地形上の東側緩傾斜面に相当する。

### A～D区

遺物の出土は当区の中でもとりわけB～C区の東寄りの範囲(20m±×8m±)に特に多くみられた。調査当初は出土範囲がまとまりをもつことから遺構の存在を予想し、遺構の検出に務めた。しかし調査を進める中で遺構は確認出来ず、しかも土器は磨滅のはげしい細片の土器片が大半を占めていること、下部に平安期の遺物が少なからず混入していること等が確認されるに至り、当地域の遺物は一次的なものではないことが判明した。

また、遺物の出土状況は人為的なものではないことから、当地区は凹状を呈していた個所に冠水等の自然営力により周辺部の遺物が混入したものではないかと考えられる。

かではない。

### 出土遺物(第13・14図・写真図版60a)

当住居址の遺物は謹少で、土器数点と鉄製品2点出土したのみである。

坏形土器(第13図8) ロクロ成形による酸化炎焼成の坏で、体部下端及び底部全面に手持ち篋削りが施こされ、内面には篋磨き後黒色処理されている(坏B Ic類・H<sub>1</sub>手法)。体部は僅かに丸味をもって外傾する。

甕形土器(第13図9) ロクロ不使用の小形甕(甕A II類)である。口縁部は外反し、調整は撫でによる。体部外面は上方向への篋削り、内面には横方向の撫で痕がみられる。

鉄製品(第14図1・2) 1は鎌でありP<sub>1</sub>より出土している。刃部先端を欠き現存長14.4cmを測る。基部は先端を欠くが袋状に屈曲する。刃部は緩く内弯し、刃部幅は基部付近

**出土遺物** 土器の器種は甕形土器、壺形土器で構成されるが、大半は壺形土器である。個体数は明瞭でないが底部の個数は18個体を数える。土器は沈線の状態や文様体の構成から3群に分けられる。石器は、アメリカ式石鏃2、無柄石鏃2、石錐1、石匙1、剥片石器が出土している。その他に自然礫の出土をみた。

**甕形土器** (第18図1～9・12・写真図版55ab) 1、2は灰褐色の土器である。口縁部は緩く波状を示し短かく僅かに外反する。口縁部の上端に沿って細い割り材具による縦方向の刺突文を施し、その下部に経1cm土の連弧文が浮文状に施文されている。頸部は弱い「く」字状を呈する。体部は無文と思われる。3は口唇部に刺突による刻み目がある。口縁部は、平縁で短く僅かに外反し縄文のみ施文している。頸部は弱い「く」字状を呈している。体部は磨滅のため不明。4は燈色の小形土器である。口縁部は平縁状であり短く外反する。頸部は弱い「く」字状を呈す。口縁部・体部とも無文である。7は灰褐色の土器であり、第15図-5と同一個体と思われる。緩い波状口縁を呈し、把厚する。口縁部は短く外反し、頸部がすばまり、体部上端に少し脹みを有す。口縁部の上端にそって割り材具による縦方向へ刺突文を有し、その下部に細い粘土紐で浮文状に小連弧文を施文し、さらに浅い2条の平行沈線を雑に廻らしている。頸部と体部の境にも同様の平行沈線を廻らし、体部全面に細かい縄文を斜位に施文している。8、9は同一個体で、波状口縁を示し、灰褐色を呈す。肥厚する口縁部は短く外反し、口縁部の上部には、7と同様の刺突文と浮文がみられる。頸部から体部にかけては浅くて太い沈線による曲線区画文と平行沈線との組合せで文様が構成される。区画文の内側には細かい縄文がみられ、外側はすり消されている。12は燈色の平縁の土器である。肥厚する口縁部は短く外反し細かい縄文だけが斜位に施文されている。頸部の文様は7に共通する。10は赤褐色の土器の体部と思われる。浅くて太い沈線で曲線区画文があり、区画文の内側には縄文がみられる。外側はすり消されている。

**壺形土器** (第18図5・6・10、19図1～3・写真図版55b・56a) 5は灰褐色の土器の口縁部であり平縁で肥厚する。口縁部は短く僅かに内弯する。肥厚部に細かい縄文を斜位に施文している。頸部から下は無文らしく全体にすすけています。

6も5と同様の形状を示すが口縁部から頸部に変る部分が特に厚く段を有す。10は肩部と思われる。浅くて太い沈線で曲線区画文がみられ、区画文の内側には縄文がみられ、外側にすり消されている。第19図-1は、燈色の土器である。平縁口縁であり肥厚している。口縁部に刺突文があり、口縁部の上端1cm±幅に細かい縄文を斜位に施文し、その下部に1条の沈線を廻らす。口縁部中央の肥厚帯部分に「十」字状に刺突を入れ、その下部に半載竹管で波状文を施文している。2は燈色の厚手の土器である。口唇部に押圧文があり、口縁部は平縁で短い。3は燈色の土器であり、口唇部に「W」字状の刺突文がみられる。口縁部は平縁状で少し内弯し無

文である。頸部に1条の沈線がみられる。

4～12の土器の器種は定かでないが沈線の状態等からみてⅢ群に所属するものと考えられる。4、5、6は暗褐色の土器で同一個体であり、甕形土器の口縁部から頸部と思われる。7と8、10と11は同一個体である。9の土器の沈線の一部に丹塗りの痕跡が観察できる。12は暗赤褐色の小形土器であり、数条の平行沈線と斜位に施文された細い縄文がみられる。13～16は体部に縄文が施文されている。13の土器には横位の綾絡文が廻っている。17、18は木葉痕を有す底部である。他底部は無文である。以上の土器は次のように分類される。

Ⅰ群土器（第17図 2～6・写真図版54a）浅くて細い沈線によって文様が施文され、すり消し技法がみられる土器である。器種は壺形土器である。6は頸部から肩部にかけての破片であり、燈色を呈す。直立しており、肩部は強く張りだしている。肩部に2条の平行沈線をめぐらし、その下部に斜位の2条の平行沈線による施文がみられる。磨滅により明瞭でないがすり消し技法がとられていると思われる。2は体部片で6と同様の文様体を有し、すり消し技法もみられる。3、4、5は燈色を呈する土器片で同一個体と思われる。磨滅がはげしくはっきりしないがすり消し技法が施こされているようである。

Ⅱ群土器（第17図7～16・写真図版54ab）浅くて細い2条1組の平行沈線によって文様が構成されている土器である。2条の沈線の幅は2mm±～3mm±である。器種は壺形土器である。7、8、9は、暗赤褐色の土器の口縁部の部分があり、同一個体である。口唇部に刻目をもつ。口縁部は外反しており、4条の沈線で波状文を施文している。頸部は「く」字状を呈し、さらに1条の沈線を廻らしている。肩部は2条1組の沈線で三角文を重複させ、横位に連続させている。部分的に炭化物の付着がみられる。12、13、14、15、16は肩部か体部の破片と思われる。2条1組の沈線で三角形文を施文している。10、11は、厚手の土器の口縁部であり、燈色を呈す。頸部は少し長い。口縁部の上部に半載竹管により連弧文を施文している。10は1組の連弧文、11は3組の連弧文である。

Ⅲ群土器（第18図 1～12・19図1～12・写真図版55・56・57a）肥厚した口縁部をもつ土器である。口縁部が縄文だけの土器、刺突文をもちその下部に浮線文をもつ土器、体部に太い沈線の曲線による区画文をもちすり消し技法のみられる土器である。器種は甕形土器、壺形土器で構成される。

石器（第20図1～7・写真図版58）

石鏃 有柄のアメリカ式石鏃2、無柄の石鏃2が出土している。1、2は基部両側に挟りこみのあるいわゆるアメリカ式石鏃である。2個とも挟りこみの一部を欠損している。1の計測値は長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重量0.75gであり、石質はチャートである。2の計測値は長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重量0.95gであり、石質は珪質粘板岩である。

3、4は鏝の身の剥離調整が粗雑である。計測値は長さ2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量1.80gである。石質は珪質粘板岩である。4は一部分に自然礫面を残している。計測値は長さ2.8cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重量2.15gである。石質は珪質粘板岩である。5は細身の石鏝である。先端が僅かに丸味を有す。計測値は長さ4.3cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重量3.35gである。石質は粘板岩である。

石錐 錐部の先端が欠損している。少し厚みのあるつまみ部に断面菱形の錐部がついていたものとみられる。計測値は長さ5.0cm、幅3.5cm、厚さ(錐部)0.4cm、重量9.55gである。石質は砂質粘板岩である。

石匙 横刃形石匙であり、C-1住居址埋土から出土した。つまみ部の挟みこみは、深くなく両肩は緩く弯曲する。両面からの剥離調整も入念である。計測値は長さ3.4cm、幅5.5cm、厚さ0.6cm、重量10.95gである。石質は砂質粘板岩である。

#### H~I区

当区域では西側寄りに遺物が集中しており、その範囲は8m±×6m±である。出土層位は粘土質シルトの上面で焼土、炭化物を僅かに含む。遺物包含層は25cm±の厚さを有するが上部ほど量が多い。遺物は細片のものが大半を占め器形の全容を知りえるものはない。石器は剥片が僅かにみられる。包含層上部より平安時代の遺物が1点完形で出土している。遺構は検出されなかった。

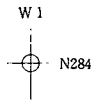
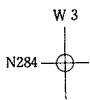
**出土遺物** 土器の器種は甕形土器、壺形土器、高坏形土器、筒形土器で構成される。石器は全て剥片である。

甕形土器 (第16図1~5・写真図版57a) 1は赤褐色の粗製大形土器である。口縁部は平縁で外反する。頸部は「く」字状を呈し、体部に細かい縄文を横位に施文している。部分的に炭化物の付着がみられる。胎土に少量の金雲母を含む。2は暗赤褐色の粗製土器で斜位の細かい縄文がみられる。2'は燈色を呈す粗製土器で斜位の細かい縄文がみられる。いずれも体部片で、細かい縄文は燃糸文とみられる。3は赤褐色の粗製小形土器の口縁部である。口縁部は僅かに外反し、平縁で無文。5は燈色の土器の口縁部である。口縁部は僅かに外反し、平縁で無文。内外面とも刷毛撫でされている。胎土に少量の金雲母を含む。4は燈色の粗製小形土器である。口縁部は僅かに外反し、無文で波状を呈す。頸部は「く」字状を呈し、体部は細かい縄文を横位に施文している。

壺形土器 (第16図6・8・17図1・写真図版57) 6は燈色の粗製大形土器の体部である。LR単節縄文が横位に施文されている。胎土に金雲母を含む。8は暗褐色の精製土器の肩部である。太い沈線による文様を有す。

第17図1は燈色の精製大形土器の体部である。2条の太い平行沈線により変形工字文を2段に





第6図 弥生式土器出土状況(K区)

られる。口縁部の内側に1条外側に2条の太い沈線を廻らしている。胎土に金雲母を含む。

IV群土器 (第16図1~12・17図1・写真図版57b) 無文または縄文だけの粗製土器と沈線による有文の精製土器とある。沈線による文様は変形工字文胎土に金雲母を含む。

**K区** (出土状況・第6図・写真図版46a)

遺物包含層は粘土質シルトの上面で、その範囲は3m±×4m±と小さい。厚さは10cm±で焼土・炭化物を僅かに含む。当区の遺物は個別別のまとまりを有し完形品も出土していることや他時期の遺物の混入がみられないこと等より原位置を保つものと考えられる。しかし遺構は検出できなかった。

**出土遺物** 器種は甕形土器、壺形土器、高坏形土器で構成される。縄文だけを施文している粗製土器と沈線による有文の精製土器に分けられる。胎土に金雲母を含むが、量はH~I区出土土器ほどではない。IV群土器としてまとめられる。石器は打製石斧が1点出土している。

甕形土器(第15図1・4・写真図版53a) 4は粗製大形土器である。色調は暗赤褐色を呈し、口縁部は短く僅かに内弯し、平縁で無文。体部は磨滅により部分的にであるが横位の細かい縄

配し、工字文の中に1条の沈線を施文している。すり消し技法がみられる。胎土に金雲母を少量含む。

高坏形土器(第16図 10・11・写真図版57b) 10、11は赤褐色の高坏形土器の台部で、同一個体である。台部は「ハ」字状に開く。下方3分の2の部分に太い沈線で変形工字文を配し、工字文の上下に1条の沈線を廻らしている。工字文の中には1条の沈線を有す。台部の内側は丁寧なみがきが施こされている。胎土に少量の金雲母を含む。

筒形土器(第16図 12・写真図版57b) 12は赤褐色の精製土器である。3条の太い平行沈線を廻らし、その下部に同じ太さの3条の沈線を波状に施文している。胎土に少量の金雲母を含む。

以上の他に7は淡褐色の深鉢形土器か無頸甕形土器と思われる。内外とも無文であり、粗製土器である。9は鉢形土器の口縁部と思

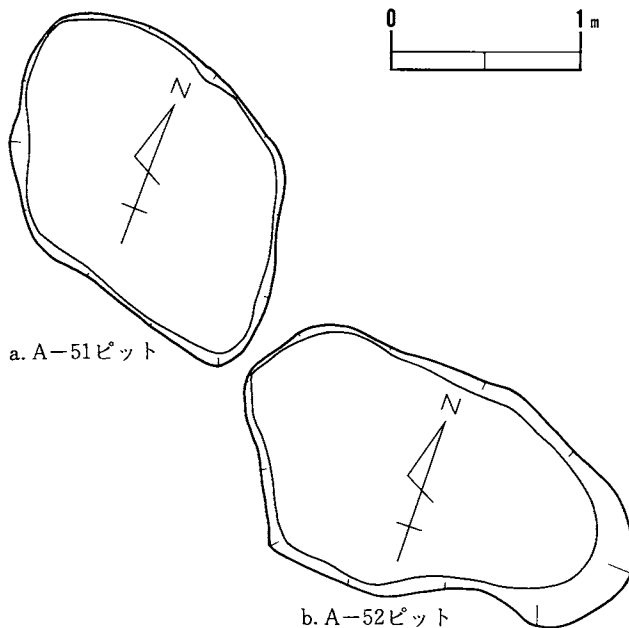
文がみられる。外側上半に炭化物の付着がある。計測値は口径19.5cm、体部最大径22cm±、残高25cmである。1は暗赤褐色の完形小形粗製土器である。口縁部は短くて僅かに外反し無文。頸部は「く」字状を呈し、体部は斜行縄文が雑に施文されている。部分的に炭化物の付着がみられる。胎土に僅かに金雲母を含む。計測値は口径8.5cm、体部最大径9.0cm、底部5.2cm、高さ9.4cmである。

壺形土器（第15図3・写真図版53c）燈色の精製土器の肩部と思われる。浅くて太い沈線が3条みられる上部2条の沈線間に細かい縄文が斜位に施文されている。縄文帯の上下ともすり消されている。胎土に少量の金雲母を含む。この土器片の内側に靦の痕が確認された。計測値は粒長5.95mm、粒幅3.45mmである。

高坏形土器（第15図2・写真図版53b）にぶい燈色の精製土器である。台部のみ残存し「ハ」字状に開く。台部の上方は無文で下方に太い沈線による変形工字文を配し、変形工字文をはさむ形で、2条1組の太い平行沈線を廻らしている。変形工字文の中に1条の沈線を入れている。計測値は坏部底径5cm、台部底径10.5cm、残高7cmである。胎土に僅かながら金雲母を含む。

石斧（第20図・写真図版58b）自然面を一部残す。計測値は長さ12.1cm、幅5.1cm、厚さ2.7cm、重量183gを計る。石質は硬砂岩である。

### (3) ピット



第7図 ピット実測図

**A-51ピット**（第7a・14図・写真図版51ab）

C-1住居址の南東外方に位置する。径160cm±×130cm±、深さ13cm±を計り、不整な方形に近い形状を示す。埋土は黒褐色土層の単層で、焼土塊や炭化物粒を多く包含する。遺物は底面およびその直上から出土している。

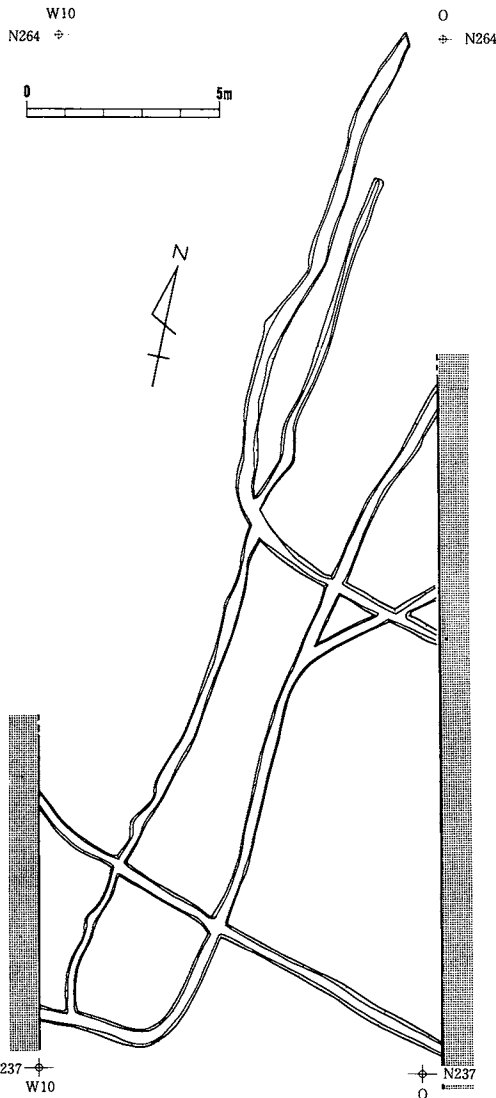
出土遺物は土器だけで、坏・高台坏・甕がみられるが図化出来たのは高台坏（第14図3）と甕（第14図4）だけである。高台坏は内面篋磨き後黒色処理された坏部を

有し、高台部は僅かに開く。甕はロクロ調整の施こされた大形甕（甕B Ia類）で、口縁部は強く外反し、口唇部を上方に挽き出している。体部は緩く脹らみ、体部中央に最大径を有し、下方向への篋削りがみられる。

**A-52ピット**（第7b・14図・写真図版60a）

A-51ピットの東側に隣接して位置する。径 240 cm ± × 130 cm ± ・ 深さ 20 cm ± を計り、不整楕円形の形状を示す。埋土は黄褐色土層の単層で、多くの焼土粒・炭化物粒を包含する。

出土遺物は謹少であるが、完形品の刀子を出土している。土器は坏と高台坏（第14図5）が



第8図 溝跡実測図

みられるが後者のみ図化した。坏はロクロ成形で底部及び体部下端に篋削調整され、内面に黒色処理がみられる（坏B Ic・H<sub>1</sub>手法）。高台坏は丸味をもって大きく開き、口唇部下で外反する坏部を有す。坏部内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。高台部は高さ 1.0 cm で僅かに開く。刀子（第14図6）は全長 18.5 cm で刃部長 13 cm、莖長 5.5 cm を測る。刃部幅は中央部で 1.4 cm で、刃部端はやや丸味をもつ。関は背側に緩い傾斜をもつが刃部側にはほとんど区画はみられない。莖は幅 0.9 cm、厚さ 0.6 cm で先端が僅かに細くなる。

このピットはA-51ピットとともに住居址の掘り方の可能性がある、と想定した。しかし、他に住居址の痕跡を示す存在がないことから、2基とも一応独立の存在と考える。

**(4) 溝跡**（第8図・写真図版51c）

座標軸 N 238 ~ N 264 ・ 0 ~ W10 の範囲（南北26m・東西10.5m）に5条の溝跡が検出された。いずれも上幅25cm ± ~ 40cm ± ・ 溝底幅25cm ± ・ 深さ 5 cm ± を計り、断面での形状は「U」字状を呈する。埋土は黒褐色土層の単層である。ほぼ南北方向に走るもの、南

北方向に走り東または西に折れまがるもの、東西方向に走るもの、そして北東—東西方向に走るものがある。規模・深さに類似性がみられることや網目状に互いが連絡しあうことなどから、単独の溝の重複ではないと考えられる。

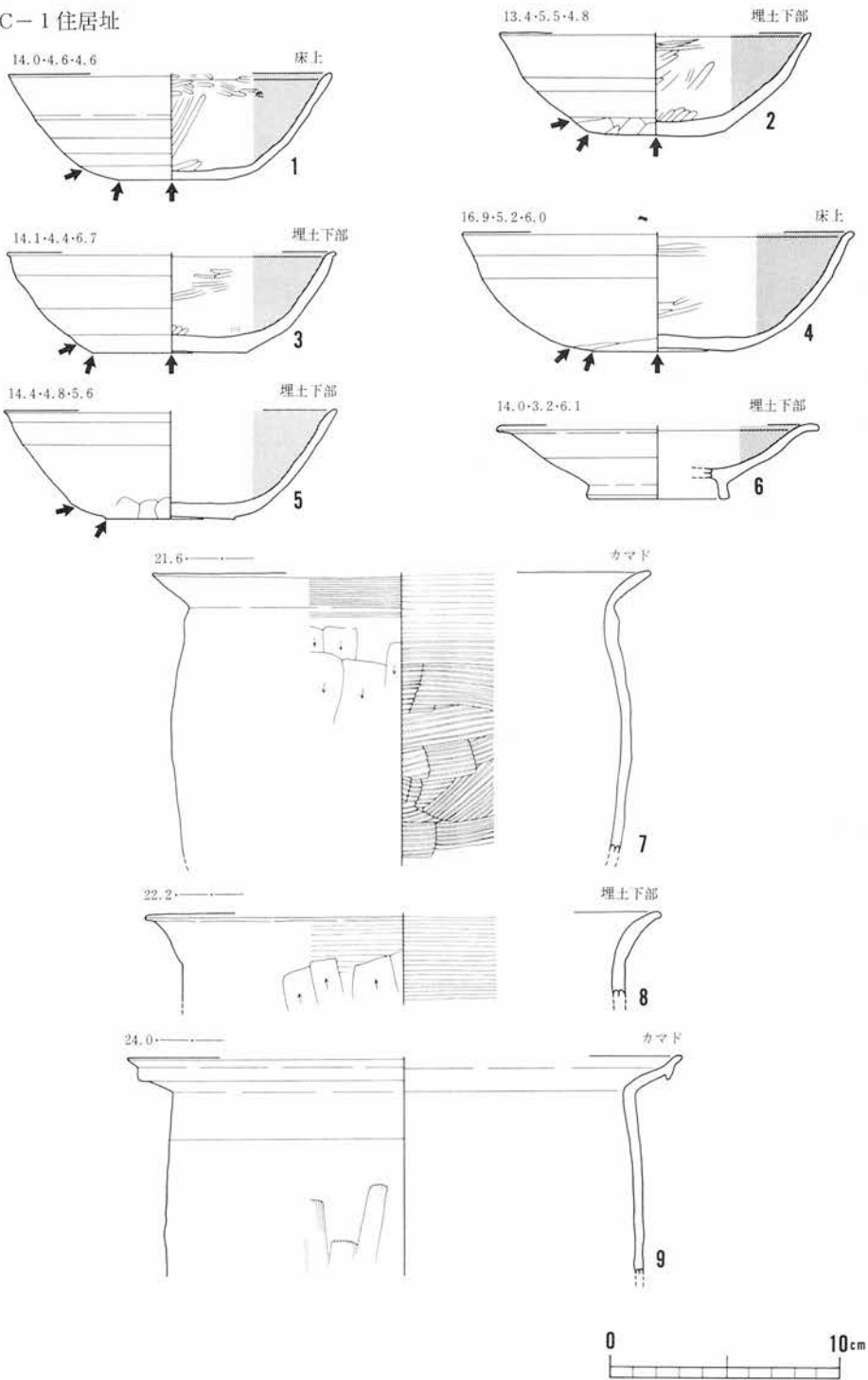
出土遺物には土器の小破片がわずかにあるが、図化できるものはない。

溝跡はA区～D区にかけて分布する弥生式土器の含層の上部を切って走っている。

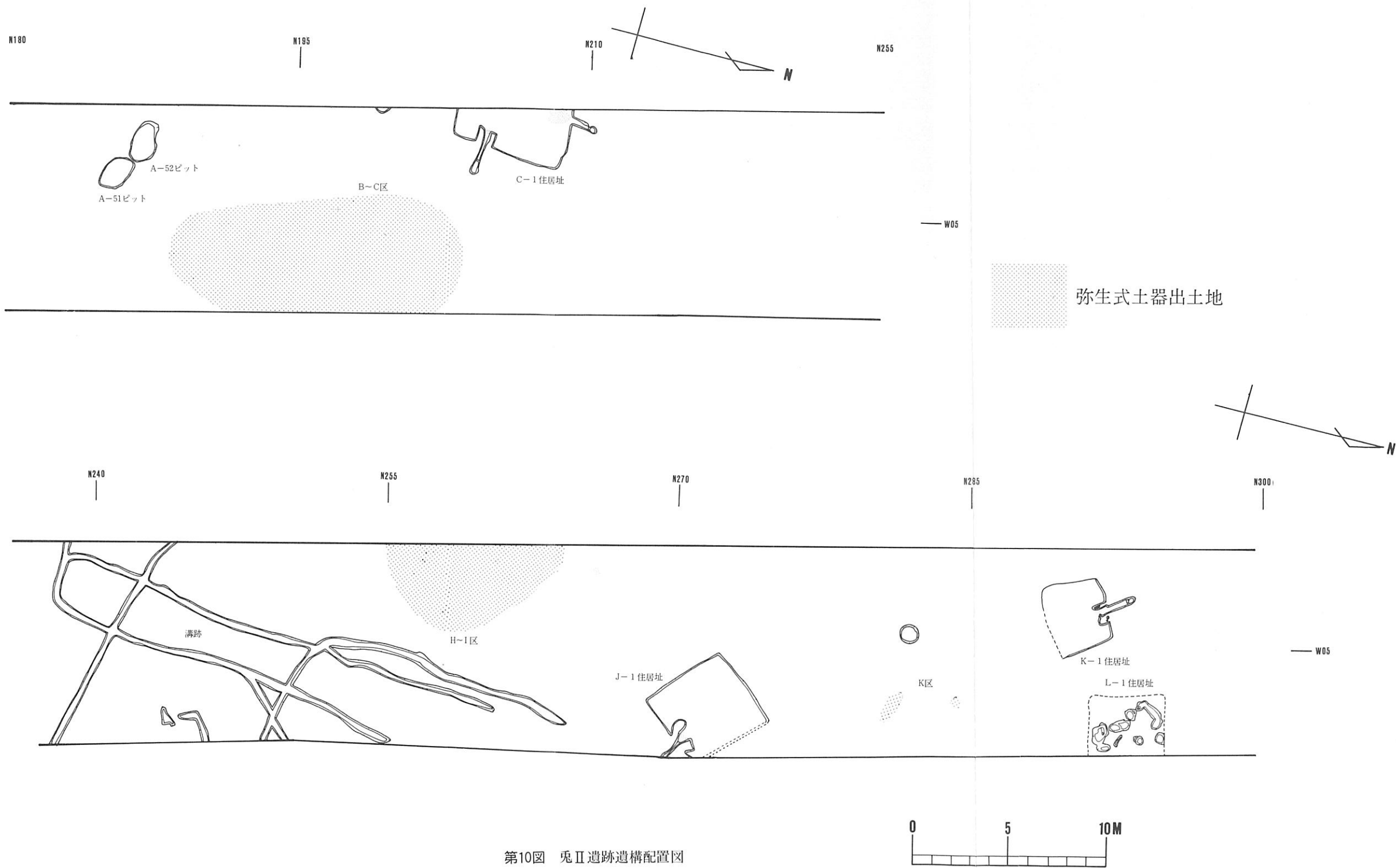
## 2. ま と め

兔Ⅱ遺跡は力石Ⅱ遺跡と同じ微高地上に在り、その最も北寄りに位置する。検出された遺構は奈良時代末から平安時代前半の竪穴住居址が4棟とピット3基、年代不明の溝跡数条だけである。しかし遺構は検出されなかったが弥生時代の遺物が多く出土したことが注目される。弥生式土器は比較的まとまりをもった出土状況を示し、しかも弥生時代各期に及んでいる。このことは調査区域周辺部に集落の存在する可能性を想定されるとともに、江刺の沖積地がある程度安定した生活根拠地であったことを示すものであろう。またこれらの土器群の中でもやや古い段階の土器片に靱痕のみられたことは当地方に於ける稲作開始を考える上に貴重な資料となるであろう。今回の調査では遺構の検出が出来なかったため、土器の共伴関係を明確に出来なかったが弥生文化の一端を知る貴重な資料を得ることが出来た。今後低位面の調査を含めた沖積地全体の再検討が望まれる。奈良～平安期の竪穴住居址は力石Ⅱ遺跡に比べ密度は劣るが力石Ⅱ遺跡と同じ範疇の中で把えるべきものであろう。

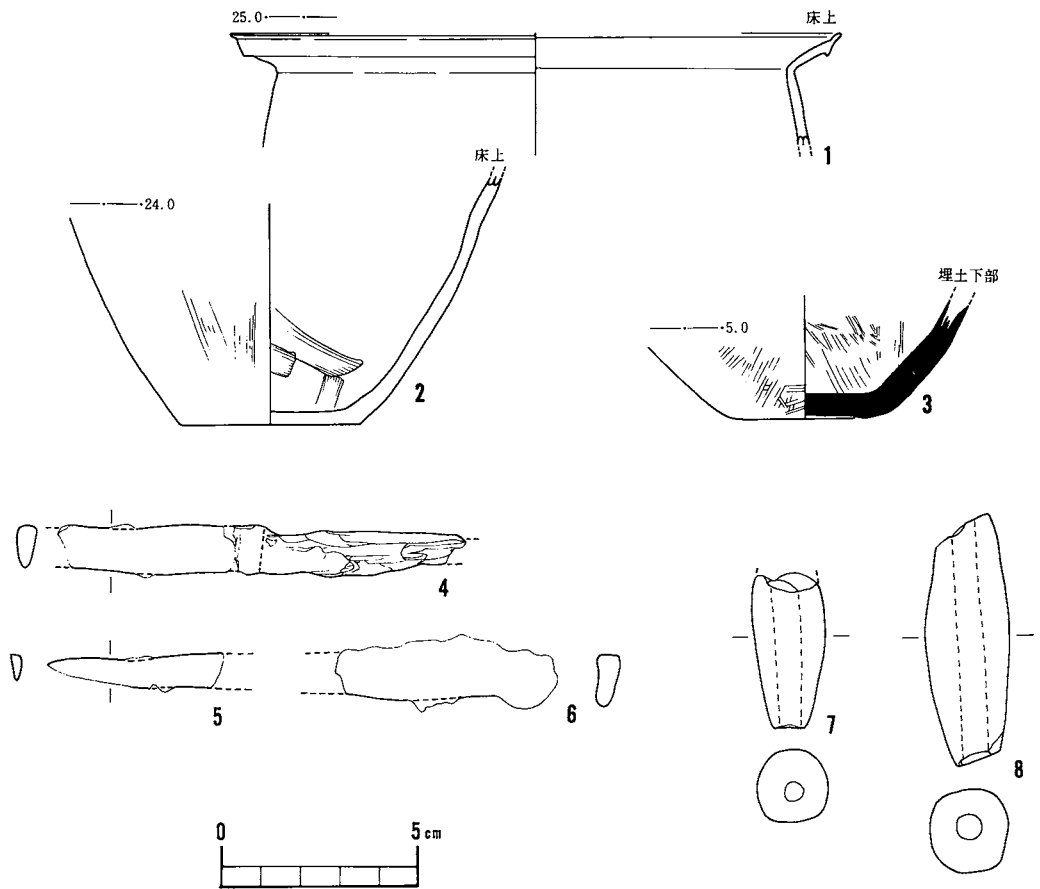
C-1 住居址



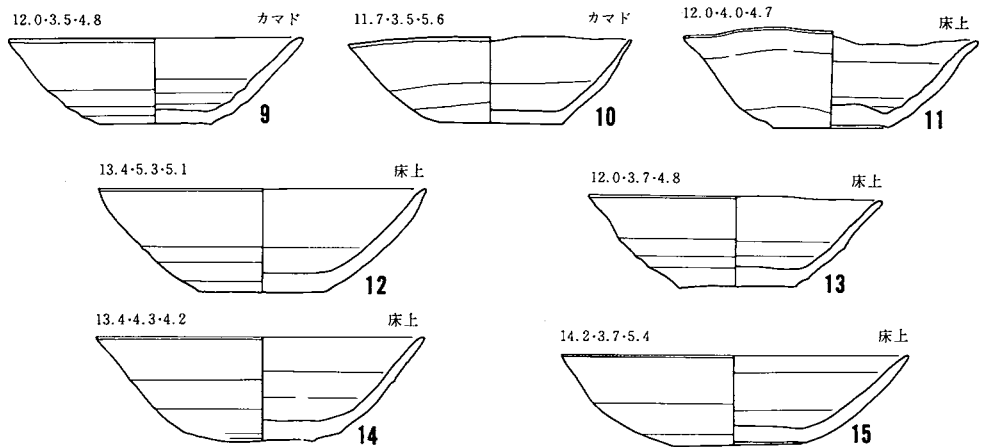
第9図 出土遺物(C-1住居址)



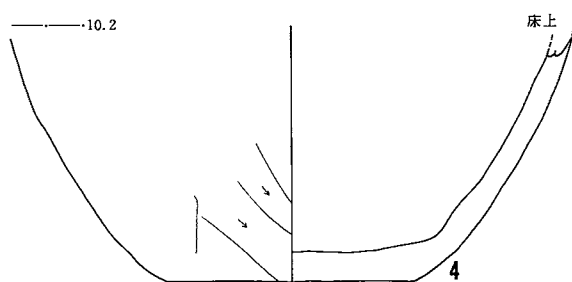
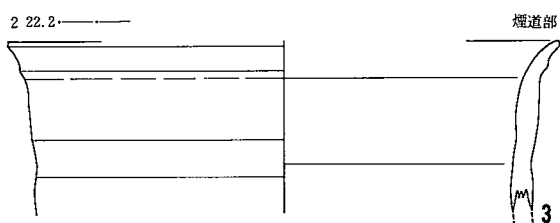
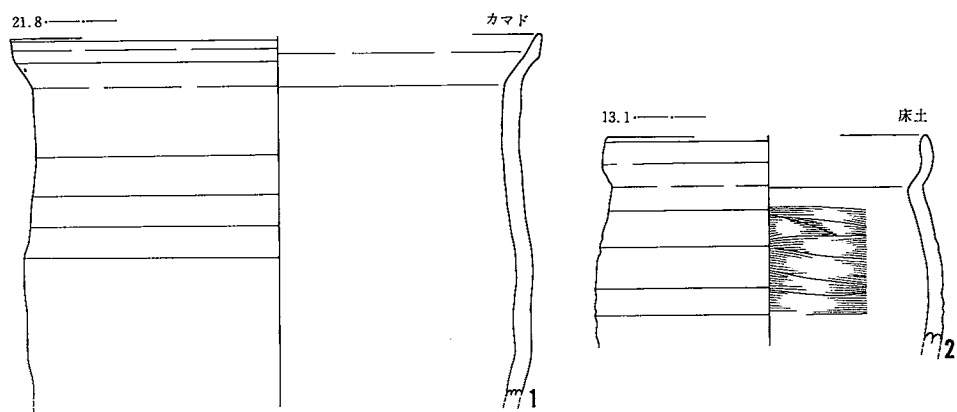
第10図 兔Ⅱ遺跡遺構配置図



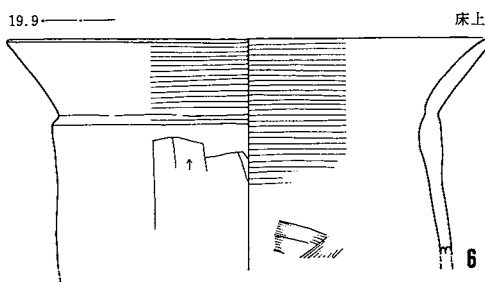
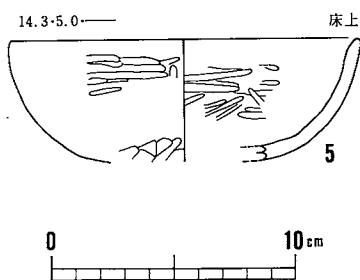
J-1 住居址



第11図 出土遺物(C-1住居址・J-1住居址)

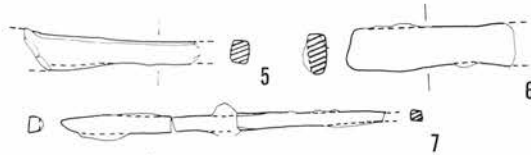
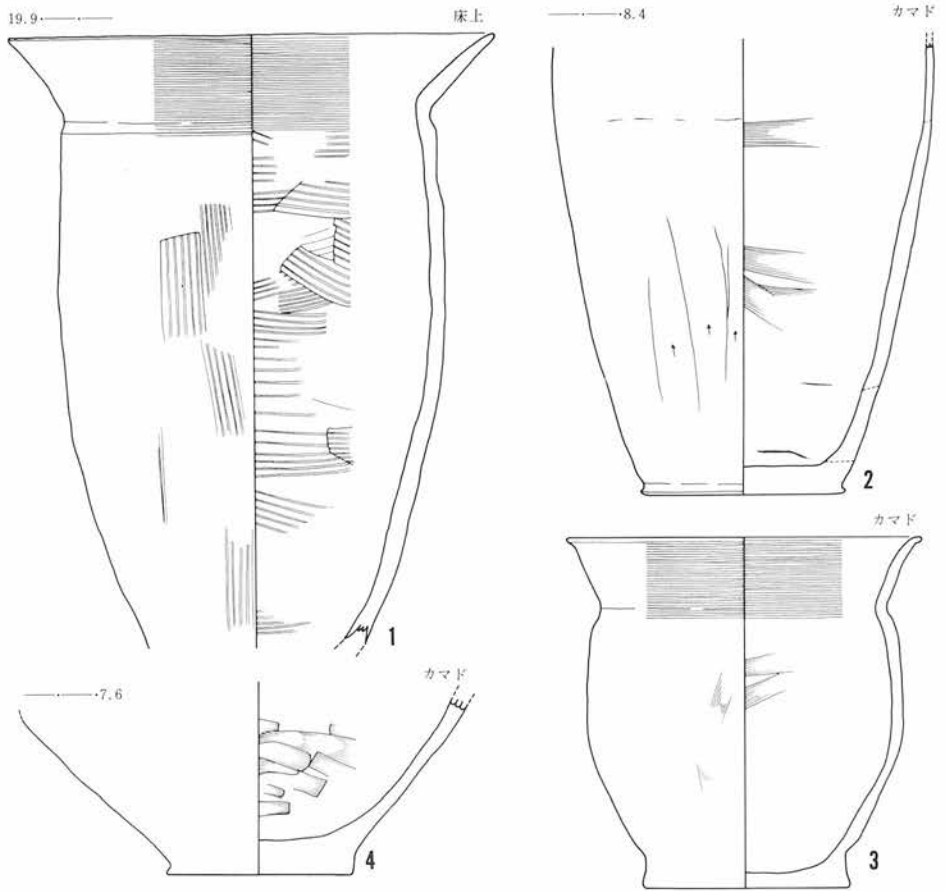


K-1 住居址

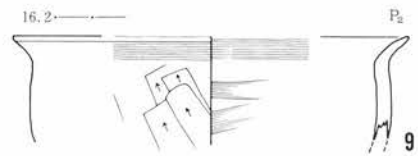
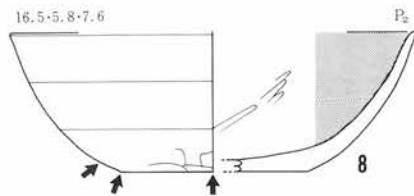


第12図 出土遺物 (J-1 住居址・K-1 住居址)

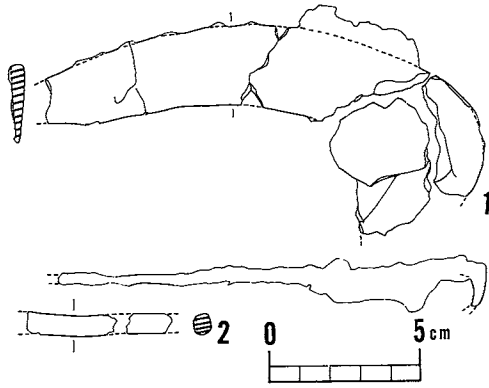




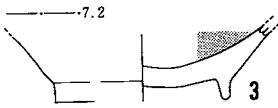
L-1 住居址



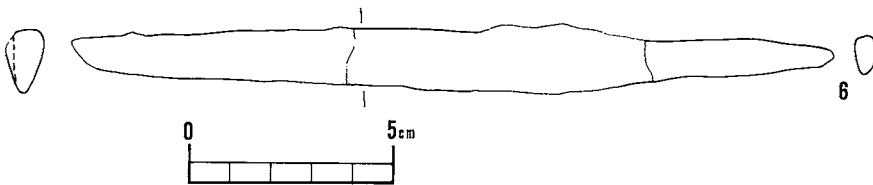
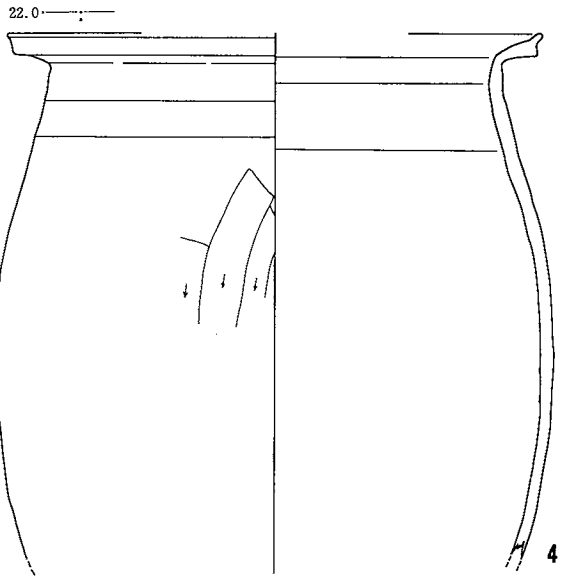
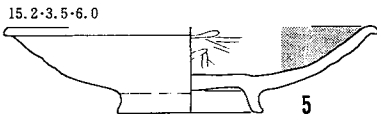
第13図 出土遺物(K-1住居址・L-1住居址)



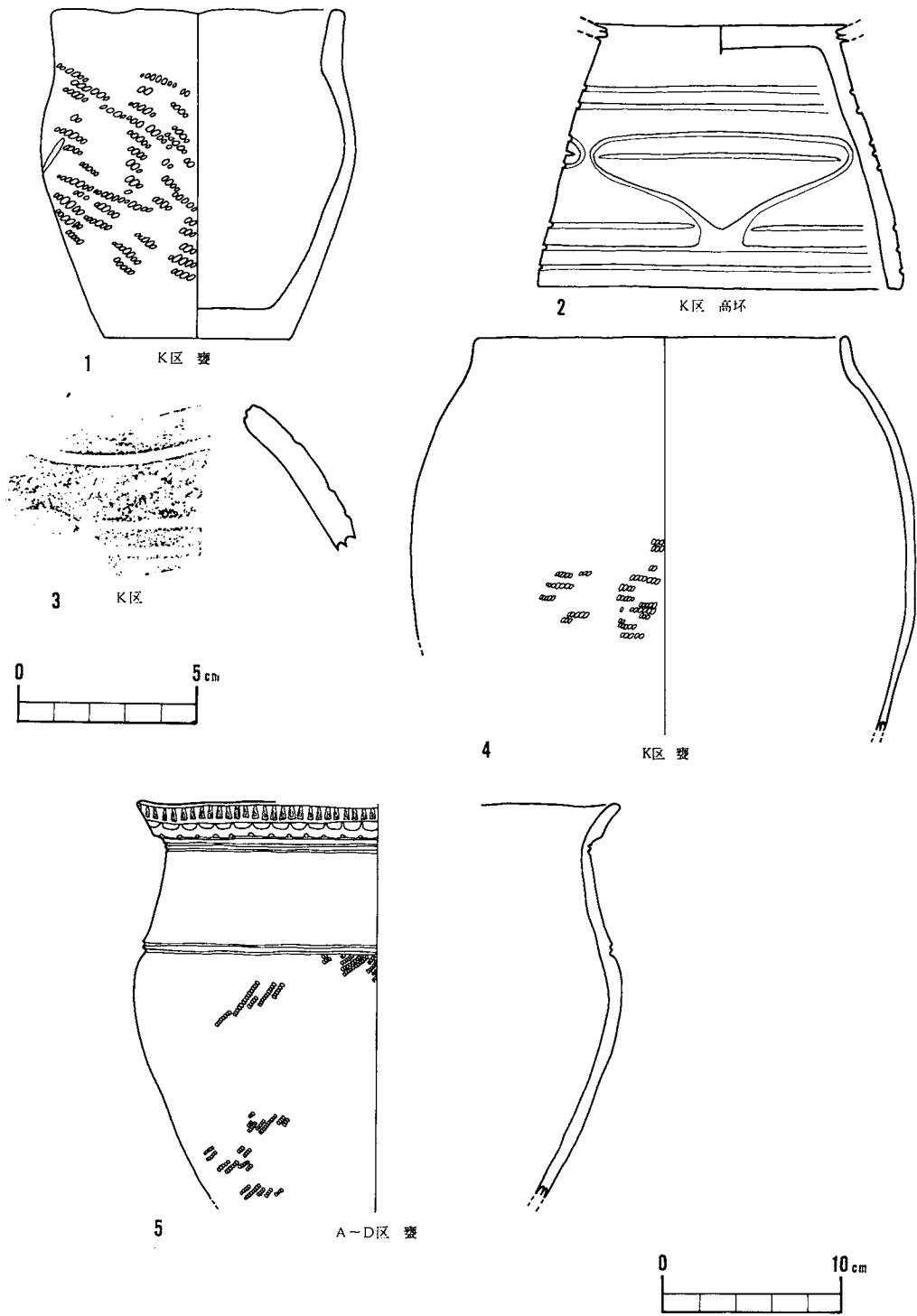
A-51ピット



A-52ピット



第14図 出土遺物(L-1住居址・A-51ピット・A-52ピット)



1 K区 甗

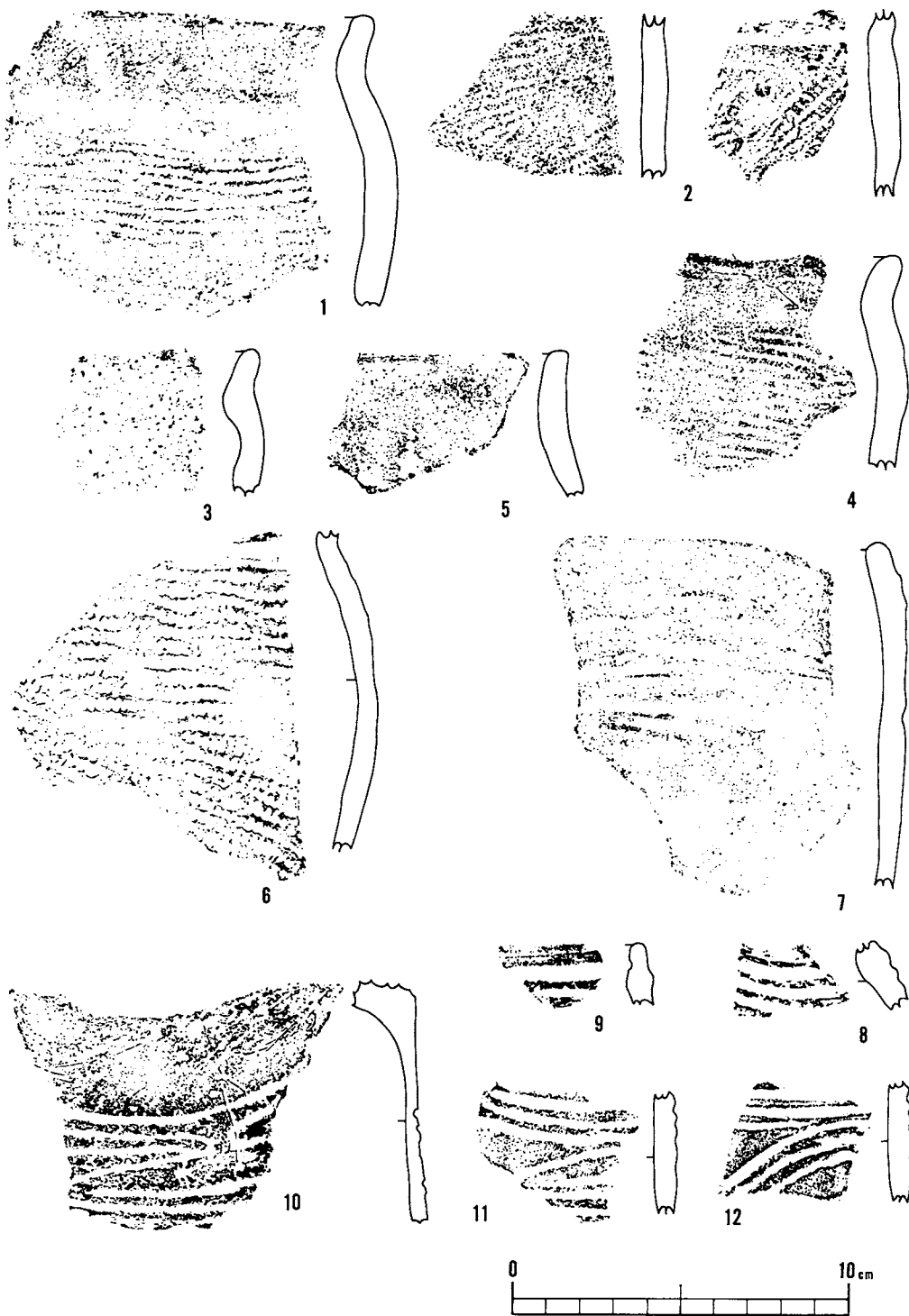
2 K区 高坏

3 K区

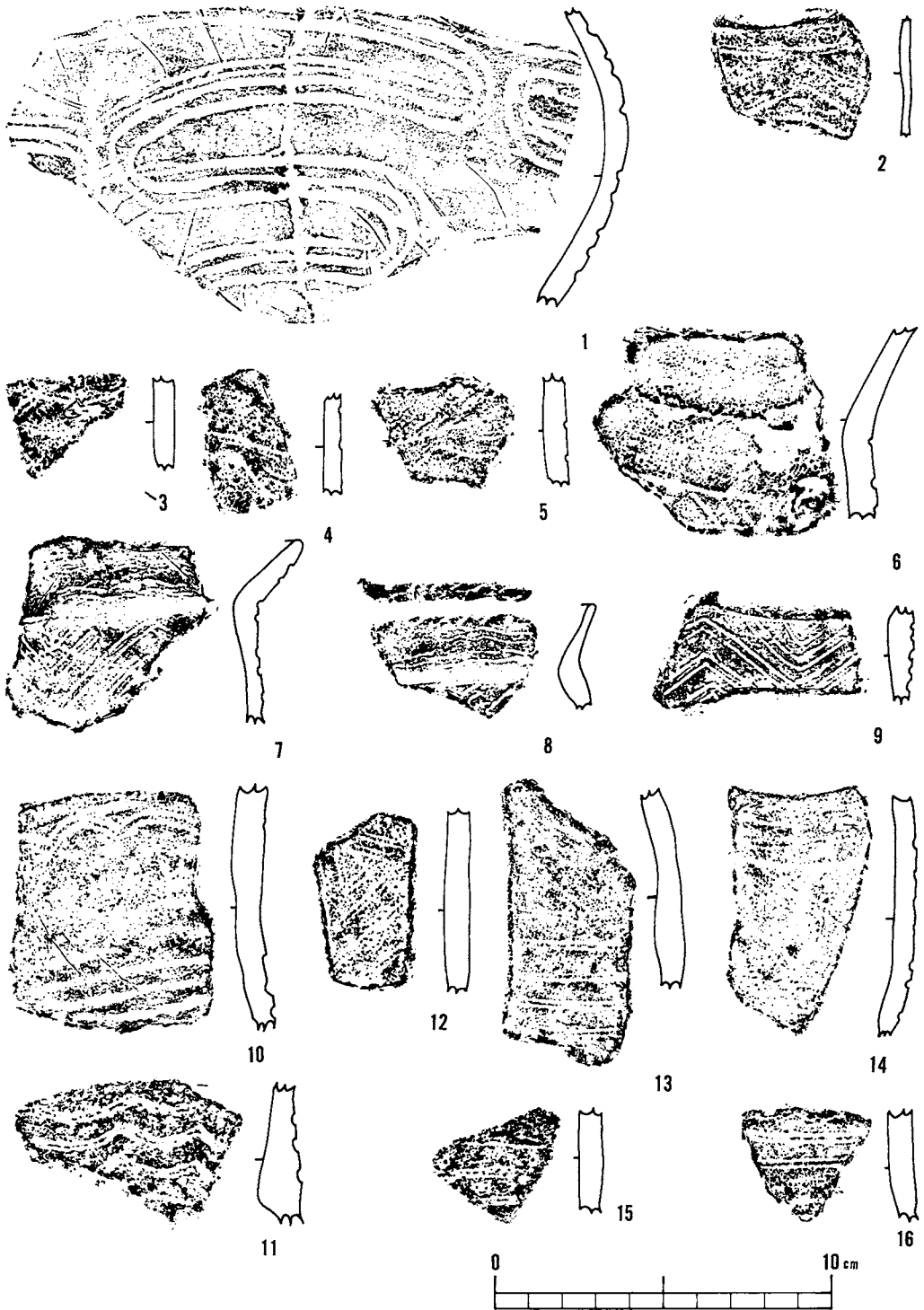
4 K区 甗

5 A~D区 甗

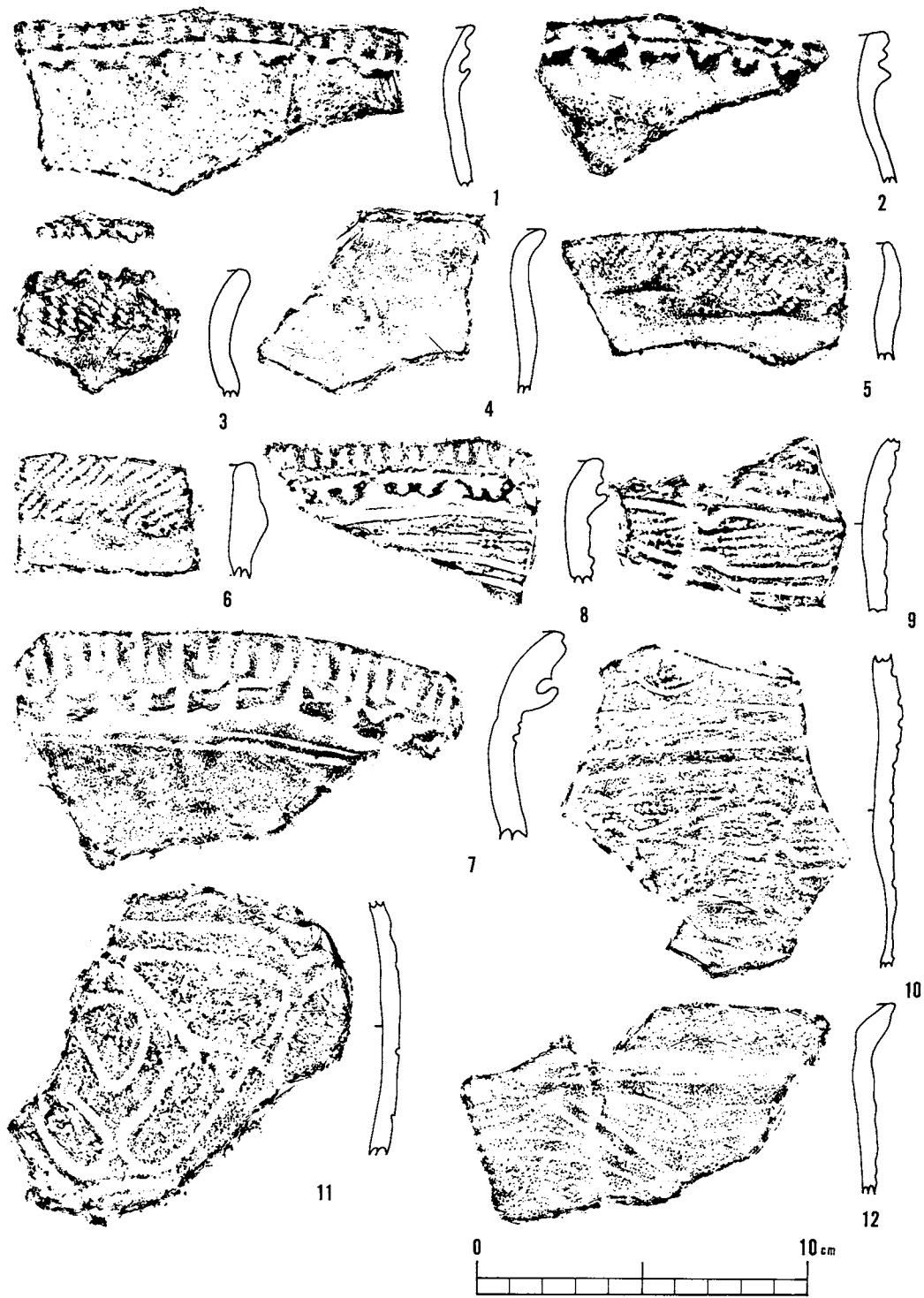
第15图 出土遺物(弥生式土器)



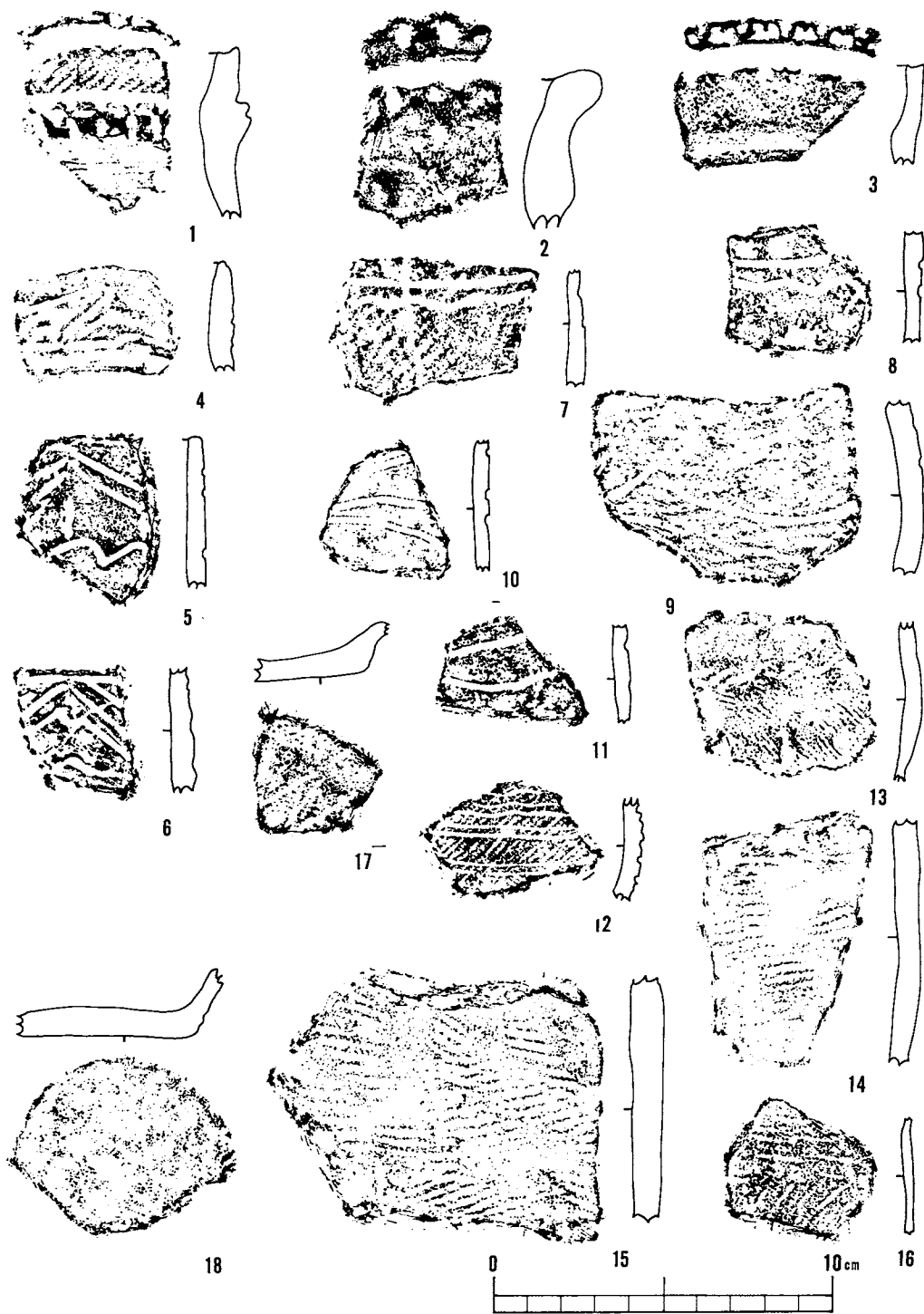
第16图 弥生式土器拓影(1)



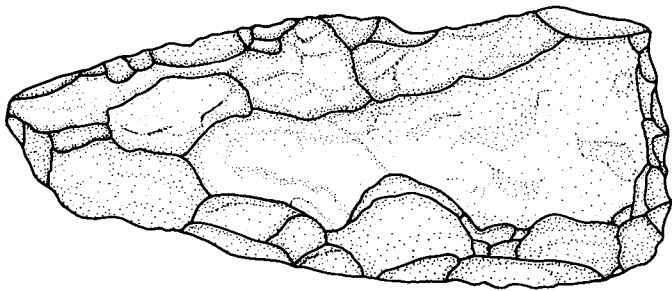
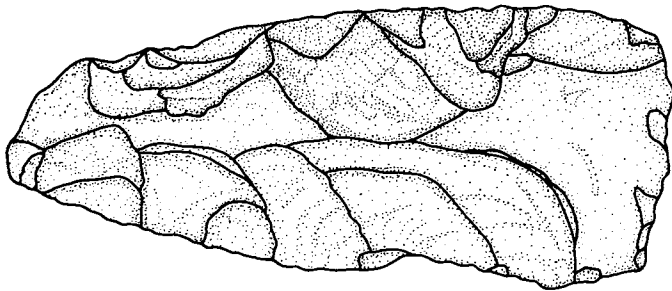
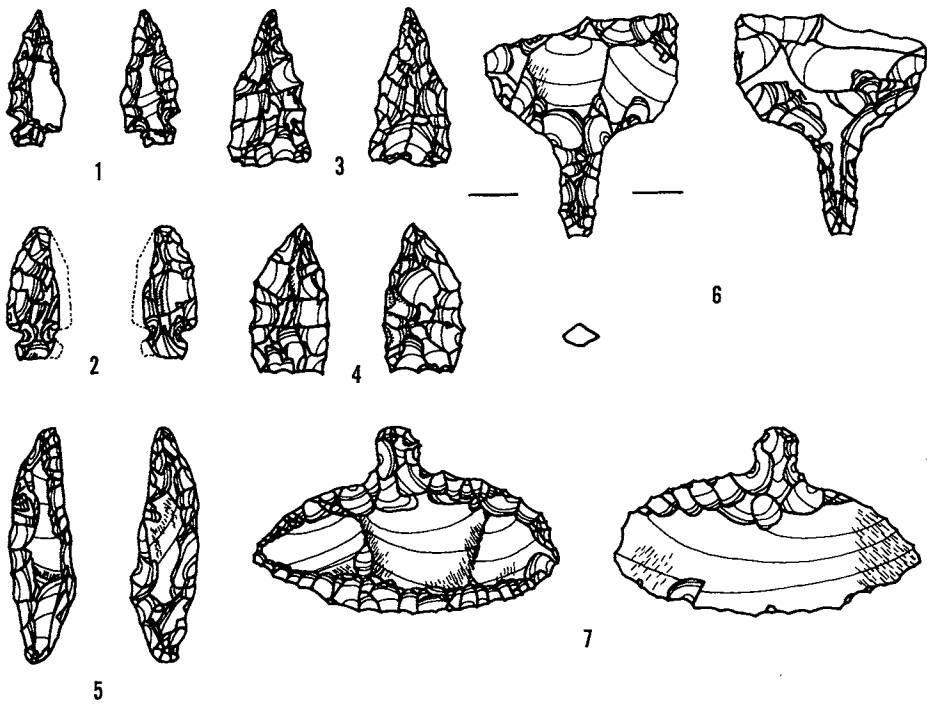
第17图 出土弥生式土器拓影(2)



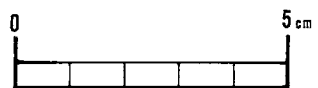
第18图 弥生式土器拓影(3)



第19圖 弥生式土器拓影(4)



8



第20図 出土遺物(石器)



## IV. 落合Ⅲ遺跡

遺跡所在地	江刺市愛宕字落合
調査期間	昭和53年9月11日～10月16日
調査対象面積	1,440m <sup>2</sup>
発掘面積	1,440m <sup>2</sup>

# 1. 検出された遺構・遺物

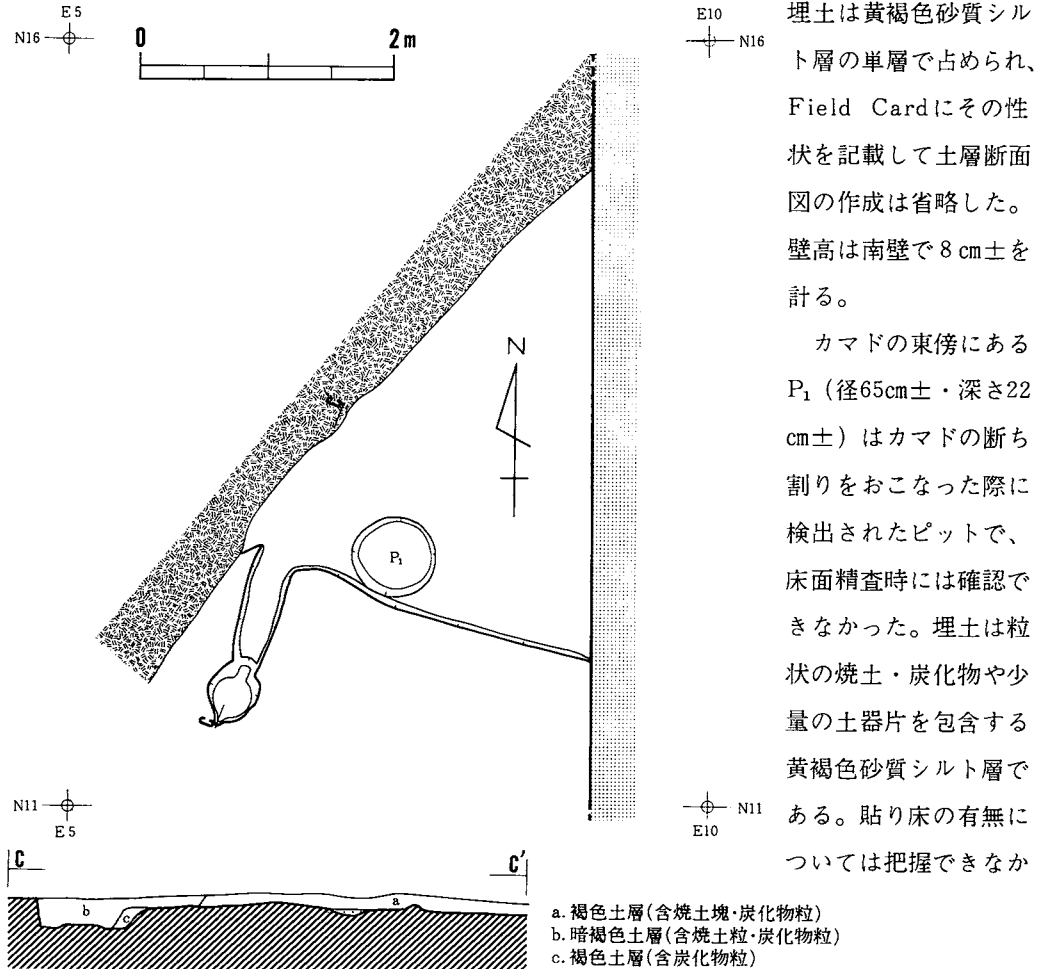
## (1) 竪穴住居址

### A 区

#### A-1 住居址

遺 構 (第1図・写真図版61b・62b)

住居址の大半が東側の調査区域外にあることやカマドを中心とした一部をのぞいて最近の削剝を受けていることから、規模・形状の詳細は不明である。主軸はほぼ北東～南西方向にある。



第1図 A-1 住居址実測図

ったが、その位置や規模などからは、本来、床面上に存在したピットと考えられる。

カマドは南壁に構築されているが、そこに占める位置は不明である。袖部の把握が困難で、いちおう想定される範囲を残して断ち割りをおこなった。しかし埋土との区別ができず、その存在は明らかにできなかった。燃焼部には径20cm±の焼成面が認められ、煙道部へ立ちあがる部分にかけては一括品を含む多数の土器が分布する。煙道部の長さは150cm±を計り、底面はほぼ水平である。煙出し部には、煙道底面から深さ10cm±のピットが掘りこまれている。

#### 出土遺物（第26・27図・写真図版86）

当住居址の遺物はカマド内及びカマド周辺部にみられた甕形土器が大半を占める。土器以外では甕の羽口が出土している。

#### 甕形土器（第26図1～4・第27図1・2）

すべてロクロ使用で酸化炎焼成の甕（甕B I類）である。第26図1～3・第27図1・2は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされた大形甕（甕B I a類）である。第26図1の口縁部は強く外反し、口唇部を上方に挽き出している。体部上半に最大径を有し、除々にすばまり、体部下端はかなり狭まる。体部外面には下方向への篋削りが施こされている。他の甕も口縁部は強く外反し、口唇部も上方あるいはやや内側に挽き出しており、体部外面は篋削り調整が施こされている。体部は脹らみを有しないものもみられるし、2のように体部上半から口縁部にかけてロクロ調整以前の叩き目痕がみられるものもある。4はロクロ成形の小形甕（甕B I b類）で底部は回転糸切りで、調整はみられない。ロクロ挽きによる凹凸が明瞭である。

甕の羽口 先端のみ残存。土製で先端部は還元状態を呈す。

## E 区

### E-1 住居址

#### 遺 構（第2図・写真図版62ac・63b）

4.0m±×4.0m±の規模をもつ。正方形を基本としたやや不整な形状を示す。主軸は北東—南西方向にある。埋土は粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する褐色粘土質シルト層で、床面直上の一部には還元土壌化がみられる。ほぼ単層であることから、Field Cardにその性状を記載して土層断面図の作成は省略した。壁で12cm±を計る。床面は全体に柔かく不明瞭である。

床面上にピットは検出されなかった。P<sub>1</sub>（径70cm±・深さ7cm±）は床面を掘り深さ10cm±さげた際に検出されたピットである。底面には、よく原形を保った短かい炭化材が一面に密着している。このピットへの貼り床の存在の有無は把握できず、住居址との関係については言及

できない。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置する。カマド幅120 cm土・燃烧部幅50cm土を計り、袖部はシルトで構築される。燃烧部の奥には2個の小形甕形土器が倒置され、支脚として使用されている。煙道部は長さ140 cm土を計り、底面は先端部へ向い急傾斜で下がる。

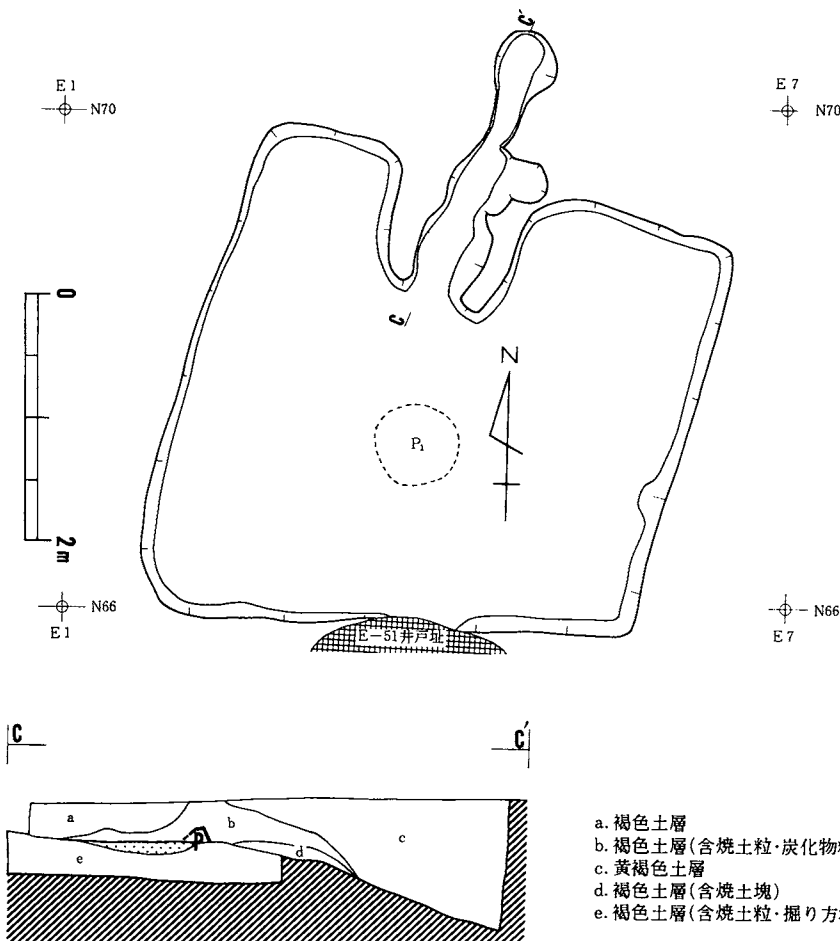
この住居址は、重複するE-51井戸址に南壁の一部を切られている。

#### 出土遺物 (第27・28図・写真図版86)

当住居址の遺物は土器が大半を占める。器種は坏、高坏、甕、壺、長頸瓶で構成される。土器以外では砥石が1点出土している。

坏形土器 (第27図3・4) 3はロクロ未使用で平底風の丸底を呈す。体部下端に稜線を有し、体部は丸味をもって外傾し、内面にも僅かに段を有す。外面は横撫で後、篋磨き調整、内

面には篋磨き後黒色処理が施されている。4もロクロ未使用で、底部は丸底を呈す。外面体部中位に稜線を有し、体部上半は直立気味の立ちあがりをもつ。体部外面は横撫で後篋磨き調整、底部は篋削り後一部篋磨きが見られる。内面に



第2図 E-1 住居址実測図

は篋磨き後黒色処理が施こされている。

高坏形土器（第28図1） 坏部は内弯気味の立ちあがり有し、外面中位に僅かな段を有す。脚部は裾が大きく開き、中位に長楕円形の透しを2個有す。坏部は内面篋磨き後黒色処理が施こされている。

甕形土器（第28図2～6） すべてロクロ未使用の甕（甕A類）である。2は口縁部は外傾し、上半で僅かに屈曲する。肩部に僅かな段を有し長胴形を呈し、体部上半に僅かな脹らみを有す。口縁部は横撫で、体部は外面の縦方向、内面は横方向の撫で調整がみられる。底部は木葉痕がみられる。器面全体が2次的な加熱を受け荒れている。3は口縁部は外反し、肩部に僅かな段を有す。口縁部、体部とも撫で調整がみられる。4と5は長胴甕の底部で底面に木葉痕を残す。体部調整には内外面とも撫でがみられる。6は小形甕である。内弯気味の口縁部を有し、体部は短い。口縁部は横撫で、体部外面は上方向への篋削り、内面は撫で調整がみられる。

壺形土器（第28図7） ロクロ未使用で酸化炎焼成の壺である。外反する口縁部を有し、肩部に僅かな段を持つ。体部は球胴形を呈す。口縁部は横撫で、器面が荒れている。明瞭でないが一部篋磨きがみられる。

長頸瓶（第28図8） 還元炎焼成で頸部から口縁部のみ残存。ロクロ調整。

砥石（第28図9） 小形の砥石で3面に使用痕が認められる。1面にのみ鋭利な条溝がみられる。石質は流紋岩である。

## J 区

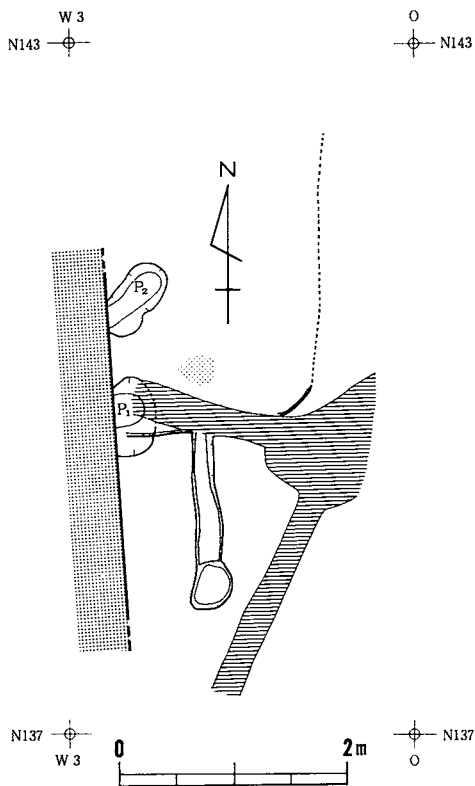
### J-1 住居址

#### 遺 構（第3図・写真図版63a）

平面での形状把握が困難で、カマド燃焼部の焼成面を残して床面をわずかに掘りすぎる調査上の不手際があった。燃焼部や煙道部の存在、周辺の“地山”面とはことなり粒状の焼土・炭化物が一定範囲内の分布に限られることから、平面での形状の推定が一部可能であった。その推定からは住居址の大半は西側の調査区域外にあると考えられる。

P<sub>1</sub>（径70cm±・深さ26cm±）・P<sub>2</sub>（径67cm+α×30cm±・深さ7cm±）などのピットは完掘していないが、住居址の範囲内に存在すると考えられる。P<sub>1</sub>は黄褐色シルト層を埋土とし、粒径1cm±の焼土塊や炭化物粒を多く包含するほか、土器の小破片の出土も多い。P<sub>2</sub>は暗褐色土層を埋土とし、粒径2cm±の焼土塊や土器の小破片を多く包含する。ピットとこの住居址の関係については不明である。

カマド燃焼部に残る焼成面は径20cm±を計る。燃焼部から煙道部へ移行する部分は小溝で切



第3図 J-1住居址実測図

(甕B I b類)であり、ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。

### J-2住居址

#### 遺構(第4図・写真図版64a)

4.6 m±×4.5 m±の規模をもち、方形の形状を示す。主軸は東西方向にある。埋土は粒状の焼土や炭化物を多く包含した黄褐色シルト層のほぼ単層で占められる。層厚が5 cm±と薄いこともあり、Field Cardへその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。床面は埋土とは明確に区別される黄褐色シルトで構築される。全体に柔かい。

床面上にはP<sub>1</sub>(径100 cm±×70 cm±・深さ22 cm±)・P<sub>2</sub>(径45 cm±×30 cm±・深さ9 cm±)が検出された。南東隅に存在するP<sub>1</sub>は暗褐色土層を埋土とし、多くの粒状の焼土・炭化物を包含する。埋土から底面にかけては一括品の坏形土器を主とする多数の土器が出土した。床面上や壁には、この住居址の埋土を切って掘りこまれた柱穴状ピット・不整形ピットや木根による攪乱が多数みられる。

カマドは東壁南寄りに位置する。燃烧部は焼土塊を包含する暗褐色土で覆われるが、袖部構築土あるいは天井部崩壊土を識別することはできなかった。燃烧部の烧成面は径30 cm±あり、

られ不明であるが、煙道底面は燃烧部と同じレベルで南へのび、煙道部の現存長は160 cm±である。煙出し部には、煙道底面より深さ14 cm±のピットが掘りこまれている。

#### 出土遺物(第29図)

当住居址の出土遺物は土器のみで、器種は坏と甕だけである。

坏形土器(第29図1) ロクロ成形で酸化炎焼成による坏で、内外面とも再調整はみられない。(坏B III類)。切り離しは回転糸切りによる。小形で体部は外傾する。

甕形土器(第29図2~4) 2は体部上半にロクロ調整の施こされている酸化炎焼成の大形甕(甕B I a類)で口縁部は短く外反し、口唇部を上方に挽き出している。

3は底部で体部下半には上方向への篋削り、下端には横方向の篋削り、内面には撫で調整がみられる。4はロクロ成形の小形甕

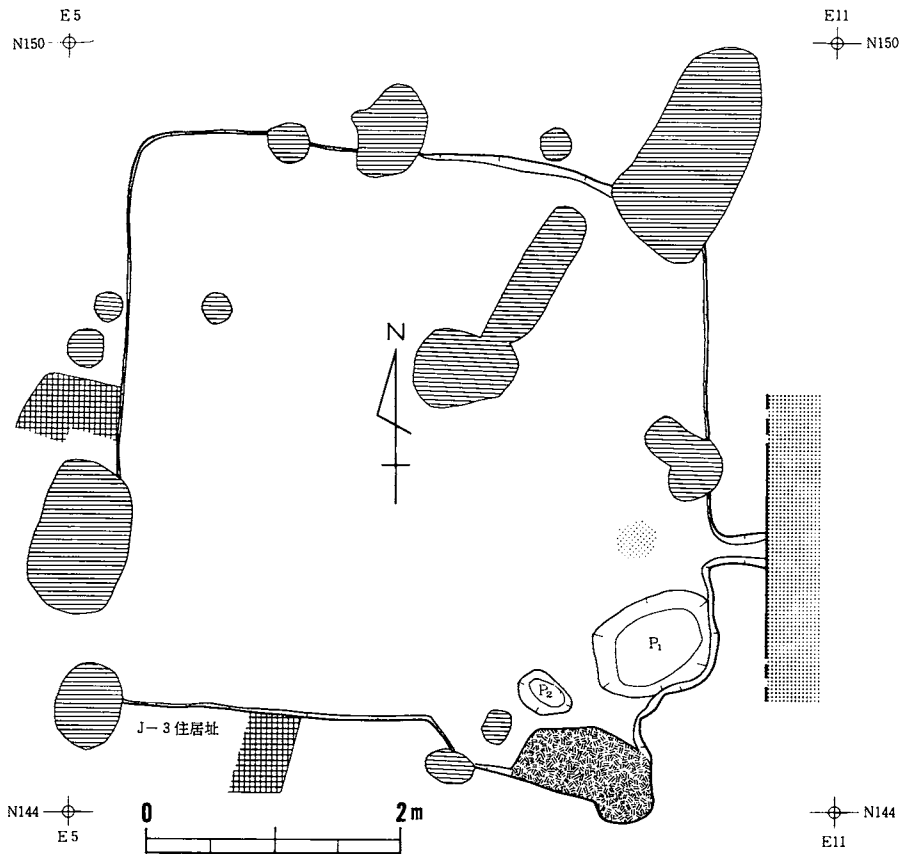
深さ4cm土まで焼成がおよんでいる。煙道部は東へ40cm土のびて調査区域外へでるため、詳細は明らかでない。

この住居址は重複するJ-3住居址の上に構築されていた。

#### 出土遺物 (第29図・写真図版86)

当住居址の遺物は土器が大半を占め、坏、甕、盤の器種がみられる。カマド周辺及びP<sub>1</sub>からの出土が多い。土器以外では砥石が1点出土している。

坏形土器 (第29図5~7) すべてロクロ成形で酸化炎焼成によるものである。5は切り離しは回転糸切りで再調整はみられず、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている(坏B I a類)。体部は丸味をもって立ちあがり、やや器高が高い。6は回転糸切り後、体部下端及び底部周辺部に篋削による再調整が施こされており、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。(坏B I b類、H<sub>2</sub>手法)。体部は下半に丸味をもち、全体には外傾する。7は洗いすぎにより外面底部の調整は不明である。内面には黒色処理が施こされている。



第4図 J-2住居址実測図

甕形土器（第29図8） ロクロ成形の小形甕（甕B I b類）である。酸化炎焼成で回転糸切りによる切離しで、体部下端に手持ち篋削りが施こされている（H<sub>6</sub>手法）。口縁部は短く外反し、体部上半に僅かな脹らみをもつ。

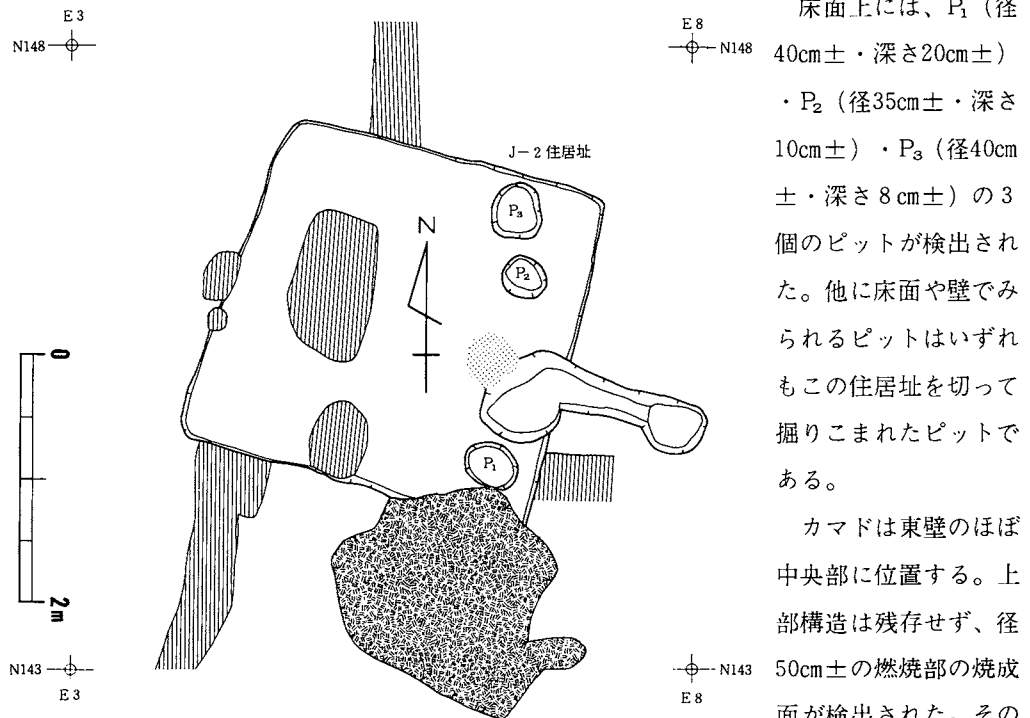
盤形土器（第29図9） ロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の土器である。口唇部を上方に挽き出しており、口縁部から頸部、体部へと緩いカーブで徐々に狭まる。上半の一部が残存しているだけで全体の器形は不明である。

砥石（第29図10） 偏平な形を呈し2面に使用痕がみられる。石質は千枚岩である。

### J-3住居址

#### 遺構（第5図・写真図版64b）

この住居址は東側約 $\frac{1}{3}$ がJ-2住居址の床面下に存在し、それに先行するものである。2.7m $\pm$ ×2.6m $\pm$ の規模をもち、方形の形状を示す。主軸はほぼ東西方向にある。上位にあるJ-2住居址の床面からこの床面までの深さは6cm $\pm$ である。床面や煙道部などはJ-2住居址の構築の際にも破壊を受けずに残っている。埋土は黄褐色シルト層であるが、J-2住居址の床面構築土の可能性も考えられる。壁高は西壁で9cm $\pm$ を計る。床面は柔らかく不明瞭で、東側約 $\frac{1}{3}$ の床面上には二次的な移動を受けたとみられる焼土が薄く分布する。



第5図 J-3住居址実測図



行する部分には、径75cm±×60cm±・深さ10cm±の不整円形ピットが掘りこまれ、その底面から煙道部は水平に東へのびる。煙道部の長さは120cm±を計る。煙出し部には、煙道底面から深さ4cm±のピットが掘りこまれている。なお煙道部・煙出し部の埋土は焼土粒を少量包含する黄褐色シルト層である。

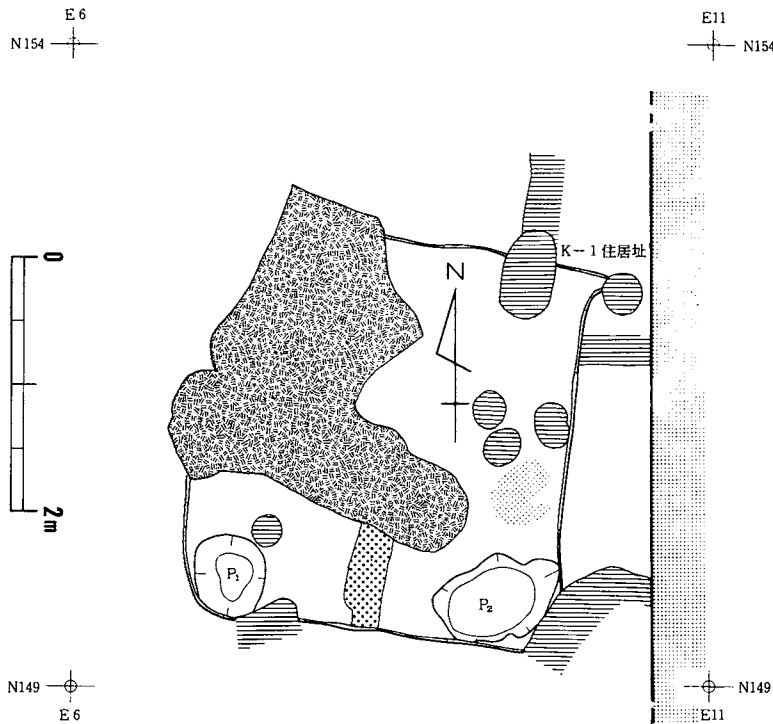
### 出土遺物

当住居址の遺物は僅少で、しかも図化出来るものはない。坏はロクロ成形の坏で、内面黒色処理されたものと、還元炎焼成のもののがみられ、甕はロクロ成形によるものと思われる小形甕の小破片が数点みられるのみである。

### J-4 住居址

#### 遺構 (第6図・写真図版65ab)

抜根の際に大きく破壊を受けて残存状態は良くないが、3.1m±×3.0m±の規模をもち、方形の形状を示す住居址である。主軸はほぼ東西方向にある。埋土は焼土粒・炭化物粒を多く包含する黄褐色シルト層で構成される。単層であり、また層厚が薄いことから土層断面図の作成は省略し、Field Cardにその性状を記載した。壁高は西壁で3cm±を計る。床面は柔かく不明瞭であるが、広い範囲に焼土粒・炭化物粒の分布が認められるほか、完形品・一括品を含



む土器多数が出土した。住居址中央部からやや北側では土錘17個が1カ所に集中して出土している。一部は複数の個体の土器片上へのり、周囲には異地性の多くの焼土や炭化物が分布する。数的にはさらに多くが存在したことも考えられるが西側が抜根の際の破壊を受けているために明らかでない。それらの土錘の出土状態は、他の遺物の出

第6図 J-4 住居址実測図

土状態ともあわせて考えると、住居の使用時あるいは廃絶時に存在した原位置を保つものではなく、二次的な移動による結果の存在と考えられる。

床面上には、P<sub>1</sub>（径60cm±・深さ12cm±）・P<sub>2</sub>（径100cm±×60cm±・深さ23cm±）の他にこの住居址を切って掘りこんでいるピットが多数存在する。P<sub>2</sub>はカマド近くの南東隅にある。焼土粒・炭化物粒を多く包含する暗褐色土層を埋土とし、赤褐色焼土層を夾在させる。出土土器も多い。

カマドは東壁中央部からわずかに南寄りに位置する。上部構造は残存せず、径30cm±の燃焼部の焼成面が確認されただけで、煙道部は削剝を受けていることも考えられるが存在の有無も含めて詳細は不明である。

この住居址は、重複するK-1住居址の上に存在した。

#### 出土遺物（第30・31図）

当住居址の遺物は土器と土錘が大半を占める。土器の器種は坏、甕、短頸壺があり、カマド周辺部及び南西コーナー付近の床上からの出土で、土錘はほぼ中央部の床上より出土している。この他に土錘の近くに足方が出土している。

坏形土器（第30図1～5） すべてロクロ成形で、焼成は酸化炎により、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。1は回転糸切りによる切り離しで再調整はみられない（坏B I a類）。体部は丸味をもって外傾する。2～4は回転糸切り後に体部下端及び底部周辺部を手持ち篋削りによる再調整が施こされている（坏B I b類、H<sub>2</sub>手法）。器形は丸味をもって立ちあがるが、4は口径に比し器高が低い。5は体部下端及び底部全面に手持ち篋削りが施こされており、切り離しは不明である（坏B I c類、H<sub>1</sub>手法）。器形は体部下端に僅かな丸味をもち外傾する。

甕形土器（第30図6～8） 6と7はロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の甕（甕B I a類）で、口縁部は強く外反し、口唇部を上下に挽き出している。体部は僅かな脹らみを有し、体部上半にはロクロ調整で、その下は上方向への篋削りがみられる。8は酸化炎焼成の甕の底部で内外面に撫で痕がみられる。

壺形土器（第30図9） 還元炎焼成の短頸壺である。口縁部は僅かに開く、直立気味の立ちあがりをもつ。頸部は緩く屈曲し、体部上半に最大径を有す。調整はロクロによる。外面に自然釉がみられる。

土錘（第31図1～17） 床面上より17個集中して出土した。いずれも不整円筒形を呈し管状の土錘であり、中央部に脹らみをもつものと、先端部に僅かな脹らみをもつものがある。

足方 土錘と共伴した。すべて自然の川原石である。石質は安山岩である。

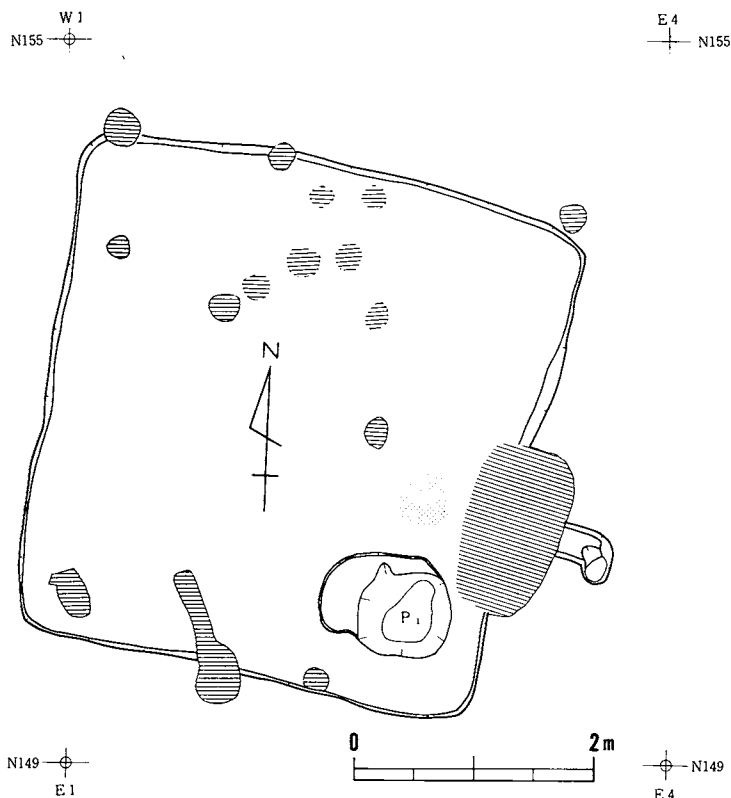
## J-5 住居址

遺構 (第7図・写真図版65c・66a)

4.3 m × 4.2 m 土の規模をもち、方形の形状を示す。主軸はほぼ東西方向にある。埋土は焼土粒・炭化物粒をわずかに包含する黄褐色土層の単層で占められるため、土層断面図の作成は省略してField Cardにその性状を記載した。壁高は北壁で16cm 土を計る。住居址のほぼ中央部を中心とした広範囲な床面上には炭化物が分布する。炭化物は繊維状のものが主で、床面に密着した状態である。一部に材状の炭化物・現地性の焼土を伴う。その状況から炭化物は二次的に移動されておらず、原位置を保つものとみられ、「焼失住居」址の可能性をもつ。

床面上には多くの柱穴状のピットが存在するが、いずれもこの住居址を切って掘りこまれたものである。P<sub>1</sub> (径80cm 土・深さ23cm 土) は床面を深さ5 cm 土掘りさげた段階で検出された。埋土は多くの焼土粒・炭化物粒を包含する明黄褐色シルト層である。一括品を含む土器が数個体分出土している。その規模やカマド傍という位置・埋土などからは、床面下に存在するピットとしてではなく、床面上に存在したものの把握できなかった可能性が強いものと考えられる。

カマドは東壁中央部からわずかに南寄りに位置する。上部構造は不明で、径45cm 土の燃焼部



第7図 J-5 住居址実測図

の焼成面が確認された。燃焼部から煙道部の大部分は長方形ピットに切られて壊わされている。煙道部の現存長は50cm 土を計るが、推定では100 cm 土の長さをもっていたものと考えられる。煙出し部には、煙道底面から深さ18cm 土のピットが掘りこまれている。

**出土遺物** (第31・32図・写真図版87)

当住居址の遺物には土器と鉄製品がある。土器は坏と甕だ

けで、南側床上より出土したものが大半を占める。

坏形土器（第31図18～22） すべてロクロ成形で焼成は酸化炎焼成のものと還元炎焼成のものがある。18と19は酸化炎焼成で、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。いずれも体部下端及び底部全面に手持ち篋削が施こされており、切り離しは不明である（坏B I c類・H<sub>1</sub>手法）。18は大形の坏で、内弯気味に立ちあがる。19は体部下端に丸味をもち外傾する。20～22はいずれも還元炎焼成で切り離しは回転糸切りによる。体部形態は僅かに丸味をもつものもあるが外傾するものが多い。

甕形土器（第31図23・24） 23は体部上半にロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の大形甕（甕B I a類）である。外反する口縁部を有し、口唇部は上下に挽き出している。24はロクロ成形、酸化炎焼成の小形甕（甕B I b類）で、切り離しは回転糸切りによる。ロクロ挽きによる凹凸が目立つ。

壺形土器（第31図25） 還元炎焼成の大形壺である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は僅かに外反する。体部上半から頸部にかけて平行叩き目がみられる。

鉄製品（第32図1） 穂摘み具様鉄製品と思われる。長軸の一辺に刃がつけられている。一端を欠くが、現存長8.6cm、幅1.8cm±を測る。一端に釘及び釘透しの穴を有す。

## K 区

### K-1 住居址

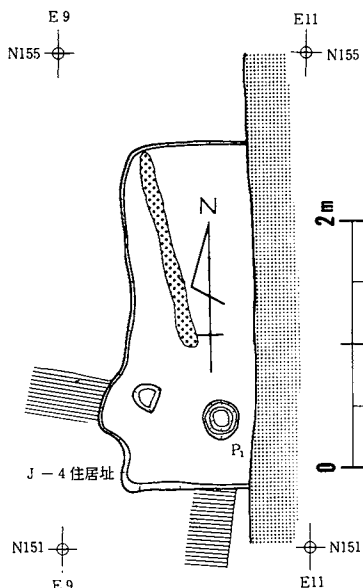
#### 遺 構（第8図・写真図版66b）

住居址の大半が西側の調査区域外にあることから、東壁が2.7m±を計るだけで詳細な規模・形状は不明である。埋土は少量の焼土・炭化物を含む明黄褐色粘土質シルトの単層であり、Field Cardにその性状を記載し、土層断面図の作成は省略した。壁高は北壁で10cm±を計る。床面は柔らかくて不明瞭であるが、焼土・炭化物の広がりをもつ。J-4住居址・K-101溝と重複しており、いずれの遺構よりも古い。

P<sub>1</sub>（径20cm±・深さ10cm±）は南壁寄りに在るが、住居址との関係については不明である。

#### 出土遺物（第32図）

当住居址の遺物は極めて僅少で、土器の中に図化出来る



第8図 K-1住居址実測図

ものはなく、ロクロ成形で酸化炎焼成の甕の体部の破片が数点みられるだけである。この他に砥石が1点みられる。

砥石（第32図2） 3面共使用痕がみられるが、幅広の面が長軸方向によく使用されており、一面に擦痕状のものや鋭角の条溝が数条みられる。

## K-2 住居址

### 遺構（第9図・写真図版67a）

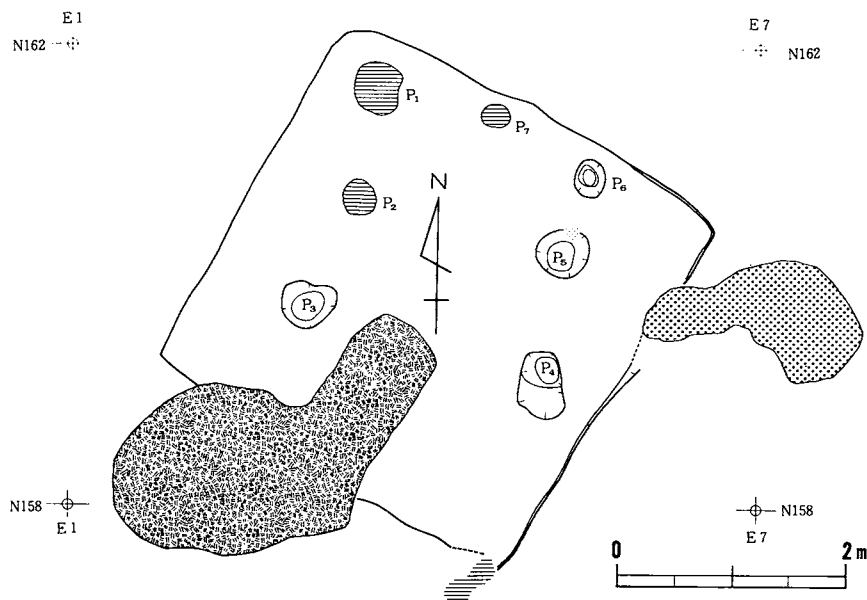
住居址の大半が削剝を受け、しかも抜根による攪乱を受け残存状態は悪い。3.6 m ± × 3.7 m ± の規模をもつ方形の住居址である。残存する床上には焼土・炭化物がみられる。

ピットは7個検出された。P<sub>1</sub>（径46cm ± × 40cm ±、深さ41cm ±）、P<sub>2</sub>（径30cm ±、深さ25cm ±）、P<sub>3</sub>（径46cm ± × 38cm ±、深さ10cm ±）、P<sub>4</sub>（径60cm ± × 40cm ±、深さ20cm ±）、P<sub>5</sub>（径44cm ±、深さ13cm ±）、P<sub>6</sub>（径30cm ±、深さ40cm ±）、P<sub>7</sub>（径22cm ±、深さ23cm ±）である。P<sub>4</sub>は床面出土と同一個体の還元炎焼成の大形の壺を出土しているし、P<sub>3</sub>とP<sub>5</sub>は床面直上で検出されたピットであることから当住居址に伴うと考えられるが、他のピットとの関係は不明である。

カマドは東側に焼土がみられることから一応東側ではないかと考えられるが、袖、煙道、煙出し等の遺構はみられず、はっきりしない。

### 出土遺物（第32図・写真図版87）

当住居址の遺物は土器のみで、坏と大形の壺が出土している。大形の壺はP<sub>4</sub>より出土している。



第9図 K-2 住居址実測図

環形土器（第32図3～5） いずれもロクロ成形で酸化炎焼成の坏である。3と4は器面が荒れていることと、洗いすぎのため調整の有無は不明であるが、黒色処理はみられない。5は底部に糸切り痕を有し、内外面とも再調整、黒色処理はみられない（坏BⅢ類）。小形の坏で体部は直線的に外傾し、器高が低い。

壺形土器（第32図6） 口径が43.5cmもある大形の還元炎焼成の壺である。口縁部のみ図化した。平行叩き目痕のみられる体部の破片も出土している。

### K-3 住居址

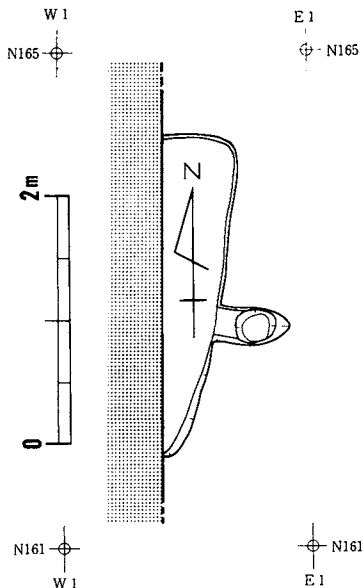
遺 構（第10図・写真図版67b）

住居址の大半は西側の調査区域外にあり、規模・形状の詳細は不明。主軸は東西方向にある。埋土は焼土・炭化物を含む明黄褐色シルトの単層であり、Field Cardにその性状を記載するにとどめ図化は省略した。壁高は東壁で20cm±を計る。床面は柔かく汚れの少ないシルト面である。

カマドは東壁に在る。袖部は確認出来なかった。煙道部は東に50cm±延びており、煙出し部は12cm±ほど掘り込まれたピットである。

### 出土遺物

当住居址の遺物は極めて僅少であり、しかも図化出来るものはない。坏はロクロ成形によるもので酸化炎焼成で内面黒色処理されたもの（坏BⅠ類）と還元炎焼成（坏BⅡ類）のものがある。甕は酸化炎焼成によるものである。



第10図 K-3 住居址実測図

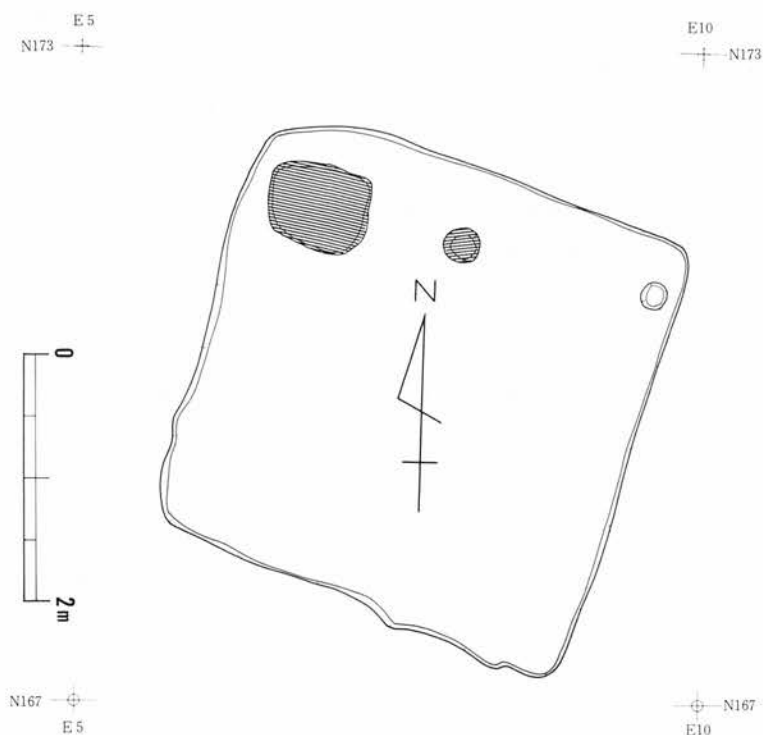
### L 区

#### L-1 住居址

遺 構（第11図・写真図版68a）

3.6 m ± × 3.6 m ± の規模をもつ方形の住居址である。住居址の大半は削剝を受けている。埋土は焼土・炭化物を僅かに含む褐色シルトの単層であるため、Field Cardにその性状を記載し図化は省略した。壁高は北壁で8 cm ± を計る。床面は粘土質シルト面に構成されている。

床面を掘り下げた段階で南側の焼土の西に不整円形のピットを検出したが、調査時の不手際によりField Cardにその性状について記載したのみで図化は行なわなかった。埋土は黄褐色シルトで甕の破片及び焼成の受けた垂角礫を



第11図 L-1住居址実測図

含む。

カマドは南壁東寄りに位置していたと思われるが、焼土と二次的な加熱を受けた甕がみられただけで上部構造は削剝を受けており不明。煙出し、煙道も検出されなかった。このカマドの下には径100cm土の規模の掘り方が検出されたが、調査時の不手際によりField Cardに性状を記入したのみで図化は行なわなかった。埋土は焼土・炭化物を含むシルト

である。

#### 出土遺物 (第32・33図)

当住居址の遺物は土器と鉄器があり、土器の器種は坏と甕だけである。

坏形土器 (第32図7) ロクロ成形で還元炎焼成の坏 (坏BⅡ類) で、切り離しは回転糸切りによる。ロクロ挽きによる凹凸が目立つが、体部は直線的に外傾する。

甕形土器 (第32図8・9) 9は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の大形甕 (甕BⅠa類) で、中位で僅かな屈曲を有し短く外傾する口縁部をもち、体部中位に僅かな脹らみを有す。8はロクロ成形の小形甕 (甕BⅠb類) で、切り離しは回転糸切りによる。

鉄製品 (第33図1・2) 1は有茎平根三角形の鉄鏃である。腸袂部は欠損しており不明。全長17.6cmで、現存鋒長2.7cm、鋒幅2.4cmであり、箆被部長8.6cm、茎長6.2cmを測る。箆被・茎とも断面は方形を呈する。2は刀子の破片と思われる。現存長2.8cmを測る。

#### L-2住居址

##### 遺構 (第12・13図・写真図版68b・69ab)

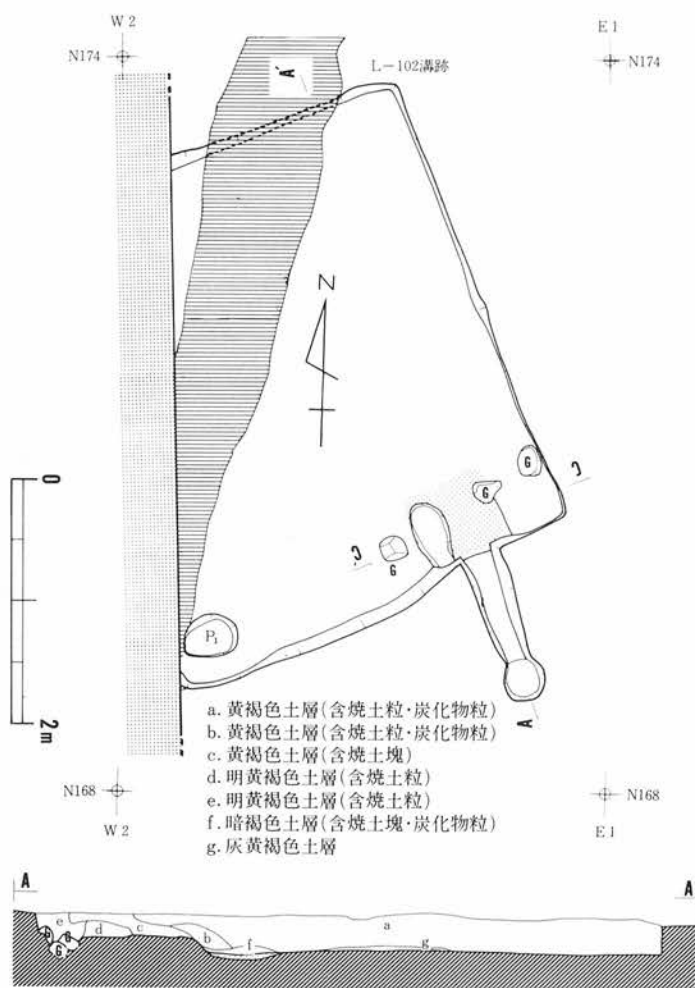
住居址の西側半分は調査区域外にあり、規模・形状とも詳細は不明。東壁で3.9m土を計る。

埋土は主に2層で構成される。上層は焼土・炭化物を含むやや粘土化した黄褐色シルトで、下層は灰白色シルトを斑状に含む薄い灰黄褐色土である。壁高は東壁で26cm±を計る。床面は明黄褐色砂質シルトで、硬く締っている。

ピットは、南西隅にP<sub>1</sub>（径45cm±33cm±・深さ10cm）が検出されたのみである。

カマドは南壁の東寄りに位置する。上部構造の大半は崩壊しているが、シルトで構築された袖部がみられ、左先端部には補強に使用されたとみられる礫が立って検出された。燃烧部には50cm±×30cm±の強く焼成を受けた焼土面がみられ、煙出部は水平に南に延びており130cm±を計る。煙出し部は煙道の床から5cm±掘り込まれており、中から3個の焼成を受けた礫が出土した。

当住居址はL-102溝と重複関係にあるが、溝より古い住居址である。



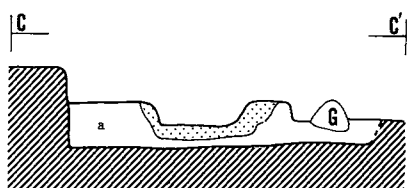
第12図 L-2住居址実測図(1)

### 出土遺物（第33・34図・写真図版87）

当住居址の遺物は土器が大半を占め、カマド周辺部より出土したものである。器種は坏と甕だけである。土器以外では鉄製品が1点出土している。

坏形土器（第33図3～6）すべてロクロ成形で酸化炎焼成による。3と4は回転系切り後体部下端及び底部周辺部を手持ち篋削り調整し内面には篋磨き後黒色処理がみられる（坏BIb類・H<sub>2</sub>手法）。3は内弯気味の立ちあがりを持ち





a. 黄褐色土層(掘り方埋土)

### 第13図 L-2 住居址実測図(2)

4はやや直立気味に外傾する。5と6は体部下端及び底部全面に手持ち篋削り調整がみられ切り離しは不明である。内面には篋磨き後黒色処理がみられる(坏B I c類・H<sub>1</sub>手法)。

甕形土器(第33図7~9・第34図1) 7はロク

口不使用の甕(甕A類)で、口縁部は外傾するが、上位で僅かに屈曲する。体部には脹らみを有しない。調整は撫でによる。8と9は体部上半から口縁部にかけてロク口調整に施こされた酸化炎焼成の大形甕(甕B I a類)である。口縁部は緩く外反し、口唇部を上下に挽き出しており、体部中央部に脹らみを有す。体部外面には上方向への篋削り、南面には縦方向の刷毛目調整がみられる。第34図1は酸化炎焼成の甕で上記8あるいは9の下半部と考えられる。外面には上方向への篋削り内面は撫で調整。

鉄製品(第34図2)「コ」の字形に屈曲する鉄製品であり、断面形は方形を呈する。性格は不明。

### L-3 住居址

#### 遺構(第14図・写真図版69cd・70)

4.0 m ± × 3.4 m ± の規模をもつ長方形の住居址である。東軸は東西方向にある。埋土は焼土・炭化物を含む褐色シルトの単層であり、Field Cardにその性状を記載して断面図は省略した。床面はシルト面で、カマド燃焼部より僅かに高い。

南壁壁は全体に掘り方状の落ち込みを有し、特に東西のコーナー付近では深くなっている。埋土は少量の焼土と炭化物を含むシルトで僅かに土器片も含む。貼床は明瞭でないが一応掘り方として扱い図化しなかった。

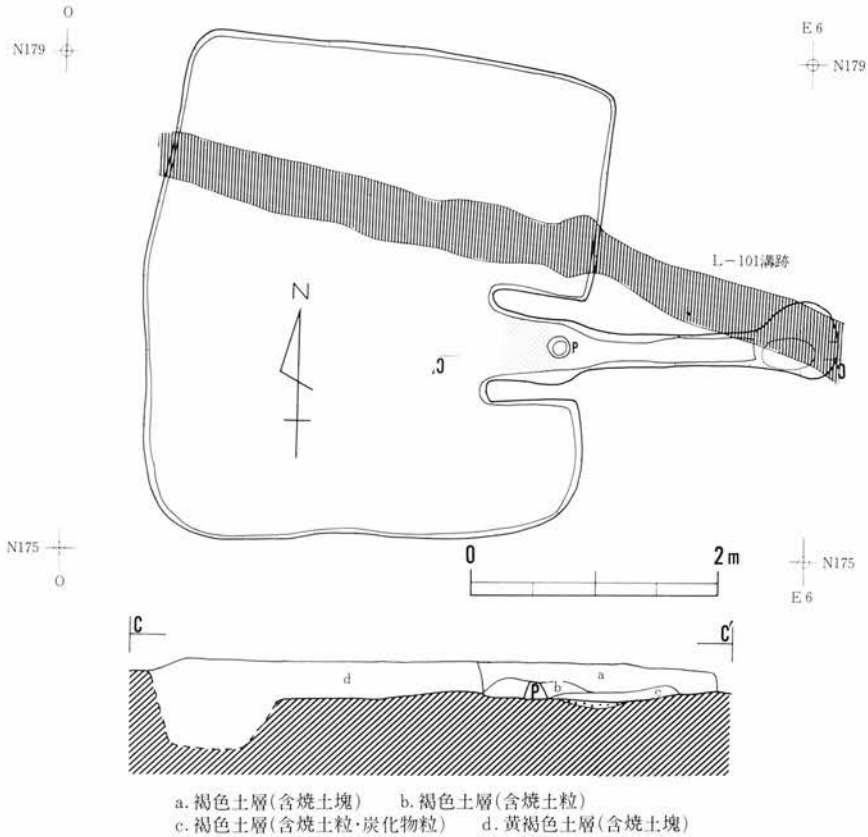
カマドは東壁の南寄りに位置する。袖部はシルトを主体とするが、右袖には甕形土器が倒置されて埋めこまれ、芯に使用されている。この他袖には部分的にグラニューールもみられる。燃焼部中央には小形甕が倒置されており、かなり2次的加熱を受けていることから支脚として使われていたものと思われる。煙道部は東に210 cm ± 延びており漸次下っている。煙出し部は煙道部の床面より30 cm ± 掘りこまれている。煙道部の先端と煙出し部に多くの甕形土器を出土した。

当住居址はL-101溝と重複関係にあるが溝よりも古い。

#### 出土遺物(第34・35図・写真図版87・88)

当住居址の遺物は土器のみで、器種は坏と甕があり、カマド内と煙出部より出土したものが大半を占める。

坏形土器(第34図3・4) 3はロク口成形、酸化炎焼成の坏である。底部は回転糸切り無調整で、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている(坏B I a類)。口径に比し器高が高く



第14図 L-3 住居址実測図

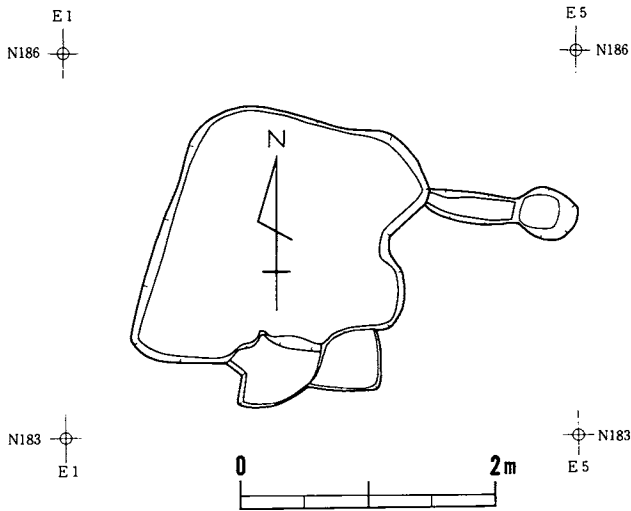
体部は下半に僅かな丸味をもって立ちあがる。4はロクロ成形、還元炎焼成の坏（坏BⅡ類）で切り離しは回転糸切りによる。体部は直線的に外傾する。

甕形土器（第34図5～7・第35図1）7はロクロ不使用の小形甕（甕AⅡ類）である。支脚に使用されていたものである。口縁部から頸部で僅かに屈曲するが、下方に向い徐々に狭まる。体部外面に部分的に巻き上げ痕を残すが、調整は明瞭でない。内面には刷毛目調整がみられる。5と6は体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の大形甕（甕AⅠa類）である。1は完形品で体部上半に脹らみを有し、底部は非常に細くなる。体部外面には下方方向への篋削りがみられる。

## M 区

### M-1 住居址

遺 構（第15図・写真図版71a）



第15図 M-1住居址実測図

当住居址の大半は床面まで削剝を受けており、詳細は不明である。主軸は東西方向にある。埋土は焼土・炭化物を多く含む暗褐色シルトであるが、部分的にしか残存せず図化を省略し、Field Cardにその性状を記載するにとどめた。床面は柔かく不明瞭である。

カマドは東壁の北寄りに位置する。上部構造の大半を欠き、僅かに燃焼部に焼土がみられる

だけである。煙道部は東に118 cm±延びており、床は東に漸次傾斜する。煙出し部は煙道の床より5 cm±掘り込まれており、中から壺形土器の出土をみた。

#### 出土遺物 (第35・36図)

当住居址の遺物は土器が大半を占め、坏と壺がみられる。カマド内及び煙出し部より出土したものである。その他に鉄製品が1点出土している。

坏形土器 (第35図8) ロクロ成形で酸化炎焼成による。体部下端と底部全面に手持ち篋削りが施こされており、切り離しは不明、内面には篋磨き後黒色処理が施こされている (坏B I c類H<sub>1</sub>手法)。器高がやや高く、体部は丸味をもって外傾する。この他図化出来ないが、還元炎焼成の坏もみられる。

壺形土器 (第36図1・2) 1はロクロ不使用の酸化炎焼成の壺である。口縁部は下半が直立し、上半は外傾する。体部は球胴形を呈す。口縁部は横撫で、体部外面は明瞭でないが刷毛目と一部に篋磨きがみられる。内面は撫で調整。2は還元炎焼成でロクロ調整がみられる。口縁部は外傾し、口唇部を上下に挽き出している。頸部は強く屈曲し、体部は大きく脹らむ。体部には平行叩きがみられる。

鉄製品 (第35図9) 現存10.4cmの細長い棒状の鉄製品で、断面は方形を呈す。鏝の茎とも考えられるがはっきりしない。

#### M-2住居址

##### 遺構 (第16図・写真図版71b・72ab)

3.1 cm±×2.8 cm±の規模をもつ小形の住居址である。東壁及び西壁寄りに抜根等による攪乱を受けている。主軸は南北方向にある。埋土は焼土・炭化物を僅かに含む黄褐色シルトの単

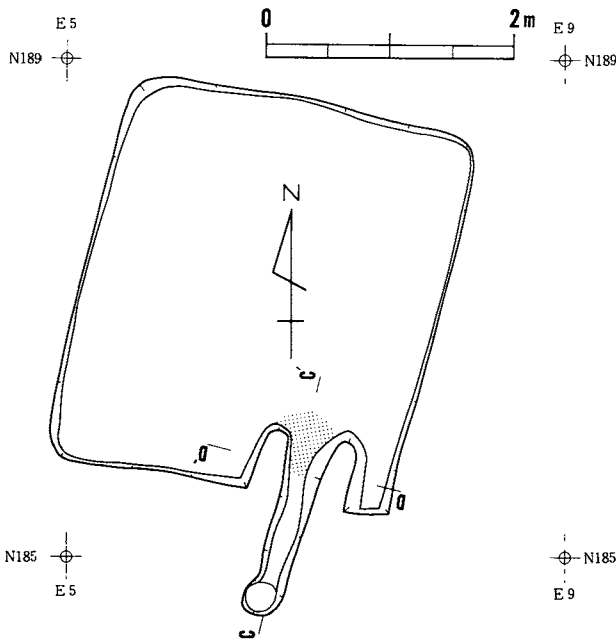
層で、Field Cardにその性状を記載し断面図は省略した。壁高は南壁で15cm土を計る。床面は不明瞭である。

カマドは南壁の東寄りに位置する。袖部はシルトで構築され、燃烧部は強く焼成を受けている。カマド幅90cm土、燃烧部幅34cm土を計る。煙道部は南へ116cm土延びており、床は平坦である。煙出し部は煙道床より15cm土掘りこまれていた。

**出土遺物 (第36・37図・写真図版88)**

当住居址の遺物は、土器が大半を占め、カマド東より出土した坏と甕、壺がある。この他に鉄製品が1点出土している。

坏形土器 (第36図3・4) 3はロクロ成形、酸化炎焼成の坏である。切り離しは回転糸切りで無調整、内面には丁寧な篋磨き後黒色処理が施こされている (坏B I a類)。体部は丸味



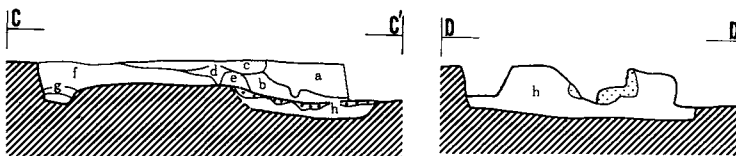
をもって外傾する。4は体部下端及び底部全面手面ち篋削りが施こされており、内面には篋磨き後黒色処理されている (坏B I c類、H<sub>1</sub>手法)。体部は丸味をもって外傾する。

甕形土器 (第37図5) 体部上半から口縁部にかけてロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の甕 (甕B I a類) で、口縁部は短かく外反し、口唇部を上方に挽き出している。体部にはほとんど脹らみをもたない。体部外面には上方向の篋削りがみられる。

壺形土器 (第37図1) 還元炎焼成の短頸壺である。口縁部は直立気

味に外傾し、頸部は「く」の字状を呈する。ロクロ調整。

鉄製品 (第37図2～4) 4は厚さ0.3cmの薄い扁平な鉄製品で、両端を欠損し



- a. 黄褐色土層
- b. 褐色土層 (含焼土塊・炭化物粒)
- c. 褐色土層 (含焼土粒)
- d. 黄褐色土層
- e. 黄褐色土層
- f. 暗褐色土層 (含焼土粒)
- g. 褐色土層
- h. 明黄褐色土層 (袖構築土・掘り方埋土)

第16図 M-2 住居址実測図

ており、現存長 5.4 cm、幅 2.2 cm である。縦方向に緩く曲っている。性格は不明。2 は刀子であり、刃部、莖部両端を欠く。現存長 8.1 cm である。3 は両端を欠く現存長 3.9 cm の鉄製品で幅 1.0 cm を測る。性格は不明。

### M-3 住居址

#### 遺構 (第17図・写真図版72c)

住居址の床直上まで削剝を受けており、しかも北側に広い範囲で木根による攪乱がみられ、残存状態は悪い。3.2 m 土 × 2.7 m 土の規模をもつ方形の住居址である。埋土は炭化物を多く含む黄褐色シルトの単層であり、性状を Field Card に記載するにとどめ図化を省略した。床面は柔かく不明瞭である。

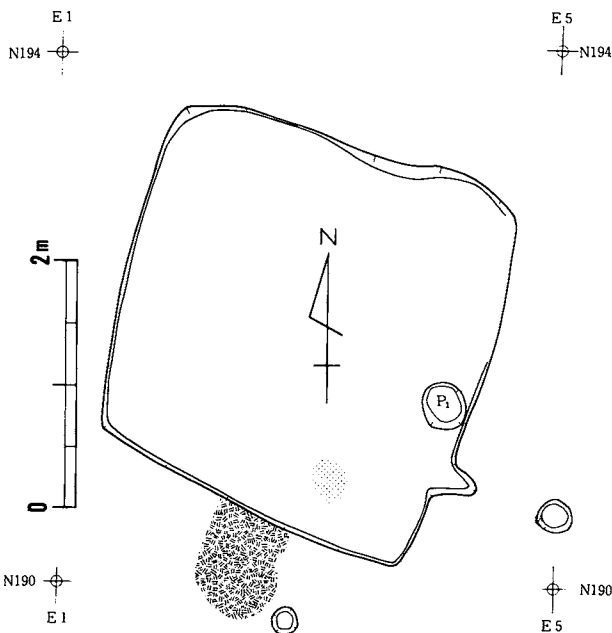
ピットは東壁寄りで 1 個検出されたのみである。P<sub>1</sub> (径 40 cm 土 × 36 cm 土、深さ 6 cm 土) の埋土は焼土を多量に含むシルトである。

カマドは大半を削剝を受けて明瞭でない。北東部に径 38 cm 土の焼土の面があることから、この部分にカマドが存在していたものと考えられる。煙道部、煙出し部は検出されなかった。

#### 出土遺物 (第37図・写真図版88)

当住居址の遺物は土器と砥石で、土器が大半を占める。器形は坏、高台坏、甕があり、南東部より集中して出土した。

坏形土器 (第37図 5・6) いずれもロクロ成形、酸化炎焼成で、内面に篋磨き後黒色処理



が施こされている。切り離しは回転糸切りで再調整はみられない (坏 B I a 類)。体部は僅かに丸味をもって外傾するものと、直線的に外傾するものがある。

高台は坏形土器 (第37図 7) 坏部はロクロ成形で酸化炎焼成、ロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残す。内面には調整はみられない (高台坏 B III 類)。高台部は僅かに裾が開く。

甕形土器 (第37図 8) 酸化炎焼成の甕の底部で器壁が薄い。

第17図 M-3 住居址実測図

## (2) 井戸址

### C-54井戸址 (第19ab図・写真図版75b)

開口部径 210 cm 土・底部径 65 cm 土の規模をもち、深さ 370 cm 土を計る。平面での形状は円形を示す。壁上半にくびれ部が形成され、その下方は開口部にくらべややせばまる。埋土と壁との識別に間違いがあって一部を掘りすぎ、また土層断面図の作成の後に降雨による崩壊があったため、中途から東側を“断ち割る”形での掘り下げをおこなった。埋土上部は数層に細分される黄橙色シルト層～黒褐色土層で構成され、炭化物粒を多く包含する。その下位は、混入物をほとんど含まないシルト質の黄橙色～黄褐色土層、下半は青灰色～緑灰色粘土層が占める。粘土層は上面がわずかに凸レンズ状に盛り上がり、層厚は 210 cm 土を計る。粘土層上部から長さ 50 cm 土の材 3 本が出土したが、腐朽が著しくその原形については明らかでない。また下部からは曲げ物の断片が出土した。いずれもこの井戸址に伴うものか二次的な移動を受けているものかは不明である。

埋土上部から土器片がわずかに出土しているが、小破片であり図化できるものはない。

この井戸址の南西壁に C-55 井戸址の断面が確認された。新旧関係の把握はできなかったが、C-55 井戸址の埋土下半に存在する炭化物層が C-54 井戸址の埋土中には確認できなかったことから、C-54 井戸址が C-55 井戸址を切っている可能性が考えられる。

### C-55井戸址 (第19a図)

C-54 井戸址の南西壁に断面が検出された。しかし、調査区域外に接してあるため調査はできなかった。2 基の新旧関係は前述の通りである。

### D-51井戸址 (第19cd図・写真図版76)

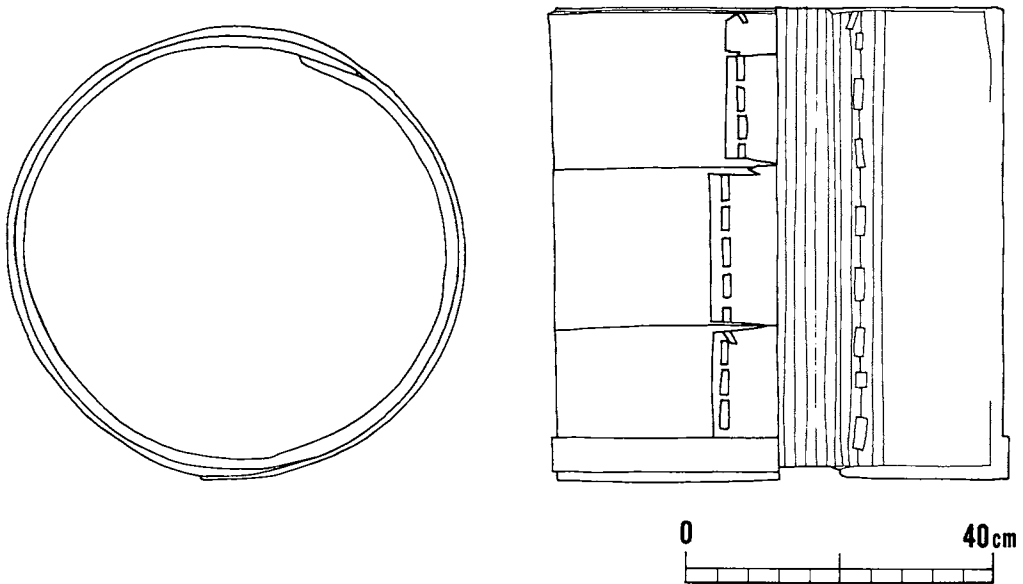
開口部径 175 cm 土・底部径 35 cm 土の規模をもち、深さ 255 cm 土を計る。平面での形状は円形を示す。開口部からほぼ直壁であるが、壁半ばおよび底部直上の内側に段が形成されてせばまり、底部径は開口部径にくらべて非常に小さいものとなる。埋土上部は粒状の焼土・炭化物を多く包含する黒褐色土層と灰黄褐色土層、中部は炭化物粒をわずかに包含した黄褐色土層・灰黄褐色土層で構成される。下部は灰色～青灰色粘土層が占める。青灰色粘土層の上面は凸レンズ状に盛りあがる。粘土層の層厚は 100 cm 土あり、木の葉・モモの種子等の植物遺体をわずかに包含する。

埋土上部の黒褐色土層中から土器の小破片が出土しているが、量的にはわずかであり図化できるものはない。

### D-52井戸址 (第18・19ef・37・38図・写真図版77・78・92・94b)

開口部径は190 cm±を計り、平面での形状は円形を示す。埋土上部は炭化物粒を包含する黒褐色土層が主体を占め、その下位は弱い還元土壌化を示す灰褐色～灰色粘土質シルト層である。埋土中・下部は層厚220 cm±を計る灰色～緑灰色粘土層である。土層断面図は灰色粘土層の上面まで掘りさげた段階で作成し、その下方は省略した。粘土層の上半部に材27本前後が出土した。出土したレベルからはほぼ3群に分けられ、上下のレベル差は100 cm±である。破損品も含め長さ10 cm±～80 cm±の割り材が主で直径3.5 cm±の丸材が一部を占める。丸材には両端に削り出しのみられるものが少数ある。最下部の材が出土したレベルからさらに50 cm±下方に曲げ物の上端が確認された。曲げ物は底部にほぼ三角形におかれた礫の上にすえられ、壁にはほぼ東西南北の4方向から曲げ物を固定させるために直径3 cm±の丸材がつきさされ、西と北方向の2本は曲げ物に接し、東と南の2本はやや離れた状態がみられた。曲げ物が底部にすえられていたことや数量・材の種類などから、さきの材はその上部に構築された井筒が解体したものと考えられる。開口部から曲げ物がすえられた底部までの深さは360 cm±である。

曲げ物(第18図)は外径58 cm・内径54.5 cm・高さ61.2 cmを計る。内外2枚の曲げ物を合わせて2重にしている。外側は3段に分かれ、3枚の柵目板が使用される。上・中段の2枚の幅はそれぞれ20.5 cm、下段は19.5 cmである。厚さはいずれも7 mm±である。中段の外径がわずかに大きくなるのは、上・下段が差しこまれるためである。内側には幅61 cm・厚さ18 mm±の1枚の目板を使用する。内面には間隔1.5 cm±の切れ目が縦方向に入れられ、全面にみられる。内外とも両端を重ね合わせ、外側では内に入る部分をうすく削っている。重ね合わせた部分の外側



第18図 D-52井戸址出土曲げ物実測図

では上・中・下段それぞれに桜の皮を使用して縦方向にぬいあわせ、内側はそれ自体単独でやはり縦方向にぬいあわせている。I-52井戸址から出土した曲げ物では、外側と内側との間には細長く薄いクサビ状の板がさしこまれていたが、この曲げ物の下端にはそれと同様のものと考えられる板2枚がさしこまれているのが観察できる。下端からわずか上方には幅4.5cm・厚さ8cm±のタガがまわされ4カ所を木釘で固定されていた。曲げ物の材質は杉である。

埋土上部からわずかの量の土器が出土したが、いずれも小破片で図化できるものはない。青灰色粘土中からは鉤手の素材と考えられる材・小動物の獣骨(鑑定依頼中)・縄の断片などが出土している。鉤手の素材(第37図・9)と考えられるのはK-51井戸址に完成品が出土していることと柄の末端に削り痕がみられることによる。くぬぎの叉状に分枝する部分を利用している。

この井戸址は重複するD-101溝を切っている。

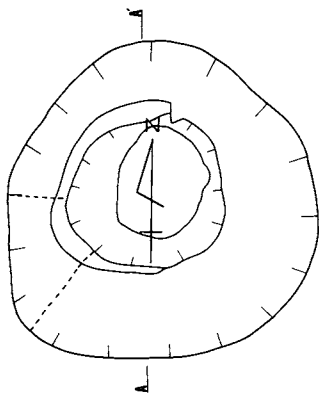
#### E-51井戸址(第20abd・38図・写真図版79・80・89)

開口部径は250cm±を計り、平面での形状は円形を示す。壁上半にくびれ部が形成され、その上方は開口部にむかいゆるやかに開く。埋土上部は炭化物粒をわずかに包含する黄褐色～暗褐色土層、その下位はわずかに還元土壌化の進んだ褐色～灰黄褐色土層で構成される。埋土下半は青灰色粘土層で上面は凸レンズ状に盛りあがっている。検出面からその上面まで深さ100cm±・層厚108cm±を計る。粘土層上部に長さ35cm±～70cm±の材約10本が出土した。加工痕をもつ割り材および細い丸材である。それを取りあげた20cm±下方に井筒の上面が検出された。井筒は上下2段にくまれ、上段の外法で南北80cm±・東西75cm±のほぼ方形を示す。上段は4本の隅柱の下端近くに柄孔があげられ横棧がわたされる。隅柱は長さ64cm±～80cm±・直径6cm±～9cm±の一部側面を削りだされた丸材および角材で、両端ないし一端を削っている。横棧は長さ75cm±の角材で両端は細く削りだされている。横棧の外側には長さ40cm±～60cm±・幅5cm±～10cm±の割り材・板材が立てられているが、東辺をのぞくと原形の保存は良くない。東辺では9本前後の材が使用されている。下段の井筒は上段に接した内側に一部が上段の縦材と重複する形で、隅柱や横棧を伴わない丸木の列を4辺にもつ。丸木は直径4cm±・長さ65cm±～80cm±を主体とし、いずれも下端が削られている。北辺では12本が使用されている。南辺での原形の保存は不良である。使用された材の材質は上段の大部分がクリの木、下段はドロの木である。開口部から井筒底部までの深さは208cm±である。

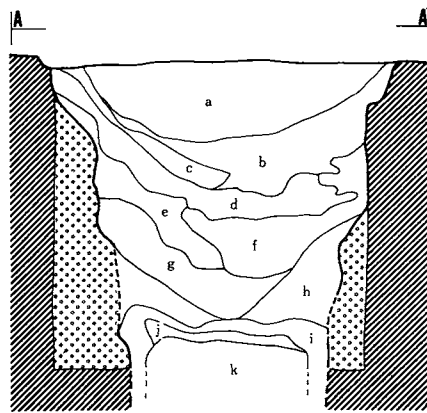
井筒の周囲はすでに青灰色粘土化しているために掘り方の存在は不明である。その粘土の上位の壁際からみられるシルト質の黄褐色土層は掘り方の埋土の可能性をもつが、断定はできなかった。

この井戸址は北側の一部でE-1住居址と重複し、それを切っている。



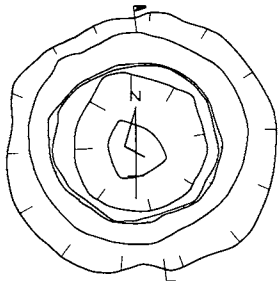


a. C-54·C-55井戸址

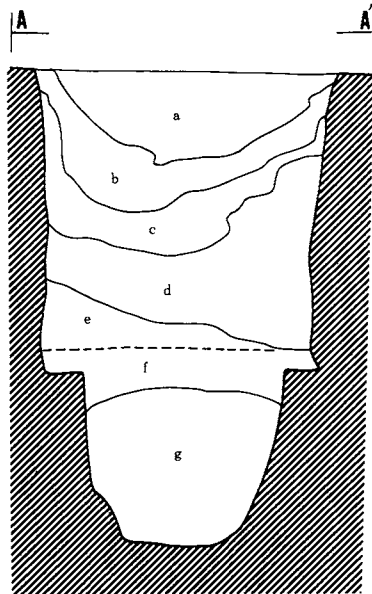


- a. 暗褐色土層(含炭化物粒)
- b. 灰黄褐色土層(含炭化物粒)
- c. 黄褐色土層
- d. 黑褐色土層
- e. 黄褐色土層(含炭化物粒)
- f. 黄褐色土層
- g. 黄褐色土層
- h. 黄褐色土層
- i. 黄褐色土層
- j. 青灰色粘土層
- k. 綠灰色粘土層

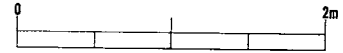
b. C-54井戸址土層断面図



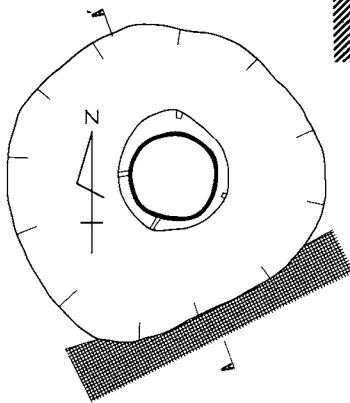
c. D-51井戸址



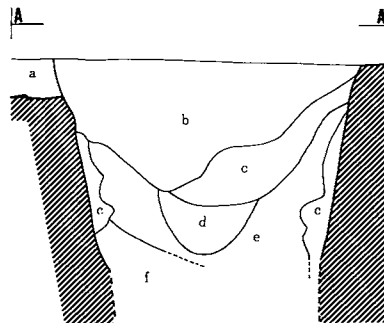
- a. 黑褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)
- b. 灰黄褐色土層(含燒土粒·炭化物粒)
- c. 黄褐色土層
- d. 灰黄褐色土層(含炭化物粒)
- e. 灰黄褐色土層
- f. 灰色粘土層
- g. 綠灰色粘土層



d. D-51井戸址土層断面図



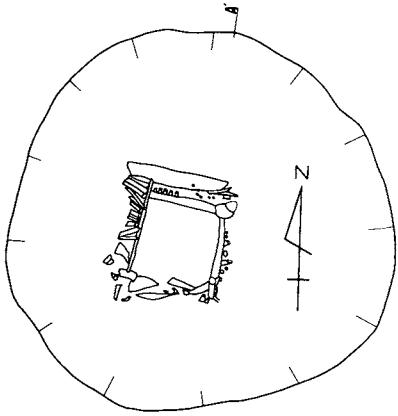
e. D-52井戸址



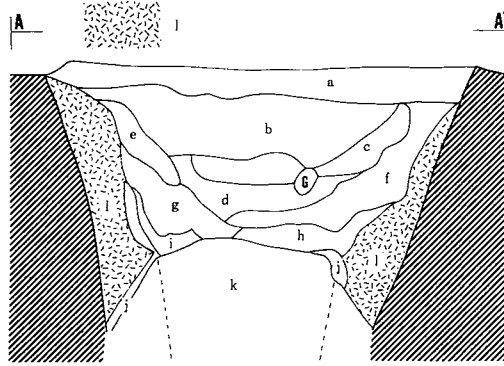
- a. 黑褐色土層(D-101溝埋土)
- b. 黑褐色土層(含炭化物粒)
- c. 褐色土層
- d. 灰色土層
- e. 灰褐色土層
- f. 灰褐色土層

f. D-52井戸址土層断面図

第19図 井戸址実測図(1)

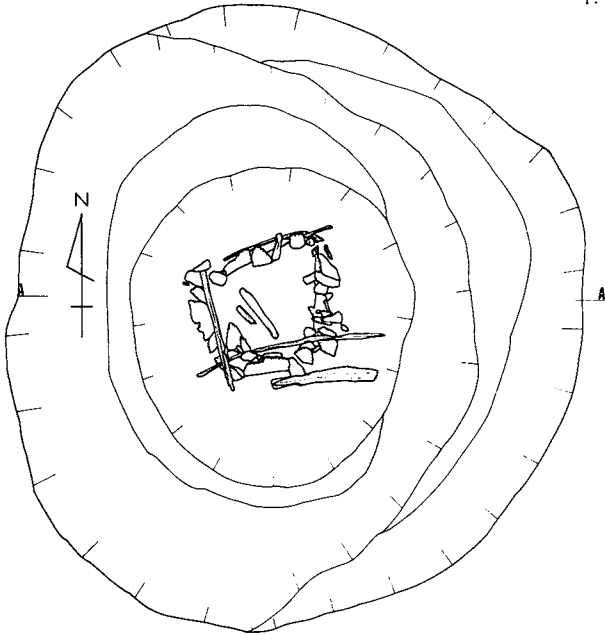


a. E-51井戸址



b. E-51井戸址土層断面図

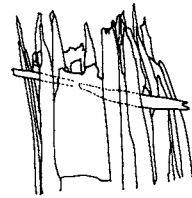
- a. 暗褐色土層(含炭化物粒)
- b. 暗褐色土層(含炭化物粒)
- c. 黄褐色土層(含炭化物粒)
- d. 黄褐色土層(含炭化物粒)
- e. 黄褐色土層
- f. 灰黄褐色土層
- g. 褐色土層(含炭化物粒)
- h. 褐色土層
- i. 灰黄褐色土層
- j. 暗赤褐色土層(三価鉄)
- k. 灰色粘土層
- l. 黄褐色土層(掘り方埋土?)



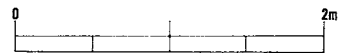
c. I-52井戸址



d. E-51井戸址井筒側面図(北から)



e. I-52井戸址井筒側面図(南から)



第20図 井戸址実測図(2)

### Ⅰ-51井戸址（第21bc・写真図版81）

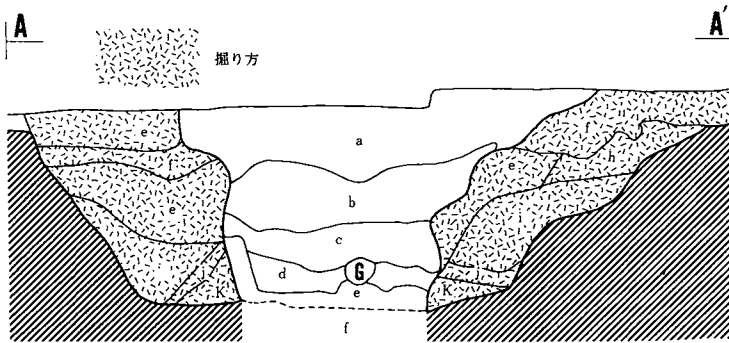
開口部径 170 cm ± ・底部径 55 cm ± の規模をもち、深さ 180 cm ± を計る。壁半ばにわずかにくびれ部が形成され、上半はゆるやかに開口部にむかい壁が開くが、下半はほぼ直壁で底部にたつする。埋土中部の暗青灰色粘土層上面までの埋土は主に暗褐色～黒褐色土層が占め、粒状の焼土・炭化物が多く包含される。埋土の中下部は青灰～暗緑灰粘土層で占められる。土層断面図・平面実測図を作成した後、中下部粘土層と自然層序中の粘土層との比較のために一定範囲の深掘りをおこなった。自然層序は上位から下位へシルト層・砂質シルト層・細砂層・粘土質シルト層・シルト質粘土層・緑灰色粘土層の順に堆積する。その緑灰色粘土層の上面までは検出面から深さ 150 cm ± であるが、井戸内の粘土層上面までの深さは 100 cm ± であり、自然層序中の粘土層が 50 cm ± 下位にあることが知られた。

埋土上部から少量の土器片が出土しているが、いずれも小破片で図化できるものはない。

### Ⅰ-52井戸址（第20図ce・21a・37・39・写真図版82・83・90・91・93・94c）

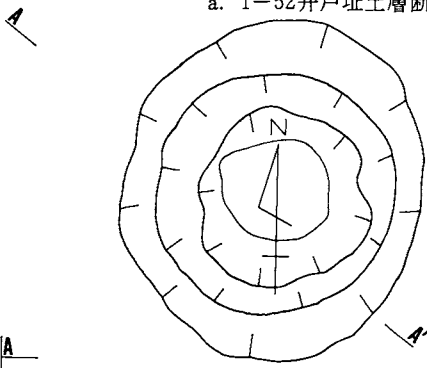
開口部径 20.5 cm ± × 180 cm ± を計り、平面での形状はほぼ円形を示す。開口部直下にくびれ部が形成され、その上方は開口部にむかってゆるやかに開くが、下方はほぼ直壁である。埋土最上部は粒状の焼土・炭化物を包含する黒褐色土層、その下位は灰黄褐色土層、還元土壌化を示す褐灰色土層の順に埋土は構成される。さらに下位は検出面から深さ 115 cm ± で灰色粘土層にたつする。この井戸址は掘り方をもつ。開口部径 410 cm ± × 370 cm ± でほぼ円形を示す。ゆるやかな傾斜をもって掘られた掘り方は黄褐色～黒褐色シルト質土で埋められ壁とする。底部には曲げ物がすえられ、その外側に井筒が組まれる。曲げ物は東西方向にいくぶん押しつぶされた状態で存在するが、湧水が激しく十分な観察は不可能であった。井筒は一辺の外法が 80 cm ± のほぼ正方形を示す。隅柱は南西隅のものは長さ 180 cm ± でほぼ中間に柄孔 1 個がある丸材、南東隅の柱は現存長 100 cm ± で柄孔 1 個がみられる角材、北東隅の柱は現存長 125 cm ± の角材で上半にしゃくりこみが 2 カ所上下に並ぶ。北西の隅柱は現存長 95 cm ± で折れた両端に柄穴がある。北辺をのぞいた 3 辺の内側に横棧がある。いずれも隅柱の柄穴あるいはしゃくりこみに組まれておらず、東辺では横棧を板材および角材で両側からはさみこむ状態がみられる。横棧の外側に立てられる縦板は長さ 70 cm ± ～ 160 cm ± ・幅 10 cm ± ～ 35 cm ± の角材・板材が主体である。なお開口部から曲げ物がすえられた底部までの深さは 290 cm ± である。井筒全体では高さ 250 cm ± になる。

曲物は取りあげの際に破損したため径は不明であるが、高さは 58 cm である。作り・材質は D-52 井戸址出土のものと同様である。内外 2 枚の曲げ物を合わせて 2 重にしている。外側は 3 段に分かれ、3 枚の桁目板を使用し、内側には厚さ 8 mm の桁目板 1 枚を使用する。この内側の板の内面には間隔 1.5 cm ± の切れ目が縦方向に入れられ、全面にみられる。外面の上半には間



a. I-52井戸址土層断面図

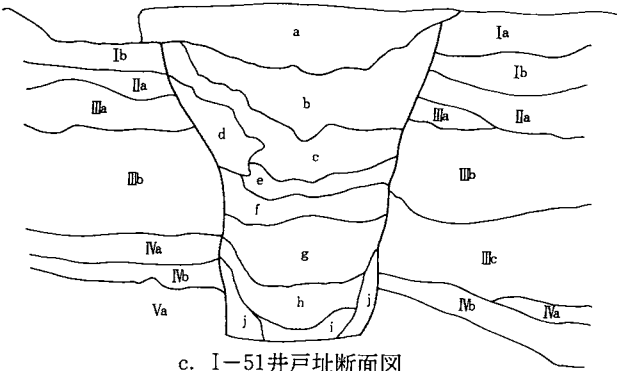
- a. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- b. 灰黄褐色土層
- c. 灰黄褐色土層
- d. 褐灰色土層(含炭化物粒)
- e. 黄褐色土層(含炭化物粒)
- f. 灰色粘土層
- g. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- h. 褐灰色土層(含炭化物粒)
- i. 褐灰色土層
- j. 褐灰色土層
- k. 灰色粘土層



b. I-51井戸址

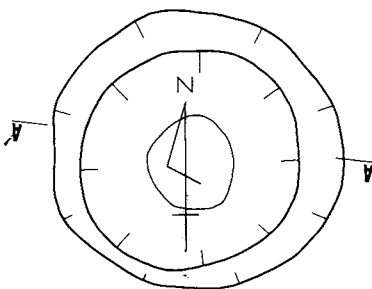
- a. 暗褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- b. 暗褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- c. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- d. 黒褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)
- e. 褐色土層
- f. 暗青灰色粘土層
- g. 青灰色粘土層
- h. 青灰色粘土層
- i. 暗緑灰色粘土層
- j. 青灰色粘土層

- Ia. 黄褐色シルト層
- Ib. 明黄褐色シルト層
- IIa. 明黄褐色砂質シルト層
- IIIa. 明黄褐色細砂層
- IIIb. 明黄褐色細砂層
- IVa. 明黄褐色粘土質シルト層
- IVb. 黄褐色シルト質粘土
- IVc. 緑灰色粘土層

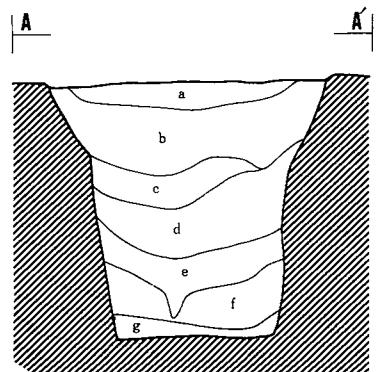


c. I-51井戸址断面図

- a. 黒褐色土層(含焼土粒)
- b. 黒褐色土層(含炭化物粒・焼土粒)
- c. 黒褐色土層(含炭化物粒・焼土粒)
- d. 黒褐色土層(含炭化物粒)
- e. 黒褐色土層
- f. 黄褐色土層
- g. 褐灰色土層



d. K-51井戸址



e. K-51井戸址土層断面図

S=1/4

第21図 井戸址実測図(3)

隔2cm±の切れ目が斜方向に入れられるが、下半には横方向の削り痕がみられるだけである。外側と内側の間には長さ58cm・最大幅12.3cmのくさび状の薄い板が2枚さしこまれている。

埋土上部からわずかの量の土器が出土したが、いずれも小破片で図化できるものはない。井筒のなかからは「元祐通宝」2枚と木質部を一部残した刀子のほか木端などがでている。刀子(第37図・10)は完形である。全長は19.7cmある。刃部は長さ16.2cm・幅は中央部で1.3cmを計る。背は0.4cmの厚さをもち平担である。刃部は矢端部までほぼ同一の幅で、先端部はやや角ばる。関は刃部側に明瞭な段がみられるが、背側は僅かな屈曲をもつだけである。関から刃部側へ1cm±よった中央に目釘穴があり、この部分を中心に木質部が残存する。基部は長さ3.5cm・幅1cmを計り、背側は平担で厚いのに対し刃部側は薄い。

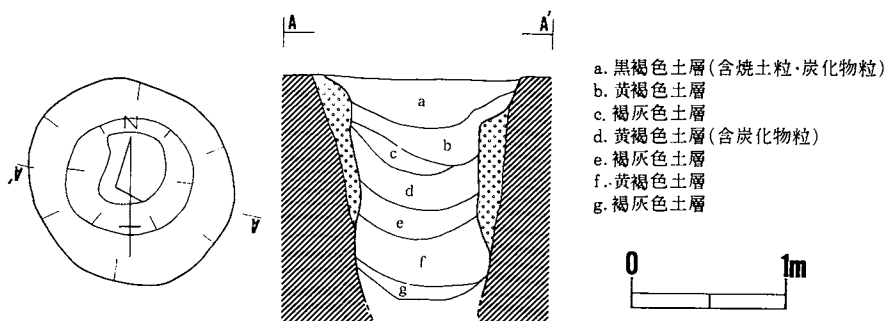
#### K-51井戸址(第21de・37図・写真図版84・94a)

開口部径150cm±・底部径85cm±の規模をもち、深さ204cm±を計る。開口部は円形を示す。開口部直下にくびれ部が形成されるが、壁の崩壊によるものと考えられる。その下方はほぼ直壁である。埋土は7層で構成される。埋土の大部分を黒褐色土層が占め、中部までわずかに焼土粒・炭化物粒が包含される。その下位の黄褐色土層は粘土質シルト、褐灰色土層は還元土壌である。

埋土上部から土器の小破片が出土しているが、量的には僅少で図化できるものはない。下部からは木製の鉤手(第37図・11)が出土した。柄の部分は中間に欠損があつて全長は不明であるが、直径は2cm±である。鉤部の長さは5cmである。使用された材はエゴの木で、叉状に分枝する部分を利用し、全面に加工が加えられる。柄の先端にはひもがかりの部分の削りだして作っている。

#### L-51井戸址(第22図・写真図版85)

開口部径140cm±×125cm±・底部径50cm±×35cm±の規模をもち、深さ167cm±を計る。平面での形状は円形を示す。埋土に誤認があつて壁の一部に掘りすぎがあつた。開口部直下に壁の崩壊によると考えられるくびれ部が形成されている。下半では壁がわずかに脹らむ。埋土



第22図 L-51井戸址実測図

は7層で構成される。上部は粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する黒褐色土層・黄褐色シルト層、中部は炭化物粒をわずかに包含する黄褐色粘土質シルト層を狭んで還元土壌の褐灰色土層が占める。下部は黄褐色土層・還元土壌の褐灰色土層である。

埋土上部から土器の小破片が出土しているが、量的には僅少で図化できるものはない。

### (3) ピ ッ ト

#### C-51ピット (第23d・35図)

C-52ピットやC-53ピットと隣接する形で検出された。径110cm±×70cm±の規模をもち、深さ50cm±を計る。東西方向に長軸をもつ楕円形ピットで、断面は浅皿状を示す。埋土は炭化物粒を多く包含する黒褐色土の単層である。南東壁際に完形の鉄鏝が出土している。鉄鏝(第35図6)は全長14.8cmを測る、両丸造鑿箭式のものと思われる。鋒の最大幅は1.7cm±で緩くカーブして篋被部に至る。篋被ぎの長さは4.2cm±を測り、茎側に向って断面が丸味をもつ。篋被ぎと茎の区は明瞭な段をもつ。茎長は7.0cmを測り、断面は円形を呈す。

#### C-52ピット (第23b図)

径120cm±×90cm±の規模をもち、深さ44cm±を計る。楕円形の形状を示し、断面形は浅皿状である。埋土は炭化物粒を多く包含する黒褐色土の単層である。

#### C-53ピット (第23c図)

径140cm±×100cm±の規模をもち、深さ16cm±を計る。不整な楕円形の形状を示し、断面形は浅皿状である。埋土は粒状の焼土・炭化物を多く包含する暗褐色土層で、土器の小破片の出土も少量ながらある。底面の中央部は焼成を受け、焼土層が形成されている。南壁寄りの部分は底面より24cm±落ちこんでいる。

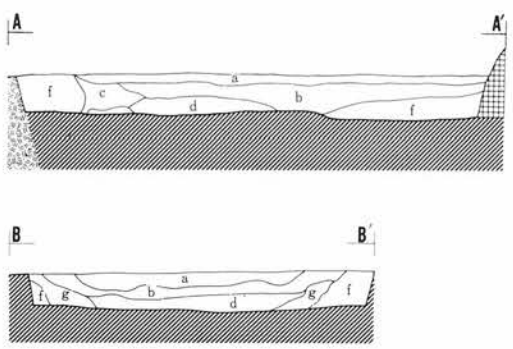
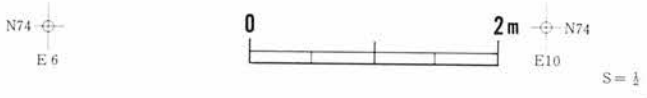
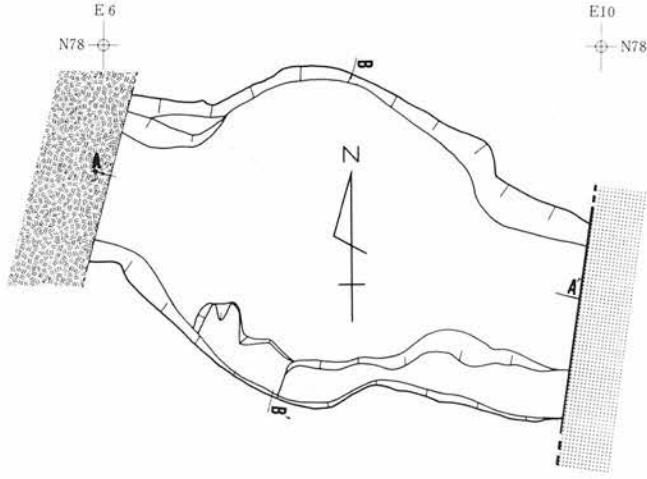
#### E-52ピット (第23e・35図)

E-51井戸址の東壁の外方に位置している。径140cm±×130cm±の規模をもち、深さ22cm±を計る。ほぼ円形の形を示し、断面形は浅皿状である。埋土は粒状の焼土・炭化物を包含するシルト質の暗褐色土層である。床面直上に土器片が少量出土しているほか、刀子が出土している。刀子(第35図7)は茎端を僅かに欠き、現存長20.1cmを測る。刃部幅は関部で1.3cmと最も広く、広端に向い除々に狭まる。背は平造りである。関は刃部・背側とも明瞭でない。茎端に木質部の付着がみられる。

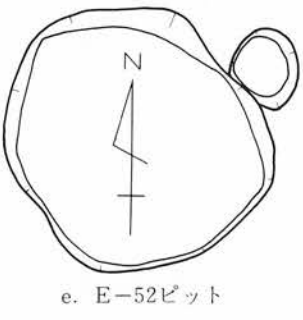
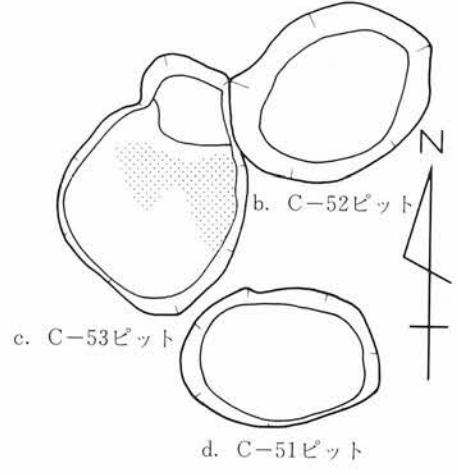
#### E-53ピット (第23f図・写真図版73b)

E-1住居址の北東外方に位置する。径95cm±×48cm±の規模をもち、深さ16cm±を計る。長楕円形の形状を示し、断面形は浅皿状である。埋土は粒状の焼土・炭化物を包含するシルト

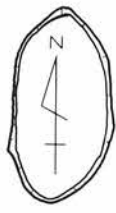
a. F-51ピット  
F-101溝



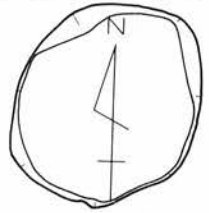
a. 褐色土層(含焼土粒・炭化物粒)    b. 褐色土層  
c. 褐色土層    d. 褐色土層  
e. 黒褐色土層    f. 黄褐色土層  
g. 暗褐色土層



e. E-52ピット



f. E-53ピット



g. E-54ピット

第23図 ピット実測図

質の暗褐色土層である。遺物は出土しなかった。

#### E-54ピット (第23g 図・写真図版73a)

E-1 住居址の北西外方に位置する。105 cm 土×95cm 土の規模をもち、深さ30cm 土を計る。ほぼ円形の形状を示し、断面形は浅皿状である。埋土は粒状の焼土・炭化物を多く包含するシルト質の暗褐色土層である。遺物は出土しなかった。

#### F-51ピット (第23a 図・写真図版73c)

径 270 cm 土×260 cm 土の規模をもち、深さ30cm 土を計る。円形の形状を示す。埋土は粒状の焼土・炭化物を包含する褐色土層が主体を占め、床面の一部～壁際には黄褐色土層が堆積する。床面はわずかに凹凸をもち、床面中央部には一部材状のものを含む炭化物の細粒が広い範囲に広がる。焼土を伴わず、異地性のものの分布とみられる。

このピットのほぼ中央部で東西に走る F-101 溝と重複するが、新旧関係は不明である。

### (4) 溝 跡

#### D-101 溝 (第24a・35図・写真図版73e)

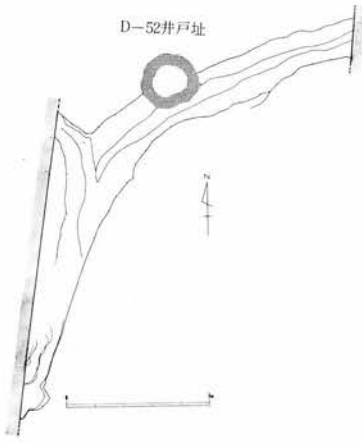
東側は調査区域外にでることや西端は旧地形の崖線と重複して不明になることから詳細は明らかではない。上幅 155 cm 土・溝底幅34cm 土・深さ24cm 土を計る。調査区域外と接する部分から東西方向に走り、途中で南西方向に折れまがる。埋土上部は粒状の焼土・炭化物を少量包含する暗褐色土層、下部は黒褐色土層で占められる。断面形はゆるやかな「U」字状を示す。埋土下部から完形の土器が集中して出土したほか壺が出土している。しかし、図化できたのは坏と高台坏で、壺は還元炎焼成の体部破片である。坏形土器(第35図2～4)はすべて内面黒色処理の施こされない還元炎焼成のものである(坏BⅢ類)。ロクロ成形で切り離しは回転糸切り再調整はみられない。全体に器高が低く小形である。ロクロ挽きによる凹凸の明瞭なものもある。歪みの強いものもあるが、外傾する体部をもつ。高台付坏形土器(第35図5)も黒色処理のない酸化炎焼成によるもの(高台坏BⅢ類)である。坏部は内弯気味の立ちあがりを有し、高台部は高く僅かに裾が開く。高台部は器壁が厚く、作りがやや雑である。坏部の一部に黒斑がみられ、また炭化物の付着もみとめられる。

このピットは、重複する D-51 井戸址に切られている。

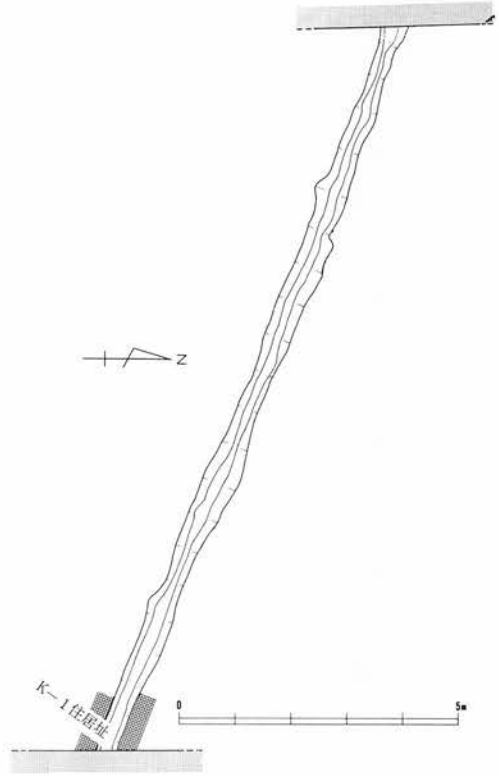
#### F-101 溝 (第23a 図・写真図版73c)

東側は調査区域外にでることや西側が攪乱を受けて存在しないことから、調査できたのは、F-51ピットとの重複部分も含めて 4 m 土にすぎない。上幅 140 cm 土・溝底幅95cm 土・深さ36 cm 土を計る。東南東～西北西方向に走る。埋土は粒状の焼土・炭化物をわずかに包含する褐色

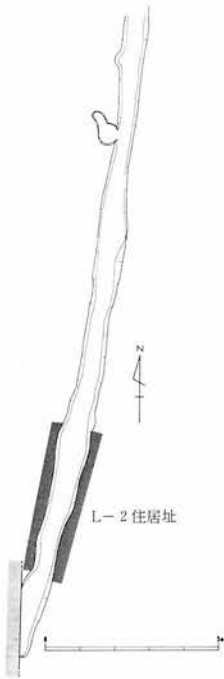




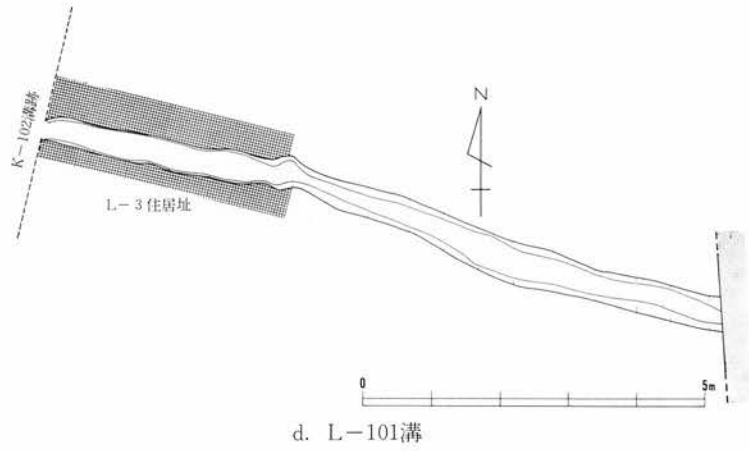
a. D-101溝



b. K-101溝



c. L-102溝



d. L-101溝

第24図 溝跡実測図

土層である。断面での形状は逆台形を示す。

F-51ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

#### K-101 溝 (第24b 図)

両側が調査区域外へでることから詳細は不明であるが、上幅57cm±・溝底幅17cm±・深さ15cm±を計る。西北西～東南東方向に走る。埋土は粒状の焼土・炭化物をわずかに包含するシルト質の褐色土層である。断面での形状は「U」字状を示す。出土遺物には土器の小破片が少量あるが、図化できるものはない。

この溝は、重複するK-1住居址を切っている。

#### L-101 溝 (第24d 図)

東側は調査区域外にあり、西側はL-102 溝に合流して消滅する。上幅45cm±・底部幅38cm±・深さ10cm±を計る。西北西～東南東方向に走る。埋土は粒状の炭化物をわずかに包含する黒褐色土層である。断面での形状は「U」字状を示す。

重複するL-3住居址の上部を切っているが、L-102 溝とどのような関係にあるかは不明である。

#### L-102 溝 (第24c 図)

南側は調査区域外にあり、南南西～北北東方向に走る。北側は明確な輪郭をもたずに消滅してしまう。上幅70cm±・溝底幅74cm±・深さ8cm±を計る。埋土は黄褐色砂質シルトの単層である。断面での形状は「U」字状を示す。出土遺物には土器の小破片が少量あるが、図化できるものはない。

重複するL-2住居址の上部を切っているが、L-101 溝とどのような関係にあるかは不明である。

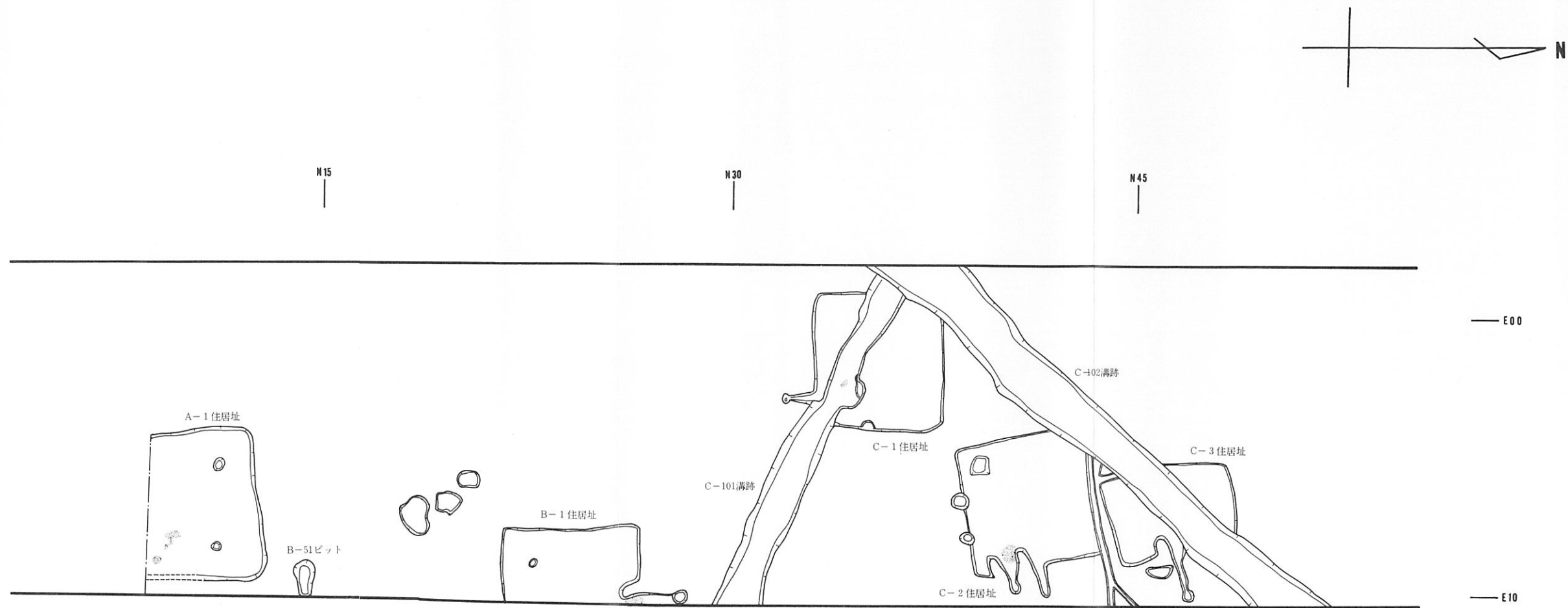
## 2. ま と め

落合Ⅲ遺跡は周辺の微高地の中でも比較的大きく東西に長い微高地上に在り、その北辺に位置する。すぐ西側には落合Ⅰ・落合Ⅱ遺跡があるが、これら落合Ⅰ～Ⅲの遺跡名は発掘調査時における便宜的なもので、微高地全体が同一遺跡としてとらえることができる。

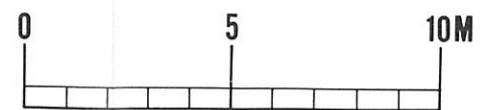
当遺跡で発見された遺構・遺物は平安時代に属するものが大半を占めるが僅かに弥生式土器奈良時代末あるいは中世の遺物がみられることから、当地区は多時期に渡る生活根拠地であったことが伺われる。

検出遺構は竪穴住居址16棟・ピット7基・井戸跡9基・溝跡5条である。調査範囲が限定されており、集落の規模等については不明であるが、遺構は調査区域全域に及ぶ。とりわけ平安

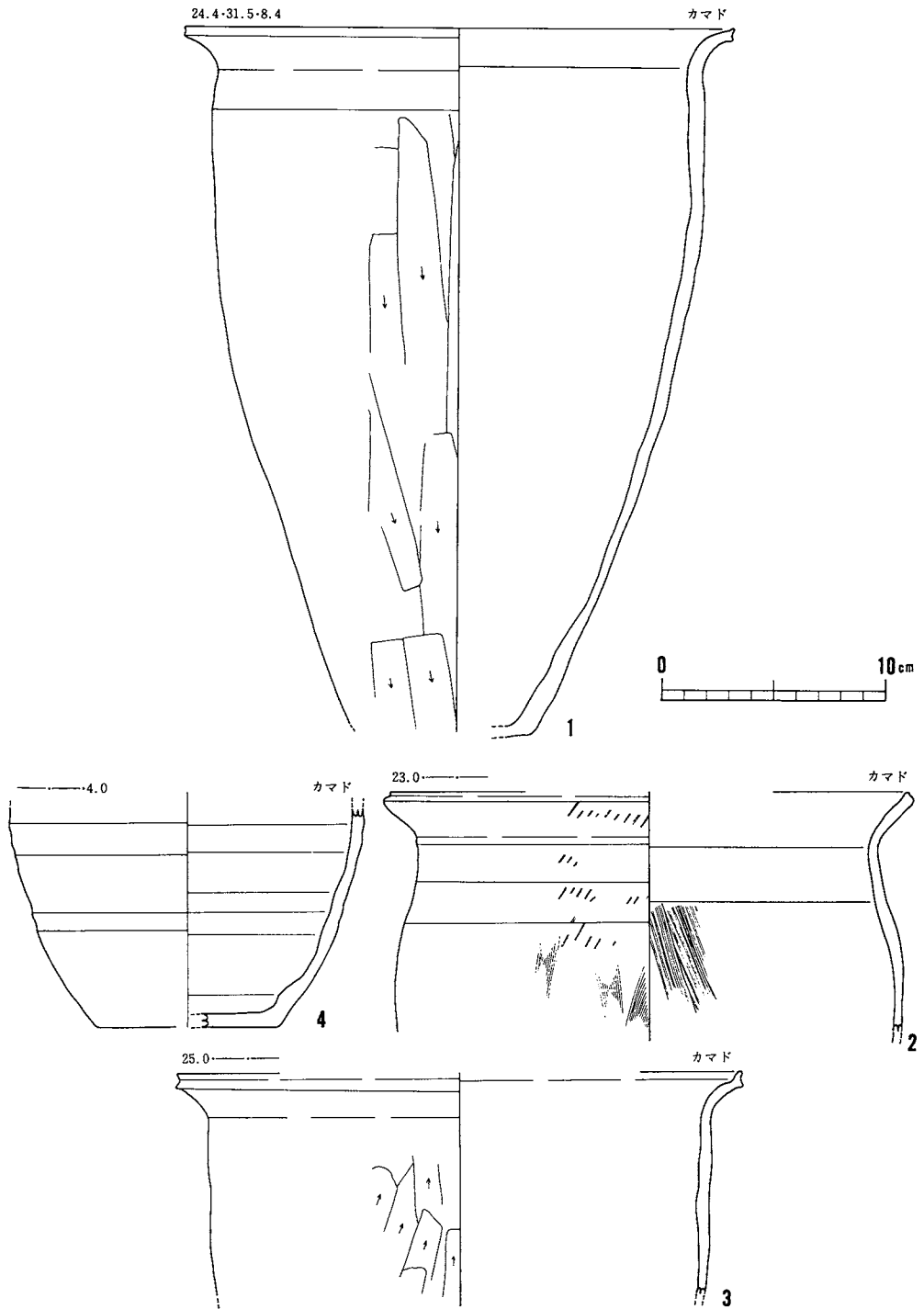
時代初期に属すると考えられるものが多く、当時期の急激な住居の増大は力石Ⅱ遺跡同様に自然村落的な性格よりも政治的な計画村落的な性格を反映したものと考えられる。遺構では井戸跡が9基も検出され、その構造上違い等注目されたが、残念ながら確証ある年代を与えることが出来なかった。また耕作土を除去した面で多くの柱穴状のピットを確認したが、図化したのみで十分な検討を加えないまま今回の報告になってしまった。これらはすべて平安期の住居址を切って掘られており、井戸・ピット群とも僅かにみられる中世の遺物との関連が考えられるが明確に出来なかった。今後なんらかの機会に明らかにしたい。



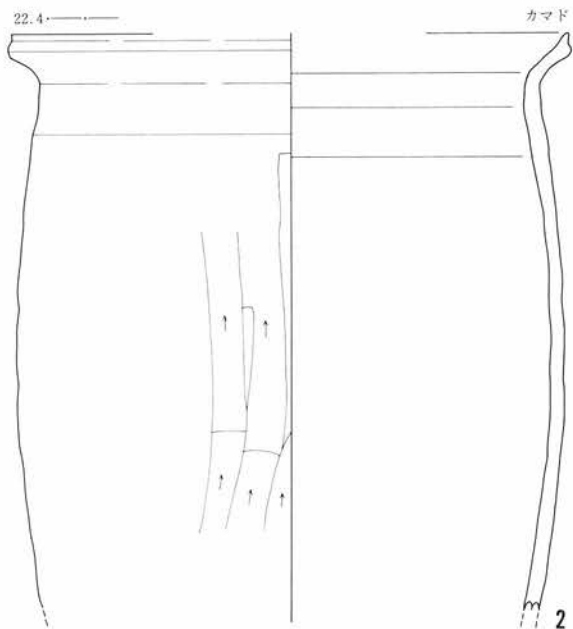
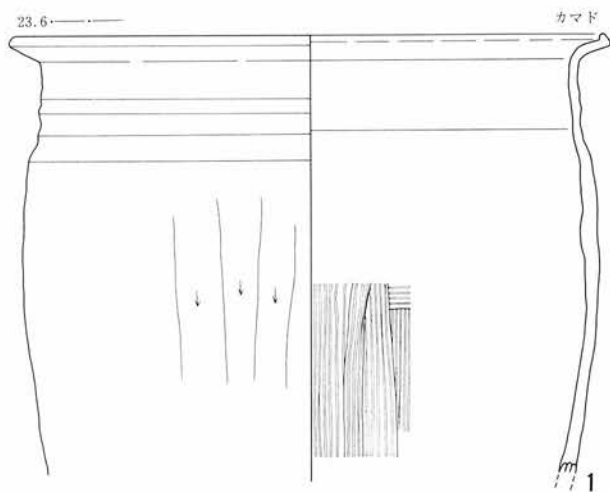
第7図 朴ノ木遺跡遺構配置図



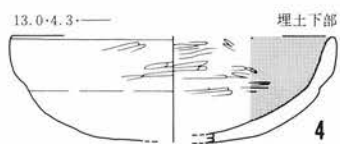
A-1 住店址



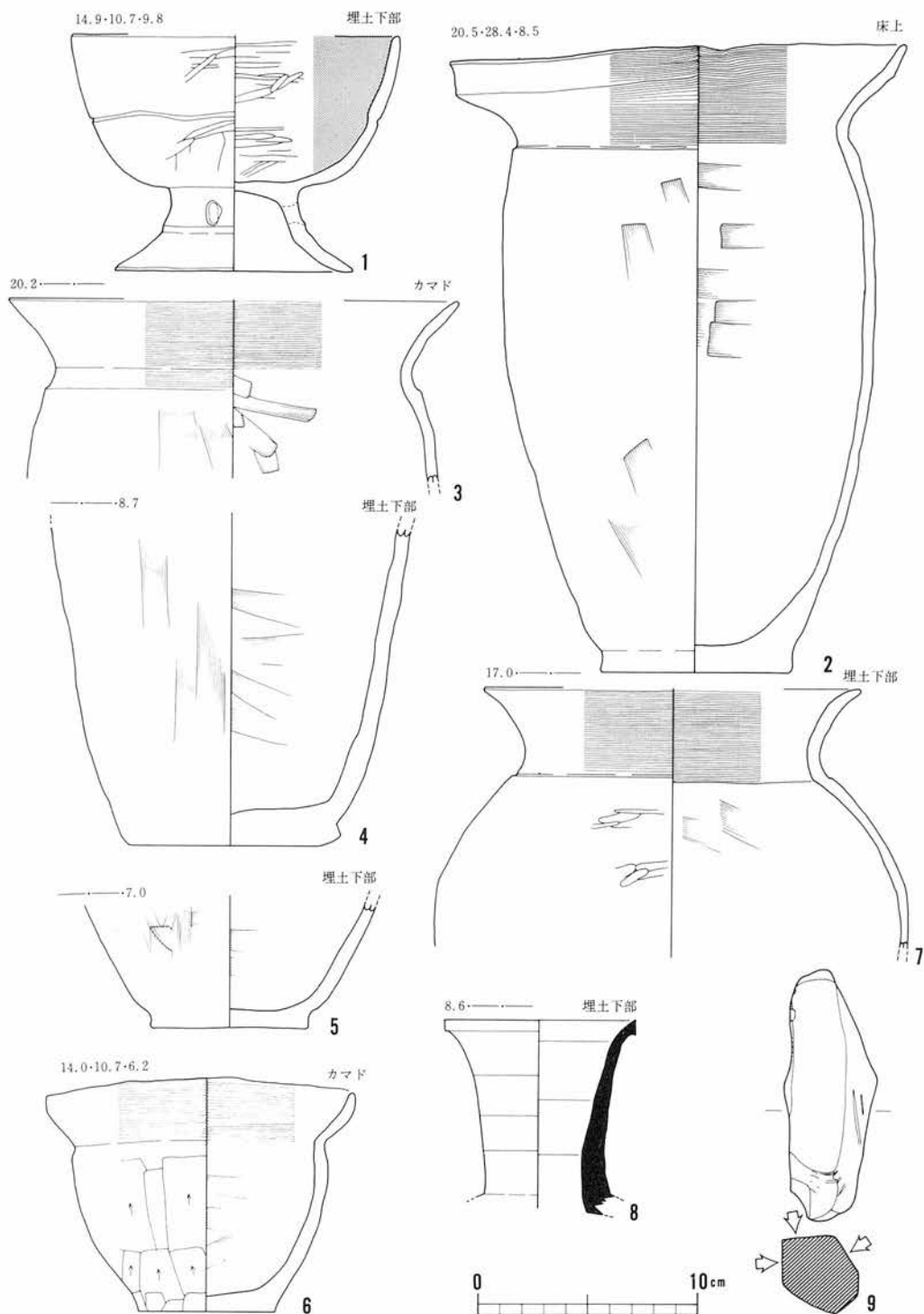
第26図 出土遺物 (A-1 住居址)



E-1 住居址

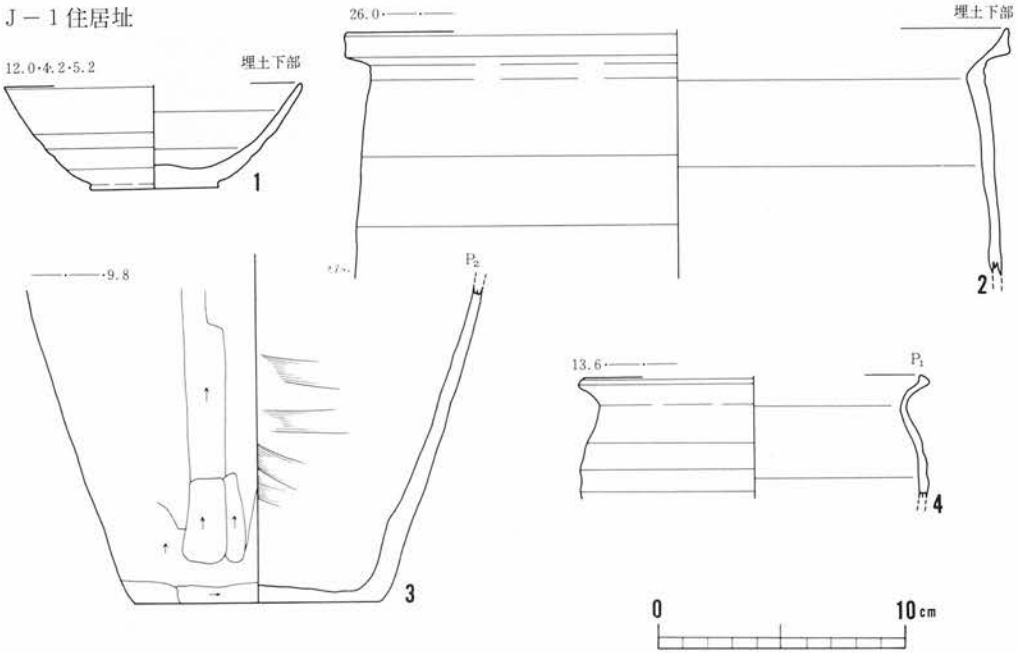


第27図 出土遺物(A-1 住居址・E-1 住居址)

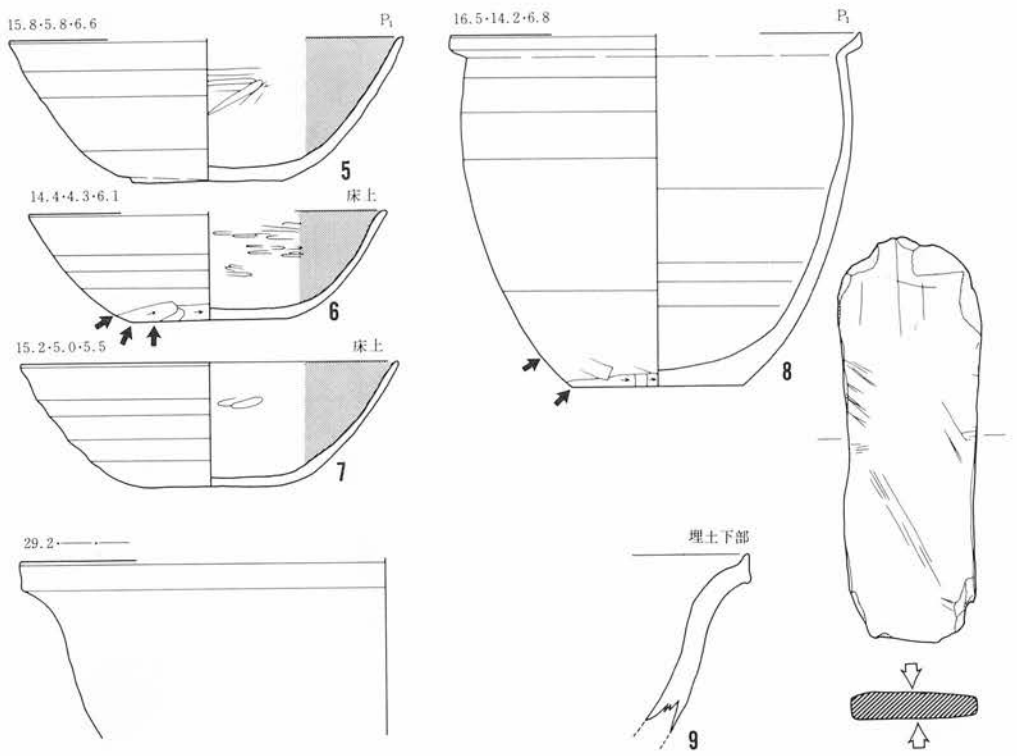


第28図 出土遺物(E-1住居址)

J-1 住居址



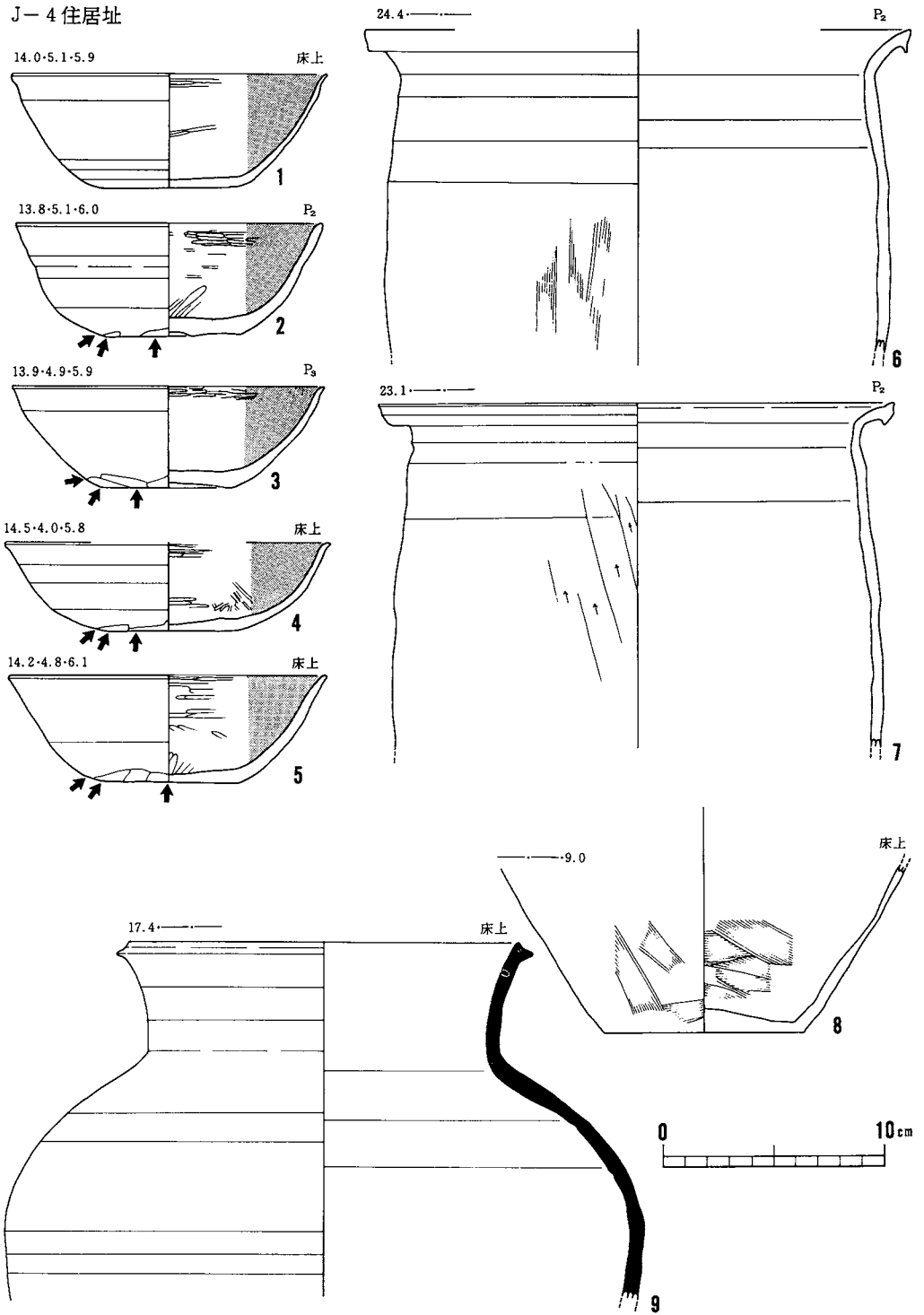
J-2 住居址



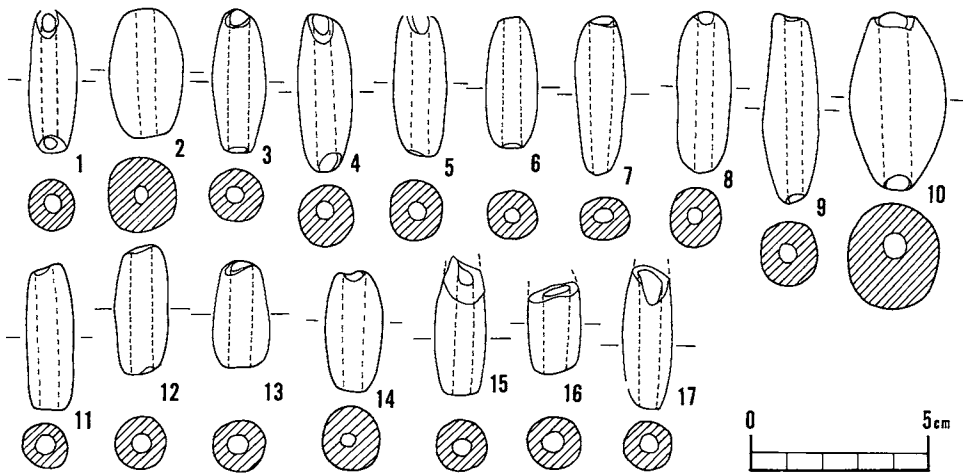
第29図 出土遺物(J-1住居址・J-2住居址)



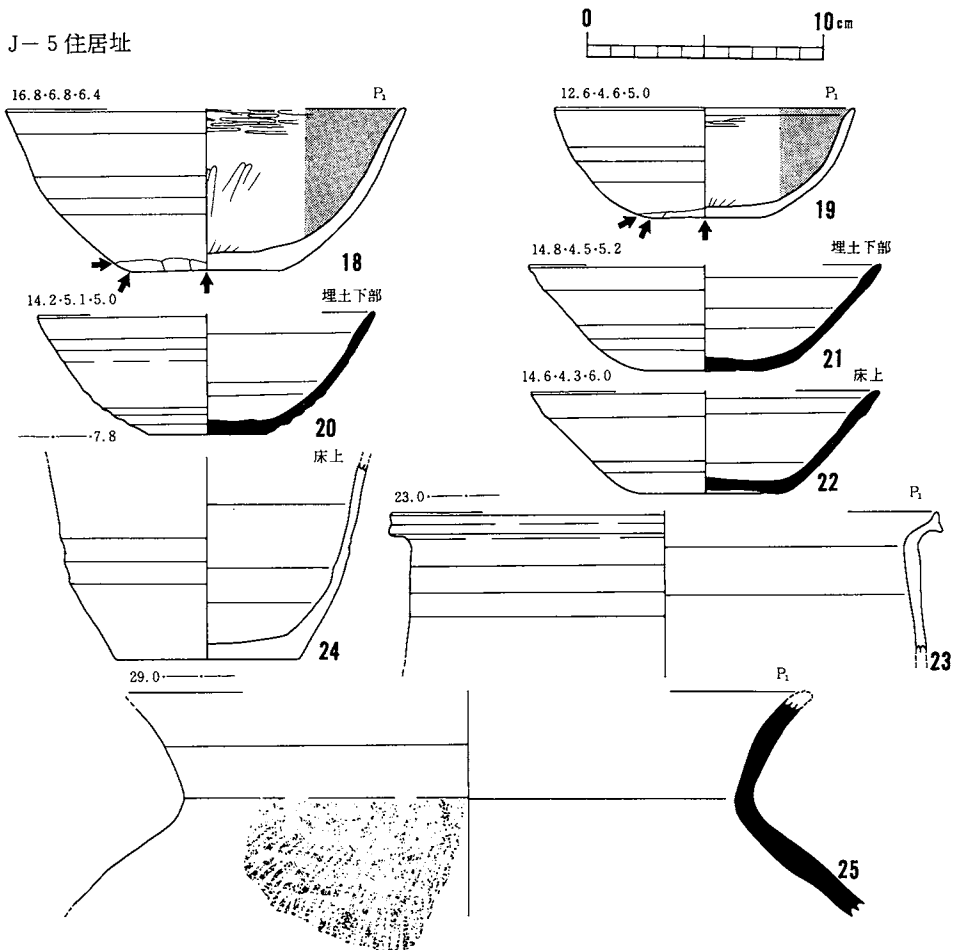
J-4 住居址



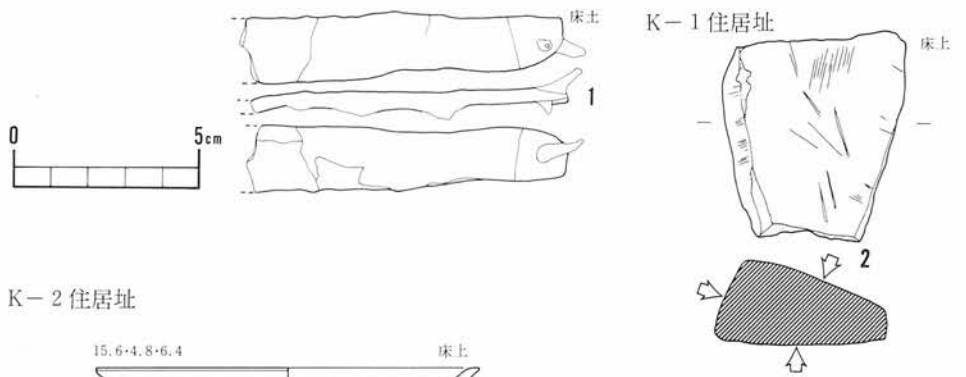
第30图 出土遺物(J-4住居址)



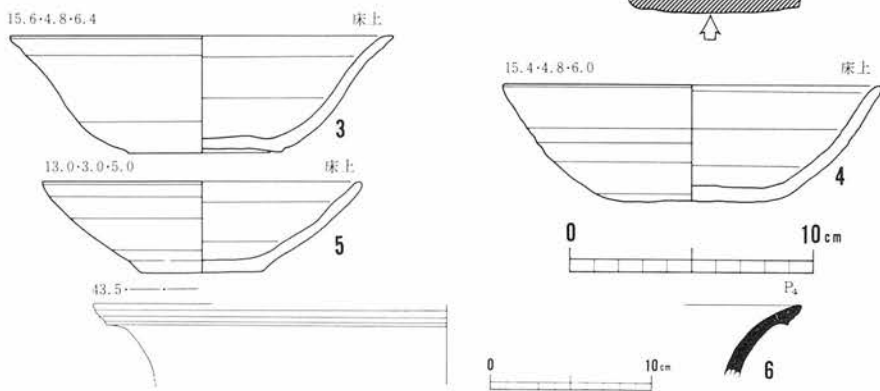
J-5 住居址



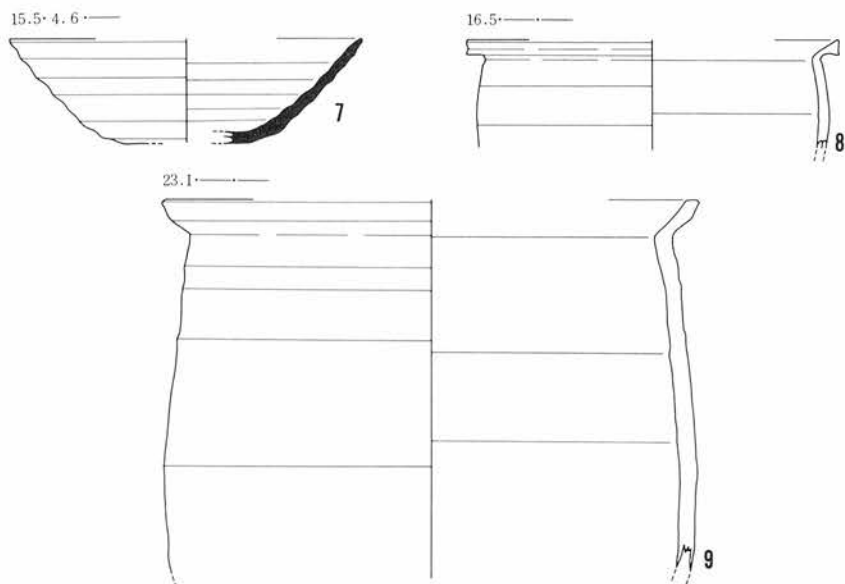
第31図 出土遺物(J-4住居址・J-5住居址)



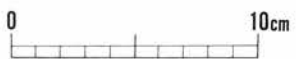
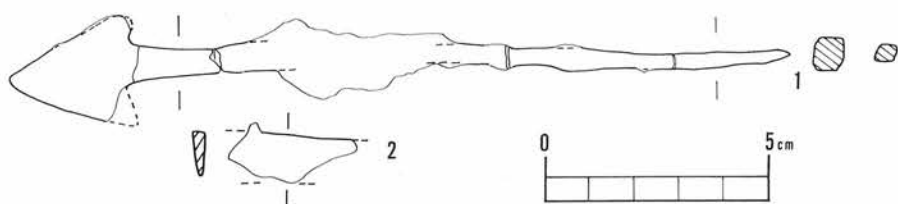
K-2 住居址



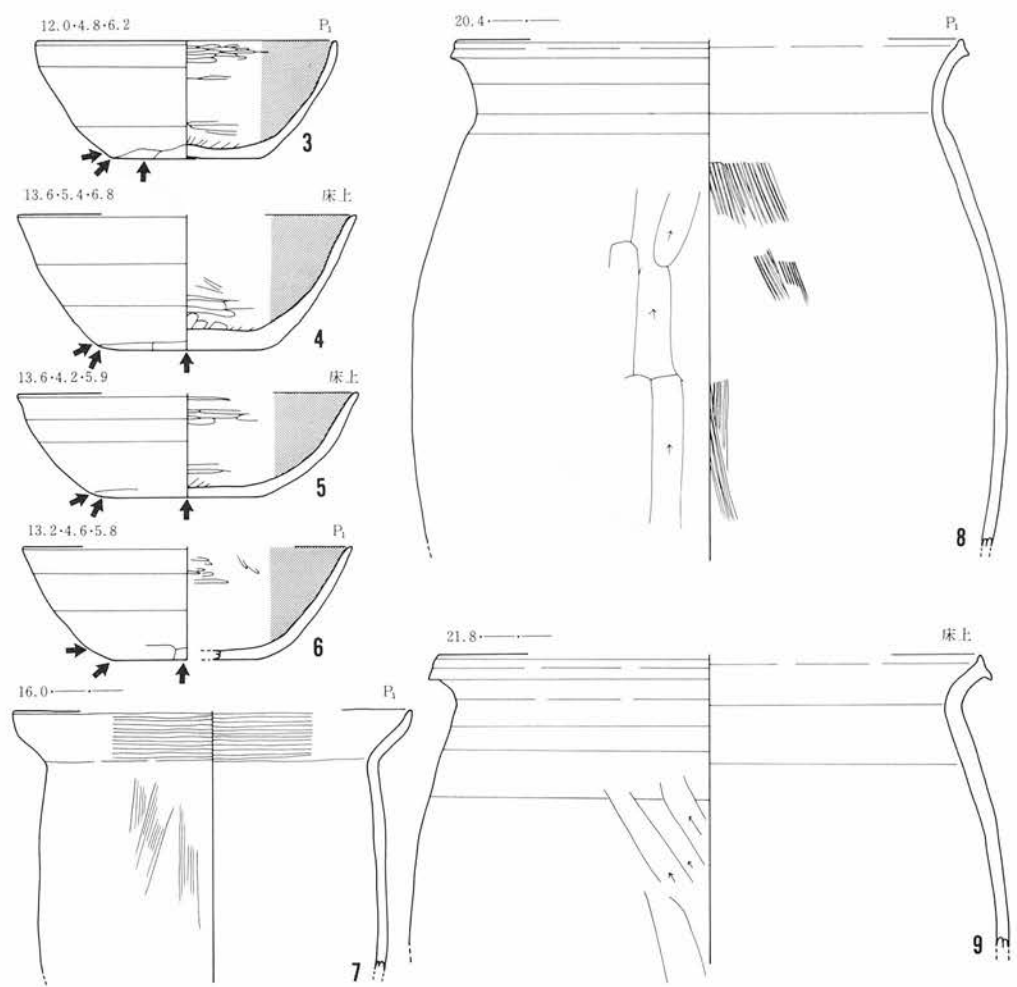
L-1 住居址



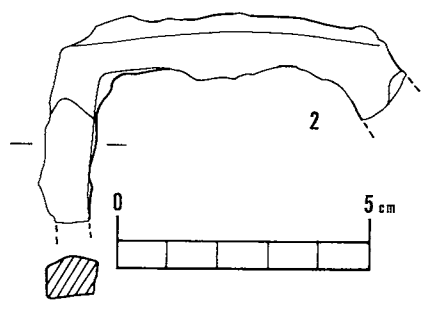
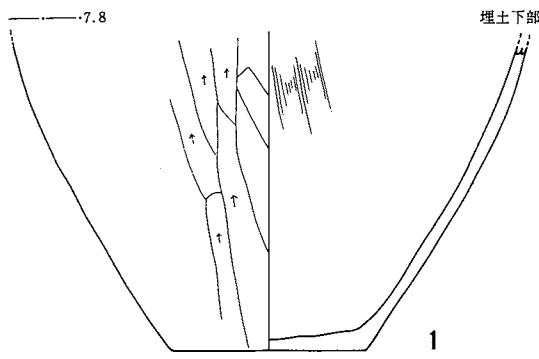
第32図 出土遺物(J-5 住居址・K-2 住居址・L-1 住居址)



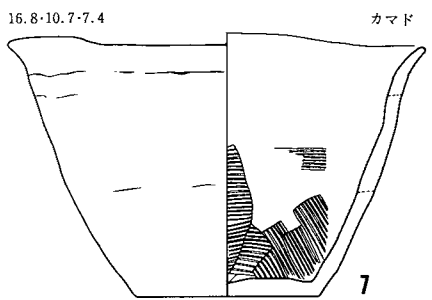
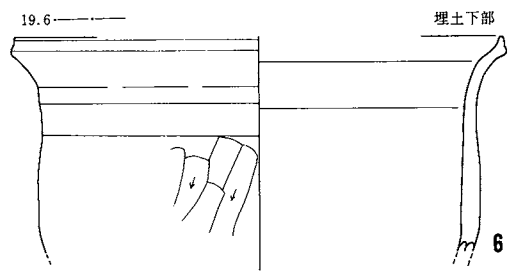
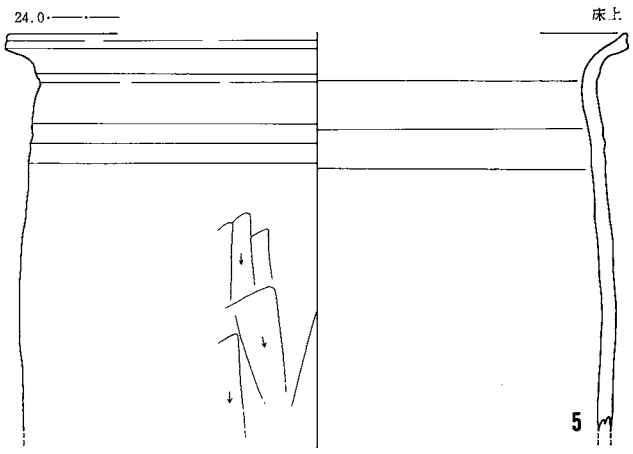
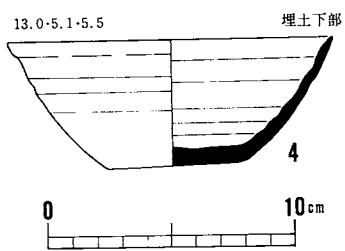
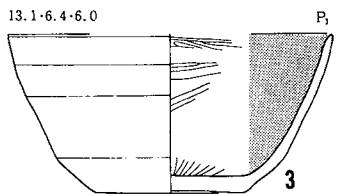
L-2 住居址



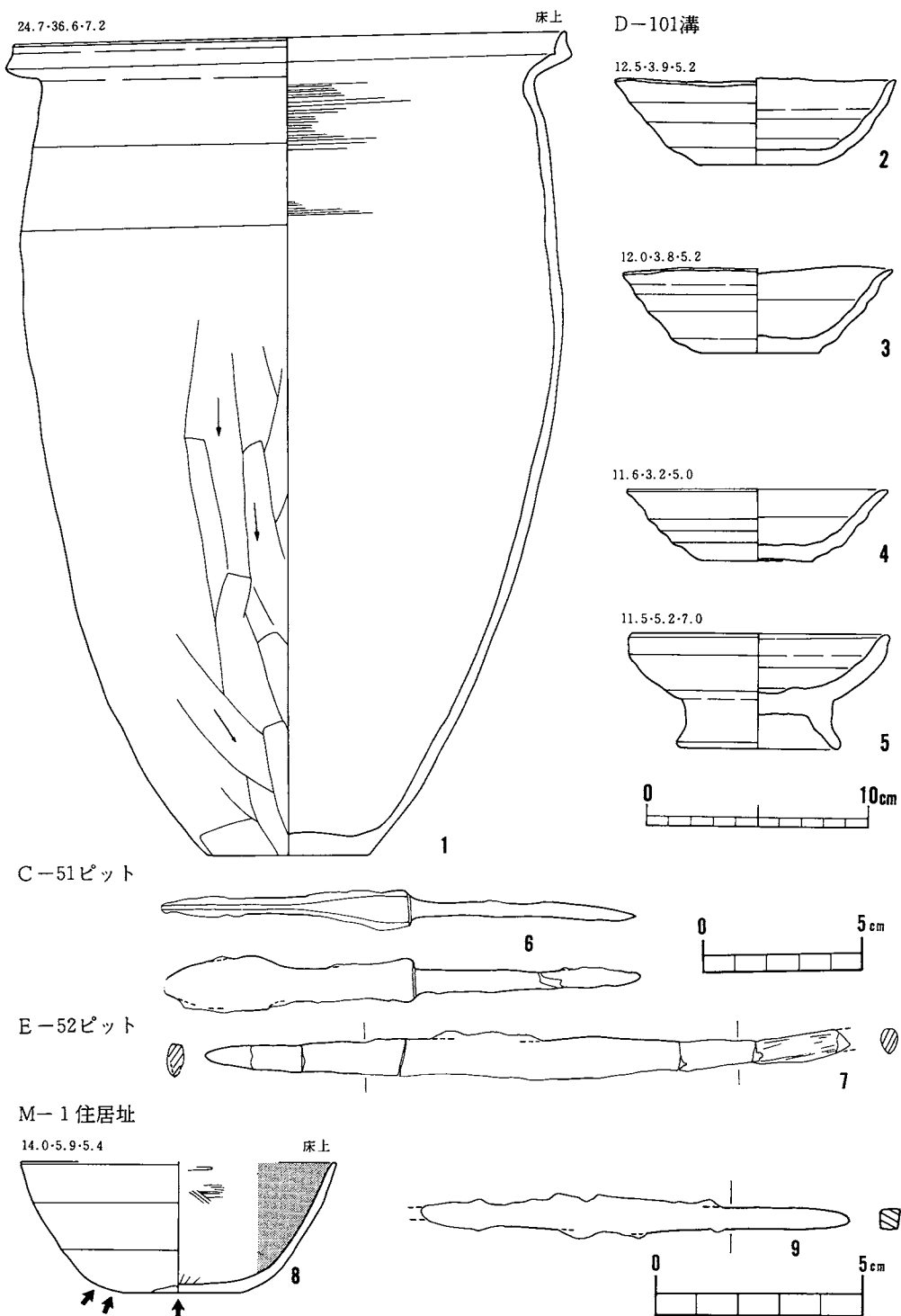
第33图 出土遺物(L-1住居址·L-2住居址)



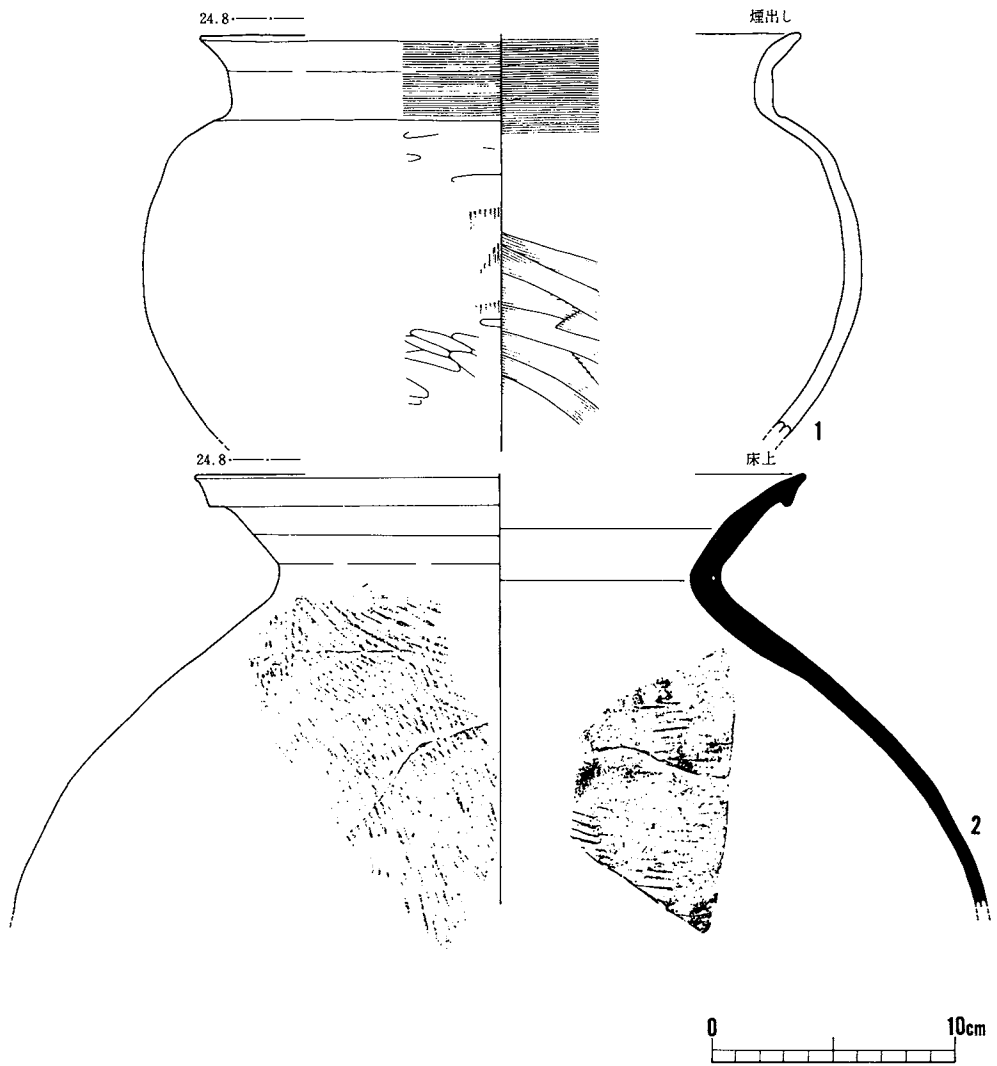
L-3 住居址



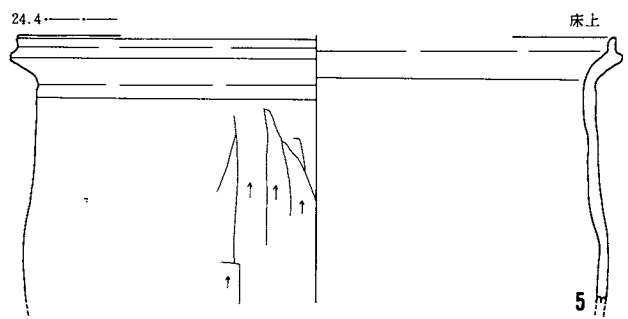
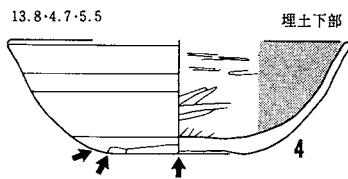
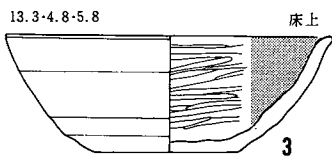
第34図 出土遺物(L-2住居址・L-3住居址)



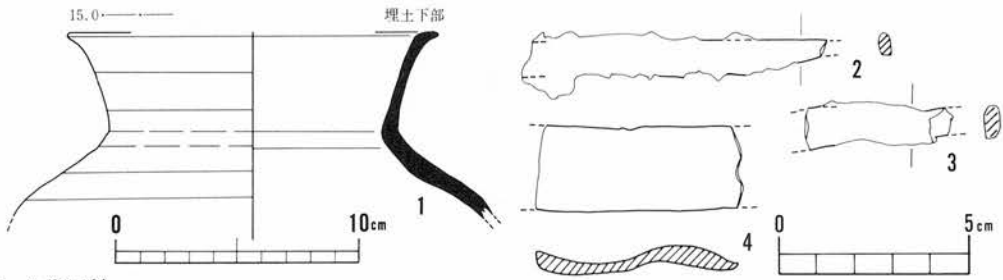
第35図 出土遺物(L-3住居址・M-1住居址・C-51ピット・E-52・D-101溝)



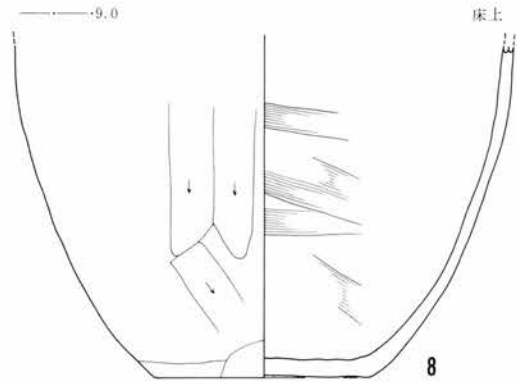
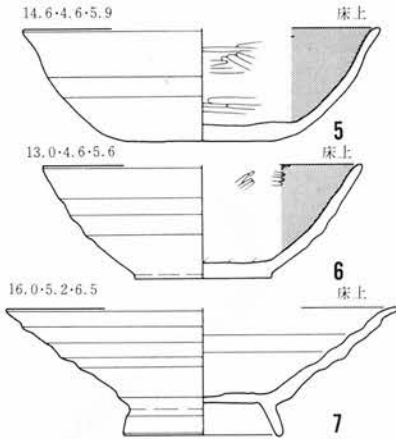
M-2 住居址



第36図 出土遺物(M-1住居址・M-2住居址)

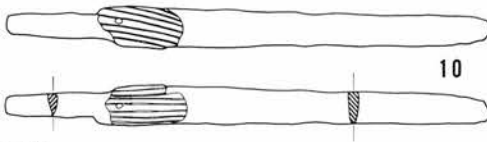


M-3 住居址

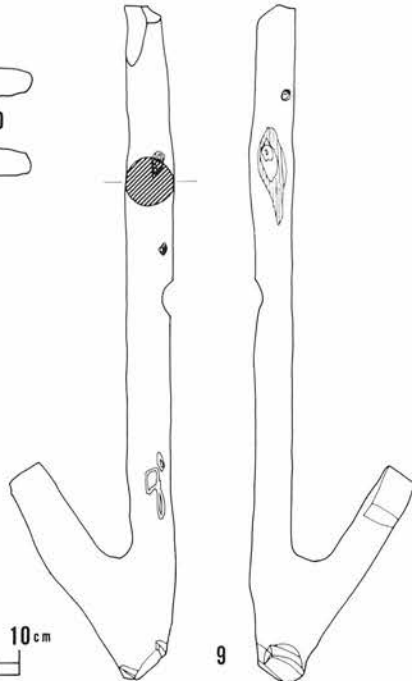
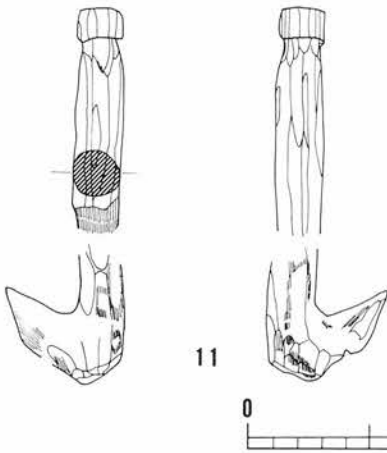


D-52 井戸址

I-52 井戸址

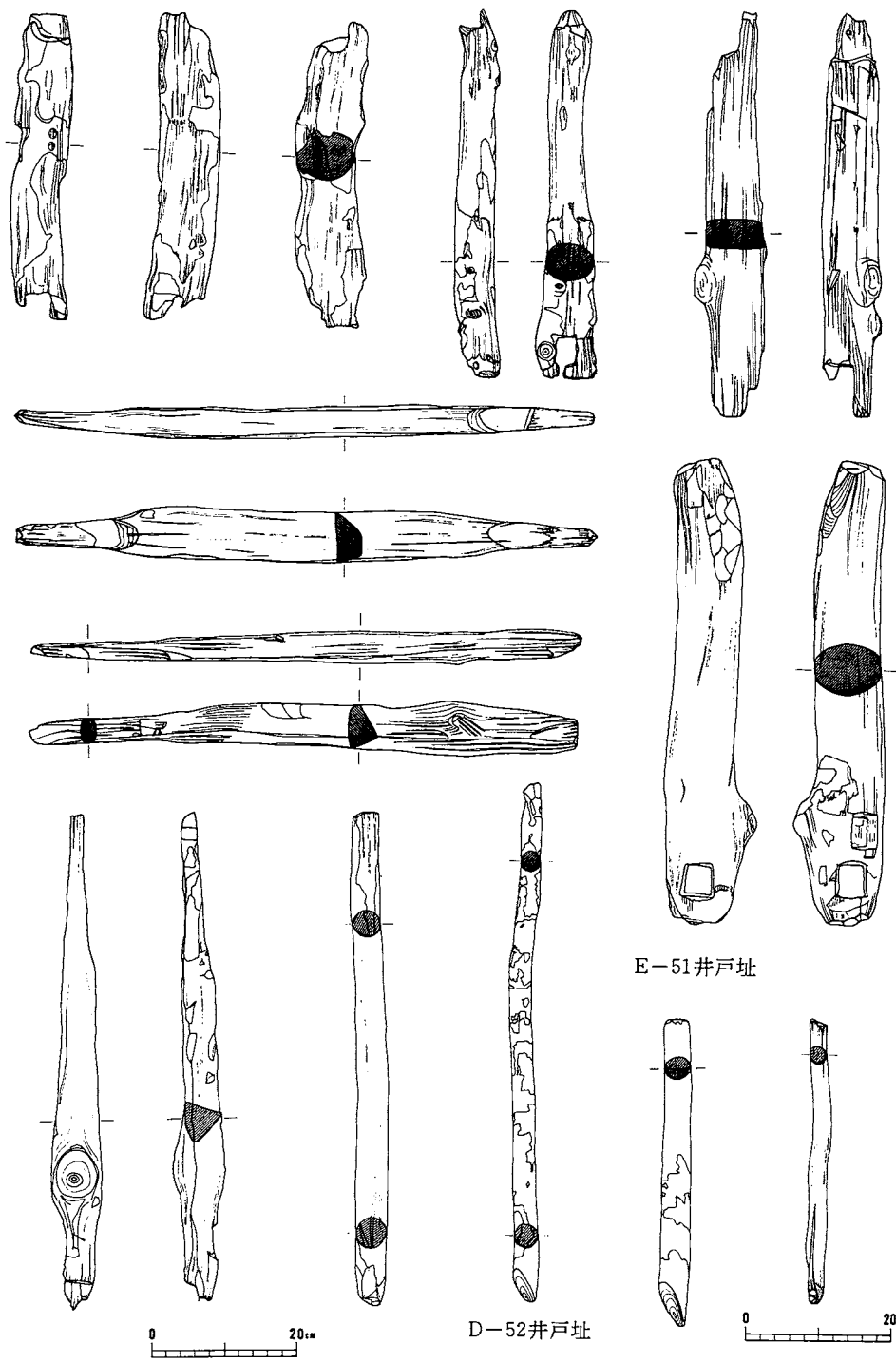


K-52 井戸址

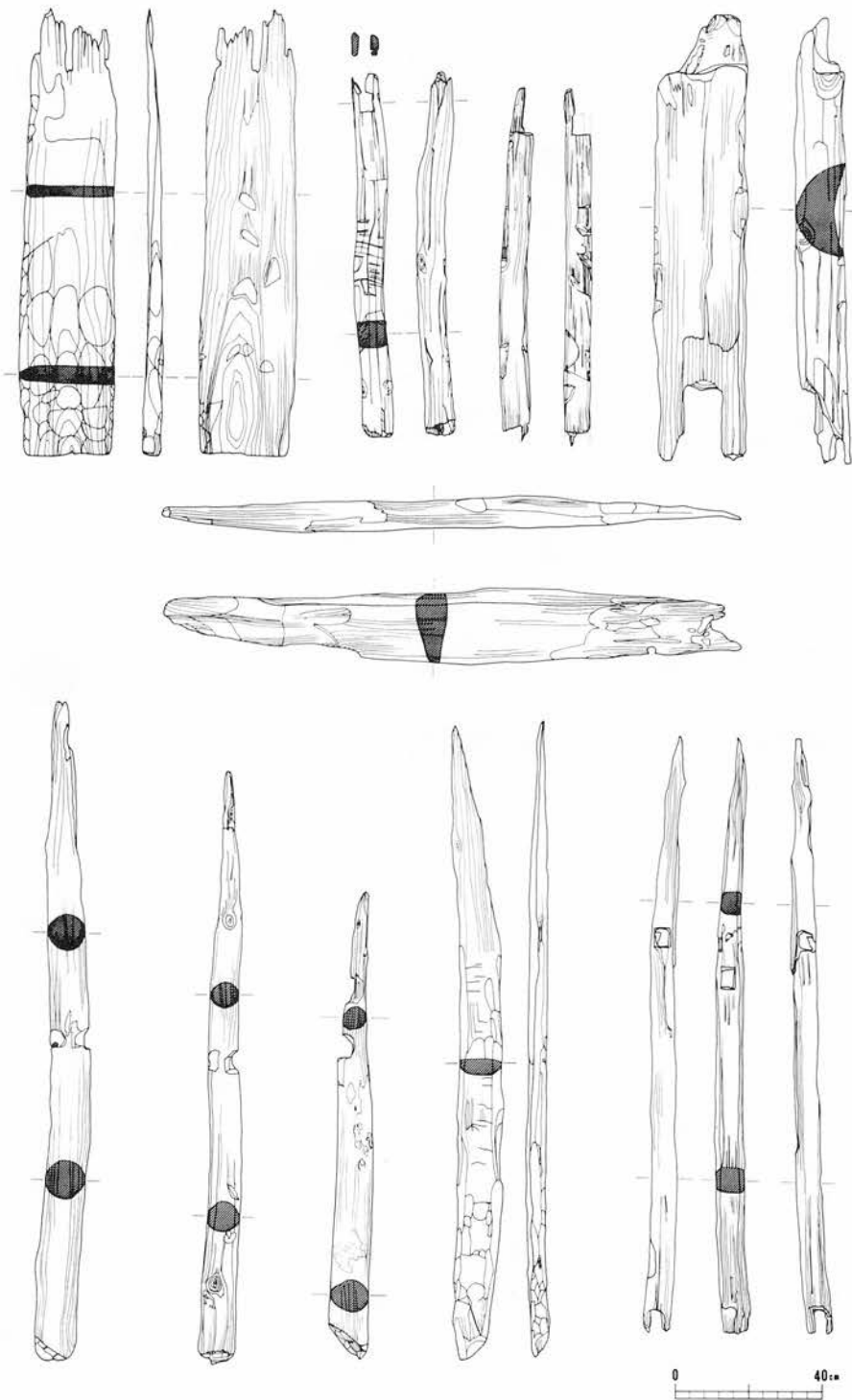


第37図 出土遺物(M-2住居址・M-3住居址・D-52井戸址・I-52井戸址・K-51井戸址)





第38图 D-52井戸址·E-51井戸址井筒材実测图



第39图 I-52井戸址井筒材実測図

## V. 朴の木遺跡

遺跡所在地	江刺市愛宕字朴ノ木
調査期間	昭和53年9月18日～10月17日
調査対象面積	1,440m <sup>2</sup>
発掘面積	1,440m <sup>2</sup>

# 1. 検出された遺構と遺物

## (1) 竪穴住居址

### A 区

#### A-1 住居址

##### 遺 構 (第1図・写真図版97b)

後代の揚水施設や堆肥用ピットによる攪乱を受けており、南壁側は存在しないし、カマド周辺もはっきりしなかった。北壁で4.5 m±の長さを計る方形の住居址と推定できる。埋土は、3層で構成される。a層は、焼土、炭化物を含む褐色シルトである。b層は、a層より混入物が多い暗褐色砂質シルトである。c層は、混合物が少なくなり砂質分が濃くなった褐色砂質シルトである。床直上で炭化物を多量に含んだ層厚2 cm±の暗褐色砂質シルトが確認できた。壁高は、北壁で30cm±を計る。床面は、かたく締まった砂っぽいシルト面であり小礫が目立った。

ピットは、北壁寄りに2個検出された。P<sub>1</sub> (径36cm±×28cm±、深さ30cm±)、P<sub>2</sub> (径50cm±×34cm±、深さ28cm±)は、柱穴を構成すると考えられる。床面の中央部に不整形の浅い掘り方が検出された。埋土は、焼土、炭化物を多く含んだ黒褐色シルトであり、土器片の混入も多かった。

南東隅に、72cm±×30cm±、60cm±×72cm±の各規模で現地性の焼土部が確認できた。位置的にカマド燃焼部の痕跡と考えられる。攪乱を受けているためカマド各部の詳細は不明である。

##### 出土遺物 (第8図)

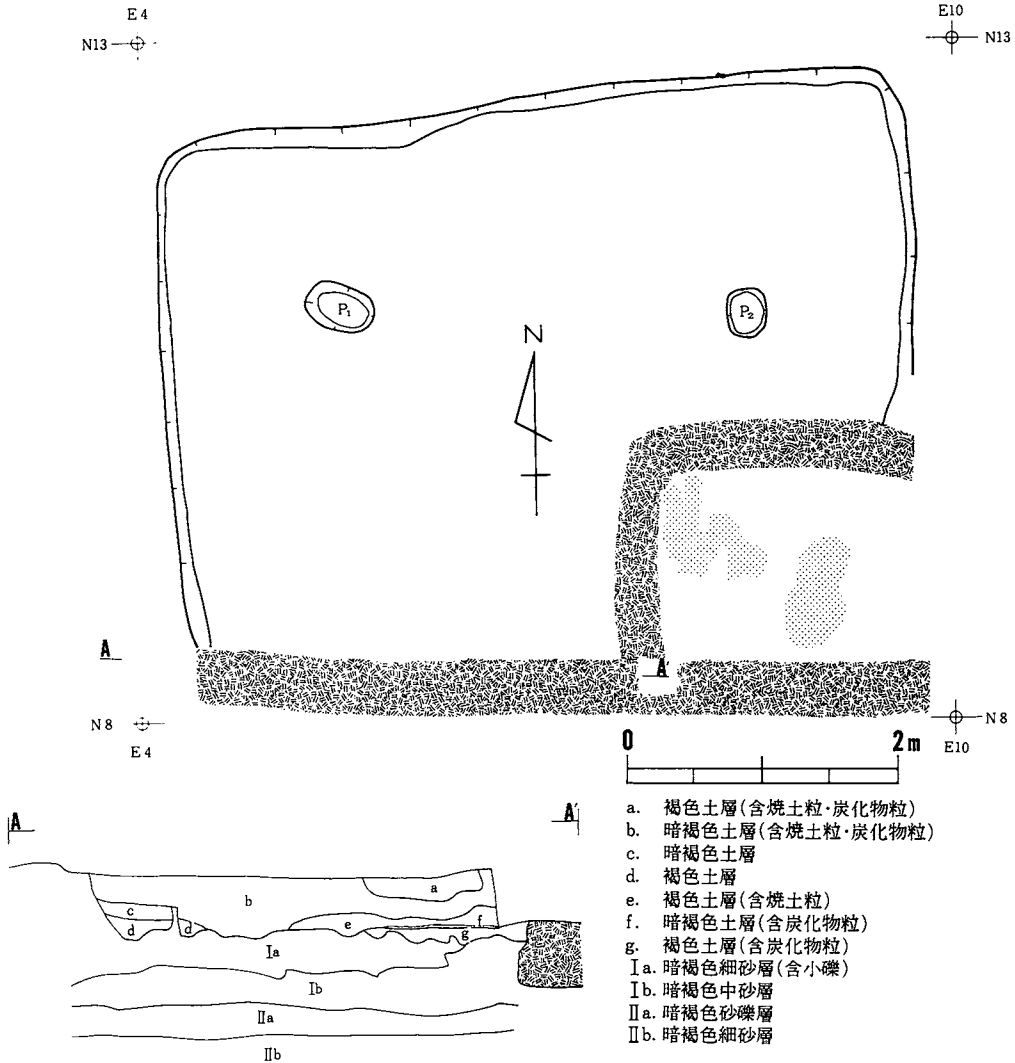
当住居址の遺物は土器と鉄器が出土している。土器は坏と甕だけであり、南東部より出土したものが大半を占める。

坏形土器 (第8図1～3) いずれもロクロ成形による。2は酸化炎焼成で、内面には黒色処理が施こされている。底部には全面回転篋削り調整が施こされているため切り離しは不明 (坏BⅠc類・W<sub>6</sub>手法)。口径の割に器高が高く、体部は内弯気味に立ちあがる。1も酸化炎焼成で内面に篋磨き後黒色処理が施こされている。体部下端と底部全面に手持に篋削りによる再調整が施こされており切り離しは不明 (坏BⅠc類・H<sub>1</sub>手法)。口径の割に器高が高く、体部は直立気味の立ちあがりをもつ。3は還元炎焼成 (坏BⅡ類) で回転糸切りで再調整はみられない。体部は直線的に外傾する。

甕形土器 (第8図4・5) 4は酸化炎焼成で体部上半にロクロ調整がみられる大形の甕である (甕BⅠa類)。口縁部は強く外反し、口唇部を上方に挽き出している。5は底部で外面

には篋削り、内面には撫で調整がみられる。酸化炎焼成である。

鉄製品（第8図6・7） 6は刀子の刃部であり、両端を欠き現存長2.2cmを測る。背は平坦である。7は現存長9.8cmで両端を欠く。一方の断面は方形を呈するが性格は不明。



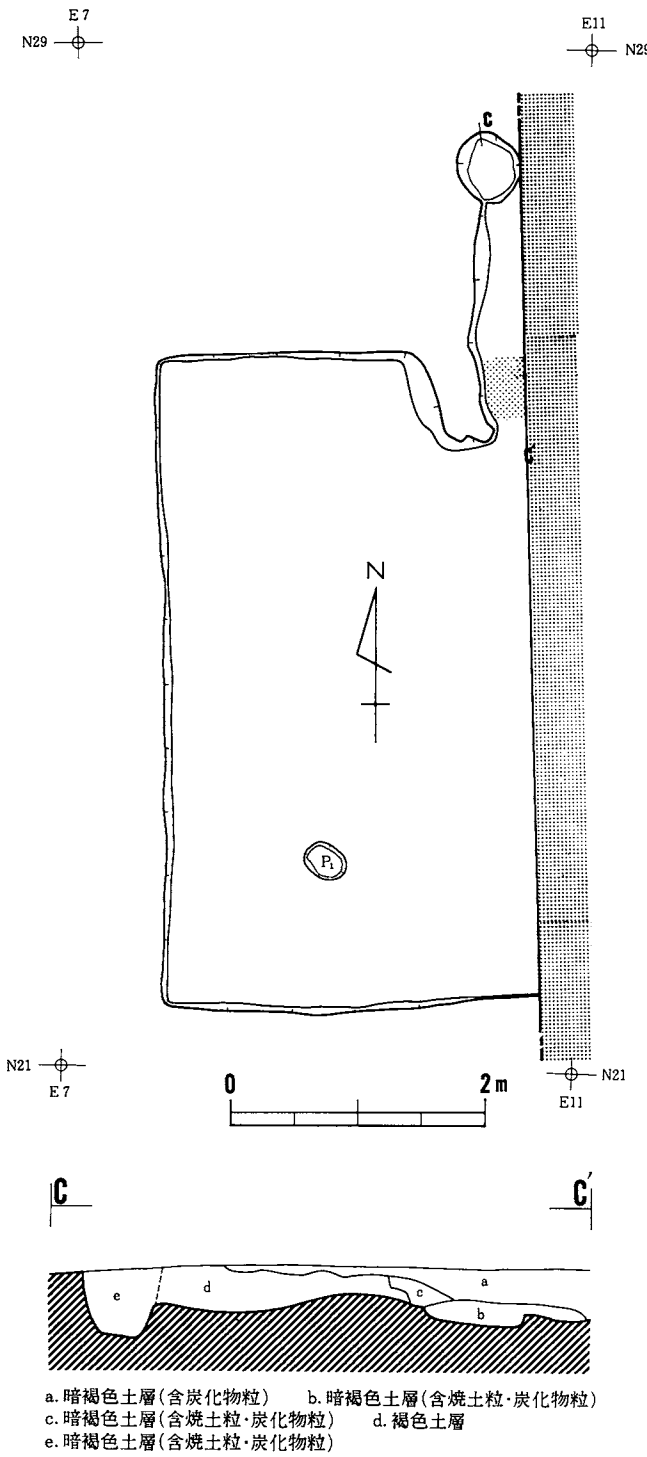
第1図 A-1住居址実測図

B 区

B-1住居址

遺構（第2図・写真図版98a）

この住居址は、砂礫層直上に構築されている。東側半分は調査区域外にある。西壁で5.2m



第2図 B-1 住居址実測図

土の長さを計り、主軸は南北方向にある。埋土の構成は、焼土・炭化物を含み、さらに小礫もまじる砂質シルトの単層である。Field Cardにその性状を記載し、当住居址の土層断面図は、省略した。壁高は、西壁で17cm土を計る。床面は、かたくしまった砂質シルトであり、カマド周辺に坏形土器・甕形土器片が散在していた。カマド前の床面直下は砂礫層になっていることが確認された。

床面でピットを1個検出した。P<sub>1</sub> (径34cm±×28cm±・深さ19cm±)は、南西側にあり砂層を掘り込んでいる。埋土は、焼土・炭化物を含んだシルトで、金雲母も含んでいた。柱穴と考えられるが、対応する柱穴が北西側に検出されていないので断定はできない。

カマドは、北壁にある。調査できた面積からみて、中央より東寄りに位置していると想定できる。カマドの東側半分は、調査区域外にある。天井部は、崩壊していて確認できない。袖部は、小礫を含むシルトで構築されている。燃烧部幅は、33cm±を計り、燃烧部底面はかなり烧成を受けている。煙道部は、北

へ166 cm±延びており、煙道部の底面は平担である。煙出し部は、煙道底面より深さ13cm±掘り込まれたピットである。

#### 出土遺物（第8図・写真図版101 a）

当住居址の遺物は土器と鉄器がみられる。土器は坏と甕だけであり、カマド周辺部からのものが大半を占める。

坏形土器（第8図9～11） いずれもロクロ成形で還元炎焼成による坏で、切り離しは回転糸切りで無調整。器高のやや低いものが多く、体部は外傾する。10はやや屈曲をもって外傾する。

甕形土器（第8図12・13） いずれも酸化炎焼成である。13は上半にロクロ調整の施こされた大形の甕（甕B I a類）で、口縁部は強く外反し、口唇部を上方に挽き出している。12はロクロ水挽きの小形甕（甕B I b類）で口縁部は外反し口唇部を上方に挽き出している。体部は僅かに脹らみを有し、体部にはロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残す。

鉄製品（第8図14） 現存長5.9 cmで断面が方形を呈する。性格は不明。

## C 区

### C-1 住居址

#### 遺 構（第3図・写真図版98 b）

この住居址は、C-101 溝、C-102 溝に切られている。道路下だったため、その大部分は、削平を受けており、床面直上がわずかに残存していたにすぎない。4.8 m±×4.7 m±の規模をもつほぼ正方形の住居址である。主軸は、南北方向にある。埋土は、焼土・炭化物を含む、層厚5 cm±を計る砂質シルトの単層である。Field Cardにその性状を記載するにとどめ、当住居址の土層断面図は省略した。壁高は、東壁で5 cm±を計る。床面は、全体的に露呈した砂礫層面のため、凹凸が目立つ。

東壁ぎわにピットが1個検出された。P<sub>1</sub>（径55cm±×38cm±・深さ13cm±）は、床面を5 cm±掘り下げた地点で検出されたピットである。砂礫層を掘り込んでおり、埋土は、炭化物や粒径1 cm±の焼土を含んだシルトであり、甕形土器片も混入していた。当住居址に伴うピットと考えられる。

カマドは、南壁の西側寄りに位置している。その大部分は、C-101 溝で切られていて、わずかに溝底部に30cm±×14cm±の規模に、燃烧部底面とみられる焼土部分の痕跡を残していたのみである。焼土部周辺に甕形土器片が散在していた。煙道部は、南へ127 cm±延びており、煙道部の底面は平担である。煙出し部は、煙道底面より深さ11cm±掘り込まれたピット

である。

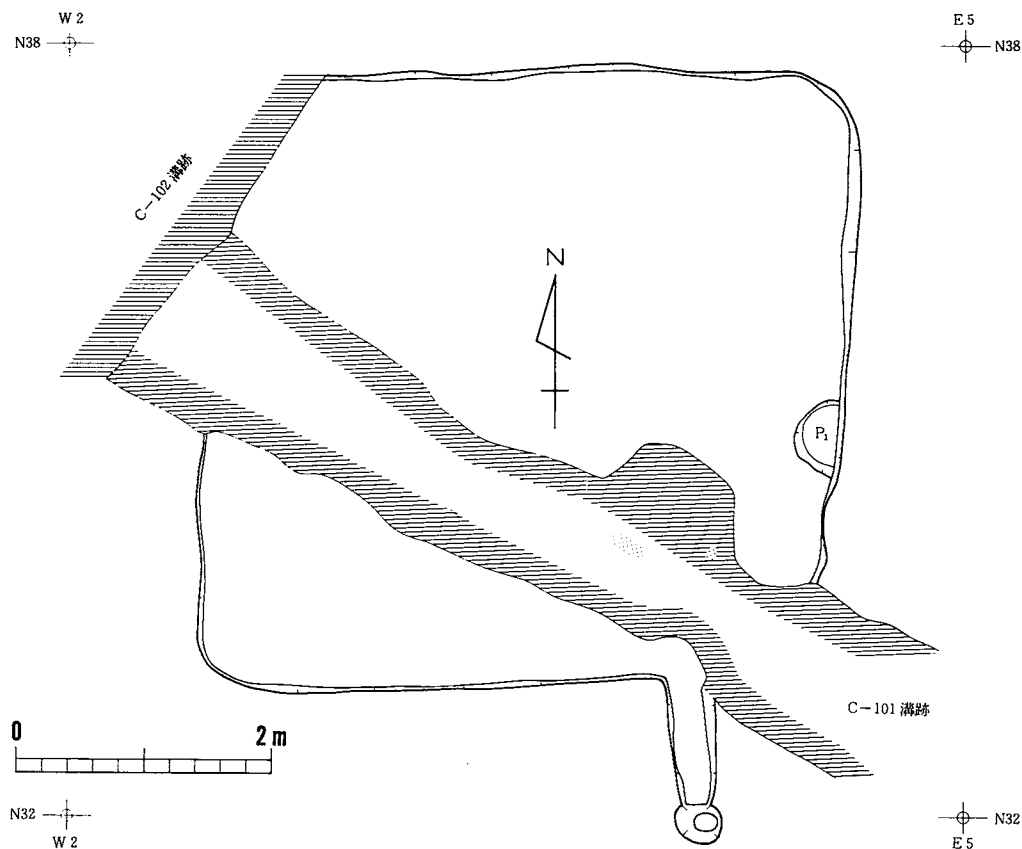
当住居址は、C-101 溝、C-102 溝と切り合っているが、住居址の方が、2 条の溝より古い。

#### 出土遺物 (第 9 図・写真図版101 a)

当住居址の遺物は土器だけである。器種は坏・高台坏・甕よりなり、カマド周辺部とP<sub>1</sub>から多くの出土をみた。

坏形土器 (第 9 図 1・2) いずれもロクロ成形の酸化炎焼成による坏で黒色処理はみられない (坏BⅢ類)。切り離しは回転糸切り。体部は外傾し、ロクロ挽きによる凹凸が明瞭である。

高台付坏形土器 (第 9 図 3) 酸化炎焼成で黒色処理はみられない (高台坏BⅢ類)。坏部口縁を欠損しているが坏部に糸切り痕を有す。高台は高く大きく開く。



第3図 C-1 住居址実測図



甕形土器（第8図4・5） 5はロクロ調整の施こされた大形甕（甕B I a類）で口縁部は短く外反する。内面には撫で調整がみられる。4はロクロ成形の小形甕（甕B I b類）でロクロ挽きによる凹凸を明瞭に残す。

## C-2 住居址

### 遺 構（第4図・写真図版99a）

4.9 m $\pm$ ×4.9 m $\pm$ の規模をもつ正方形の住居址である。主軸は東西方向にある。埋土は焼土・炭化物をわずかに含み小礫もまじる暗褐色シルトの単層である。壁高は、南壁で20cm $\pm$ を計る。検出面より15cm $\pm$ 掘り下げたあたりから砂礫層が面を出しはじめた。床面は、この砂礫層上面の直上と考えられるが、明確にとらえられない。

ピットは、4個検出されている。P<sub>1</sub>（径20cm $\pm$ ・深さ9cm $\pm$ ）、P<sub>2</sub>（径80cm $\pm$ ×95cm $\pm$ ・深さ8cm $\pm$ ）は、南西側に、床面5cm $\pm$ 掘り下げた地点で検出されたピットで、共に浅く、砂礫層を掘り込んで作られていた。埋土は、焼土・炭化物を含むシルトである。P<sub>3</sub>（径65cm $\pm$ ×53cm $\pm$ ・住居址検出面よりの深さ37cm $\pm$ ）、P<sub>4</sub>（径53cm $\pm$ ×46cm $\pm$ ・住居址検出面よりの深さ30cm $\pm$ ）は、南壁を切る形で、住居址の検出とともに確認されたピットである。規模、形状ともに類似しており、埋土の構成も、土器片含みの焼土・炭化物まじりの暗褐色シルトと、共通点があるところから共存したピットと考えられる。また、検出状況から住居址と関連があるとみたい。配置的に柱穴の可能性が考えられるが、北壁寄りに対応するピットの検出がなかったことから、断定はできない。

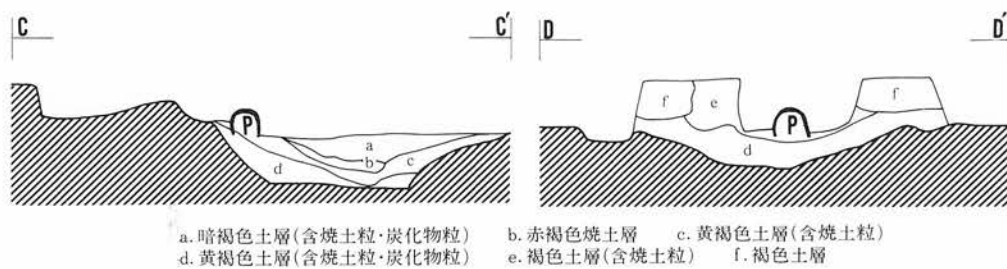
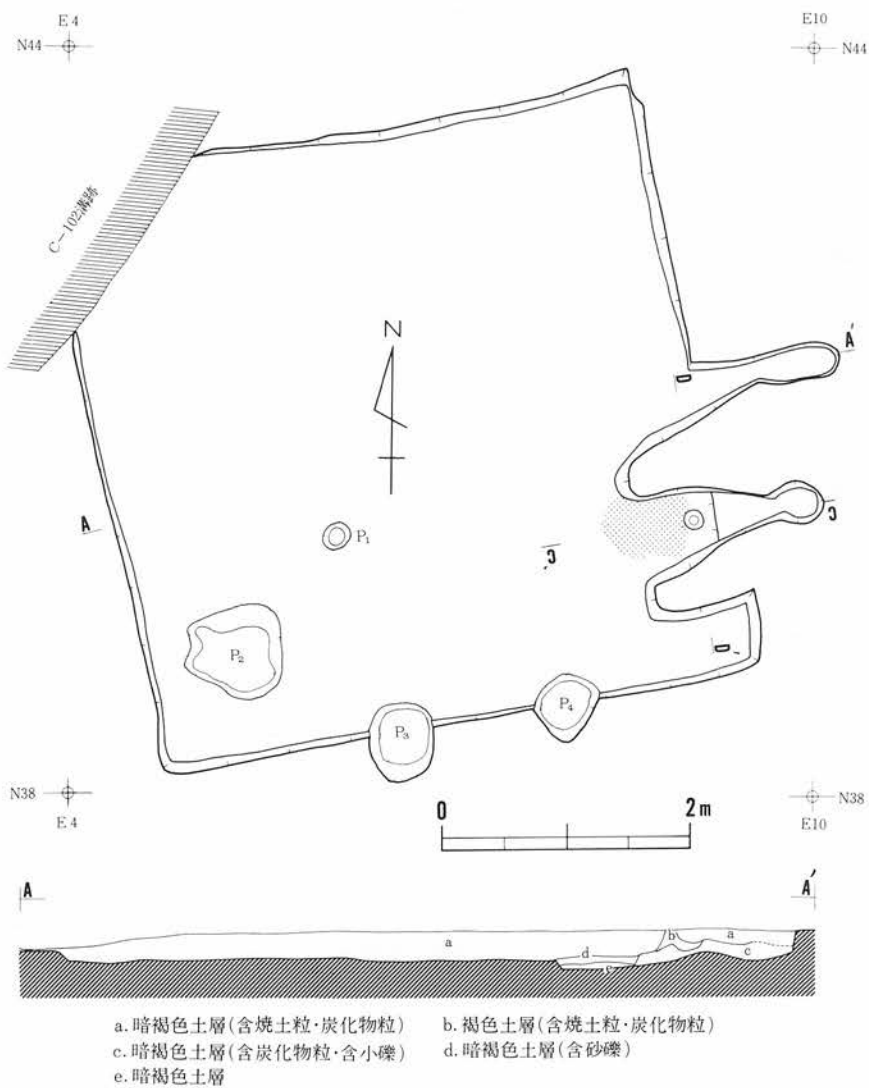
当住居には、2基のカマドが並列して存在する。1号カマドは、東壁の南側寄りに位置している。天井部は、崩壊しており確認できない。袖部は、シルトで構築されている。カマド幅157cm $\pm$ 、燃烧部幅53cm $\pm$ を計る。燃烧部底面は、レベルでは、床面より若干下がっており、強く焼成をうけていた。燃烧部の中央に甕形土器が支脚として倒置されていた。煙道部は、東へ90cm $\pm$ 延びており、煙道部の底面は、煙出し部に向かって、ごくわずかに傾斜して下がっていく。煙出し部は、掘り込まれていず煙道部の底面がそのまま継続している。2号カマドは、1号カマドの北側に並列して位置している。袖部、燃烧部ともに痕跡を残していない。煙道部は、東へ70cm $\pm$ 延びていたと推定される。煙道部の底面は、煙出し部へ向かって漸次傾斜しながら上っていく。煙出し部は、1号カマド同様掘り込みをもたない。2基のカマドの新旧関係は、残存状態から、1号カマドが2号カマドより新しいと考えられる。

当住居址は、C-102溝に切られている。

### 出土遺物（第9図・写真図版101a）

当住居址の遺物は土器のみで、その量も僅少である。図化出来たのは甕形土器だけである。

甕形土器（第8図6～8） 6と7は上半にロクロ調整の施こされた酸化炭焼成の大形甕



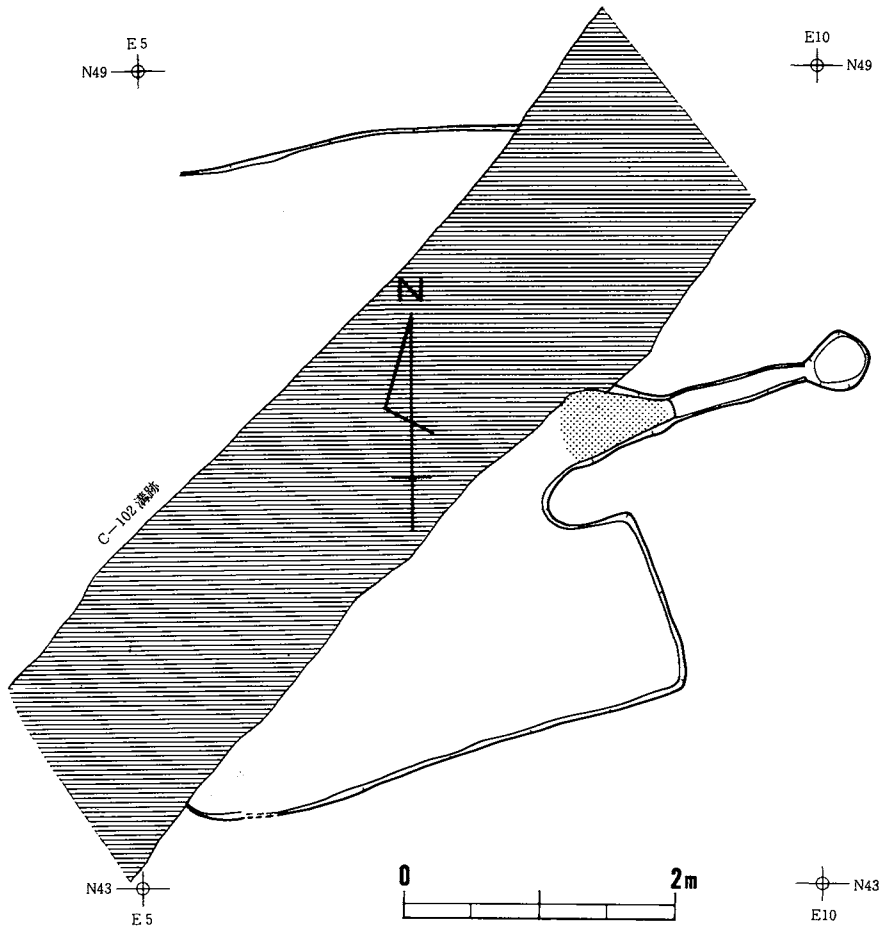
第4図 C-2住居址実測図

(甕 B I a 類) である。口縁部は外反し、口唇部を上方に挽き出している。8 はカマドの支脚に使用されていた土器で全体に器面が荒れている。ロクロ成形で切り離しは回転糸切りで酸化炎焼成の小形甕 (甕 B I b 類) である。外反する口縁部を有し、口唇部を上方に挽き出しており、体部に僅かな脹らみを有す。

### C-3 住居址

#### 遺 構 (第 5 図・写真図版 99 b)

この住居址は、C-102 溝に切られているし、道路によって削平をうけ、床面の西側は消滅していた。住居址の全容は分からないが、東壁で 4.6 m 土を計り、主軸は、東西方向にある。埋土は、焼土・炭化物を少量含む暗褐色砂質シルトの単層である。Field Card にその性状を記載するにとどめ、当住居址の土層断面図は省略した。壁高は、東壁で 14 cm 土を計る。床面は、砂礫層直上と想定されるが、はっきりしなかった。ピットの検出は、みなかった。



第 5 図 C-3 住居址実測図

カマドは、東壁の中央部に位置している。袖部は、砂質シルトで構築されている。袖部の北側半分は、C-102溝で切られ、残っていない。燃烧部も焼成を受けた痕跡は残っていない、直接砂礫層が露呈していた。煙道部は、東へ152cm±延びている。煙道部の底面は、砂礫層で凹凸がありしまっていて、煙出し部に向かって、ごくわずかに傾斜して上っていく。煙出し部は、煙道底面より深さ17cm±掘り込まれたピットである。

当住居址は、C-102溝と切り合っているが、住居址の方が古い。

#### 出土遺物（第9図）

当住居址の遺物は極めて僅少であり、図化出来たのは甕形土器1点だけである。

環形土器はロクロ成形と思われる内面黒色処理の施こされたものが数点みられるだけである。

甕形土器（第8図9） 上半にロクロ調整の施こされた酸化炎焼成の甕（甕B I a類）である。口縁部は短く外反し、口唇部を上方に挽き出している。体部外面には下方向への篋削り調整がみられる。

## (2) 溝 跡

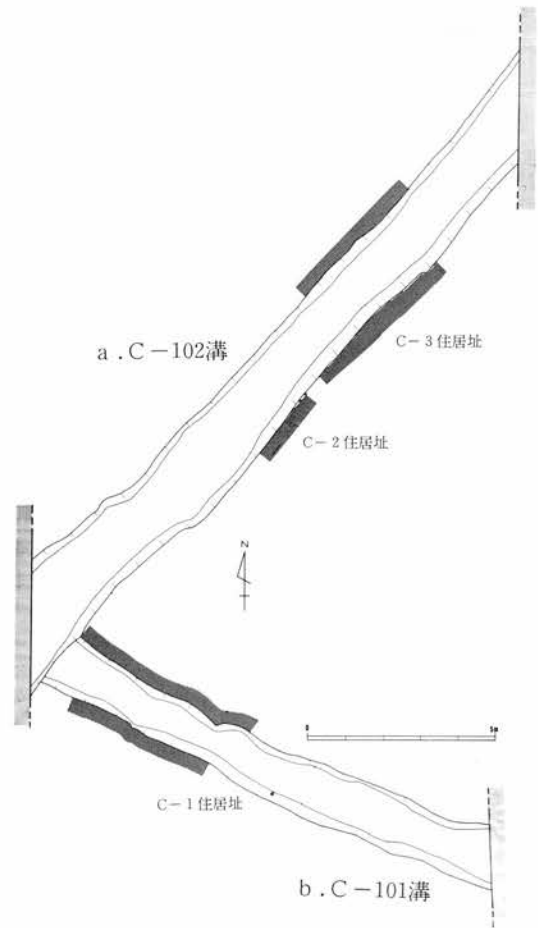
### C-101溝（第6b図・写真図版101b）

C-1住居址、C-102溝と重複しており南東～北西方向に走っている溝である。上幅145cm±、底部幅93cm±を計るが、深さは、12cm±と浅い。埋土は、炭化物を少量含むかなり黒っぽい砂利まじりの暗褐色シルトである。遺物は、住居址との切り合い部分でのみ出土していることから、住居址に付属するものと考えられる。壁は、緩傾斜している。底面は、凹凸があり、不明瞭であったが、砂礫層上面とみられる。底面の北側が一段低くなっているのが確認された。

当溝は、C-1住居址を切っており、C-102溝に合流している。

### C-102溝（第6a図・写真図版101b）

C-1住居址、C-2住居址、C-3住居



第6図 溝跡実測図

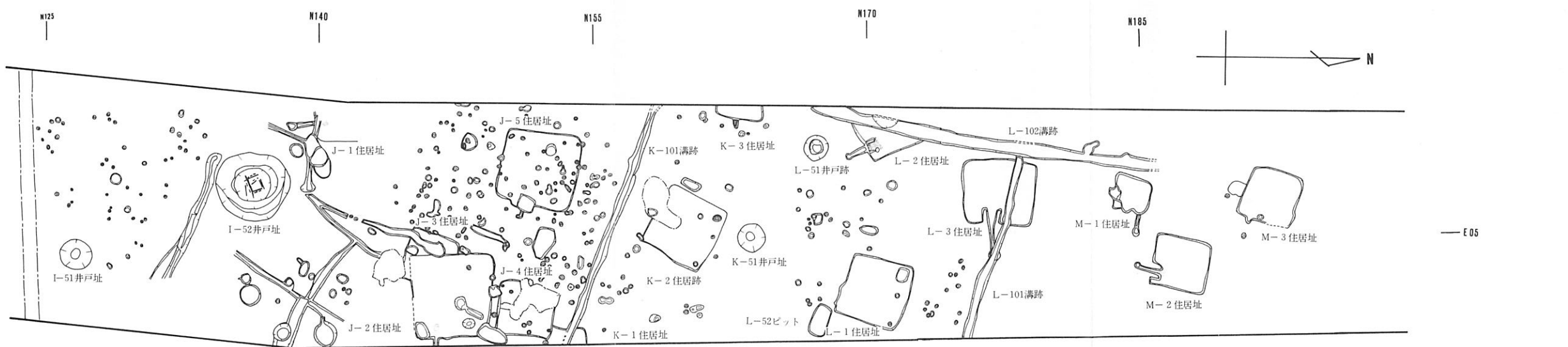
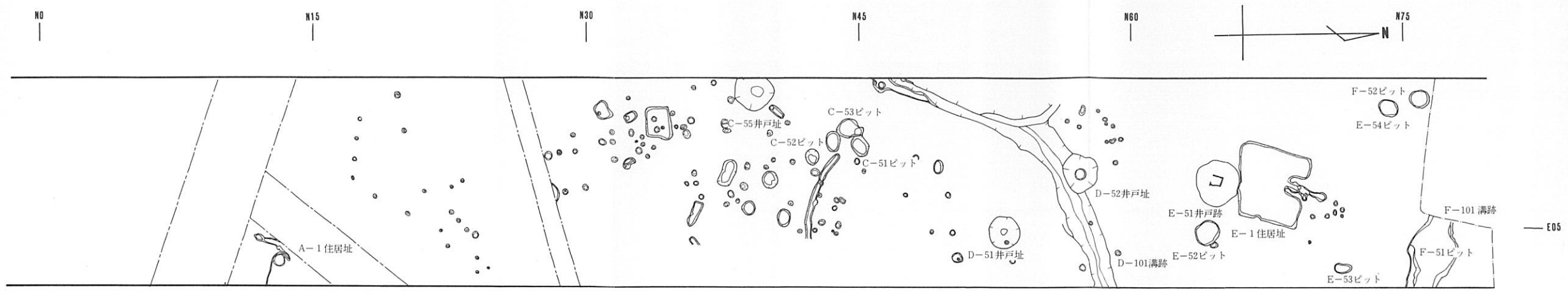
址、C-101 溝と重複しており、北東～南西方向に走っている溝である。上幅 174 cm±、底部幅 124 cm±、深さ 24cm± を計る。断面は、倒立等脚台形状を示している。埋土は、焼土・炭化物を少量含む砂質シルトで部分的に多くの砂礫が混入していた。壁は、かなり傾斜している。底面は、砂礫層上面とみられる。C-101 溝の底面より低い。遺物は、土器細片を少量含んでいたにすぎない。

C-1 住居址、C-2 住居址、C-3 住居址、を切っている。

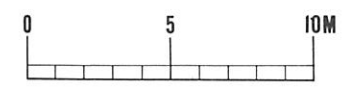
## 2. ま と め

朴ノ木遺跡は東西に細長い小さな微高上に在る。今回の調査で検出された遺構は竪穴住居址 5 棟と溝跡 2 条であり、竪穴住居址はすべて平安時代前半に属するものである。

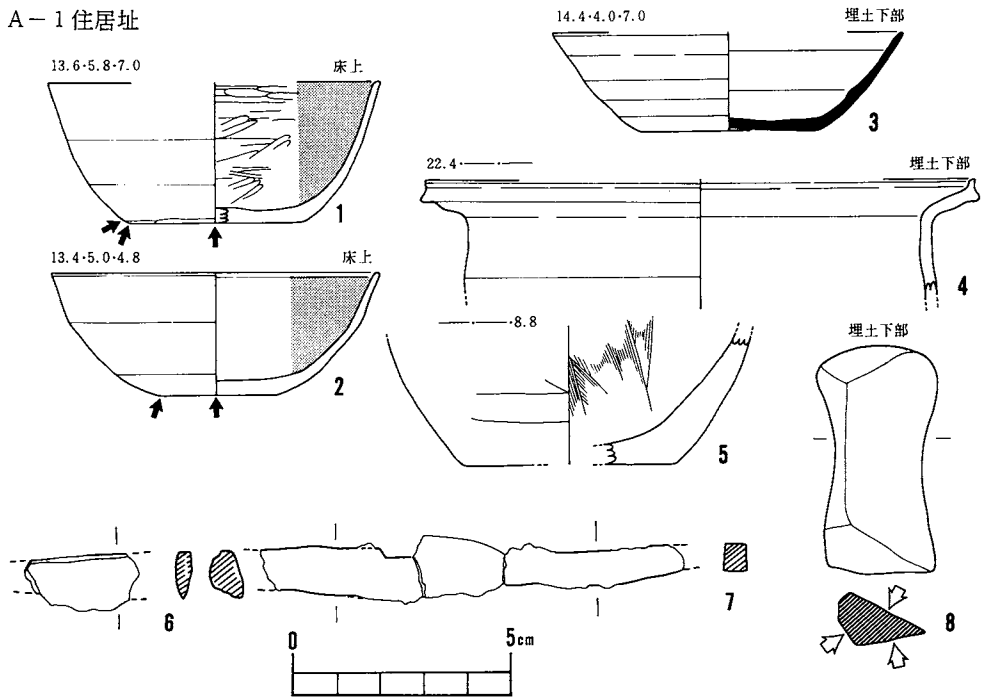
今回調査の対称となった微高地は当遺跡のような小さなものを含めすべて遺構が確認され、しかもその大半は平安時代前半に属するものである。弥生時代以降奈良末までの空白をどう考えるか、平安初頭の急激な集落の増大の背景をどのように考えるか多くの問題が残っている。当地方への律令制の浸透と深く関わると思われるが、今後沖積地全域からみた総合的な研究が望まれる。



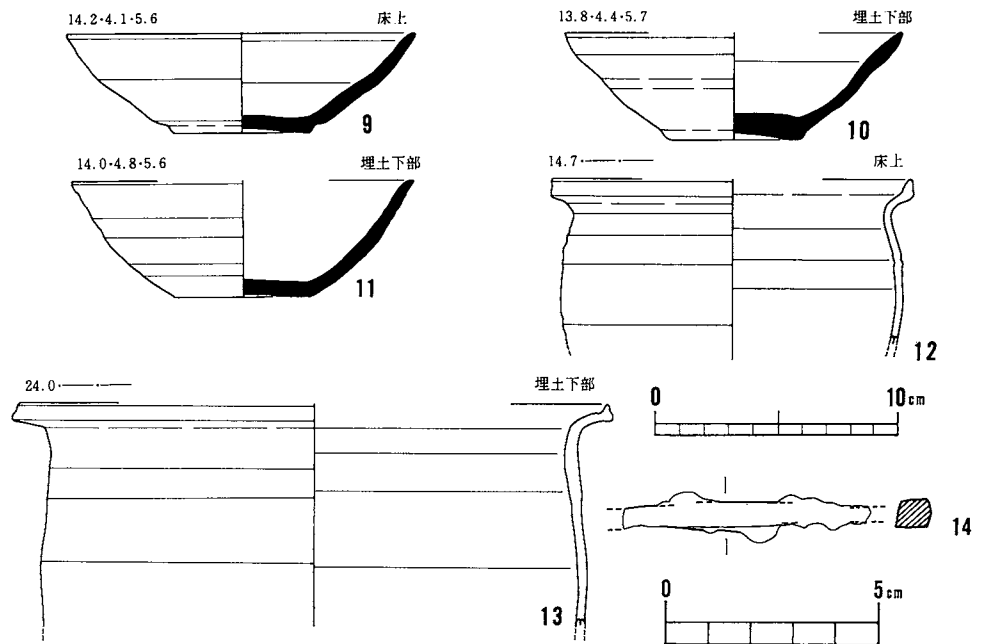
第25図 落合Ⅲ遺跡遺構配置図



A-1 住居址

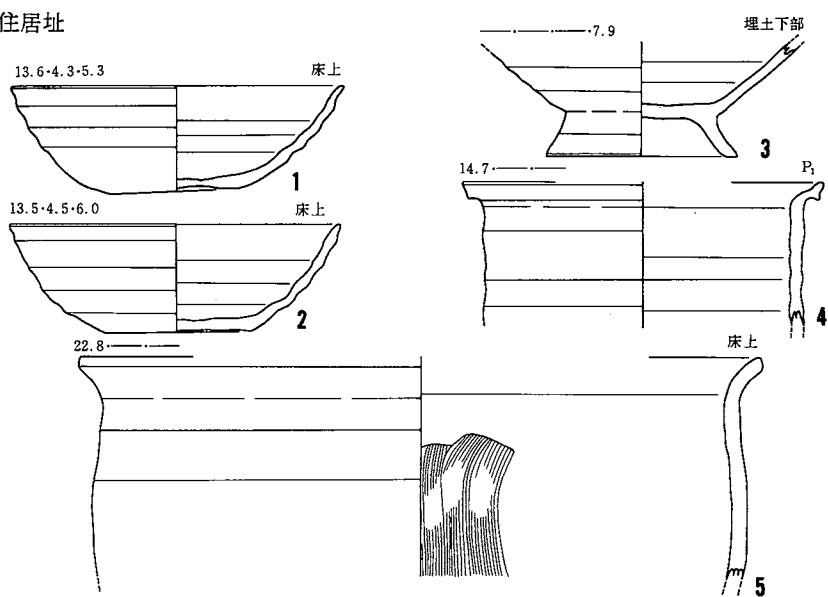


B-1 住居址

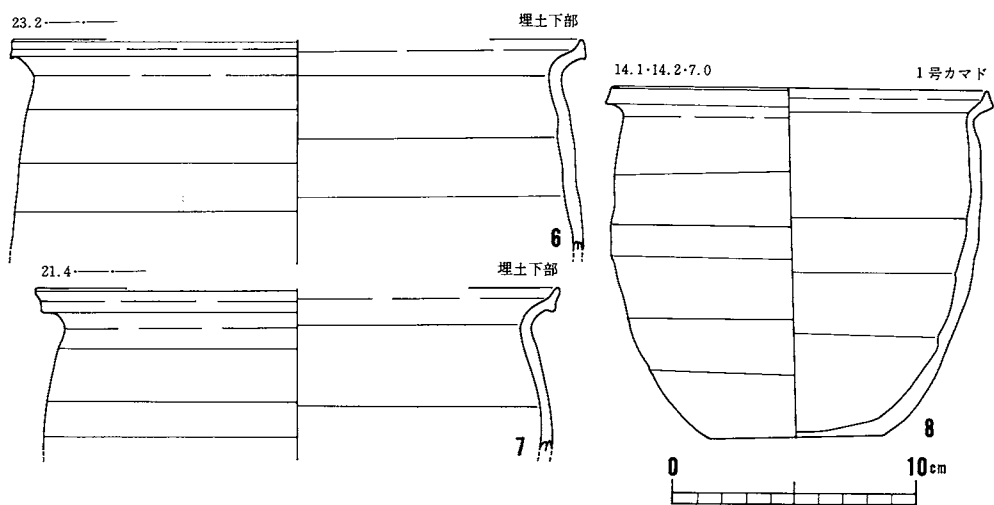


第8図 出土遺物(A-1住居址・B-1住居址)

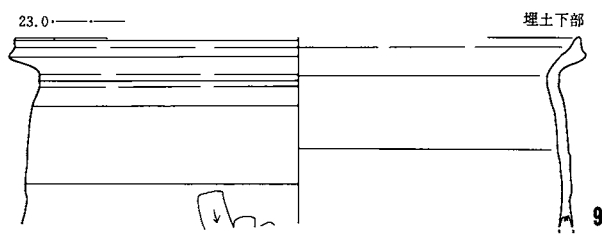
C-1 住居址



C-2 住居址



C-3 住居址



第9図 出土遺物(C-1住居址・C-2住居址・C-3住居址)



## VI. 遺構と遺物に関する予察

# 1. 竪穴住居址

検出された竪穴住居址（以下、略して住居址とする）は、土器の分類と組み合わせから、第Ⅰ期～第Ⅲ期の3時期に大別される。さらに住居址間の新旧関係も含め、第Ⅱ期はa～c群の計4群に、第Ⅲ期はa・b群の2群に細分できる。それらの群は時間的な先後関係にあり、しかも連続する、という仮説にたつものである。したがって集落の存続を最大7時期にわたるものとみることができる。

今回の調査は道路改修工事に伴うもので、遺跡を縦断してはいるものの、調査区域幅は11m土と狭い限定されたものであった。したがって、住居址をはじめ多数の遺構が検出されたにもかかわらず、それらの有機的な関連性が明らかでなく、「集落」の構造・構成の解明への接近に強い制約がくわった。そこで本稿では、個々の住居址の構造にかかわる遺跡別・時期別のおもな特性を明らかにすることに主眼をおいた。なお、土器の分類と組み合わせによる時期区分の詳細は、後述の「奈良～平安期の土器」の項に記載しているので、ここでは反復をさけた。

## (1) 力石Ⅱ遺跡

検出された住居址の総数は29棟である。完掘できたのは16棟で、他は住居址の一部あるいは大部分が調査区域外にある。

第Ⅰ期に属するのはC-1住居址だけである。

第Ⅱ期a群に属するのはB-2住居址とC-6住居址の2棟である。

第Ⅱ期b<sub>1</sub>類に属するのはB-3・C-3・C-4・D-2・E-2・H-2・I-1・K-1の各住居址で、計8棟を数える。

第Ⅱ期b<sub>2</sub>群に属するのはB-1・C-5・D-1・J-1の各住居址で、計4棟を数える。

第Ⅱ期c群に属するのはA-1・E-1・F-1・H-1の各住居址で、計4棟である。しかしすべての住居址の残存状態が不良なことや一部分の調査で、時期決定資料とした土器の出土も僅少である。

第Ⅲ期a類に属するのはC-2・F-2・G-3の各住居址である。

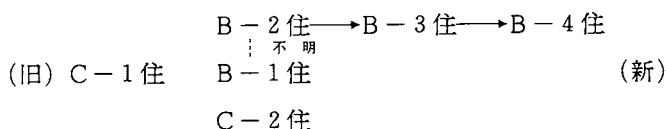
第Ⅲ期b類に属するのはB-4住居址だけである。

分類できなかった住居址は6棟ある。E-3・F-3・G-1・G-2・I-2・I-3の各住居址である。

最初に、住居址の分布をみてみたい。便宜上、微高地南端近くに検出されたA-1住居址からL-101溝までの160m±の間を3等分し、南部・中央部・北部とした。さらにそれぞれを

3等分し、南側・中央・北側とした。第Ⅰ期は南部中央に1棟があるだけである。第Ⅱ期a群の2棟は南部中央に存在する。第Ⅱ期b<sub>1</sub>群の住居址はもっとも広範囲に分布し、全域にわたって適当な間隔をもって存在する。第Ⅱ期b<sub>2</sub>群の4棟は、南部南側～中央に3棟、北部中央に1棟が存在する。第Ⅱ期c群の住居址は南部南側～中央部北側付近に分布する。第Ⅲ期にはいるとa群では南部中央に1棟、中央部中央～北側に2棟、b群では南部南側に1棟が存在する。

以上のように調査範囲の全域にわたって住居址が分布するが、もっとも密に存在するのは南部南側から中央部にかけての範囲で、全時期を通しての住居址が存在し、重複関係も多い。新旧関係を図示すると次のようになる。



C-2住居址はさらにC-3住居址を切っている。以上の新旧関係は、土器の分類・組み合わせによる時期区分の新旧関係に適合するものである。

住居址の分布からは、第Ⅱ期b<sub>1</sub>群の時期に前の時期に比して住居址の個数が急激に増加するとともに集落範囲の拡大があり、力石Ⅱ遺跡の全時期を通じてのピークにあったことが考えられる。そして、第Ⅱ期b<sub>2</sub>群～第Ⅲ期a群の時期まで第Ⅱ期b<sub>1</sub>群よりはやや縮少するものの比較的規模の大きな集落が営まれ、第Ⅲ期b群に入ると縮少化し消滅してしまうことが考えられる。

住居址の平面での形状は正方形あるいは正方形を基本としながらもやや不整なもの・長方形の3種類があり、前2者が数的には多い。規模が判明したもの15棟、一辺の長さがわかるものは11棟あり、残りの3棟は不明であった。規模の判明したもののうち、長辺3.5m±～4.5m±×短辺2.8m±×4.0m±の範囲に大部分の12棟が分布する。第Ⅱ期c群を除いた全時期の住居址が含まれ、第Ⅰ期および第Ⅱ期a群・第Ⅲ期の全住居址が該当する。長辺5.2m±～5.6m±×短辺4.9m±～5.5m±の範囲に分布するのは、第Ⅱ期b<sub>1</sub>群2棟とb<sub>2</sub>群1棟の計3棟である。

以上のことから、第Ⅱ期b<sub>1</sub>群・b<sub>2</sub>群の時期には、相対的なものであるがやや大規模な住居址が小規模な住居址と混在する傾向が認められる。一辺の長さが判明している住居址にも同様の傾向をみることができる。第Ⅱ期c群の住居址で一辺の長さが判明しているものは3棟あり、3.5m±～5.4m±の範囲に含まれ、傾向としては第Ⅱ期b<sub>1</sub>群・b<sub>2</sub>群に近いものと考えられる。

次にカマドについて述べる。完掘できた住居址16棟のうち13棟がカマドをもつが、2棟には検出されなかった。また、G-1住居址はG-2住居址に切られており、存在の有無が不明であった。カマドをもつ13棟のうちわけは、1基もつもの8棟・2基もつもの2棟・3基もつもの

の2棟・4基もつもの1棟である。カマド総数22基で、東壁に位置するもの（東カマド）10基・南壁に位置するもの（南カマド）8基・北壁に位置するもの（北カマド）4基である。複数のカマドを有する住居址については最終的に使用されたカマド1基をその住居址を分類した時期に伴うものと考え、さらに、部分調査ではあるがカマドが検出され時期分類が可能であった住居址も含めた時期別のカマド方向は、次のようになる。第Ⅰ期は北カマドをもつ。第Ⅱ期a群は2棟とも東カマドをもつ。第Ⅱ期b<sub>1</sub>群では南カマドをもつもの5棟・東カマドをもつもの2棟・北カマドをもつもの1棟である。b<sub>2</sub>群では2棟が東カマドをもつ。c群では東カマド・西カマドをもつものが各1棟ある。第Ⅲ期a群では2棟が南カマド、b群になると東カマドをもつ。

これらのことから、時期によりカマド方向は移行する傾向があることが指摘できる。しかし、とくに第Ⅱ期b<sub>1</sub>群ではカマドは単一方向ではなく方向のばらつきがみられる。また、2基のカマドをもつD-2・K-1の各住居址は第Ⅱ期b<sub>1</sub>群に属するが、北→東・東→北へとまったく逆の移行を生じている。I-3住居址も第Ⅱ期b<sub>1</sub>群に分類されるが、3基のカマドは東→南（2基）へと移行する。もちろんカマドの方向は単に時期区分で律しきれものではなく、集落の構造・構成の問題としてこそアプローチされるべきものであるが、調査の制約上、上述の傾向性があることを指摘するにとどめたい。

カマドは、残存する袖部の観察では、“地山”と同様の（明）黄褐色シルトで構築される。“地山”との識別が困難であったため確実なことはいえないが、袖部を削り出して作られたものはない。一部では袖部に甕形土器・礫をもちいて補強用としている。壁外に煙道部をもつものが大多数である。煙道部はトンネル状に掘り抜いた形態のものはみられず、いずれも溝状に掘りあげ、それに上部施設をもうけたものであろう。20基での煙出し部まで含めた煙道部の平均長は130cm±である。煙道底面は先端へゆるやかに傾斜して下がるかあるいはほぼ水平で、それよりわずかに深いピットを掘りこんで煙出し部にするのが一般的である。煙道部をもたない形態のカマドの確実な存在は、C-4・C-6の各住居址に知られるだけである。カマドが構築される壁での位置は、北カマドは中央部～東寄り、東カマドは中央部～南寄り、南カマドは中央部～東寄りが一般的で、しかも一方によった位置に構築されるのが大部分である。ただし東カマドでは北寄りの例が2例知られる。西カマドをもつのはF-1住居址だけであるが、西壁南寄りに位置している。カマドの構造・構築方法における時期別の特徴は認められない。

時期区分できた住居址23棟のうち、柱穴をもつものは10棟である。第Ⅱ期b<sub>1</sub>群～第Ⅲ期a群の住居址のほかはみられない。しかし、他の時期は検出された棟数が少ないため、柱穴の有無を時期的な特徴に直結させることはできないし、住居址の規模の大小との直接の関連は認められない。この他住居址に伴う施設としては、カマド周辺に、平均値で径69cm±・深さ22cm±を

計る円形・不整円形のピットが検出される。全時期の住居址に認められ、23棟中13棟がもつ。埋土中には焼土・炭化物の包含が多く、土器が出土する場合も多い。カマドの移行に伴って廃棄され、新たに構築された時は、複数のピットが検出される場合がある。

## (2) 兔Ⅱ遺跡

検出された住居址は4棟である。完掘できたのは1棟だけで、他は2棟が約半分～一部分が調査区域外にあり、他の1棟は削剝を受け掘り方だけの存在である。

第Ⅰ期に属するのはK-1住居址である。

第Ⅱ期 $b_1$ 群に属するのはC-1住居址とL-1住居址であるが、L-1住居址は床面下まで削剝を受け掘り方だけの存在であり、詳細は不明なためここでは除外しておく。

第Ⅲ期 $b$ 群に属するのはJ-1住居址である。

この遺跡は力石Ⅱ遺跡と同一の微高地上にあり、微高地の北半が兔Ⅱ遺跡である。両者は定期的に重複し、空間的にも別の集落址として把握する積極的理由はみあたらない。同一微高地における居住占有状態の違い、いいかえれば単位集団の相違として理解すべきものとする。力石Ⅱ遺跡のもっとも北側に検出されたL-1住居址の北側46m±の地点にC-1住居址が存在し、そのさらに66m±北にJ-1住居址をはじめとする3棟が分布する。状態としては、力石Ⅱ遺跡の住居址群と兔Ⅱ遺跡の北側3棟の住居址群との間にC-1住居址1棟が点在する。なお、これらの住居址の東側外方は微高地の縁にあたる。

住居址の平面での形状はK-1住居址において確認できるのみで長方形を示す。一部が調査区域外にあるJ-1住居址はほぼ正方形である。K-1住居址の規模は3.6m±×3.0m±であり、J-1住居址は4.7m±・C-1住居址は5.8m±と一辺の長さが判明しているだけである。C-1住居址は、他の3遺跡の同時期にみられる相対的に規模の大きい住居址に含まれる。

カマドの方向をみると、第Ⅰ期では北カマドである。第Ⅱ期 $b_1$ 群のC-1住居址は約 $\frac{1}{2}$ が調査区域外にあって全容は明らかではないが、北カマドをもつ。しかし、それに時間的に先立つと考えられる東カマドをもつ。第Ⅲ期 $b$ 群では南カマドをもつ。力石Ⅱ遺跡においても第Ⅱ期 $b_1$ 群で北カマドをもつ例が1例あり、この期の北カマドは必ずしも例外的なものではない。残りの2棟は他の3遺跡における時期別のカマド方向の傾向に一致する。

カマドの基本的な構造や構築される位置は他の3遺跡と同様である。煙道部をもたない形態のカマドはみられず、4基での煙出し部まで含めた煙道の平均長は151cm±である。

柱穴やカマド周辺部に存在するピットなどをもつ住居址はみられない。

### (3) 落合Ⅲ遺跡

検出された住居址の総数は16棟である。完掘できたのは10棟・一部あるいは大部分が調査区域外にあるものや削剝を受けて規模・形状不明のものがあわせて6棟ある。

第Ⅰ期に属するのはE-1住居址だけである。

第Ⅱ期 $b_1$ 群に属するのはA-1・J-2・J-4・M-2・L-2の5住居址である。

第Ⅱ期 $b_2$ 群に属するのはJ-5・L-1・L-3の3住居址である。

第Ⅱ期c群に属するのはM-3住居址である。

第Ⅲ期b群に属するのはJ-1・K-2の2住居址である。

分類できなかったのはJ-3・K-1・K-3・M-1の4住居址である。

まず、住居址の分布をみてみたい。前述した遺跡同様に、最南部に検出されたA-1住居址と微高地北端近くに検出されたM-3住居址までの185m±の間を3等分し、さらにそれぞれを3等分して位置を示すことにしたい。中央部の大部分は最近の削剝を受け、遺構が存在しない。第Ⅰ期の住居址は南部北側に1棟あるだけである。第Ⅱ期 $b_1$ 群の住居址は南部南側に1棟存在するほかは北部にある。第Ⅱ期 $b_2$ 群も北部にかたまる。第Ⅱ期c群のM-3住居址は北端に存在する。第Ⅲ期b群の2棟は北部南側と中央に1棟ずつ存在する。

以上のように、中央部は不明であるが、南部に2棟が存在するほかは北部に集中して分布する。A-1住居址の存在を考慮に入れると、第Ⅱ期 $b_1$ 群の急激な住居址数の増加とともにこの微高地でも集落範囲の拡大があった可能性が考えられる。

住居址の平面での形状は正方形あるいは正方形を基本としながらやや不整形なものが主体を占め、一部が長方形である。規模が判明したもの10棟、一辺の長さが分かるもの2棟、不明が4棟である。他の3遺跡にくらべて小規模な住居址が存在する。時期不明ではあるが2.7m±×2.6m±の規模をもつJ-3住居址を最小とし、長辺3.2m±×短辺3.0m±の範囲に計4棟が分布する。他は長辺3.6m±～4.6m±×短辺3.4m±～4.5m±の範囲に6棟が存在する。最大規模のものは第Ⅱ期 $b_1$ 群のJ-2住居址で4.6m±×4.5m±であり、一辺だけが判明している2棟についてもそれを越えるものはない。時期別の特徴をみるには対象となる棟数が少なく、その時期差による傾向は明らかでない。ただ、第Ⅱ期 $b_1$ 群の時期に前述の小規模な住居址が2棟存在すると同時に、J-2住居址が存在する。

次にカマドについてみる。完掘できた住居址10棟のうち8棟がカマドをもつ。他の1棟は方向が不明であり、1棟は存在の有無も含めて不明である。カマドをもつ8棟はいずれも1基ずつをもち、方向別では北カマド1基・東カマド5基・南カマド2基となる。以上のほか、

部分調査あるいは削剝を受けて住居址の全容が明らかでないがカマドをもつものも含めての時期別のカマド方向は、次のようになる。第Ⅰ期では北カマドをもつ。第Ⅱ期 $b_1$ 群では東カマドをもつもの3棟・南カマドをもつものは2棟である。第Ⅱ期 $b_2$ 群では2棟が東カマド、1棟が南カマドをもつ。第Ⅱ期c群のM-3住居址は方向が不明である。第Ⅲ期b群では1棟が南カマドをもつ。

以上のことから、力石Ⅱ・兎Ⅱ遺跡と同様に第Ⅰ期の時期に北カマドをもったものが第Ⅱ期以降は東あるいは南カマドへ変化することが指摘できよう。

カマドの基本的な構造や構築される位置は他の3遺跡と同様である。煙道部をもたない形態のカマドはみられず、8基での煙出し部まで含めた煙道部の平均長は135.5cm±である。

他の住居址の構造として、柱穴をもつ住居址は検出されなかった。住居址内の施設と考えられるカマド周辺の円形～不整形ピットは第Ⅱ期 $b_1$ 群3棟・ $b_2$ 群2棟がもち、4個での平均値は径77cm±・深さ22.5cm±である。やはり多量の焼土・炭化物を包含し、出土土器が多いのが特徴である。

#### (4) 朴の木遺跡

検出された住居址は5棟である。完掘できたのは3棟で、他の1棟は約半分が調査区域外にあり、他の1棟は一部に削剝を受けている。

第Ⅱ期 $b_1$ 群に属するのはA-1住居址である。

第Ⅱ期 $b_2$ 群に属するのはB-1住居址である。

第Ⅲ期b群に属するのはC-1住居址である。

C-2・C-3の2棟の住居址は分類できなかった。

この遺跡は小さな微高地上にあり、遺構が検出されたのはその北側約 $\frac{1}{2}$ の範囲である。

住居址の平面での形状は正方形が主体である。規模が判明したもの2棟、一辺の長さが分かるものは3棟である。前者の2棟は4.8m±×4.7m±・4.9m±×4.9m±とほぼ同規模のものであり、後者も4.5m±～5.2m±の範囲に分布する。棟数が少ないこともあり、規模での時期的な特徴は把握できない。

検出された5棟の住居址ともカマドをもっている。そのうち、C-2住居址は東カマド2基をもつ。B-1住居址は約 $\frac{1}{2}$ が調査区域外にあって全容は把握できないが、時期別のカマド方向は次のようになる。第Ⅱ期 $b_1$ 群の住居址は南カマド、 $b_2$ 群は北カマド、第Ⅲ期b群は南カマドをもつ。

カマドの基本的な構造や構築される位置も他の3遺跡と同様である。削剝を受けて不明であ

るA-1住居址をのぞいたいずれの住居址も煙道部をもち、煙出し部まで含めたその平均長は121 cm±である。

柱穴やカマド周辺部に存在する円形～不整形円形ピットは検出されない。

## (5) ま と め

4遺跡で検出された住居址数は54棟である。時期別では、第Ⅰ期3棟・第Ⅱ期a群3棟・b<sub>1</sub>群14棟・b<sub>2</sub>群8棟・c群5棟・第Ⅲ期a群3棟・b群5棟の分布を示し、分類できなかったのは13棟である。大別すると、第Ⅰ期3棟・第Ⅱ期32棟・第Ⅲ期8棟と圧倒的に第Ⅱ期が多い。朴の木遺跡に第Ⅰ期を欠くほかは全遺跡に大別した3時期の住居址が存在する。第Ⅰ期から第Ⅱ期への移行は単に住居址の数的な増加だけではなく分布範囲の拡大を伴い、それがもっとも顕著なのは同一遺跡と考えられる力石Ⅱ・兎Ⅱ遺跡が立地する微高地上の第Ⅱb<sub>1</sub>群にあらわれる。

住居址の規模はそこに居住した人員の多少をあらわすとともに集落全体あるいは単位集団の構成員としての位置などに規定されてくるであろうし、本来は住居址群のなかでの相互関係として理解されなければならないものであろう。住居規模を長辺×短辺として単純化してあらわした場合の時期別の平均面積は、ほぼ平均化されている。しかし、第Ⅱb<sub>1</sub>群とb<sub>2</sub>群においては相対的な規模での小規模住居址と大規模住居址との混在が、力石Ⅱ・落合Ⅲ遺跡にみられる。第Ⅱ期b<sub>1</sub>群の力石Ⅱ遺跡では、最小規模の住居址を1とすると最大規模のものは約2.7、落合Ⅲ遺跡では1：約2.4の値を示す。同様にb<sub>2</sub>群では、1：約2.3と1：約1.5の値を示す。遺跡間の傾向としては、他の3遺跡と比較した場合の落合Ⅲ遺跡での住居址面積の小規模化があげられ、それは第Ⅱ期b<sub>1</sub>群・b<sub>2</sub>群においてより明確にあらわれる。

カマドの形態や構造に時期的な特徴はあらわれない。ただ、カマドの構築される方向にある程度の時期差が反映される。第Ⅰ期では北カマドである。第Ⅱ期のなかでは細分化した時期別の傾向性は指摘できず一括してあつかうと、東カマドと南カマドがほぼ同数で大多数を占め、北カマド・西カマドが少数だが存在する。第Ⅲ期a群は力石Ⅱ遺跡にだけ存在し、南カマドが2基である。b群では力石Ⅱ遺跡だけが東カマドで他は南カマドをもつ。全体の傾向としては北→東・南→東・南の方向へカマドが移行する。構築される位置は第Ⅰ期が一辺の中央部であるが、他の時期では一方に寄り、北カマドは東寄り、東カマドが南寄り、南カマドは東寄り、西カマドは南寄りが一般的である。

柱穴をもつ住居址は、力石Ⅱ遺跡の第Ⅱ期b<sub>1</sub>群～c群のなかの10棟に知られるだけである。しかし柱穴の有無は時期差や規模の大小の差異には直結されないであろう。カマド周辺に円形



～不整円形ピットを伴う例はカ石Ⅱ・落合Ⅲ遺跡で18棟に知られる。位置や規模に共通性がみられ、埋土中に通常多くの焼土・炭化物を包含し、出土土器の多いのが特徴的である。一般的に“貯蔵穴”といわれるピットを一部に含むと同時に、カマドからの捨灰などを一時的に保留する用途をもつことも考えられる。

以上4遺跡での時期別の分布と構造上の主な点について述べた。江刺平野全体についてみると第Ⅰ期に比定されるのは宮地遺跡だけであるが、第Ⅱ期には宮地遺跡・鴻ノ巣遺跡など数カ所があり、第Ⅲ期では微高地よりさらに高い河岸段丘上に瀬谷子遺跡1カ所が、現在のところ知られている。第Ⅱ期に集落の沖積地への進出がいつそう前進した背景には、胆沢城創建に代表される政治的社会的変化と平野での自然環境の変化という二面からの追求が必要とされてゆくであろう。

## 2. 井 戸 址

他の3遺跡には検出されなかったが、落合Ⅲ遺跡では9基の井戸址が検出された。そのうち完掘できたのは8基で、C-55井戸址はC-54井戸址と重複するうえに調査区域外との境界部分に検出されたため、調査することができなかった。

本稿では8基の井戸址を地下設備の構造によって分けたのち、属する時期などに若干触れることにする。用語は山本(1970)に従い、「井筒」は地下設備を指すものとする。

地山井筒に分類できるのは、D-51・I-51・K-51・L-51の各井戸址である。地山井筒は“地山”を掘りぬいただけで内部に設備を伴わない井戸である。C-54井戸址では下部の青(緑)灰色粘土層中から材3本と曲げ物の断片が出土した。それらがこの井戸址に伴う設備を構成していたものか二次的な移動を受けたものかは不明である。しかし、他の地下設備をもつ井戸址における材や曲げ物の残存状態は、解体の有無にかかわらずある程度数量をもっていることを考えると、C-54井戸址は地山井筒に分類されるものかもしれない。

D-52・E-51・I-52の各井戸址は地下設備をもつ。もっとも残存状態が良好なI-52井戸址では上段に板井井筒、下段に曲げ物井筒を組み合わせている。板井井筒は、四隅に隅柱をたてて横棧をわたした外側に縦板をめぐらしてほぼ方形に組み、その内側の下位に曲げ物井筒がすえられている。D-52井戸址では埋土中部～下部を占める青(緑)灰色粘土層中に多数の割り材や丸材が出土し、井戸の底部に曲げ物井筒がすえられていた。その材の数量や種類、また曲げ物井筒の存在を考えると、本来は曲げ物井筒の上位に板井井筒が組まれていたが、解体・浮遊したものと考えられる。E-51井戸址は板井井筒2段の組み合わせである。上段の井筒は、四隅に隅柱をたてて横棧一段をわたした外側に割り材・板材をめぐらし、ほぼ方形に組ん

でいる。その内側の下位には、隅柱や横棧を伴わず細い丸材多数をたてて方形に組んだ井筒がすえられる。丸材はいずれも雑木状のもので下端が削られている。

以上のように、地下設備の構造から地山井筒・板井井筒+曲げ物井筒・板井井筒2段の3形態に分類できる。

開口部の平面での形状はいずれも円形を示す。I-52井戸址では明瞭な掘り方が認められた。円形にいったん大きく掘りあげ、井筒をすえて埋め込み、壁をつくりだしている。

井戸址から得られた遺物は多くない。いずれの井戸址でも埋土上部～中部にかけて土師器・須恵器の小破片を出土しているが、僅少である。他の出土遺物の主なものには、D-52井戸址の下部粘土層中から出土した鉤手の素材・縄の断片、I-52井戸址の井筒の中から出土した刀子・元祐通宝2枚、K-51井戸址の下部から出土した木製の鉤手などがある。

これらの井戸址は非常に密な分布を示している。先に住居址の分布をみた際、便宜的に南北を9等分したが、それにしたがって井戸址の分布をみると次のようになる。南部中央に2基、北側に3基、中央部の大部分は削剝を受けているが北側に1基、北部南側に1基、中央に2基が分布する。特にD-51・D-52・E-51の3基の井戸址は南北14m±の範囲に接近して分布する。住居址の分布と重なりをみせることが指摘できる。

次にこれらの井戸址の時期についてであるが、他の遺構との重複関係から分かることは、E-52井戸址は第Ⅰ期に属するE-1住居址を切っていること、D-52井戸址は第Ⅲ期b群に分類される土器を出土するD-101溝を切っていることである。当遺跡でもっとも新しい時期と考えられる第Ⅲ期b群の時期よりもD-52井戸址は新しい可能性がある。出土遺物から時期が推定できるのはI-52井戸址である。井筒のなかから元祐通宝2枚が出土している。元祐通宝の使用年代は中世まで下がるもので、すくなくとも第Ⅲ期b群をもっとも新しい時期とする竪穴住居址群で構成される当遺跡での集落との関連はみいだせなくなる。他の井戸址については時期を推定できる重複関係や出土遺物はなく不明である。

以上のように、井戸址の時期をどこにおくかが問題である。岩手県下でこの時期の集落に伴う井戸址の検出例は非常に少ない。周辺部の例では、当遺跡の北西2km±の微高地上に立地する宮地遺跡で2基検出されている。1基は剝抜井筒をもつ奈良時代末のもの、他の1基は4～5段のセイロ組の井筒をもつ平安時代初期のものである。水沢市胆沢城跡でも2基検出され、<sup>(注1)</sup>そのうちの1基は4～5段のセイロ組の井筒をもち、11世紀代のものとされる。他の1基は丸太材で井筒が組まれる。水沢市林前遺跡は9世紀後半から10世紀代に中心をおいた集落址で鎌倉初期の溝等も存在するが、地山井筒1基が検出されている。しかし、地山井筒をのぞくと当遺跡の井戸址との構造上の比較をおこなう資料とはならず、<sup>(注3)</sup>時期的な比較もおこなえない。竪穴住居址群を中心として構成される集落のなかに占める位置関係が明らかでないことも大きな

制約である。ただ、D-52井戸址やI-52井戸址の時期的な推定からは、必ずしも第Ⅰ期～第Ⅲ期に分類した住居址群にではなく、それよりも新しいことが知られている多数の柱穴状ピット群に関連づけられる可能性が強い。しかし、そのピット群の時期や建物の種類・性格等については現時点では明らかにできず、今後の検討課題としたい。

(注1) 岩手県教育委員会(1976)：東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報Ⅰ。また佐々木 勝氏に御教示いただいた。

(注2) 水沢市教育委員会(1978)：胆沢城跡—昭和52年度発掘調査概報

(注3) 水沢市教育委員会(1979)：林前遺跡—現地説明会資料

〈参考文献〉

山本 博(1970)：「井戸の研究」綜芸会

### 3. 土 器

#### (1) 弥生式土器

今回の調査で、当初予想していなかった弥生時代の遺物が、遺跡によって量に多少の差はあっても、各遺跡で出土をみた。このことは、沖積平野の微高地上における今後の調査において、十分考慮していかなばならないことを教えている。

弥生式土器は、力石Ⅱ遺跡では、C-1住居址、I-1住居址、K-1住居址から、ごく少量出土しているし、兔Ⅱ遺跡では、A-D区、H-I区、K区の3区域に集中して出土している。落合Ⅲ遺跡、朴の木遺跡では、表採として、1、2片である。土器は、器種、沈線の状態、文様構成、胎土の状態等から4群に分類できた。各群は、時期を異にするとみられる。ここでは、地形的に同一面上にあり隣接している力石Ⅱ遺跡と兔Ⅱ遺跡の土器を主体として分類している。古い時期から、Ⅳ群土器、Ⅰ群土器、Ⅱ群土器、Ⅲ群土器の順にまとめている。

#### Ⅳ群土器

力石Ⅱ遺跡と兔Ⅱ遺跡のH-I区、K区から出土している土器である。器種は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、蓋形土器、筒形土器で構成される。地文が縄文だけの施文による粗製土器と沈線の施文による有文の精製土器がある。口縁部は、平縁状の土器は少なくゆるく波状を呈している。無文の土器には、刷毛撫でがみられる。縄文の状態は、細かい縄文のものが多く、斜位か横位に施文されている。有文による文様は、沈線によるものである。篋状工具によって鋭角的に少し深い沈線で雑に施文されている土器(第41図)、太い沈線によっていねいに施文されている土器(第15、16図)がある。文様構成の主体は、変形工字文であ

る。変形工字文が、3～4組の入組工字文として配置されている土器（第47・16図）と2段にわたって配置されている土器（第17図）とがみられた。工字文の中には、1条の沈線が入っている。鉢形土器では、口縁部の内側に1条の沈線が確認できた。筒形土器の文様は、太い沈線の波状文である。有文の精製土器には、胎土に金雲母が含まれている。以上IV群土器をまとめたが、変形工字文を主体としていること、口縁部の内側に沈線をもつこと、蓋形土器（第62図）筒形土器が出土していること。胎土に金雲母を含むことから、一関市谷起島遺跡出土のA類土器に酷似しているといえるし、同じ系列にある江刺市沼ノ上遺跡出土の土器とも共通点がある<sup>(注1)</sup>。図版16-7の無文の粗製土器は、宮城県鱸沼遺跡出土の粗製の無頸甕形土器に類似しているようだ<sup>(注2)</sup>。図版16-7の無文の粗製土器は、宮城県鱸沼遺跡出土の粗製の無頸甕形土器に類似しているようだ<sup>(注3)</sup>。以上のことから、IV群土器は、弥生時代中期初頭の大泉式、岩手県南部の標式でいえば、谷起島式に併行する土器と考えられる。

K区の中で、他の器種は単位としてまとまりをみせて出土したのに、内側に靱痕をもつ壺形土器（第15図3）だけは、1破片として出土した。明燈色を呈している精製土器であり、かなり焼成のよい土器である。同じK区で出土した高坏形土器（第15図2）の沈線より、幅が広く浅い沈線で施文されており、沈線によって区画された縄文帯による文様構成をうかがうことが出来、すり消し技法がなされている。この土器の特徴から、大泉式の次にくる柵形罎式土器にかなり近い可能性もあると考えられる。

### I 群土器

兎Ⅱ遺跡のA～D区から出土した土器である。量的には、少量である。器種は、壺形土器である。（第17図1～6）磨滅がはげしく、はっきりしない部分もあったが、すり消し技法がなされており、IV群土器でみられた沈線より細い沈線によって区画された縄文帯で、連続山形文、連弧文につながるとみられる文様体をうかがうことが出来た。これらの土器は、柵形罎式土器に併行すると考えられる。岩手県南部では、水沢市の橋本遺跡出土の土器を標式とする、橋本式土器に近いとみられる。橋本遺跡<sup>(注4)</sup>には、口頸部にくぼみをもつ突帯をめぐらした土器の他に秋田県の宇津ノ台式土器にみられる菱形文をもつ土器が多くみられるのだが、兎Ⅱ遺跡では、それらに類似する土器は、確認されなかった<sup>(注5)</sup>。

### II 群土器

兎Ⅱ遺跡のA～D区から出土した土器である。量的には少量である。器種は、壺形土器である。浅く、きわめて細い、2条1組の平行沈線で、重三角形文や連弧文を主体とする文様を有している土器である。（第17図7～16）平行沈線間の幅は、2mm～3mmであり、半載竹管文もみられる。これらの土器は、宮城県の十三塚式土器<sup>(注6)</sup>に併行するとみられる。岩手県南部では、この時期の土器がまとめて出土している遺跡は、まだ確認されていない。破片としては、水沢市の橋本遺跡、小山崎遺跡、常盤遺跡、胆沢町愛宕遺跡<sup>(注7)</sup>から出土している。

### Ⅲ群土器

兎Ⅱ遺跡のA～D区から出土した土器である。Ⅰ群土器、Ⅱ群土器より量的には多い。器種は、甕形土器、壺形土器が主体である。口縁部は、肥厚しており、平縁のものと同様にゆるく波状を示すものがある。口縁部は外反するものがほとんどである。肥厚口縁部に、細かい縄文だけを斜位に施文させた土器（第18図5）と口縁端にそって刺突文を入れ、その下方に細かい粘土で浮文をめぐらせている土器（第18図7・8）がある。頸部から体部にかけては、浅くて太めの沈線によって曲線区画文と平行沈線との組み合わせによる文様が施文されている。曲線区画文の外側には、すり消し技法がみられる土器が多い。第15図-5の土器は、口縁部が外反し、ゆるく波状している。口縁部に刺突文と粘土による浮文をもち、頸部は、少し長く上方ですぼまっており、肩部がちょっとふくらみをみせている土器である。この形の土器は、弥生時代後期に属する福島県の天王山式土器の系列に入っている常盤遺跡出土の第1号ときめて類似しているとみられる。第18図・9・10の文様体をもつ土器は、常盤遺跡、金ヶ崎町の西側、駒ヶ岳山麓から出土している。以上のことから、Ⅳ群土器は、常盤式土器に併行すると考えられる。常盤遺跡の甕第1号から、一部欠損している尾翼のあるアメリカ式石鏃が出土しているが、兎Ⅱ遺跡のA～D区でも、同じように一部欠損したアメリカ式石鏃が2個出土している。この石鏃は、Ⅲ群土器に付属する可能性が考えられる。

以上力石Ⅱ遺跡、兎Ⅱ遺跡の弥生式土器についてまとめたが、同一層位において弥生時代中期（谷起島式併行、橋本式併行）から後期（十三塚式併行、常盤式併行）にかけての土器が出土している。今回の調査では、遺構の確認は、出来なかったが周辺に遺構が存在する可能性が十分ある。今後の調査に期待したい。

#### 粃痕について

粃痕については、資料を鑑定された佐藤敏也氏の御教示にもとづき、以下まとめている。土器の圧痕は、良好な状態で残っている。まず、不鮮明ながらも粃の格子目（ネットワーク）が観察できることから、粃痕と断定出来る。格子目の他に、わずかながら端芒が残っているし、毛耳痕も確認出来る。粃痕の計測値は、粒長（L）5.95mm、粒幅（B）3.45～3.50mmを計る。これを玄米にした場合の換算値は、粒長4.70mm、粒幅2.75mmであり、粒長に対する粒幅の比は1.56～1.70と計算される。粒長に対する粒幅の比が2未満であれことから、関東以北から東北にかけてみられる、短粒で丸味のある米粒といえる。以上のことから、兎Ⅱ遺跡出土の粃痕は、「短粒の中くらいな形のごく小さい粒の米」といえる。更に、粃の最深の溝（内穎痕と外穎痕の間の溝）幅が、1.30mmを計るが、普通の米粒では、1.00mm±の幅であることから、丸味の強い米粒といってよく、東北に産した米と考えてよい。

従来、岩手県における最古の粃痕は、弥生時代後期に属する常盤遺跡の弥生式土器から確認

されている。兔Ⅱ遺跡で確認された靱痕をもつ土器は、前述している通り谷起島式土器から橋本式土器にわたる時期即ち、弥生時代中期に属する土器とみられるところから、岩手県における最古の靱痕となり、岩手県南部における稲作りが弥生時代中期からとりくまれていたと判断できるのではなかろうか。今後は稲作にかかわる用具の出土及び遺構の検出に期待したい。

注1 「谷起島遺跡第1次発掘調査報告書」 一関市教育委員会 1977年

注2 「沼ノ上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会 1973年

「江刺市・沼の上遺跡」 (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1978年

注3 「鱸沼遺跡」 東北電力株式会社・宮城支店 1971年

注4 「水沢の歴史—平安以前—」 水沢市教育委員会 1973年

注5 「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」 須藤隆 文化第33巻第3号 1970年

注6・7 注4に同じ

注8 「岩手県佐倉河村発見の弥生式土器」 伊東信雄 古代学三—2 昭和29年

注9 「福島県天王山遺跡の弥生式土器」 坪井清足 史林36—8

伊藤陽夫氏所有の土器

## (2) 奈良～平安期の土器

ここでいう奈良～平安期の土器とは一般に土師器・須恵器と呼ばれているものである。今回の調査で出土した土器の大半は平安時代に属するもので、従来東北地方北部では第Ⅱ型式(桜井:1958)あるいは後期土師器(草間:1958)として扱われてきたものであり、東北地方南部の表杉ノ入式(氏家:1957)に併行するものである。この時期の土器はロクロの使用を主要な特徴とし、器種・器形に簡略化がみられる。しかしこれらのもつ内容は単一ではなく、いくつかに分けられ、編年が進められつつある。ここでは焼成・調整技法を主体に分類し、それぞれの組合せにより当地方の平安期の土器の細分を試みてみたい。

分類は器種を優先させ、それぞれを成形・焼成・再調整の技法等を主体に分類を行い、出来るだけ記号化に努めた。特に坏の場合のように、土師器・須恵器いずれの範時に入れるべきか明確にしがたい土器群の存在すること、土師器・須恵器の違いが機能・用途の違いを示すものではなく、むしろ調整技法やそれぞれの量的比率が地域差や時間的な変化を反映すると考えられることから土師器・須恵器という枠をはずし一括して処理することにした。

今回の調査で出土した土器の器種は坏・高坏・高台付坏・蓋・鉢・盤・甕・壺・羽釜がある。いずれの器種も通常使用されている概念を基準としているが、坏の中には碗・皿等と呼ばれるべきものも一括して扱った。資料が僅少である高坏・鉢・盤・羽釜の分類は行なわなかった。

〈坏〉 坏はロクロの使用の有無で大別される。ロクロ未使用の土器は更に形態で分け、ロクロ使用のものは焼成と黒色処理も含めた二次的な調整の有無で分類した。

A類（ロクロ未使用） AⅠ類 丸底を呈するもの。AⅠa類：体部に段を有するもの。

AⅠb類：体部に沈線を有するもの。

AⅠc類：体部に段・沈線をもたないもの。

AⅡ類 平底を呈するもの。AⅡa類：体部に段を有するもの。

AⅡb類：体部に沈線を有するもの。

AⅡc類：体部に段・沈線をもたないもの。

器形は内弯気味の立ちあがりをもつものが多い。器面調整は外面上半は横撫で後篋磨き、体部から底部にかけては篋削り後一部篋磨きのものと同面篋磨きのものともみられ、内面は上半が横方向の篋磨き、下半は放射状の篋磨き後黒色処理が施こされている。体部外面の沈線は雑で形式的なものである。

B類（ロクロ使用） BⅠ類 酸化炎焼成で内面に篋磨き及び黒色処理の施こされているもの。

BⅠa類：底部切り離しが回転糸切りで無調整のもの。

BⅠb類：底部切り離しが回転糸切り後再調整が加えられているもの。

BⅠc類：再調整が加えられており切り離しの不明なもの。

BⅠb類とBⅠc類の再調整はロクロ回転を利用した回転篋削りと手持ち篋削りのものともみられる、前者をW手法・後者をH手法とした。これはそれぞれの適用箇所により  $W_1 \sim W_6$ 、 $H_1 \sim H_6$ に分けられる。1は体部下端と底部全面、2は体部下端と底部周辺、3は底部全面、4は底部周辺、5は体部下端に施こされていることを示す。

BⅠ類の器形は丸味をもって外傾するものが大半を占めるが、法量的には個々の土器によりかなりの差がみられる。全体の口径平均は32.9cm、器高平均は4.7cm、径高指数平均は32.9で(注1)BⅡ類・BⅢ類に比べ全体に高い数値を示している。内面の篋磨きは明瞭なものが少なかったが、上半は横方向、下半は放射状のものが多い。

BⅡ類 還元炎焼成のもの。

いずれも切り離しは回転糸切りによるものであり、再調整は認められない。器形は直線的に外傾するものが多いが、法量的には個々の土器によりかなり差がみられる。法量の平均値は口径13.8cm、器高4.5cm、径高指数30.0で全体にBⅠ類より低く、BⅢ類より高い数値を示す。

BⅢ類 酸化炎焼成で内面に黒色処理の施こされていないもの。

いずれも切り離しは回転糸切りによるものであり、内外面とも再調整は認められない。器形は直線的に外傾し、ロクロ挽きによる凹凸が明瞭で歪みの強いものが多い。全体に口径に比べ器高が低く、法量の平均値は口径13.5cm・器高3.6cm・径高指数26.2である。

〈高台付坏〉 すべてロクロを使用しているため坏B類と同様の記号を付した。

B I類 酸化炎焼成で坏部内面に篋磨き後黒色処理の施こされているもの。

B II類 還元炎焼成のもの。

B III類 酸化炎焼成で坏部内面に篋磨き及び黒色処理の施こされていないもの。

これらは更に坏と高台部の形態で細分されうが、完形品が少ないため省略した。坏部の形態は外反気味に開くものが大半を占めるが、B I類はやや浅い坏部を有し、B III類はやや深いものと極端に浅いものとがみられる。高台部はB I類に短くてまっすぐ下るものが目立ち、B III類にはやや長く裾の開くものが多い。

〈甕〉 ロクロの使用の有無で大別される。ロクロ未(不)の土器は更に法量(口径)と器形で、ロクロ使用の土器は法量(口径)と焼成で分類した。<sup>(注2)</sup>

A類(ロクロ未使用) A I類 口径18cm以上のもの。A I a類:頸部に段・沈線を有するもの。<sup>(注3)</sup>

A I b類:頸部に段・沈線を持たず  
体部から口縁部に緩く移行する。

A II類 口径18cm以下のもの。A II a類:頸部に段・沈線を有するもの。

A II b類:頸部に段・沈線を持たず  
体部から口縁部に緩く移行する。

口縁部は大きく外反するものと直立気味に立ちあがるものとがみられるが前者の方が多い。調整は口縁部が内外面とも横撫で、体部外面は刷毛目・篋削り・撫で等により、内面は撫でによるものが大半を占める。坏B類・甕B類と共伴するものにA I b類・A II b類が多い。

B類(ロクロ使用) B I類 酸化炎焼成によるもの。B I a類:口径18cm以上のもの。

B I b類:口径18cm以下のもの。

B I a類のものは巻き上げ後体部上半から口縁部にかけてロクロ調整がみられ、体部下半は縦方向の篋削りが施こされているものが大半を占める。口縁部は強く外反し口唇部を上方あるいは上下に挽き出している。体部は脹らみを有し口縁部より大きいものと、ほとんど脹らみを持たず、最大径を口縁部にもつものがある。また体部上半から口縁部にかけて叩き目痕を残



すものがみられるし、坏BⅢ類と共伴するものに口縁部の極端に短いものがある。

BⅠb類は僅かな例外を除きロクロ成形によるものである。切り離しは回転糸切りによるもので、再調整は1例にだけみられる。全体にロクロ挽きによる凹凸が明瞭である。

BⅡ類 還元炎焼成によるもの。

〈壺〉 ロクロ使用の有無で大別される。

A類（ロクロ未使用） すべて酸化炎焼成で、体部は球胴形を呈し、中位に最大径を有す。調整は口縁部が横撫で、体部も縦・横の撫でによる調整が施こされているが、部分的に篋磨きのみられるものもある。

B類（ロクロ使用） すべて還元炎焼成によるものであり、坏・甕等の分類との関連からBⅡ類として扱った。これらは更に長頸壺・短頸壺・大形壺とに分けられるが全体をはかりうるものが無いことや量的にも少いことから一括して扱った。

〈高坏・蓋・鉢・盤・羽釜〉 高坏は1点だけ出土している。坏部は内弯気味の立ちあがりをもち外面中位に僅かな段を有す。脚部は大きく裾が開き、中位に長楕円形の透しを2個有す。坏部外面は明瞭でないが一部篋磨きがみられ、内面は篋磨き後黒色処理が施こされている。

蓋も1点だけ出土している。つまみ部は欠損しているが、体部は緩く開き端部を下方内側に折り曲げている。内外面とも篋磨き後黒色処理が施こされている。

鉢はいずれもロクロが使用されている。頸部を有し、短くて強く外反する口縁部をもつものと、体部から直線的に口縁部に至るものと2つの形がある。後者は1点だけであるが底部にW<sub>1</sub>手法による再調整がみられる。いずれも酸化炎焼成で内面には篋磨き後黒色処理が施こされている。

盤はロクロ調整の施こされた口縁部の破片が1点出土したのみである。

羽釜は酸化炎焼成によるものと還元炎焼成によるものがあるが、いずれも鏝部を一部残すだけのものである。

出土土器は前述したように分類される。それらを各住居址ごとの共伴関係でみると第Ⅰ～第Ⅲ期に大別される。各期ごとの組合せは次の通りである。

〔第Ⅰ期〕

坏A類・甕A類・壺A類を主体にし、住居址によっては高坏・壺BⅡ類（長頸壺）をもつ。この組合せをもつ住居址は力石Ⅱ遺跡でC-1住居址・兎Ⅱ遺跡でK-1住居址・落合Ⅲ遺跡でE-1住居址の以上3棟だけである。これらの住居址を個別にみると器種の組合せ、調整技法・器形に若干の差異が認められるが、資料が僅少で共通した特性を抽出しにくいいため細分は行なわない。坏はAⅠ・AⅡ類ともみられ、AⅠb類が最も多い。甕はAⅠa類がやや多い。3棟の住居址の中で須恵器の伴出がみられるのは、落合Ⅲ遺跡のE-1住居址だけである。

## 〔第Ⅱ期〕

坏AⅡc・坏BⅠ・BⅡ類・高台坏BⅠ・BⅢ類・甕A・BⅠ類・壺A・B類の他に蓋・鉢・羽釜がみられるが、各住居址によりその構成は異なる。そこで主な組合せをa～c群さらにb群を2つに分けた。

a群：坏A・B類・甕A・B類・壺A類よりなり、よりA類が主体を占める。この組合せをもつ住居址は力石Ⅱ遺跡のB-2住居址・C-6住居址の2棟だけである。B-2住居址は坏AⅡc類・BⅠc類-H<sub>1</sub>手法各1点、甕はAⅠa類3点・AⅠb類1点・AⅡb類1点、BⅠa類1点・壺はA類2点をもつ。C-6住居址は坏がAかB類か不明のもの1点とBⅠb類-H<sub>6</sub>手法1点、甕はAⅠa・AⅡb・BⅠb類各1点をもつ。このように第Ⅰ期的要素を多く含むが、前期にみられなかったロクロ使用の土器を共伴する土器群である。甕BⅠa類に体部上半から口縁部にかけて叩き目痕が認められることが注目される。

b<sub>1</sub>群：坏はBⅠb・BⅠc類、甕はB類を主体に構成されるが住居址により高台坏BⅠ類・坏BⅠa類・BⅡ類・甕A類・鉢・蓋・羽釜を共伴する。この期に属するのは力石Ⅱ遺跡ではB-3・C-3・C-4・D-2・E-3・H-2・I-1・K-1の各住居址で兎Ⅱ遺跡ではA-1住居址がこれにあたる。坏の大半はBⅠbあるいはBⅠc類が占めるが力石Ⅱ遺跡H-2・I-1住居址には僅かにBⅠa類のものが混じるし、力石Ⅱ遺跡C-4・H-2・I-1住居址・朴ノ木遺跡A-1住居址にはBⅡ群が僅かにみられる。これらの住居址の土器群の構成をみると、力石Ⅱ遺跡H-2住居址は坏BⅠa類3点・坏BⅠb類6点・坏BⅠc類8点・坏BⅡ類2点・高台坏BⅠ類3点・甕BⅠa類・甕BⅠb類・壺BⅡ類各2点・蓋・鉢・羽釜各1点となっている。I-1住居址では坏BⅠa類1点・BⅠc類2点・BⅡ類1点・高台坏BⅠ類1点・甕AⅡb・BⅠb類各1点より構成される。朴ノ木遺跡A-1住居址では坏BⅠc類2点・坏BⅡ類1点・甕BⅠa類2点が出土している。再調整は回転を利用したW手法のものが力石Ⅱ遺跡C-4・K-1住居址・朴ノ木遺跡A-1住居址にのみみられ他は手持ちによるH手法のものである。前者に共伴する甕はA類のものがみられる住居址だけであることからすると手法の違いが時間的差異を示す可能性があるが、a群にW手法のものがみられないこと等から問題が残る。甕の大半はBⅠ類で占められるが、力石Ⅱ遺跡ではB-3・C-4・D-2・I-1・K-1の各住居址と兎Ⅱ遺跡C-1住居址・落合L-1住居址に甕A類土器がみられる。また甕BⅠ類に叩き目痕を残すものは極僅かであるが認められる。高台坏はBⅠ類のものが力石Ⅱ・兎Ⅱ遺跡の各住居址にみられる。この期に属するものは高台部がやや低いものが目立つ。

b<sub>2</sub>群：坏BⅡ類と甕BⅠ類を主体とするが、住居址により坏BⅠa・BⅠb・BⅠc類・甕A類・壺BⅡ類を共伴する。この期に属するのは力石Ⅱ遺跡ではB-1・C+5・D-1・J-

1の各住居址と落合Ⅲ遺跡のJ-5・L-3住居址である。このうち代表的な力石Ⅱ遺跡B-1・J-1住居址の土器構成は次の通りである。B-1住居址は坏BⅠc類1点・坏BⅡ類5点・甕BⅠa類3点・甕BⅠb類2点である。J-1住居址は坏BⅠc類1点・坏BⅡ類6点・高台坏BⅠ類2点・甕AⅡ類1点・甕BⅠa類2点・甕BⅠb類1点である。このように坏はBⅡ類のものが多くを占める。なお、力石Ⅱ遺跡D-1住居址の中に坏BⅠb類でW手法のもの、甕A類のものが数点含まれるが、当住居址はカマドを3辺に有し、各期の遺物が混在したためにこのような組合せになったとも考えられる。

C群：坏BⅠa類を主体にし、甕B類・高台坏BⅢ類を含むものとみられる。この群に属するのは力石Ⅱ遺跡A-1・E-1・F-1・H-1の各住居坏・落合Ⅲ遺跡のM-3住居坏である。しかしこの群に属する住居址の残存状態が不良なことや一部分の調査であり、出土遺物は僅少でありしかも部分的なものである。したがって独立した群を設定するのに疑問が残る。ただし落合Ⅲ遺跡のM-3住居址のように坏BⅠa類2点と高台坏BⅢ類1点という新しい組合せがみられる。

### 〔第三期〕

坏BⅢ類・高台坏BⅢ類を中心として構成され、甕はA・B類ともみられる。坏BⅠa類を含むものと坏BⅢ類だけのものがあり、2つに分類した。

a群：坏BⅢ類を主体とし坏BⅠa・BⅠc類・高台坏BⅢ類と甕B類・羽釜を含むもので当群は力石Ⅱ遺跡の3住居址にみられる。力石Ⅱ遺跡C-2住居址は坏BⅠa類3点・坏BⅢ類2点・甕BⅠa類3点で構成される。甕BⅠa類の口縁部は極端に短い。F-2住居址は坏BⅠc類・BⅠa類各1点・坏BⅢ類2点・高台坏BⅠ類・BⅢ類各2点・甕BⅠb類2点・還元炎焼成の羽釜2点が出土している。しかし当住居址はすべて埋土内の資料であり、他群の遺物も含まれていることも考えられる。G-3住居址は坏BⅠa類1点・坏BⅢ類3点・高台坏BⅢ類1点・甕BⅠa類・壺BⅡ類各1点で構成されている。

b群：坏と高台坏はBⅢ類のみで構成される。甕はAⅠbとBⅠa・BⅠbがみられるが、この甕A類は第Ⅰ・第Ⅱ期にみられた甕とは胎土・調整・色調等一見して区別される。口縁部は短く粗い調整で赤褐色を呈する。この群に属する住居坏は力石Ⅱ遺跡ではB-4住居址・兎Ⅱ遺跡ではJ-1住居址・落合Ⅲ遺跡ではJ-1・K-1住居址・朴の木遺跡ではC-1住居址がある。このうち比較的まとまりをもつ兎Ⅱ遺跡J-1住居址・朴ノ木遺跡C-1住居址の土器の組合せをみると、前者は坏BⅢ類7点・甕BⅠa類2点・甕BⅠb類1点で構成され、後者は坏BⅢ類2点・高台坏BⅢ類・甕BⅠa類・甕BⅠb類各1点より構成されている。

遺物が極めて僅少であるものと埋土内の出土土器だけで共伴関係に問題がある次の住居址については分類から除外した。力石Ⅱ遺跡E-3・F-3・G-1・G-2・I-3の各住居址。

落合Ⅲ遺跡 J-3・K-1・K-3・M-1 の各住居址。朴ノ木遺跡 C-2・C-3 住居址。

## ま と め

以上各期ごとの土器群の構成についてみてきたが、最後にこれら土器群の前後関係と周辺部の遺跡からみた若干の問題について述べ本項のまとめとしたい。

3期に区分された土器群は時間的に第Ⅰ期→第Ⅱ期→第Ⅲ期として扱えられる。しかも第Ⅱ期の群は第Ⅰ期的要素を多くもつし、第Ⅲ期 a 群は第Ⅱ期と共通する特徴をもつことから、第Ⅰ期～第Ⅲ期まで大きく断続することなく移行したと考えられる。また各期の各群も一応時間的先後関係をもつと考えられ、第Ⅱ期は a 群→b<sub>1</sub>群→b<sub>2</sub>群… c 群、第Ⅲ期は a 群→b 群として扱えられる。

第Ⅰ期はロクロ不使用の土師器を主体とし、僅かに須恵器も含む土器群である。従来東北地方北部では第Ⅰ型式或は前期土師器として扱われ、最近では国分寺下層式（氏家：1967）との併行関係が論じられている。北上川中流域でもこの時期に相当する遺跡は近年多くの調査が行なわれ、器種・形態・技法等から何期かに区分される内容をもつものであることがわかってきた。当遺跡の土器は坏からみる限り、体部に形式的な沈線をもつか或は段、沈線とももたないこと、底部が平底に近い丸底か或は平底を呈すること等から、これらの時期の中でも終末に近い段階のものと考えられる。

第Ⅱ期 a 群は第Ⅰ期にみられるロクロ未使用の土器を主体にするが、新しくロクロ技法による土器の出現をみる。これはロクロ未使用からロクロ使用に移行する過渡期的様相を示すものであろう。この土器群と類似した土器構成をもつ周辺部の遺跡は、同じ江刺の沖積地の微高地上に立地する宮地遺跡(注4)の他に北上市の尻引遺跡(注5)・藤沢Ⅰc遺跡(注6)・江釣子村猫谷地遺跡等(注7)にみられる。ただしこれらの遺跡では a 群にはみられなかった篋切り痕を有す須恵器坏の共伴が特徴の1つと挙げられている。これは今回の調査区の中にみられなかっただけで、本来この時期の土器構成に重要な位置を占めるものかもしれない。しかし本地方のロクロ技術導入時期は遺跡により土器の構成に若干の相違がみられることから、今後時間的な面からの吟味とともに地域的な面、遺跡の性格等からの検討も必要であらう(注8)。また力石Ⅱ遺跡 B-2 住居址出土のロクロ使用坏に酷似する坏 AⅡ類土器は氏家氏が対馬式（氏家1957）とし、その後阿部・桑原氏（阿部：1968）桑原：1970）によって論ぜられた宮城県対馬遺跡の坏に類似する。当地方では多くみられないがロクロ未使用からロクロ使用に移行する時期の1資料として注目される。

第Ⅱ期 b<sub>1</sub> 群はロクロ技法が本格的に取り入れられた時期のものである。坏はすべてロクロを使用しているが再調整の施こされているものが大半を占める。甕にロクロ未使用のものがまだ

みられる。a群の甕にみられた叩き目痕を有す甕BⅠa類がみられる等の理由から第Ⅱ期a群に近接した時期として扱えられる。一方第Ⅱ期a群にみられた壺A類の消滅やロクロ成形による小形甕、高台坏・鉢の出現等新しい要素も多くみられる。

第Ⅱ期b<sub>2</sub>群はb<sub>1</sub>群との関連でみると次のような相違点がある。坏はBⅠよりBⅡ類が多い。遺跡或は各住居址のもつ性格の違いが土器所有に影響することを考慮すれば、その量的比率が必ずしも時間的差を示すとは云い難いが、当地方の多くの遺跡で回転糸切りの坏BⅡ類が優占するものが多くみられる。これは当地方において本格的に須恵器生産が行なわれ、それが普及した時期として扱えられよう。b<sub>2</sub>群はこのような時期に相当すると考えられる。ただし篋切り須恵器と回転糸切りの須恵器との関連が今1つ不明確な点が今後の問題として残る。次にb<sub>1</sub>群の坏の再調整にみられたW手法はb<sub>2</sub>群ではみられない。坏の再調整はW手法・H手法とも混在しており、これだけで前後関係を云うことが出来ないが、甕等の共伴遺物からみるとH手法に比べW手法は短い期間にしか用いられていないようである。この他ロクロ不使用の甕はb<sub>1</sub>群よりb<sub>2</sub>群の方がかなり少い。以上のような相違点から、b<sub>1</sub>→b<sub>2</sub>という推移が考えられる。

第Ⅱ期c群は前述のごとく資料的に僅少であり、独立した群を設けるのには問題が多い。しかし第Ⅲ期a群の坏BⅢ類以外の坏は坏BⅠa類だけであることや周辺部の遺跡に坏BⅠa類が多くみられることからこの群を設けた。これは坏BⅠ類は再調整のあるものから無調整のものへ移行するという前提に基づく。今回の資料では坏BⅡ類との関係が不明瞭なため、b<sub>2</sub>群との関係がはっきりしないが、他の遺跡の坏の構成ではb<sub>2</sub>群と密接な関係の中で扱えられるべきものようである。

第Ⅲ期は坏BⅢ類・高台坏BⅢ類と口縁部の短い、粗い調整の赤褐色の甕BⅠ類を主体に構成される土器群で、工藤・桑原氏ら（工藤・桑原：1972・岡田・桑原：1974・桑原：1976）によって須恵器系土器と呼称されたものと同類のものと考えられる。これらは坏BⅢ類の外に坏BⅠa類を含むものと坏BⅢ類だけのものがみられ前者をa群、後者をb群とした。a→bという推移が考えられ、いずれにも須恵器坏はまったくみられないことから須恵器生産が衰退し、須恵系土器に転換した時期として扱えられる。同時期の代表的な遺跡として江刺市の瀬谷子遺跡がある。ただし今回の坏BⅢ類土器は所謂須恵系土器だけであるが、当地方には、ある種の坏BⅢ類土器は第Ⅱ期のかなり早い段階からみられ、須恵系土器とは異なる系列の中で扱えられるべき土器が存在する。

絶体年代について知る明らかな資料は出土しておらず、推定の域を出ないが第Ⅰ期は8世紀末、第Ⅱ期9世紀初頭～10世紀前半、第Ⅲ期は10世紀後半～11世紀と考えている。

注1 器高÷口径×100

注2 大半の土器がロクロを使用していない場合はロクロ未使用とし、ロクロ使用土器と共伴するロクロを使

用しない土器をロクロ不使用として区別した。

注3 大形の甕と小形の甕がみられるが完形品が少ないため、すべての甕の口径を1cmごとに分けて数量分布を出したところ、18cmの甕はほとんどみられず16cmをピークとするものと21cmをピークにするグループに分けられた。前者のロクロ使用の甕はロクロ挽きによるものが大半を占め、後者にはそれがみられないことから、18cmを境いにして分けた。

注4 岩手県教育委員会(1976)：「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報Ⅰ」

注5 北上市教育委員会(1977)：「灰引遺跡調査報告書」

注6 岩手県教育委員会(1976)：岩手県埋蔵文化財センター(1977)の調査、筆者参加。

注7 岩手県教育委員会(1975)：「猫谷地遺跡現地説明会資料」

注8 胆沢城・盛岡市太田方八丁のような城柵と集落では異なるし、集落の中でも土器構成に違いをみることができる。

#### 〈引用・参考文献〉

桜井 清彦 (1958)：「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』

草間 俊一 (1958)：「先史期」『盛岡市史』

氏家 和典 (1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14号

(1967)：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題—」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

阿部 義平 (1968)：「東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐって—」『帝塚考古学』No.1

桑原 滋郎 (1970)：「ロクロ土師器環について」『歴史』第38号

工藤 雅樹・桑原 滋郎 (1972)：「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』57巻3号

岡田 茂弘・桑原 滋郎 (1974)：「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究紀要Ⅰ』

桑原 滋郎 (1976)：「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』

小笠原好彦 (1976)：東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題『東北考古学の諸問題』

## 4 鉄 製 品

今回の調査で出土した鉄製品は総計 105点を数え、各遺跡で出土をみた。しかし8割ほどが力石Ⅱ遺跡からの出土であり、種類も豊富にみられる。時間的制約から十分に資料操作出来なかったためここでは数量的な処理を示すだけにとどめ、考察は改めて後の機会に公にしたい。

力石Ⅱ遺跡では一部分の調査も含め29棟の竪穴住居址が調査された。そのうち鉄製品を出土した住居址は17棟あり、まったくもない住居址は12棟である。各住居址の出土点数は次の通りである。ただしこれらは埋土出土のものも含む。B-1住居址1点、B-3住居址1点、C-1住居址2点、C-3住居址2点、C-6住居址2点、D-1住居址2点、D-2住居址1点、E-3住居址2点、F-3住居址1点、G-1住居址3点、G-2住居址11点、G-3住居址3点、H-1住居址5点・H-2住居址16点、I-1住居址7点、J-1住居址13点、K-1住居址10点、J-51ピット2点の計85点である。これらを種類別にみると刀子が31点と最も多く、次いで鎌が10点、穂摘み具用鉄製品8点、その他釘、鎌が数点みられる。分布の特徴

はG～Kに集中しており、この付近では鞆の羽口も出土しており、また各住居址に鉄滓が多く出土していることから近辺に鍛冶場も予想されるが今回の調査では検出されなかった。

兎Ⅱ遺跡では4棟調査された住居址のうち3棟で出土している。各住居址の出土点数はC-1住居址3点、K-1住居址3点、L-1住居址2点の計8点であり、この他A-52ピットより1点出土している。種類は刀子が4点、鎌1点、不明4点である。

落合Ⅲ遺跡では16棟調査された住居址のうち鉄製品を有す住居址2点、L-2住居址1点、M-1住居址1点・M-2住居址3点の計8点でありこの他I-52井戸址より1点出土している。種類は刀子が3点、鎌1点、穂摘み具様鉄製品が1点他は性格不明のものである。

朴ノ木遺跡では5棟調査された住居址のうち鉄製品を有する住居址は2棟だけである。出土したのはA-1住居址で2点、B-1住居址の1点だけであり、刀子1点の他は性格不明のものである。

## 5. 石 帯

奈良時代の帯は関根真隆氏の研究によれば（関根：1974）、裂製の帯、糸で編んだ条帯、革製の腰帯、鞆の帯、勒肚巾、紙帯等があるという。このうち革製の腰帯にま金属製の飾金具つまり鍔帯がつけられ、貴族、官人支配層が用いた。この鍔帯については伊藤玄三氏（伊藤：1968）阿部義平氏（阿部：1976）や佐藤興治氏（佐藤：1975）らによって論じられている。それらによれば鍔帯は慶雲4年（707）にはじめて用いられ、延暦15年（796）に一度禁止され鍔帯に代わって石帯が用いられ、大同2年（807）になって再び鍔帯にもどし、弘仁1年（810）にまた石帯に変更される。この間の変動の理由としては銅銭に使用する銅不足、あるいは平城天皇の復古政策の一環とする説等がある。鍔帯は革帯を止める鉸具と半円状の丸軛と方形の巡方と末端につける蛇尾で構成され、丸軛や巡方の数や順序は数種類あるものの規則性の強いものであり、しかも帯幅にも一定の変化がみられ、阿部氏はそれらを9段階に分け、官位制に基づくものであろうとしている。石帯は銅鍔にかえて石鍔を装着したものであり、延暦15年以降のものであり、大同2年から弘仁1年の4年間は禁止されるもののその後弘仁1年以後に使用されたものである。また石帯には玉石帯、瑪瑙帯のような五位以上のものと、6位以下の雑石腰帯の別がある。佐藤氏は石帯を2分類し、石鍔帯aは4隅ないしは三方に裏面まで貫通する丸孔を穿ち、更に鍔の下方に長方形孔を穿つものであり、石鍔帯bは4隅ないし三方に2孔を1対とする潜り孔をもち、多くの場合下方の長方形孔が省略されている。そして更に石鍔帯aは796年～802年に石鍔帯bは810年以降のものであろうとした。

力石Ⅱ遺跡G-2住居址出土の石帯は丸軛で長方形の透し孔を有し2孔を1対とする潜り孔

も有す。この資料は佐藤氏が石銚帯 a としたものに類似するものと思われるが 2 孔を 1 対とする潜り孔をもつ点が異なる。石質は不明であるが青色に黒の斑文をもつ硬質のものである。

力石Ⅱ遺跡Ⅰ-1 住居址出土の石帯も丸軀である。しかし長方形の透し穴は省略されており 3 方に 2 孔を 1 対とする潜り孔を有す。これは前記の石銚帯 b に類似するものである。石質はアルコース性砂岩であり、表に黒く光沢のある部分が残存しており、なんらかの塗装が施こされていたと思われる。また裏の一方の孔には革帯につける金具と思われるものの付着がみられる。

岩手県出土の銚帯は大正12年発見の胆沢郡金ヶ崎町西根の縦街道の、透し孔のもつ巡方 2、丸軀 2、鉦尾 2 があり、同じく金ヶ崎町字下釜では鉦具、丸軀・巡方・鉦尾各 1 が出土している。花巻市にある熊堂の古墳群からの出土品の中に石帯が挙げられており、略図の中には鉦具 1 つと透し孔をもつ巡方 1 つがみられる。この他に水沢市東大畑遺跡からは力石Ⅱ遺跡Ⅰ-1 住居址の石帯と同質・同形のものが 1 つ出土している。これら銚帯及び石帯は律令制社会の産物であり、銚帯は年代的にも限られており、しかも官位制に対応するものである。これらが当時の文化の地である当地方の古墳から出土していることは、律令国家とのかかわりを知る上にも重要であり、また石帯も律令制の浸透と深くかかわりをもつものであり、当時の北上川中流域での政治的背景を知る上にも重要な資料であり、今後更に追求されるべきものと思われる。

注1 高橋 健自 (1924) : 「上代遺物より見たる大陸文化の輸入」『考古学雑誌』14-15

注2 注1に同じ

注3 小笠原迷宮 (1924) : 「和同銭を出した陸中国熊堂の古墳群」『考古学雑誌』14-7

注4 岩手県埋蔵文化財センター (1978) : 「東大畑遺跡現地説明会資料」筆者も調査に参加

《引用・参考文献》

関根 真隆 (1974) : 「帯類及び腰部装飾」『奈良朝服飾の研究』

伊藤 玄三 (1968) : 「末期古墳の年代について」『古代学』14巻3の4

阿部 義平 (1976) : 「銚帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』

佐藤 興治 (1975) : 「考察…F 金属器」『平城宮発掘調査報告Ⅵ』

## 6. そ の 他

足 方 (あしかた)

力石Ⅱ遺跡と落合Ⅲ遺跡において、10棟をこえる住居址から、長軸 8 cm 土を計る、少し細長の自然礫 (川原石) が数個ずつ出土した。これらの石に共通していることは、石の先端部か中央部に凹部をそなえているということである。この凹部は、紐等を石に巻きつけた際に、紐がはずれないためのひっかかりの部分と考えられる。また、これらの石は、土錘と共伴のかた



ちで出土している事実もみのがせない。土錘は、両端がすばまった、長軸 4 cm±、径 2 cm ±を計る管状土製品であり、漁獲用網の錘とみられている。同形の石だけがまとまって出土している状況から、人為的に持ちこまれたと考えられるし、土錘と共伴して出土すること、紐掛りの凹部をそなえていることから、土錘と同様の役目をした石である可能性が考えられる。石の重さから考えても、利用された個数は少ないと思われる。土錘が欠除した場合の補充としての用をなしたのではなかろうか。「足方」という呼称は、佐嶋与四右エ門氏が、漁獲用錘として位置づけ、使用している。<sup>(注2)</sup>

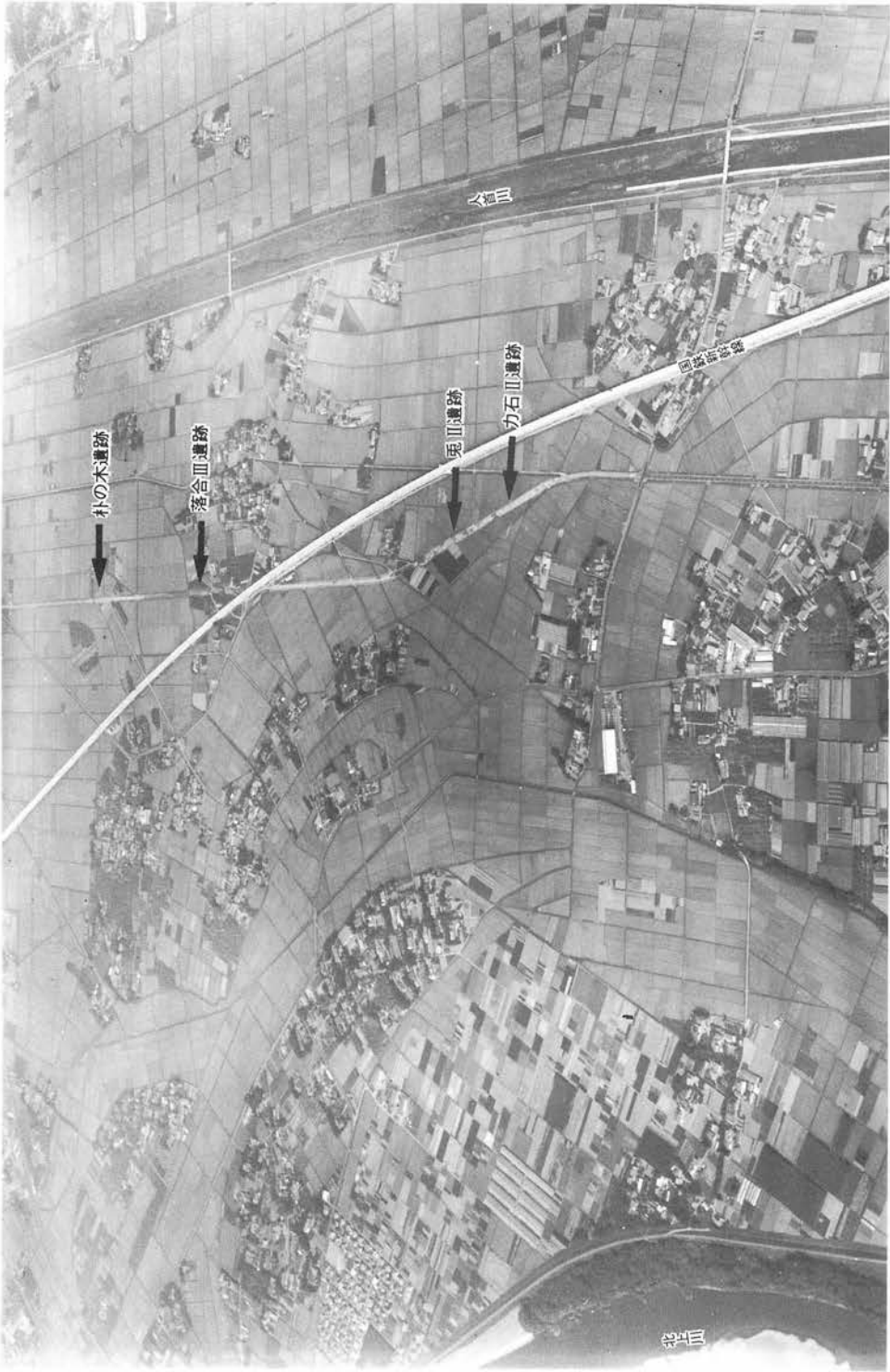
注1 「外浦前田遺跡」 水沢の原始、古代遺跡 昭和40年 水沢市教育委員会

注2 「北上川」 佐嶋与四右エ門 建設省 岩手工事事務所

《参考文献》

「網と釣の覚書」 名取武光 北海道大学 北方文化研究報告 第15輯 昭和35年

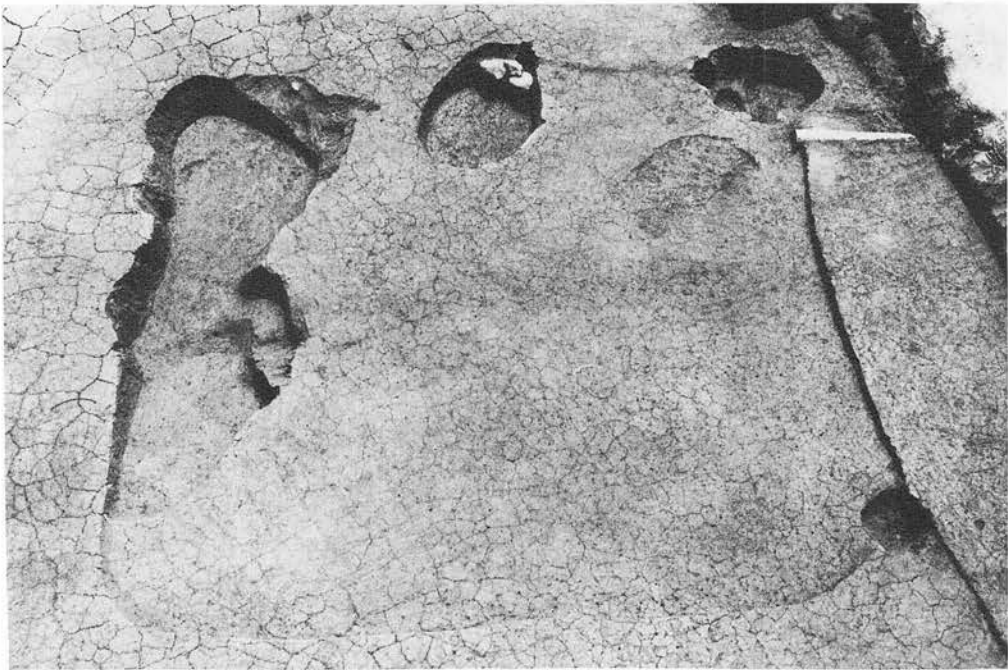
写 真 图 版



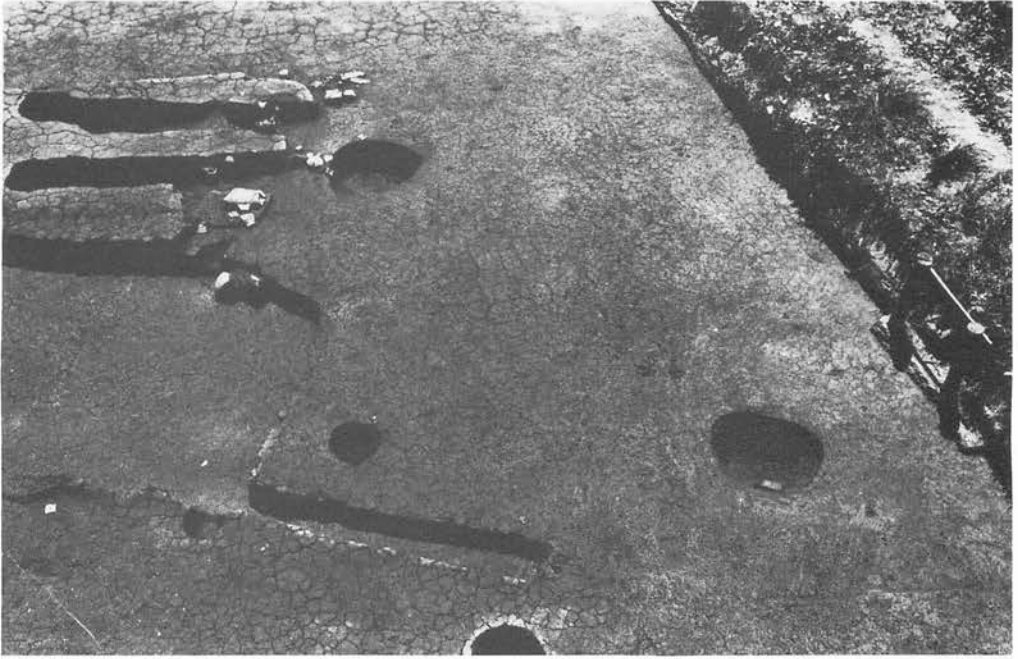
写真図版 1 南からの航空写真



a. 力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡(南からの航空写真)



b. A-1 住居址  
写真図版2 力石Ⅱ遺跡



a. B-1 住居址



b. B-1 住居址(カマド)

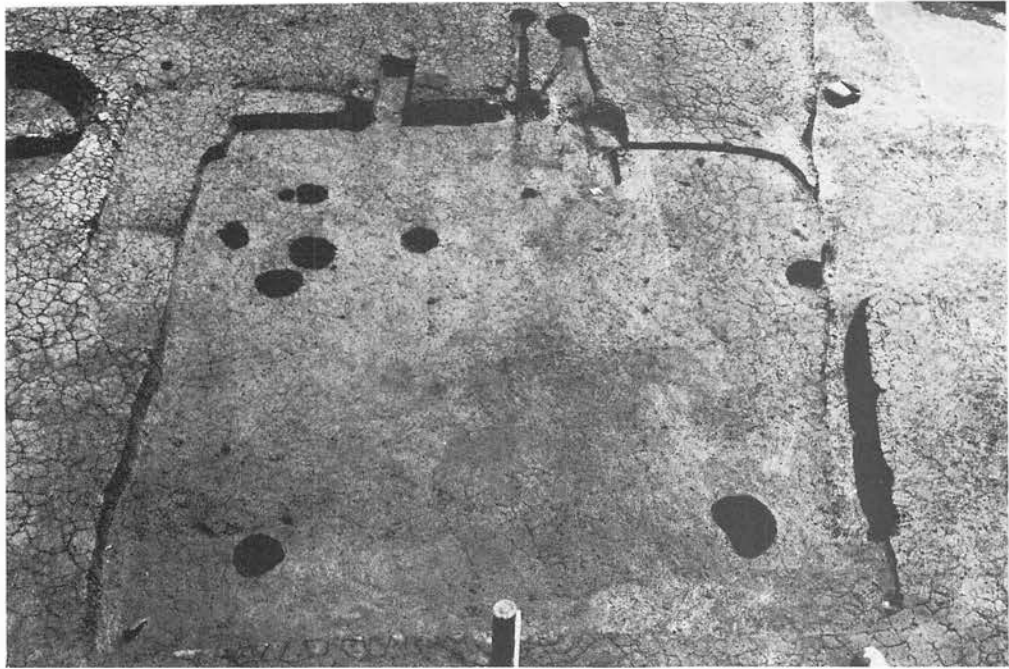


c. B-1 住居址(土器出土状況)

写真図版3 力石Ⅱ遺跡



a. B-2 住居址



b. B-3 住居址

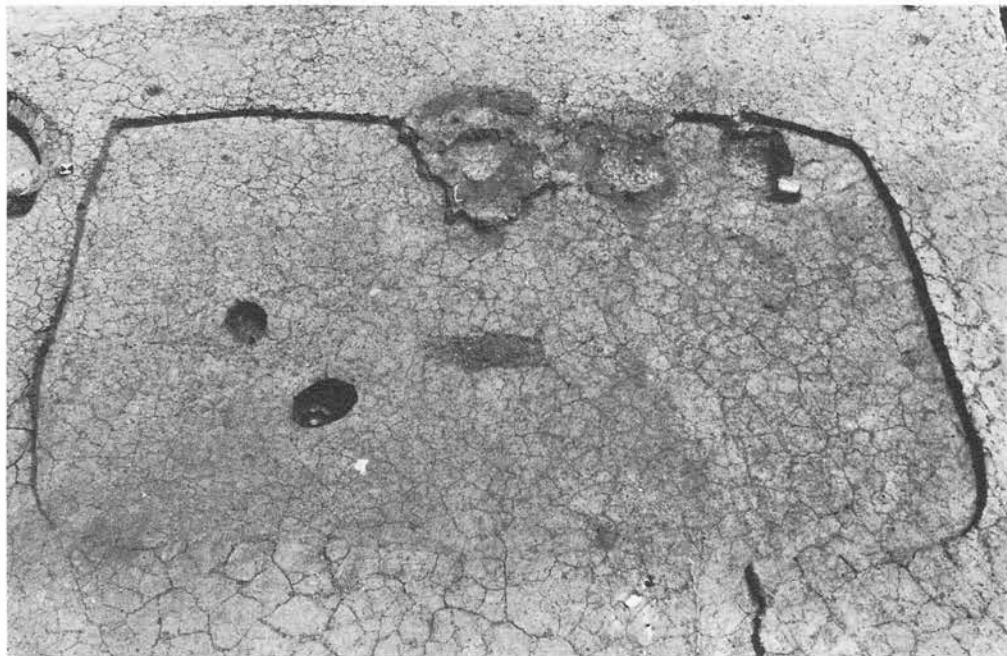
写真図版4 力石Ⅱ遺跡



a. B-2 住居址 (土器出土状況)



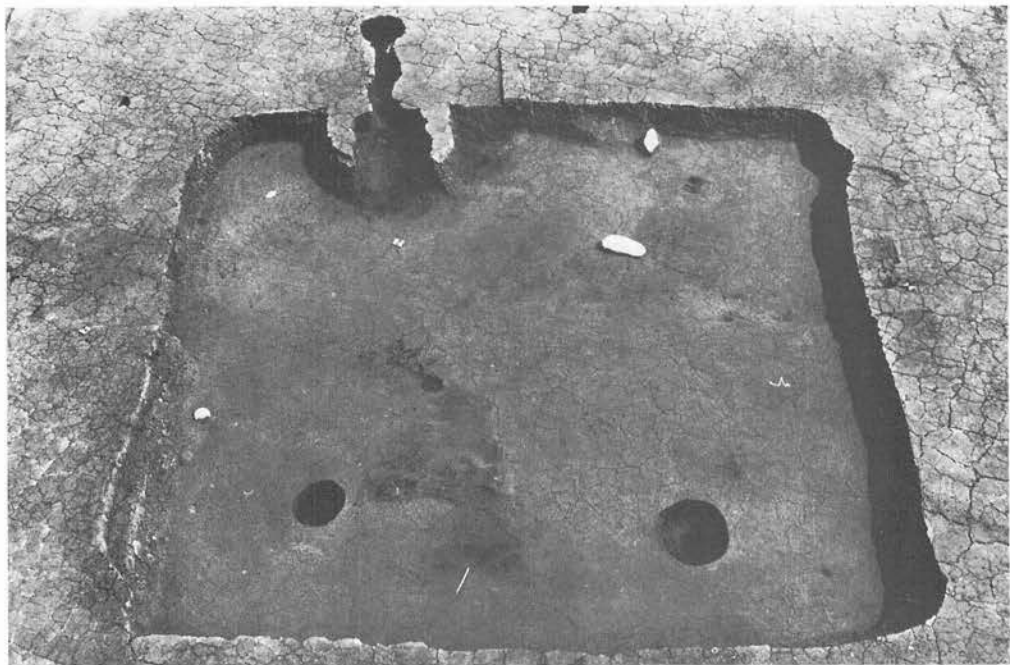
b. B-2 住居址 (土器出土状況)



c. B-4 住居址  
写真図版5 力石Ⅱ遺跡



a. C-1 住居址



b. C-2 住居址  
写真図版6 力石Ⅱ遺跡



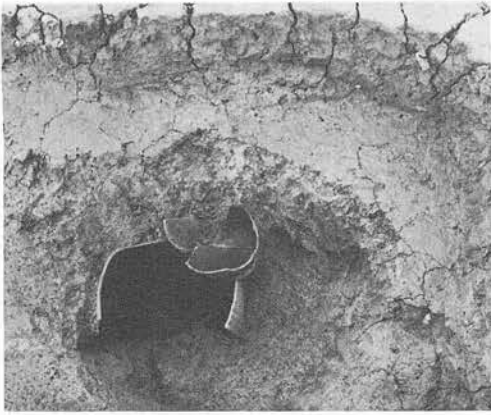


a. C-3 住居址



b. C-4 住居址

写真図版 7 力石Ⅱ遺跡



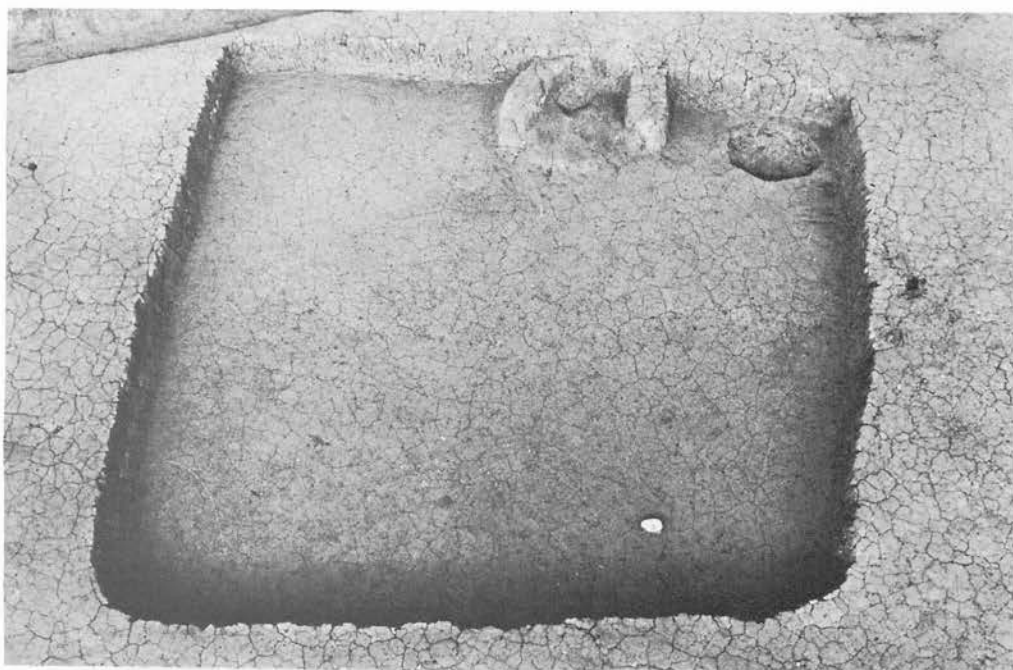
a. C-4 住居址(土器出土状況)



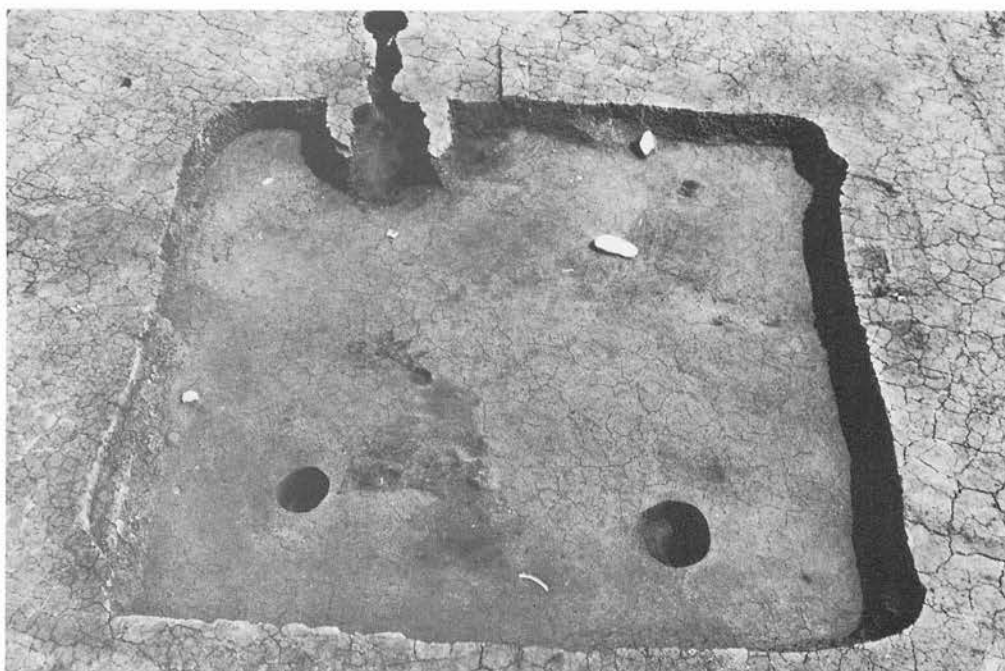
b. C-5 住居址(カマド土層断面)



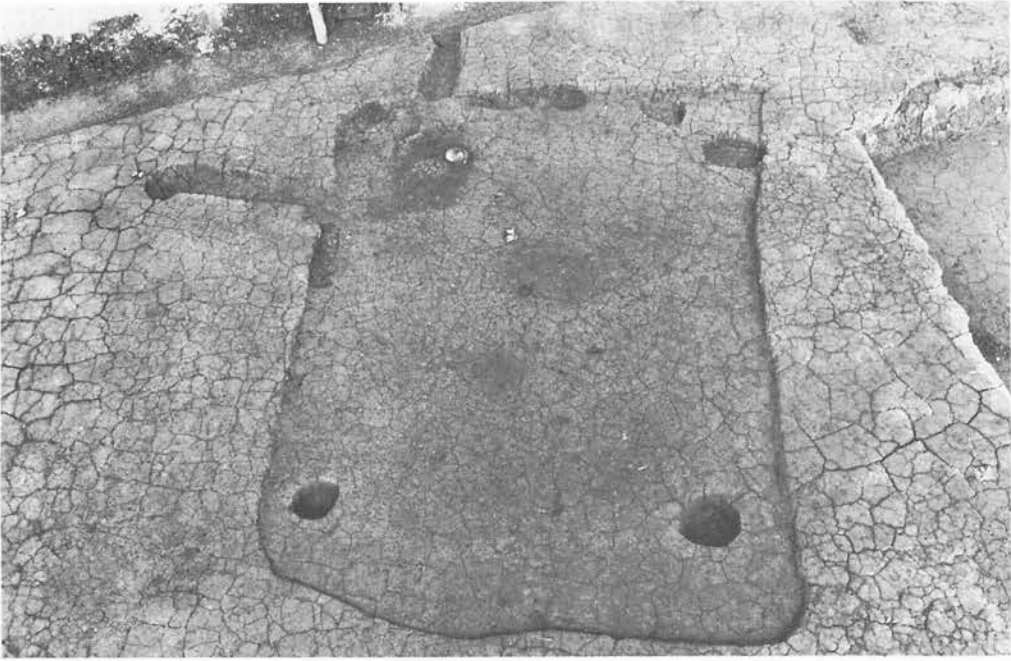
c. C-5 住居址  
写真図版8 力石Ⅱ遺跡



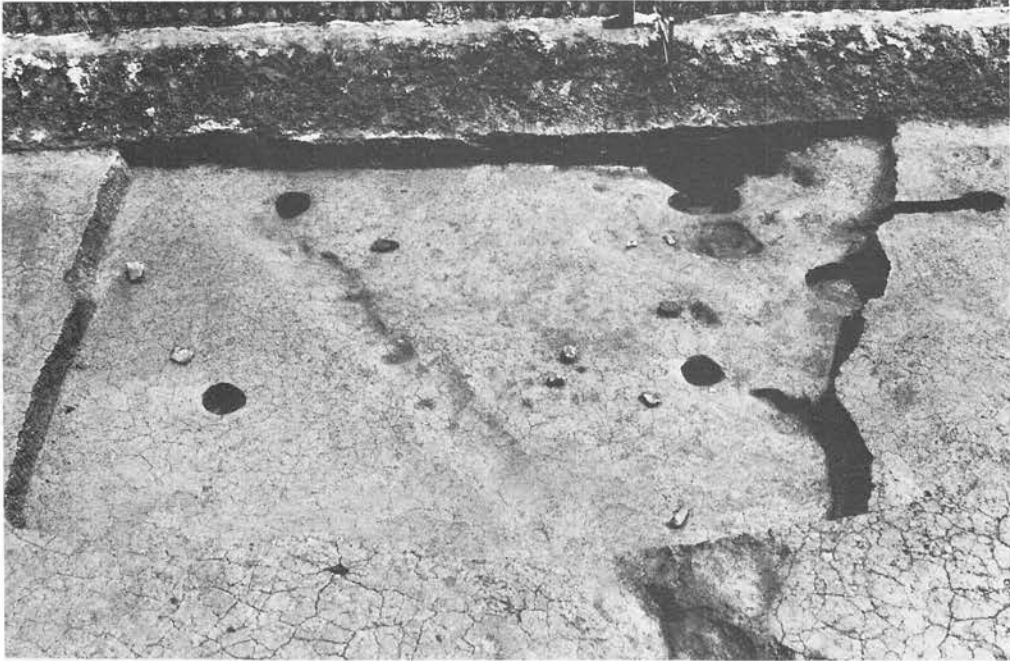
a. C-6 住居址



b. D-1 住居址  
写真図版9 力石Ⅱ遺跡



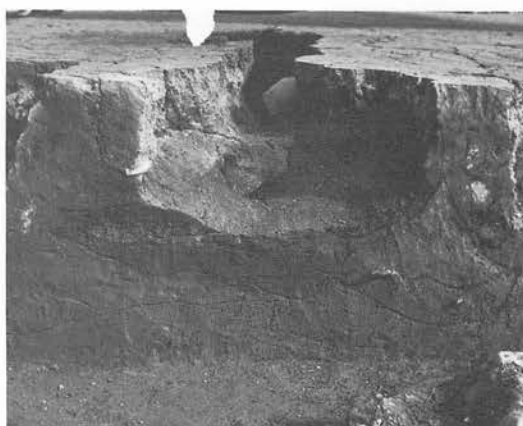
a. D-2 住居址



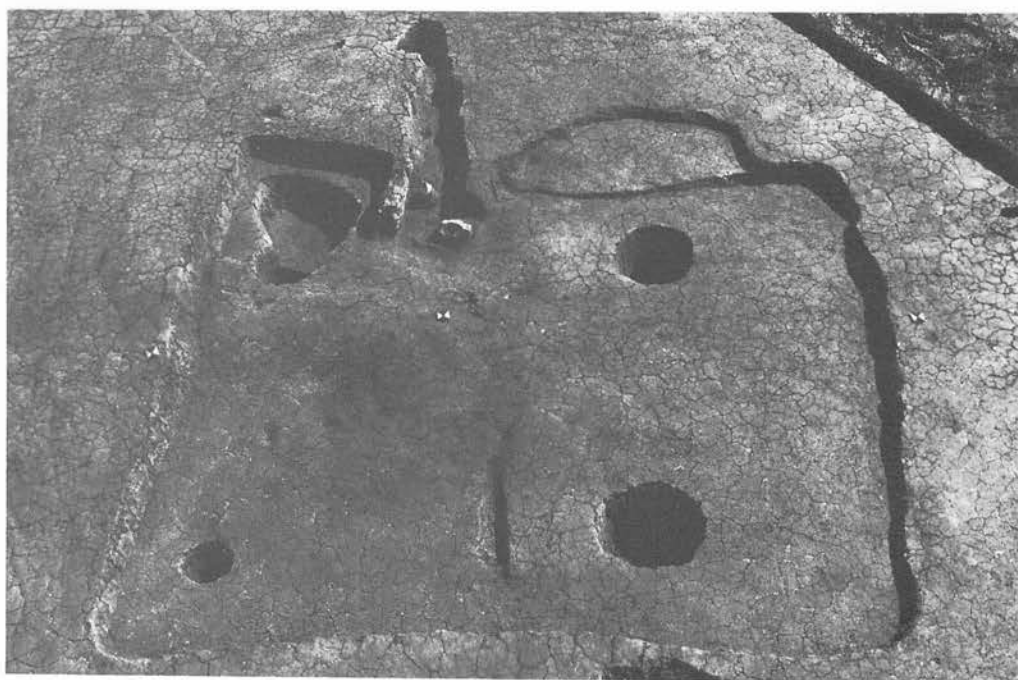
b. E-2 住居址  
写真図版10 力石Ⅱ遺跡



a. D-1 住居址 (煙出し部土器出土状況)



b. D-1 住居址 (カマド土層断面)

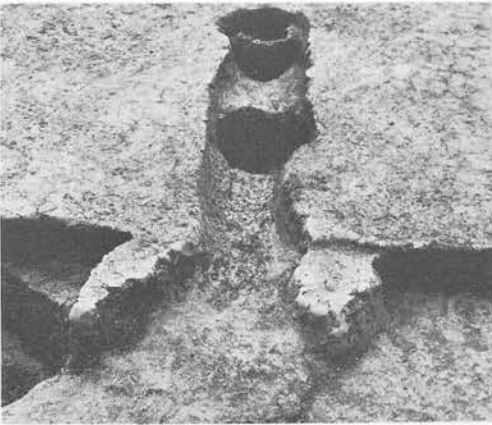


c. E-3 住居址

写真図版11 力石Ⅱ遺跡



a. F-1 住居址



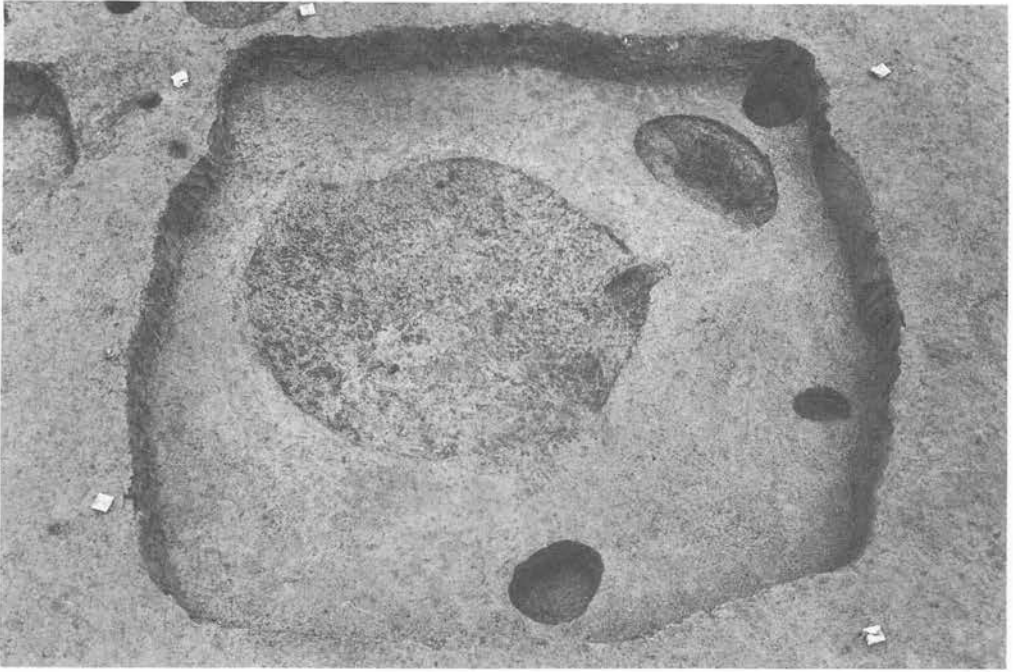
b. F-1 住居址(カマド)



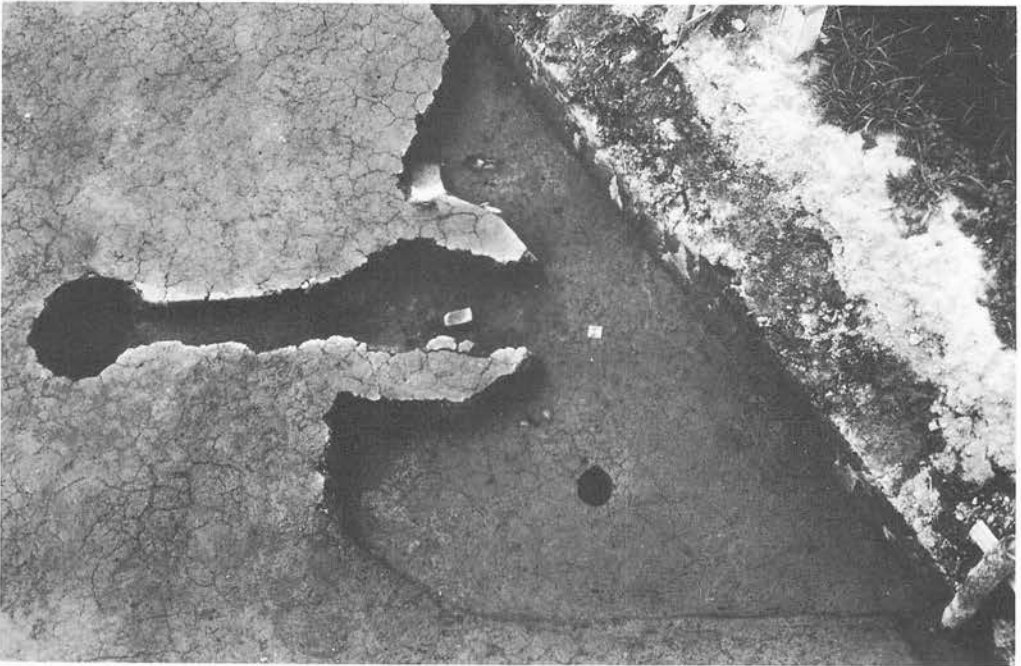
c. F-3 住居址(カマド)



d. F-2 住居址(土層断面)  
写真図版12 力石Ⅱ遺跡

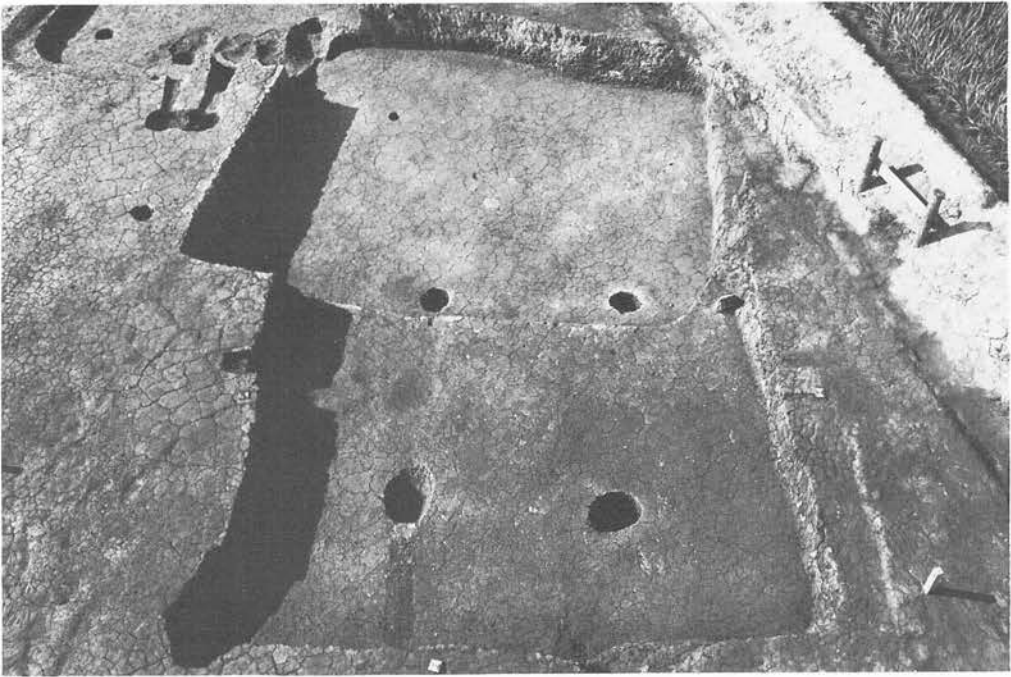


a. F-2 住居址

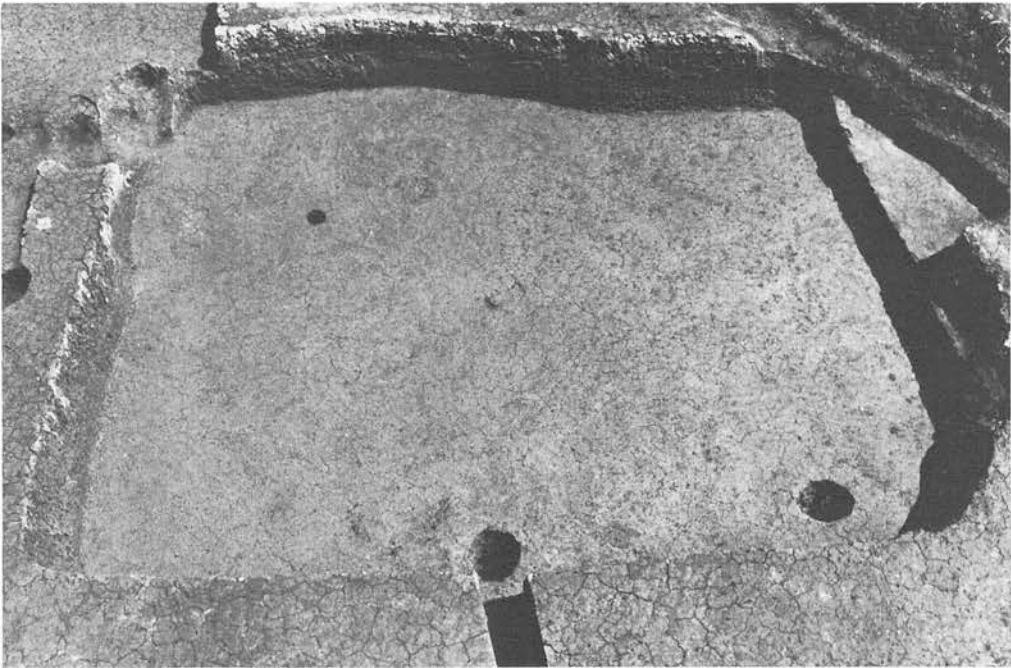


b. F-3 住居址

写真図版13 力石Ⅱ遺跡



a. G-1 住居址



b. G-2 住居址

写真図版14 力石Ⅱ遺跡

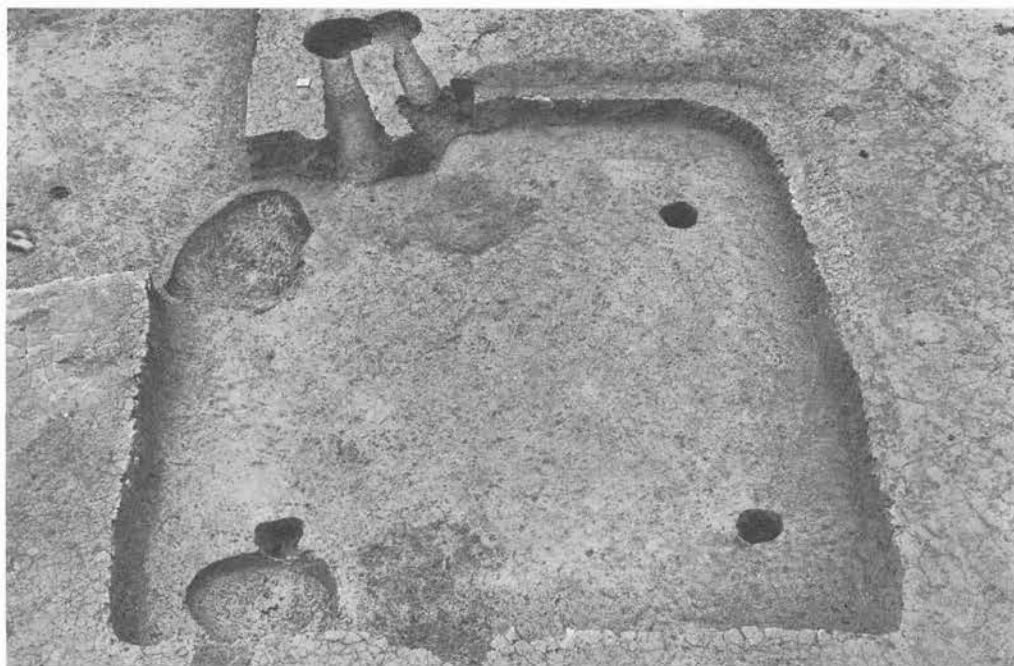




a. G-2 住居址 (鉄器出土状況)

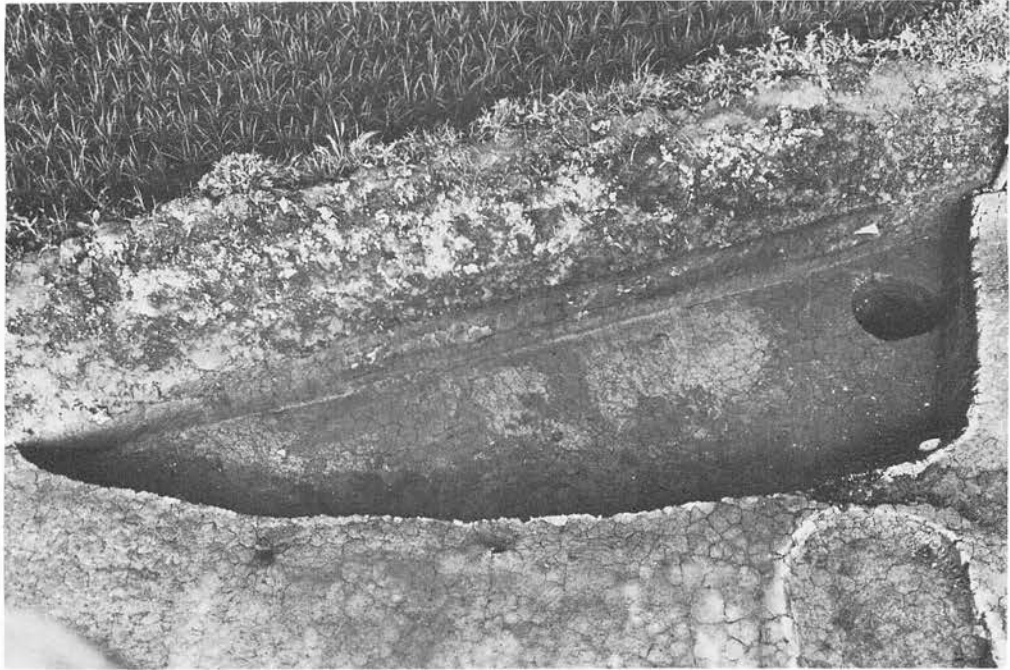


b. G-2 住居址 (土器出土状況)

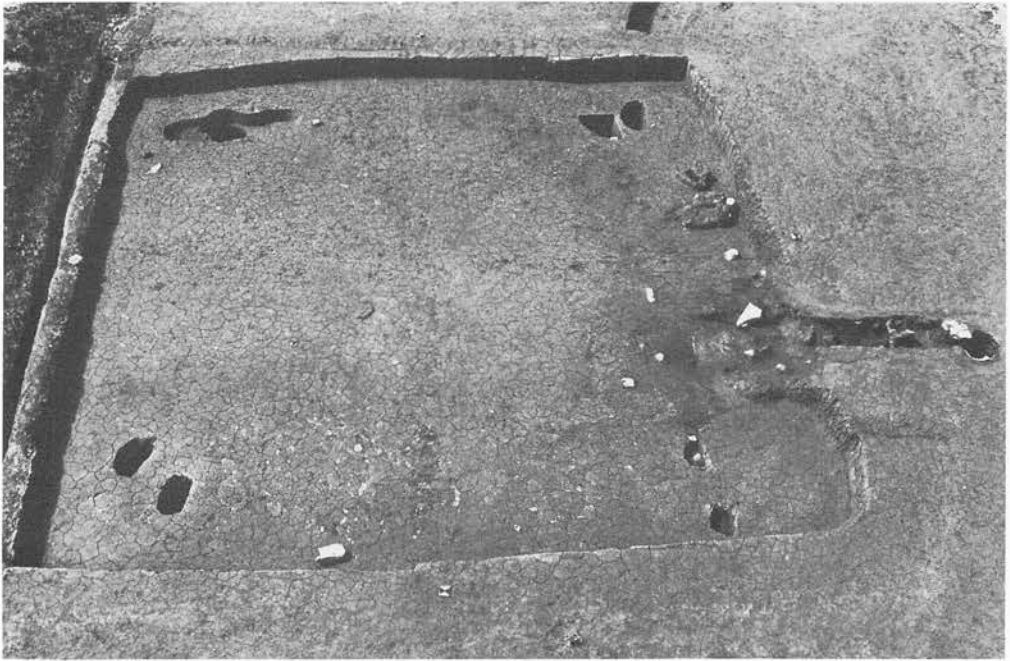


c. G-3 住居址

写真図版15 力石Ⅱ遺跡



a. H-1 住居址



b. H-2 住居址

写真図版16 力石Ⅱ遺跡



a. H-2 住居址(カマド)



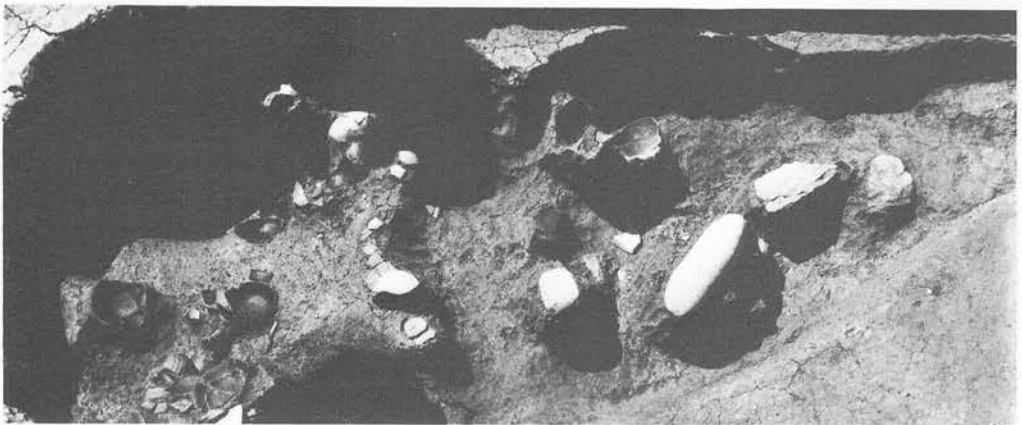
b. H-2 住居址(鉄器出土状況)



c. H-2 住居址(土器出土状況)



d. H-2 住居址(鉄器出土状況)



e. H-2 住居址(掘り方)  
写真図版17 力石Ⅱ遺跡



a. I-1 住居址

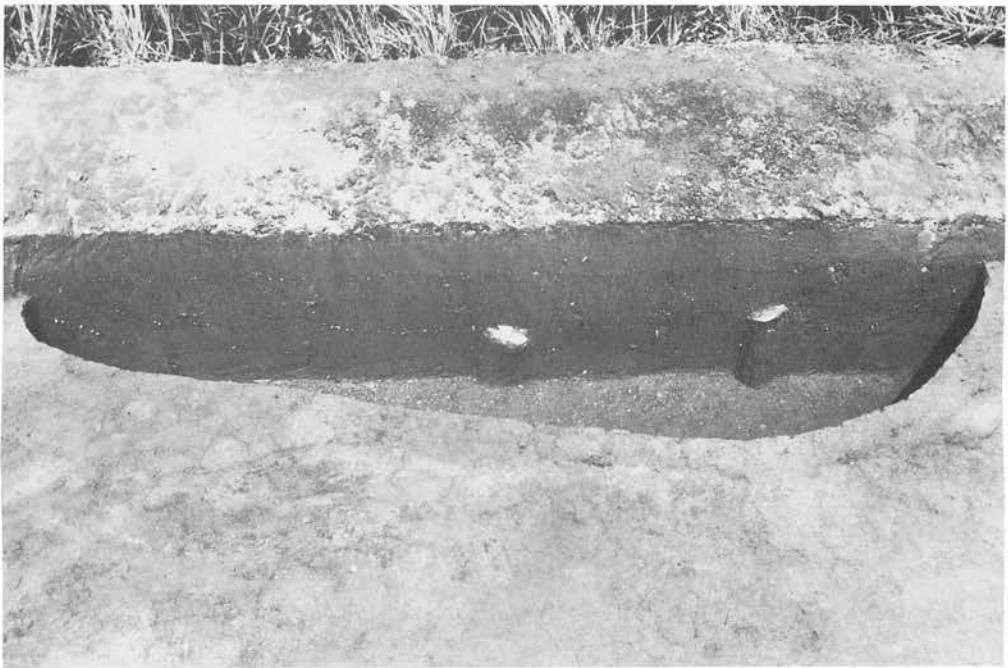


b. I-1 住居址(カマド)



c. I-1 住居址(石帯出土状況)

写真図版18 カ石Ⅱ遺跡

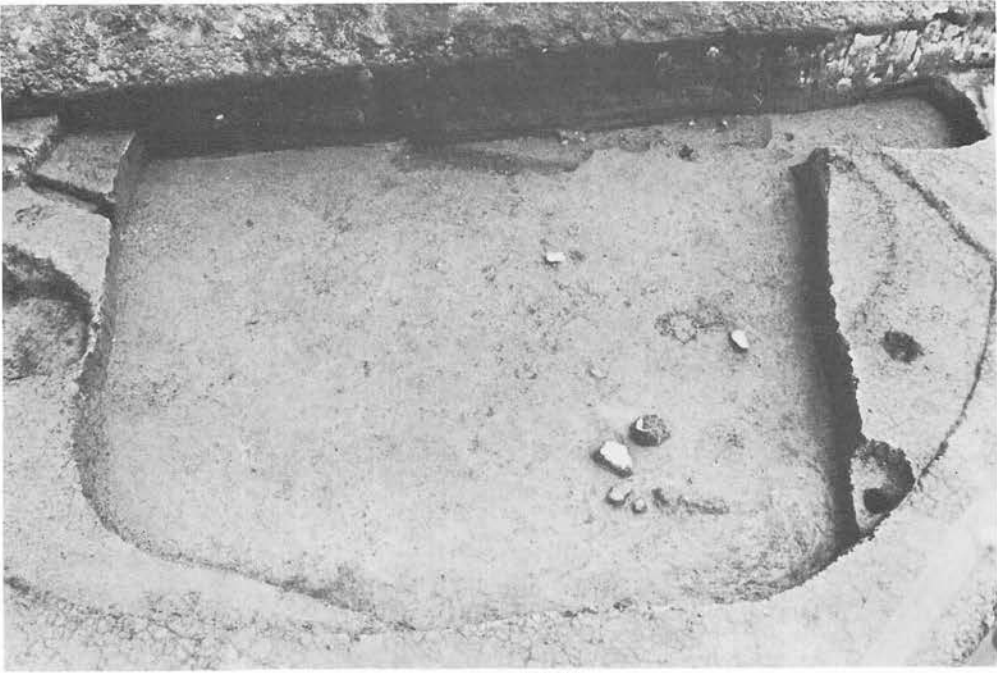


a. I-2 住居址



b. I-3 住居址

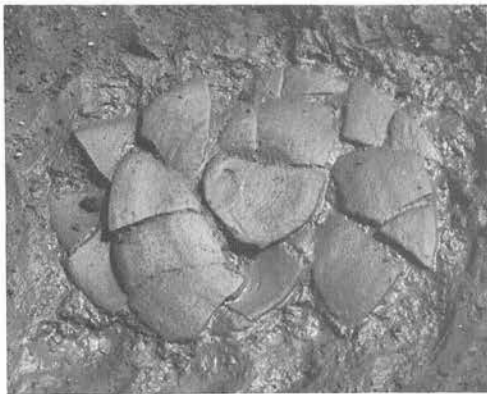
写真図版19 力石Ⅱ遺跡



a. J-1 住居址



b. J-1 住居址(土層断面)

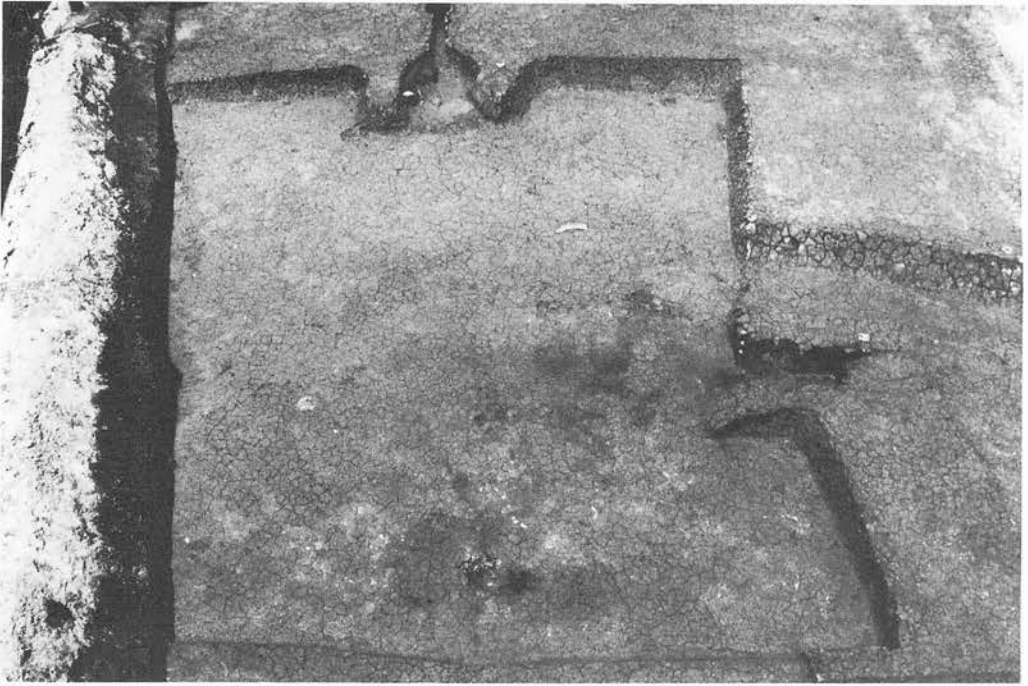


c. J-1 住居址(土器出土状況)

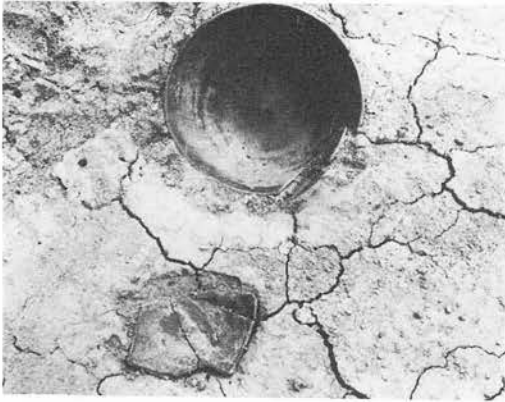


d. K-1 住居址(カマド)

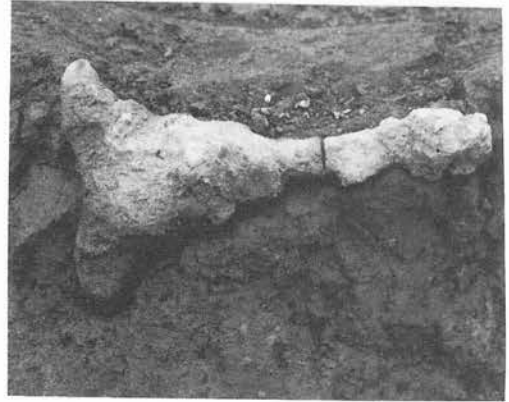
写真図版20 カ石Ⅱ遺跡



a. K-1 住居址



b. K-1 住居址(土器出土状況)



c. K-1 住居址(鉄器出土状況)

写真図版21 力石Ⅱ遺跡



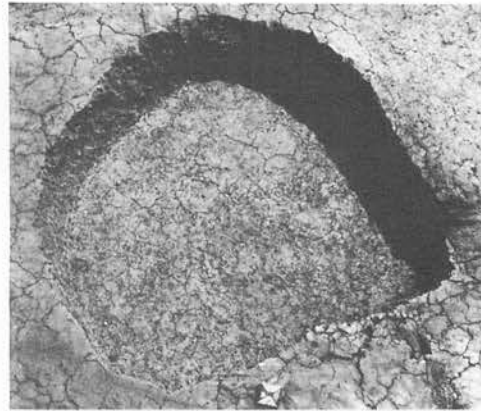
a. 墓坛



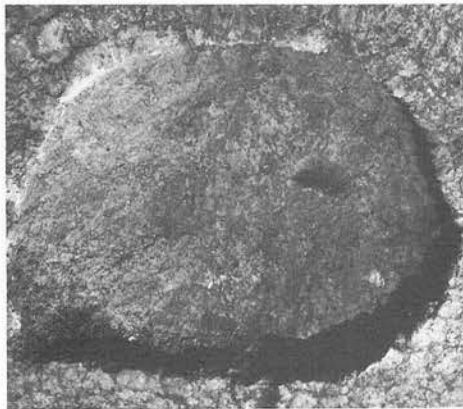
b. F-52ピット



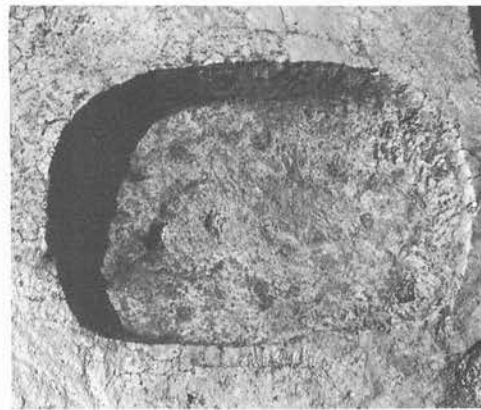
c. G-52ピット



d. F-52ピット



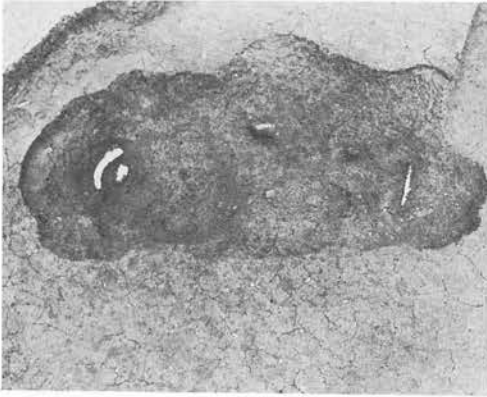
e. G-53ピット



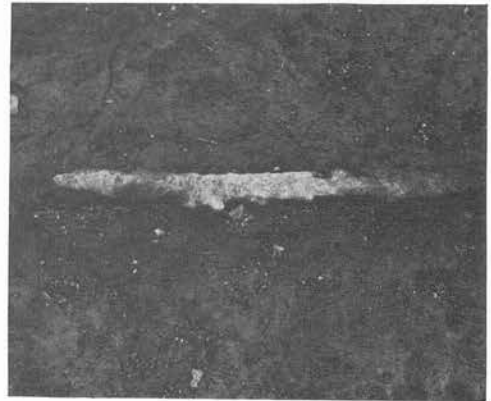
f. H-51ピット

写真図版22 力石Ⅱ遺跡





a. J-51ピット



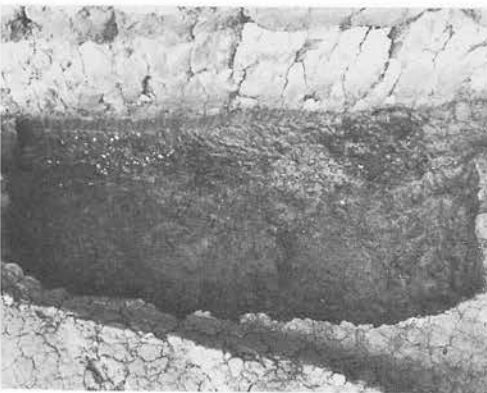
b. J-51ピット (鉄器出土状況)



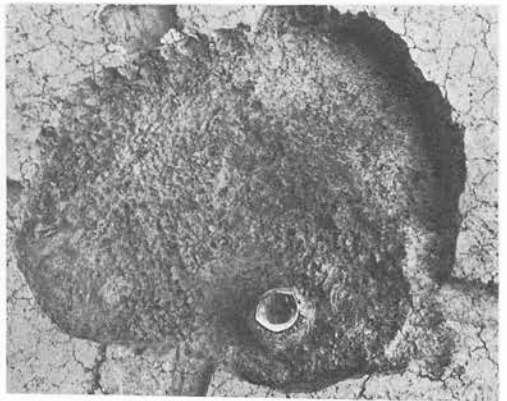
c. J-51ピット



d. J-51ピット (鉄器出土状況)

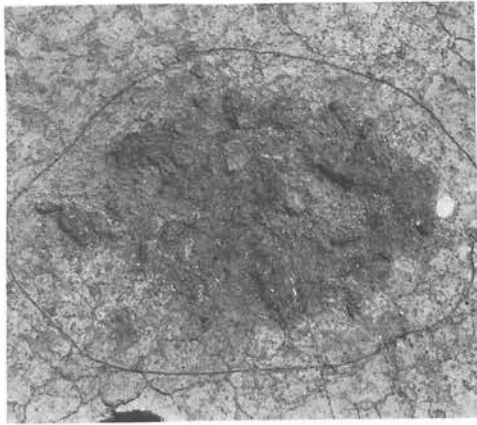


e. J-53ピット

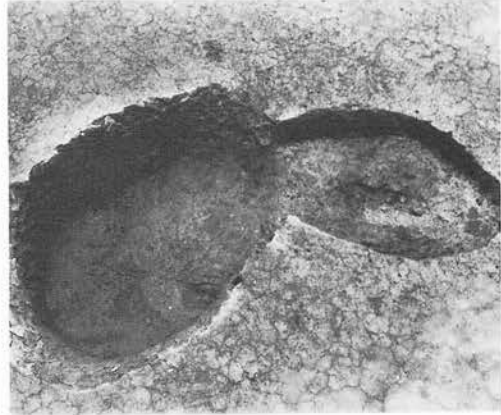


f. J-54ピット

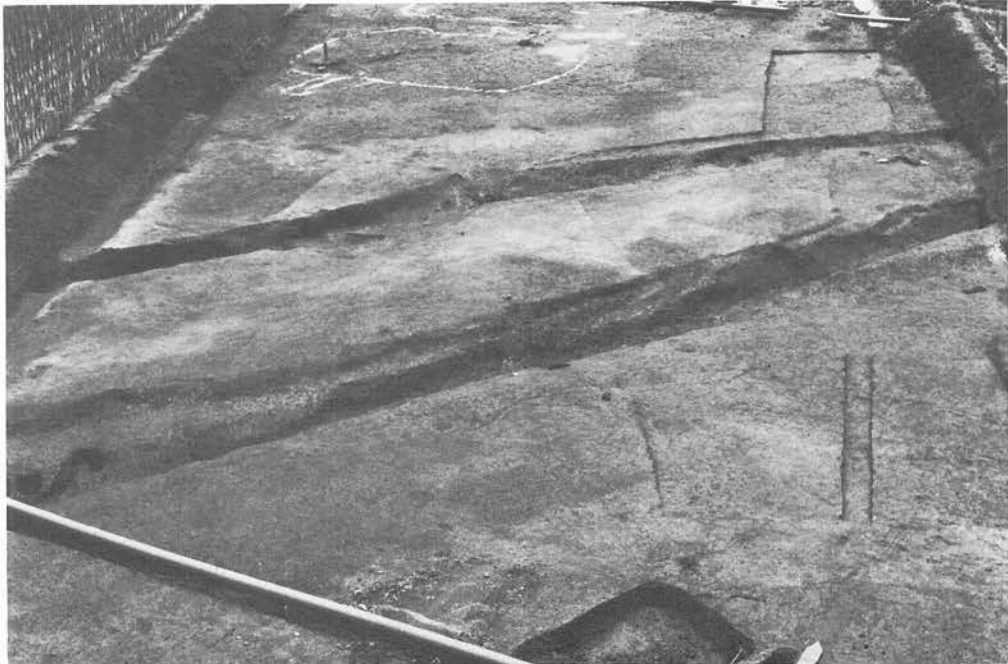
写真図版23 力石Ⅱ遺跡



a. J-55ピット

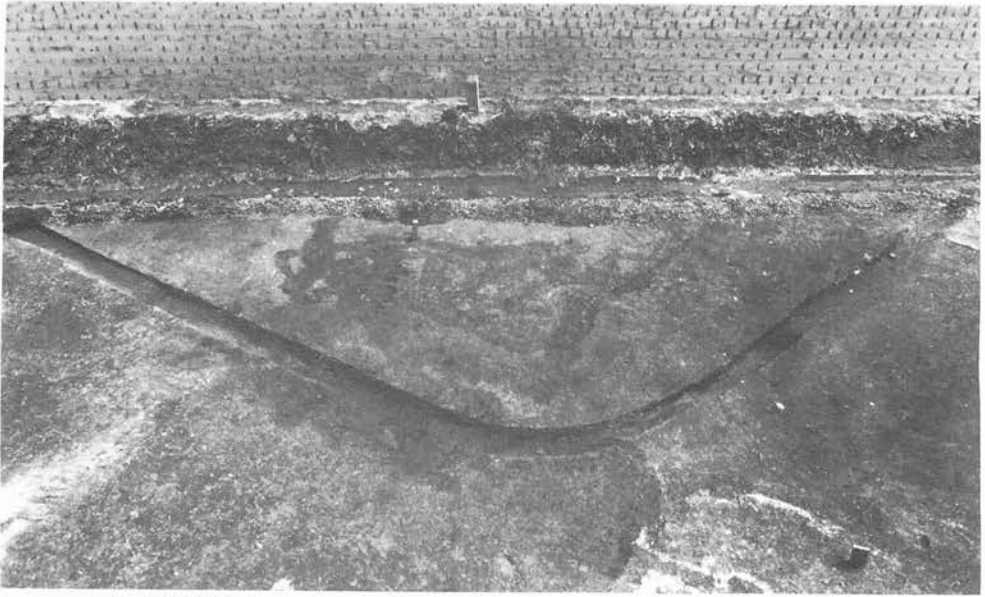


b. K-51ピット・K-52ピット



c. E-101溝跡・E-102溝跡・E-103溝跡

写真図版24 力石Ⅱ遺跡



a. G-101溝跡



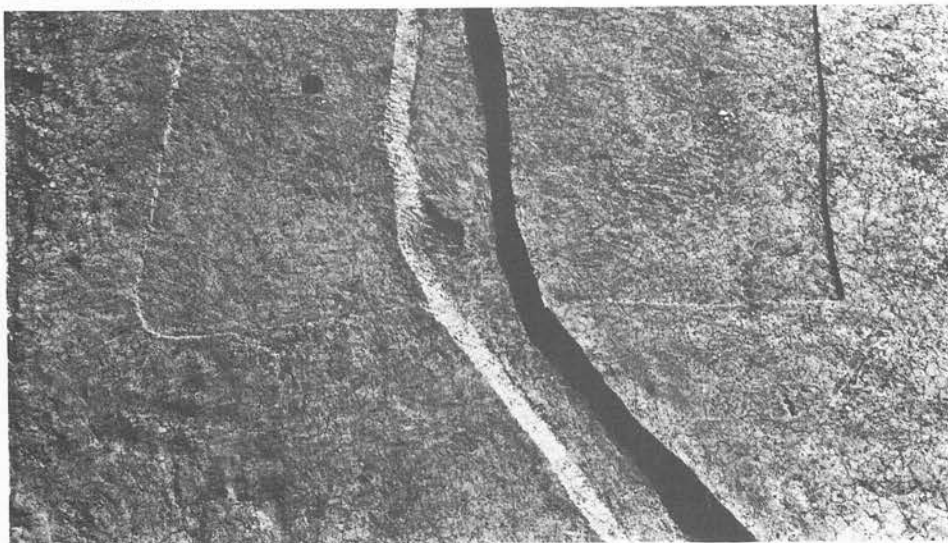
b. I-101溝跡

写真図版25 力石Ⅱ遺跡

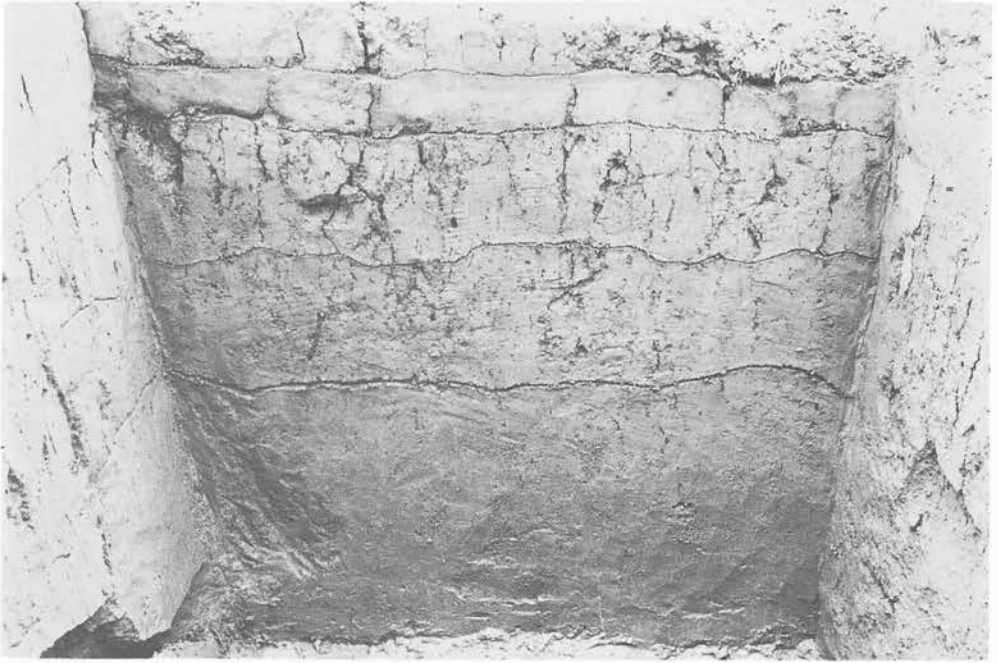
a. K-101溝跡



b. L-101溝跡



写真図版26 力石Ⅱ遺跡

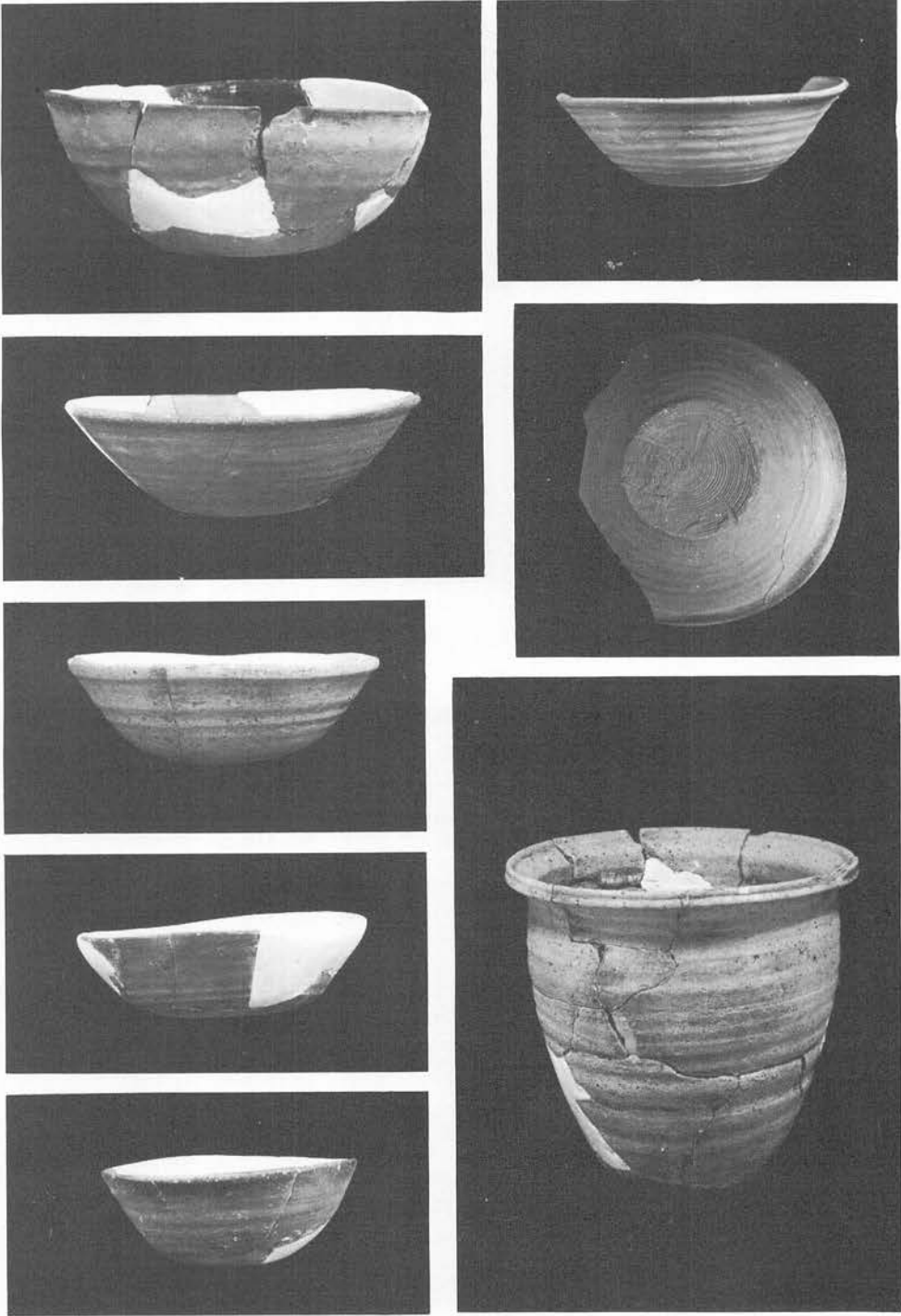


a. 力石Ⅱ遺跡南端土層断面

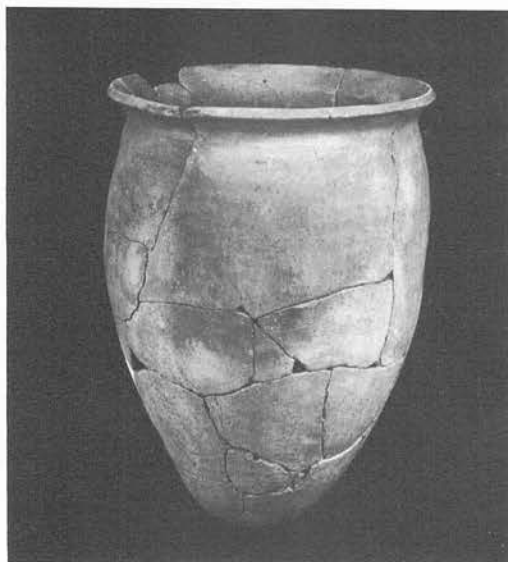
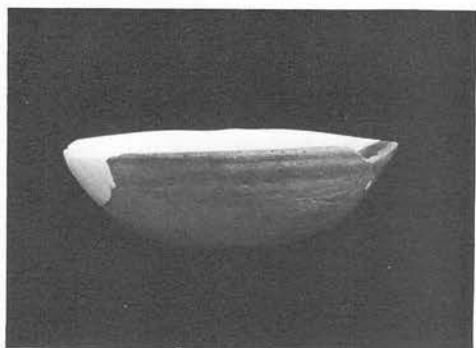


b. 発掘調査風景

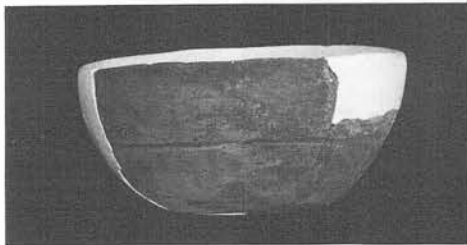
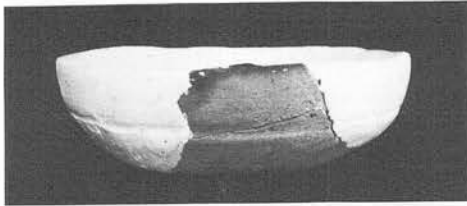
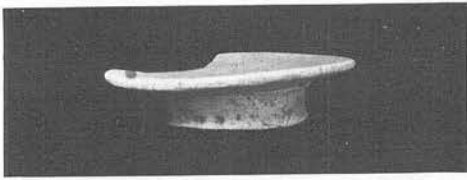
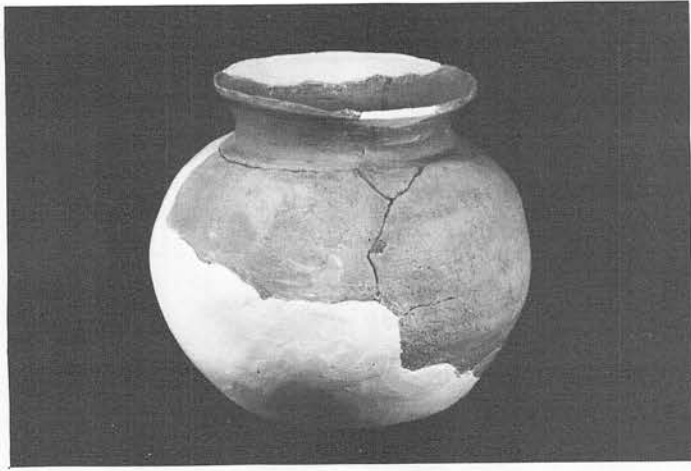
写真図版27 力石Ⅱ遺跡



A-1 住居址・B-1 住居址  
 写真図版28 力石Ⅱ遺跡

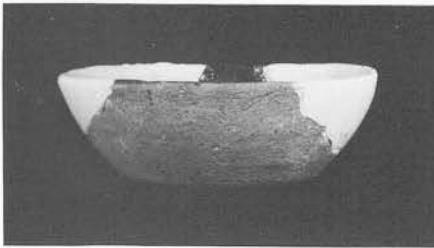
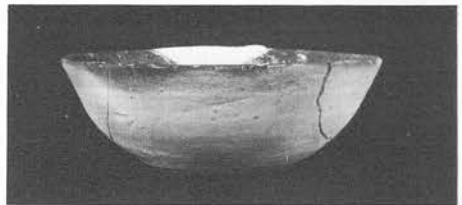
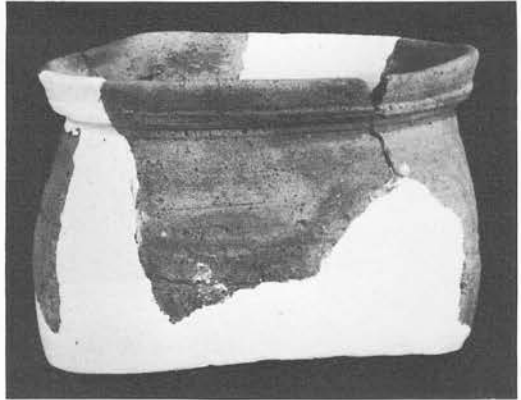
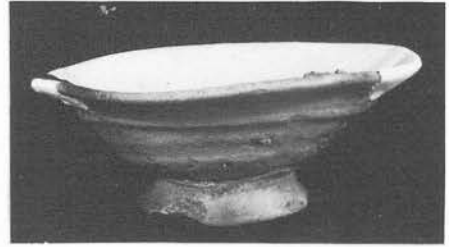
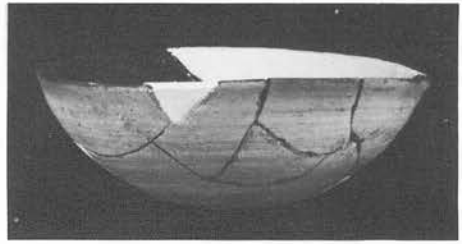
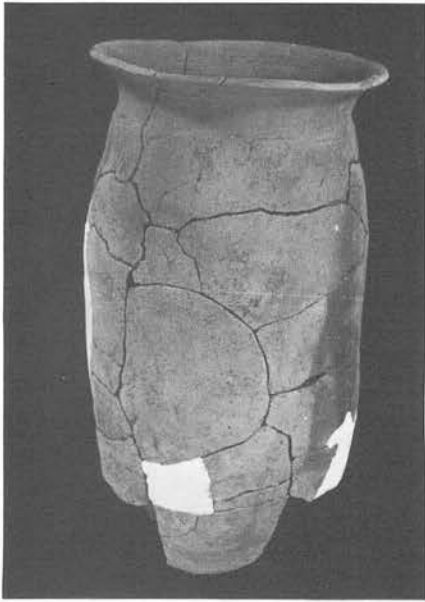


B-2 住居址  
写真図版29 力石Ⅱ遺跡

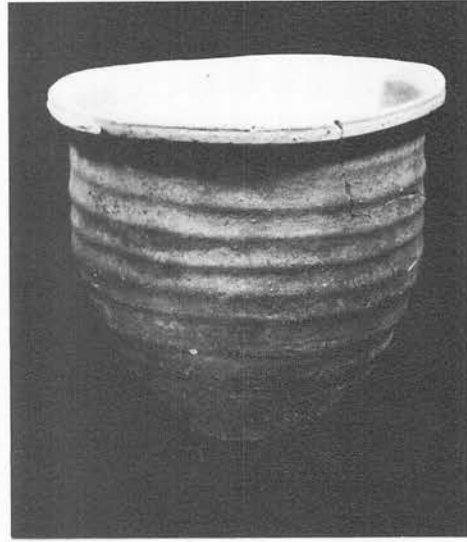
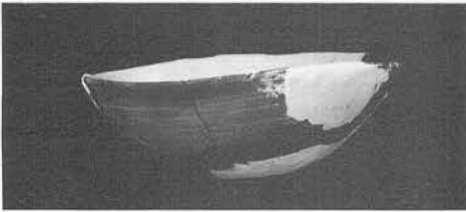
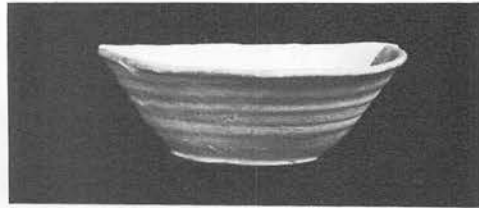
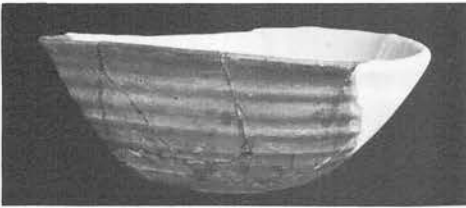
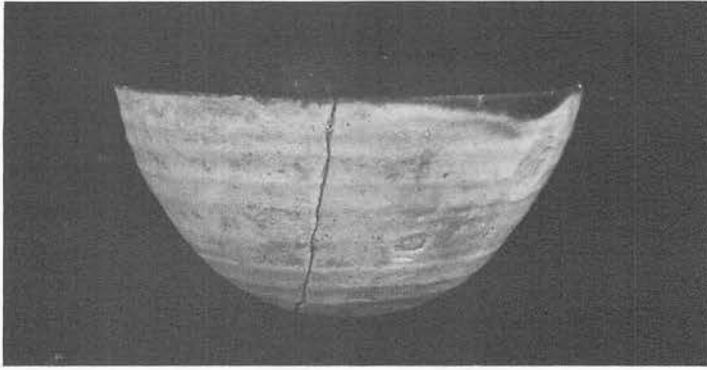


B-2 住居址・B-4 住居址・C-1 住居址  
写真図版30 力石Ⅱ遺跡

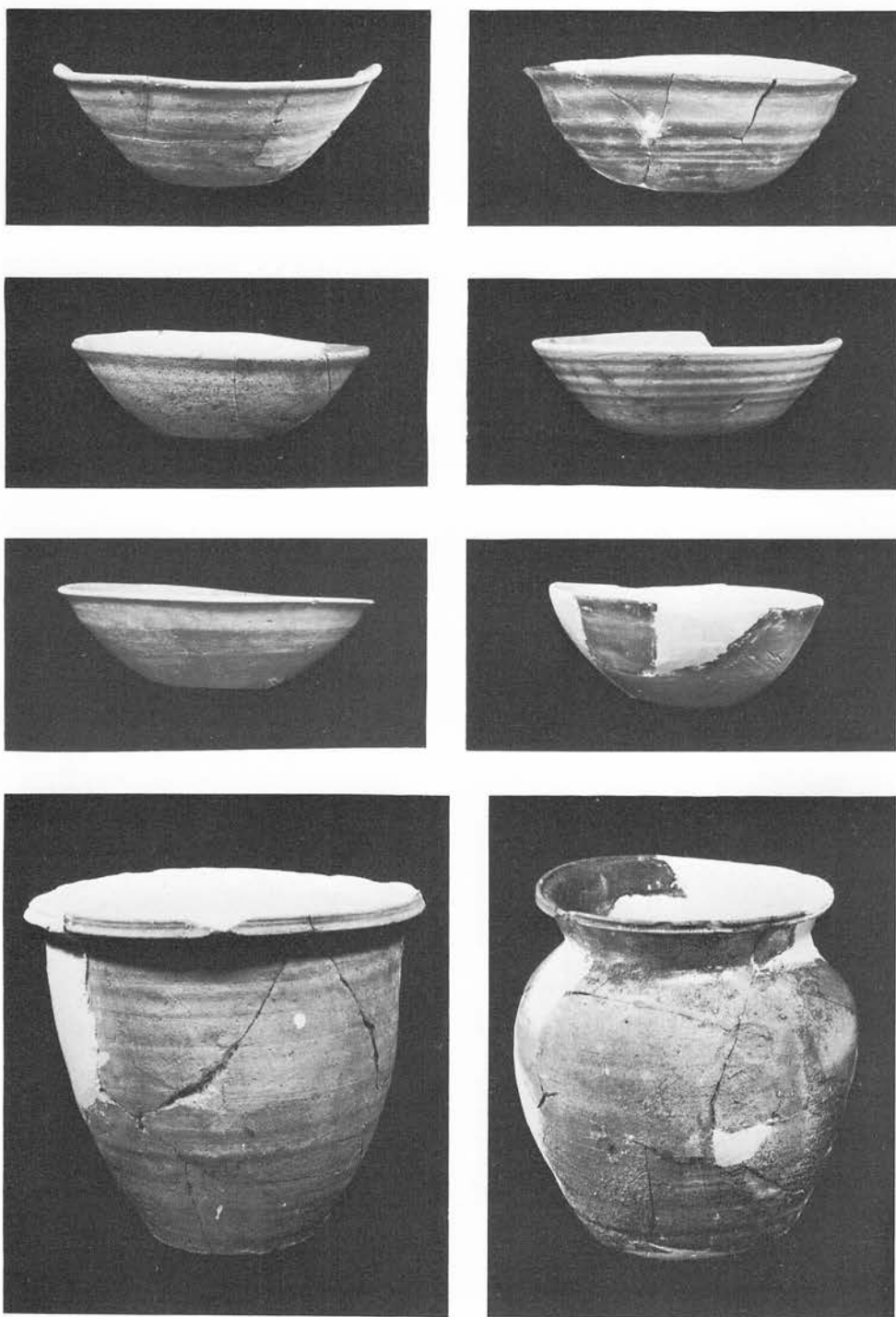




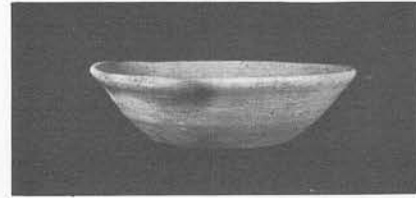
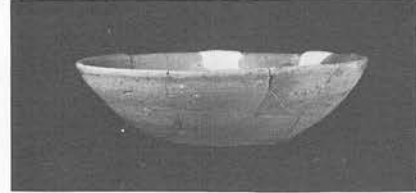
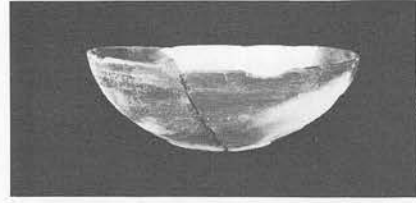
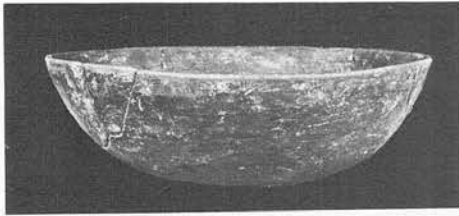
C-1 住居址・C-2 住居址・C-4 住居址  
写真図版31 力石Ⅱ遺跡



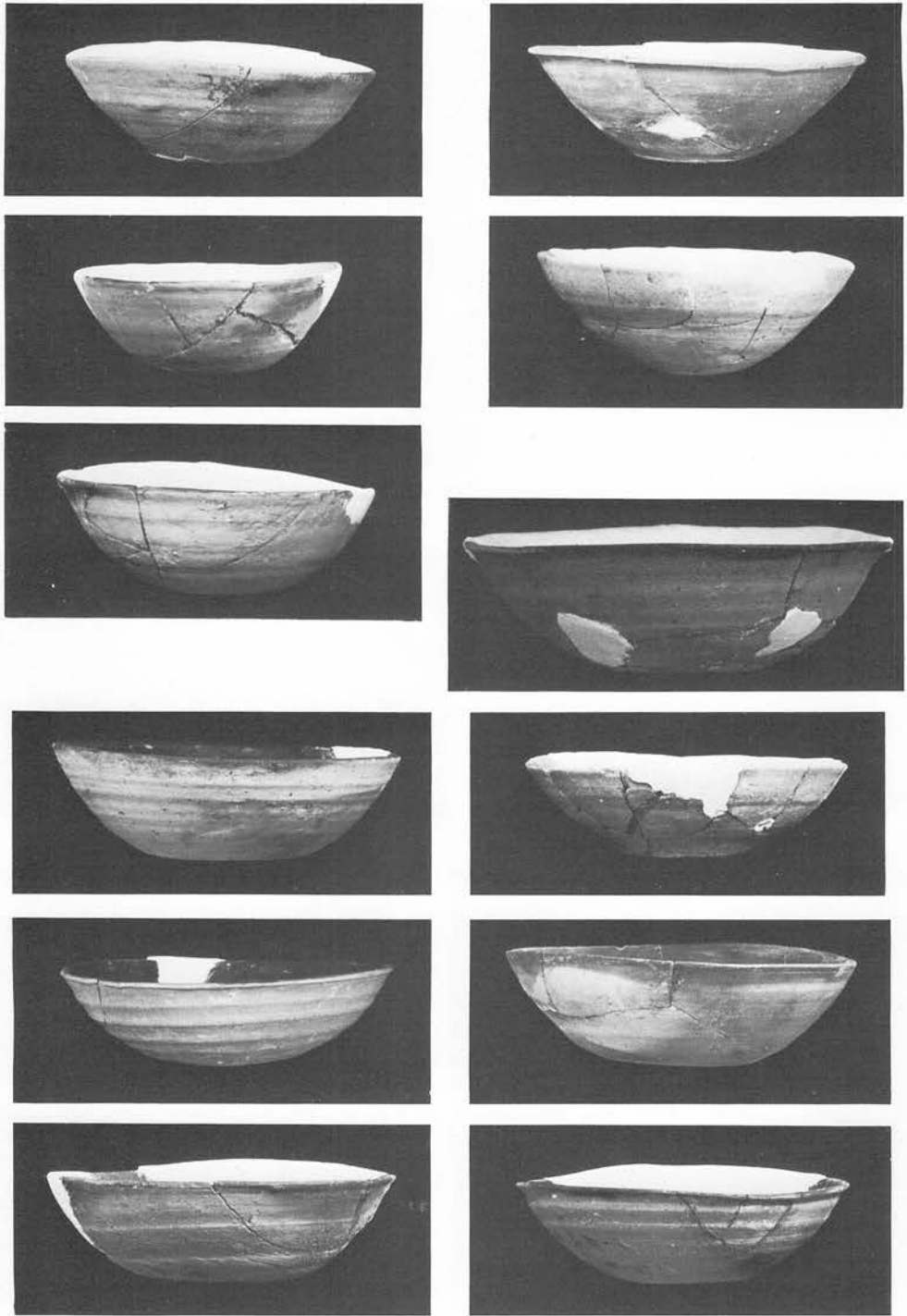
C-4 住居址・C-5 住居址・C-6 住居址  
写真図版32 力石Ⅱ遺跡



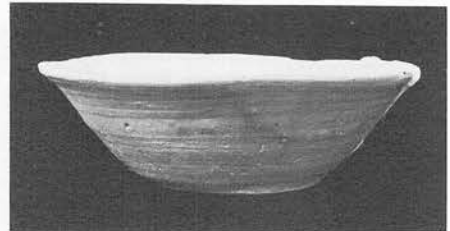
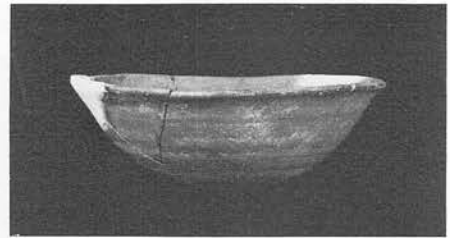
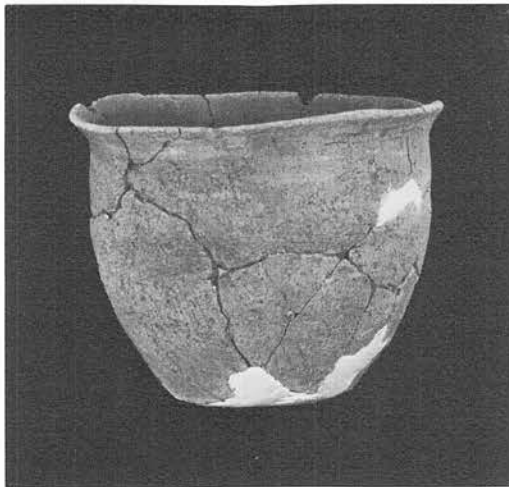
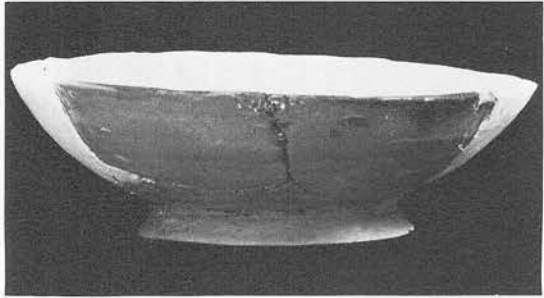
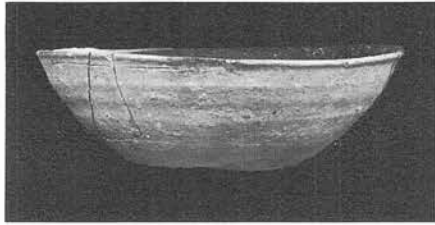
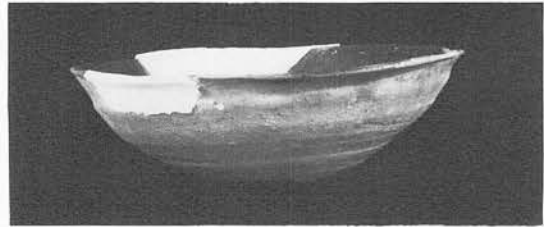
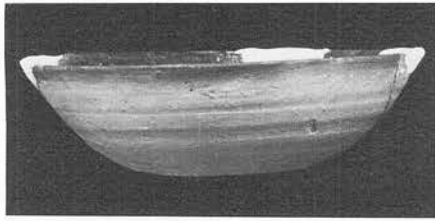
D-1 住居址  
写真図版33 力石Ⅱ遺跡



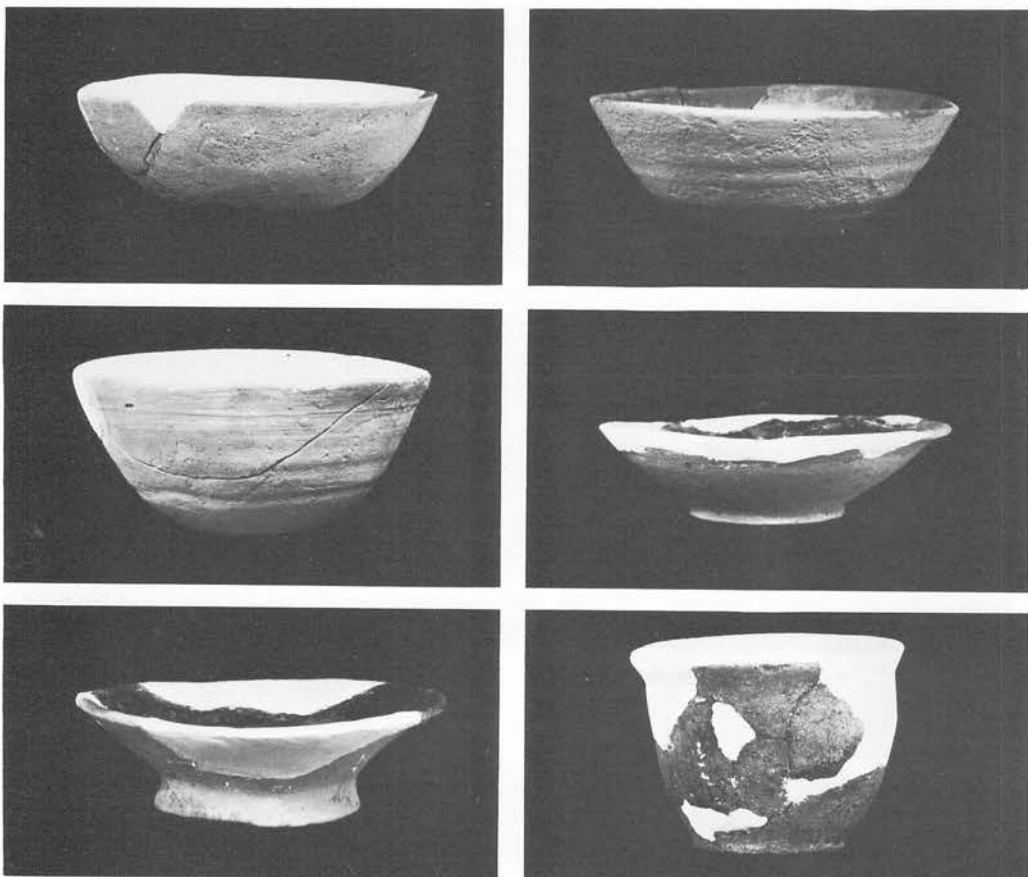
D-1 住居址・E-2 住居址・F-2 住居址  
写真図版34 力石Ⅱ遺跡



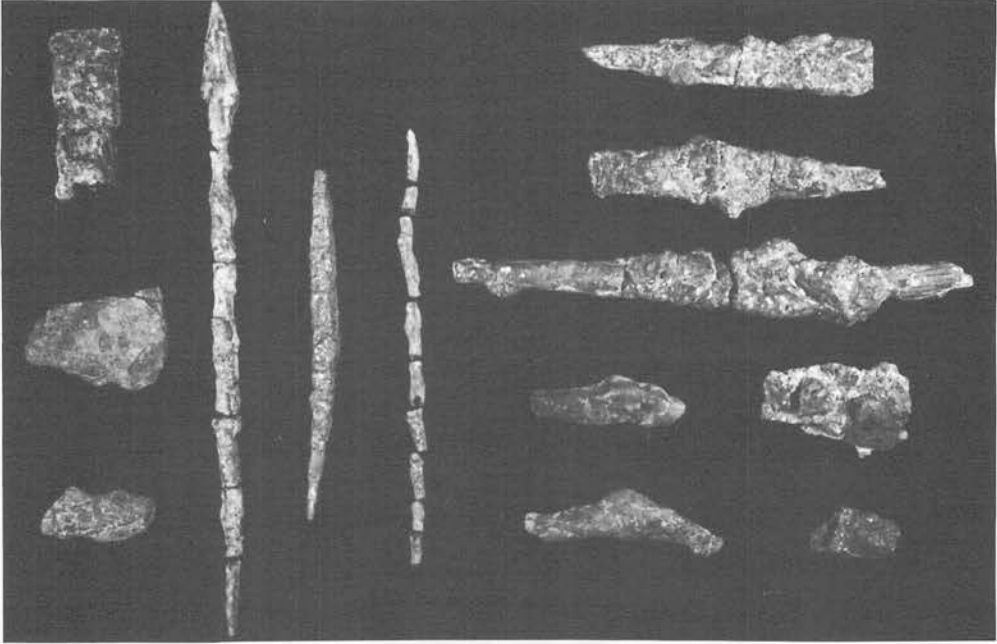
G-2 住居址・H-2 住居址  
 写真図版35 力石Ⅱ遺跡



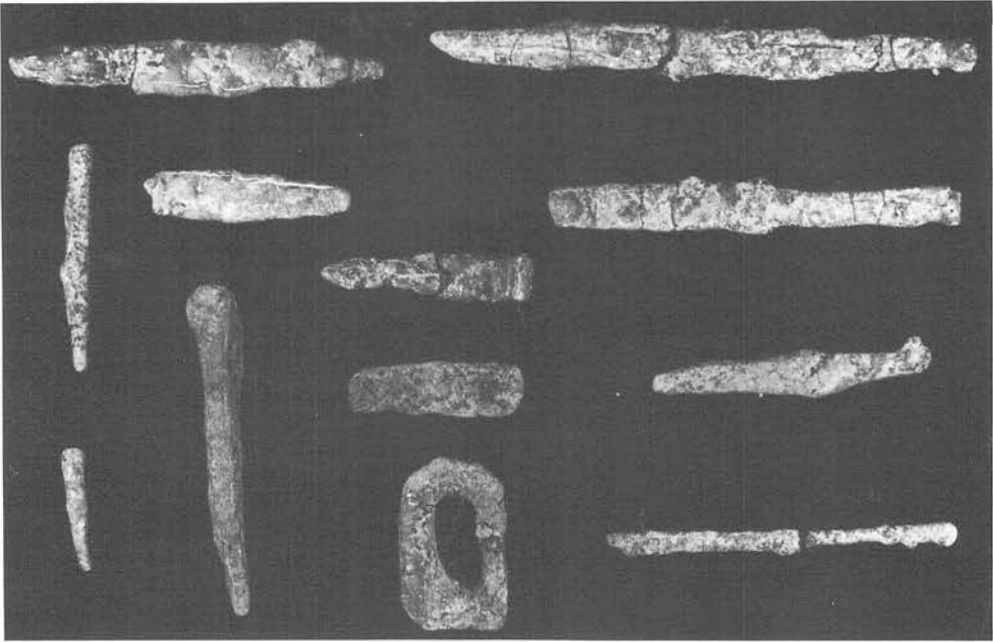
H-2 住居址・I-1 住居址・I-3 住居址・J-1 住居址  
写真図版36 力石Ⅱ遺跡



K-1 住居址・C区  
写真図版37 力石Ⅱ遺跡

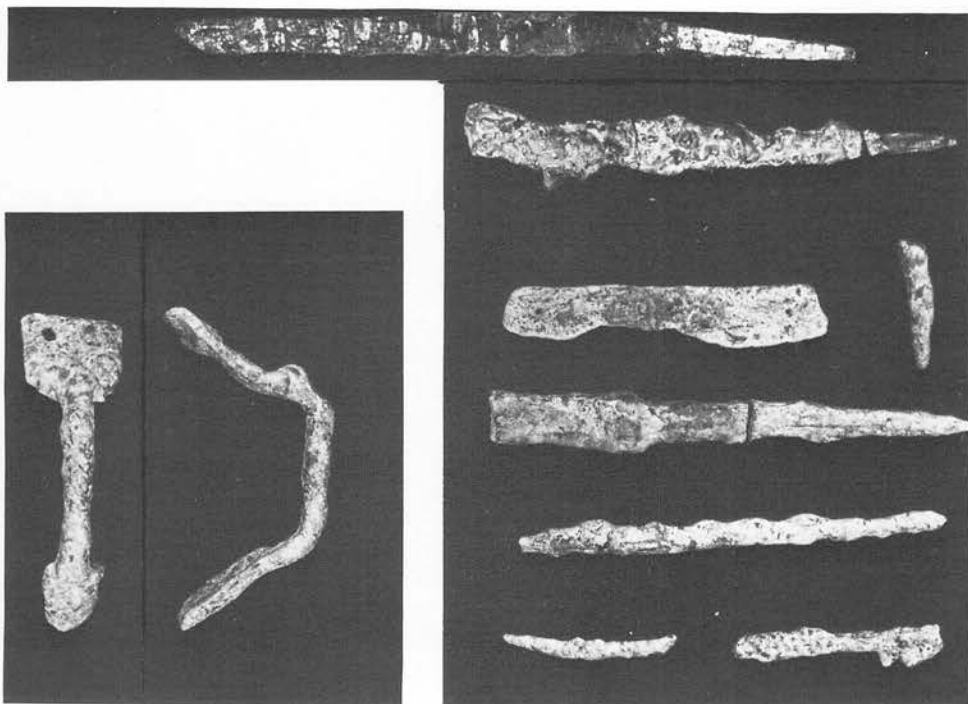


a. 鉄器 (B~F住居址出土)



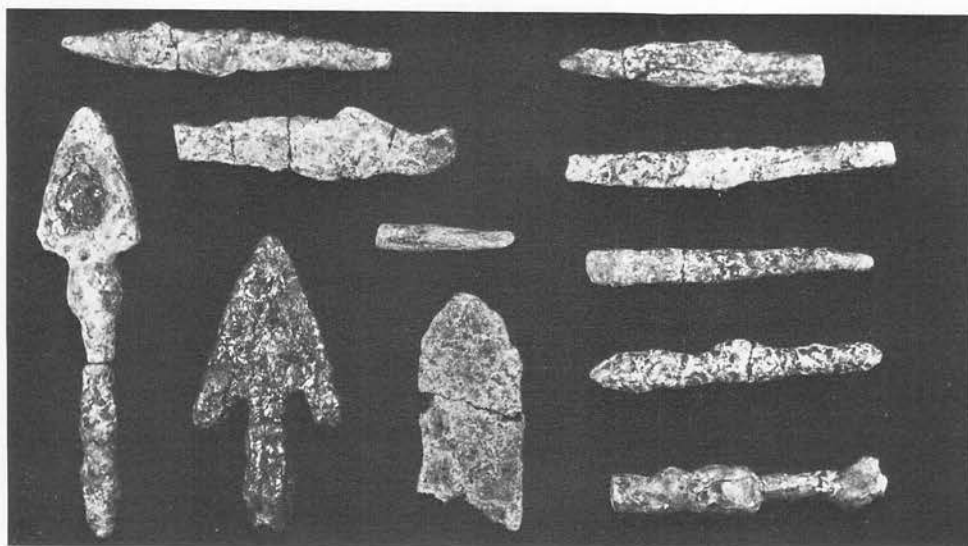
b. 鉄器 (G-2住居址出土)  
写真図版38 力石Ⅱ遺跡





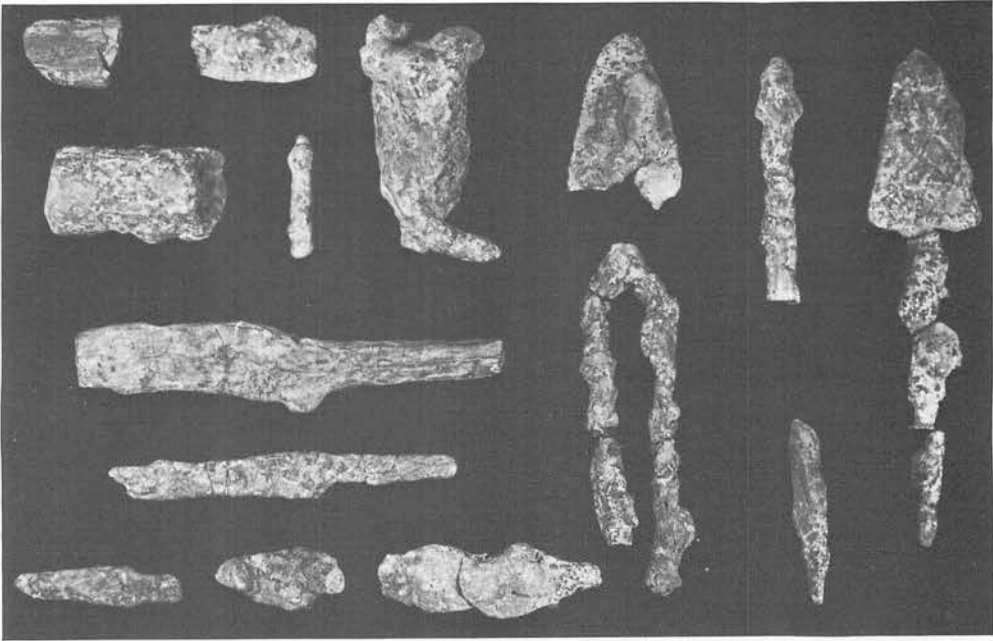
a. 鉄器 (G-2 住居址出土)

b. 鉄器 (G-2 住居址・G-3 住居址出土)

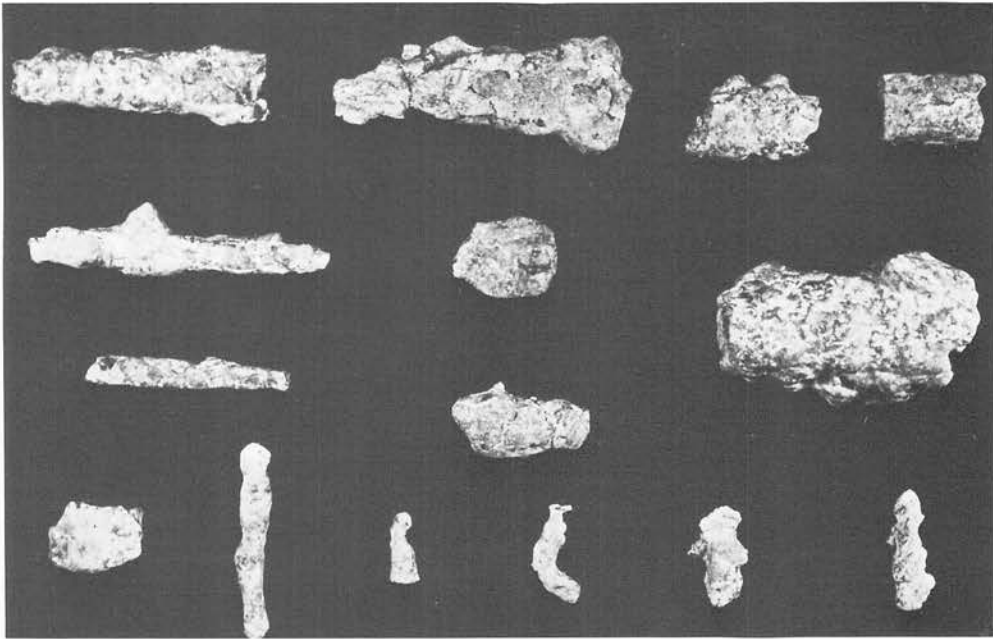


c. 鉄器 (H-2 住居址出土)

写真図版39 力石Ⅱ遺跡

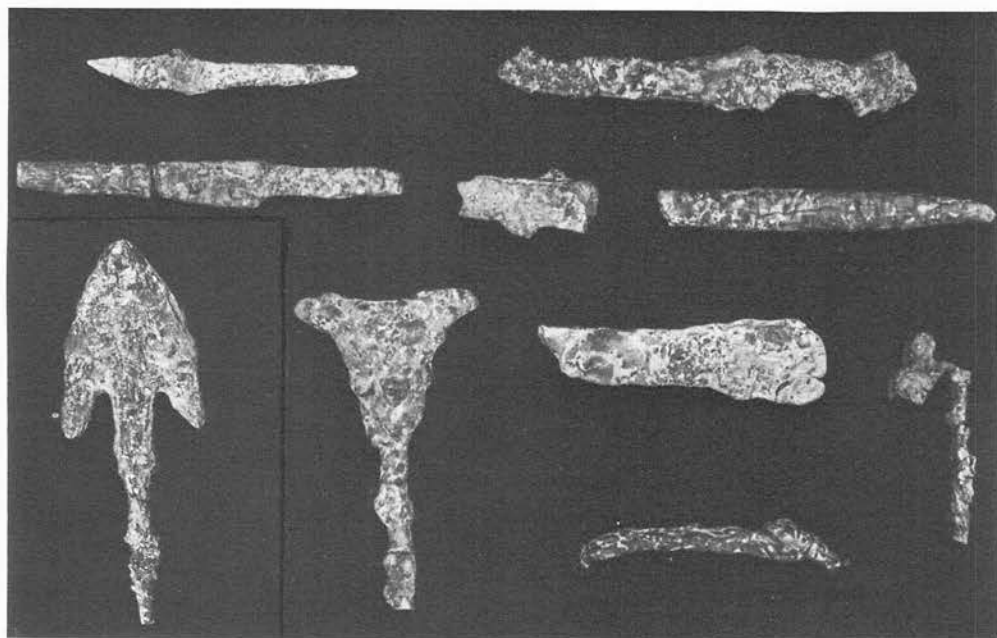


a. 鉄器(I-1住居址出土)

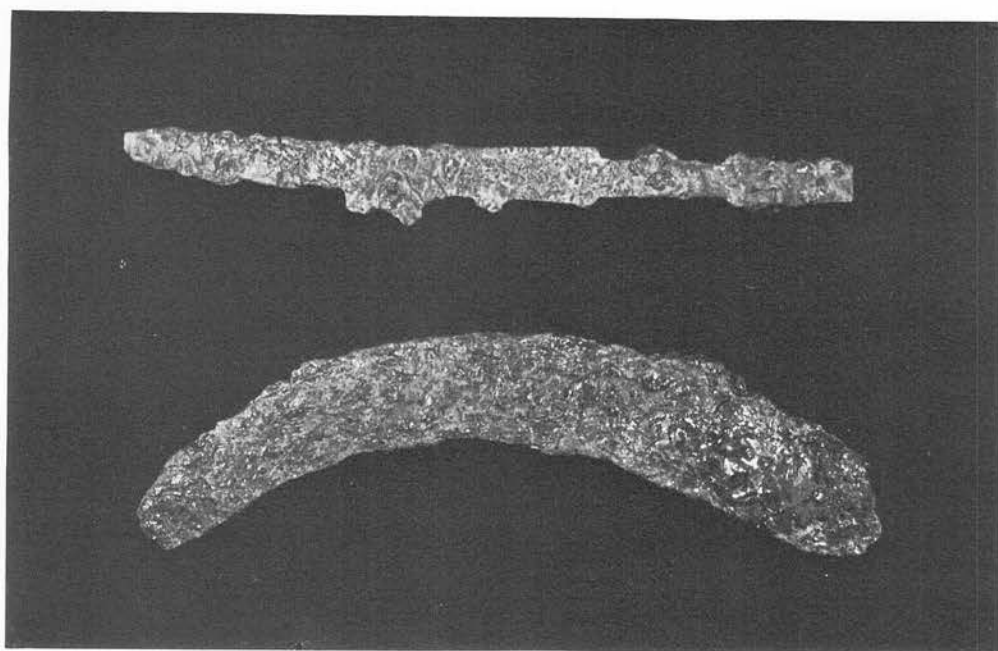


b. 鉄器(J-1住居址出土)

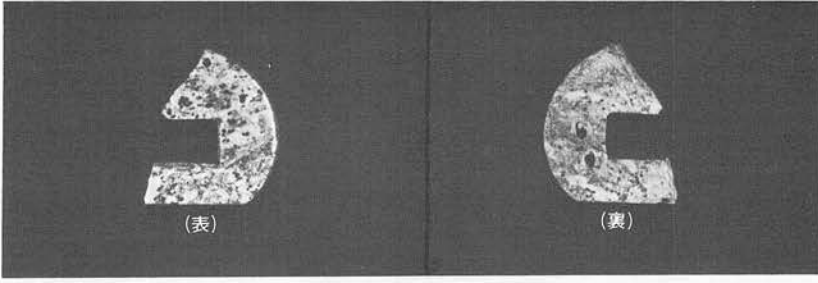
写真図版40 力石Ⅱ遺跡



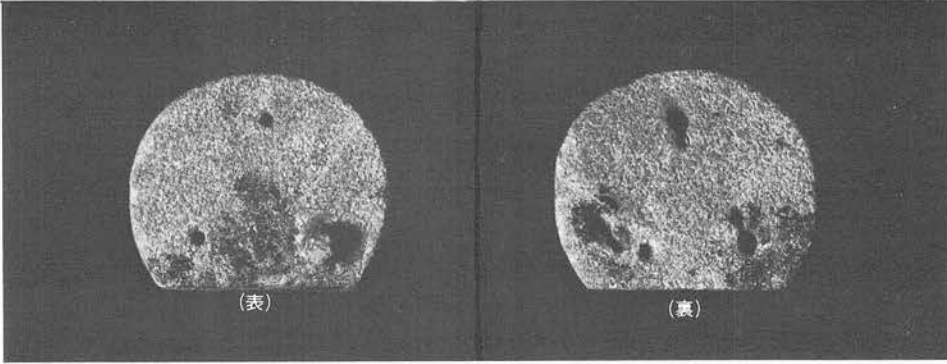
a. 鉄器 (K-1 住居址出土)



b. 鉄器 (J-51ピット)  
写真図版41 力石Ⅱ遺跡



a. 石帯 (G-2 住居址出土) (実物大)

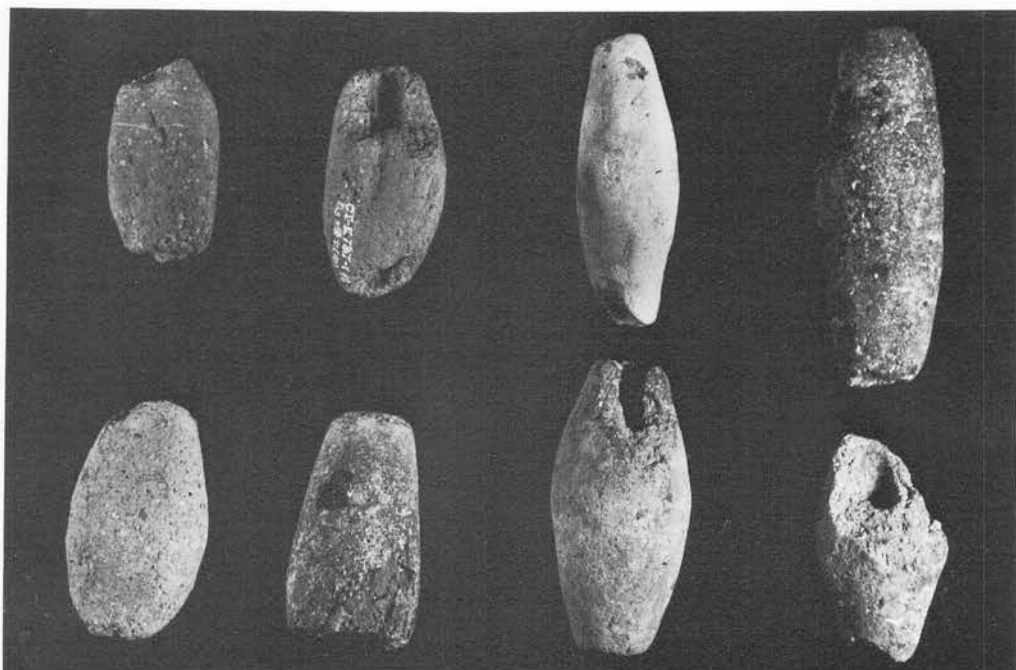


b. 石帯 (I-1 住居址出土) (実物大)

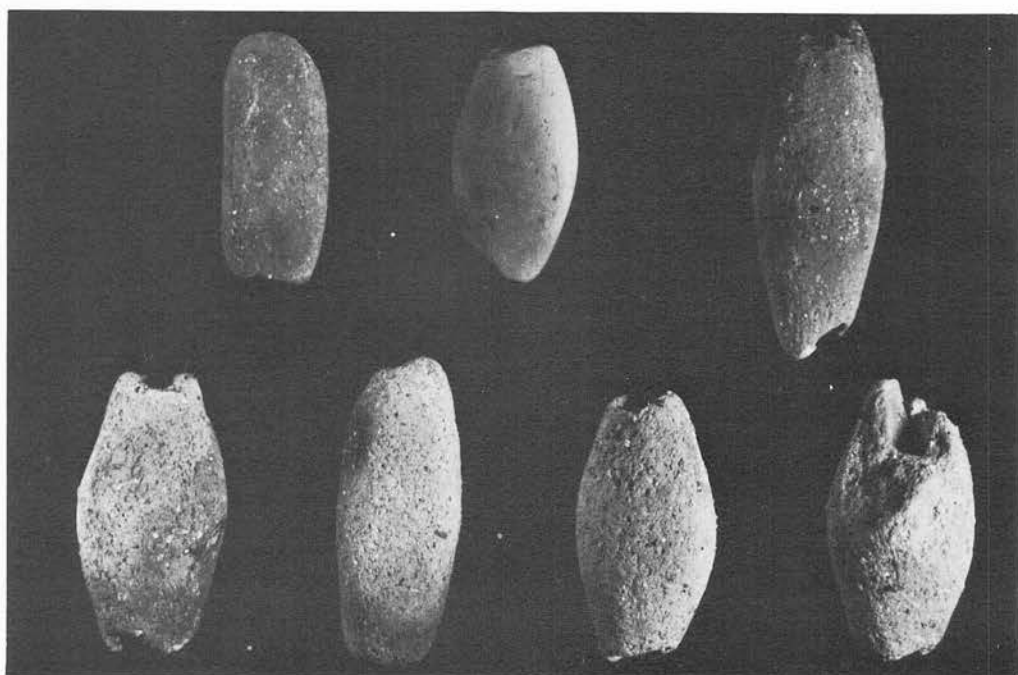


c. 砥石

写真図版42 力石Ⅱ遺跡

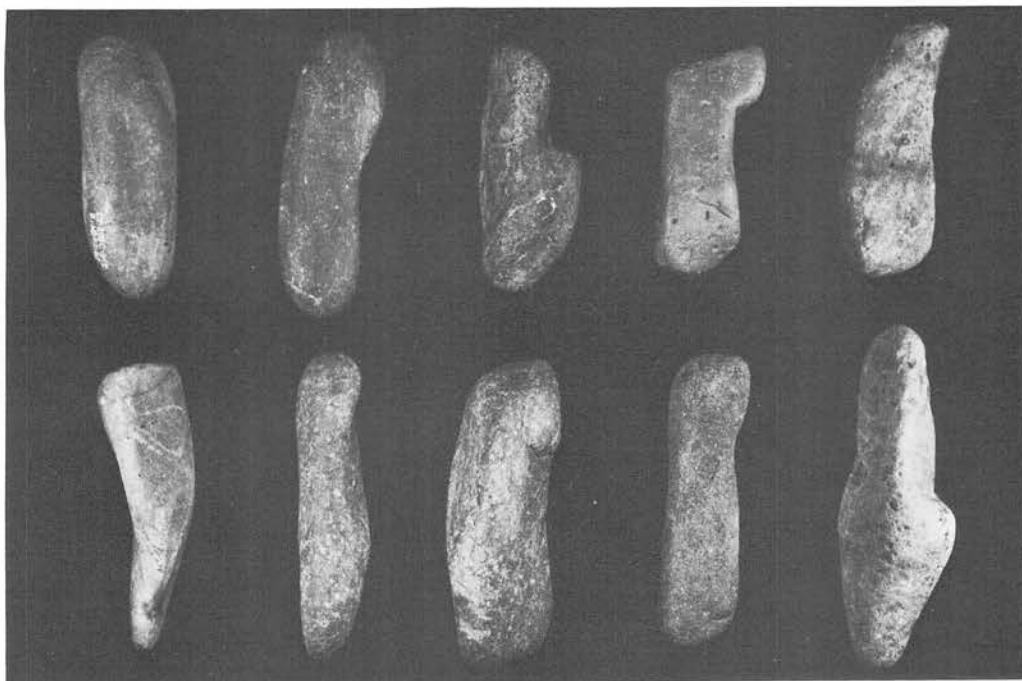


a. 土錘

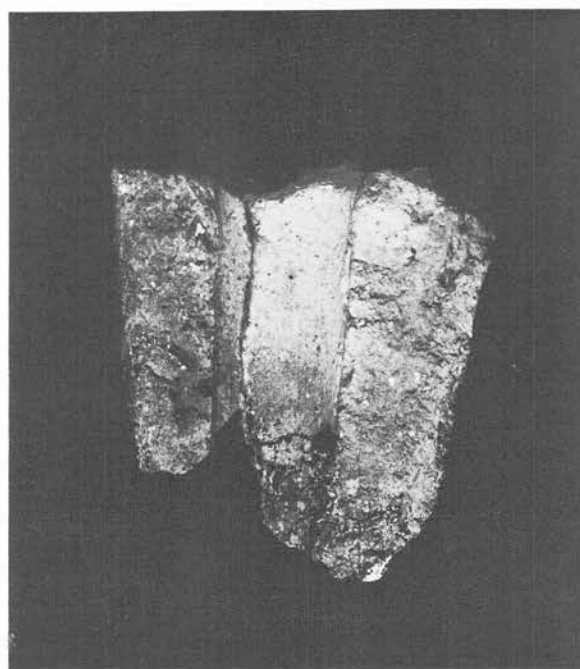


b. 土錘

写真図版43 力石Ⅱ遺跡



a. 足方



b. ふいごの羽口(H-1住居址出土)  
写真図版44 力石Ⅱ遺跡



a. H~I区弥生式土器出土状况



b. H~I区弥生式土器出土状况  
写真图版45 兔Ⅱ遺跡



a. K区弥生式土器状况



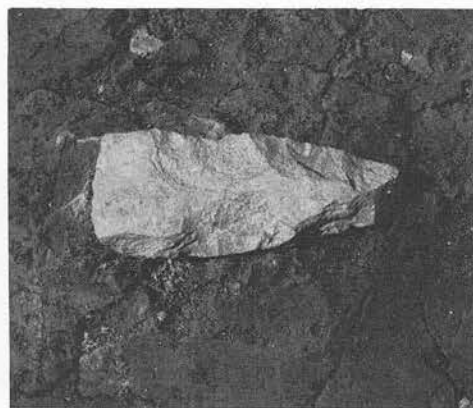
b. 高坏形土器出土状况



c. 甕形土器出土状况



d. 甕形土器出土状况



e. 石斧出土状况

写真图版46 兔Ⅱ遗迹





a. C-1 住居址



b. C-住居址

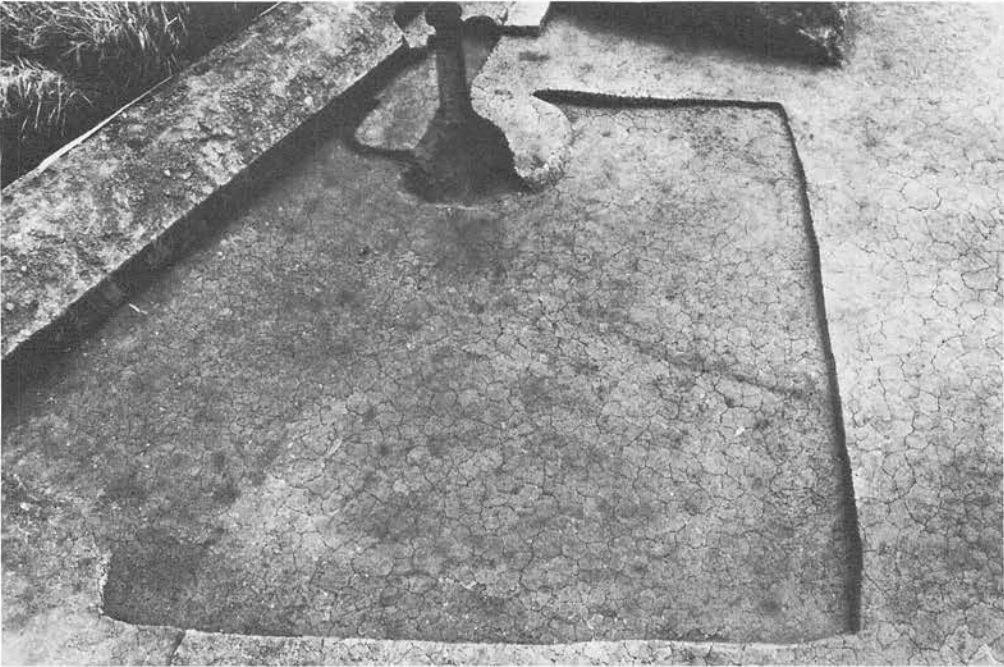
写真図版47 兔Ⅱ遺跡



a. C-1 住居址(カマド)



b. J-1 住居址(土器出土状況)

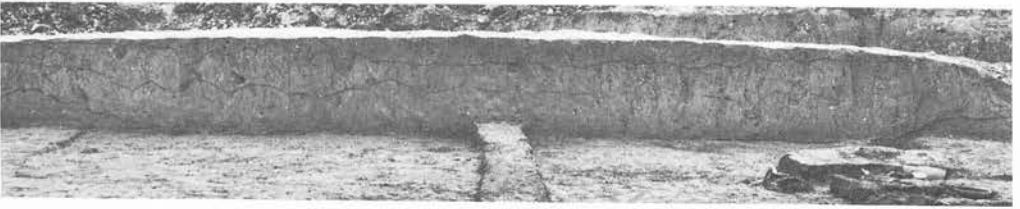


c. J-1 住居址

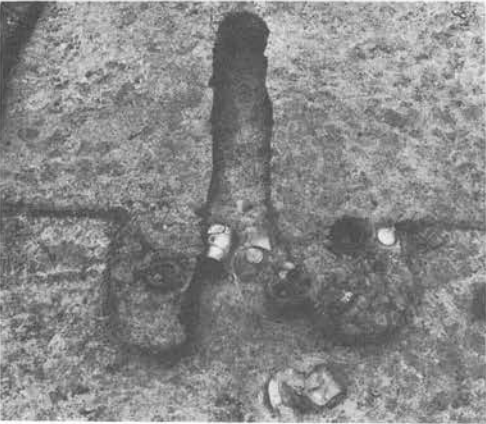
写真図版48 兔Ⅱ遺跡



a. K-1 住居址



b. K-1 住居址(土層断面)

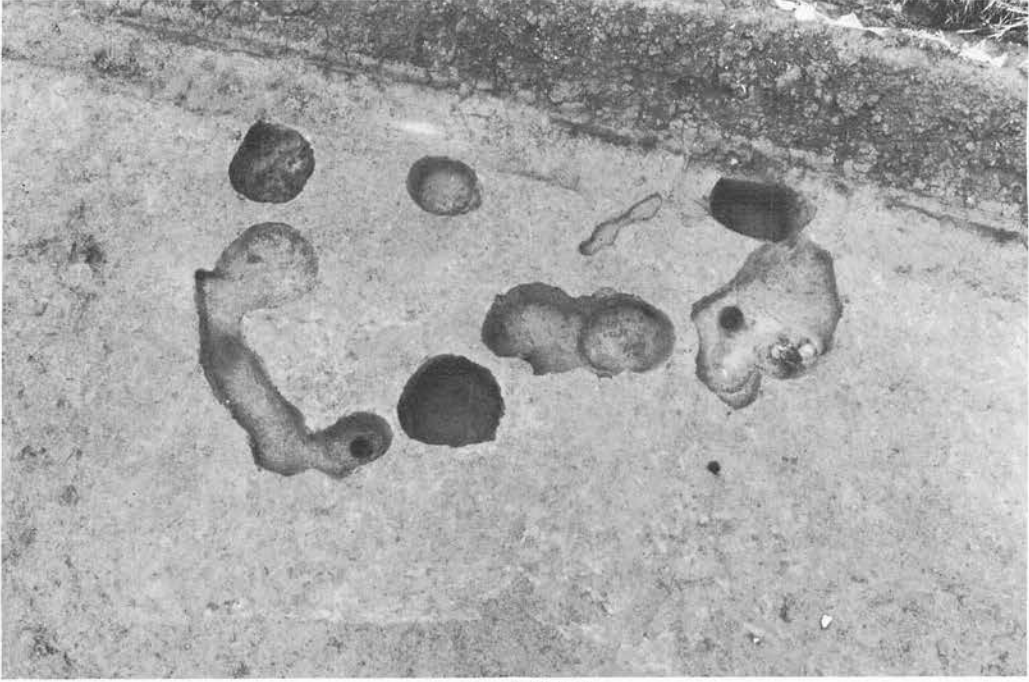


c. K-1 住居址(カマド)



d. K-1 住居址(土器出土状況)

写真図版49 兔Ⅱ遺跡



a. L-1 住居址



b. K-1 住居址 (カマド断面)

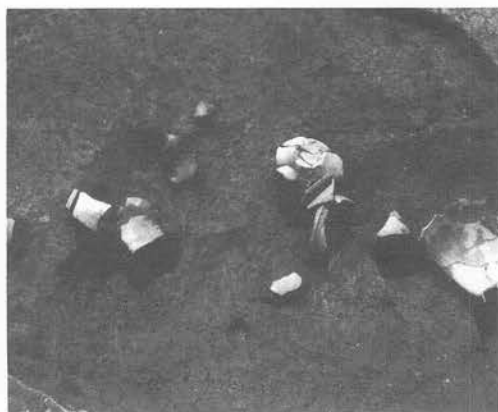


c. L-1 住居址 (鉄器出土状況)

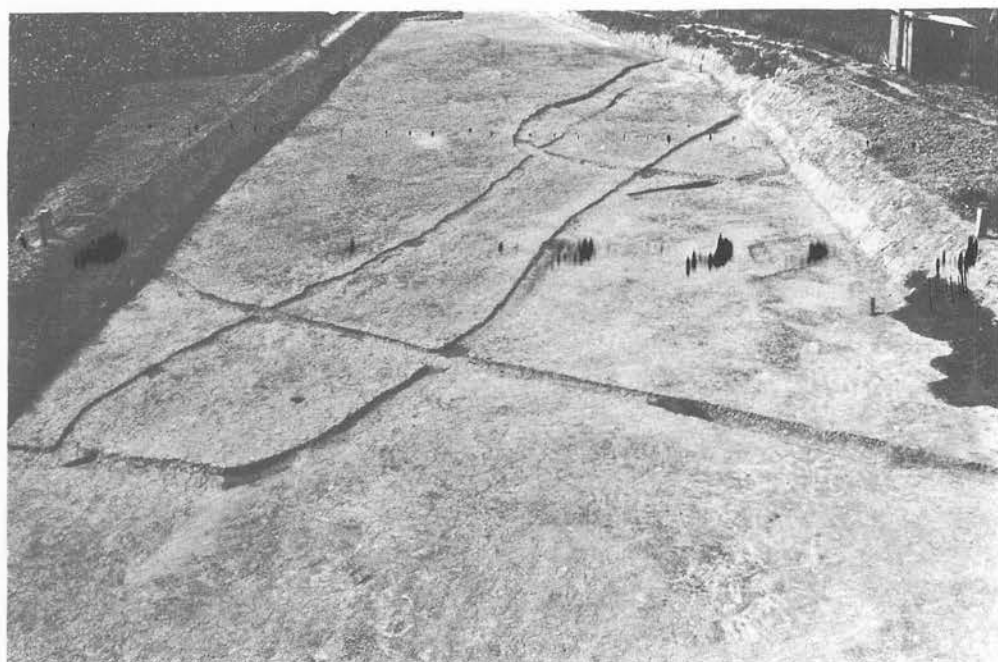
写真図版50 兔Ⅱ遺跡



a. A-51ピット



b. A-51ピット(遺物出土状況)



c. 兎Ⅱ遺跡溝跡全景  
写真図版51 兎Ⅱ遺跡



a. 兔Ⅱ遺跡深掘り土層断面

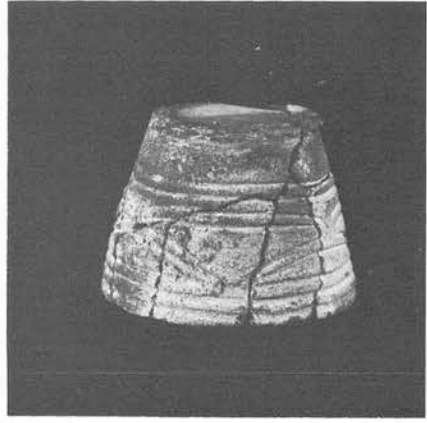


b. 発掘調査風景

写真図版52 兔Ⅱ遺跡



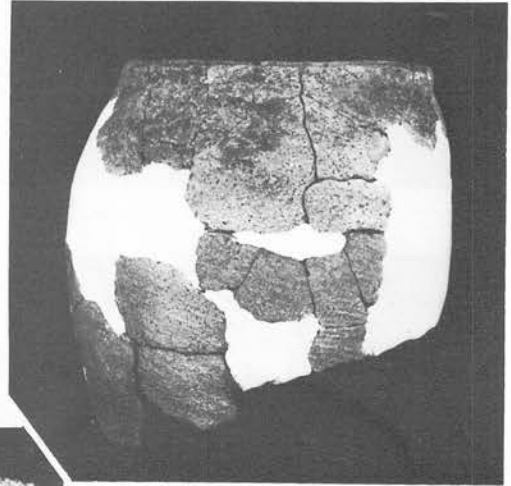
a. 變形土器



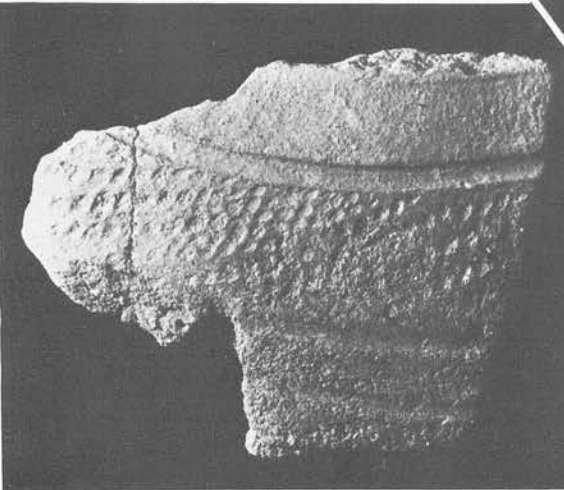
b. 高坏形土器



e. 粃痕



c. 變形土器

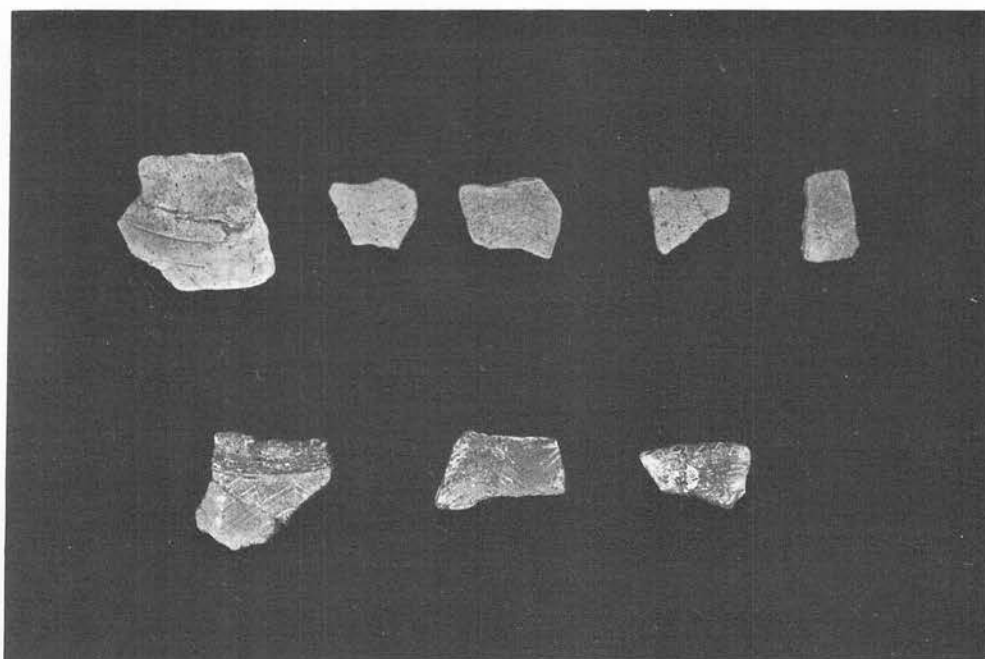


d. 粃痕付着土器

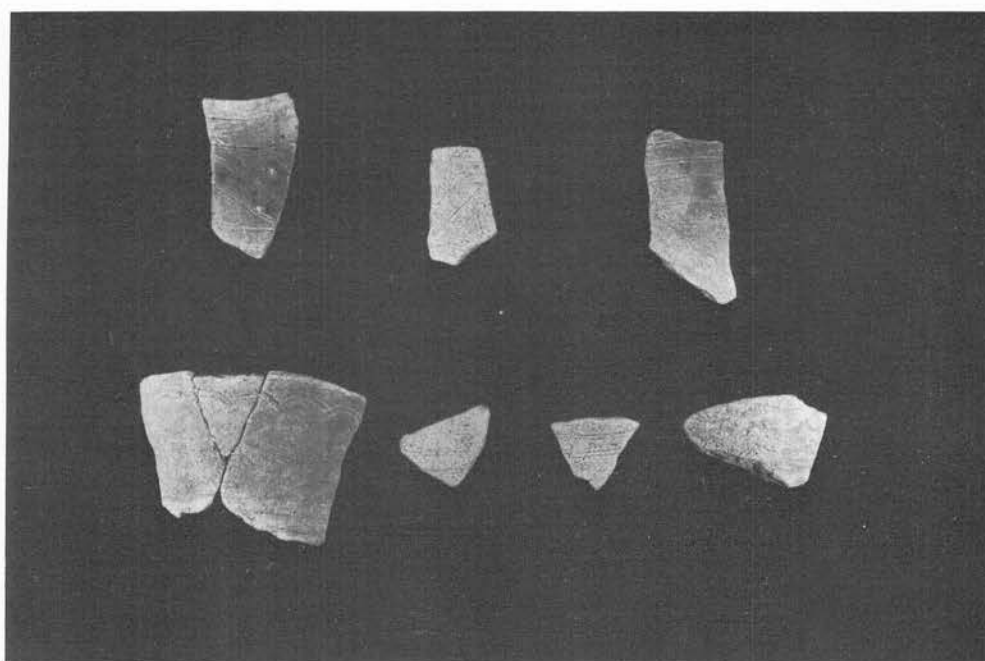


f. 粃痕、顕微鏡写真(8倍)  
「佐藤敏也氏撮影」

弥生式土器  
写真図版53 兔Ⅱ遺跡



a. I 群土器・II 群土器

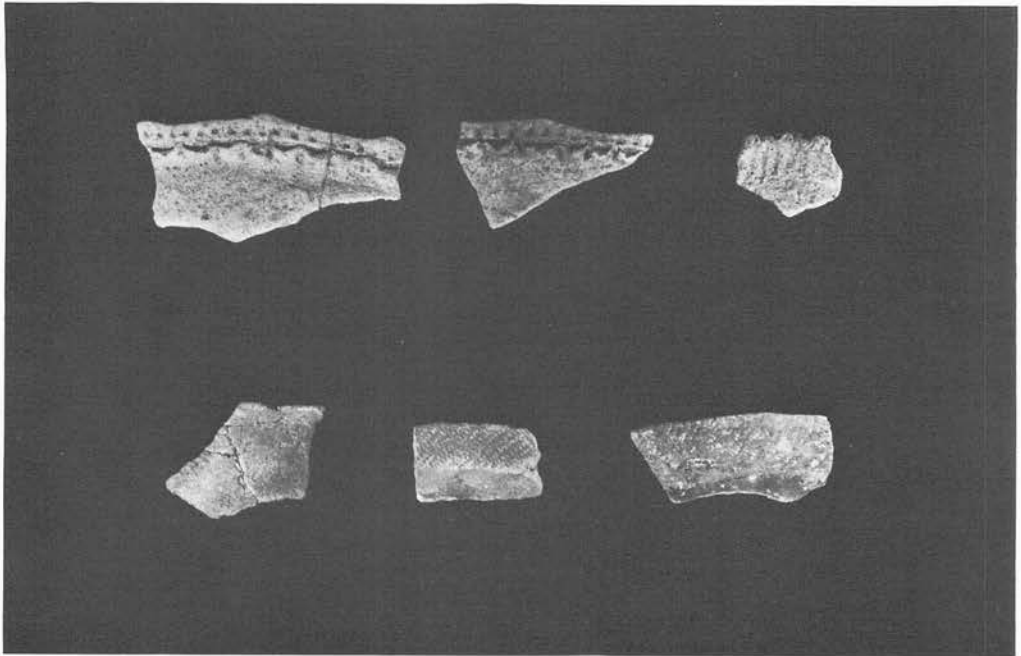


b. II 群土器

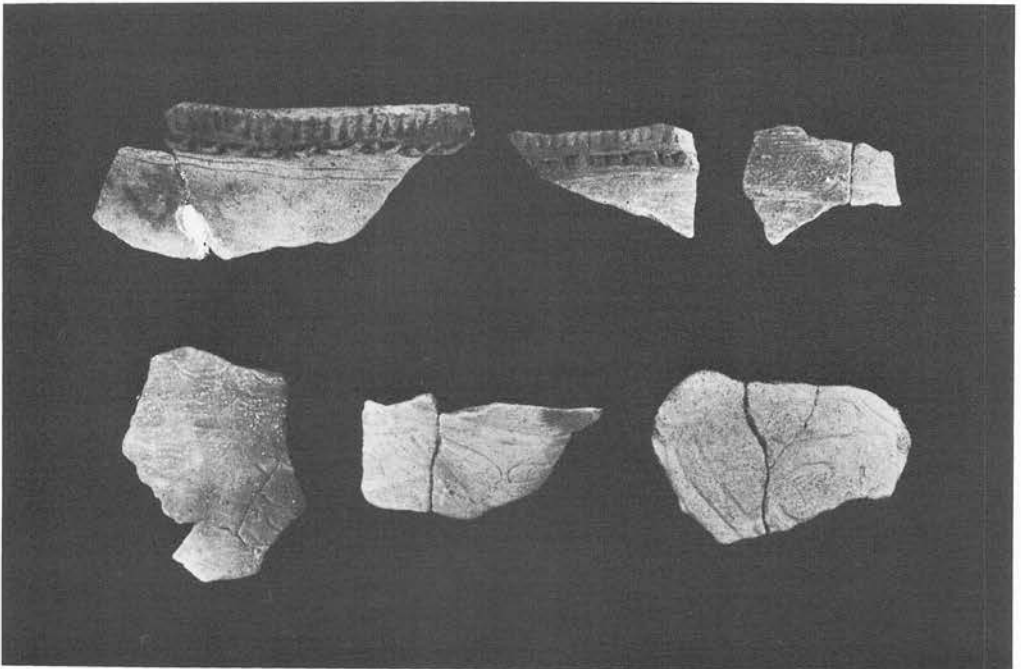
弥生式土器

写真図版54 兔 II 遺跡





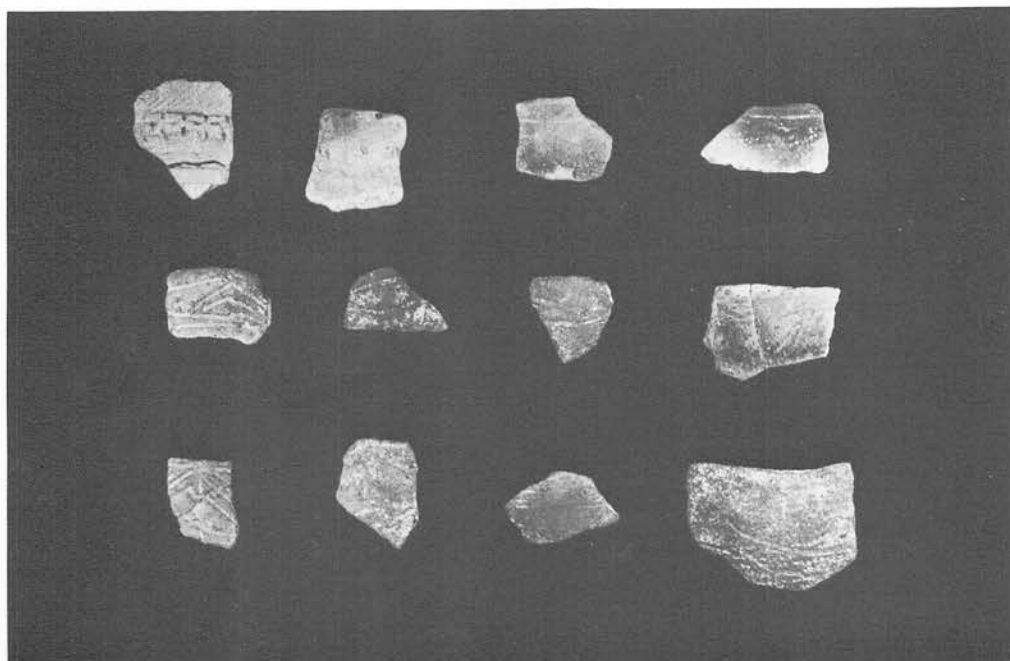
a. Ⅲ群土器



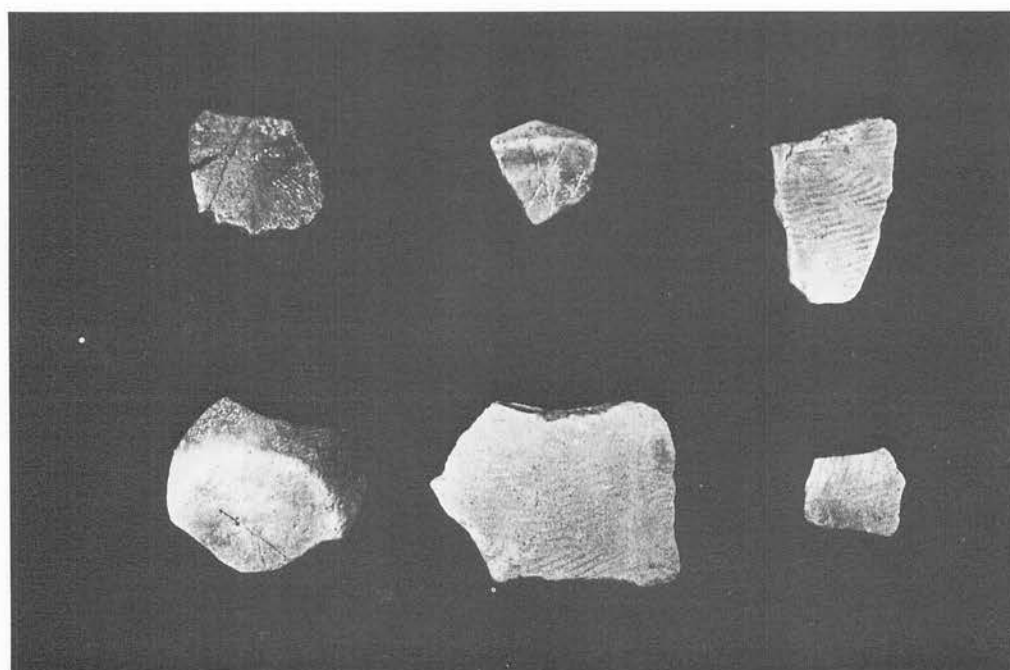
b. Ⅲ群土器

弥生式土器

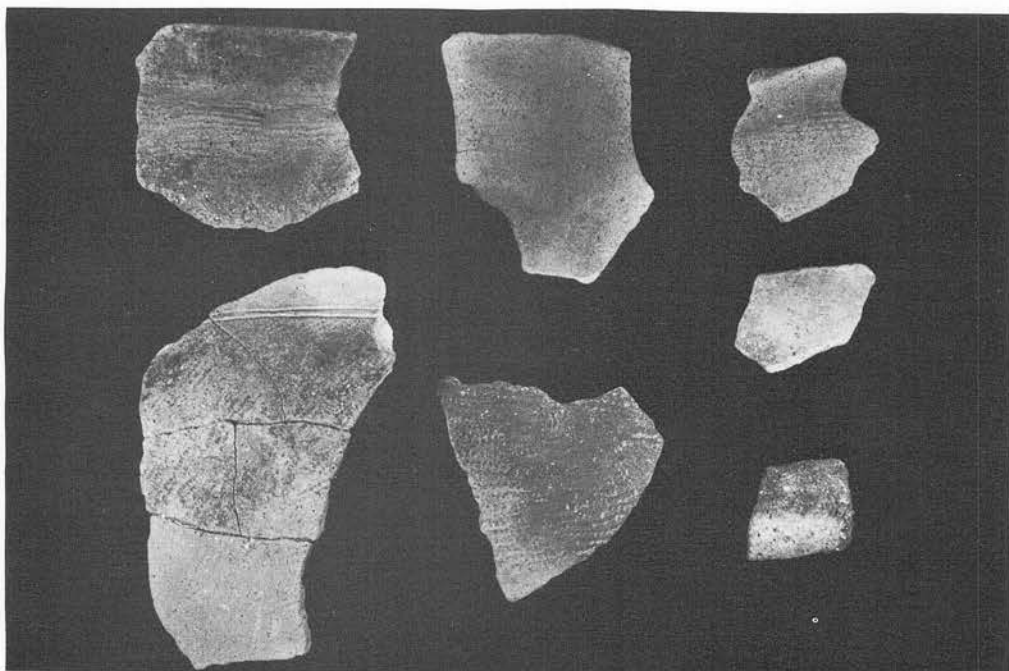
写真图版55 兔Ⅱ遺跡



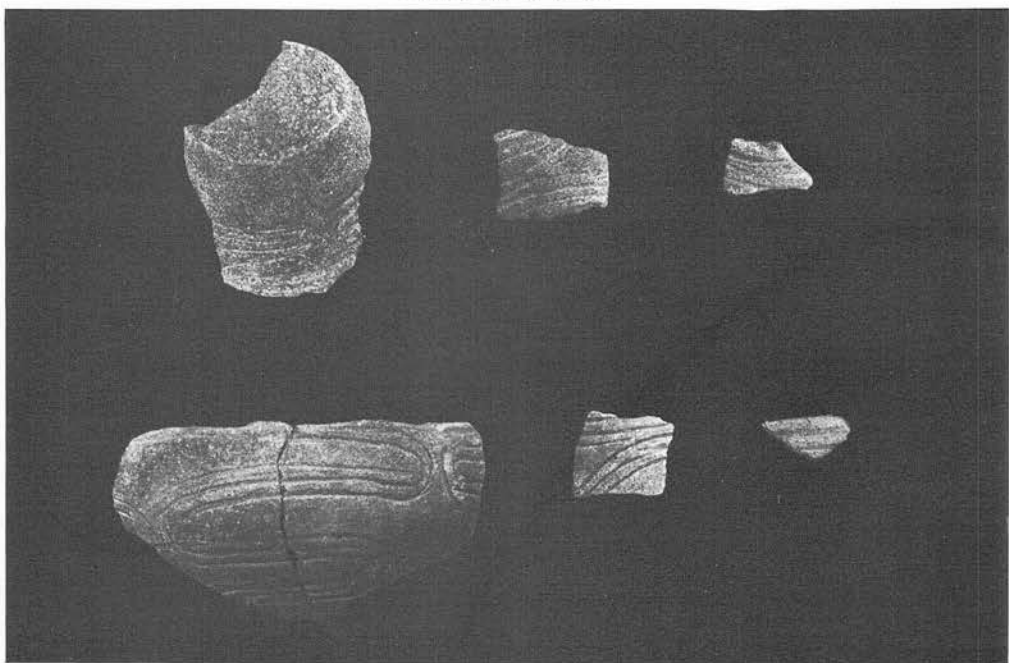
a. Ⅲ群土器



b. Ⅲ群土器(体部・底部)  
 弥生式土器  
 写真図版56 兔Ⅱ遺跡



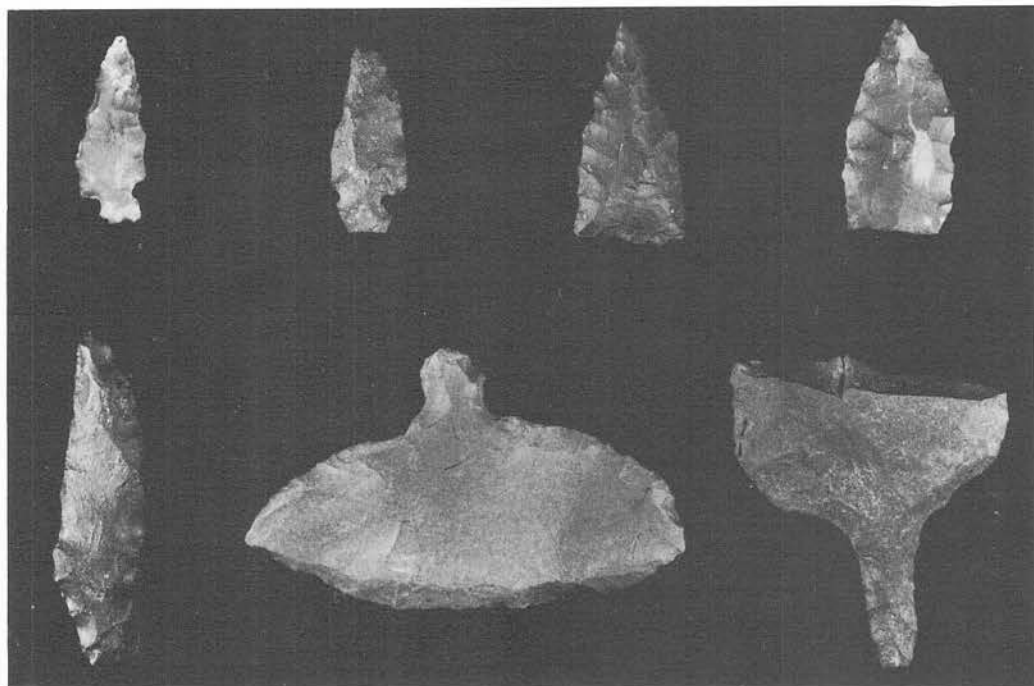
a. III群土器・IV群土器



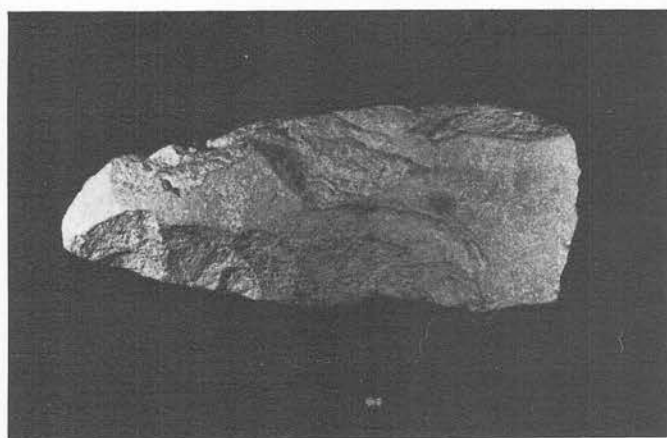
b. IV群土器

弥生式土器

写真図版57 兔Ⅱ遺跡

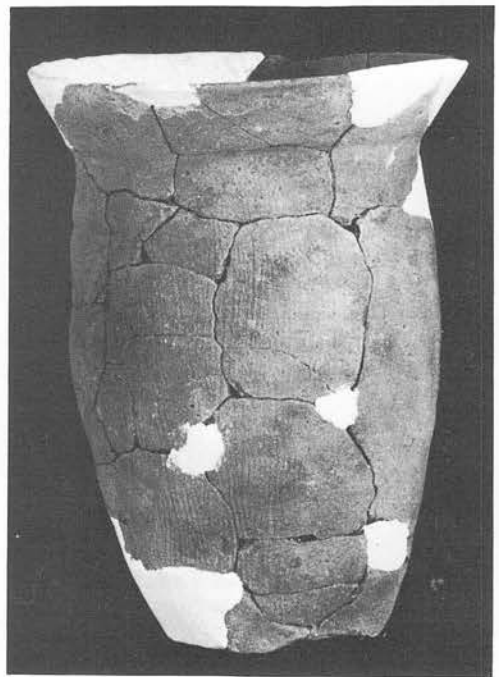
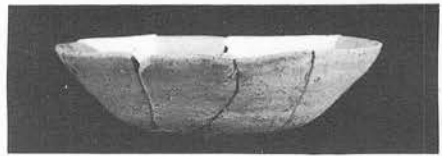
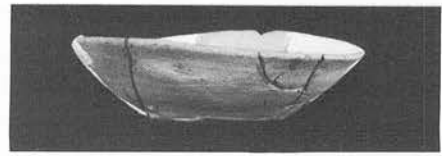


a. A~D区出土石器

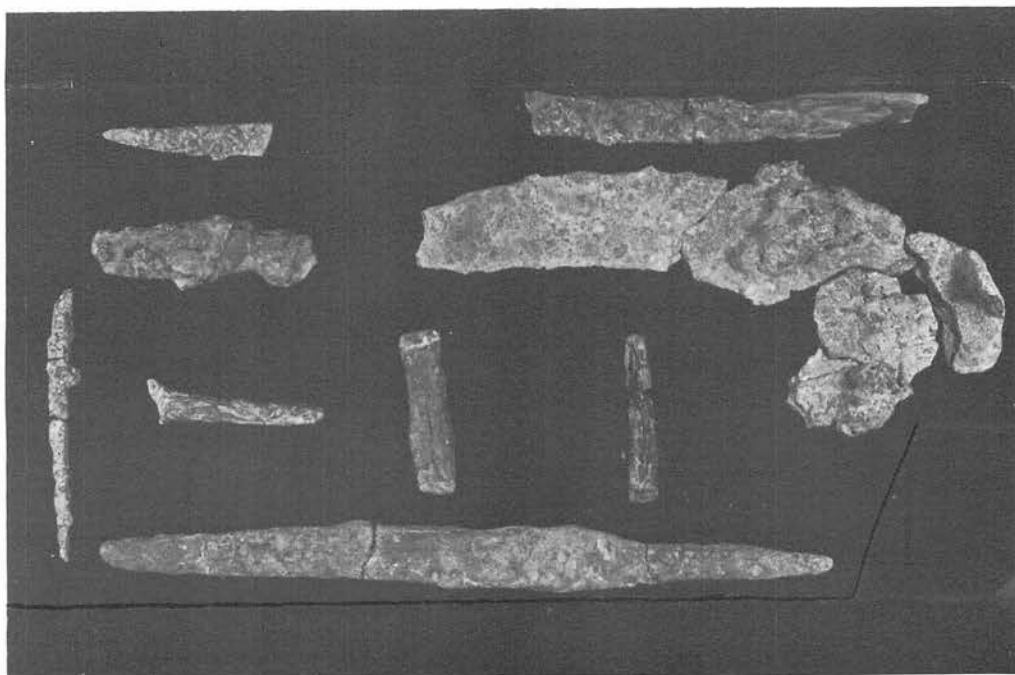


b. K区出土石器

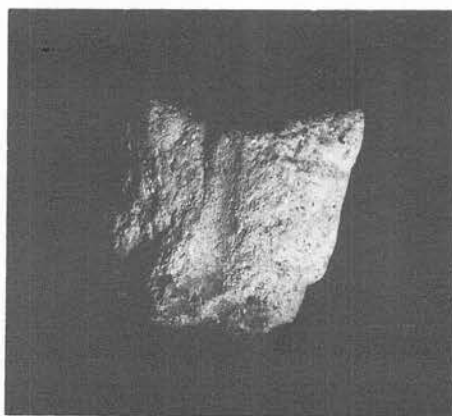
写真図版58 兔Ⅱ遺跡



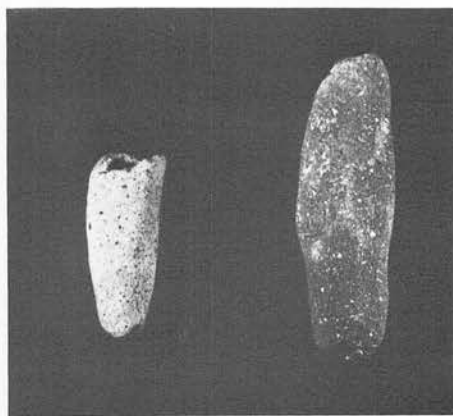
J-1住居址・K-1住居址  
写真図版59 兔Ⅱ遺跡



a. 鉄器 (C-1 住居址・K-1 住居址・L-1 住居址・A-52ピット出土)



b. ふいごの羽口



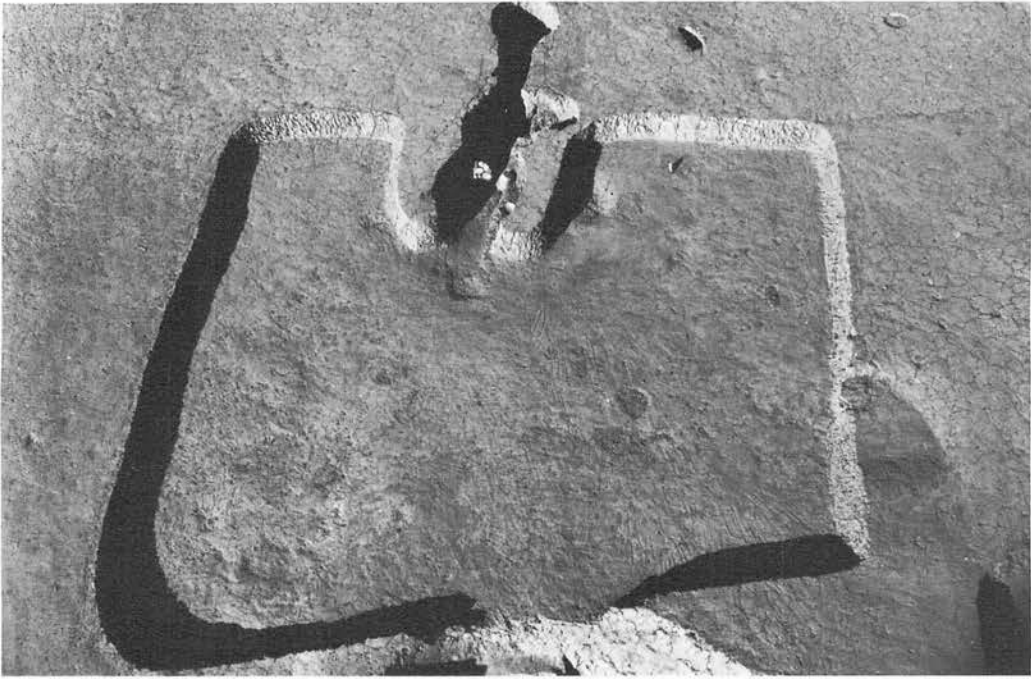
c. 土錘



a. 落合Ⅲ遺跡航空写真全景(南より)



b. A-1 住居址  
写真図版61 落合Ⅲ遺跡



a. E-1 住居址



b. A-1 住居址(カマド)



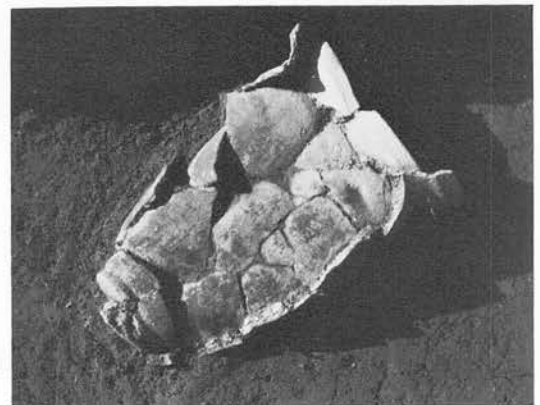
c. E-1 住居址(土器出土状況)

写真図版62 落合Ⅲ遺跡



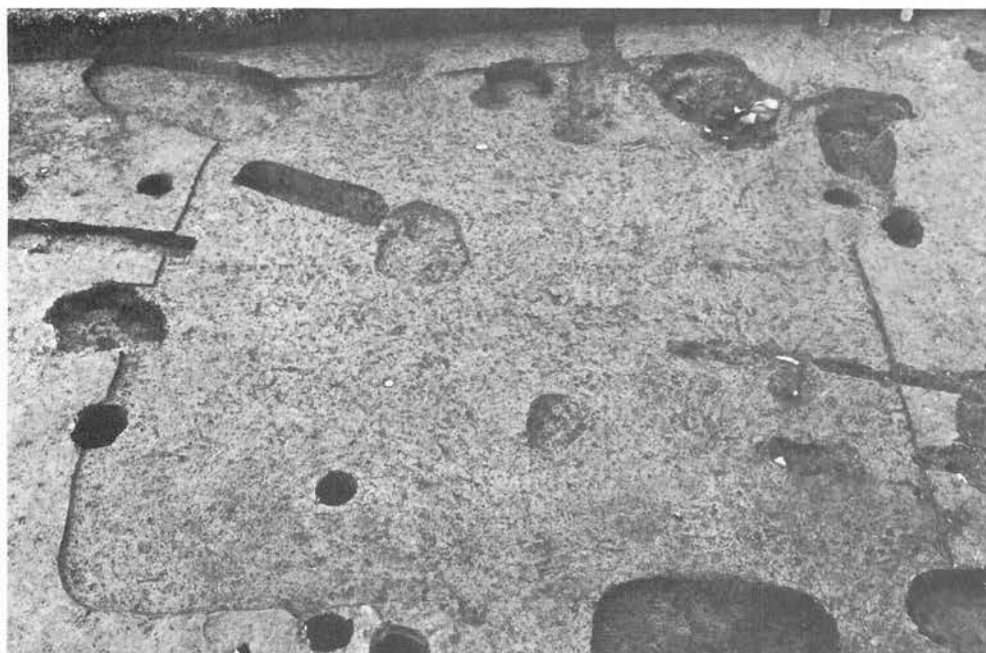


a. J-1 住居址



b. E-1 住居址(土器出土状況)

写真図版63 落合Ⅲ遺跡



a. J-2 住居垢



b. J-3 住居址

写真図版64 落合Ⅲ遺跡



a. J-4 住居址

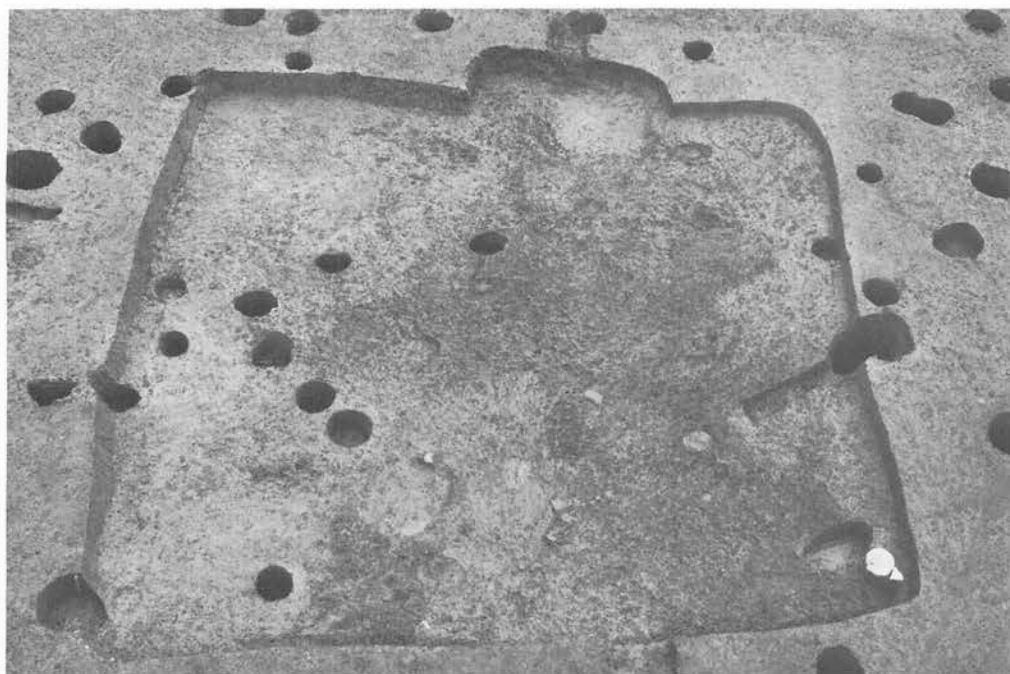


b. J-4 住居址(土錘出土状況)



c. J-5 住居址(ピット)

写真図版65 落合Ⅲ遺跡

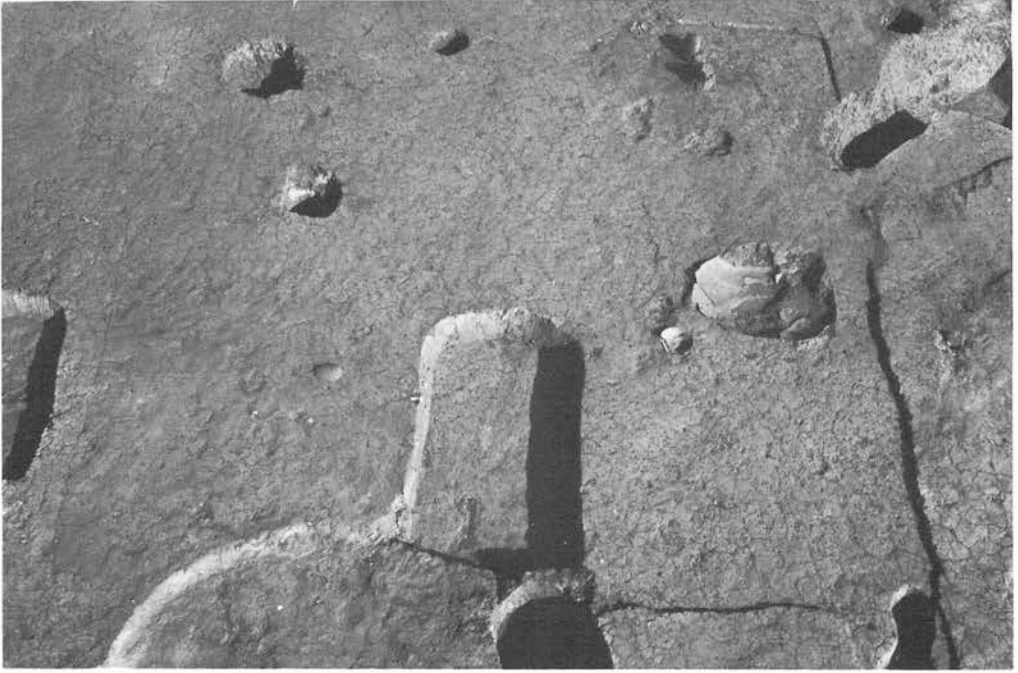


a. J-5 住居址

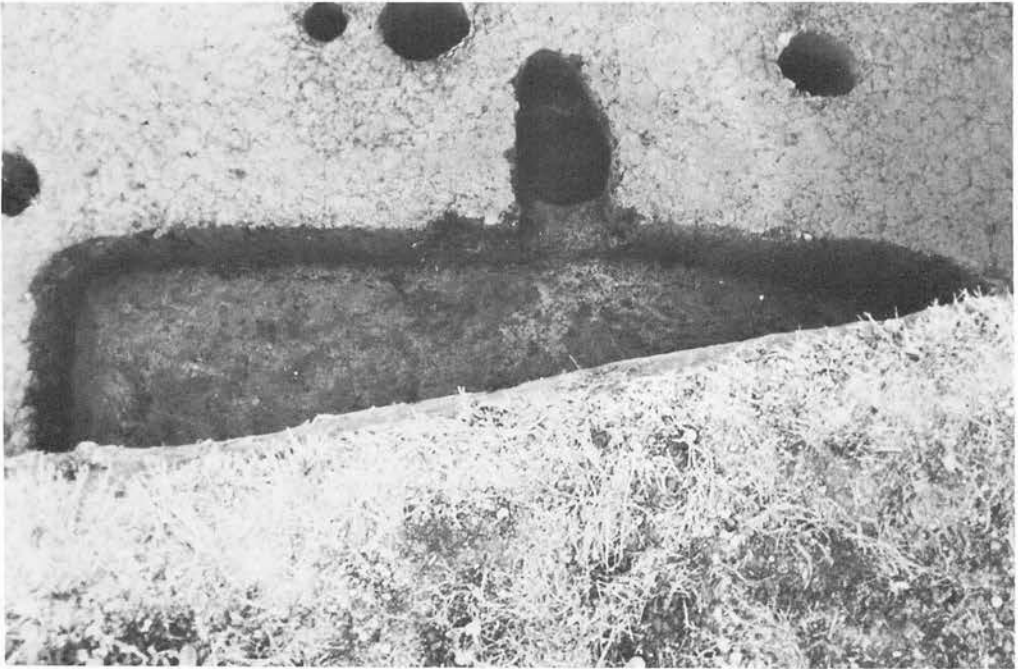


b. K-1 住居址

写真図版66 落合Ⅲ遺跡

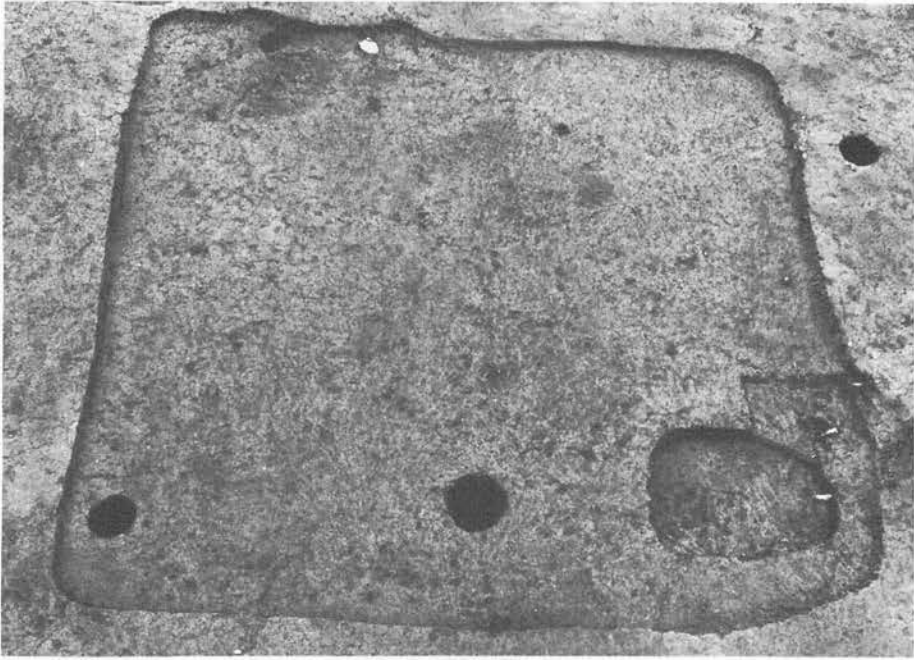


a. K-2 住居址



b. K-3 住居址

写真図版67 落合Ⅲ遺跡



a. L-1 住居址



b. L-2 住居址

写真図版68 落合Ⅲ遺跡



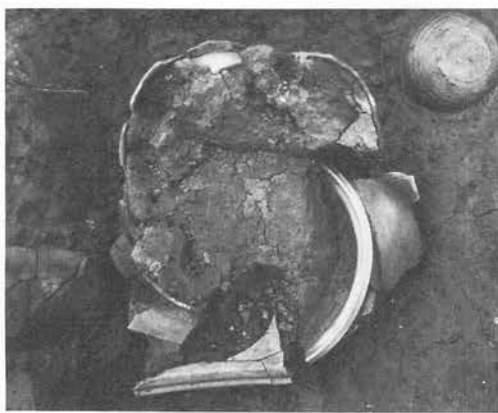
a. L-2 住居址 (煙出し部)



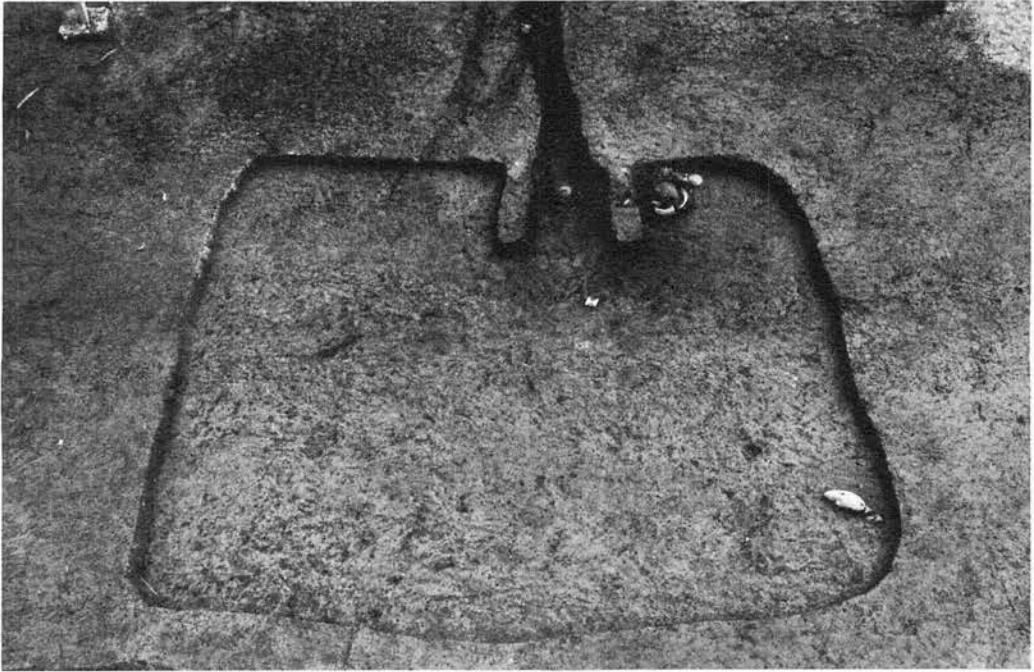
b. L-2 住居址 (カマド)



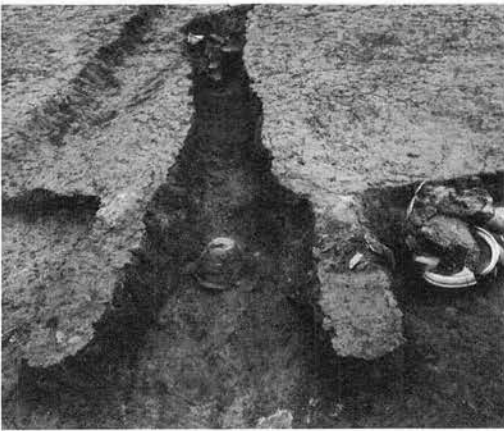
c. L-3 住居址 (煙出し部)



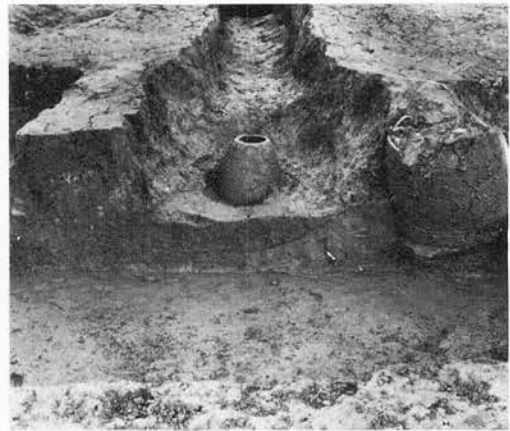
d. L-3 住居址 (土器出土状況)



a. L-3 住居址



b. L-3 住居址(カマド)



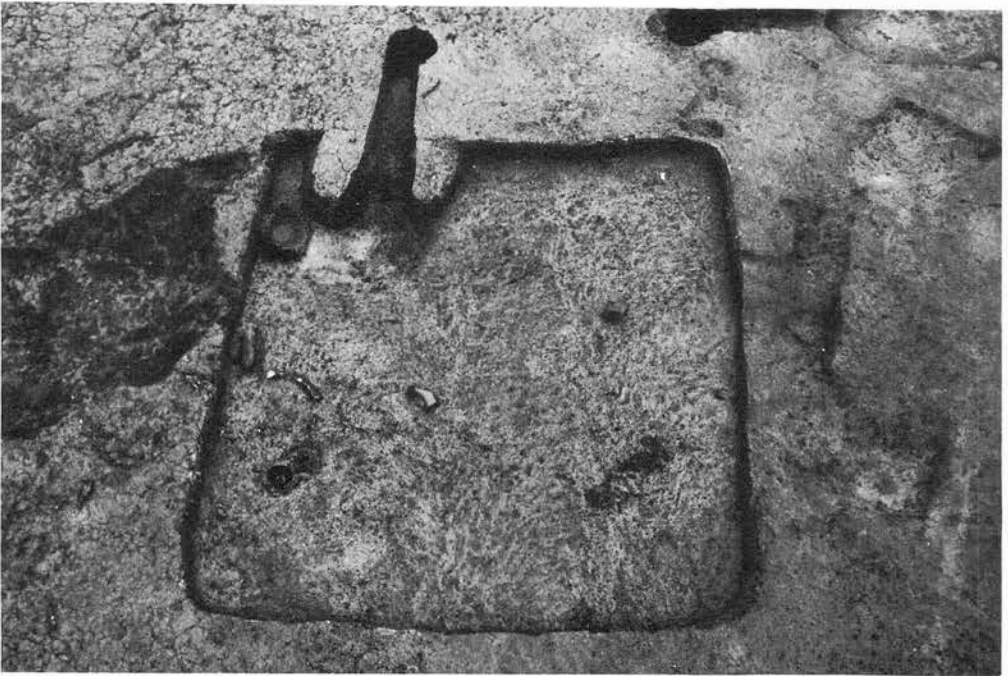
c. L-3 住居址(カマド土層断面)

写真図版70 落合Ⅲ遺跡



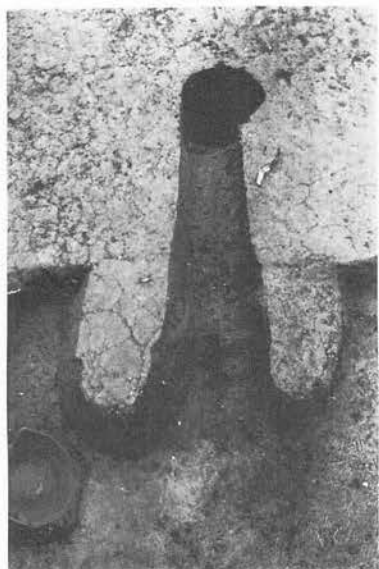


a. M-1 住居址



b. M-2 住居址

写真図版71 落合Ⅲ遺跡



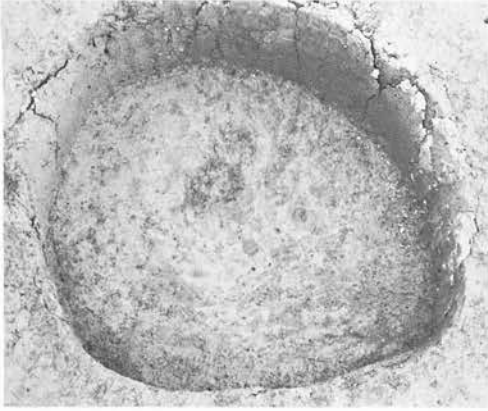
a. M-2 住居址(カマド)



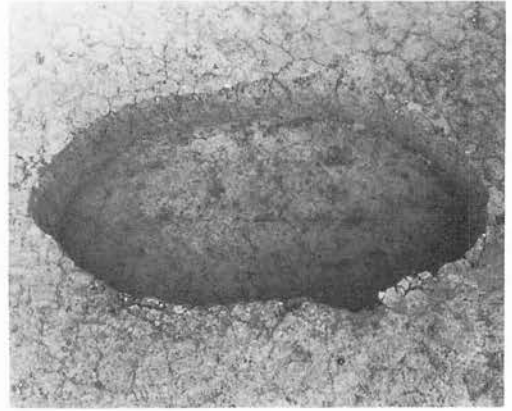
b. M-2 住居址(土器出土状況)



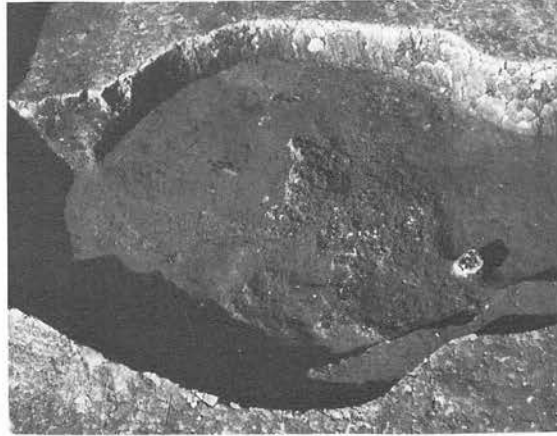
c. M-3 住居址  
写真図版72 落合Ⅲ遺跡



a. E-54ピット



b. E-53ピット



c. F-51ピット・F-101溝跡

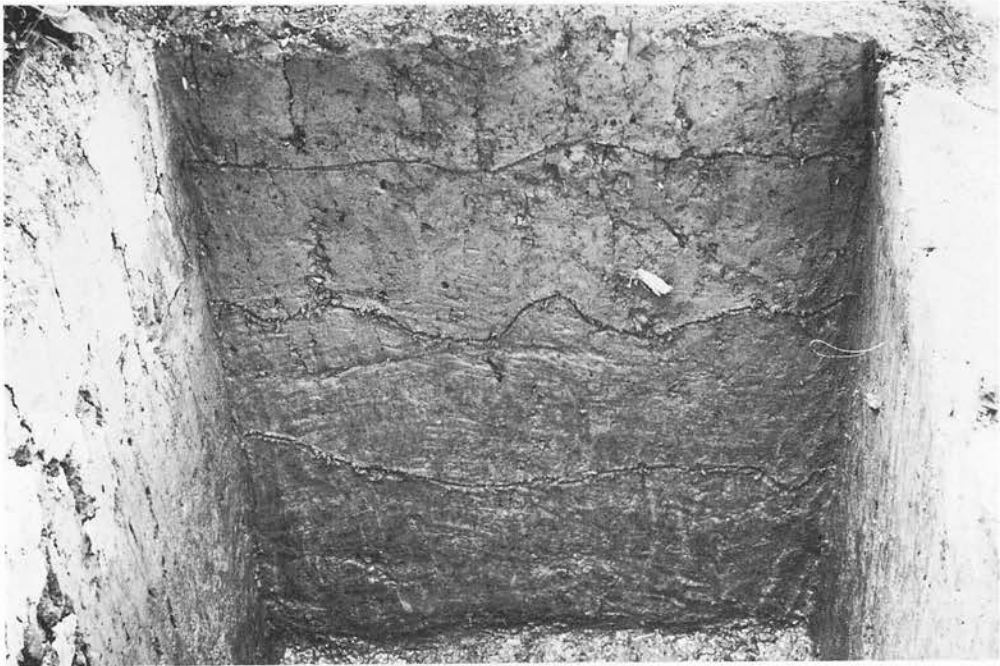


d. C-51ピット(鉄器出土状況)



e. D-101溝跡

写真図版73 落合Ⅲ遺跡



a. 落合Ⅲ遺跡深掘り土層断面



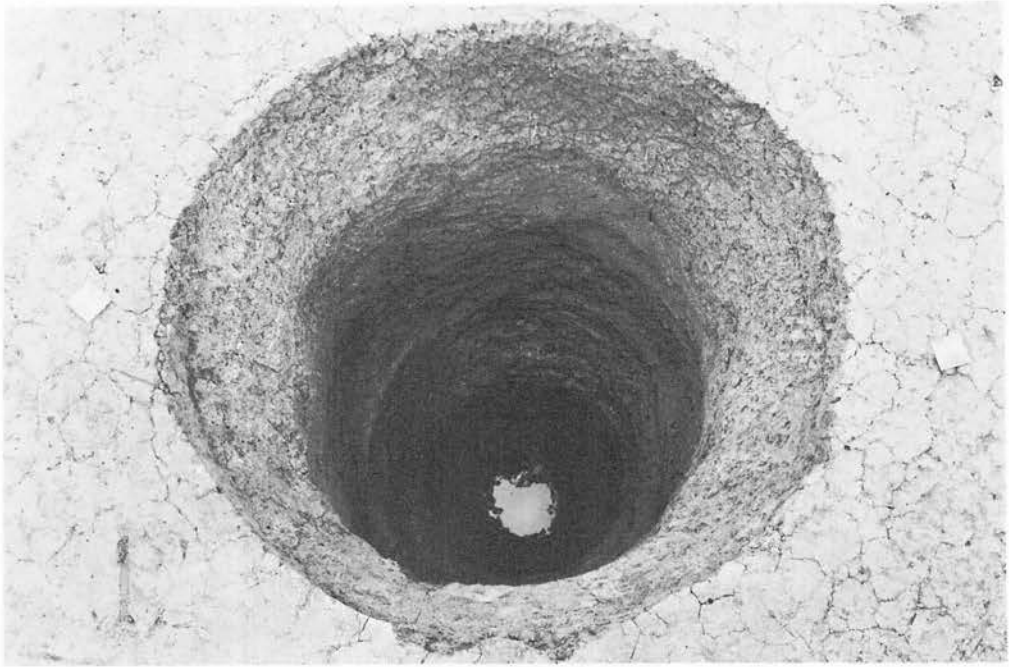
b. 現地説明会風景  
写真図版74 落合Ⅲ遺跡



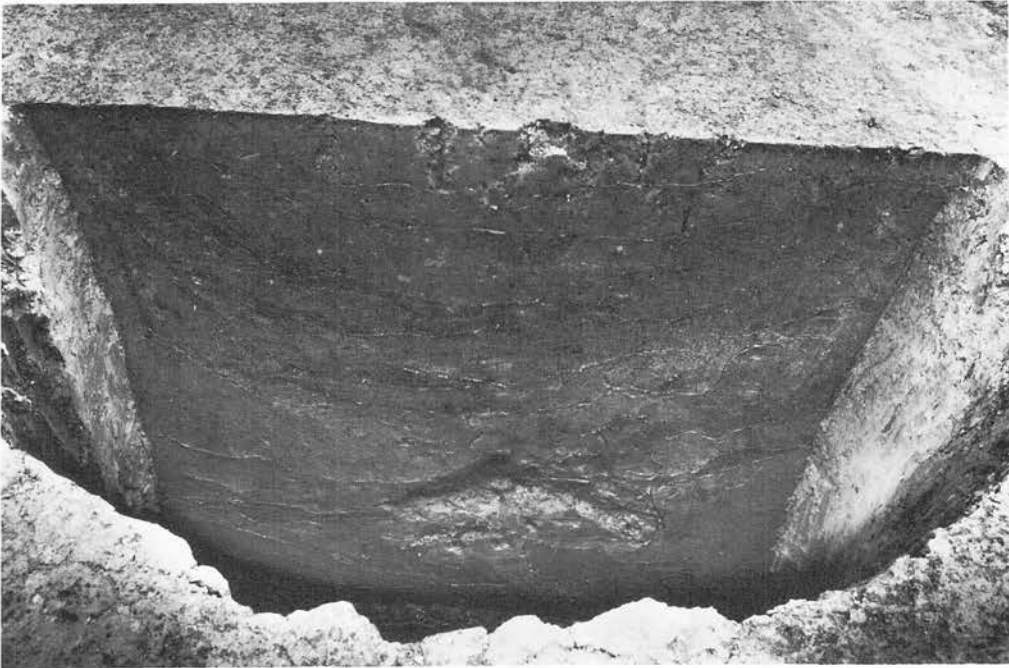
a. 現地説明会風景



b. C-54井戸址(土層断面)  
写真図版75 落合Ⅲ遺跡



a. D-51井戸址



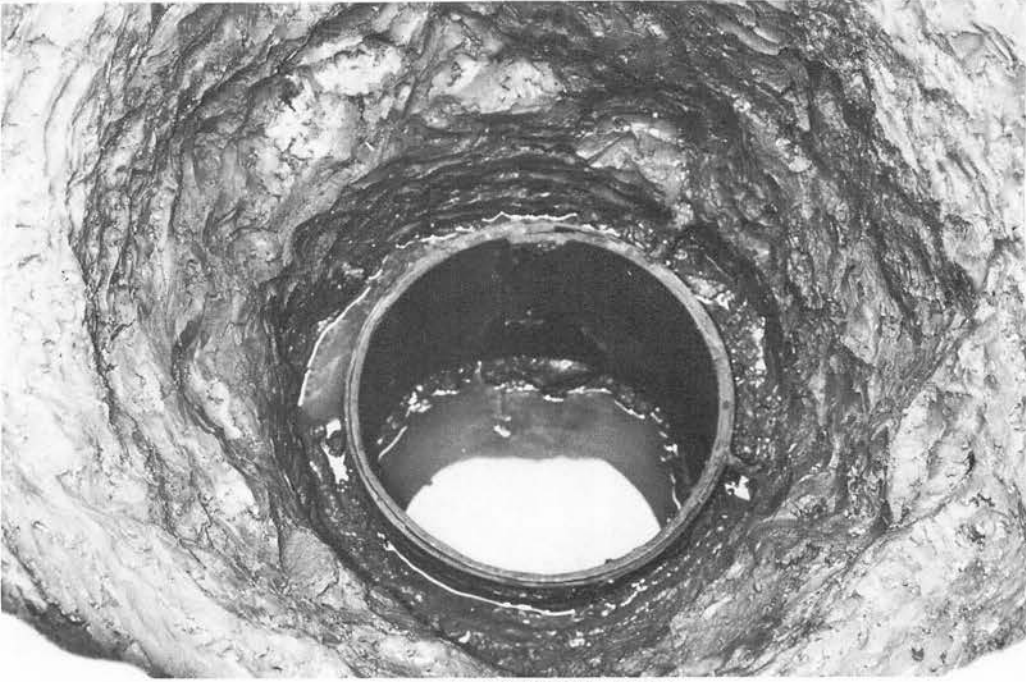
b. D-51井戸址(土層断面)  
写真図版76 落合Ⅲ遺跡



a. D-52井戸址(土層断面)



b. D-52井戸址  
写真図版77 落合Ⅲ遺跡



a. D-52井戸址 (曲物出土状況)



b. D-52井戸址  
写真図版78 落合Ⅲ遺跡





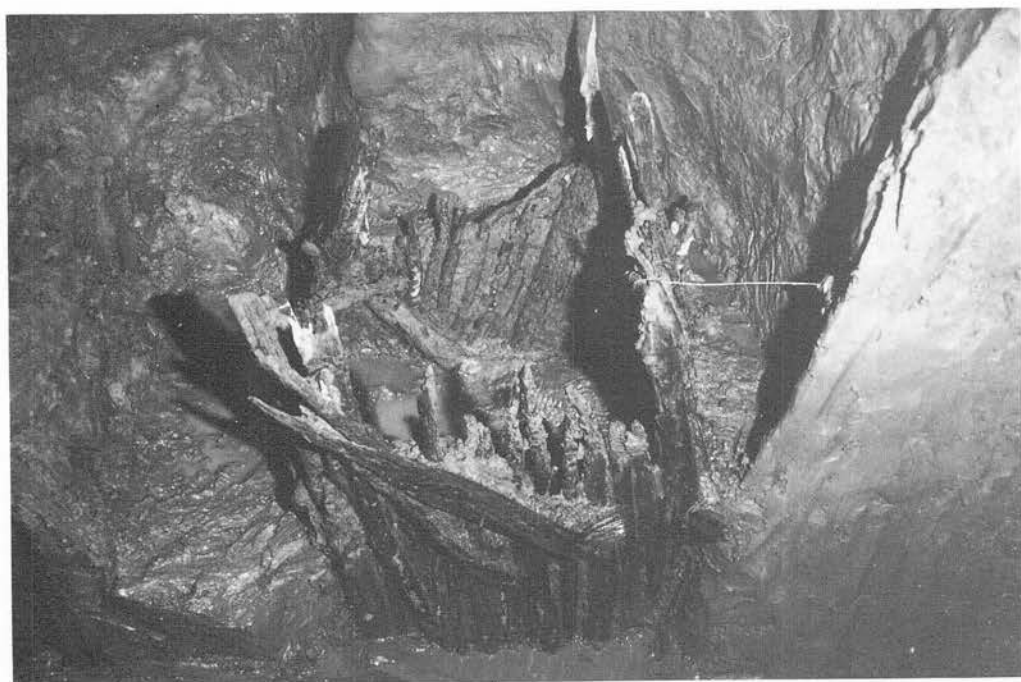
a. E-51井戸址(土層断面)



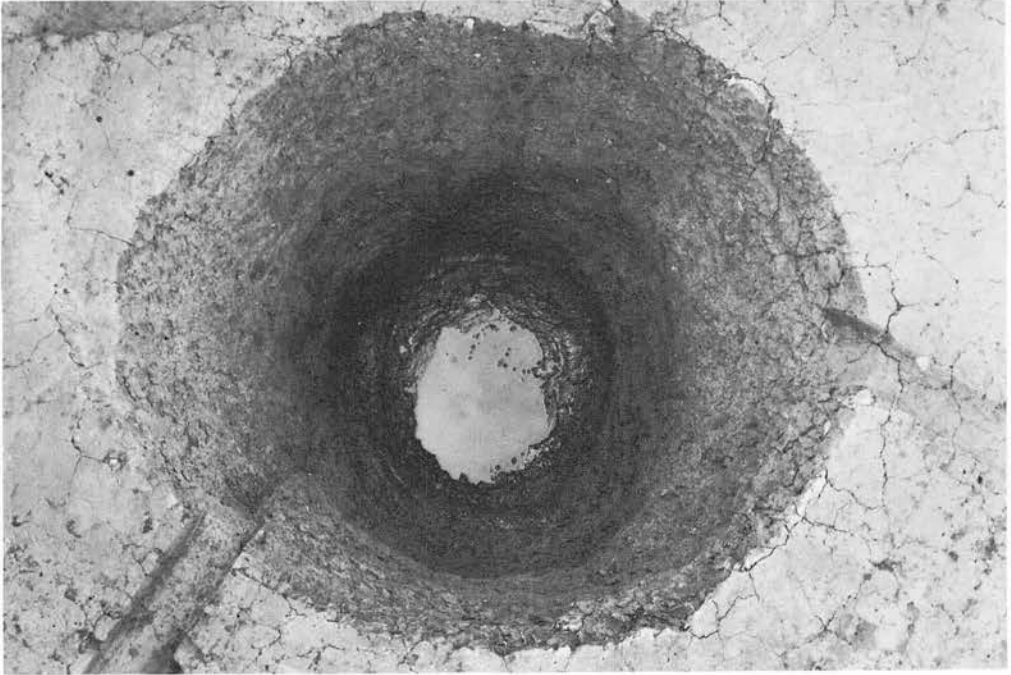
b. E-51井戸址  
写真図版79 落合Ⅲ遺跡



a. E-51井戸址



b. E-51井戸址(井筒出土状況)  
写真図版80 落合Ⅲ遺跡



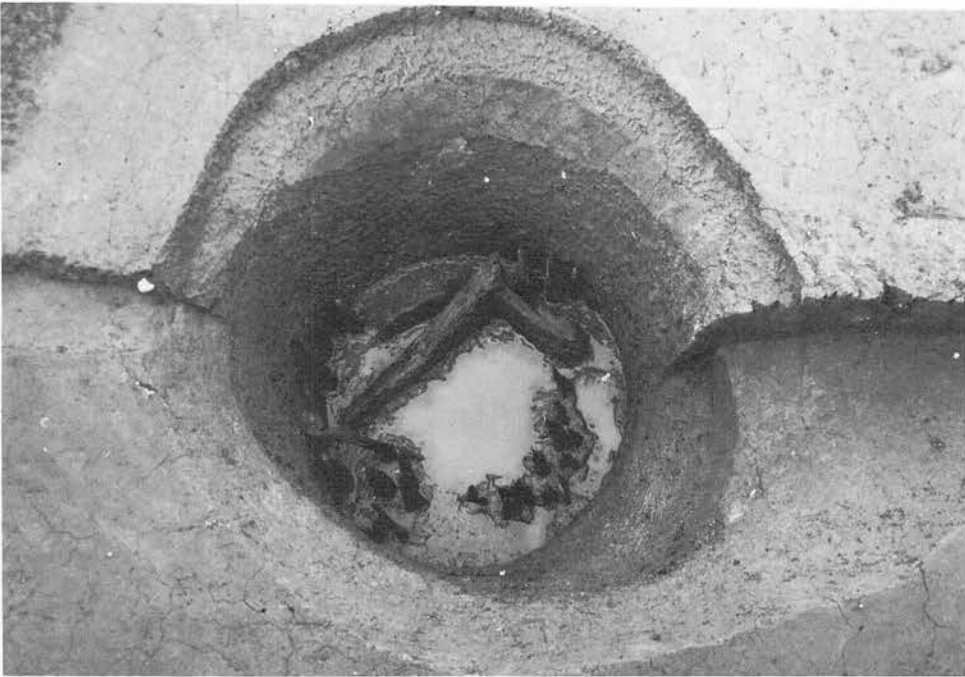
a. I-51井戸址



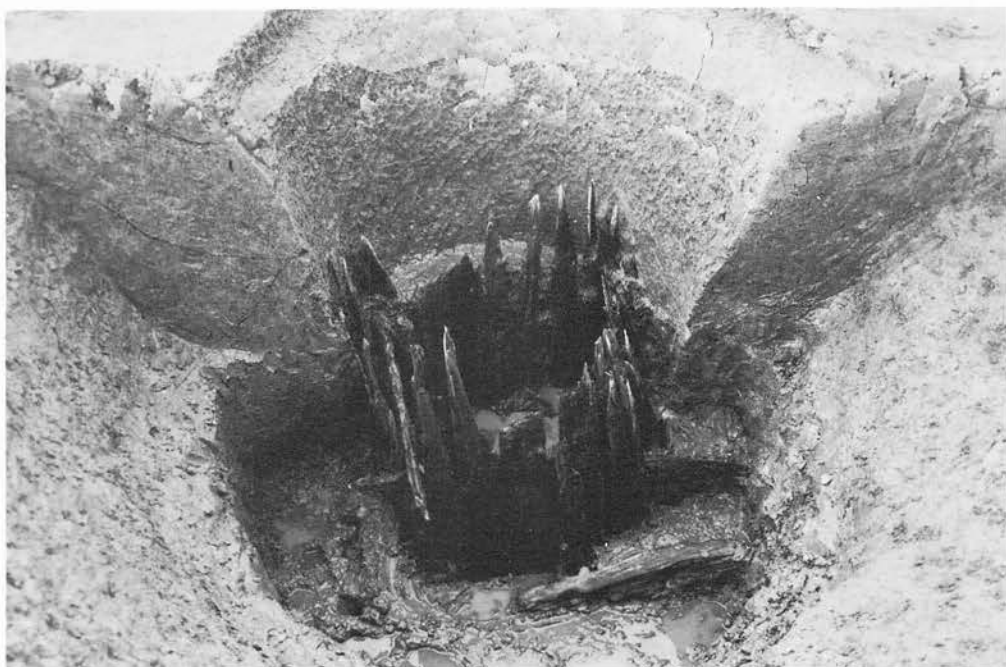
b. I-51井戸址(土層断面)  
写真図版81 落合Ⅲ遺跡



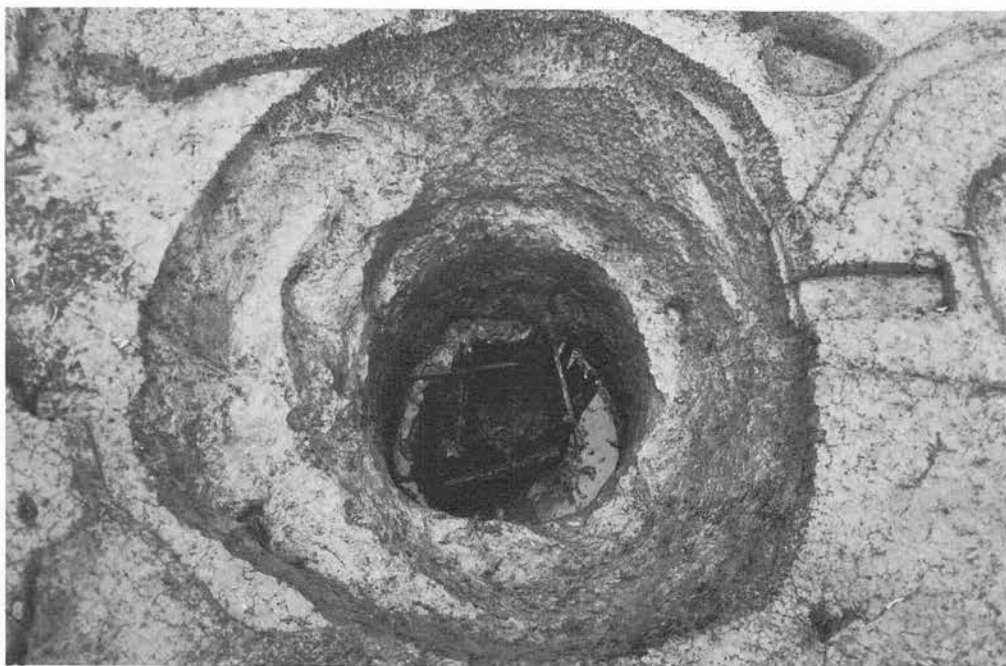
a. I-52井戸址(土層断面)



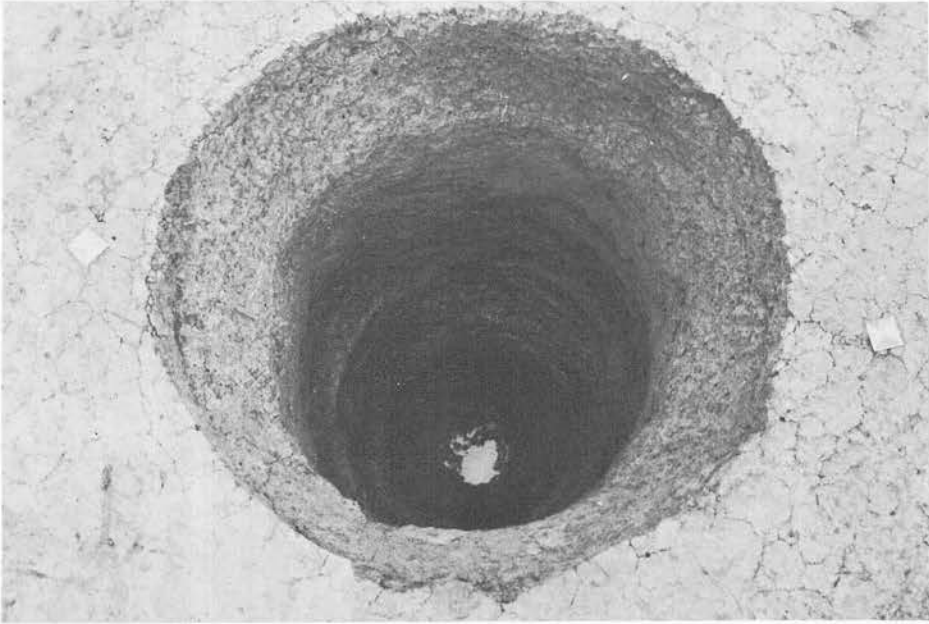
b. I-52井戸址  
写真図版82 落合Ⅲ遺跡



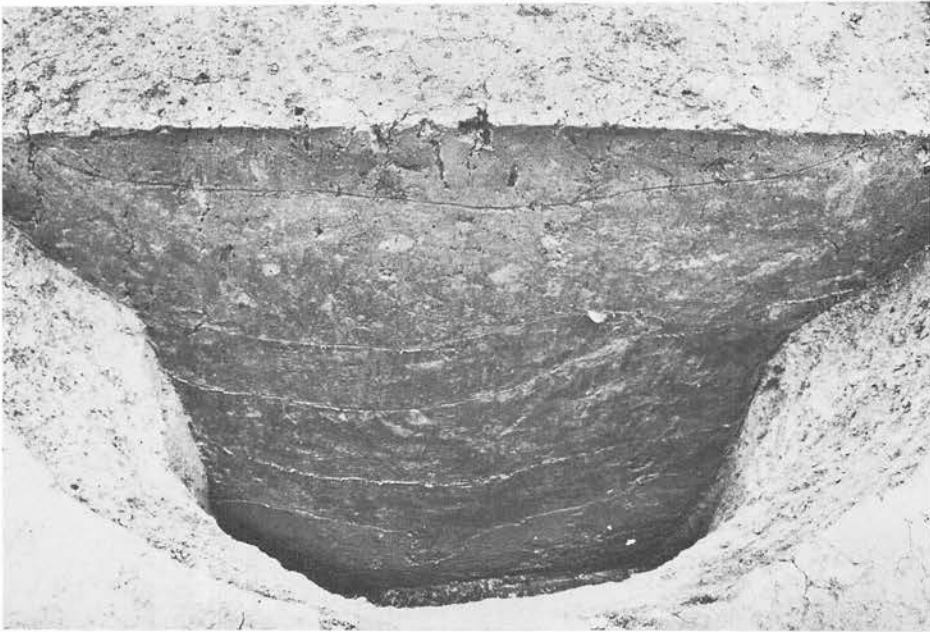
a. I-52井戸址 (井筒出土状況)



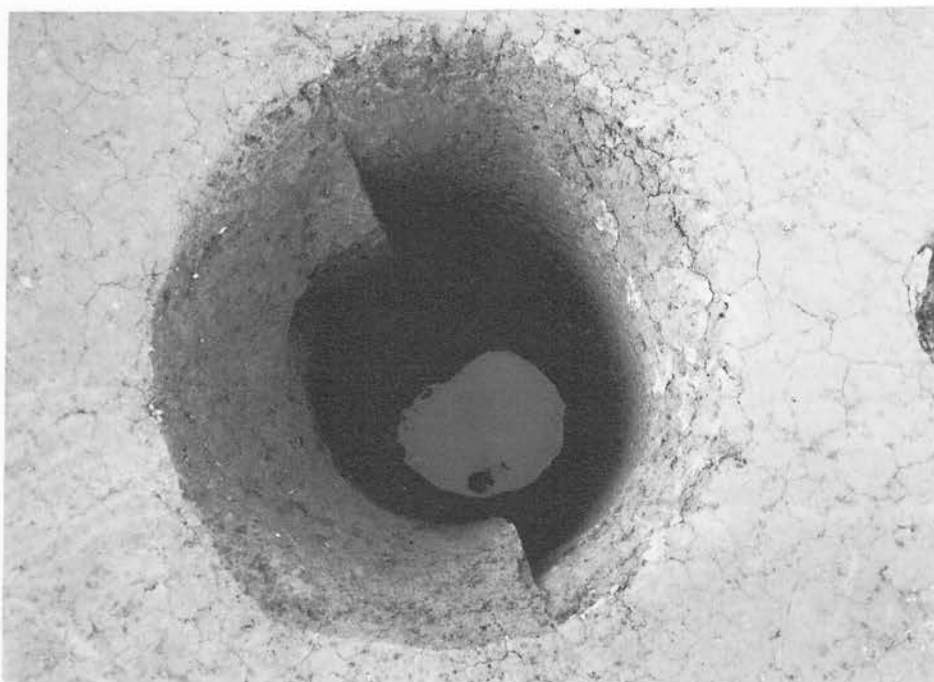
b. I-52井戸址  
写真図版83 落合Ⅲ遺跡



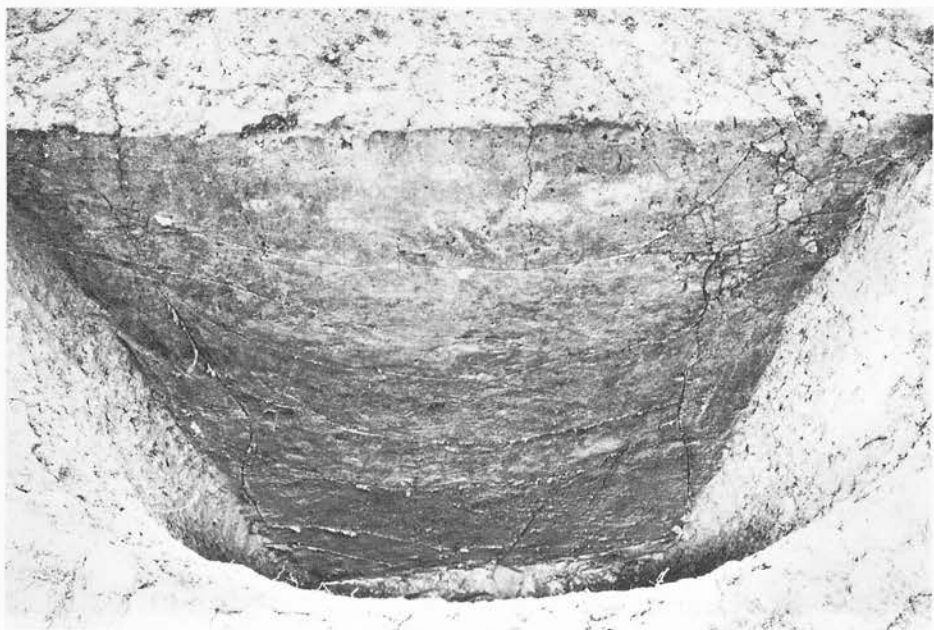
a. K-51井戸址



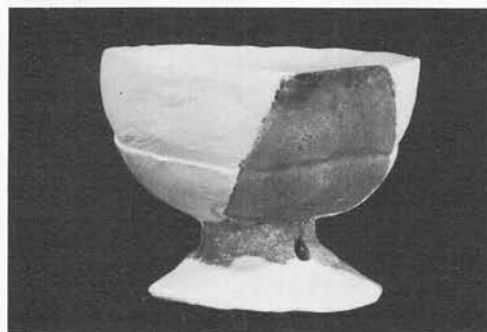
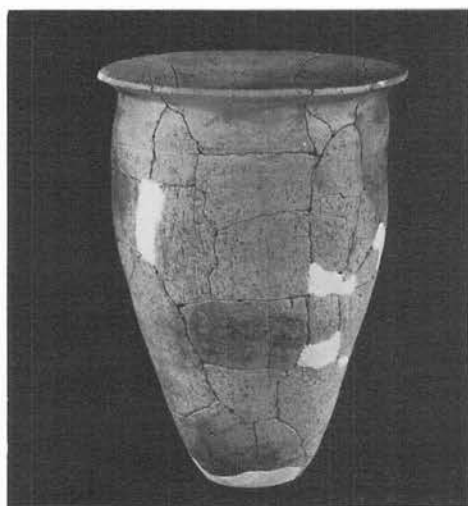
b. K-51井戸址(土層断面)  
写真図版84 落合Ⅲ遺跡



a. L-51井戸址



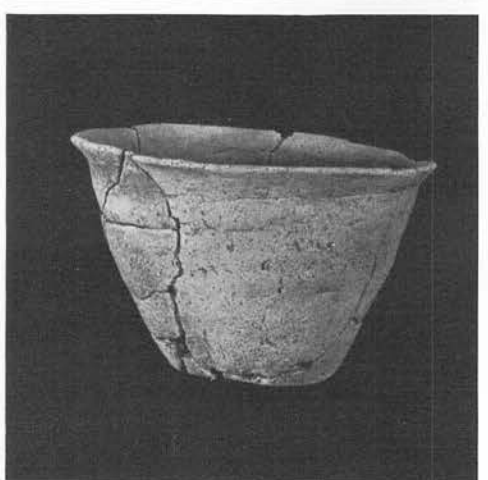
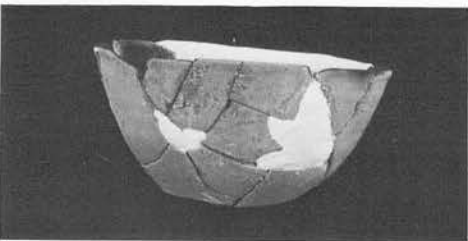
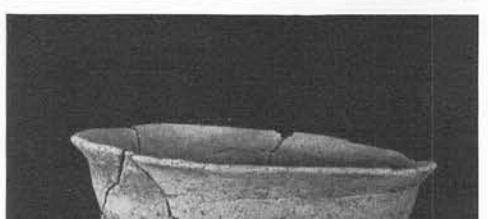
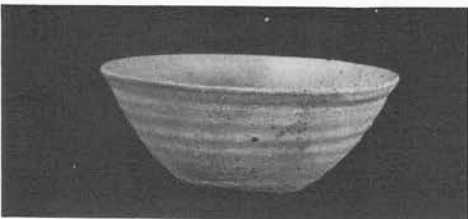
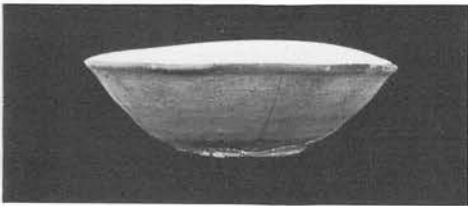
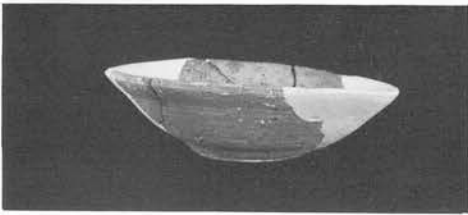
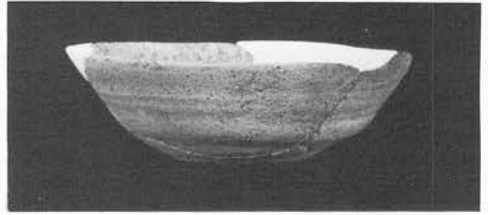
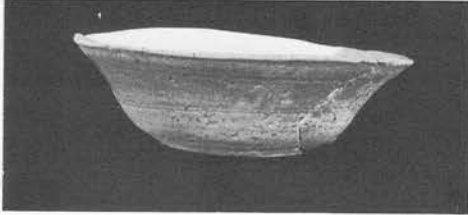
b. L-51井戸址(土層断面)  
写真図版85 落合Ⅲ遺跡



A-1 住居址・E-1 住居址・J-2 住居址

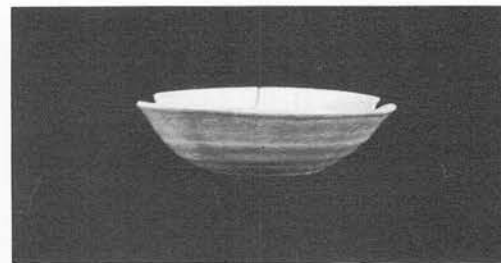
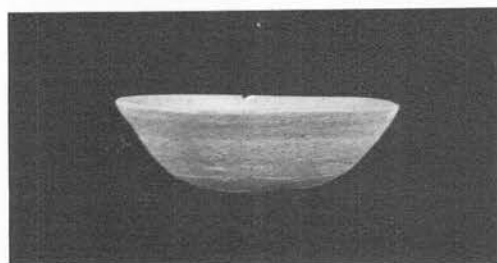
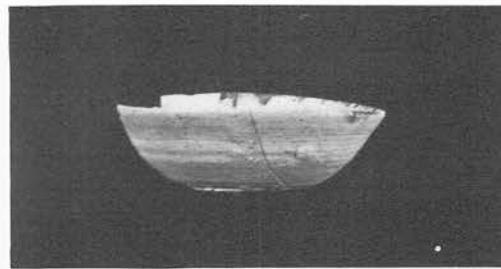
写真図版86 落合Ⅲ遺跡



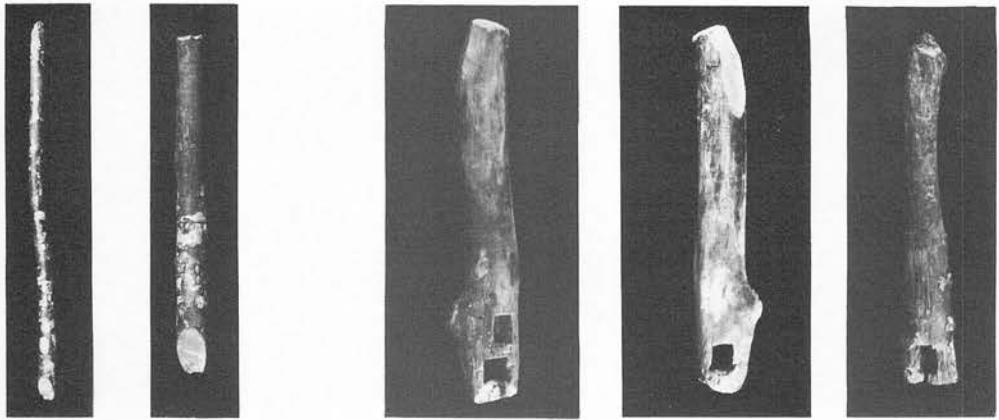


J-5 住居址・K-2 住居址・L-2 住居址・L-3 住居址

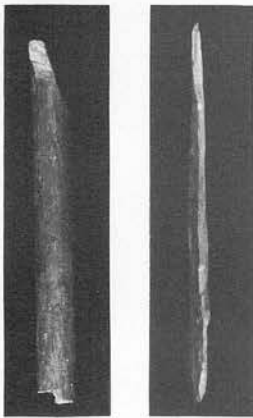
写真図版87 落合Ⅲ遺跡



L-3 住居址・M-2 住居址・M-3 住居址・D-101 溝址  
写真図版88 落合Ⅲ遺跡



柄穴付杭



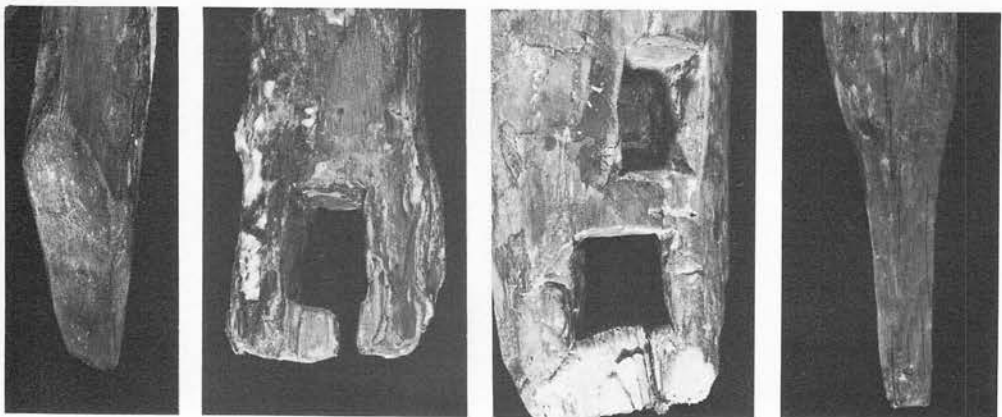
杭



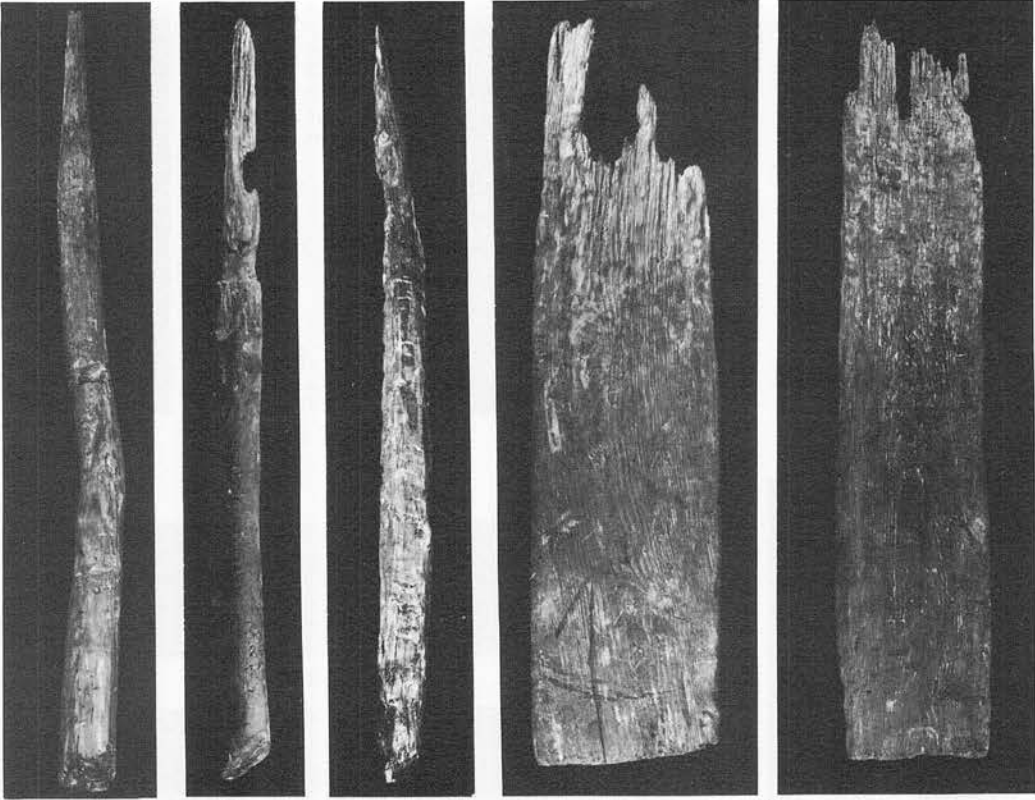
横木



横木

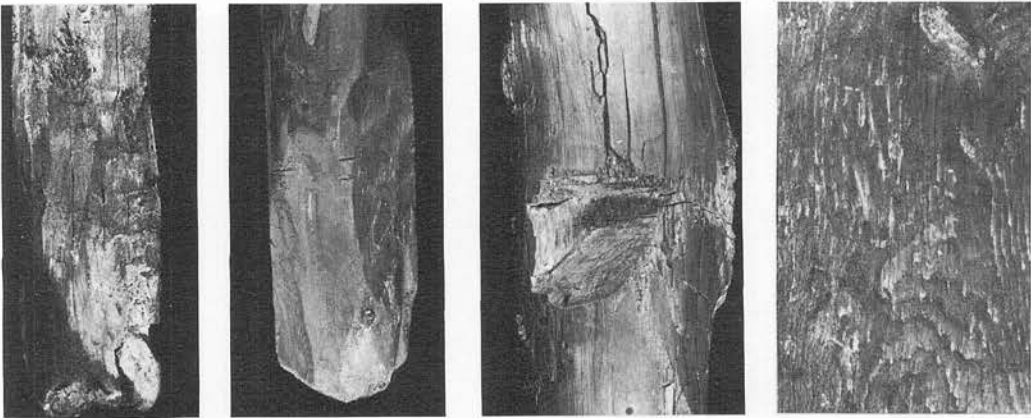


工具使用部分拡大図  
井筒材(E-51井戸址)  
写真図版89 落合Ⅲ遺跡

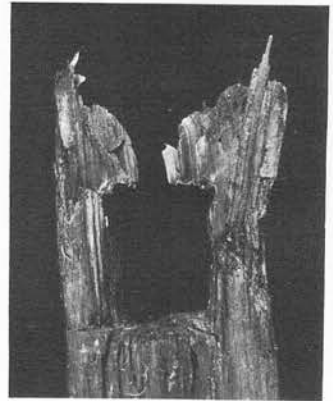
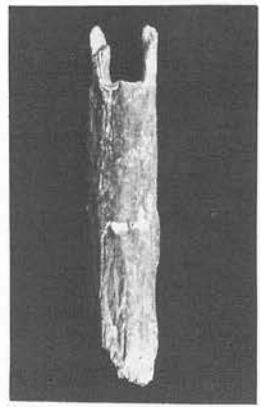


杭

板



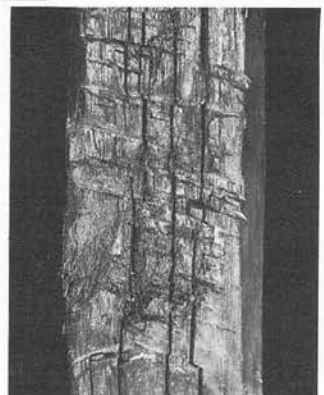
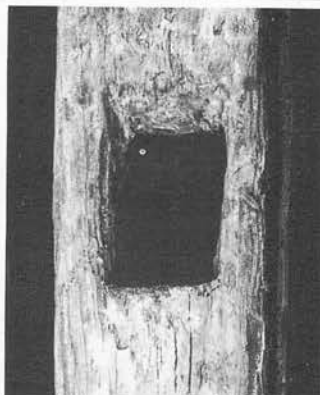
工具使用部分拡大図  
井筒材(I-52井戸址)  
写真図版90 落合Ⅲ遺跡



柄穴付杭



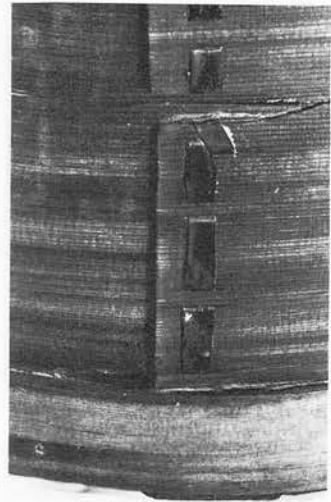
横木



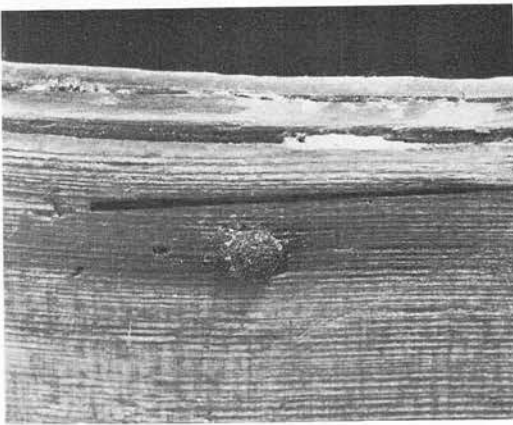
工具使用部分拡大図  
井筒材(I-52井戸址)  
写真図版91 落合Ⅲ遺跡



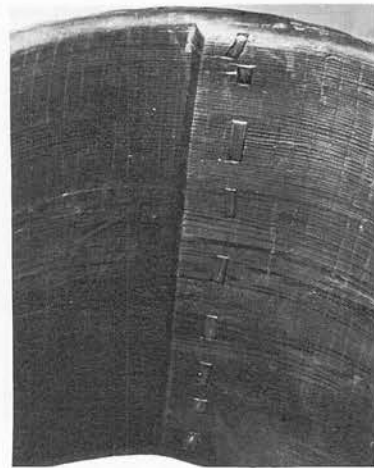
a. D-52井戸址出土曲物



b. 曲物外側部分

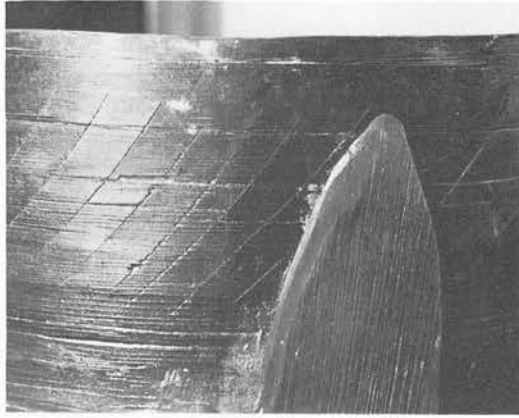


c. 曲物外側部分



d. 曲物内側部分

写真図版92 落合Ⅲ遺跡



a. I-52井戸跡出土曲物上部(内側の外面)

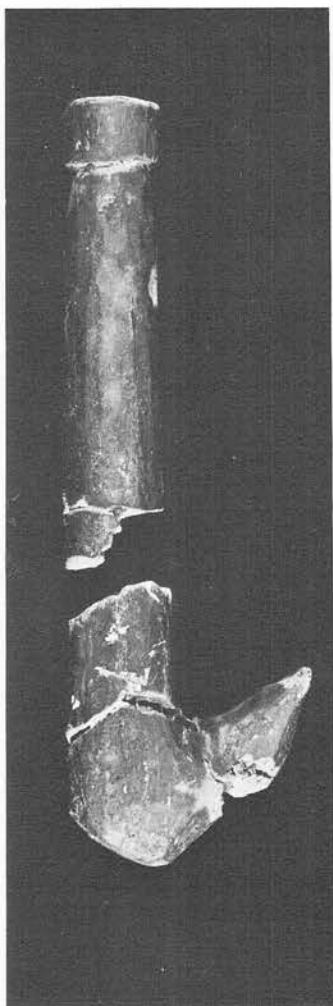


b. I-52井戸跡出土曲物内側

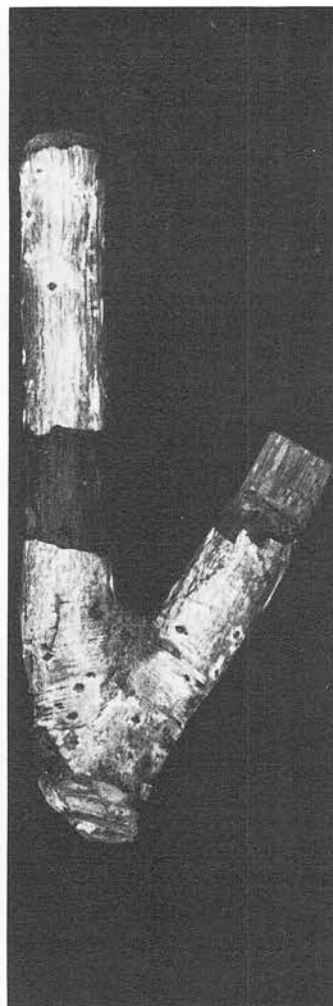


c. I-52井戸跡出土曲物下部(内側の外面)

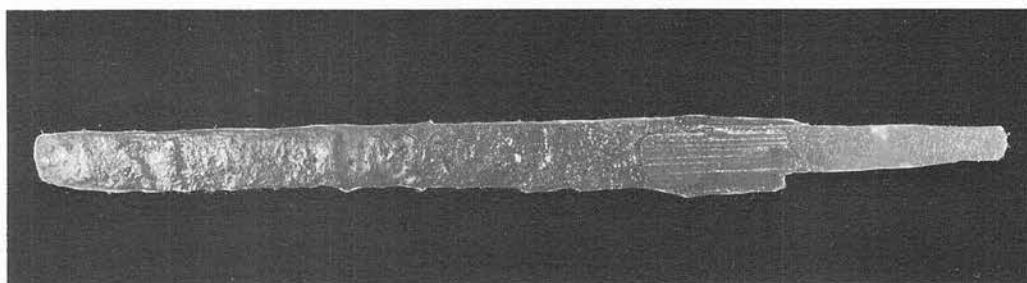
写真図版93 落合Ⅲ遺跡



a. 鉤手 (K-51井戸址)

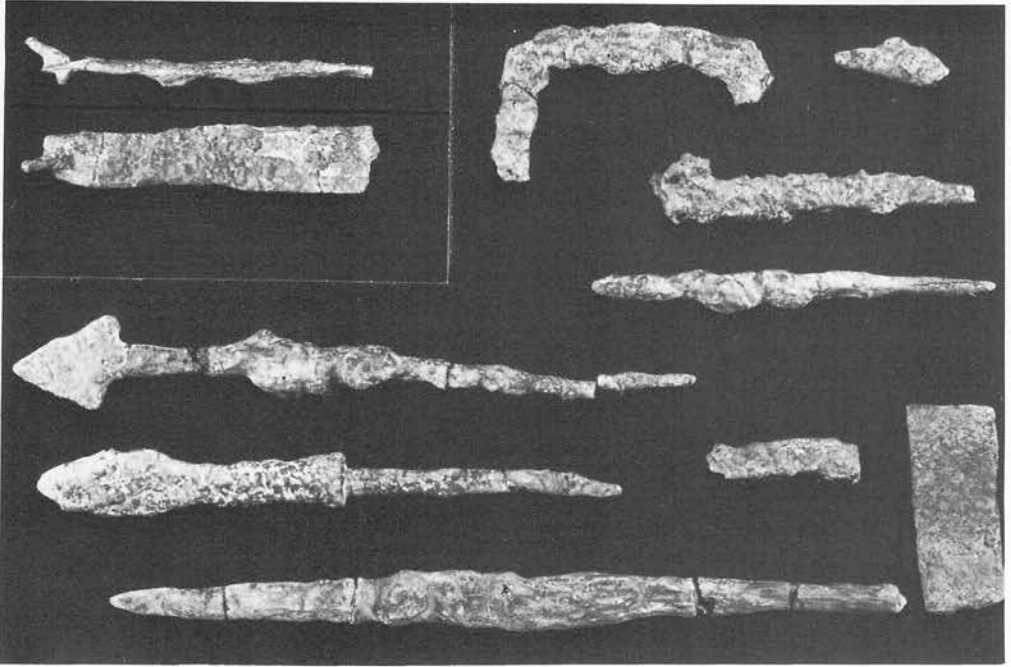


b. 鉤手 (D-52井戸址)

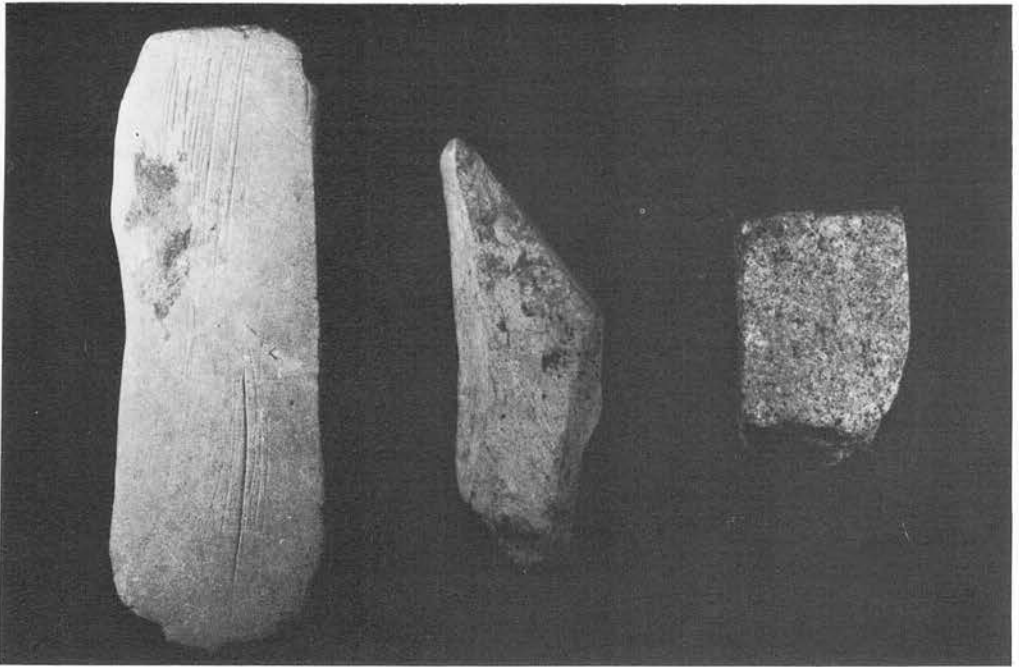


c. 木質部付刀子 (I-52井戸址)  
写真図版94 落合Ⅲ遺跡



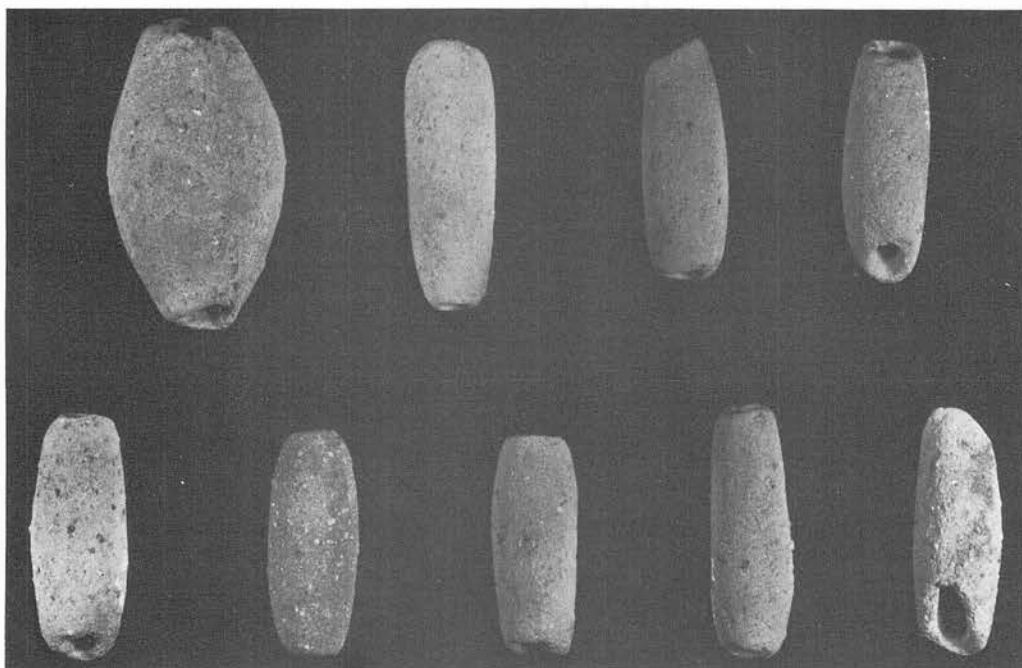


a. 鉄器

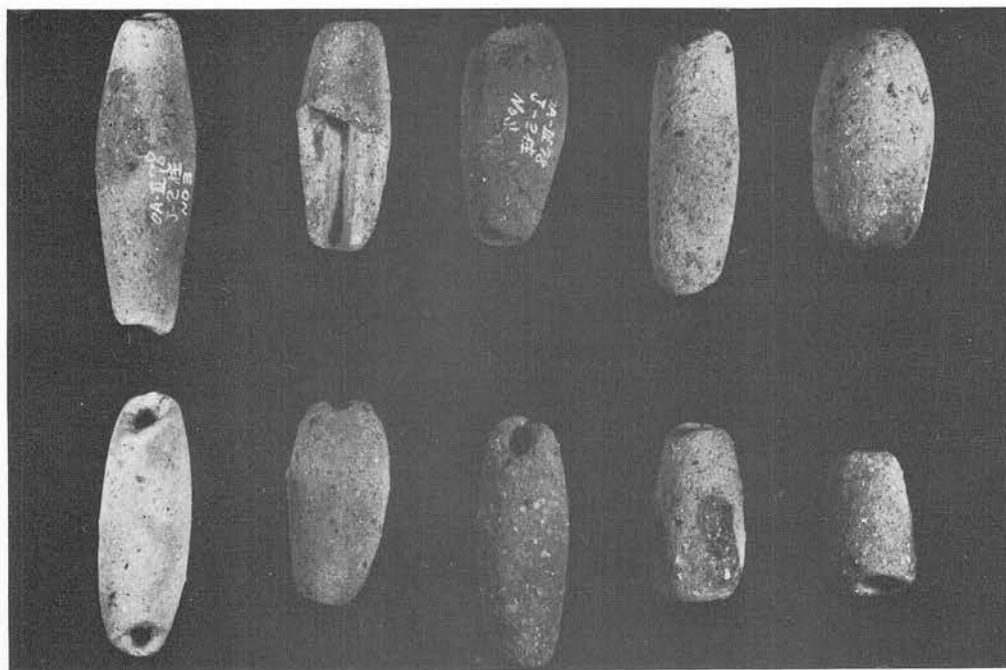


b. 砥石

写真図版95 落合Ⅲ遺跡

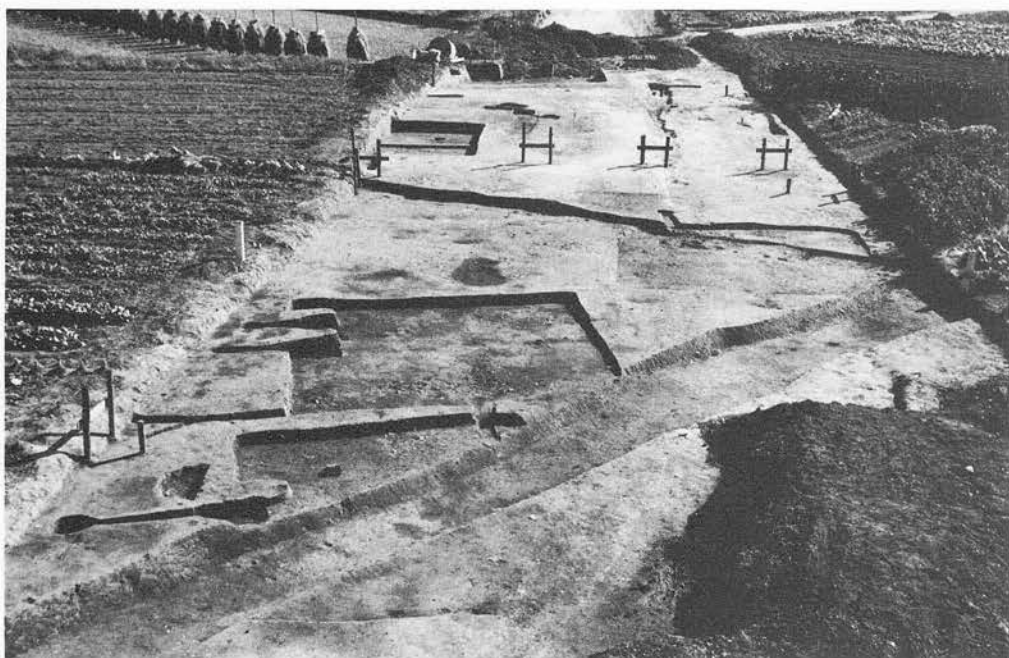


a. 土錘



b. 土錘

写真図版96 落合Ⅲ遺跡



a. 朴の木遺跡全景(北より)



b. A-1 住居址  
写真図版97 朴の木遺跡

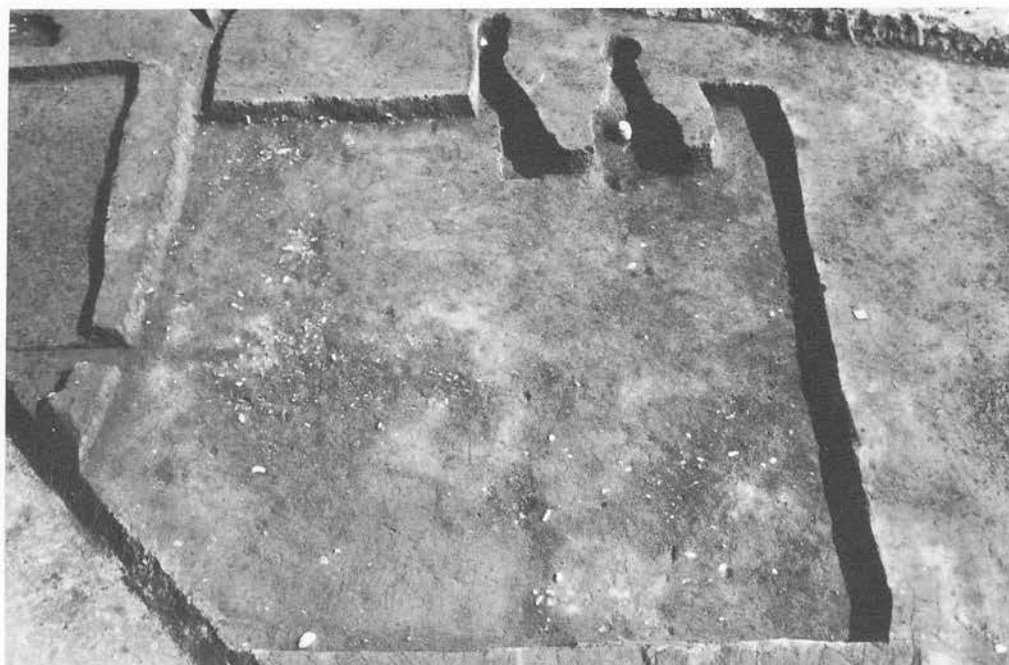


a. B-1 住居址



b. C-1 住居址

写真図版98 朴の木遺跡

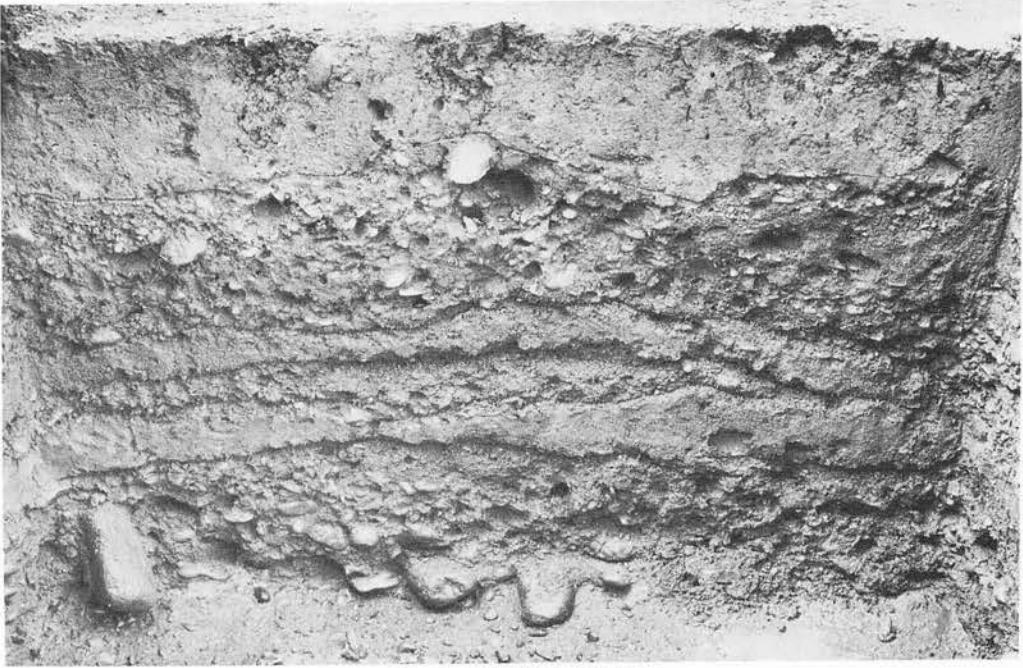


a. C-2 住居址

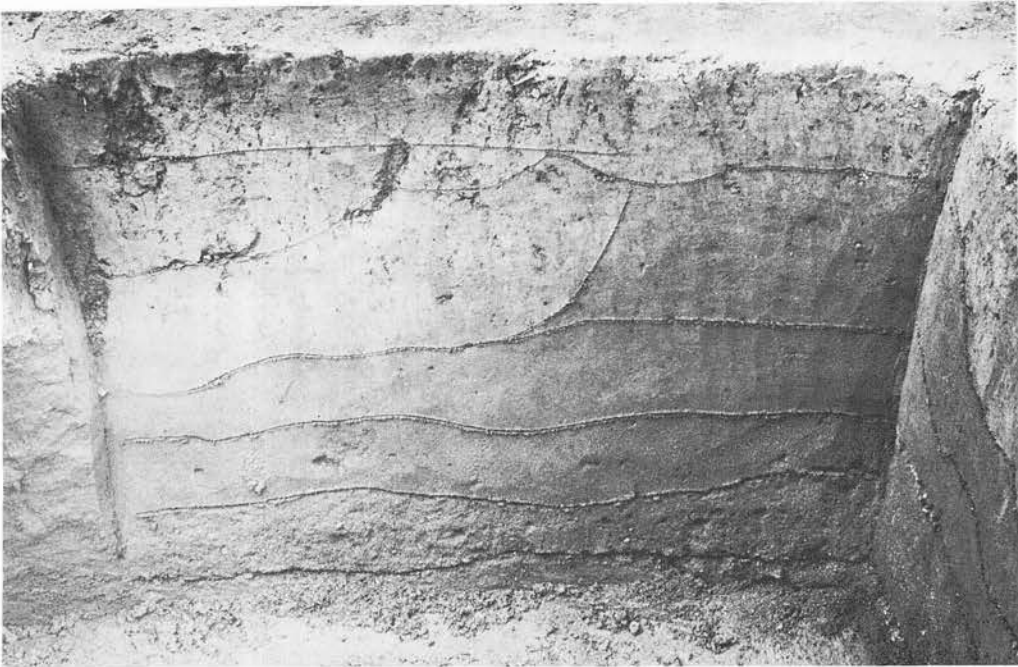


b. C-3 住居址

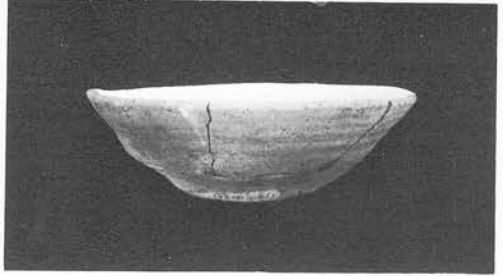
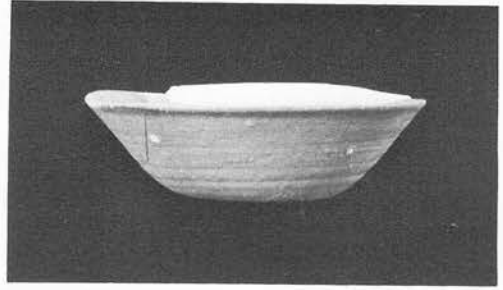
写真図版99 朴の木遺跡



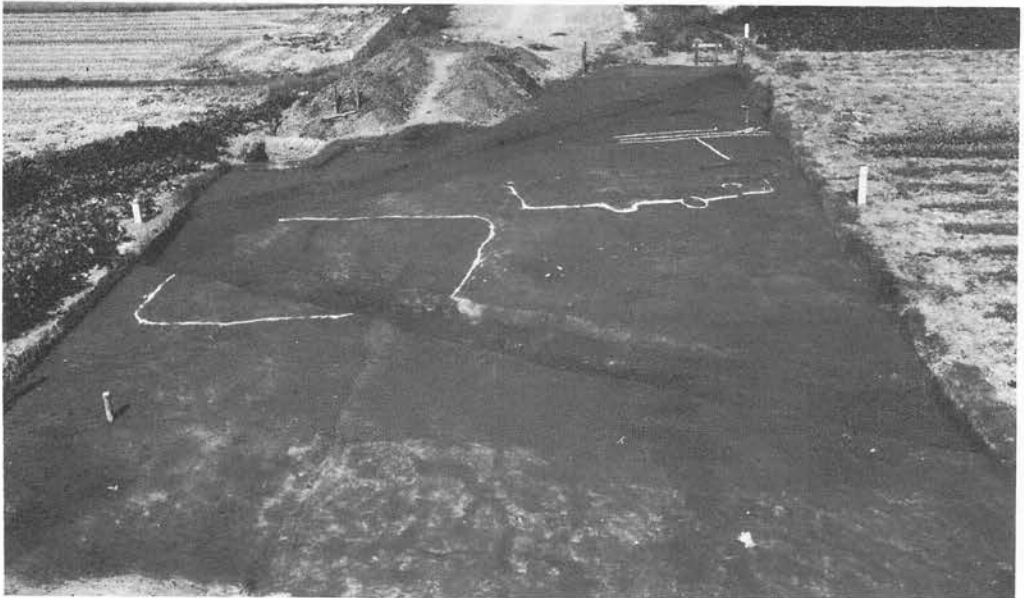
a. 朴の木遺跡深掘り土層断面



b. 朴の木遺跡深掘り土層断面  
写真図版100 朴の木遺跡



a. B-1 住居址・C-1 住居址・C-2 住居址



b. C-101 溝跡・C-102 溝跡

写真図版101 朴の木遺跡

---

岩手県埋文センター文化財報告書第8集  
主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書  
(岩手県 江刺市 力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴ノ木遺跡)  
(昭和53年度)

発行 昭和54年3月30日

発行者 (財)岩手県埋蔵文化財センター  
岩手県盛岡市向中野字向中野39-1  
(〒020 TEL 0196-35-6622)

印刷者 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1979

---